忠後百首「などやかく丑の貝吹く時しまれ、月は午にも影のなるらん」

うしのくひ 丑杭　古へ禁中にて、丑の時のしらせにうつ杭。とき（時）の杙、ときのくひ（時杭）を見よ。鉢内侍日記「夜はふけぬるか、丑のくひほどかと問はせ給ふを」夫木抄「うしのくひさすがに月のかげ出でて、心すむ夜の時の札かな」

うし 牛　（名）【動】偶蹄類、洞角科に属する獸。體軀肥大にして、二本の角を有し中空にして枝なし。皮膚に短毛を密生し、尾は細くして短し。蹄は第一・第二及び第五指は發育せず、第三・第四指のみ發達して雙蹄となる。有用の家畜にて、田を耕し車を挽き貨物を運載し、肉及び乳は滋養多くして飲食用に供せらる。たじし。

㊁戰陣にて、竹束を寄せくるために、竹木を、家の棟木の如き狀に結びて立てたるもの。㊂うしばり（牛縛）の略。㊃ぎうひあめ（牛皮飴）の異名。

（にし う）

㊄楊弓・大弓にて、錢を賭物にするときの百の隠語。一丁（ヂャウ）。一時軒隠筆「一、かけものは中間錢の時は中間百を牛とす。これ古今の世說也」

うしにくはる 人に欺かるる譬へにいふ。狂言「これはいかなこと、牛にくらはれ、扱もさてもよい肝をつぶいた」大蔵狂言「牛に喰はれたらされた。目代殿かと思うてよい肝をつぶいた」同朝比奈「牛に喰はれたらされた。朝比奈と聞いたら責めまいものを」

うしのけ 牛毛　物の多き譬へ。宇津保「蔵開」きんたちのおはする所は牛の毛ぞや中納言なかすみがまかる所、りゆうの角にだにぞあらぬや」抱朴子「萬夫之中、有二一人一焉、多矣、故爲者如牛毛、獲者如麟角也」

うしのこづの 牛小角　牛の角の中にある堅き骨。藥用とす。こづの。本草和名「牛角鰓角中骨也、牛乃古都乃字」名義抄「鰓キンコダンツノ」

うしをひく 引牛　ずるけることにいふ。狂言「追善清十郎女俳諧」ぶらぶらたくなの牛をひくなり」

【諺】牛に汗し棟に允つ かんぎうじゆうとう（汗牛充棟）に同じ。会佛に同じ。うま（馬）の餘を見よ。小野道風青柳硯「汝等にいひきかすは、牛に經文、歸れ歸れ」

【諺】牛にひかれて善光寺まるり 人につれられて偶然に到る譬へ。本朝俚諺「養蚕元亨、昔、信濃善光寺近邊に七十に餘る姥ありしが、隣家の牛はなれて、さらしおける布を角にひきかけて善光寺にかけこみしを、姥追ひゆき、初めて靈場なる事を知り、度度參詣して後世を願へり。之を牛にひかれて善光寺參といひならはす」

【諺】牛の歩み 遲き譬へ。家康教訓「牛の歩みのよしおそくとも」

【諺】牛のいっさん 平常は遲鈍なる牛の、ともすれば「いっさんに走り出だすこと。常は決斷鈍き人の、ともすれば妄斷をなすことあるに譬ふ。塵筑波「貫よりさきにかけいでにけり」の句より夜中たが乘る牛のいっさんぞ」駿臺雜話「世話に牛の一散といふやうに、ややもすれば機嫁に任せ、調子に乘じなどして、一槩に物を決斷して快しとす」

【諺】牛の角つきあひ 中あしき譬へ。

【諺】牛の走る 牛のいっさんに同じ。宇津保蔵開「ただまさらが云ふことは、いはゆる牛の走るぞかしと宣へば、一たび、十たびほほと笑ふ」

【諺】牛は牛連れ 類同じきもの相伴ふをよしとする譬へ。甲陽軍鑑「喩へに牛は牛づれ馬は馬づれと申す如く」

【諺】牛を馬にのりかへる 劣れるをすてて勝れるを取るに譬ふ。應筑波「牛を馬にぞのりかへにける」伊賀越道中雙六「隣の病人なりたとて、たかだか二朱か、ようくれて百疋は登東ない。ほんのこれが、牛を馬にのりかへたと申すもの」

うし 雨師　（名）雨を司る神。太平記十「駕幣使上「雨師道を清め風伯塵を拂ふ」禮記月令「立夏命有司「祀雨師」周禮大宗伯「以槱燎祀司中・司命・飌師・雨師」

うし 齲齒　（名）【齲の音、く、今うに訛る】むし（蟲齒）に同じ。

うし 憂　（形）思ふままならず。心苦し。つらし。ものうし。萬葉「しかれども、谷かたつきて家ゐする、君が聞きつつ告げなくも宇之（ウシ）と思へども、とびたちかねつ鳥にしあらねば」

うじ 蛆　（名）【動】うじむし（蛆蟲）の略。記「宇士（ウジ）多加禮斗呂吾岐戸」蜻蛉江國の方言。

うじあづき 蟹眼　（名）【植】あづき（赤小豆）の一品種。かにあづき。かにのめ。かにのめあづき。かにのめあづき。

うしあはせ 牛合　（名）牛と牛とを闘はせて勝負せしむる戲れ。牛の角つき。闘牛。

うしあぶぎ 【植】やつて（八角金盤）の異名。

うしあめ 丑雨　（名）丑の時にふる雨。直ちに霽るといふ。うしのあめ。

うしいちご 【植】なはしろいちご（苗田苺）の異名。

うじうじ （副）ためらふ狀にいふ語。もぢもぢ。醒泉女鏡衣「お國もうじうじ手をつかへ」

うしうたんだい 羽州探題　（名）職名。室町幕府の制、出羽一國の政務を掌るもの。

うしうま 牛馬　（名）牛と馬と。牛又は馬。狂言「牛馬」此の所綱貴なるにつき、牛馬の新市をお立てなさるる」㊁【動】奇蹄類、馬科に屬する獸。大隅國種子島に産する馬の一種。毛細く短かくして少しちぢれたるもの。

うしうまにもふまれず 小兒、無事に成長す。槇久末松山「父親のましまさば、牛馬にも踏まれまい」

うしうらう （名）【植】つるぼ（綿囊兒）の異名。

うしおき 丑起　（名）丑の刻に寢床を出づること。孕常弊「牛若丸のうし起に中間末繁昌の始めなる」

うしおに 牛鬼　（名）牛の形したりとする妖怪。ぎうき。枕草子「牛鬼（ハクヒヤウ）のおそろしう」うしおに」

うしおにじま 牛鬼島　（名）牛鬼が棲めりとする想像の島。一代男「貌は色黑く髮長く、兩眼に光あって、その樣世界の圖に見し牛鬼島の如し」

うしおひ 牛追　（名）牛をつかふ人。牛かひ。牛かた。

【諺】牛追牛に追はる 物事の顚倒せしに譬ふ。

うしおひにっさ （名）じふろくむさし（十六六指）に同じ。

うしおぶの 牛追物　（名）騎射の一種。小牛を追ひて射ること。矢は蕪目・大四目等を用ふ。著聞「各牛追物あらばやといはれければ」東鑑「於金澤澤邊、有二牛追物一」

うしかけ 牛駈　（名）除暦五月五日、大陽北野邊にて、野飼の牛を放ちて遊ばしむること。牛のやぶいり。

うしかた 牛方　（名）㊀牛をあつかふ人。うしかひ。㊁牛車を扱ひて物を運搬する人。大津繪「じれったいものは、牛方の夕立に」

うじかは・うじかは （副）うじうじに同じ。一谷嫩軍記「恥かしかったか門口で、うじかはうじかは、は入りにくさうにしてであったを」

うしかひ 牛飼　（名）㊀牛を飼ふ人。牛を扱ふ人。うしかた。字津保「忠こそ」このおとにつかうまつらん、かみしもの草かり・牛かひまで」㊁うしかひわらは（牛飼童）の略。

うしかひは 牛飼場　（名）牛をやしなひそだつるところ。

うしかひぶえ 牛飼笛　（名）㊀牛を集るために吹く笛。㊁牛を飼ふ童などが、なぐさみに吹く笛。牧笛。

うしかひ・わらは 牛飼童　（名）牛車の牛をつかふ者。少年より三四十歳に至る。狩衣に鞭を執り、頭は垂髮にして童體。うしかひ。うしかひわらべ。枕「うしかひわらはの、なり惡しくてもたるこそあれ中略きたなげなるは心うし」

うしかひ・わらんべ 牛飼童　（名）前條に同じ。十訓「牛かひわらんべのろひごとをしけるを聞きて、かの車をとどめてたづね聞きければ」

うしがや （名）【植】ねずみがや（耕の異名。

うしがやつり （名）【植】莎草（カヤツリ）科、莎草屋の草。草の高さ三尺、平滑なり。葉は狹く長く小穗狀。花序は繖形に排列し、黃綠色の花を開く。我が國、各地の水邊に自生す。

うしき 有職　（名）官の職名。已講・内供・阿闍梨をいふ。大鏡「御さきに、有職・僧綱どものやんごとときさぶらふ」

うしき 有色　（名）色あること。又、人世の變轉を花の色のうつり易きに譬へていふ語。いうしょく。

うしき・じんさんがう 有職三綱　（名）さんがう（三綱）に同じ。

うしき・しゃうさんがう 有職正三綱　（名）うしき（有職）に同じ。

うしきてん 有色天　（名）佛語。しきかいてん（色界天）に同じ。無色界の對）金剛經「起心修心、妄見是非、內不契無相之理、名爲有色」

うしくぐ 【植】莎草（カヤツリグサ）科、莎草屬の草本。莖の高さ二三尺、ほぼ莎草に似たり。莖頂より狹長なる三葉を生ず。小穗狀花序は數本の大小不同の花莖上に著生す。春日、淡褐色の花を開く。我が國、各地の水邊に自生す。

うしくさ 【植】木本科、獨委（ヒヨウ）屬の一年生草本。莖の高さ二乃至六七寸、細けれども葉はやや廣し。花は淡綠色にして、葉腋より生ぜる小穗狀花序上に生じ、八九月頃開く。芒は細し。我が國、各地の原野・畦畔等に叢生す。

うしくさ 【植】にはやなぎ（富著）の異名。本草和名「富著和名乎知太知久佐」

うじくさ （名）【植】みそなほしの異名。

うしくすし 牛醫　（名）牛の病を治療する專門の獸醫。

うしふくは 牛鍬　（名）㊀からすき（犂）に同じ。㊁美作國津山附近の農家に行はるる風習。正月十一日未明に、鍬を携へ牛を追ひて田に至り、あきの方に向ひての字を左字に大書す。これを農具のつかひ始めとす。

うしぐるま 牛車　（名）㊀きっしゃ（牛車）に同じ。宇津保蔵開「うし車を梨壺に許さんと申し給へば」㊁牛に牽かする大なる荷車。

うしけ （名）【植】しほくぐの異名。

うじこ （名）【動】あめふらし（雨降）の異名。

うしごい 牛健兒　（名）うしかひわらは（牛飼童）に同じ。平家「あっぱれ支度や、牛こいがほからびか」

うしごめ・しだ （名）【植】そぶそてつ（貫衆）の異名。

うしごや 牛小屋　（名）牛を飼ひおく小屋。牛部屋。牛をり。

うしころし 牛殺　（名）㊀牛を殺すこと。㊁牛を屠り殺すを業とする人。

うしころし 【植】かまつかの異名。

うしころしは 屠牛場　（名）牛をころす所。とぎうば。

うしこんじゃう 牛根性　（名）詞少なくして根氣强き性質。

うしことこんでい 牛健兒　（名）うしこごい（牛健兒）に同じ。謡曲「方平「ハ、其」やれ、牛こんでいめよ」

うしさき 牛裂　（名）背の刑罰の名。手足を四疋の牛に繫ぎつけ、牛に柴を負はせ、火を點ずれば、四牛四方に驅け出でて、身體を四つ裂きにすることといふ。南蛮寺興廢記「泉州堺にてころばぬ者三人、内二人は磔罪、一人は牛裂。此の時、此の宗門不殘斷絶す」

うしざきばら 【植】かうしんばら（月季花）の異名。

うしじゃう 一石史生　（名）官名。しじゃう（史生）を見よ。

うしぜり （名）【植】たがちし（石龍芮）の異名。

うしたきぐさ （名）【植】次條の異名。

うしたきさう （名）【植】柳葉菜科、たにたで屬の多年生草本。莖の高さ二尺許り。葉は對生にして心臟狀卵形、微鋸齒を有し、長き葉柄を具ふ。莖葉共に毛茸密生す。夏日、白色の小花を開き、葉腋より生ぜる花軸上に總狀に排列す。果實は倒卵形にして、褐色鋸狀の毛茸を密生す。我が國、各地の山野陰濕の地に自生す。

うしたけたば 牛竹束　（名）武具。竹束を牛に寄せ懸けたるもの。和漢三才圖會「牛竹束」

うしたはけ 牛姦　（名）牛と人と姦淫すること。記「馬婚・牛婚（ウシハヘ）・雞婚」夫婚之罪類」

うしちう 一烏悲　（名）次條の略。榮華「烏悲」烏悲みどりこまやかに、慈悲の御眼、蓮の如く開けたり」

うしちうにしゃ 一烏悲膩沙　（名）梵語。佛の頂に突起して髻狀をなしたる所。うしち。うしつ。うすつ。うしゆつ。うちにしゃ。悲林晉義「烏悲膩沙梵語也、如來頂相之說也」翻譯名義集「烏悲膩沙、此云佛頂」

うしつ 一烏悲　（名）梵語。前條に同じ。

うしつ 一雨日　（名）雨ふる日。

うしつかひ 牛使　（名）うしかひ（牛

飼」に同じ。東海道名所記「船頭・馬方・うしつかひなどは、口がましく」

うし-つき 牛附 (名) うしかひ(牛飼)に同じ。大鏡「太政大臣實賴おとどの御わらは名をば牛かひと申しき。さればその御ぞうは、牛飼をば牛附との給ふなり」

うじ-つく (自動四) うごめく。うじうじす。ためらふ。續無名抄「蠅附(ウジツク)」御伽名代紙衣「與次兵衛は、はひり兼ねてうじつくところを」

うし-とら 丑寅 艮 (名) 方角の名。東北の間。はうね(方位)を見よ。枕「薄京殿のうしとらの隅の、北の隔てなる御障子」

うしとら-よけ 丑寅除 (名) きもんよけ(鬼門除)に同じ。

うし-どろぼう 牛盜人 (名) 〔一〕牛を盜む人。うしぬすびと。〔二〕無口の人の異名。(狂言記)

うしな (名) 〔植〕やぶかんざう(千葉萱草)の異名。

うじな 狢 (名) 〔動〕古語。むじな(狢)に同じ。推古紀「狢(ウジナ)」

うしなひ 失 (名) 失ふこと。損失。損亡。

うしなふ 失 (他動四) 〔一〕見えぬやうにす。無くなす。無くす。萬葉「白たへのあがしたごろも宇思奈波(ウシナハ)ず持てれ、我がせこだに逢ふまでに」源氏「深き心もなき人も、罪うしなふべし」〔二〕死別れとなす。死なす。勢語「昔友だちの、人をうしなへるがもとへやりける」〔三〕殺す。太平記「路次に失はるるか、鎌倉にて斬らるるか」〔四〕とりはづす。とりにがす。「機會を失ふ」〔五〕たしかならぬやうにす。勢語「もの心をうしなはで、まうでけるになんありける」

うし-ぬすびと 牛盜人 (名) 〔一〕うしどろぼうを見よ。〔二〕人を罵る語。蓮如上人御文章「たとひ牛ぬすびとといはるるとも」〔三〔動〕いしもち(石持)の異名。

うし-の-くるま 牛車 (名) 〔佛教の譬へ。此の世は煩惱の炎に燃ゆる火宅なるを、人人逃出でんともせざれば羊車・鹿車・牛車など美しく飾り誘ひ乘せて救ひ出だし、此の世の苦難を離れしむと。車は佛教に譬ふ〕佛の教へ。拾遺「世の中に牛の車のなかりせば、おもひの家をいかで出でまし」法華經「羊車・鹿車・大牛之車、今在門外(中略)即時奔競馳走、両出到於空地(離諸苦難)」

うし-の-けぐさ 牛毛草 (名) 〔植〕禾本科・牛毛草屬の多年生草本。葉は線狀、多數叢生す。初夏の頃、葉間より尺許の花莖を抽出し、頂端に淡紫色若しくは紫綠色の小穗狀花序を著く。我が國、各地の山野に自生す。又、牧草として栽培せらるる事あり。

うし-の-こほれ (名) 〔植〕せんにんさう(仙人草)の異名。

うし-の-さらめん 牛索麵 (名) 〔植〕ねなしかづら(蒐絲子)の異名。

うし-の-した 牛舌 (名) 〔一〕〔動〕したびらめ(鞋底魚)の異名。鰈魚(本草)の異名。〔二〕〔植〕いぬびは(天仙果)の異名。

うし-の-したぐさ (名) 〔植〕紫草科、うしのしたぐさ屬の多年生草本。莖の高さ二乃至五尺。葉は卵狀にして披針形、全緣、光澤あり、毛茸を粗生す。根本に近き葉は、よく二尺の長さに達す。夏季、紫色の五瓣花を簇生し、複總花序に排列す。歐洲の原産にして、觀賞用として栽培せらる。

うし-ぬすびと 牛盜人 (名) 〔一〕うしどろぼうを見よ。〔二〕人を罵る語。蓮如上人御文章「たとひ牛ぬすびとといはるるとも」〔三〔動〕いしもち(石持)の異名。

うし-の-くるま 牛車 (名) 〔佛教の譬へ。此の世は煩惱の炎に燃ゆる火宅なるを、人人逃出でんともせざれば羊車・鹿車・牛車など美しく飾り誘ひ乘せて救ひ出だし、此の世の苦難を離れしむと。車は佛教に譬ふ〕佛の教へ。拾遺「世の中に牛の車のなかりせば、おもひの家をいかで出でまし」法華經「羊車・鹿車・大牛之車、今在門外(中略)即時奔競馳走、両出到於空地(離諸苦難)」

うし-の-けぐさ 牛毛草 (名) 〔植〕禾本科・牛毛草屬の多年生草本。葉は線狀、多數叢生す。初夏の頃、葉間より尺許の花莖を抽出し、頂端に淡紫色若しくは紫綠色の小穗狀花序を著く。我が國、各地の山野に自生す。又、牧草として栽培せらるる事あり。

うし-の-こほれ (名) 〔植〕せんにんさう(仙人草)の異名。

うし-の-さらめん 牛索麵 (名) 〔植〕ねなしかづら(蒐絲子)の異名。

うし-の-した 牛舌 (名) 〔一〕〔動〕したびらめ(鞋底魚)の異名。鰈魚(本草)の異名。〔二〕〔植〕いぬびは(天仙果)の異名。

うし-の-したぐさ (名) 〔植〕紫草科、うしのしたぐさ屬の多年生草本。莖の高さ二乃至五尺。葉は卵狀にして披針形、全緣、光澤あり、毛茸を粗生す。根本に近き葉は、よく二尺の長さに達す。夏季、紫色の五瓣花を簇生し、複總花序に排列す。歐洲の原産にして、觀賞用として栽培せらる。

うし-の-したたび (名) 〔植〕ぎしぎし(羊蹄)の異名。

うし-の-したたもち 牛舌餅 (名) いびつ形にしたる薄き餅、白と赤との二色あり。(類聚名物考)

うし-の-しっぺい 牛尾禾 (名) 〔植〕禾本科・牛尾禾屬の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は細長にして剛硬なり。七八月の頃、莖頂に近き葉腋より、圓柱狀の小穗狀花序を抽出して花を綴る。我が國、各地の原野・路傍に自生す。

うし-の-しひ (名) 〔植〕きからすうり(栝樓)の異名。

うし-の-たま 牛玉 (名) うまのたま(馬玉)を見よ。東鑑(八月廿三日)「牛玉・犀角・象牙笛」

うし-の-ち 牛乳 (名) ぎうにゅう(牛乳)に同じ。うしのちち。醫心方「牛乳(和名之乃知之)」

うし-の-ちち 牛乳 (名) 前條に同じ。

うし-の-つな 牛綱 (名) 牛の鼻づらに通して牽く綱。字鏡集「綿(ハナヅラ)」

うし-の-つの 牛角 (名) 〔一〕牛の頭に倒の譬語。(金瓶梅)

うし-の-つのつき 牛角突 (名) うしあはせ(牛合)に同じ。加茂季鷹歌「何のうしかのうしといふうし同志、角つきあひの江戸の歌よみ」(歌論)

うしのつの-もじ 牛角文字 (名) 〔形〕牛の角の二つならびたるに似たればいふ〕平假名のいの字。徒然草「延政門院いときなくおはしましける時(中略)御歌、二つもじ・牛の角もじ・すぐなもじ、ゆがみもじとぞ君はおぼゆる。こひしく思ひ參らせ給ふとなり」

うし-の-つめ 牛爪 (名) 〔動〕まつばがひ(松葉貝)の異名。

うしのつめ-がひ 牛爪貝 (名) 〔動〕前條に同じ。

うしのとき-まうで 丑時詣 (名) 次條に同じ。諸國噺「宿願の子細あって、五條の天神へ丑の時詣でを仕り候」

うしのとき-まゐり 丑時參 (名) 〔一〕祈願のすぢありて、丑の時刻に神佛に參詣すること。うしのときまうで。諸國噺「御身は都より丑の時參り召さるる御方にて渡り候か」〔二〕嫉妬深き女子などの他を呪詛する爲め、祈願すること。

うし-の-はなぎ 牛鼻木 (名) 牛の鼻づらに通ずる木。うしのはなづら。和名抄「(案牛乃鼻)牛鼻環也」

うし-の-はなき (名) 〔植〕〔一〕かまつかの異名。〔二〕がまずみ(蕘蔓)の異名。

うし-の-はなづら (名) 〔一〕うしのはなぎ(牛鼻木)に同じ。字鏡「牢(牛乃鼻)」名義抄「鈎(ナカレヅラ)」〔二〕〔植〕いぢみかは(紅板藤)の異名。

うし-の-ひたひ (名) 〔植〕たがらし(石龍芮)の異名。本草和名「石龍芮(乃比久比乃比)、毛太乃比乃比介」

うし-の-やぶいり 牛藪入 (名) うしかけ(牛馬)に同じ。

うし-はく 領 (他動四) 古語。主となりて土地を領す。うすはく。記「汝之宇志波(都流)(ウシハ)、顯葦原中國者」萬「むづまり字志播吉(ウシハ)います、もろもろの大御神たち」

うし-ばくらら 牛博勞 (名) 牛を賣買し、又はその善惡を相するを業とするもの。狂言「これは、山一つあなたに住む牛ばくらうでござる」

うし-はこべ (名) 〔植〕石竹科・繁縷(ハコベ)屬の多年生草本。莖は軟弱にして横臥し、長さ一乃至三尺。葉は卵形にして鋭頭全

緣、下部の葉は葉柄あれども、上部に至るに從ひ葉柄短縮し、遂に之を缺く。春、白色の小五瓣花を開き、岐繖花序に排列し、花序は葉腋及び莖頂に生ず。我が國、到る處の平地に自生す。

うし-はへ 牛蠅 (名) 〔動〕蠅翅類、牛蠅科に屬する昆蟲類。體軀は虻の大さにして全身に黑毛密生し、又處處に黃白色の毛を生ず。牛の皮下に產卵して蛆となり、其の肉を喰ひて生長し、化して蠅となる。寄生せられたる牛體の局部は、爲めに潰瘍を生ずるに至る。

うし-ばり 牛梁 (名) 〔建築〕重きものを承くる大なる梁。うし。うしひき。うしひきばり。

うし-ひき 牛曳 (名) 〔建築〕前條に同じ。

うしひき-ばり 牛曳梁 (名) 〔建築〕前條に同じ。

うし-ひく-はな 牛牽花 (名) 〔植〕〔牽牛花の字の直譯〕あさがほ(朝顏)の異名。貨續基「百草のあるが中にも彥星の、うしひく花を手向けとやせん」

うし-ひく-ほし 牛牽星 (名) 〔牽牛星の字の直譯〕ひこぼし(彥星)に同じ。牽牛星。謠曲「七夕のたとへにも似ぬ身のわざの、牛牽く星の名ぞしるき」

う-しぶ 〔有執〕(名) 佛語。萬法實有と執すること。(無執の對)

う-しぶ 〔右使部〕(名) 官名。しぶ(使部)を見よ。

うし-ぶね 牛槽 (名) 牛の食をいる器。雜寄裝束抄「うしぶね・うまぶね」

うし-べに 丑紅 (名) 寒中の丑の日にべにを買ふこと。(口中の病に效ありとて)

うし-べや 牛部屋 (名) 〔一〕牛を繫ぎおく處。うしごや。〔二〕十六むさしの盤の、三角なる處。享保頃前句附「やうやうと牛部屋を出て四つ喰ひ」

うしほ 潮 (名) 〔一〕月及び太陽の引力によりて、定時に、海水の高くなり又低くなること。しほ。齊明紀「湊の子之夏(ウシホ)のくだり、うなくだり、後もくれにおきてか行かむ」〔二〕ひろく、海の水の稱。海水。神功紀「夫(ウシホ)管聞、海水(ウシホ)之凌國」字津保「下(ウシホ)」〔三〕しほ(鹽)に同じ。食鹽。武烈紀「廣指、鹽(ウシホ)詔中(中略)唯忘角鹿海鹽不以爲食詔、由是角鹿之鹽、爲天皇所食」〔四〕うしほに(潮煮)の略。四條流庖丁書「鯉をうしほ煮にしてなど被申事(中略)料理に至りて、鯉をうしほにすべき事如何」

うしほ-ねる 潮煉 海水を煮る。しほやく。夫木「うしほねるかまどの烟けをぬるみ、雪もたまらぬあまのあばらや」

うしほ-の-はな 潮花 海水の碎けて白く散るを花に見立てていふ語。芭蕉句「疑ふなうしほの花も浦の春」

うしほ-かぜ 潮風 (名) しほかぜ(潮風)に同じ。

うしほ-そめ 潮染 (名) 紫を帶べる青色に染めたる、烈附の浴衣地。

うしほ-たうぢ 潮湯治 (名) 海水浴。しほゆ。

うし-ほとけ 牛佛 (名) 佛の牛に權化したること。榮華(月一)「關寺といふ所に牛佛あらはれ給ひて、萬の人まゐりこみ見奉る」

うしほ-に 潮煮 (名) 料理の一種。鯛などの肉又は骨を水煮にし、鹽にて加減したる吸物。うしほ。四條流庖丁書「うしほにの事(中略)浦にてうしほを汲みて、鯛を煮て參らせしより始まる也」

うしほの-ひ 潮火 (名) しらぬひ(不知火)に同じ。

うしほの-みづ 潮水 (名) 江戸の諸侯の邸宅にて、正月始の辰の日辰の時に、辰年生れの人をして、竈の上の屋根に海水を注がしむること。火災除のまじなひとす。

うし-ほづき (名) 〔植〕いぬほほづき(龍葵)の異名。

うし-ほ-みづ 潮水 (名) しほみづ(鹽水)に同じ。海水。

うし-まつり 牛祭 (名) 陰曆九月十二日、山城國太秦廣隆寺にて行ふ祭事。僧俗異樣の服裝をなして牛に乘り、社堂を廻り祭文を讀み、摩吒羅神を敬祭すといふ。

うし-まるた 牛丸太 (名) 劇場にて、舞臺の天井に、横にわたしたる竹。處處穴を穿ち水を通じ、そこより落として雨ふる樣に擬するもの。

うし-みつ 丑三 (名) 古への時刻の名。丑の時の第三刻。とき(時)を見よ。勢語「子一つより丑三つまであるに」拾遺「人心うしみつ今はたのまじよ」

うし-むし 牛蟲 (名) 〔動〕あとびさりの異名。

うじ-むし 蛆蟲 (名) 〔一〕〔動〕蠅類の幼蟲。卵より孵化せるものは、體色白くして數多の環節あり。尾を有するもの、有せざるものとあり。腐敗に傾きたる有機質を食して生長し、皮膚變じて硬固なる殼となり、其の內にて俵の形をなせる蛹體に化し、終に蠅となる。〔二〕人を卑しめ罵りていふ語。浦島年代記「蛆蟲の分際、慮外を吐かば蹴飛ばさん」

うじむし どうぜん 蛆蟲同然 蛆蟲と同樣なること。(人を卑しめていふ語)

うじ-もの 鵜自物 (名) 〔一〕じものは鵜之狀となるべし。(大和本草)鵜の狀して。鵜の如く。祝詞式(神祇)「宇事物(ウジモノ)、顯根衝拔兵」

うし-や 牛屋 (名) 〔一〕牛を飼ひおく小屋。牛部屋。牛小屋。宇津保(吹上下)「うしやに善き牛ども十五ばかり、きぬ著せつつならべて飼ふ」〔二〕牛を飼ふ事を業とする家。〔三〕牛肉を賣る家。ぎうや。

うし-や 〔羽紗〕(名) ごろふくれん(吳羅服連)に同じ。

うし-や 〔烏蛇〕(名) 〔動〕からすへび(烏蛇)の異名。

うしやあがる (自動四) 〔うせやがるの訛り〕往く、來る、又は居るといふを卑しめ罵る語。うせやがる。膝栗毛「食ふべいから、持ってうしやあがれ」浮世風呂「吉生め、氣のきかねえ所にうしやあがる」

うし-やう 〔右相〕(名) うだいじん(右大臣)の唐名。

うし-やう 〔鵜匠〕(名) うかひ(鵜飼)に同じ。うづかひ。

うし-やう 〔羽觴〕(名) 酒杯。さかづき。楚辭(招魂)「琉璃蜜勺實羽觴」漢書(晉義)「羽觴作生(中略)良日、羽觴杯上綴羽以逸飲也」

うじ-やう 〔有情〕(名) 佛語。生きて情あるもの。有心のもの。動物一切の稱。無情・非情の對。諸經要「有情・非情も隔てなく、佛果に至る花の色」仁王經「梵釋天龍、諸有情等、尙悔殄滅」

うじ-やう 〔羽狀〕(名) 一の中軸の兩側に、小片の並び著けるもの。

うしやうえじきぢゆう 〔一生衣食住〕(名) 此の世に生まれたるものは、衣服・食物・住所を要すといふこと。狂言(武悪)

「有しやうえじき住と聞く時は、一切性を受けたる者の、じきを求めぬはござらぬほどに」

うーしやうぐん 一右將軍 (名) 官名。しやうぐん(將軍)を見よ。續紀[天平元年閏三月]「右將軍[正五位下佐伯宿禰石湯]」源[桐壺]「右將軍がつかに草はじめて書しと、うちロずさびて」

うーしやうこく 一右相國 (名) うだいじん(右大臣)の唐名。

うじやーうじや (副) うじうじするものの多く集まれる狀にいふ語。

うーしやうふ 一右相府 (名) うだいじん(右大臣)の唐名。

うじやうーふくえふ 一羽狀複葉 (名) 【植】植物學上の用語。複葉の一種。各小葉は中肋の兩側に排列し、中肋の先端は一小葉に終はるもの。若し各小葉更に羽狀に分岐する時は、之を二回羽狀複葉といひ、尙更に同樣に分岐する時は、之を三回羽狀複葉といふ。

うじやうーみやくえふ 一羽狀脈葉 (名) 【植】植物學上の用語。網狀脈葉の一種。一條の中肋を有し、兩側に枝脈を分出する葉。即ち、櫟・果等の葉の如し。

うーじやく 一烏鵲 (名) からすとかささぎと。かささぎ。莊子「至德之世、其禽獸可係羈而游烏鵲之巢、可攀援而窺」

うじやくのはし 烏鵲橋 次條に同じ。謝天香「烏鵲の橋のもとに紅葉を敷き、二星の館の前に風ひややかに」

うじやくけう 一烏鵲橋 (名) かささぎのはし(烏鵲橋)に同じ。かささぎ(鵲)の條を見よ。

うしやめーほし 危宿 (名) 星の名。き(宿)に同じ。

うーじゆ 一迂儒 (名) 世間の實情に迂濶なる儒者。蘇復古詩「自稱爲漫士、人道是迂儒」

うじゆーさつ (名) 【植】(一)うんしうみかん(溫州柑)の異名。(二)なはしろいちご(梅田蔦)の異名。

うーしゆつ 一烏瑟 (名) 梵語。うしちにしゆ(烏瑟膩沙)の略。平家[大原上]「金銅十六丈の盧遮那佛、うしゆつ高く聳えては半天の雲に隱れ」

うーしよ 一羽書 (名) うげき(羽檄)に同じ。漢書[武帝紀]「檄者、以木簡爲書、長尺二寸、用徵召也。有急事則加以鳥羽插之、名曰羽書」

うーじようしやう 一右丞相 (名) うだいじん(右大臣)の唐名。

うーしらうちゆう 一右司郎中 (名) うちゆうべん(右中辨)の唐名。

うーしらん 一烏絲欄 (名) 紙に黑き罫を引きたるもの。

うしる (自動) 願る。うむ。字鏡「齊字自」

うしろ 後 (名) (一)しり。へ。(まへの對) 枕「うたれじと用意して、つねにうしろを心づかひしたるけしき」源夕顏「物の足音ひしひしと踏みならして、うしろより寄りくるこころす」(二)せ(背)。せなか。はい(背)。枕「ひさしの柱にうしろをあてて」謠[宇治小川]「うしろに負へる袋には」(三)うしろ姿。枕「うらやましげにおしはかりて、づきそひたるうしろもをかし」(四)見えぬ處。かげ。源[夕顏]「ここかしこの物のうしろなどにぞさぶらふ」(五)下襲のしり。裾[ヒキ]。枕「うしろをまかせて筋とりて」源[賢木]「御ざのうしろひきつくろひ」(六)ゆくさき。のち。向後。源[賢木]「なからんうしろにも、このかうじ許されたらん、御德に侍るべき」同[澪標]「かつ見奉るほどだに思ひ捨つる世を、さりなんうしろの居の嘆。蜉蝣にて役者の科[シナ]ある間うたふもの。膝栗毛「こわいうは江戸でも一番といふ男さ。誰でもうしろをうたふ人があると、すつぱりやつて見せるがなあ」

うしろをみせる 見後 逃げて、人に背面を見せる。負色を見せる。弱身を見せる。生玉心中「此の期になつても口利口、後を見せぬはつは者なり」 凱陣八島「數萬騎の敵にも、つひにうしろを見せさせ給はぬに」

(諺)後の目、壁に耳 壁に耳に同じ。かべ(壁)の條を見よ。天正太平記[天正十年]「後の目壁に耳、いかでか隱れあるべき、師直此の事を聞きつけ」

うしろーあし 後足 (名) 逃げんとするとき、離れ後にすること。逃足。盛衰記[卷四十一]「義高[木曾]うしろ足も踏み命をも惜しと思はん人人は、是れより歸り下り給へ。打ちつれては中中源氏の名折なり」

うしろーあたま 後頭 (名) 頭の後部。

うしろーあはせ 後合 (名) (一)うしろを互ひにむけ合ふこと。又、其の處。今昔「烏丸面に六角堂の後合せにぞ住みし」平家七「一門行末頼もしからずや思ひけん、主と後合せに、東國の方へぞ落ち行きける」新六帖「なほざりの道行きずりに逢ふ事も、うしろ合せにまたちがひぬる」(二)反對。難太平記「兩人の意見うしろあはせなり。淸き武者の心は同じかるべしと思ふを、此のちがひめは今に不審なり」

うしろーあゆみ 後歩 (名) あとじさり。釋迦如來誕生會「後歩によよろよろと、高塀に背中をつけ」

うしろーえもん 後衣紋 (名) 袴の腰を腰骨より高く引き上げて、粹體をつくろふこと。廳尻「衣裳も素襖をのけえもんとて、袵を後へ引き下げし、袴腰は引上げて後えもんとて、うしろの腰の間五六寸程ありし」

うしろーおし 後推 (名) うしろのおして。あとおし。

うしろーおび 後帶 (名) (一)背後にて帶を結ぶこと。(かかへおびの對) 井筒業平河内通「大幅綿子の後帶」(二)若き女の稱。

うしろーかけ 後影 (名) 過ぎ行く者の後姿。謠[賀茂]「華邊みさして行くたづの、浮きぬ沈むと見しままに、うしろかげも失せにけり」

うしろーがけ 後懸 (名) 人力車の車體の背面を覆ふもの。多くは輕と同質の布を用ふ。うしろがつぱ。うしろとうゆ。

うしろーかけなは 後掛繩 (名) 船具。舵を引き上ぐる繩。船の河に入りたる時などに用ふ。

うしろーがた 後方 (名) 殿上の賭弓(ノリ)には、射手を前後の二組に分かつ、其の一方。榮華[歌合]「のり弓あれば、まへ方、うしろがたと、ことどもわきて」

うしろーがつぱ 後合羽 (名) うしろがけ(後懸)に同じ。

うしろーがべり 後返 (名) 後の方へ蜻蛉返[カヘリウヅ]をすること。あとがへり。

うしろーがみ 後髮 (名) 頭の後方の髮。

うしろがみをひかる 引後髮 あとに心が殘る。情にほだされて思ひ切られず。謠[通盛]「行くにも行かれぬ一の谷の、所から須磨の山の後髮ざ引かるる」 吾吟我集「わかれにしあとにひかるるうしろがみ、今朝くしくしと思ひ亂るる」

うしろーがろし 鑛 後輕 (形ク) ゆくすゑ心やすし。續紀[天平元年]「美麻之大臣乃詔道[ヲ]宇之呂輕[久]、心毛意太比[ヒ]」

うしろーさず 後疵 (名) 身體の背後に受けたるきず。曾我[八景十番歌合]「後疵・逃げ疵なりとぞ知られける」

うしろーさたなし 後穢 (形ク) 所業潔白ならず。卑劣なり。本朝廿四孝「子供をゑばに息にかけて昧方にせんと、後ぎたない信玄に奉公しては武士が立つまい」

うしろーくび 後頸 (名) 頸のうしろの方。

うしろーぐらし 後暗 (形シク) (一)氣がかりなり。うしろめたし。心やましい。顧慮す。(二)武心ありや疑はし。盛衰記[出羽]「入道も多田藏人行綱が告げ知らせ奉りてよりのちは、君をもうしろぐらき御事に思ひ奉りて、世の中打ち解けたる事なし」

うしろーけさ 後袈裟 (名) うしろより、袈裟がけに切りなどすること。三世相錦繡文章「油斷見すまし、うしろがきに」

うしろーごし 後輿 (名) 輿を後向に舁くこと。

うしろーだし 後抱 (名) 後より抱くこと。唐船噺今國姓爺「後抱にむんずと抱き、引きこかさんと蹈ん張つたり」

うしろーだて 後楯 (名) (一)背面の防禦として楯にとるもの。運歩色葉「後楯[カタシロ]」(二)陰に居て助くること。うしろみ。後援。後見。曾我[四郎]「うしろだてにはなり申すべし、たのもしく思ひ給へ」

うしろーだて 後立 (名) 兜の立物の一種。かぶと(兜)を見よ。

うしろーつき 後附 (名) 背後の姿。うしろすがた。若風俗「くるりとたち廻りてこのうしろつき、又世に出でくまじき若衆」

うしろーづけ 後附 (名) 連句の一法。普通の續け方と異なり、附句より前句の方へ續けて、句意を完うする附け方。

うしろーつぶて 後礫 (名) 逃げざまに、後手に礫を打つこと。負けながらなほへらずに口をたたくこと。人鏡論「八郎左衛門、事の外に後つぶての惡口し」

うしろーづめ 後詰 (名) (一)先陣に代はるべき後續の軍隊。どづめ(後詰)。太平記[十九]「後詰の勢は、八萬餘騎を五手に分け」(二)代はりて事に當たるもの。狂言「こなたもそれでうしろづめしてくだされ」

うしろーて 後手 (名) (一)うしろの方。うしろざま。うしろづき。記「あはしし少女、宇斯呂傳[ウシロ]は、をだてるかも」宇津保[藤原]「御うしろで・姿つき、たとへん方なし」(二)兩手を背中にまはすこと。しりへで。二分狂言「その儘うしろでに縛め、猿轡をはめる」

うしろーど 後戸 (名) 後方の戸。著聞「蓮花王院の兵士が夢に、うしろ戸のひつじさるのすみより北へ第四のまに」宇治拾遺「高座よりおりて、うしろ戸よりかいけつやうにして出づること」

うしろーとうゆ 後桐油 (名) うしろがけ(後懸)に同じ。

うしろーとび 後飛 (名) 後の方へ飛び退くこと。井筒業平河内通「槃先耳の根かけて、ぬき打ちに切りつけられ、後飛に一丈餘りぞしさつたり」

うしろーながれ 後流 (名) 【建築】棟の後方の屋根。

うしろーぬの 後布 (名) (一)袴の名所。はかま(袴)を見よ。(二)赤兒などの衣の背に、縫附けにしたる帶紐。

うしろのあしーふたつじろ 後足二白 (名) 馬の後脚、二つ白きもの。稱。

うしろーのーひだりあしじろ 後左足白 (名) 馬の左の後脚、白きもの。驛足。

うしろーのーみぎあしじろ 後右足白 (名) 馬の右の後脚、白きもの。驛。

うしろーのーみつつじ 後三辻 (名) 續幕樣の、うしろの方の結びめ。「うしろのみつつじゃ前のほろとを取つて、我が身にひきつけ」

うしろーはちまき 後鉢卷 (名) 鉢卷を後頭に結ぶこと。

うしろーはば 後幅 (名) 裁縫の語。背の縫目より、わきの縫目までのはば。

うしろばりーおほくち 後張大口 (名) 大口の一種。(おほくち(大口)を見よ。)前張大口の對。

うしろーひほ 後紐 (名) (一)次條に同じ。(二)うしろ紐を附くるやうなる幼時。堀川波鼓「姉は父御のそんをつぎ、後紐から酒を飲む」薩摩歌「笹野三五兵衛樣といふ人と、後ひほから條組あり」

うしろーひも 後紐 (名) つけひも(附紐)に同じ。鷹筑波「藤瓜の實をまくつるや後紐」

うしろーべたーさ 後 (名) うしろめたさに同じ。和泉式部集「えこそなほうきよと思けん、主と後合せに、東國の方へぞ落ち行きける」新六帖「なほざりの道行きずりに逢ふ事も、うしろ合せにまたちがひぬる」(二)反對。難太平記「兩人の意見うしろあはせなり。淸き武者の心は同じかるべしと思ふを、此のちがひめは今に不審なり」

へどそむかれね、おのが心のうしろべ(めイ)たさに」

うしろ-べたし (形) うしろめたしに同じ。枕「乳母かへてん、いとうしろべ(めイ)たし」 同三 いと危くうしろべたくはあらぬにや」

うしろ-まき 後巻 (名) 味方を攻むる敵を、後より取り巻くこと。 細川爾家記「越水の城の後巻のために、小屋・野間九十九町中略上から下まで陣を取りつづけ」

うしろ-まく 後幕 (名) 寄屏セの高座などにて、演藝人の後に懸くる幕。

うしろ-まち 後襠 (名) 一 羽織・被布等の後裄(ウシロ)の方にはする布。 二 羽織・被布等の後裄(ウシロ)の方に縫ひ附くる襠。

うしろ-まへ 後前 (名) 一 うしろとまへと。 二 前後くひちがふこと。

うしろ-み 後見 (名) 一 うしろに居て、人を助けて事をなすこと。 妻の夫を内助し、關白の君を輔佐するなどにもいふ。源「桐壺」「おほやけの御うしろみをするなん、ゆくさきもたのもしげなること」 同四 ことが中に、なのめなるまじき人のうしろみのかたは」 二 未成年者又は無能力者を助けて事を治むること。こうけん(後見)。監督。 宇津保俊蔭「年を數ふるに十二ばかりにて中略まじらひなどをこそせさせめ。そのうしろみも誰れかせん」 源「桐壺」「とりたててはかばかしき御うしろみしなければ」 同少三 けさうじ添ふとて蹇ぎつろうしろみども、近うよりて」

うしろ-みごろ 後襟 (名) 衣服の背部のみごろ。

うしろ-みる 後見 (自動上) うしろみをなす。後見す。輔佐す。宇津保藤原「おとなしくもうしろみおこすかなと、思して」 枕「今まゐりのさしこえて、物知り顔に教へやうなることいひうしろみたる、いと憎し」 源宇治「とにかくにつけて、ものまめやかにうしろみ」

うしろ-む 後見 (自動上) 前條の轉。

狭衣三「うしろむる人なからんよりは」

うしろ-むき 後向 (名) そがひ。はいめん。(前向の對) 出藝集「人しれず磯まに浪は寄せくれど、うしろむきなる岩根松かな」

うしろ-むすび 後結 (名) うしろおびを結べること。傾城反魂香三十八丸なる脇詰の、後結も格別に」

うしろ-めた (形) うしろめたしの略。拾遺雜上「うしろめたいかでか、へらん山櫻、あかぬにほひを風にまかせて」 源浮舟「うしろめたの御心のほどや」

うしろめた-がる (自動上) うしろめたく思ふ。宇津保藤原「うへのさばかり、うしろめたがりきこえ給ふものを」

うしろめた-げ (副) うしろめたさう。源若紫「あはれに、うしろめたげに思へりし人もいかならん」

うしろめた-さ (名) うしろめたきさま。うしろめたくある度合。 宇津保藤原「よべは道のほどうしろめたさに、み迎へに參りきたりしかど」 拾遺雜「朝まだき起きてぞ見つる梅の花、夜のまの月のうしろめたさに」

うしろめた-し (形) あとの事氣にかかる。見えぬ所心配なり。心もとなし。安心せず。うしろめたし。(うしろやすしの對) 古今秋上「をみなへしうしろめたくも見ゆるかな、荒れたる宿にひとりたてれば」 宇津保俊蔭「見捨てて行かんも、あはれにうしろめたくおぼゆることの、二つなければ」

うしろめた-なし (形) 前條に同じ。宇津保中「世の中になからん事なんいとうしろめたなき心ちする」

うしろめ-やすし 後目安 (形) うしろやすし(後安)に同じ。狭衣三「彼の御ためめ安しとまでこそおぼされざらめ、たださる方にうしろめやすく心やすき方には、なとてかはとこそは思ひ侍れど」

うしろ-めん 後面 (名) せなかを前向の狀に作り裝ひて踊る時などに、うしろあたまに面をつくること。

うしろ-もくれ 後暗 (副) あとの事氣にかかる。 うしろめたく。 齊明紀「淡のうしほのくだりうなくだり、子之虛母俱倒(ウシロ)におきてかゆかむ」

うしろ-や 後矢 (名) 竊かに敵に内應して、味方を後より射る矢。 平家七「「うしろ矢をば仕らん」

うしろ-やく 後厄 (名) あとやく(後厄)に同じ。

うしろ-やす 後安 (形) うしろやすし(後安の略。道濟集「うしろやす君が宿なるもみぢばの、風の心にえしもまかせじ」

うしろやす-け 後安氣 (副) うしろやすさう。

うしろやす-さ 後安 (名) うしろやすき度あひ。うしろやすきさま。伊勢集「身にかふる人にもわれはなしてしか、うしろやすさを見せんと思へば」

うしろ-やすし 後安 (形) あとの事心安し。見えぬ所心配なし。うしろめやすし。(うしろめたしの對) 後撰雜「わかれをば悲しきものと聞きしかど、うしろやすくもおもほゆるかな」 宇津保春琴「子の世うまごの世、うしろやすくておはしませんとなん聞こゆる」

うしろ-ゆび 後指 (名) かげより人に指さされて、嘲り又誹らること。

うしろゆび をささる かげより嘲笑せらる。 義經記八「前」以下本「傍輩達に笑はれんぞ、うしろ指をさされ家のきずなるべし」

うしろ-ゆみ 後弓 (名) 射手の順番にて、後に射ること。 今川大雙紙「後弓は、つがひたる矢を放して肩を入れて禮をする也」

うしろ-わたり 後亘 (名) 相撲の手の一。(現實我「前亘・後亘・走亘中略相撲の手共其の數を盡くし」

うしろ-わく 牛枠 (名) 牛竹東などの裝置にて、枠形にしつらひたるもの。

うしろ-ゐんぐわいらう 〔右少辨〕 唐名。

うしを-の-らま 牛尾馬 (名) 尾の狀、牛の尾に似たる馬。(類書は色葉抄)駿。

うし-をり (名) うしごや(牛小屋)に同じ。

うし-ん 〔有心〕 (名) 一 こころあること。思慮あること。宇津保「尊かの仁壽殿のみこたちを見よや、うしんにこそ」 榮華根合「おとなびて、うしんにものしゐ給ふ人にて」 二 狂歌を無心といふに對して、普通の歌。 井蛙抄「後鳥羽院御時、柿本・栗本とて賢かる。柿本は世の常の歌、これを有心と名づけ、栗本は狂歌、これを無心といふ」 三 連歌にて、詞を選びつくろひたるもの。然らざるを無心といふ。菟玖波集「建長六年九節の頃、有心・無心の連歌侍りけるに」

うー-しんじ 〔右心耳〕 (名) 【醫】しんじ(心耳)を見よ。

うー-しんしつ 〔右心室〕 (名) 【醫】しんしつ(心室)を見よ。

うしん-じゃ 〔有心者〕 (名) こころある人。なさけある人。宇津保藤原「更にものたまふかな、うしんじやなり。語らひおきて、時時は紅葉見る所にし給へ」

うす 臼 (名) 一 穀物をつき或ひはしらげ或ひは碎き、又餅などをも搗く器。上を凹くして物を容れ、杵にて搗く。形圓くして上下を平にしたるもあり、又胴をつぼめて鼓の形したるもあり。つきうす・搗臼。父、ひきうす・すりうす・からうす等の種類あり。各條を見よ。記「その つづみ字須(ス)に立てて、歌ひつつかみけれかも」 二 ひきうす(挽臼)の略。

うす 失 (自動上) 一 見えぬやうになる。無くなる。消ゆ。 顯宗紀「いなむしろ川そひ柳水ゆけば、なびきおきたちそ根は宇世(モヤ)ず」 竹取「しら山にあへば光のうするかと、はちを捨てても頼まるるかな」 二 しぬ。死す。用明紀「將欲終(ムトスル)時」 勢語「それうせ給ひて、安祥寺にてみわざしけり」 三 往く。去る。狂言無題「出てうせをれ」 同鬼「そこ立ってうせう」 同鏡分「あっちへうせ」 四 ホる。狂言太「作病をおこしをって、供にうせなんでござる」 同止動「先へうせいといへば、はうりやうもなううせをる」 同鬼「これまで、あとを追ってうせたな」

うす 薄淡 (接頭) 一 色淡き。濃 二 ず。持統紀「淺(ス)鉄」 枕「うすきはみたる雲の」 三 質薄き。厚からず。推古紀「五色綾羅(ウス)」 枕「うす氷あわにむすべるひもなれば、かざす日かげにゆるぶばかりを」 四 少し。僅か。どことなく。「うすもとで」「うす寒い」「うす笑ふ」

うず 髻華 (名) 古昔、冠の上にかざしたる飾り。記「くまかしが葉を宇受(ウス)にさせ、其の子」 推古紀「唯元日著髻華(ウス)」 釧孝元「髻華玉飾」

うずぎ-の-たまかげ 髻華玉飾 髻華(ウス)に掛けたるひかげかづらをいふとぞ。萬三「いぐしたて、みわすゑまつる神ぬしが、雲榮玉飾(ウスガケ)見ればともしも」

うす 雲珠 (名) 唐鞍の鞦の組違(ウズ)に著くる飾物。からぐら(唐鞍)を見よ。和名「雲珠宇須」

うず (自動変) うんず(倦)に同じ。宇津保藤原「我がぬしたちの心も知らず、若き男・女・親・はらからと、うじ給ふ」 馬内侍集「心うき事や聞きけんうじたれば、女もむつかりて」

うす-あかり 薄明 (名) 一 ほのかにさす光。微明。 二 日出前又は日沒後にあかるきこと。

うす-あさなひ 薄商 (名) 賣買取引の少なきこと。「後場は薄あきなひ」

うす-あはた 薄痘痕 (名) 目に立たぬほど薄きあばた。うすいも。

うす-あを 薄青 (名) 一 染色の名。青色の淡きもの。あさぎ。 宇鏡集「經(カウ)」 二 織色の名。紅白く、綠青きもの。 二 襲の色目の名。表裏共に薄青。

うすあを-の-もんと 薄青文濃 織色の名。經白、綠青にて織りて、地よりも紋濃く出でたるもの。部類論部類

うす-あを 薄襖 (名) 精好にあらざる薄き無文織物の狩衣。表裏共に白なるべし。部類論部類

うす-あをげ 薄青毛 (名) 馬の毛色。みづあを(水青)に同じ。

うす-いし 臼石 (名) 臼の形したる石。上古の裝飾に用ひたる具なりといふ。大和・山城等の諸國より掘り出だす。

うす-いた 薄板 (名) 一 厚さの薄き板。 二 地の薄き織物。うすいたものの對) 太閤記二秀吉京「薄板の」

うす-いたもの 薄板物 (名) うすいた(薄板)に同じ。

うす-いちご 薄痘痕 (名) 【植】すのきの異名。

うす-いも 薄痘痕 (名) うすあばた(薄痘痕)に同じ。老の樂「芭蕉翁はうすいもあり」

うす-いろ 薄色 (名) 一 染色の名。薄紫色。又は二藍色の薄きもの。西三條紫野 二 綾色の名。經紫・綠白なるもの。 三 襲の色目の名。表薄紫、裏白。色目書 又裏は薄紫のやや濃きもの。宇津保「ごだち廿人ばかり、うす色のも著てあり」

うす-うさぼり 薄浮彫 (名) 浮彫の一種。貨幣の面にある模樣の如く、僅かに板面より浮き上がらせたるもの。うすにくぼり。

うす-うす 薄薄 (副) 一 色薄く。うっすり。ほんのり。 二 代女「人顔のうすうすと見えし夕暮を待ち合はせけるに」 三 すこし。ほのか。幾分。博多小女郎波枕「亭主うすうす見知りがあらう」

うず-うず (副) 一 すこし動くさまにいふ語。 二 傍觀に堪へざるさまにいふ語。むづむづ。

うす-うた 臼歌 (名) 臼つく時うたふ歌。袋草紙「元慶は大山別當也。筑紫にて、詠「郭公、我がやどの垣ねな過ぎそ子規、何れの里も同じ卯の花。而上洛之時、山崎邊にて下女の臼歌に唱ふ之。元慶聞ふ拭ふ涙」

うす-えぶ 薄葉 (名) うすやう(薄樣)に同じ。著聞「紅の薄葉に歌を書きたり」

うす-おしろい 薄白粉 (名) おしろいの薄きもの。

うす-がき 薄柿 (名) 次條の略。檜三「此の世の緣は薄柿の、帷子高く捻ぢからげ」

うすがき-いろ 薄柿色 (名) 柿色の薄きもの。しぶいろ。

うす-がすみ 薄霞 (名) うすがすむこと。薄きかすみ。狭衣「うすがすみに曇りたる月影、さやかにはあらねども」

うす-がすむ 薄霞 (自動四) 薄く霞む。少しかすむ。夫木「思ひあへずしぐれにけりな立田山、うすがすみゆく秋のむら雲」

うす-がね 薄金 (名) 厚き少なき金。うすかは。

うす-かは 薄皮 (名) 一 まく(膜)に同じ。 二 前條に同じ。

うすかは-まんぢゅう 薄皮饅頭 (名) 饅頭の皮の薄きもの。

うす-がみ 薄紙 (名) 薄き紙。(厚紙の對) 貫之集「春源といふ大德の、櫻の花をうすがみに包みて」

【謎】薄紙をへぐやう 病氣の次第になほりゆくなどに譬ふ。

うす-かもね 薄鴨居 (名) 【建築】鴨居の薄きもの。欄間の上などにあり。

うす-ぎ 薄著 (名) 著物を薄く著ること。厚著の對) 聖德太子繪傳記「薄著するな、毒喰ふな。達者で兄弟中ようせい」

うす-ぎ 薄黄 (名) 襲の色目の名。あさぎ(淺葱)に同じ。

うす-きたなし 薄汚 (形) 少しきたなし。何となくきたなし。

うす-きぬ 薄衣 (名) 薄きころも。うすごろも。源末「かの殿ぎすべしたるうすきぬを取りて出で給ひぬ」

うす-きぬ 薄帛 (名) 經緯の絲細く、地薄くして輕き絹織物。紗・絽・錦絹の類。

うす-きね 臼杵 (名) 遊戯の一。一

木の中央を塞にて支へ、二人相対して其の兩端を蹈み、一はのぼり一はくだるもの。（嬉遊笑覽）

うすぎり 薄霧 （名） 薄き霧。千載秋上「秋山のふもとをこむるうすぎりは、すそ野の萩のまがきなりけり」

うすぎりふ 薄切生 （名） 切生の一種。黒き斑うの薄きもの。平家物語十二「うすきりふに鷹の羽わりあはせて剱ぎたりける、ぬためのかぶらをぞさしそへたる」

うすぎる 薄霧 （自動ヨ） 薄く霧り籠む。風雅冬、霜寒きあさげの山はうすきりて、こほれる雲にもる日影かな」

うすきん 薄金 （名） 銀の中に、少許の金を含有すること。

うすくず 薄國栖 （名） くずがみ。國栖紙。の薄きもの。淡路及び吉野の産。（紙譜）

うすくずあん 薄葛餡 （名） 醤油に味醂を加へて煮詰めて、これに水にときたる葛をかけたるもの。料理にかけて用ふ。

うすくちなし 薄梔子 （名） 染色の名。くちなし色の紅を帯びて薄きもの。

うすくちびる 薄口脣 （名） 一口脣の薄きこと。 二口數多き人。おしゃべり。多辯。

うすくまる 蹲 （自動ヨ） 一膝を折り立てて居る。うづくまる。 名義抄「蹲ウスクマル」 二獣、前足を立ててすわる。

うすぐも 薄雲 （名） 一薄き雲。源氏賢木「入日さす峰にたなびくうすぐもは、物思ふ袖に色やまがへる」 二杏の名。沈の一種。香薄く輕く、一度きけば忘れ難しといふ。（香名 嬉遊笑覽）

うすぐもやき 薄雲燒 （名） 菓子の一種。餡餅粉をねり、餡を包みて燒き上げたるもの。

うすぐもり 薄曇 （名） うすぐもること。隣女集「花にほふやよひの空のうすぐもり、かすめる月にあくがれぞゆく」

うすぐもる 薄曇 （自動ヨ） 雲薄く日を蔽ひて、そら少しくもる。風雅夏「うすぐもる青葉の山の朝あけに、ふるとしもなく雨そそぐなり」

うすくら 雲珠鞍 （名） 雲珠（ウスク）を附けたる鞍。唐鞍。

うすくらし 薄暗 （形ク） 光薄くして暗し。ほのぐらし。 をぐらし。

うすくりけ 薄栗毛 （名） 馬の毛色。體毛は栗毛に黄色を帯び、鬣黒きもの。（馬語）

うすくれなゐ 薄紅 （名） 一紅の薄き色。夫木「山の端の薄紅の花ざかり、雲にまがはぬ春のあけぼの」 二杏の名。にほひは紅より薄く、きやしやなりといふ。（香名 嬉遊笑覽）

うすけい （名） 【植】しらん（白及）の異名。

うすけし・むらさき 薄滅紫 （名） 染色の名。紫の黒みて薄きもの。

うすけしゃう 薄化粧 （名） あっさり化粧すること。うすけはひ。淡粧。盛衰記世八平家「十五六ばかりの若上臈、薄化粧に金黒なり」

うすけはひ 薄粧 （名） 前條に同じ。曾長句「月鉾やもごの額のうすけはひ」

うすけぶり 薄烟 （名） うすき烟。夫木「朝日さす氷の上のうすけぶり、まだ晴れやらぬ淀の川霧」

うすこ （名） 【植】宇のきの異名。

うすこうばい 薄紅梅 （名） 一【植】紅梅の一種。色薄きもの。 二薄紅梅の花に似たる色。枕「御手のわづかに見ゆるが、いみじう匂ひたるうす紅梅なるは」

うすこうや （名） 革の名。絞ど（ジボ）甚だ赤きもの。むすいらいとして、絞下（ジボ）こべや。（音響）

うすごえで 薄小袖 （名） 薄綿の小袖。今川大雙紙「大道物の時（中略）射る時は寒中にも、薄小袖ばかりきるなり」

うすこほく 薄琥珀 （名） 琥珀織の地薄きもの。婦人の洋服地などに用ふ。

うすごほり 薄氷 （名） 一薄きこほり。枕「うすごほりあわにむすべる紐なれば、ざす目かげにゆるぶばかりを」 二襞模様の名。

（こうほごすう）

うすこほる 薄氷 （自動ヨ） うすくこほる。千載冬「昨日こそ秋はくれしかいつのまに岩間の水のうすこほるらん」

うすごろも 薄衣 （名） うすぎぬ（薄衣）に同じ。夫木「薄ごろも染めぼす山の雲間より、たなびくかりや春のしたおひ」

うすさ 薄 （名） うすき度あひ。素性集「春だにもありし心を夏ごろも、いかにうすさのけふまさるらん」

うすざいしき 薄彩色 （名） 墨繪の上に薄・代絹などを淡くひきたるもの。

うすざくら 薄櫻 （名） 色薄き櫻。隆信集「知る人を知るとは聞けどうすざくら、にほひもあらし花の匂ひを」

うすざくら 雲珠櫻 （名） 【植】櫻の一種。蕊は長く、花は一重にて色はうす紅、花心より細き蕊を出だす。山城國鞍馬山に多しといふ。定頼集「これやこの音に聞きつるうすざくら、鞍馬の山に咲けるなるべし」

うすざくらもえぎ 薄櫻萌黄 （名） 襲の色目の名。表青、裏蘇芳。（禁裏家一説、表薄青、裏櫻色。紀事 色目響）

うすさま 〔烏芻沙摩〕 （名） 梵語。〔汚穢を轉じて清淨ならしむる義〕佛教にて、厠の神。太平記三十中宮「樣樣の大法・祕法を行はせらる（中略）烏芻沙摩變成男子の法」

うすさむし 薄寒 （形ク） 何となく寒し。どことなく寒し。

うすさや 薄鞘 （名） 【商】賣買の差金の僅少なること。

うすし 薄 （形） 一物の厚みすくなし。厚からず。宇津保春琴「はぢをのみやへきるきぬにぬぎかへて、うすき衣にすみぬるかな」拾遺雜上「かきながされしかみなた月、薄き氷にとぢられて」 二襲くあらず。あはし。あさし。宇津保俊蔭「うすくこく色づく野邊のをみなへし、植ゑやや見まし露の心を」落窪「いろごのみの、いとうすく書き給ひけるかな」 三眼少なし。あまし。稀薄なり。「汁うすし」 四豐かならず。繁からず。乏し。舒明紀「うねび山こだち宇須家（ウスど）頼みかも、けつのわくとのこもらせりけむ」宇鏡「稀（字須）」 五大鏡狂言綺語「私の在所は、うすう廣い所でござるが」 六烈しからず。輕し。輕微なり。「手きずうすし」 七愛情少なし。薄情なり。萬「さほ川に氷りわたれるうすらひの、宇須伎心をわが思はなくに」夫木「少女子が給衣のかくれづま、うすき契りに恨みわびつつ」 八よわし。つたなし。曾我扇八景「運のうすい御人や」

うすしき 薄敷 （名） 【商】仲買人が、賣買取引の証文を受けたる際、取引所にて定めたるより少額にて應ずる敷金。（本敷の對）

うすしきゐ 薄敷居 （名） 【建築】敷居の薄きもの。欄間下などにあり。

うすしたち 薄下地 （名） 醤油の鹽加減をうすくしたるもの。浮世風呂「薄したちで吸物ぢやさかい、酒の相手になどせうものなら、いっかう善いぢや」

うすしほ 薄鹽 （名） うすき鹽加減。あましほ。 大鏡冠「醍醐の粕漬、薄鹽の人魚」

うすじり 薄知 （名） うすうす知りをること。心中刃氷朝日「なまなか武士の銀とは、うす知りに人も知る」

うすじり 臼尻 （名） 白の如く大きなる尻。

うすしろし 薄白 （形ク） 色さめて白ばみたり。讃岐典侍日記「御墓に參りたるに、尾花のうすしろくなりて、招きたちて見ゆるが」

うすすあを 薄素襖 （名） すきざあを（透素襖）に同じ。

うすすく （自動カ） いすすぐに同じ。（乳石の說）源鬼殼「みかどもり寒げなるはひらうすすき出できて、とみにもえあけやらず」

うすすはう 薄蘇芳 （名） 蘇芳色の淡きもの。宇津保嵯峨上「うすずはうの唐綾の御ほそながにはへて」

うすすまる （自動ラ） 古語。うずくまる（蹲）に同じ。うずまる。一說、群り集まる。記上「庭すすめ宇受須麻理（ウスマリ）ゐて、今日もかもさかみづくらし」

うすずみ 薄墨 （名） 一次條の略。枕「うすずみの衣、うす物の袈裟など」源少「まぎらはし書いたるこすみ・うすずみ、さうがちに打ちまぜ」 二うすずみがみ（薄墨紙）の略。後拾遺春上「うすずみに書く玉づさと見ゆるかな、霞める空に歸るかりがね」續詞花集「文をおこせて侍りけるが、うすずみに書きたりければ」 三そばかき（蕎麥搔）をいふ、女房詞。色うす黒きよりいふ。そばのかゆ。大上臈御名之事「女房詞。そばのかゆ、うすずみ」きのふはけふの物語「ある夜秀吉公、夜食にそばかきを御好みなされ中略蕎麥をあけてとりあへず、うすずみに造りしまゆみ、そば額をよくよく見ればみかどなりけり」

うすずみ・いろ 薄墨色 （名） 墨色の薄きもの。うすずみ。

うすずみ・がみ 薄墨紙 （名） 薄きねずみ色の紙。京都西洞院にて漉く。古へ宣旨を書くに用ひたり。御宣旨紙。御綸旨紙。紙屋紙。宿紙。うすずみ。

うすずみ・ごろも 薄墨衣 （名） 薄墨に染めたる喪服。源葵「限りあればうす墨衣淺けれど、泪ぞ袖を淵となしける」

うすずみしぎ 薄墨鴫 （名） 【動】きあしし（黄足鷸）の異名。

うすずみ・そめ 薄墨染 （名） 薄墨色に染めたること。狹衣四「うすずみぞめをば、やがてたちかふまじく設けさせ給ひて」

うすずみのりんし 薄墨綸旨 （名） うすずみがみに書き認め給ひて下ださる綸旨。

うすーすむ （自動ヨ） 薄黒く霞む。夫木「朝霧のそことしるしはなけれども、うすずみわたる三輪の杉むら」

うすーずり 薄摺 （名） 薄き色に摺りて染むること。亭子院歌合「左は歌よみ數さしのわらは、例の赤色にうすずりのりようのうへの袴」

うすーぞめ 薄染 （名） 色をうす く染むること。

うすぞめ・ごろも 薄染衣 （名） 淡き色に染めたる衣。萬「くれなゐの薄染衣（ウスゾメ）ごろも浅きはかに、相見る人に戀ふるころかも」

うすーたけ （名） 【植】孟宗竹類、うすたけ屬の竹類。高さ一二寸。柄部は短く、傘は廣くして上面は稽鉢狀に窪み、ほぼ臼に似たり。裏面は黑褐色なり。秋季我が國各地の山林に生ず。有毒菌なりといふ。（遠藤節用）臼茸（ウスタケ）

うすーだたみ 薄疊 （名） 薄き疊。うすべり。古へ春・夏に用ひたり。齋宮寮式「絲綿帖十帖、已上秋冬料。春夏料赤如是。但袋薄帖」

うすたまご 薄卵 （名） 卵色のうすきもの。

うすーだむ 薄彩 （他動ヨ） 薄くいろどる。正治百首「色そふる玄島の浦の月をまた、薄だみわたる夕霞かな」

うすーたれ 薄垂 （名） うすき垂れ味噌。庖丁聞書「卯の花いりとは、鳥賊をきり、うすたれにて煮るなり」

うすーだん 薄緞 （名） 白地に、薄紫に色どりたるもの。源宇治、御屏風四帖に、内の御手書かせ給へる唐の綾のうすだんに」

うすーぢ 薄地 （名） 金屬又は綾羅の薄きものの稱。

うすーちゃ 薄茶 （名） 一挽茶の一種。こいちゃ（濃茶）を見よ。 二薄き茶色。

うすちゃぢゃわん 薄茶茶碗 （名） 薄茶を飲むに用ふる茶碗。檜權三「ちとお休みと指し出だす薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振りを見て」

うすーちり 次條の略。

うすーちりぢ 薄塵地 （名） 蒔繪にて、金粉を甚だ薄く散らしたるもの。図事の時の太刀の鞘などに用ふ。うすちり。

うすつ 烏瑟 （名） うしちにしゃ（烏瑟膩沙）に同じ。榮華五「佛を見奉れば中略うすつの御頭は緑の色澤う」

うすーづき 臼搗 （名） 臼つくこと。

うすーづき 薄月 （名） おぼろづき（朧月）に同じ。

うすつきーうち 臼搗打 （名） 杵にて白を搗くが如くに上より打ちおろすこと。日本振袖始「つっかかり、臼搗打に打つ鋤が、倒って向うへ越す處を」

うすづきーよ 薄月夜 （名） うす月のある夜。おぼろづきよ。芭蕉句「面白う松かさ燃えようす月夜」

うすーつく 臼搗 （自動ヨ） 一物を臼に入れて、杵にて搗つく。 二夕日西山に沒せんとす。「夕陽春つく」

うすっーべら （名） 一きはめて薄きもの。 二おくゆかしからぬこと。おくふかからぬこと。輕佻。浅薄。「うすっべらな人物」「うすっべらな學問」

うすーて 薄手 （名） 一淺き創。あさで。輕傷。武家名目抄（馬具部）薄手おうたる者は五拾餘人有りける」 二薄き器物。「うすての茶碗」

うすーどの 臼殿 （名） 大管曾の時、天神・地祇に獻る稻を舂く所。

うすーどり 臼取 （名） 餅を搗くとき、一杵毎に水を施し手返して、餅の杵に粘著するをふせぐこと。又、それをなす人。これとり。夕霧阿波鳴渡「餅搗（中略）中居の萬が臼取の」

うすーとりひき 薄取引 （名） 【商】賣買取引の少なきこと。

うすーどろ （名） 芝居にて、太鼓計りかすめて打ちつづくること。幽靈などの出づる時行ふ。

うすーなしぢ 薄梨地 （名） 金粉の蒔き方薄き梨子地。

うすーにく 薄肉 (名) 一肉色の薄きもの。二俳優の類の彩りの名。薄赤き顔色。砥の粉を白粉にまぜて塗る。八笑人「黒勘平が白いから、おらあ、ちっと薄肉にしべえ」三次條の略。

うすにくーぼり 薄肉彫 (名) うすうきぼり(薄浮彫)に同じ。うすにく。

うすーにごり 薄濁 (名) 一薄く濁りたるもの。七十一番歌合「酒つくり。先づ酒召せかし(中略)うすにごりも候」二濁酒の薄きもの。

うすーにび 薄鈍 (名) 薄きにび色。うすにぶ。宇津保(俊蔭)「うすにびの張りあはせの御ぞ奉りて」

うすーにぶ 薄鈍 (名) 前條に同じ。宇津保(俊蔭)「うすにぶのひとへがさね、黒つるばみのこうちぎ奉りて」

うすーにほひ 薄匂 (名) 色を淡くぼかすこと。夫木「わが宿の根こしの梅のかた咲きて、ほつえの風ぞうすにほひなる」、狭衣「女院は香のうすにほひの御衣、香染など奉れば」

うすーぬり 薄塗 (名) 次條の略。拾要抄「宿老の人薄塗、壯年の人厚塗。近年不論老少、著薄塗、不可然事也」

うすぬりのーえぼし 薄塗烏帽子 (名) 烏帽子の一種。薄塗烏帽子「古人著薄塗烏帽子、臨期平禮」(長門平家本)「法華験記、内大臣は薄塗の烏帽子に、白帷子に大口ばかりにて」

うすーねずみ 薄鼠 (名) 薄き鼠色。しろねずみ。

うすーのーき 薄鑿 (名) 一(植)すのきの異名。

うすーのーみ 薄鑿 (名) おさへつきのみ(押突鑿)に同じ。

うすーのーみ (名) 【植】すのきの異名。

うすーのーもの 臼者 (名) こめつき(米搗)に同じ。うすをとこ。(俚言集覽)「性質の、普通より遅鈍なること。又、其の人。

うすーのろ 薄鈍 (名) 性質の、普通より遅鈍なること。又、其の人。

うすーのろい 薄鈍 (形口語) 普通より少しのろし。ややにぶし。ぼんやりなり。

うすーば 臼歯 (名) 老人などの歯の、臼の如く中の凹みたること。又、そのもの。和名抄「配(字彙)老人齒如臼也」

うすーば 薄刃 (名) 刃の薄き庖刀。菜刀。狂言集八「扨も扨も長い薄刃ぢや」、鰯山姥「白瓜鱠、夕飯の調理(急ぐ薄刃の音の」

うすばか 薄馬鹿 (名) うすのろ(薄鈍)に同じ。

うすばかげろふ 蛟蜻蛉 (名) 【動】脈翅類、蛟蜻蛉科に屬する昆蟲。とんぼに似て、翅は極めて薄く、透明に翅脈判明なり。體は淡綠色にして、上方は黑色を帶ぶ。幼蟲は土砂に擂鉢狀の穴を穿ち、蟻の陷落するをまちて之を捕食するを以てありぢごくともいふ。その歩行するや後退す。

うすーはく 薄白 (名) うすはくし(薄白紙)の略。

うすーはく (他動) うしはく(領)に同じ。祝詞式(遷都)「四方見舞(式山川)(清地)遷出坐(吾地)宇須波岐(坐世止)」

うすーはくし 薄白紙 (名) 質のうすき白紙。うすはく。

うすばーさいしん 細辛 (名) 【植】馬兜鈴科、細辛屬の多年生草本。高さ四五寸。葉は心臟狀腎臟形、又は腎臟形にして鈍頭、質薄くして光澤なく、又斑紋なし。春季、根際より二葉を生じ、其の間より花梗を出だし、地に接して紫黑色の小なる一花を開き、初めは下向し、後に上向となる。我が國、各地の山中陰濕の地に自生す。根は藥用となる。さいしん。たにあふひ。にらのねぐさ。ひきのひたひぐさ。みやまぬなは。みらのねぐさ。

うすばーぜにごけ (名) 【植】地錢類、うすばぜにごけ屬の苔類。全形薄く、平に地上に廣がり生ず。長倒卵形にして、單一又は分岐し、或ひは放射狀に分岐し、不明瞭なる中肋あり。全體半透明なり。我が國一到る處の陰地に自生す。

うすーはた 薄機 (名) うすもの(薄物)に同じ。推古紀「衣服皆用錦綵織及五色綾羅(紗天武)」

うすーはた 薄蹴 (名) 金屬製の花瓶の一。鷹筑波「うすばたにもる春の谷水」、後撰夷曲集「目には見て食はれぬものは、うすばたにつき立ててある餅つつじかな」

うすーはぢ 薄恥 (名) いささかのはぢ。平家(四廣都)「織りのべを一きれも得ぬわれらさへ、薄はぢをかく衾に入るかな」

うすーはないろ 薄花色 (名) 縹色(はなだ)の淡きもの。月草の花などの色。藻鹽草十七「薄花色」

うすーはなーころも 薄花衣 (名) 薄花色に染めたる衣。又、薄花心にも譬ふ。師兼千首鳥「うき中はうす花ごろも今更に、染むる心の色もたのまず」

うすーはな心 薄花心 (名) まことと少なくしてうつり易き心。續千載(慶三)「われにのみ移りはつとも月草の、うす花心いかがたのまん」

うすーはなぞくら 薄花櫻 (名) 一さくらの花の色薄きもの。詞花雪「くれなゐのうすはな櫻にほはずば、みなしら雲と見てや過ぎまし」二うすはな色。三襲の色目の名。表は白く、裏は紅なるもの。春用ふ。藻鹽草八十二月。薄花櫻(賀茂百首)「沙那王が出でたちは、肌には薄花櫻のひとへに」

うすはなーそめ 薄花染 (名) 薄花色に染めたるもの。新古今(慶三)「人心うす花ぞめのかり衣、さてだにあらで色やかはらん」

うすーはなだ 薄縹 (名) はなだの薄き色。

うすばーよこばひ (名) 【動】うんか(浮塵子)の一種。

うすーはり 薄張 (名) 賭博の一種。薄敷にて、呑屋を相手に勝負をなすもの。

うすーばん 薄盤 (名) 縫(ア)を低くしたる細縫の三方。

うすひきーうた 臼挽歌 (名) うすうた(臼歌)に同じ。

うすーひけ 薄髭 (名) 疎(ヤヤ)なるひげ。

うすーびたひ 薄額 (名) 縫を低く造りたる冠。少年・賤官の人用ふ。(厚額の對)飾抄「年少之人用薄額、近代依有事類、不依年齢用厚額、餘事也」

うすーひだ 薄檜皮 (名) 檜皮にてうすく葺きたるやね。七十一番歌合「ひはだ、ふき。月の漏る軒ばのきりのうすひはだ、ふきも迫さぬ秋の風かな」

うすーふし 薄節 (名) 箭の節に、薄く漆を塗りたるもの。

うすーふたあも 薄二藍 (名) ふたあゐの薄きもの。枕「うすふたあゐ・青にぶのさしぬきなど蹈みちらして」

うすーべ 護田鳥 (名) 【動】おすめどり(護田鳥)の異名。

うすべーう 護田鳥尾 (名) (護田鳥文(ヤヤ)の轉。或ひは護田鳥尾(ヤヤ)の轉)鷲の羽に薄黑き文あるもの。矢羽に用ふ。武門(武家)「長門平家(義仲)本(武)」重篠の

弓、うすべうの廿四さしたる矢負ひ」

うすべーどり (名) 【動】にはとり(雞)の異名。

うすーべに 薄紅 (名) 薄きべに色。孕常勢(聖)「山鳩色に薄べにまぜて、さっと一はけはかせたる八重がすり」

うすべにーにがな (名) 【植】菊科、ぎをんばの一年生草本。莖の高さ一尺、帶白色なり。葉は下部のものは圓形にして鋸齒を有し、長き葉柄を具ふれども、上部には葉柄無く、葉脚耳形に延長して莖を抱く。花は淡紅色にて美しく、頭狀花序に排列す。我が國、畿地の山地に自生す。

うすべにーわれもかう (名) 【植】薔薇科、地榆(ヤヤ)屬の多年生草本。莖の高さ一乃至五六尺。葉は羽狀複葉、各小葉は廣卵形にして鈍頭、葉脚は心臟形又は鈍形、鋭鋸齒を具ふ。托葉は葉狀なり。花は黃褐色又は深紅色にて、短縮肥厚せる穗狀花序に排列す。我が國、北部の山野に自生す。

うすーべーを 護田鳥尾 (名) うすべう(護田鳥尾)に同じ。御禊行幸服飾部類「貞應元年十月廿三日禊大御記云、平胡簶(中略)鷲羽にてだに候はば、うすべ尾不可有苦」

うすーまる 蹲 (自動) 古語。うずくまる(蹲)に同じ。宇鈴集「蹲(クヤクヤ)ムル」

うすーみ 薄 (名) うすきこと。萬二十「玉も刈るでしがらみ薄(ウスキ)の(略)かも、懸のよどめる我が心かも」

うすーみ 薄身 (名) 魚の腹の方、肉のうすき所。

うすーみそ 薄味噌 (名) 薄くしたる味噌。薄き味噌汁。薩摩歌(ヤヤ)「ざっと薄味噌を鍋炙れと、やかましく」傾城酒呑童子「お汁、世上の人を薄味噌」

うすーみどり 薄綠 (名) 綠のうすき色。夫木「けさ見れば霞の衣ぬぎかへて、山もひとへにうすみどりなり」

うすーみの 薄美濃 (名) うじむし(蛆蟲)の訛り。紙歌加留多「やあ寄るまい寄るまい、うすみ蟲めら」

うすーむし 蛆蟲 (名) うじむし(蛆蟲)の異名。

うすーむらさき 薄紫 (名) 紫の薄き色。藝色。源(藤)「たづぬるにはるけき野邊の露ならば、うす紫やかごとならまし」

うすむらさきーをどし 薄紫縅 (名) 鎧の縅の名。薄紫の色にてをどしたるもの。

うすーめ 碓女 (名) 白を挽く女。記上「雀鳥(碓女(ウスメ))」

うすーめ 薄目 (名) 薄き程。薄き加減。幾分かうすきやう。消島年代記「少し薄目にはやせば、片身で六十人のおかずは覺えが御坐ん す」

うすめ (名) 【動】おすめどり(護田鳥)に同じ。

うすめーのーめん 鈿女面 (名) おたふくめん(阿多福面)に同じ。

うすーもえぎ 薄萌黃 (名) 一染色の名。萌黃色の薄きもの。二襲の色目の名。表は薄青、裏は薄青の少し濃き色。(略)葉にて、うすもえぎなるかみなびの森」夫木「おもかげはしぐれし秋の紅

うすーもとで 薄元手 (名) 少なき資本。天網島「漆漉し程な薄元手で、此の身すがらと張り合ふは慮外千萬」

うすーもの 薄物 (名) 一薄き織物。紗・紹の類。うすはた。秘。孝德紀「其冠之背、垂漆羅(ウスモノ)」宇津保(俊蔭)「御いそぎの料にとて、綾・うすもの・かとり紹など、多く奉れたれば」二ふくさ。今昔「香染の薄物に筥を裹みて」

うすーもみぢ 薄紅葉 (名) 薄きもみぢ色。金葉「もずの居るはじのたちえのうすもみぢ、誰れわが宿の物と見るらん」

うすーもやう 薄模樣 (名) うす紫に染めたる模樣。

うすーもり 薄盛 (名) 卷きずるめの盛りたるもの。庖丁聞書「うすもりといふは、まき餌を盛りたるをいふなり」

うすーやう 薄樣 (名) 一鳥の子紙の薄きもの。うすえふ。宇津保(俊蔭)「事もなく走り書いたる手の、うすやうに書きたる」源(野)「此のたびは、いといとうなよびたる薄やうに、いと美しげに書き給へり」二雁皮紙のうすきもの。三上を濃き色に、下を次第に薄く染むること。あけぼのぞめ。

うすやう-づくり 薄樣造 (名) 一本の矢に、色色の羽を寄せて矧ぐことなるべし。長門平家(山王)「しらのに、うすやうづくりに造りたるかぶら矢を、しげどうの弓にうちくはせて」

うすーやくそく 薄約束 (名) まだ確定せぬ約束。假りの約束。博多小女郎波枕「來月は筑後の客が私を請け出すと、出口の佐渡屋と薄約束」

うすーやなぎ 薄柳 (名) 襲の色目の名。薄朗黃の白ばみたるものなるべし。(部類)春用ふ。雅亮裝束抄「やなぎは常のうすやなぎなり」右京大夫集「うす柳の衣、紅梅のうすぎぬなど著てゐたりしに」

うすーゆき 薄雪 (名) 一少し降り積もりたる雪。源(若菜)「月の曇りなく澄みわたりて、うす雪少しふれる庭のえならぬに」二次條の略。三干草子の一種。玉子を混ぜたる饂飩粉を芳しく燒きて、砂糖をかけたるもの。

うすゆきーこんぶ 薄雪昆布 (名) 薄く削りたる色白き昆布。摂津國大阪の名產。多く吸物に用ふ。うすゆき。

うすゆきーさう (名) 【植】菊科、うすゆきさう屬の多年生草本。莖の高さ一尺。葉は互生にして披針形、下面に白毛密生す。秋季、灰色の花を小頭狀花序に排列して開く。花序は莖頂に簇生す。我が國、各地の山地に自生す。

うすら 薄 (副) 次條の略。清慎公集「はつ雪のうすらにふれる庭のおもは、蹈み見んこともあたらしきかな」

うすーらか 薄 (副) 薄き狀にいふ語。うっすり。うすら。枕「雪のいと高くはあらで、うすらかにふりたるなどは、いとこそをかしけれ」宇治拾遺「うすらかなるかたなの、長やかなるもたるが」

うすーらぐ 薄 (自動) 一次第に薄くなる。うする。永久百首冬「あづまやの軒のたるひのうすらぐは、雪かきわけて春やたつらん」二少なくなる。減じゆく。景行紀「更深人閑(ヤヤ)」源(總)「今はつまじさうすらぎて、御みづからきこえ給ふ枕さ來月は筑後の客が私を請け出す出口の佐渡屋と薄約束」

うすーらーごろも 薄衣 (名) うすぎぬ。好忠百首(夏)「蟬の羽のうすら衣になり行くに、なほ打ちとけぬ山ほととぎす」

うすらーひ 薄氷 (名) 薄きこほり。

うすらひの 薄氷之 (枕) 語路の同じきより、うすきにかけていふ。萬「さほ川に氷りわたれる宇須良婢乃(ウスラヒノ)」うすき心を我が思はなくに」

うする 薄（自動サ）うすらぐ（薄）に同じ。夫木「今日よりは蘆間の水やぬるかもん、春のたちどの氷うすれて」

うするがす 薄（他動サ）薄くす。薄くならしむ。

うするぐ 薄（自動サ）うすらぐ（薄）に同じ。

うす-わた 薄綿（名）著物に綿を薄く入るること。又、その物。宇治拾遺「うすわたのきぬ二つばかりに」

うす-わたいれ 薄綿入（名）わたを薄く入れたるわたいれ。

うす-わらひ 薄笑（名）うすわらふこと。

うす-わらび （名）【植】みやまわらび（深山蕨）の異名。

うす-わらぶ 薄笑（自動バ）すこしわらふ。宇治拾遺「その時、門部府生うすわらひて」

うす-すね 一雨水（名）一あまみづ。王建詩「熟眠雨水饑食蟲、翠毛磬泥金彩落」二暦法、二十四氣の一。陰暦正月中節。陽暦の二月十八日頃。禮記月令「仲春之月、始雨水、桃始華」

うす-ぬ 蹲踞（名）うずくまり居ること。名義抄「蹲踞ウスクマル」

うす-ゑんざ 薄圓座（名）薄きゑんざ。薄きわらふだ。（あつゑんざの對）中務內侍日記「すのこに圓座を敷く。關白・大臣のはあつゑんざ、その外の公卿のはうすゑんざなり」

うす-をとこ 臼男（名）こめつき（米搗）に同じ。うすのもの。伊呂波

う-せい 一雨聲（名）あまおと（雨音）に同じ。杜甫詩「雨聲衝寒盡、日氣射江深」

う-せい 一迂生（代）自己の謙稱。やつがれ。

う-せうし 一右少史（名）官名。せうし（少史）を見よ。

う-せうしゃう 一右少將（名）官名。うこん系のせうしやう（右近衛少將）の略。

う-せうじょう 一右少尉（名）官名。せうじょう（少尉）を見よ。

う-せうと 失人（名）「うせひとの音便」逃げ失せたる人。節用「失人ウセウ」

う-せうべん 一右少辨（名）官名。せうべん（少辨）を見よ。

う-せ-ちゃう 失帳（名）うせびとの姓名を記す帳面。菟原詩話「今、町內にて一人かけおちする時は、その日すぐに知るることにて、或ひは道手を遣すか、或ひはうせ帳につくるか、なんでもすぐに知るるなり」

う-せつ 一雨雪（名）一雨と雪と。二雪降ること。

う-せつ 一迂拙（名）迂濶にして世事に拙きこと。白居易詩「吾道本迂拙、世途多險艱」

う-せつ-りゃう 一雨雪量（名）うりゃう（雨量）を見よ。

う-せ-びと 失人（名）逃げ失せたる人。うせうと。

う-せ-まっかいさま （副）言葉巧みに眞實らしく。口さきうまく。曾根崎心中「德兵衛めがうせまっかいさまに云ふとても、必ず誠にしやるなや」

う-せ-もの 失物（名）失せたる物。盜難にあひて失ひたる品。狂言「穗じてこのうせものと申すは、とっと設きにくいもので御座る」

う-せ-ゆく 失行（自動カ）去りて見えなくなる。次第に失す。萬葉「あきつぬに朝ゐる雲の失去ぬべみ、きのふも今日もなき人おもほゆ」

うせる 失（自動ア）うす（失）の口語。無くなる。死ぬ。行く。來る。居る。狂言「どこへうせる、やることでないぞ」

うせる 飢（他動ア）飢、鼻をもて物をかき動かす。和名十八、玉篇「說文云、齆字仕以鼻動物也」

う-せん （名）【植】ひあうぎ（射干）の異名。

うそ 嘯（名）口をすぼめて聲を出だすこと。口笛。竹取「あるひはうそを吹き、扇を鳴らしなどするに」

うそ 嘘（名）實ならぬ言。虛言。狂言「いつはり言。そらごと。虛言。うそごと。「なんのうそを云ひませうぞ」同禁「雉はうそ、ちや。おのれをたった一矢で射てやらうぞ」

うそ-を-こく うそを語る。うそをつく。卑しめていふ語。

うそ-を-つく うそを語る。うそをいふ。狂言「うそをつかぬ者が云うた」

（諺）うそから出た實 嘘言たまたま實事となること。根無草「神に誓ひ佛に祈り、或は指、或は爪、實に見える嘘あれば、嘘より出づる實あり」

うそ 獺（名）【動】かはをそ（河獺）の異名。

うそ 鷽（名）【動】うそどり（鷽鳥）の略。

うそ-の-こと 鷽琴（名）うそどりの鳴く時の狀、手にて琴を弾くが如きをいふ語。和漢三才圖會「鷽鳴時、隨羣兩脚互舉、如彈琴撥手。故、俚俗稱字曾彈琴」

うそ 薄（接頭）うす（薄）の轉。聖德太子繪傳記「あらうそきびしい」冥途飛脚「忠兵衛は、うそ腹の立ち煩ひて居る處に」

うそ-うそ （副）きょろきょろたづね見廻すさまにいふ語。丹波與作「遂に見ぬ金の開を、うそうそと覗き廻れど」

うそ-がたり 嘘語（名）うそばなし（嘘話）に同じ。

うそ-かへ 鷽替（名）筑前國太宰府天滿宮、及び東京亀井戸天滿宮にて行ふ神事。俚言集覽「筑前の太宰府天滿宮の御社に、毎年正月うそかへといふ事あり。四方の里人、木のえだ其のほかの物をもて、鷽鳥の形をつくり持ちきたり、神前において互ひにとりかへて、その年の吉兆を招くこととせり。文政の比より、江戸亀戸においても、此の祭を興行し始めたり」

うそ-ぎたなし 薄穢（形）なんとなくきたなし。

う-そく 一右側（名）右の方。みぎがは（左側の對）

う-そく 一羽屬（名）羽毛ある動物。卽ち、鳥類の稱。

うそくる （自動ア）狡猾なり。和漢三才圖會「點ウスクル」名義抄

うそ-ごと 嘘言（名）そらごと。いつはりごと。うそ。虛言。

うそ-さびし 薄淋（形）どことなくさびし。菅原傳授手習鑑「うそさびしい不自由なおすまひ」

うそ-さむし 薄寒（形）少し寒し。何となく寒し。そざろ寒し。凡董句「うそさむう蕎めし食ひぬ煤拂」

うそ-じ 嘘字（名）正しからざる字。まちがひたる字。

うそ-つき 嘘吐（名）うそをいふこと。又、其の人。岡姓斎後日合戰「種き孫めに偽り表裏を積古させ、嘘つきに仕立つるか」

うそ-っぱし 嘘言（名）うそ。そらごと。東京の方言。「うそっぱしばかりいふ」

うそ-どり 鷽鳥（名）【動】燕雀類、すべめ科に屬する鳥。嘴短くして黑く、頰及び喉の邊りは紅色にして、全身灰黑色なり。鳴く聲愛すべきにより、よく人家に飼養せらる。うそ。うそひめ。

うそ-なけさ 嘯歎（名）嘯（ウソ）き歎（ナケ）くこと。小聲に歎くこと。名義抄「嘯歎ウソナケキ」

うそ-ねむたし 薄眠（形）そぞろにねむたし。何となくねむたし。續無名抄「迂疎眠度ムウシ」

うそ-の-かは 嘘皮（名）全くのうそ。いつはり。虛言。井筒業平河內通「落としたといふは、うそのかはのだん袋」

うそ-はづかし 薄恥（形）少しはづかし。何となくはづかし。枕狩御本地「しなだれ寄ればしなだれて、うそ恥づかしい雲日中」

うそ-はっぴゃく 嘘八百（名）うそを利種ならべたてていふこと。雅莚師狂集「八百屋商嘘八百、博多小女郎波枕」「各い事の嘘八百、長者經となだらへ、聲張り上げて讀みにけり」

うそ-はなし 嘘話（名）實ならぬ話。うそばたり。うそものがたり。

うそ-ひめ 鷽姫（名）【動】うそどり（鷽鳥）の異名。和漢三才圖會「鷽。或以形麗屋駢曰字曾姫」

うそぶ 嘯（自動ハ）古語。うそむ（嘯）に同じ。字鏡「嘯ウソブク」

うそ-ぶく 嘯（自動カ）口をすぼめて聲を出だす。口笛を吹く。うそむ。うそむく。神代紀下「居濱而嘯之」宇津保「初馬」この螢をつつみながら、うそぶく時に」名義抄「嘯ウソブク」二長く烈しき聲を發す。吼ゆ。「虎、風にうそぶく」

うそ-ぶく 嘯（他動カ）詩歌を吟ず。源氏「紅梅の木のもとに、梅が枝をうそぶきて立ちよるけはひの」

うそ-ふるふ （自動ハ）おぞけだちて身ぶるひす。おぞけふるふ。恐れをののく。女殺油地獄「花車も下女も狼狽へ、小菊を圍うてうぞふるふ」

うそむ 嘯（自動カ）うそぶく（嘯）に同じ。うそむく。皇極紀「鳴嘯ウソブク之聲」字鏡「嘯ウソブク」名義抄「蹙ウソブク」

うそ-むく 嘯（自動カ）前條に同じ。萬「木の根取り、嘯ウソブくのぼり」類本字鏡

うそ-もぞ （名）うぞうむざう（有象無象）に同じ。

うそ-ものがたり 嘘物語（名）うそばなし（嘘話）に同じ。

うそ-ものさみし 薄物淋（形）うそさびし（薄淋）に同じ。根南志具佐「うそものさみしき三途川のほとり」

うそ-やぐ （自動カ）をかしさに堪へかねて、ひそかに笑はんとす。盛衰記「佐殿鼻うそやぎて被思けれども」砂石集「或る念佛者の云ふ、觀音・地藏などいへば、鼻がうそやいでをかしきぞと」

うそ-よごれる 薄汚（自動ル）どことなくよごる。うすぎたなくよごる。心中二枚繪草紙「うそ汚れた八丈縞に花色の羽織、茗荷の丸の紋つけて、編笠著たる男めが」

うそ-ゑむ （自動カ）ほほゑむに同じ。

うた 歌（名）一詩歌を出だし、節をつけて歌ふこと。又、其の調の總稱。多くは音樂に合はせて歌ふ。神樂歌・催馬樂・ひぢ風俗歌・今様・琴歌・琵琶歌の類。其の他種類甚だ多し。神武紀「爲御謠之始」大神宮式「歌長三人」二詩調を整へて詠み綴る一種の文詞。一句を五音又七音とし、五・七・五・七・七の五句合はせて三十一音を常格とす。初めの三句を上の句とし、末の二句を下の句とす。之を短歌といふ。又長歌・旋頭歌・折句・沓冠等の種類ありて、句法もまた種種なり。やまとうた。和歌。萬「雜歌」

うた に ばかり うたふ 絕えず心に思ひて、常に口にうたひ出づるれども、實行の機會に遇はず。後撰夷曲集「歌にばかり歌うて思ひつもりぬる、戀の病の名をやらうさい」諸國噺「十年餘りも過ぎ行けど便りも無く、踊りに見にと唄にばかり唄うて果てぬ」

うた の だい 歌臺（名）歌の詠草を載する臺。艶狩御本地「道上物も歌の臺に、香ひ房を持たせたる山鳥の」

うた の はしら 歌柱（名）歌を書きつけたる柱。書寫山にて、和泉式部が柱に書き附けしより始まれりといへり。和泉式部

うた の はやし 歌林（名）多くある歌。多く集めたる歌。夫木「散りぬべき歌の林の言の葉も、そなたの風をまつと知らなん」

うた の ま 歌間（名）歌をよむ所に定めたる座敷。

うた の むしろ 歌莚（名）歌の會の席。民部卿家歌合「數多の人を勸めて、數多つがひの歌のむしろをのべられたる事あるを」

うた （名）古語。酒宴すること。記紀神代「このみきのみきの、あやに字多のたぬしささ」推古紀「をろがみて仕へまつらむ、宇多ツきまつる」

うた-あはせ 歌合（名）歌人を左右に分かち、詠みたる歌を合はせ、判者を定めて之を批評せしめ、その優劣によりて勝負を決すること。うたくらべ。古今春上「寛平御時、きさいの宮の歌合せの歌」

うだい （名）【植】うだいかんばの略。

うだい 一有待（名）佛語。他の力によりて存するもの。凡夫無常の身。平家「三、燈籠」「綴へ四部の書を鑑みて百療に長ずと云ふ共、爭でか有待の殘身を救療せん」太平記「有待の身、思ふにまかせぬ習ひにて、病に犯され早世仕ること候ひなば」法華經「若得供養、所修事成」

うたい 一宇內（名）「う（宇）は天地四方」あめがした。天下。史記「泰始皇紀」「德、經理宇內」同「席卷天下、包舉宇內」

うだい-かば （名）【植】次條の略。

うだい-かんば （名）【植】樺木ウダイカンバ科、樺木屬の落葉喬木。幹の高さ八九丈、樹皮赭黑色なり。葉は廣橢圓形にて不整の鋸齒み有し、葉脚は心臟形、幼葉は兩面共に毛茸密生す。五月頃帶黃綠色の花を開き、單性、雌雄同株、柔荑花序に排列す。我が國、中部以北の山地に自生す。うだいんば。うだいかば。さいはだ。さいはだかんば。まかば。

うだいし 一右大史（名）官名。たいし（大史）を見よ。

うだいしゃう 一右大將（名）うこん系のたいしやう（右近衛大將）の略。勢語「右大將藤原のつねゆきといふ人いま

そかりけり」

うだいじょう　〔右大丞〕（名）　うだいべん（右大辨）の唐名。

うだいじょう　〔右大尉〕（名）　官名。たいじょう（大尉）を見よ。

うだいじん　〔右大臣〕（名）　官名。職掌、さだいじん（左大臣）に同じ。宇津保物語「右大臣二位藤原朝臣忠雅と書きつけて」

うだいべん　〔右大辨〕（名）　官名。兵部・刑部・大藏・宮内の四省を分かち管ぶ。だいべん（大辨）を見よ。源氏物語「御うしろみだちてつかうまつる、右大辨の子のやうに思はせて」

うたいまつ　鵜松明（名）　雨中、鵜飼をするに用ふる松明。樺の皮を用ふ。

うたいも　（名）【植】つくねいも（佛掌薯）の異名。

うたうた　（副）　とりしまりなく。ぐたぐた。不規律に。西京の方言。

うたうたし　（形ク）　下例の干稻于稻志とある字の字は干の字の誤りにて、干稻于稻志（うたうたし）となるべし。（宣命）萬葉「あらき田のしし田の稻を倉につみて、あな于稻于稻志（うたうたし）、わが懸ふらくは」

うたうたひ　歌歌（名）　巧みに歌をうたふ人。うたびと。天德歌合「橘のよりただなどは、うたうたひにさぶらふ」

うたうら　歌占（名）　歌又は謠物にて、吉凶を判斷すること。十訓抄「惠心僧都金峯山に正しき巫女有りと聞きて、只一人行き向かひ給ひて、心中の所願うらなへとありければ、歌占に、十萬億の國國は海山隔てて遠けれど、心の道の直けれつとめて至るとこそ聞けと、打ち出だしたりければ、啼泣して歸り給ひぬ」謠歌古

「小弓に短冊をつけ、歌占をひき候が」

うたがき　歌垣（名）　〔かき（垣）は人の立ち並べるさまにいふ〕　古昔、男女相集まりて、歌をうたひかはす遊び。かがひ。記上「立二于歌垣一」武烈紀「果之所期、立二歌場一」（欽明紀）梁「歌場（うたがき）」（天武紀）續紀「其服並著青摺細布衣、垂紅長紐、男女相並分行徐進、歌曰（略）每歌曲折、擧袂爲節」常陸風土記「香島郡童子女松原中（略）躍歌之會（略）」

うたかーぐさ　（名）　【植】とりあしようまの異名。本草和名「升麻（字多加久佐之阿久佐名）」

うたがしら　歌頭（名）　續紀十八「天平勝寶二年正月朔、踏歌歌頭（うたがしら）、女孺忍海伊太須、錦部河内、並授二外從五位下一」

うたーかた　泡沫　沫雨（名）　〔一〕水上に浮くあわ。水の沫。和名「沫雨。漂上沫起、若覆盆加太」名義抄「沫（うたかた）」〔二〕はかなく消えやすき事に譬へいふ語。後撰「ふりやめば跡だに見えぬうたかたの、消えてはかなき世をたのむかな」

うたーかた　副　暫しも。すこしの間も。どうしてまあ。萬「營のきなく山吹字多賀多（うたかた）も、君が手ふれずば花ちらめやも」同「あまさかるひなにある我れを字多（うたかた）も、ひもも解きさけておもほすらめや」後撰「おもひ川絶えず流るる水の沫の、うたかた人にあはで消えめや」名義抄「未必（うたかたもの）」

うたかたーぐさ　（名）　【植】とりのあしぐさの異名。

うたかたーぐさ　泡沫草（名）　【植】とりのあしぐさの異名。

うたかたーびと　泡沫人（名）　人の命の泡沫の如くはかなく消えやすきにたとふる語。謠曲「うたかた人は息消えて、歸らぬ水の泡とのみ散りはてし、夕潮の花は再び咲かめやと」

うたーがたり　歌談（名）　歌のものがたり。歌についての話。源氏「すきずきしき歌がたりなども、かたみに聞こえかはさせ給ふついでに」

うたがはし　疑（形シク）　疑ふべくあり。いぶかし。あやし。不審なり。勢語「限りなくうれしく、又うたがはしかりければ」

うたがはしさ　疑（名）　うたがはしくある度合。うたがはしきさま。勢語「もののうたがはしさに詠めるなりけり」

うたがひ　疑（名）　うたがふこと。あやしみ。不審。疑念。萬「あか胸のこゆるうませのしめ結ひし、いもが心は疑（うたがひ）もなし」竹取「何のうたがひかあらん」

うたーがひ　歌貝（名）　歌がるたの一種。古へのほひに倣ひたるものなれば、形はまぐりにかたどりて、將棊の碁の形にしたる厚紙に、歌の上下の句を書き分けて、合はする遊戯。

うたがひーぶかし　疑深（形シク）　疑ふ心多し。

うたがふ　疑（他動ハ四）　思ひたしかならず。心に決し得ず。不審に思ふ。あやしむ。いぶかる。まどふ。まよふ。皇極紀「立倭其詐決矣（うたがふ）」字鏡「疑加乃太」「と、心ありてかかるにやあらんと、思ひうたがひて」

うたがふーらくーは　疑（副）　うたがふには。恐らくは。

うたがほし　（形シク）　一かどの歌らし。枕「つゆとりわきたる方もなくて、さすがに歌がましく、我れはと思へるさまにさいそによみ出で侍らんなん、なき人のためいとほしく侍る」

うだ-かみ　宇陀紙　宇田紙（名）　くずがみ（國栖紙）の異名。

うたーがりた　歌骨牌（名）　次條に同じ。

うたーがるた　歌骨牌（名）　長方形の小札に、和歌の上下の句を分かちて書きたるもの。數人相集まり、下の句の札を散らし置き、上の句を讀むに應じて其の札を拾ひ取り、取りたる札の多少を以て勝負を決す。蜻蛉加留多（中宮定）「いざついまつの歌がるた、いかがあらんと宮へ」ば」

うたざ　抱（名）　古語。うだく（抱）こと。かかへ。靈異記「彼手指大、如二十抱女一」

うだざ　（名）　古語。うだくこと。吼ゆること。記上「天皇畏其宇多岐（うだき）登坐樓上」同「やまししの宇多岐（うだき）かしこみ、我が逃げのぼりし」

うたーさず　歌荒（名）　批藻すべきところある和歌。

うたーざりざりす　（名）　【動】こほろぎ（蟋蟀）の異名。

うたぐ　踞（自動カ変）　古語。あぐらをかく。腰をかく。敏達紀「踞（坐）（うたぐりて）胡床」

うだぐ　（自動カ四）　古語。ほゆ（吼）に同じ。記上「其猪怒而、宇多岐（うだぎ）依來」

うだぐ　抱　懷（他動カ四）　古語。いだく（抱）に同じ。神武紀「天皇獅子之常懷（うだぐ）憤歟」清寒紀「抱（うだく）草香部吉士漢彦脚」名義抄「抱（うだく）草香部吉士漢彦脚」

うだき　おほふ　抱覆　包み覆ふ。仁德紀「蓋（うだきこと）之如天、容之如地」

うたーくさり　歌鎖（名）　文字鎖の類。歌の下の句の初めの語を、次の歌の頭に置きて詠みつづくること。

うたーくせ　歌癖（名）　〔一〕和歌のよみかたに、一種の癖あること。

うたーぐち　歌口（名）　乳母草子「寛平の后宮は常に歌合に御すき候うて（略）その御歌口、いかがぞなど申し傳へ候なり」〔二〕巧みに歌よむこと。〔三〕橫笛・尺八などの、口にあてて吹く穴。蜻蛉「歌加留多「笛竹を、歌口かけて二つに切り折り」

うたーくづ　歌屑（名）　和歌の拙きもの。徒然草「貫之が、紐によるものならくにといへるは、古今集の中の歌くづとかやいひ傳へたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えず」

うたーくらべ　歌比（名）　うたあはせ（歌合）に同じ。

うたぐり　疑（名）　うたぐること。うたがひ。

うたぐる　疑（他動ラ四）　うたがふ（疑）に同じ。傾城買二筋道「うたぐりなんすなら、何でもしいせう」

うたくわい　歌會（名）　人人集まりて歌をよむ會。うたのくわい。續世繼「天德歌合・承曆歌合をこそは、むねとある歌會には、世の末まで思ひて侍るなれ」

うたくわんじん　歌勸進（名）　佛事供養の歌を募り求むること。宗長手記「京都ならば、かのとぶらひの歌勸進をして、今日の跡をもとひ侍らん」

うたげ　宴　讌（名）　〔掌をうちあげの約（宴）〕酒もり。宴會。景行紀「密伺二川上梟帥之宴（うたげ）時一」允恭紀「讌（うたげ）于新室」

うたげーうつ　宴　讌（自動ハ四）　うたげ（宴）をなす。

うたげだーに　（副）　古語。うただけにを見よ。

うたーごころ　歌心（名）　歌の意味。太藏狂言文藏「秋の夜の片割月の片片も、落ちてぞ水の底にすむといふ、この歌心をもって」

うたーことば　歌詞（名）　普通の文章に多く用ひず、專ら韵文に用ふる詞。砂石集「歌詞に、北と云ふ事聞きなれず」

うたーこゑ　歌聲（名）　歌ふ調子。神武紀「音聲（こゑ）亘細」

うたーざいもん　歌祭文（名）　俗曲の一種。始めは山伏より起こりしものにて、錫杖を振り法螺を吹きて、神佛の靈驗などを語りしが、後、小唄を取り交ぜて作り、又三味線に合はせてうたひたるもの。一說、中古の說經淨瑠璃の一變せしもの。さいもん。賀古教信七墓廻「櫻蔵しの歌祭文、一錢とこそ申しけれ」

うたーざうし　歌草紙（名）　歌の書物。歌書。諸國物語「日ごろそなたが、歌草紙を好んで見らるるが」

うたざはーぶし　歌澤節（名）　安政二年、歌澤大和大掾の創めたる端唄の歌曲。

うたざま　歌樣（名）　歌のすがた。和歌の體裁。落書鰈「冷泉黃門爲尹卿歌ざまの事」

うたーし　歌師（名）　官名。雅樂寮に屬し、歌人・歌女を教ふることを掌る。

うたーしゃうるり　歌淨瑠璃（名）　俗曲の一種。長唄に淨瑠璃の節を混じたるもの。

うだーしゃくやく　（名）　【植】やましゃくやく（草芍藥）の異名。

うたず　（自動サ四）　馬にて乘り行く。曾我扇八景「手綱かいくり、しづしづと、あたりを拂ってうたせ行く」

うたーずき　歌好（名）　〔一〕和歌を詠むことを好むこと。又、其の人。〔二〕鏑唄などを好みてうたふこと。又、其の人。

うたせーあみ　打網（名）　引網の一種。囊狀にして、兩方に袖網を附けたるもの。海底に沈め、船にて曳く。

うたーぜき　歌闘（名）　歌をよまされば通さじとする闘。太藏狂言伊文「いかさま、歌闘ぢやによって苦しうあるまい。急いでするえ」

うたーせっさゃう　歌說經（名）　せっきゃう（說經）を見よ。一代男「江尻宿の處に、たれとは知らず、頌かくして、つれ節に歌說經、あはれに聞こゆ」

うたーせんべい　歌煎餅（名）　歌がるたの形の煎餅。

うたーそらごと　歌空事（名）　歌に想像の事多きこと。野守鏡「常のたとへにも、まことなき事をば歌そらごととこそ申し侍るめれ」

うたた　轉（副）〔一〕うたてに同じ。古今傳說「花と見て折らん とすれば女郎花、うたたあるさまの名にこそありけれ」〔二〕いよいよ。猶一層。〔三〕そぞろ。何となく。「うたた同情の感に堪へず」

うただけーに　（副）　古語。古事記の氣陀は、文字の顚倒したるにて、轉宴（うたげ）にの義にて、いよいよ盛んにうたげすることなるべし。古事記「一說、字多氣多陀邇の誤脫にて、宴直（うたげ）にの義、宴（うたげ）の席にて直目（ただめ）になるべし。和名「又一說、轉氣（うたけ）だにになるべし。うたてしきまでにの義なるべし」

うたーたね　轉寐（名）　かりね。ころびね。古今「うたたねに慰しき人を見てしより、夢てふものはたのみそめてき」

うたたねーまくら　轉寐枕（名）　かりねの枕。かりね。堀河波鼓「轉寐枕かりそめの緣の端また因果の端、うたてかりける契りなり」

うたち　桙（名）　梁（うだつ）の上に立つる短き柱。うだつ。和名「桙。爾雅云、梁上桙、謂之桙（うたち）」名義抄「桙（うたち）」

うたちーがあがらぬ　常に壓しつけられてあり。浮かぶ瀨がない。うだつがあがらぬ。

うだつ　桙（名）　前條の語の訛り。下學集「宇立（うだつ）」

うたつーがあがらぬ　うだちがあがらぬに同じ。うだち（桙）の條を見よ。

うたーづかさ　雅樂寮（名）　うたれう（雅樂寮）に同じ。源氏物語「うたづかさの人召して、舟の樂せらる」

うたつがはし　（形シク）　うたがはし（疑）に同じ。

うだつーや　（名）　上總・遠江にて、地を掘り柱を立てて、上もいとかりそめにする賤が家の稱。

うたーづゑ　歌杖（名）　詠歌の考案中、あごを安ずるに用ふるもの。笏・扇の類。

うたて　（副）〔一〕轉（うたた）り邇みていよいよ甚しく。萬「いつはなも慰びありとはあらねども、得田直（うたて）このごろ慰のしげきも」〔二〕尋常ならずあやしく。異樣なる狀にて。記上「字多旦（うたて）物云王子」武烈紀「說二奇偉（うたてなる）之戲一」宇津保「其の藏のめぐりに、うたてあるもの野べはらひ捨てさせて」同上「なるのやうにつち動く。いとうたて、おどろおどろしかりければ」〔三〕つれなく。情なく。あまりに。

つらく。眼はしく。竹取「うたてあるぬしのみもとに仕へまつりて、すずろなる死にをすべかめる」【四】不覺なり。笑止なり。謠曲「うたてやな、此の葛城山の雪の中に、ゆひ集めたる木木の梢を、しもとしろしめされぬは、御心なきよなら」同謠曲「うたてやな、父こそ變はり給ふとも母が心の變はるべきか」

うたて けに 轉 秋といへば心ぜいたき、宇多丑家爾 花になそへて見まくほりかも」

うだて 税 (名) 古語。うだち(税)に同じ。仁德紀「摘・梁・柱・榎 酒醴」

うたて-け (副) 斧酒に變はりたるさまにいふ語。あやしげ。枕「かまつかの花 中略 名ぞうたてげなる」大鏡序「こよなく年老い、うたてげなるおきな二人、おうなと來あひて」

うたて-さ (名) うたてきこと。うたてき度合。著聞「思ふ事なげにね給へる、うたてさよ」七十一番歌合「けさはまだ商ひなきうたてさよ」砂石集「道心の無きがうたてさに、面ほむかへたうもなきなり」

うたて-し (形) 【一】甚し。あまりなり。つれなし。情なし。薄情なり。宇津保 俊蔭「常に思ひ歎くと聞き侍るは、いとうたてくなん」著聞「強ちに利を求むる御ふるまひ、うたてし」【二】不覺なり。笑止なり。謠曲「あらうたてしや。津の國の葦の濱を來て見ればとは、御言葉ともおぼえぬものかな」

うたて-し (形) 前條の轉。撰集抄「此のふるまひをし侍ること、先の世の宿執のほど思ひ知られ侍りて、うたてしく覺え侍りしか」光經集「さしもあかき月をも見ぬ、うたてしきよし申されて」蜉太平記「御置文 中略 おそらくはうたてしき御事や」

うたて-ひと (名) うたてき人。いとはしき人。伊勢集「秋の頃、うたて人の物いひけるに」

うた-な (名) 【植】のだけ(前胡)の異名。本草和名「前胡 中略 名乃多乃比利」

うた-ながめ 歌詠 (名) うたをよむこと。謠詠。夫木「月の夜の聲も細めに窟あけて、心をやれる歌ながめかな」

うた-なし (形) 疑ひ無し。著聞「天の川みぎはうた(こと)なくまさるかな、いかにしつらん鵲の橋」

うた-ぬし 歌主 (名) 歌の作者。土佐日記「このうたぬし、又まからずといひてたちぬ」

うた-ねぶつ 歌念佛 (名) 次條に同じ。

うた-ねんぶつ 歌念佛 (名) 【一】佛を つけて歌ふ念佛。【二】俗曲の一種。伏鉦に合はせ、念佛の節にて歌ふもの。元祿の頃より享保の末まで多く行はる。井筒業平河内通 中略 歌念佛人をすすめの歌念佛、修行の僧に身をやつし」

うた-の-かみ 雅樂頭 (名) 雅樂寮の長官。宇津保 嵯峨「うたのかみ・ごんのかみ、きんん持たせたり」

うた-の-くわい 歌會 (名) うたくわい(歌會)に同じ。

うた-の-さくわん 雅樂屬 (名) 雅樂寮の主典。

うた-の-じょう 雅樂允 (名) 雅樂寮の判官。

うた-の-すけ 雅樂助 (名) 雅樂寮の次官。

うた-の-つかさ 雅樂寮 (名) うたれう(雅樂寮)に同じ。宇津保 春日「うたのつかさの樂の、近くきこゆるかな」

うたばうふう (名) 【植】ばうふう(防風)の異名。

うたひ 謠 (名) 能に用ふる歌曲。又、其の歌曲を節つけて歌ふこと。能樂に合はせず、單獨に歌ふのみなるを素謠(スウタ)と、一曲の首より尾まで全く歌ふを番謠(バンウタ)と、一節のみを謠ふを小謠(コウタ)といふ。「年中定例記」觀世大夫・同四郎、兩人祇候いたし、うたひを申し悼ひし也」

うたひ-いる 歌入 (他動下) うたひて中へ吹きこむ。狂言「石のからうとの蓋のぶつとするほど、うたひ入れ」

うたひ-がしら 謠頭 (名) 能樂にて、謠ひ出だす合圖の大鼓・小鼓の頭の稱。

うたひ-ぐくに 歌比丘尼 (名) 歌念佛をうたふ尼。後、ひそかに色を賣るに至れり。五十年忌歌念佛「節は哀れに身は伊達に、歌は念佛の歌比久尼」殘口之記「歌比久尼。昔は脇挾みし文匣に卷物入れて地獄の繪說きし 中略 年龍りの戻りに烏牛王配りて、熊野權現の事觸めきたりしが、いつのほどよりか、隱し白粉・薄紅つけて、附鬢帽子に帶幅廣く成りし」

うたひ-こう 謠講 (名) 人人集まりて謠をうたふ會。謠仲間の寄合ひ。緋縮緬卯月紅葉「そべそべと著飾って、謠講の俳諧の」

うたひ-じゃうるり 唄淨瑠璃 (名) 祭文に節をつけて語ること。

うたひ-そめ 謠初 (名) 新年に、殿中にて、始めて謠を催す式。年中定例記「四日 中略 應仁之亂前までは、今日うたひぞめとて 中略 觀世大夫・同四郎、兩人祇候致し、謠を申し候ひし也」

うたひ-だし 歌出 (名) 初めてうたをうたふこと。又、其の人。天德歌合「左のうたひだしは、右京大夫さねとし」

うたひて 歌人 (名) 次條に同じ。

うたひ-びと 歌人 (名) 【一】雅樂寮に屬して國風を謠ふもの。【二】和歌を詠む人。うたよみ。歌人(カジン)。拾遺 雜三「三條太政大臣家にて歌人召し集めて、あまたの題よませ侍りけるに」【三】歌を巧みにうたふ人。うたひて。うたうたひ。萬葉「歌人(ウタビト)とわを召すらめや、笛吹とわを召すらめや」

うたひ-どめ 謠止 (名) 狂言の終りを、謠の文句にて結ぶこと。

うたひ-どり 歌鳥 (名) 【動】ほととぎす(子規)の異名。

うたひ-ひろける 歌弘 (他動下) うたひて廣く世に流布せしむ。狂言「洛中にまでうたひひろげったこと、いよいよおのれは憎いやつの」

うたひ-ぶし 謠節 (名) うたひのふし。うたひ。狂言「私は吃て物がゆひにくうございます。うたひぶしでいへば申しようござる」

うたひ-ぼん 謠本 (名) 謠曲の書。

うたひ-め 歌姫 (名) 歌を巧みにうたふ女。

うたひ-め 歌女 (名) うため。藝妓。歌妓。

うたひ-もの 歌物 (名) 節をつけて歌ふべき詞曲の總稱。神樂・催馬樂・謠曲等の類。歌曲。國姓爺 後日合戰「人「押への島臺・大盃、それより亂酒・謠物」

うたふ 歌 (他動四) 【一】聲に節をつけて歌を唱ふ。節をつけて「その鼓曰にたてて、字多比(ウタヒ)つつかみけれかも」夫木「天の戸をおし明方にうたふなり、こや營の朝倉の聲」字鏡集「詠(ナガウタフ)、歌(ウタフ)」【二】歌を作りて吟ず。詠ず。土佐日記「わらはあり、其れがうたふ歌」字鏡集「賦(ウタフ)」

うたふ 訴 (他動四) うったふ(訴)に同じ。萬葉「このごろの我が戀力たばらずは、みさとつかさに出でて將訴(ウタフ)」砂石集「はては地頭にうたふるに」

うた-ぶくろ 歌袋 (名) 【一】蛙の咽のふくれあがる處。夫木「いたづらに鳴くや蛙の歌袋、おろかなるにも思ひいればや」【二】懷紙にて作り、水引を引きとほして、短冊・詠草・反故など入るるもの。錦・白綾にても作るといふ。

うたへ 訴 (名) うたふ訴ること。うったへ。訴訟。推古紀「絕・饒奏・欲、明辨訴訟(ウタヘ)」慶雲紀「刑部卿下」

うたへ-ただすつかさ 刑官 (名) 前條に同じ。天武紀下「直廣肆阿倍久努朝臣麻呂、誄刑官(ウタヘタダスツカサ)事」

うたへ-の-つかさ 刑部省 (名) 和名五「刑部省 字多倍乃豆加佐」

うたへ-ぶみ 訴文 (名) 訴ふる旨を記したる文書。訴狀。續古事談「高き机の上にうたへ(れ)ぶみの箱といふ物を置かれたりければ、あやしの民・百姓まで申文をもて參りて、この箱に入る」

うた-まくら 歌枕 (名) 〔歌人の枕言にする義なりとも、又和歌の枕言に詠み入るる義ともいふ〕めいしょ(名所)。などころ。源玉鬘「萬のさうし・歌枕、よくあない見盡くして、其の内のことばをとり出づるに」古事談「一條院御時 中略 實方をば歌枕見てまゐれとて、被任陸奥守」

うた-まひ 歌舞 (名) 歌ひ又舞ふこと。又、其の人。允恭紀「樂(ウタマヒ)咎」

うたまひ-の-つかさ (名) 【一】うたれう(雅樂寮)に同じ。神武紀「樂府(ウタマヒツカサ)」和名五「雅樂寮 字多豆加佐」【二】樂人。伶人。樂官。持統紀「樂官(ノウタマヒツカサ)奏・樂」

うたまひ-びと 歌舞人 (名) 樂人。伶人。允恭紀「貢上調船及、種種樂人(ウタマヒビト)八十」

うた-め 歌女 (名) 【一】雅樂寮に屬して古風を謠ふもの。雅樂寮式「凡諸節會日 中略 將・寮屬以上及雜樂歌人・歌女等」【二】歌を巧みにうたふ女。藝妓。歌妓。名義抄「倡女(ウタメ)」著聞「左右歌女・舞妓、なほ興遊にたへず」

うだ-もの 宇多物 (名) 越中國の刀工、宇多一派の銘へたる刀劍。

うた-ものがたり 歌物語 (名) 和歌につきての話。榮華 御裳濯「故殿の歌物語を書き、御調度をしまうけて待ち奉り給ひしかど」

うた-よみ 歌讀 (名) 【一】和歌を作り詠むこと。又、その人。神武紀「爲御謠(ウタヨミ)之 遠近云字」【二】和歌を巧みに作る人。宇津保 中務「この母みこは昔名高かりける姫、手かき・歌よみなり」

うた-よみ-どり 歌讀鳥 (名) 〔古今集の序に、花に鳴く鶯 中略 何か歌をよまざりけるとあるより出づ〕【動】うぐひす(鶯)の異名。

うだ-よもぎ (名) 【植】むかしよもぎ(飛蓬)の異名。

うだる 茄 (自動四) ゆだる(茹)の訛り。

うた-れう 雅樂寮 (名) 役所の名。治部省の被管にて、舞樂・音曲のことを掌るところ。頭・助・允・屬の職員を置く。うたまひのつかさ。うたづかさ。うたのつかさ。

うた-れて 被討手 (名) 討たるがはの人。賀古敎信七箇題「今日御邊に出合ふこと、討ち手よりなほ討たれ手の業が身の幸ひ」

うた-ろぎ 歌論議 (名) 歌の可否・善惡などにつきて論議すること。うたろんぎ。大鏡「殿上にうたろぎといふこと出でできて」

うた-ろんぎ 歌論議 (名) 前條に同じ。

うた-ゑ 歌繪 (名) 文字と畫とを交じへて、一首の歌をあらはしたるもの。一說、歌を書くべき料の畫。讃をすべきための畫。後撰 雜四「みちの國へまかりける人に、屏てうじて歌繪にかかせ侍りける」榮華 御裳濯「弘高が歌繪かきたる雙紙に、行成の君歌かきたるなど」

うた-を 歌男 (名) 歌をよくうたふ男。天武紀上「歌男(ウタヲ)・歌女」

うち 内 (名) 【一】物事の現(ウツ)ならぬ方。うら。〔そと又ほかの對〕齊明紀「山越えて海わたるとも、面白きいまきの禹知(ウチ)は忘らゆまじに」萬葉「大宮の宇知(ウチ)にもとにも光るまで、ふらす白雪見れどあかぬかも」【二】なか。なかま。萬葉「くれなゐ色にほひたるおもわの宇知(ウチ)に、青柳の細き眉ねを乏みまがり」古今序「古へよりかく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞ廣まりける」宇津保 藤原「己れをばそのうちに入れられぬ、つらしと聞こえんとぞや」【三】あひだ。ま(間)。あひ。萬葉「遠くあらば、七日の宇知(ウチ)は過ぎめやも」土佐日記「とかくしつつのみしるうちに、夜ふけぬ」宇津保 藤原「さる御せごと無きうちに」【四】內裏。禁中。禁襄。宇津保 俊蔭「親なんおはする。片時お前も放ち給はず、內へ參るほどだに、うしろめたきものにおぼしたれば」【五】主上の敬稱。うちのうへ。宇津保 俊蔭「よるひる、內・春宮にさぶらひて」同 藤原「內の御使に、水の尾といふ所にまうでて」【六】我がいへ。自宅。隆信集「うつうちなれど、ふみに書きつけて云ひ遣したるを」狂言「いや內かと思へば、樣子がちがうたは」【七】家。家屋。「奇麗なうちがある」【八】妻又は夫の稱。【九】閨中。閨房。閨門。內政。「內が治らぬ」「內を好む」「立の皇后手自香皇女、脩敎于內(コウヲウ)」【十】我が方さま。我が國。みかた。〔他人・外國などの對〕保元紀「外には三國の難あり、內には姦臣樂まれり」【十一】心。心中。保元 中略 「宿善內に催し、善緣外に顯れて」狂言「思ひ內にあれば色外にあらはる」【十二】佛經。內典。〔儒敎を外といふ對〕平家「敎」「內には破戒無慚の譏を招くのみならず」【十三】よりした。以內。以下。宇津保「年廿歳よりうちの人十人」宇治拾遺「一町がうちに寄り來たり」

うち を そと に する 游蕩などのため、外出がちなり。

〔誡〕內に省みてやましからず 我が心に省み問ひて、愧づる所なし。論語 顏淵「內省不疚、夫何憂何懼」

〔誡〕內慶がりのそとすわり 內に在りては強く、外に出でては弱き譬へ。浮世風呂「なんの、內慶がりの外すわりよ。おいねえ藤辨慶だっちゃあねえ」

うち 打 (名) 【一】打つこと。殺すこと。狂言「御意で討ちに來た、覺悟せい」【二】砧にて絹を打ちて、光澤を出だすこと。後世は板引にかへたれども、なほ古稱を用ふ。

うち 鞭 (名) 古語。むち(鞭)に同じ。

宇鏡「鞦字恕」

うち (名) 古語。うつつ(現)に同じ。現在。萬三たまきはる内の限りは、たひらけくやすくもあらむを」

うち (名) 鷹の糞(倭訓栞)

うち を つく 鷹、糞をなす。

うち (名) 【植】あぶらな(蕓薹)の異名。

うち-ひと 有智 (名) 智慧あること。又、その人。(無智の對) 大原問答青葉笛「その外、聽問の有智・無智、數を知らずなみ居たり」

うち 内 (代) 我れ。おのれ。

うち 打 (接頭) 動詞に冠して、やや其の意を強くし、或ひは語調を整ふる語。記上「字知波(ウチシラハ)すやがはへなす」萬三「有知(ウチ)なびく春の柳と我が宿の梅の花とを、いかにか分かむ」竹取「手にうち入れて」勞語「人知れぬわが通ひぢの關守は、よひよひごとにうちもねなんな」

うち 打 (接尾) 名詞の下に屬きて、其の所作を表はす語。「耳うちする」宇津保(俊蔭)「殿のうちにとかくうちして、つかふべき物はありや」大鏡「物おぼえぬ名簿うちして」

うぢ 氏 姓 (名) 家の系統に從ひて、他と區別する爲めに稱する名。家の名稱。めうじ。萬三「おほともの宇治(ウヂ)と、名に負へるますらをのとも」民法(第七十六「戸主及ひ家族は其家の氏を稱す」)

(諺) 氏なくして玉の輿 女は家系卑しくとも容姿美しければ、貴人の寵を得て富貴の身となることを得ることの譬へ。日本武尊吾妻鏡「下主・下郎の賤の女でも、女は氏なうて玉の輿」

(諺) 氏より育ち 家柄より教育の方重きこと。丹波與作「ほんに氏より育ちぞと、又さめざめと泣きけるが」

うちあか 内赤 (名) 衣服の、赤き裏を附けたるもの。醒醒笑「うち赤の小袖」

うちあかす 打明 (他動四) 包み隱さず語る。うちあく。

うちあく 打明 (他動下二) 一あく(明)に同じ。又、其の意を強めていふ。二前條に同じ。

うちあぐ 打上 (他動下二) 一あぐ(上)に同じ。又、其の意を強めていふ。宇治拾遺「弓をさしかざして、しばしありてうちあげたれば」狂言「宮草「おくしやらぬ人は、向うな島へうちあげておきまする」」二打ちて上ぐ。三打つ。顯宗紀「手掌拶亮拍上(ウチアゲ)腸」四うたげ(宴)をなす。酒宴をなす。竹取「此のほど三日、うちあげ遊ぶ」五摩を張りあぐ。榮華(殿暦)「祝ひの和歌一つつかうまつるべしと仰せらるるまに、宵のまにと打ちあげ申したれば」六爲し終ふ。「興行をうちあぐ」七あげて與ふ。源氏冷泉節下「毒害してくれうならば、金銀・財寶、庫一箇所を打ち上げんとの頼みなり」

うちあぐる (枕) 「うちは(接頭)帆はあぐるものなれば、ほにかけていふ。古義萬三「打上(ウチアゲ)方(ウヘ)の河原の青柳は、今は春べとなりにけるかも」

うちあげ 内揚 (名) 一紅揚を内がはにすること(そとあげの對) 二内金をいること。浮世親仁氣質三「春になって、せめて百目内あげすれば善いが」

うちあげ 打上 (名) 一打ち上ぐること。打ち上げたる處。夫木「みさごゐる濱のまさごのうちあげに、波ぎは見えて寄るもくづかな」二射藝の語。徒立にて草鹿(ウチアゲ)・圓物(マヒマト)など射る時、弓を引かんとて弓を持ち上ぐること。三うちあげすだれ(打上簾)の略。四うちあげ筒にて打ち上ぐるもの。(仕掛花火の對)

うちあげ-あじろごし 打上網代腰 (名) 乘物の一種。打上簾の制にて、腰に網代を張りたるもの。

うちあげ-こしくろ 打上腰黑 (名) 乘物の一種。打上簾の制にて腰を黑塗とせるもの。

うちあげ-すだれ 打上簾 (名) 乘物の一種。左右に引戸なく、簾を上げて出入するもの。江戸時代、腰網代に次ぐ格とす。うちあげ。

うちあげ-ばなし 打明話 (名) うちあけて話すこと。腹藏なきはなし。

うちあける 打明 (他動下二) うちあく(打明)の口語。

うちあける 打上 (他動下二) うちあぐ(打上)の口語。

うちあこめ 打袖 (名) うちぎぬ(打衣)に同じ。著聞三「くれなゐのうちあこめ、御ひとへおくり出だされけり」

うちあつ 打當 (他動四) 打ちてあたらす。宇治拾遺三「數多の中にたびたび打てば、おのづからうちあてられて、え飛ばぬあり」

うちあてる 打當 (他動下一) 前條の口語。

うちあはす 打合 (他動四) 一あはす(合)に同じ。又、やや其の意を強めていふ。源若菜「琴に」うちあはせたる拍子も」二互ひに打ち合ふ。三預め相談し置く。

うちあはせ 打袷 (名) うちぎぬ(打衣)に同じ。

うちあはせ 宇津保(俊蔭)「紅の黑むまで濃き唐綾のうちあはせ一かさね」

うちあはせ 打合 (名) 一打ち合はすること。二預め相談しおくこと。下相談。「仕事の打合せ」

うちあはせ 内應 (名) ないおう(内應)に同じ。内通。欽明紀「不爲内應(ウチアハセ)孫國難小、未必亡也」

うちあはせ 内合 (名) ふともも(太股)に同じ。和名「腿(ウチアハセ)」名義抄「股(ウチアハセ)」

うちあはせ-のもち 打合餅 (名) 婚禮の時、二白の餅を一白に寄せて搗きあはすること。又、そのもの。諸禮日記「奥の通る妻戸の前左右に、男女兩人づつにて、左右に白を置きて餅を搗いてあるべし。其の間を奥を通し、左方の餅を右方にうつし、一つに搗き合はするを打合はせの餅といふ」

うちあはせる 打合 (他動下一) うちあはす(打合)の口語。

うちあはび 打鮑 (名) のしあはび(熨斗鮑)に同じ。うちあふび。著聞三「白き米をかはらけにいれたると、うちあはびとををしきにいれて、とり寄せすすむれば」

うちあひ 打合 (名) 一互ひに打ち合ふこと。たたかひ。ぶちあひ。二銃砲などを互ひに放ちあふこと。

うちあふ 打合 (自動四) 一合ふ。よく整ふ。源若菜「事うちあひ、めやすき御あはひとおぼさる」同夕顔「粥などいそぎ參らせたれど、とりつゞ御まかなひうちあはず」二互ひに相打つ。たたかふ。諸鉄砲「思ふ敵と寄りあひ、うちあひて」三銃砲などを互ひに放つ。

うちあふび 打鮑 (名) うちあはび(打鮑)に同じ。大草相傳聞書「うちあふびの前の二番目を、御口にあて」

うちあぶみ 内鐙 (名) りやうあぶみ(兩鐙)を見よ。

うあぶみをあはす(合兩鐙)に同じ。りやうあぶみ(兩鐙)の條を見よ。盛衰記(第五十字 加賀先陣)「馬に石突せさすな。當に内鐙を合はせよ」

うちあみ 打網 (名) とあみ(投網)に同じ。蜻蛉日記上「しりなる人人は落ちぬばかりのぞきて、うちあみするほどに」

うちあみ-ぶね 打網船 (名) とあみぶね(投網船)に同じ。

うちあや 打綾 (名) 打ちてつやを出だしたる綾織物。宇津保(蔵開)「かめに練りたるうちあや、一つには練衣いとよき口もとまで疊み入れ」

うちあり 打有 (自動四) 有り。普通にてあり。ありふれたるさまなり。宇治拾遺三「是れはうちある矢にもあらざりけり。神箭なりけり」十訓三「大かたうちあらん人も、情を先とすべし」徒然草「うちある調度も、昔覺えてやすらかなるこそ」

うちいき 内息 (名) 息を吐かずして、内に吸ひこむこと。

うちいけ 内池 (名) 屋敷うちの小さき池。

(諺) 内池の蛙 せいていのかはづ(井底蛙)に同じ。せいてい(井底)の條を見よ。

うちいし 打石 (名) うちならし(打鳴)に同じ。蓼。宇鏡基「蓼(ウチイシ)」

うちいしなご (名) 足の内方にあるくるぶし。上總國の方言。物類(品)呼(ウチイシナゴ)(そといしなごの對)

うちいた 打板 (名) 一廊中の、打橋など渡したる處にある歩板(イタバシ)。極めて輕便なる一枚の假橋。(家屋雜考) 二牛車に乘り降りする踏めに、車寄の板敷より車に渡す板。三鷹の糞を受くる板。丸く黑塗にて、薄きへりあるもの。四地上にすわる時に敷く厚板。續古事談「小庭にうち板をしきて、火をおこす」伊呂波字類「打板(イタ)結松(ニ)」に同じ。五陣中にて、敷皮の代はりに用ふる板。裏に棧(サン)をつけて足とす。佐竹宗三聞書「打板の長さ・廣さ、敷皮にしたがひてすべきなり」

うちいた の ざ 打板 座 「今日右少史小槻永業初參(大内參議)例(ウチ)打板(ウチイタ)」

(たいちう)

うちいだす 打出 (他動四) 一うちいづ(打出)(他動四)に同じ。枕三「露はわかれの涙なるべしといふことを、頭中將うちいだし給へれば」榮華若菊「きぬのつま重なりてうちいだしたるは、色色の錦を枕ざうしに作りてうち置きたらんやうなり」

うちいづ 打出 (自動下二) 一出づ。其の意を強めていふ。古今春上「谷風にとくる氷のひまごとに、うちいづる波や春の初花」二兵家の語。味方の人數進み出づ。

うちいづ 打出 (他動下二) 一いだす(出)に同じ。宇津保(俊蔭)「濃き鈍色の御ぞ一かさね、黑つるばみの御こうちきうちいでて、見せ奉り給へり」二口に出だして語る。言ひ出づ。竹取「さきざきも申さんと思ひしかども中略さのみやはとて、打ち出で侍りぬるぞ」源若太「はづかしげにしづまりたれば、うちいでにくし」三高聲に讀み出づ。聲を上げて唱ふ。枕六「其の寺の佛經を、いとあらあらしう高くうち出でてよみたるに」

うちいで 打出 (名) 一打ち出づること。打ち出だすこと。七十一番歌合「はくうち。南錄にてうちいでわろき」二次條の略。雅亮裝束抄三「うちいでには、いかさまにも、えび染の織物のからぎぬなり」

うちいで-の-さぬ 打出衣 (名) 牛車の中、又は簾の下などより、こぼれ出でたる女房の衣。うちいで。うちで。行宗集「千歳こそ齊きの宮のいつくしく、うちいでのきぬの色に知らるる」

うちいと 打絲 (名) 打ちて組みたる絲。くみいと。狂言「思ふ敵をうち絲や」

うちいふ 打言 (他動四) 言ふ。枕二「いかにわびしき心地しけんと、うちいふ程に」同三「なほこそこはがり給はめなど、うちいひたるよ」

うちいり 討入 (名) 討ち入ること。攻めこむこと。襲ひ入ること。

うちいり 内入 (名) 一なかに入り來ること。浦島年代記「遥御と呼ばはり聞の大臣、諸宗召し連れ、内入り惡しき濟まぬ額」二まうけ。收入。三負債のうち、一部分を償ふこと。

うちいる 討入 (自動四) 攻め入る。襲ひかかる。

うちいる 打入 (自動下二) 兵家の語。味方の人數、引き上ぐ。

うちいる 打入 (他動下二) 一入る。納む。竹取「三寸ばかりなる人中略手にうちいれて家にもて來ぬ」二傳奏を打ちなどしてつぎこむ。宇津保(忠こそ)「心よろしからず、ばくちふかうの者にて、身の裝束などは皆うちいれて、せん方なくこもりぬたるを」宇治拾遺三「二千度參りつること、某に變六にうちいれつと書きて」

うち-ちう 宇宙 (名) 一天地四方と古往今來と。天地古今。淮南子(覽冥)「四方上下謂之宇、往古來今謂之宙」二轉じて、世界又は天地開。三英 Universe) 總べて、ありとあらゆる存在物の一切を包括せる空間。

うちう-かいびゃくろん 宇宙開闢論 (英 Cosmogony) (名) 宇宙の起原・創造を論ずる學。宇宙創成論。世界開闢論。

うちう-さうせいろん 宇宙創成論 (英 Cosmogony) (名) 前條に同じ。

うちう-しんけう 宇宙神教 (名) 其皆教の一派。神は萬有の父なれば、宇宙の生靈は悉皆救濟を受くべしと主張するもの。

うち-うち 内内 (名) 一家の内。竹取「やの上には中略うちうちのしつらひには、いふべくもあらぬ綾おりものに繪をかきて、開毎にはりたり」二おもてだたぬこと。うちわ。ないない。宇津保(俊蔭上)「うちうちにきこえ給ふを」源桐「内内に思ふ給ふるさまを奏し給へ」同宿木「細かなる内内の事までは、いかがはおぼしよらん」

うちうち (副) ためらひて進退しかぬる狀にいふ語。ぐづぐづ。もづもづ。うじうじ。躊躇。逡巡。女殺油地獄「出てうせ出てうせ、うちうちひろがば町中よせて迫ひだす」

うち-うど 氏人 (名) うぢびと(氏人)の音便。諸乘「薩たのまんと藤原や、氏うどよりて植ゑし木の」

うち-うま 打馬 (名) 乘り行く馬。東鑑(寛喜二年六月四日)「山内藤内左衛門尉通重、不相並于鎌田兵衛尉行俊、而引下打馬」

うち-うまや 内厩 (名) 武家屋敷などの、門内に建てたる厩。太平記(第九、高師直)「七條東洞院より俄かに失火出て來て、財寶一つも殘らず、内厩の馬どもまでも多く燒け失せぬ」

うち-うみ 内海 (名) 一みづうみ(湖)に同じ。伊呂波字類「湖(ウチウミ)」二海水の、陸と陸との間に入りこみたる處。いりうみ。いりえ。灣。ないかい(内海)。

うちう-うら 内裏（名）一うちわ（團扇）に同じ。二衣の裏につくる布帛。雅亮装束抄「うちうらつけたるをしきて、とぢつけたり」

うちう-うん 宇宙論（英Cosmology）（名）宇宙の起原・構造・形態・性質・秩序・運動等の根本原理に關する論。

うちうろん-てきしょうめい 宇宙論的證明（英Cosmological proof on argument）（名）宇宙の存在を基とし、之に因果律を應用して神の存在を證明する原因を有し、此の原因は更に其の原因を有す。かく原因の連鎖を追求して止まずんば、遂に最終原因に達すべし。然るに此の原因は最終なるが故に、其れ以上更に原因あるべからず。由りてこは無制約の原因、即ち神なり。故に神は存在するものなりとなす證明。

うちう-え 打柄（名）竹を削り合はせて、せんだん卷にしたる槍の柄。甲陽軍鑑「長柄・持槍共、可爲打柄之事」

うちう-えする 打寄（枕）うちよする（打寄）に同じ。萬「わぎめこと二人わが見し、宇知江須流（ウチエスル）駿河のねらは、くふしくめあるか」

うちう-えだ 打枝（名）金銀にて鍛ひて造りたる造花の枝。廣蓋にのせたる小袖のおさへに用ふる具。うちおき。嫁入記「うちおきとて、かねにて作り、花形など透かしたるものなり。うちえだともいふ。廣蓋のきる物の上のおそひの爲めなり」

うちう-えび 打海老（名）料理の一種。庖丁聞書「打海老の吸物とは、なまにて皮をむき、鷄の粉をまぜて、すり板の上にて押しねやし、うどんをうつ如くして、いろいろたれ味噌にて煮るなり」

うちう-おさ 打置（名）うちえだ（打枝）に同じ。

うちおきの-もの 打置物（名）地紋をうけ織にしたる物。

うちう-おく 打置（他動四）置く。萬「赤駒にしづ鞍宇知奴（ウチヌ）」源氏「なにがしが及ぶべき程ならねば、かみがかみはうちおき侍りぬ」

うちう-おこし 打起（名）一射藝の語。踏射の時、弓を彎かんとて弓を持ち上ぐること。二田畑を開墾すること。

うちう-おとす 打落（他動四）たたきおとす。太鼓記「狂言柿当（ウチヌ）伏」いやこれに見事な柿がある。打ち落といてたべう」

うちう-おとり 内劣（名）表面は優りて見ゆれども、内實の劣れること。

うちおとり のとめてた 内劣外目出度 内にては劣れど、外に出でてはめでらるること。大鏡「そのみかどをば、内おとりのとめでたとぞ、世の人申しし」

うちう-おび 打帶（名）（くみおび（組帶）に同じ。日葡辭書「愛宕參詣すべしとて（中略）玉うちのうちおびを幾重もまはし」

うちう-おほひ 打覆（名）（おほふものなればいふ）假りにしつらひたる屋根。方丈記「土居を組みうちおほひを葺きて、繼目ごとにかけがねをかけたり」

うちう-おほんぞ 打御衣（名）砧にて打ちて、艷を出だしたる御衣。增鏡「御引直衣・打御衣・振袴奉れるみけしき」

うちう-かい 打櫂 楫（名）船の具。櫂の一種。小さくして、下部の平たき所は常の櫂よりも幅廣く短し。船樋（ヲケヒ）の具に通し、これを艪床（ロダ）にして横に水を掻き、前へ推して船を進むるもの。河海・江湖ともに用ふ。著聞「船は霧にこめられて見えず。うちがいの音ばかりきこえて」夫木「いづみ川くだる小舟のうちがいに、淺瀬ぞしるき行きなやみつつ」

うちがい-ぶね 打櫂船（名）てんまぶね（傳聞船）に同じ。普通の櫂を用ひずして打櫂を用ひ、艪には練櫂（ネリガイ）と稱する大なる櫂をつけて舵に代ふ。又、攝津國にて、此の船の綿荷を積みて快速なるを早綿船（ハヤワタブネ）といふ。

うちう-がうし 内格子（名）一内へ上ぐる格子。（そとがうしの對）後拾遺日記。二家の内側に作りたる格子。三芝居の桟敷の名。舞臺の東西八つ目までの稱。

うちう-かうぶり 内冠（名）從五位下の内階。宇津保（藤原）大將殿の御いたはりにて、七日の日うちかうぶり賜はり、十一日に大内記になされ」

うちう-かぎ 打鎰 打鉤（名）武器。鎰の鉤に長き柄あるもの。又、其の柄に綱をつけたるもあり。盛衰記「敵の船を打鎰にて掻き寄せ、組み合はせて乘り移ろ」

うちう-かき 打懸（名）【動】いそがき（磯蠣）の異名。

うちう-かく 打懸（自動四）打ちてかかる。竹取「波は船にうちかけつつ卷きいれ」

うちう-かく 打缺（他動四）たたきくだく。ぶつかく。（大鏡藤原師輔伝）狂言「敷太」あそこから打ちかいて火打石」

うちう-かく 打懸（他動下）ひきかく。かく。祝詞式「遠國者八十綱打掛（ウチカケ）遠引寄如事」萬「みるのごとわわけさかれるかぶのみ、肩に打懸（ウチガケ）」

うちう-かくし 内隱（名）洋服の内が

はにあるかくし。うらかくし。

うちう-かけ 裲襠（名）一古へ朝廷の大儀に、武官の裝束の上に著くるもの。錦・綿などにて作り、背部及び胸部に當つ。袖は無し。りやうたう（裲襠）。和名十二「裲襠（字抄）其一當胸、其一當背也」二舞樂の裝束の一。制ほぼ前者に同じ。

（一けかちう）

うちう-かけ 打掛（名）婦人の通常の體服。帶したる上にうちかけて著る小袖。かけ。鹿苑院准后殿島詣記「袖口細くすそ廣き打掛といふものを、同じ袴に著給ふ」

（二けかちう）

うちう-かけ 内掛（名）相撲の手の一。四手（ヨツ）に組みたる時、我が體を寄せて足を内より掛け、相手を吊身（ツリ）に抱へて押し往き、機を見て、抱へ込みたる上手（ウワテ）にて引き寄せて倒すもの。又、内掛をなしたるまま差手を引き、相手の高股を外より掬ひて押し倒すもの。その取手の變化したるを三所攻（ミツトコロ）といふ。井筒

（けかちう）

（けかちう）

業平河内通「相撲中間内かけ・外かけ・大わたし」

うちかけ-かたきぬ 打掛肩衣（名）肩衣の裾を、袴の内に入れずして、唯肩よりうち懸けて著ること。大名出仕記「打かけ肩衣は一段緩怠候。心安き方へもうちかけて見參する事有るまじく候」

うちかけ-きぬ 打掛衣（名）一むし（蛻）に同じ。むしのたれぎぬ。名義抄「蛻（ムシノタレギヌ）」二きぬかづき（衣被）に同じ。

うちかけ-すはう 打掛素袍（名）素袍の裾を、袴の内に入れずして、唯肩より打ち懸けて著るもの。宗恕聞書「齋を黑めたる人のかねをつけぬは狼藉なり。打懸ゑぼし・打懸すはう同前」

うちかけ-よろひ 挂甲 掛甲（名）かけよろひ（挂甲）に同じ。三代實錄（元慶四十五年、二月廿一日）「挂甲四百領、頒給左右近衛府各二百領」

うちかけ-ゑぼし 打懸烏帽子（名）折烏帽子を、小結ひ又はちやうづかけにて留め置くこと。宗恕聞書「齋を黑めたる人のかねをつけぬは狼藉なり。打懸ゑぼし・打懸すはう同前」

うちう-がし 内貸（名）報酬又は賃錢などの一部を、前拂として貸しあたふること。

うちう-かた 内方（名）一他人の妻の敬稱。うらかた（裏方）。内儀。令閨。貫之集「延長四年、きよつらの民部卿六十の賀、つねすけの中納言内方せられける」二貴人の家に仕ふる女。（沙汰未）蜻川親元記（文明五年七月十四日）「御内方衆、燈呂進之」三家。うち。狂言「聞命」「いえ、うちかたに御座りまするよ」一代女「とても奉公をする身も、こんなうちかたに居ますが仕合せ」四物の内部のさしわたし。うちのり。「枡のうちかた」

うちう-かた 打方（名）一銃砲を打ち放つこと。「うちかた止め」二基などをうつ仕方。「うちかたの上手・下手」三鼓など打つ方の組。（囃子方などの對）膝栗毛「おまいさんもまあ、こちや洲濱の打ち方に出てぢやさかい、ちとの間待っておくれなまさと云うておこしたぢやないかいな」

うちかた 打肩（名）はやうちかた（早打肩）に同じ。

うちかた 内方（名）内裏つきの御方方。帝のみかた。榮華花山「長日の御修法・御讀經など、内がたよりも始めさせ給ひ」同若菜「内がたはめでたき事を、日のさし出でたるここちしたり」

うちかたな 打刀（名）鍔をつけ、敵を打つに使にしたる、やや長き刀。敵を刺す刀に對していふ。古くは丈短きもあり。うちたち。つばがたな。齊宮寮式「打刀子二枚、刀子十一枚（十枚各尺寸、一裏三分）」東鑑（建久三年十二月廿日）「懐中帶一尺餘打刀殆如窓冰」大内問答「打刀をば鐔刀とも申し候へば、打刀御出で候はば、太刀を被添候半事、本義にて候」

うちかど 氏門（名）いへすぢ。いへかど。一家。一門。續紀（天平寶字元年）「已我氏門（ウチカド）滅人等」

うちかね 打金（名）小銃の火門の上に裝置せるはじきがね。これにて雷管を打ち發火せしむ。

うちがは 内側（名）内の方。内部。

うちかはす 打交（他動四）互ひにかはす。うちかはし重ぬる床は何なれや、かへしわびつるよはのさ衣」

うちかひ 打違（名）一うちちがふ處。うちちがひ。萬「からころも裾の字知可比（ウチカヒ）あはなへば、ねなへのからに、ことたかりつも」二行きちがひ。新六帖「泉川くだる小舟のうちかひに、淺瀬ぞしるき行きなやみつつ」

うちかひ 打飼（名）次條の略。保元（上卷）「あな恐ろし、鬼の打飼に成りたりつるとて、怪いてぞ下りたりける」雜兵物語「打飼の底に入れて置いた梅干をとんだして、ちよっと見ろ」心中刃氷翦「跳への分、算用は今日殘らず仕切ってと、腰のうちがひ取り出だし」

うちかひ-ぶくろ 打飼袋（名）筒狀にして底なき長き袋。狩りの時、鷹又は犬などの餌を入るるものなりしが、後には、金錢其の他種種の物を入れて、腰に卷きて用ふ。うちがひ。うちがへ。おびぶくろ。甲陽軍鑑「段子のうちがひ袋に米を入れ」

うちかふ 打更（他動下）一更に改めて打つ。二金屬製の具などを更に鍛ふ。

うちかぶと 内冑（名）兜の内側。頭入（イリ）。保元（白河院政）「まっかう・内冑は恐れも候」

（腰）内兜を見らるる 我が弱みを人に見すかさる。堀川狂歌集「今はとてしのびしのびの緒が切れば、内兜をや人に見られん」

うちかへ 打違（名）うちかひ（打違）に同じ。萬「からころも裾の字知可位（ウチカヒ）あはねども、けしき心をあがもはなくに」

うちかへ 打飼（名）うちがへぶくろ（打飼袋）の略。冥途飛脚「宰領がうちがへより中間方の爲替金高八百兩」ぐわらりぐわらりと取り出だす」膝栗毛「山鳥の尾の長旅なれば、隣のあたりに打ちがへの金をあたため」

うちかへ-ぶくろ 打飼袋（名）うちがひぶくろ（打飼袋）に同じ。

うちかへ-ぶくろ 打紙（名）打ちて光澤を出だしたる紙。

うちかみ 氏神（名）一氏の祖神。

うちかへ-す 打返（他動四）一返す。「うちかへす。反覆す。枕「うらうらへ書きみだりたるを、うちかへし久しう見るこそ」二くりかへす。反覆す。「うちかへし、この下の渡りにて、船うちかへして死ぬとたん」四田畑を鋤きかへす。命葉集「鴨のゐる野澤の小田をうちかへし、種蒔きてけりしめはへて見ゆ」五先方へうちてかへす。「電報をうちかへす」六打たれたる返報に其の人を打つ。七綿弓にて古き綿をうちて直す。八ぼくちを打ちて、さきに負けたる分をも取りかへす。狂言「鬼三」「さきに負けたる者と今日勝負をしたと思へ、この近年ない打ちかへしやうして、刑部三郎が所へももはや算用する」

うちかへ-て 打替手（名）江戸時代、遊里の語。下文を見よ。色道大鏡「打替手」打替手。圍棋より出でたる詞也。僞る委也。直道に物をいはず、あなたの事をいひてこなたへ引きかけ、來たらじといひて來たる貌なり」

うちかへ-ぶくろ 打飼袋（名）うちがひぶくろ（打飼袋）に同じ。

又は其の氏に由緒ありて登崇する神。うぢのかみ。勢語「昔二條の后の、まだ東宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに」㊁うぶすながみ(産土神)に同じ。心中萬年草「京のぼりはまづ待って、氏神へも參りたし」

うち-かるみ 内搦 (名) 相撲の手の一。(かけそり「掛反」に同じ。新猿樂記「内搦・外搦」盛衰記「内搦・外搦・大渡懸・小渡懸」樣樣にこそもみたりけれ」

うち-がり 内借 (名) 受け取るべき金子の幾部分を、仕拂の期日前に前借すること。ないしゃく(内借)。

うちぎ 桂 (名) ㊀男子の直衣などの下、又婦人の唐衣の下に著る衣。他に、お桂うちぎ・こうちぎ・いだしうちぎの種類あり。各條を見よ。和名抄「桂字如」源氏絵「かしらつき・髪のかかりばしも中略うちきの裾にたまりてひかれたる程、一尺ばかりも餘りたらんと見ゆ」㊁天子の御ぐしを上ぐること。又、其の人。(桂を著くるよりいふ) 枕「山の井の大納言めしいれて、みうちきまゐらせ給ひて」源「紅葉「うへは御うちきの人めして」蔵人私記「御髪御櫛事。侍臣之間、選堪事之御桂染紫色」紺也」

うち-き 内氣 (名) 遠慮深き氣質。うちはにひかへめがちなる氣質。河東節「荒馬枝も鳴らさぬうちきはいやよ、世心知らぬ姫小松」

うち-ぎ 打木 (名) ㊀酒粕より酒を搾りとる具。(物類呼称)

うち-ぎき 打聞 (名) ㊀うちきくこと。ふと耳に入りたる言。源「宴夏」深きすぢおぼえぬほどのうちぎきには、をかしかなり」㊁聞きたるままを記しおくこと。又、其のもの。聞書。枕「さらぬ人といひかはしたる歌のきこえてほめられ、うちぎきなどに書きいれらるる」

うち-きく 打聞 (他動四) きく(聞)に同じ。源「玉心にかけていかにとはたえず思ひきこえ給へれど、うちきき給ふには、あさましくおぼえぬここちして」

うち-ぎず 打傷 (名) 打ちてできたる傷。打撲傷。

うち-ぎすがた 桂姿 (名) うちきのみ著て、上に男は直衣・狩衣、女は裳・唐衣などつけぬ姿。枕「も著ず、うちきすがたにて居たるこそ、物ぞこなひにくちをしけれ」源「紅葉「あざれたるうちきすがたにて、笛をなつかしう吹きすさびつつ」

うち-さだむ 打罰 (他動四) 打ち懲らす。罪を糾す。皇極紀「うづまさは神とも神ときこえくる、とこよの神を宇智岐多麻(ウチキタマ)とすも」

うち-ざぬ 打衣 (名) 古へ婦人正裝の時、表著の下に襲ねて著る衣。砧にて打ち、又は板引にして光澤を出だしたるもの。うちあこめ。うちあはせ。枕「紅のいとつややかなるうちぎぬの、霧にいたくしめりたるを」

うち-ざね 打杵 (名) きね(杵)に同じ。若風俗「米もおほかたにしらむ時、うちぎねを投げすて、せはしく身をかくす」

うち-ざま 内君 (名) 他人の妻の敬稱。奥方。爲頼集「扇に舟のかたかきたるを、これはうちぎみにとて、とぶらふ人のありしかば」

うち-さらす 打霧 (自動四) 古詠。かきくもる。きりぶたがる。萬「打霧之(ウチ)雪はふりつつ、しかすがに、わぎへの園に鶯なくも」

うち-さり 打切 (名) ㊀打ちきること。㊁打ち終り。終り。

うち-さり 内切 (名) 諸の切るる所にて拍子をうつこと。

うち-ざる 打斬 打切 (他動四) ㊀斬る。崇峻紀「以持劍三截(ウチザルル)其弓」㊁演じ終はる。なし終はる。

うち-さん 打金 (名) 廉價の品を高價の品に交換するとき、不足の分だけ償ふ金錢。

うち-さん 内金 (名) 契約したる金額の一部。「内金を請け取る」

うち-さん-うけとりしょ 内金受取書 (名) 内金を受け取りたる賣主より、買主に交付する受取書。

うち-くだく 打碎 (他動四) くだく。うちこはす。うちわる。狂言「八人「其の淺鍋を、此の棒で打ちくだいてやらう」

うち-くちぶり (副) 古語。うちくちはもちこちに「物の彼地此地に觸れさはること。(梨神) 萬「宇知久知夫利(ウチクチブリ)の白波のありそに寄する、しぶたにのさきたもとほり」

うち-くっろぐ 打解 (自動四) うちとく。くつろぐ。狂言「鶯「打ちくつろいて、ゆるりと慰ましめ」

うち-くひ 打杙 (名) 落窪「一條の大路に、うちくひうたせ給へれば」

うち-くび 打首 (名) 刑罰の名。首を打ち取ること。斬罪。娥歌加留多「切腹にても打首にても、御意次第」

うち-ぐもり 内曇 内陰 (名) ㊀鳥の子紙の一種。上は青、下は紫の雲形を漉き出だせるもの。因事には其の色を上下す。短冊などに用ふ。くもがみ。山槐記「(保元年十二月)御書、無薄井下絵但有内陰」尺素往來「以内曇・霞染等之短尺・懐紙」㊁金の一種。土器の内を、黑く三つ星の樣にやきたるもの。㊂山城國鳴瀧山より出づる砥石。黄白色に紫の模樣あるもの。刀劍の地金また鑢を出だす時、研ぐに用ふ。

うち-くら 内庫 (名) 家の内に設けたる土蔵。冥途飛脚「白銀は内庫へ、金子は戸棚へ」

うち-くら 打鞍 (名) のりぐら(乘鞍)に同じ。

うち-くらうど 氏藏人 (名) 六位の藏人の第三席の者。藤原氏なれば藤藏人、源氏なれば源藏人など稱するを以ていふ。

うち-くらおほひ 打鞍覆 (名) 馬具の名。打ちて光澤を出だしたる織物紹にて作れるくらおほひ。

うち-くらゐ 氏位 (名) 家系と位と。松風村雨東帶鑑「氏位よし、氣だてよし」

うち-ぐり 打栗 (名) かち栗を打ちて扁平にしたるもの。

うち-くるぶし 内踝 (名) 内へ向かへるくるぶし。(外くるぶしの對)

うち-ぐるま 内車 (名) ㊀器械の内部に裝置したる車輪。㊁自分用の人力車。てぐるま。

うち-ぐるわ 内廓 (名) 城の内部のくるわ。第二の城廓。(そとぐるわの對)

うち-くれる 打くれる (他動下) くれる。わたす。任す。盛衰記「此の馬の鞦として、口をば主に打ちくれて、胸にて走る馬なりけり」

うち-くろ 内黑 (名) 内がはの黑きこと。宇津保「藤原中鉢、しろかねをうちぐろに色どれり」

うち-くんず 打屈 (自動四) くんず(屈)に同じ。枕「かかる者はうちくんじたるこそあはれなれ。うたてもはなやかなるかなとて」

うち-けいき 内景氣 (名) 【商】取引所の語。大引後又は休日などに、次の立會の相場を豫想して賭けをなすこと。

うち-けいしゃ 内藝者 (名) 料理屋などに抱へおく藝者。(他より招くものの對)

うぢ-けいづ 氏系圖 (名) 家がら。家すぢ。種姓。井筒業平「河内通「男も女も、世の中の人にまじらふほどならば、氏系圖はほしきもの」

うち-けし 打消 (名) ㊀打ち消すこと。㊁【文法】事物の動作又は存在を否定すること。通常、文章語には、ず・じ・まじ、口語には、ない・ぬ・ん・まい、などの助動詞を用ふ。

うち-けす 打消 (他動四) ㊀けす(消)に同じ。㊁無くす。否定す。「前說をうちけす」

うち-けつ 打消 (他動四) 前條に同じ。重之集「水の上の濱名の橋も燒けにけり、うちけつ浪やよりこざりけん」

うち-けんくわん 内玄關 (名) 主として、家人の出入する玄關。ないげんくわん。(客の出入する玄關の對) 井筒業平「河内通「うち玄關に乘物寄せさせ」

うち-こ 打粉 (名) 刀劍の濕氣などを拭ひ去るため、刀身にうちふりて用ふる粉。

うち-こ 氏子 (名) ㊀氏の子孫。氏神の苗裔。㊁産土神の擁護を受くる地に生まれたる民。謠「田「木花咲耶姫の御氏子なるものを」

うぢこ ぢゅう 氏子中 同じ氏神を祀る人民。

うち-こさく 内小作 (名) 江戸時代の小作人の一。小作人を自宅に住居せしめ、年期を定めて小作せしむるもの。

うち-こし 打越 (名) ㊀うらのかね(裏印)に同じ。㊁歌又は連歌にて、病として嫌ふ一種の體。七十一番歌合「秋霧はすむ山のうちこしも、雨のたゞひにきらふとぞ見る」庭訓往來「「和歌者中略未之續」長歌・短歌中略輪廻・傍題・打越・落題之體」㊂飲酒家の語。人を越えて特に名指して盃をさすこと。東海道名所記「せめてうちこしなりとも賜はらん」と、連歌にはきらへど酒もりには好みて」㊃【建築】一點より、或る點を越えて他の點まで測りたる長さ。

うち-こしだるぎ 打越榧 (名) 【建築】本屋(ヤ)より向拜柱(ハシラ)の上に架け渡したるたるき。

うち-こしらへ 内拵 (名) ㊀自家の製造。㊁江戸時代、年貢を納むるとき、納米の桝目不足と認むる俵に、補充して繕ふこと。

うち-こす 打越 (自動四) 越す。超過す。愚管鈔「我れより先に、たしかに七百餘騎ありけり。後に三百餘騎はうちこしてありけり」

うぢこ-ないしんわう 氏子内親王 (名) 伊勢齋宮の御異稱。伊勢神宮は、天皇の御氏神におはしませばなり。

うぢ-このかみ 氏子上 (名) 一族の長。天武紀「「氏長(ウヂノナガ)」」

うち-こはし 打毀 (名) うちこはすこと。

うち-こはす 打毀 (他動四) こはす。うちやぶる。

うち-こみ 打込 (名) ㊀うちこむこと。㊁軍陣の語。太勢にて敵に駈け向かふこと。總懸り。太平記「(暦応元年)天以上三十二人打ち込みに、次第を守らず打ちたりける」㊂芝居のはやしの一種。大太鼓を音高く打つこと。㊃擊劍又は相撲にて、初心者が稽古のため、緩けざまに先輩に撃つてかかること。

うちこみ の いくさ 打込軍 混戰すること。總軍。盛衰記「(宇治川)「平山、熊谷に語りけるは、打ち込みの軍は剛臆見えず」

うちこみ-くわん 打込環 (名) 掛物に打ち込みて、その紐を附くる環。おみえくわん。はなくわん。

うち-こむ 打込 (他動四) ㊀打ち入る。狂言「鶯「針中略之を痛み所へ打ち込みまする」同「文蛸「今度取ったらば、地へ三尺打ち込まう」」㊁博奕を打ちて、それにつぎこむ。狂言「鶯「さんざん仕合せが悪うて、金銀は申すに及ばず、女共が衣類まで悉く打ちこうでござる」㊂深く思ひを寄す。心中宵庚申「お恥づかしいべいながら、小七樣にとんと打ち込み」㊃念所をついて云ひこめる。世間息子氣質「天王寺の廻廊が詰からうと云ふを、あそこは夜踊らせぬと打ち込む」

うち-こむ 打籠 (他動四) 押しこむ。保元「(河内)河内「四宮とて、打ち籠められておはせしを」

うち-こゆ 打越 (他動下二) 越ゆ。越え行く。萬「たつたの山の霧霜に色づく時に、打越(ウチコエ)て旅ゆく君は」

うち-ころす 打殺 (他動四) ㊀ころす(殺)を強めていふ語。宇津保「(俊蔭)「河原のわたりは盜人多くて人そこなふなり。それに一人あらば、盜人うち殺してはいかがなり」」㊁銃砲を放ちて殺す。

うち-ぶころも 裏衣 (名) 法橋・寺主・維那以下の凡僧の著る衣。(職掌)「平家十「(鹿谷)「那智籠りの僧共も、みなうち衣の袖をぞ絞りける」」

うち-ざ 内座 (名) ごかんぢやうしよ(御勘定所)を見よ。

うち-ざし 内差 (名) 内部よりとさすこと。落窪「「内ざしにさしこもらんと思ひて、よろづに開くまじきやうに構ふ」」

うち-ざた 内沙汰 (名) 表向にならぬ公事。狂言「(内沙汰)「その儀でござるならば、まづ内沙汰にしてみさうしやれい」」

うち-さぶらひ 内侍 (名) 主殿の廻りの板敷の、疊を敷きたる所。侍所。さむらひ。(遠侍の對) 平家「八「(内侍)」外侍には家の子・郎等肩を雙べ膝を組んでなみ居たり。内侍には一門の源氏上座して」

うち-さま 内樣 (名) 禁裏方。官軍方。平家「八「(内侍)」度度の逆亂を謬めて、九州の者共をば皆内樣へこそ被召しか」

うち-ざめ 打鮟 (名) 金銀を薄く延べて、鮟皮の如く粒を打ち出だしたるもの。刀の柄の飾りに用ふ。太平記「(四十)「打鮟の金作の太刀を佩く」」

うち-さんずん 内三寸 (名) さんずん(三寸)を見よ。

うち-しき 打敷 (名) 布帛の敷物。又僧家にて、案の横・まはりなどにかくる物。宇津保「(俊蔭)「窕殿の南の廂におましよそはす。打ちしき・しとね、皆新しくせられたり」」枕「とうだいの打敷を踏みて立てるに、新しきゆたんなれば、つようとらへられにけり」

うち-したがへる 討從 (他動下二) 討ちて我れに從はしむ。

うち-じに 討死 (名) 戰場にて、闘ひながら死ぬること。戰死。(保元「(鹿)「矢種のあらん限り射盡くして、うちじにし」」

うち-しゅ 内衆 (名) 其の家の人人。(主人より下女・下男に至るまで) 曾根崎

心中「且那様、内儀様、もうお目にはかかりますまい。さらばで御座んす。内衆もさらば、さらば」

うち-す 〔他動サ〕 偽す。す。枕「あくびを、己れうちして」 源「太」をりふしのいらへ、心えてうちし」

うち-すう 打据 〔他動ハ下二〕 ■すう(据)を強めたる語。■打ち挫く。打ち倒す。

うち-すがふ 〔自動ハ四〕 すがふ。西敵す。相似たり。源「手習」前にも、打ちすがひたる尼ども二人臥して」

うち-すがる 打縋 〔自動ラ下二〕 すがる。

うち-すぐす 打過 〔自動サ変〕 ■すぐす(過)に同じ。■年齢まさる。源「紅葉賀」四とせばかりがこのかみにおはすれば、うちすぐしはづかしげに、盛かりにととのほりて見え給ふ」

うち-すじやう 氏素姓 〔名〕 家がら。家すぢ。津國女夫池「侍は氏素姓」

うち-すずめ 内雀 〔名〕 【動】火取蟲の雌の異名。

うち-すつ 打捨 〔他動ハ下二〕 ■捨つ。うちやる。枕「そのかたはらなるおきな人たちも、うちすてつつ、ともかくも云はぬを」源「帚木」さりとも、うちすててはえ行きやらじとのたまはするを」■斬捨てにす。

うち-すて 打捨 〔名〕 ■打ち捨つること。■斬捨てにすること。加越國爭記「弓取程の者を打捨てにする法やある、腹を切らんと云て、脇指を請ふ」大友興廢記「甲首二百八十三、其の外のうちすては其の數を知らず」

うち-すてる 打捨 〔他動ハ下一〕 うちすつ(打捨)の口語。

うち-ずみ 内住 〔名〕 内裏に住むこと。源「桐壺」内ずみのみ好ましうしたまへば」

うち-すゐかん 打水干 〔名〕 砧にて打ちて、光澤を出だしたる水干。愚管鈔「あをにのうち水干に、夏毛のむかばきまことにとを白くて、黒き馬にぞ乗ったりける」

うち-すゑる 打据 〔他動ハ下二〕 うちすう(打据)の口語。

うち-ぜん 内鐵 〔名〕 桶屋の使用する一種の鉋。桶側の彎曲したる内側を削るに用ふ。(そとぜんの對)

うち-そ 打麻 〔名〕 古語。うつそ(打麻)に同じ。次條を見よ。

うち-そ-かけ 打麻懸 〔枕〕 打麻をわくにかけて績ぐむといふより、うむにかけていふ。萬「少女らがうみをのたたり打麻懸(うちそかけ)、うむ時なしに懇ひわたるかも」

うち-そと 内外 〔名〕 内と外と。うちと。ないぐわい。

うち-そと-ふぢわ 内外藤輪 〔名〕 紋所の名。

うち-そ-はし 〔枕〕 〔はとしとは助辭〕次條に同じ。萬「打十八爲(うちそはし)をみの子ら」

うち-そを 打麻 〔枕〕 うつそを(打麻)に同じ。萬「打麻乎(うちそを)をみのおほきみあまなれや、いらごが島の玉も刈ります」

うち-たえ 打絶 〔副〕 ひたすら。まったく。常に。しじゅう。砂石集「後の妻はうちたえ非が房に置きて、疑ひの心なかりければ」

うち-たえ-て 打絶 〔副〕 少しも。一向。さっぱり。狂言「花子」「此の中は打ち絶えて、人をも遊じませなんだ」

うち-たかーりう 氏隆流 〔名〕 小笠原宮内大輔氏隆を流祖とする武家禮式の一派。

うち-だ-くつわ 〔枕〕 紋所の名。くつわ(轡)を見よ。

うち-だけ 打竹 〔名〕 賀茂眞淵はうちたけと訓みたれども、古事記傳に、打は柝の誤りとして、さきたけとしたるに從ふべきか。記「打竹(うちたけ)之登遠遠登遠遠」(獻天之真魚咋也)

うち-だけ 内竹 〔名〕 まへだけ(前竹)に同じ。三好義長亭御成記「御弓はばづし、弦をいつもの如く、かうよりにて中をちがへて、ひぼ結びの如く内竹にて結ぶべし」

うち-だし 打出 〔名〕 ■うちだすこと。■

(こしだちう)

うち-だし-かのこ 打出鹿子 〔名〕 鹿の子染の、打ちだしにしたるもの。

うち-だす 打出 〔他動サ四〕 ■打ちて出だす。狂言「鬼瓦」「寶を打ちだす」打出の小槌を、同じくとらせ」■いだす(出)を強めていふ語。狂言「法師」「あれはたとひうちだすと云うても、いぬることではござらぬ」■打ち始む。關取千兩幟「まだやうやうと今のさき、櫓太鼓を打ちだしました」四興行物の終りの合圖に太鼓をうつ。五裏より打ちて表へ模樣を出だす。六檢地をして餘地を出だす。

うち-だし 内出 〔名〕 いちぶしゅっこ(一部出庫)に同じ。

うち-たく 打擲 〔他動サ四〕 たたく(叩)に同じ。うつ。なぐる。夫木「神山のかしはのひらでうちたたき、みわす系所る月は來にけり」

うち-だち 打太刀 〔名〕 ■うちがたな(打刀)に同じ。桧狩御本地「赤銅作の打太刀、足緒長に、結び下げ」■たちうち(太刀打)に同じ。

うち-たつ 打立 〔自動ハ下二〕 ■たつ(立)自動の意を強めていふ語。■出立す。門出す。狂言「文蔵」兵衛佐頼朝は、北條蛭が子島をうち立ち給ふ」

うち-たつ 打立 〔他動ハ下二〕 たつ(立)他動の意を強めていふ語。

うち-たぶす 打倒 〔他動サ四〕 ■たふす(倒)を強めていふ語。落窪「へやの戸うちたふして」狂言「鳥」人形も打ちたふいておきをった」■打ちてたふす。慶神紀「執横刀、以殿仆甘美内宿禰」

うち-たゆ 打絶 〔自動ヤ下二〕 全く絶ゆ。絶えて後、久しくあり。一向にとだゆ。源「絵」「打ちたえて、内・春宮にも參り給はず」新古今「雜上」「打ち絶えて世にふる身にはあらねども、あらぬすぢにも罪ぞ悲しき」

うち-たる 打垂 〔自動ラ下二〕 たる(垂)自動に同じ。愚忠百首「ほととぎす額つくりするわぎもこが、ねおきの髪のうちたれて鳴け」

うち-たれ 打垂 〔名〕 ■弓袋の上部の括りの餘り。■武具。指物(さしもの)の一。

(れたちう)

うち-たれ-がみ 打垂髪 〔名〕 結び上げずして、垂れたる髪。古への婦人又は

小兒の普通の髪の風。おさげ。源「手習」すだれのひまより、なべてのさまにはあるまじかりつる人の、うちたれ髪の見えつるは」拾遺「ほととぎすをちかへりなけ、うなゐとがうちたれ髪のさみだれの空」

うち-たれ-さく 打垂幕 〔名〕 まんまく(幔幕)に同じ。

うち-たをり 打手折 〔枕〕 〔うちは接頭〕手ぞ折ればたわむゆゑに、たむにかけていふ。萬「撓手折(うちたをり)多武の山霧しげきかも、細川の淵に波のさわげる」

うち-ち 氏地 〔名〕 氏神の鎮守し給ふ地。伊賀越道中雙六「鎌倉八幡宮の氏地の生れ」

うち-ちがひ 打違 〔名〕 うちちがふこと。うちかひ。ぶっちがひ。すぢかひ。行きちがひ。交叉。

うち-ちがふ 打違 〔自動ハ四〕 すぢかひになる。ぶっちがひになる。行きちがふ。交叉す。

うち-ちがふ 打違 〔他動ハ下二〕 すぢかひにす。ぶっちがひにす。行きちがはす。交叉せしむ。

うち-ちがへる 打違 〔他動ハ下一〕 前條の口語。

うぢ-ちや 宇治茶 〔名〕 山城國宇治地方より製出する茶。品質最もよし。大綴冠(茶利)「昔より、宇治茶・近江茶、又は唐茶・甘茶などといへど」

うち-ちやく 打擲 〔名〕 ちやうちやく(打擲)に同じ。

うち-ちやうちやく 家中 〔名〕 家内殘らず。滿家。舉家。

うち-ちらす 打散 〔他動サ四〕 ■ちらす(散)を強めていふ語。枕「調度やうちらしぬる、にくし」■敵を擊ちて追ひ散らす。

うち-ちん 打賃 〔名〕 兩替の手數料。きりちん。

うち-づ 打出 〔自動ダ下二〕 いづ(出)自動に同じ。萬「たごの浦ゆ打出(うちづ)て見ればま白にぞ、富士の高ねに雪はふりける」

うち-つ-おみ 内臣 〔名〕 ないしん(内臣)に同じ。

うち-つぎ 打次 〔名〕 圍棋の語。一旦うちさし置きて、時日を經て、更に前局の續きよりうつこと。

うち-つく 〔自動カ四〕 おちつく(落著)自動の訛り。言

うち-つく 打附 〔他動カ四〕 ■打ちて當つ。狂言「鶴」汝何者なれば、某が打ち附くる太刀に、ああとは云ふぞ」■附く。當つ。萬「あま雲にはね打附(うちつけ)て飛ぶたづの、たづたづしかも君しまさねば」

うち-つぐ 打繼 〔自動カ四〕 うちつづく(打續)に同じ。源「末摘花」ゐだけの高う、をせながに見え給ふに中略うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり」

うち-つ-くに 内國 〔名〕 ■古昔、地方に對して、近畿の稱。仁德紀「封畿之内(うちつくに)何有不給者」況乎畿外諸國耶」神武紀「玉牆内國(うちつくに)」■外國に對して、我が國の稱。

うち-づくり 内造 〔名〕 家の内の造作。宇津保「藤原仲澄」樓の勾欄など、まらはなるうちづくりなどには、かのあけ給ひし御藏におかれたりける、すはう・紫檀をもちて造らせ給ふ」

うち-つけ 打附 〔副〕 ■たしぬけ。にはか。突然。率爾。端的。古今「子規」人まつ山に鳴くなれば、われうちつけに懇ひまさりけり」土佐日記「ただ一つある鏡を奉るとて海にうちはめつれば中略うちつけに、海は鏡のごとなりぬれば」

うち-つけ 〔自動カ四〕 ■うちつくなる御夢もの語りにぞ侍るなる」■ひきだし。さしあてて。ぶっつけ。露骨。源「帚木」さしもあだめき目なれたる。うちつけのすきずきしさなどは、好ましからぬ御本じやうにて」

うち-つけ-がき 打附書 〔名〕 ■うは書に脇附けをせざる書狀。下輩へ遣すもの。■時候見舞など書かずして、用事のみを手紙に書くこと。

うち-つけ-けさう 打附懸想 〔名〕 率爾なる懸想。突然のけさう。狹衣「何人ならん、見知りたりつる人にやなど、とばかりはおぼせど、かやうのうちつけさう(うちつけごと)などは、わざとみ心にもいらず」

うち-つけ-ごころ 打附心 〔名〕 俄かに思ひたつ心。突然の考へ。源「手習」うちつけ心ありて參りこんにだに、山ふかき道のかごとはきこえつべし」

うち-つけ-ごと 打附言 〔名〕 無遠慮にいふこと。源「若菜」生けるかひありつる幸人の光り尖ふ目にて、雨はそぼふるなりけりと、うちつけごとし給ふ人もあり」

うち-つけ-ぶち 打附縁 〔名〕 襖などの縁の、釘にて打ち附けたるもの。

うち-つけ-め 打附目 〔名〕 ふと見たる目。源「夕顔」これが顔、まづかのほかげに見給ひしそれなり。うちつけ目かとなほ疑はしきに」

うち-つける 打附 〔他動ハ下一〕 ■うちつく(打附)の口語。狂言「石」「太刀の打ち附ける所が無い。命を助くるぞ」■投げつける。狂言「居眠」是れは身共に打ち附けるか」同「文相」茱を取って打ち附けて、誰が扶持をするものぢや」■直接にものす。「うちつけていふ」

うち-つ-こと 内事 〔名〕 内政。家事。繼體紀「立皇后手白香皇女爲敦子内」(うちつこと)

うち-つづく 打續 〔自動カ四〕 つづく。引きつづく。源「東屋」はるかなる所に、打ちつづきて過ごし侍る年ごろのほどに」

うち-つ-つみ 天罰 〔名〕 天皇より罰し給ふ罪。又、其の罪人。雄略紀「宜以玉帥薄伐、天罰(うちつつみ)襲行」

うち-つ-みかど 内御門 〔名〕 奥の方の門。舒明紀「則參進向于閤門(うちつみかど)」

うち-つ-みや 内宮 〔名〕 奥向の御殿。後宮。内廷。垂仁紀「當納被庭(うちつみや)以盈后宮之數」

うち-つ-みやけ 内官家 〔名〕 上古、三韓に置かれし總督府。神功紀「因以定内官家(うちつみやけ)」

うち-つめ 打爪 〔名〕 鷹の足部の名所。たか(鷹)を見よ。

うち-つ-ものべ 内物部 〔名〕 うちのものべ(内物部)に同じ。

うち-つる 打連 〔自動ラ下二〕 つれあふ。つれだつ。枕「同じやうに、うちつれあり」

うち-づゑ 打杖 〔名〕 能樂の具。鬼などの持つ撞木(しゅもく)の形したるもの。

うち-て 討手 〔名〕 ■攻擊軍。うって。うて。■銃砲を放つ人。■殺す人。殺し手。賀古教信七墓廻「今日御邊に出合ふこと、討ち手より猶討たれ手の茱が身の幸ひ」

うち-で 打出 〔名〕 うちいでのきぬ(打出衣)に同じ。大鏡「藤壺」のうへの御局に、つぶとえもいはぬ打出ども、わざとなくこぼれ出でて」雅亮裝束抄「うちでには、菊・紅葉の衣は、おぼろげにてはなし」

うち-てらし 打銚子 〔名〕 長柄の銚子。庭訓往來「五月」「打銚子」

うち-てうず 打懲（他動サ） うちて懲らす。枕「此のおきなまろうちてうじて犬島につかはせ、ただ今と、仰せらるれば」

うち-でし 内弟子（名） わが家に同居せしめおく弟子。塾生。學僕。聞き上手「おれは不快ちやというて、こなた名代にいってくりやれと、内弟子を駕籠に乗せてやる」

うち-でのかさ 打出笠（名） 金銀をのべて附けたる笠なるべし。慶長記「銀八、額に天冠を當て、白打出の笠をきて」

うち-でのこづち 打出小槌（名） 種種の財寶・衣食を、思ふままに打ち出だすといふ小槌。平家「是れぞ誠の鬼とおぼゆる。手に持てるものは、閉こゆる打出の小槌なるべし」

うち-でのたち 打出太刀（名） 金銀をのべ飾りたる太刀。今昔「五十許り出の太刀帯びたり」

うち-てふつがひ 内蝶番（名） 鎧の胴のてふつがひの一種。（そとてふつがひの對）

うち-でら 氏寺（名） 一門にて建立し歴依する寺。藤原氏の興福寺、和氣氏の神護寺の類。大鏡「御ぞうの氏寺にておかれたるを」

うち-と 内外（名） 一うちとそとと。ないぐわい（内外）。表向と奥向と。仁德紀「内外（ウチト）命婦等」枕「うちとなど許されたる、若き男ども、家の子など」 二仰教と儒教と。「うちとのふみ」 三うちとのみや（内外宮の略。謠羽衣「玉垣や、内との神の御末にて」

うち-とうふ 一宇治豆腐（名） 山城國宇治より製出する豆腐。七十一番歌合「豆腐實。懇ひすれば苦しかりけり宇治豆腐、まめ人の名をいかでとらまし」

うち-とく 打解（自動カ） 一とく（解）（自動）に同じ。拾遺「氷だにとまらぬ春の谷風に、まだうちとけぬ鶯の屏」 二うちあけて親しむ。隔てなく交じはる。遠慮なくす。源「そのうちとけて、かたはらいたしと思ほされんこそゆかしけれ」 同「ひとへに、うちとけたるうしろみばかりをして」 三心に苦勞なく暮ゆ。心ゆるやかになる。うちくつろぐ。源「五十七八の人の、うちとけて物思ひなげなるけはひ」 四心たゆむ。油斷す。枕「ここにも人は見るまじくや。などかは、さしも打ちとけつると笑はせ給ふ」 同「人の起きて物語などするかたはらに、あさましう打ちとけて寝たる人」

うち-とく 打解（他動カ） 解く。解き放つ。枕「紐うちとき、ないがしろなるけしきに拾ひ置くに」

うち-とけ 打解（名） うちとくること。濱松「いとけ近うなりたりしうちとけのあさましげなるありさまは、いかに見給ふらん」

うち-とけ-がほ 打解顔（名） うちとけたる顔つき。憚らぬ顔つき。源「扇などもおおとして、うちとけがほをかしげなり」

うち-とけ-ごと 打解言（名） うちとけていふ言。奥底なき話。うちとけばなし。枕「まらうどなどにあひて物いふに、奥の方にうちとけごと人のいふを、制せで聞くここち」

うち-とけ-ざま 打解狀（名） 隔てなくうちとけるやうす。後拾遺「はやくはらざりけり」

うち-とけ-すがた 打解姿（名） うちとけたる姿。とり亂したる姿。蜻蛉日記「女夏のもなどに、うちとけ姿にて出でて見るに」 源「物清げなるうちとけすがたに、花の雪のやうにふりかかれば」

うち-とけ-ばなし 打解話（名） うちとけごと（打解言）に同じ。

うち-とけ-ぶみ 打解文（名） 打ちとけて書きたる文。源「何かは、その女どもの中に書き通はしたらんうちとけ文をば御覽ぜんとの給ふ」

うち-とけ-まさり 打解優（名） 打ちとけたる容子の、却りて常よりもまされること。源「いかにぞ、うちとけまさりのいささかもあらばうれしからん」

うち-とける 打解（自動カ） うちとく（打解）（自動カ）の口語。

うち-とけ-わざ 打解事（名） うちとけたるしわざ。隔てなき所業。源「さまことに、さならぬうちとけわざもし給ひけり」

うち-どこ 内床（名） 江戸時代、自宅にて髪結を業としたるもの。（出床（デドコ）の對）

うち-どこ 打床（名） 鍛冶の用ふる鐵の臺。

うち-とす 内外（自動サ） 許されて奥向に出入す。榮華「年ごろ、大殿の御子のやうに思ひきこえさせ給へりければ、御方方に皆うちとし給へるうちにも」

うち-とねり 内舎人（名） うどねり（内舎人）に同じ。うちのとねり。和名「内舎人（字知止）」

うち-どの 打殿（名） 古へ裝束などを砧にて打ちて光澤を出ださん爲めに設けたる所。源「玉葛、ここかしこのうち殿より參れる物ども、御覽じくらべて」

うち-とのふみ 内外典（名） 「うち（内）は佛書と（外）は儒書」佛書と儒書と。内典と外典と。夫木「何として内とのふみを學びけん、まくものぶるも物うかる世に」

うち-とのみや 内外宮（名） 伊勢の内宮と外宮と。うちと。新古今「神風や玉くしの葉をとりかざし、内との宮に君をこそ祈れ」

うち-とび 内樋（名） 【建築】軒の後に隠れたる樋（外樋の對）

うち-とむ 打止（他動カ） 一物を打ちてとめおく。 二弾丸などを放ち中てて獲。しとむ。 三撃ちて殺す。 四興行を終はる。

うち-とめ 打止（名） うちあげ。をはり。はて。最後。千秋樂。「相撲のうちどめ」「後場の立會ひ打ち止め」 浮世風呂「どうも打ちどめはさう來るで」

うち-とめ 打止（名） 遊里の語。客を遊女の家に引き入れて遊ばすこと。（大色）

うち-とめる 打止（他動カ） うちとむ（打止）の口語。

うち-どり 内取（名） 一相撲の語。相撲節會の二日前に、相撲人を宮廷に召して試みる相撲。西宮記「七月相撲、内取」 二稽古部屋にてする稽古相撲。ぢどり（地取）。

うち-とる 打取（他動ラ） 一取る。捕らふ。宇治拾遺「六十ばかりの女のありけるが、蟲うちとりてゐたりけるに」 二討ちて奪ひ取る。枕「もろこしの帝この國の帝を、いかではかりてこの國うちとらんとて」 三討ちて殺す。將門記「妻子同共討ち取る」

うち-な 氏名（名） 苗字。稱號。

うち-ながむ 打眺（他動カ） ながむ（眺）に同じ。勢語「此の女いとようけさうじて、うちながめて」

うち-なし 磬（名） 古語。うちならし（打鳴）に同じ。うちいし。磬（ケイ）。名義抄「磬（ウチナシ）」

うち-なし 打梨（名） 一裝束の柔かなること。 二なしうちぶうし梨打鳥。

うち-なす 打鳴（他動サ） 打ち鳴らす。萬「時もりの打鳴（ウチナス）鼓よみみれば、時にはなりぬ逢はなくもあやし」

うち-なびく 打靡（自動カ） なびく（靡）に同じ。萬「宇知那比根（ウチナビネ）こやしぬれ」

うち-なびく 打靡（枕） 「うちは接頭」草は風に靡くもなれば、くさにかけ、又春の柳の靡くさま、わけてめでたきものなれば、春にかけてもいふ。萬「おして夕べれに我がこえくれば」同「打靡（ウチナビク）くさかの山を、春さりぬれば、山邊には花咲きをり、川瀨には鮎こさばしり」

うち-ならし 打鳴（名） 一打ち鳴らすこと。 二けい（磬）に同じ。うちなし。うちいし。和名「磬（字知奈）」

うち-ならし 内習（名） うちうちの練習。ならし。下稽古。宇津保「このひんがしの山なる寺の堂に舍し給ふべしといふ中納言集まりてうちならしをしのしり」源「あすの御遊のうちならしに、御ことどもそうぞくして殿上人などあまた參りて、をかしき笛の音ども聞こゆ」

うち-ならす 打鳴（他動サ） 打ちて鳴らす。源「翼不踈の經よむ。時かはりてかれ打ちならすに」

うち-に 打荷（名） 海難に遭遇したる船舶が、船足を輕くして危險を免るるため、積荷の一部を海中に投棄すること。なげに。

うち-にしゃ 一鬱尼沙（名） 梵語。うしちにしや（烏瑟膩沙）に同じ。うしち。玄應音義「烏瑟膩沙（烏瑟膩沙、又作烏瑟尼沙、或云鬱尼沙、此云髻。謂頂骨涌起自然成髻」

うち-には 内庭（名） 家の内の庭。室と室との間にある庭。

うち-ぬき （名） 一私金などに、孔をたがねにてあくること。 二炙鑿（ウチノミ）の鋒なきもの。 三正直なることをいふ。播磨國の方言「物類稱呼」 四刺して貫く。

うち-ぬく 打貫（他動カ） 通して貫く。狂言「大きなるこうりやうに、大釘かすがひを打ちぬき打ちぬきしけるは、盗の山の如くなり」

うち-ぬの 宇治布（名） 山城國宇治より産出する布。著聞「とみの事ありて、宇治布十反いるべかりけるに」

うち-ね 打根（名） てや手矢に同じ。

うち-ねずみ 内鼠（名） 家にのみ籠もり居て、世間知らずの人。誰我身の上「我れ一人の子持ちたりといへども、此の子うちねずみにて、我がうちより外を知らず」

うち-ねぶる 打眠（自動カ） ねむる（眠）に同じ。枕「こうじてうちねぶれば」

うち-の-うち 家内（名） かない（家内）。

うち-の-うへ 内上（名） 主上の御異稱。うちう。うへ。源「内のうへなん、いとよく似奉らせ給へると、人人きこゆる」

うち-の-うまやのつかさ 内厩寮（名） 大寶令以後、一時設けられし官署。宮中の御厩の事を掌る。

うち-の-おとど 内大臣（名） ないだいじん（内大臣）に同じ。枕「宮の御まへに、内のおとどの奉り給へりけるを」

うち-の-おほおみ 内大臣（名） 前條に同じ。

うち-の-おほ-おみ 内大臣（名） 前條に同じ。

うち-の-かしはでの-かみ 内膳正（名） ないぜんのしやう（内膳正）に同じ。

うち-の-かしはでのつかさ 内膳司（名） ないぜんし（内膳司）に同じ。和名「内膳司（字知之加之）」

うち-の-かしはでのつかさ-の-かみ 内膳正（名） ないぜんのしやう（内膳正）に同じ。

うち-の-かた 内方（名） うらかた。内儀。源「月頃、内の御方にせうそこ聞こえさせ給ふを、御ゆるし有りて」

うち-の-かにもり-の-かみ 内掃部頭（名） 内掃部司（ウチノカニモリツカサ）の長官。

うち-の-かにもり-の-つかさ 内掃部司（名） うちのかもりのつかさ（内掃部司）に同じ。

うち-の-かみ 氏上（名） 氏族中の長。宗家より出で、一族の事を掌る。うちのをさ（氏長）。うぢのちやうじや（氏長者）。

うち-の-かみ 氏神（名） うぢがみ（氏神）に同じ。謠小塩「某が氏の神は、稲荷の明神なれば」

うち-の-かもり-の-かみ 内掃部正（名） 内掃部司（ウチノカニモリツカサ）の長官。職員令「内掃部正」

うち-の-かもり-の-つかさ 内掃部司（名） 役所の名。大寶令の制、宮内省の被管。供御の畳席、殿中の錦設などを掌る所。弘仁十一年掃部司と併せて掃部寮とす。うちのかにもりのつかさ。職員令「内掃部司」

うち-の-きょ 氏舉（名） うぢのしやく（氏爵）に同じ。東鑑「文治二年六月十五日」「舊安樂寺別當盛宗、雅長氏舉に依り起大案、義絶事」

うち-の-し 打鼓（名） 次條の略。平治「何やらんと見奉れば、打鼓（ウチノシ）と云

内藥司（ウチノクスリツカサ）の長官。職員令「内藥正」

うち-の-くすりのつかさ 内藥司（名） 中務省の被管にて、御藥の事を掌る所。後に典藥寮に合併す。職員令「内藥司」

うち-の-くら 内藏（名） うちのくらのつかさ（内藏寮）の略。宇津保「やがて、うちのくらして奉り侍るめり」

うち-の-くらうど 内藏人（名） 禁中に仕ふる藏人。（攝關家などのに對していふ）大和物語「うちのくらうどにてありける、一條の君といひける人は」 平治「内の藏人にてもありしかば、雲の上の交りも忘れ難し」

うち-の-くらうど 氏藏人（名） うぢくらうど（氏藏人）に同じ。

うち-の-くら-の-かみ 内藏頭（名） くらのかみ（内藏頭）に同じ。

うち-の-くらのつかさ 内藏寮（名） くられう（内藏寮）に同じ。

うち-の-けん 内檢見（名） 一有司の檢見に先だちて農民等が熟稻を檢し、其の優劣を判斷して等級を定むること。うちみ。 二大追物の職名。けんみ（檢見）を見よ。

うち-の-こ 氏子（名） うぢこ（氏子）に同じ。曾我五人兄弟「鶴が岡の氏の子の、武家繁昌の開闢たる、頼朝の威勢ぞ比類なき」

うち-の-ごしょどころ 内御書所（名） 古へ禁中の御書物を掌る所。此の所にて文人に命じて詩を作らせ、又學生などを試驗せし事あり。芸閣。秘書閣。

うち-の-ごこのかみ 氏子上（名） うぢのかみ（氏上）に同じ。天智紀「氏上（ウヂノカミ）」

うち-の-し 打鼓（名） 次條の略。平治「何やらんと見奉れば、打鼓（ウチノシ）と云

ふ物なり」

うちのし-あはび 打熨鮑 (名) うちあはび(打鮑)に同じ。宗五大雙紙「うちのし鮑。あはび、折敷のたけに切るべし」

うぢの-しゃく 氏爵 (名) 古へ毎年正月六日の叙位の時、王・源・藤・橘諸氏の長者より、其の氏人の叙爵を申請すること。うぢのきよ。

うぢの-しるすつかさ 内記 (名) ないき(内記)に同じ。和名抄「内記(ウチノフミノツカサ)」うぢのかみ

うぢの-すけ 氏助 (名) (氏上)の副。

うぢの-そう 氏宗 (名) 同じ氏中の嫡統の家。

うぢの-そき 打除 (名) 水戰にて、味方の敗軍すること。

うぢのそものの-かみ 内染正 (名) 内染司(ウチノフミノツカサ)の長官。

うぢのそものの-さくわん 内染令 (名) 内染司(ウチノフミノツカサ)の主典。

うぢのそものの-しょう 内染佑 (名) 内染司(ウチノフミノツカサ)の判官。

うぢの-そものののつかさ 内染司 (名) 古への官署の名。宮内省の被管。月縫殿寮へ併す。

うぢのたくみ-の-かみ 内匠頭 (名) たくみのかみ(内匠頭)に同じ。

うぢの-たくみのつかさ 内匠寮 (名) たくみれう(内匠寮)に同じ。和名抄「内匠寮(タクミノツカサ)」

うぢの-ちゃうじゃ 氏長者 (名) うぢのかみ(氏上)に同じ。後には王氏・源氏・藤原氏・橘氏にのみ聽はる號とし、同族の中にて、官位ともに高く勢ひある人に宣下して任ぜらる。類聚國史「凡貢氏女事」中略今須氏之長者、擇氏中端正女、貢之」著聞「氏の長者には、左府つひになり給ひぬ」

うぢの-つはものののくら 内兵庫 (名) うぢのひやうご(内兵庫)に同じ。

うぢの-つはものののくらつかさ 内兵庫 (名) (内兵庫司)に同じ。

うぢのつはものののくら-の-かみ 内兵庫正 (名) 内兵庫司(ウチノツハモノノクラツカサ)の長官。

うぢの-とねり 内舍人 (名) うどねり(内舍人)に同じ。うちとねり。百寮訓要和歌「ものの、ふの勢ひのあるなり麥、うちのとねりやらひそむらん」

うぢの-ひと 内人 (名) 妻が、第三者に對して夫をいふ語。狂言鑑「はづかしながら、妾が内の人でござる」

うぢの-ひめみこ 内姫御子 (名) ないしんわう(内親王)に同じ。

うぢの-ひやうご 内兵庫 (名) ひやうご(兵庫)を見よ。うちのつはものの、ら。

うぢの-ひやうごのつかさ 内兵庫司 (名) 前條に同じ。

うぢの-ぶ 打延 (他動ヒ) 一のぶ(延)に同じ。二物を打ちて延ばす。

うぢの-へ 内重 (名) 内の圍ひ。又其の内の。なかのへ。(外重(トヘ)の對)萬三「とのへに立ちさもひ、内重(ウチ)につかへまつりて」

うぢのべ 打延 (名) うちのぶること。打ち延ばすこと。

うぢのぼる 打上 (枕) (うちは接頭)大和國佐保へ行く道は、坂多くてのぼりゆく處なれば、さほにかけていふならん。望餘一説、種のすくすくと出づるをのぼるといひ、さてほにかけたるならん。古義萬三「打上(ウチボル)佐保の河原の青柳は、今は春べとなりにけるかも」

うぢの-みかど 内帝 (名) 天皇の御異稱。宇津保村田麗「内のみかど仁壽殿に渡り給ひて、大將の女御君と御碁遊ばしなどするに」源若菜「内のみかどさへ御心よせことに聞こえ給へば」

うぢの-みこ 内御子 (名) ないしんわう(内親王)に同じ。ひめみこ。

うぢの-みやうぶ 内命婦 (名) 五位以上にて宮中に奉仕する婦人。

うぢの-みやけ 内官家 (名) 敏達紀「内官家(ミヤケ)之國」うちつみやけ(内官家)に同じ。

うぢの-みやびと 宇治宮人 (名) 伊勢大神宮に事へ奉る人。神人。新後撰雜延「榊もて八つの石つぼふみならし、君をぞ新るうぢの宮人」

うぢの-もの 内者 (名) 其の家に事へ從ふ者。花營三代記「應永四年十二月廿五日」菅領内者」狂言柿山「主とも思はぬ内の者かな」

うぢの-もののべ 内物部 (名) 衛門府の武士。

うぢの-やしろ 氏社 (名) 氏神を祀る社。藤原氏の春日社の類。百練抄「九月八日、宣旨、春日社、以日吉爲氏社」宣旨、朝記「奈良京之書者、以春日社爲氏社、以興福寺爲氏寺。平安城之今者、以吉田社爲氏社、以法成寺爲氏寺」

うぢの-やっこ 氏奴 (名) 古昔、知行所の民。

うぢのり 内法 (名) 一物の内面の、一方より他方までのさしわたし。門の幅などを度るに柱を加へざる兩柱の間の寸法。柱を加へて度るをそとのりといふ。うちかた。二枡などの内側の、縱・横・深などの稱。

うぢの-ゐのつかさ 内禮司 (名) 中務省の被管にて、宮中の禮法及び非違を禁察することを掌る所。後に、彈正臺に合併す。ないらいし。職員令「内禮司」

うぢの-ぬ 氏院 (名) 同じ氏中の子弟を教育する學校。宇津保藤原「たうえいは氏の院の學しやうにはあらずや」

うぢの-をき 氏長 (名) うぢのかみ(氏上)に同じ。氏の長者。

うちは 團扇 (名) 一細き竹を骨とし、紙又は絹などを貼り、柄を附け、あふぎて風を起こす具。圓形を普通とす。和名抄「團扇(タウセン)」名義抄「團扇(ウチハ)」宇津保藤原「いと暑しとのたまへば、うちはも參らせんとのたまひて」二ぐんばいうちは(軍配團扇)に同じ。兵具錄記「團子拵ふる事」三紋所の名。ちがひうちは・みつうちはなど種種あり。

うちは の はた 團扇旗 丸き團扇の柄に緒を附けて、竿の頭に結び附けたるもの。太平記十七「義、うちはの旗三十餘流れ連なりて」

うちは を あぐ 上團扇 相撲の行司が、勝ちたる方に團扇を上ぐ。勝敗又は優劣を定む。

うちば 内端 (名) 一ひかへめに物事をすること。うちわ。天網島「内端に取って新銀三百五十匁、よもや貸さぬと云ふことは、無い物までもあり瓶に」二遠慮がちにて言葉少なき人。うちき。後京極殿三百首「うちばなる麗の心のゆかしくば、氷の鏡むかひても見よ」

うちは-えび 團扇海老 (名) 【動】節足動物、甲殼類に屬す。えびの一種。頭・胸・甲及び觸角は、互ひに相癒合して幅廣く、恰も團扇狀をなせり。甲には小斑點散在す。海に產す。

うちは-かづら (名) 【植】旋花科、甘藷(サツマイモ)屬の多年生草本。莖は匍匐し、六・七丈に達す。葉は肉質にして厚く、圓形にして鈍頭、心形をなし、やや軍扇狀なり。夏日、淡紅色の花一乃至二三箇を葉腋に開く。我が國、暖地の海濱に自生す。ぐんばいひるがほ。

うちは-ばかま 打袴 (名) うちて光澤を出だしたる袴。板引のはかま。宇津保藤原「五位よりしもは、白きうち袴をなん賜ひける」

うちは-ぎ (名) 【植】いはがらみ(鐵地風)の異名。

うちは-ぐさ (名) 【植】ぐんばいなづな(過菱菜)の異名。

うちは-ごけ (名) 【植】苔類科、ほらごけ屬の多年生草本。絲狀の根莖を有し、之に黑色の鱗毛を密生す。葉は小形にして粗生し、扇形又は圓形、ほぼ公孫樹(イチヤウ)に似、往往數片に深裂し、各裂片亦往往に淺裂し、纖長なる葉柄を有す。子囊群は葉の先端緣に生ずる筒狀器の内に生ず。我が國、各所の山地・樹皮又は岩上に叢生す。まるばほらごけ。

うちは-し 打橋 (名) 假りにうちわたしたる橋。神代紀下「於天安河上造打橋(ウチハシ)」天智紀「于知波志(ウチハシ)のつめの遊びに出でませ、こ」

うちは-じむ 打始 (他動ヒ) 一事を爲し始む。始む。宇津保忠こ「これよりうちはじめて、女はをかしき事もあはれなる事もきこえ給ひつつ」枕「一盡よりありつる虫どもをうちはじめて、萬の事をいひ笑ひ」二打つことを始む。

うちは-す 團扇 (他動サ) 團扇をつかふ。扇にてあふぐ。枕「うしろにねて、うちはするもあり」

うちはじめる 打始 (他動ア) 前條の口語。

うちは-だいこ 團扇太鼓 (名) 皮一面を團扇の形の如く張りて、柄をつけたる太鼓。法華宗の信者が、題目を唱へつつ叩くもの。

うちは-たす 打果 (他動サ) 武器にて撃ち殺し了はる。うちとめる。狂言居杭「これは堪忍ならぬ。うちはたしてくれう」

うちは-だて 團扇栝 (名) 栝(ヲ)の一種。

(てだはちう)

うちは-ちも 内八文字 (名) 遊女などの道中する時の歩みかた。長きもすそをかいどり、兩足の爪先を内方へむけて八の字の形にありくこと。諸鬼大鑑「先一番に都の三夕、各別世界の道中なり。内八文字にかいどりまへ」

うちはづし-ざま 打外方 (名) 今少しにて外れんばかり。辛うじて打ちあてたる狀にいふ。現曾我「追ひかけられて逃るるあとを、うちはづしざまに斬りければ」

うちはづす 打外 (他動サ) はづす。打ちてはづす。打ち誤る。枕「すぐろく中略さは、いみじうのろふとも、うちはづしてんや」

うちはじむ 打始 (他動ヒ) 一事を爲し始む。始む。宇津保忠こ「これよりうちはじめて、女はをかしき事もあはれなる事もきこえ給ひつつ」枕「一盡さは、いみじうのろふとも、うちはづしてんや」

うちはなち 打放 (副) 愛敬なく。ぶしつけ。住吉「あはれとは見奉りながら、若き者にて、うちはなちに申しけるにこそ」

うちはなつ 打放 (他動タ) はなつ(放)に同じ。萬「やき太刀のかど打放(ウチハナ)ますらをが、ほぐとよみきに我れ醉ひにけり」

うちはば 内馬場 (名) つぼばば(壺馬場)に同じ。

うちはぶ 打延 (自動ヒ) 一はふ(延)に同じ。二絶ゆる間なし。ながびく。うちつづく。萬「打延(ウチハブ)て思ひしをぬは、遠からぬその里人のしめ結ふと聞きてし日より」宇津保菊宴「うちはへて落つる涙や袖の上に、しほの滿ちくる海となるらん」

うちはぶぐ 團扇河豚 (名) 【動】河豚(フグ)の變種。腹部の皮膚よく伸展すること、團扇の如きもの。

うちはぶく 打羽振 (自動カ) はぶく(羽振)に同じ。羽ばたきす。萬「打羽振(ウチハブク)鳥はなくとも、斯くばかりふりしく雪に君いまさめやも」古今夏「五月まつ山子規打ちはぶき、今もなかなん去年のふる聲」

うちはへ 打延 (副) 長く延ばして。長引きて。ながながと。きりもなく。際限もなく。宇津保藤原「此のころ殿に參りこんとすめるを、うちはへ物忌にてなん」枕「雨の打ちはへ降る頃」

うちはぼ 打塡 (他動ハ) 打ち棄つ。投げ込む。萬「鶯のなくくらだにに宇知波米(ウチハメ)て、燒けはしぬとも君をし待たむ」土佐日記「船ほとほとしくうちはめつべし中略ただ一つある鏡をたいまつるとて、海にうちはめつれば」

うちば-もの 内端者 (名) うちきの人。うちば。浮世風呂「近所で名代のうちば者だから、なに餘慶の子を泣かせようず」

うちはやし 打囃 (名) 太鼓・鼓などうつ藝。五十年忌歌念佛「茶の湯・盤上・打囃、男の藝に一つでも疵なき玉の盃の」

うぢ-はやし (形シク) 一いちはやし。困難なり。急遽なり。續紀「如此久宇治方夜(ウヂハヤ)時に、身命不惜之美、眞久淨心」二義抄「阻・甑(ウヂハヤシ)」三けはし。險阻なり。宇鏡「崎字(ウヂハヤシ)」名

うちはやす 打早 (他動サ) 「馬をうちはやして、いそぎ參りて」

うちはやむ 打早 (他動ム) 早む。いそがす。うちはやす。源榊「駒引きとどむるほどもなく、うちはやめて片時に參りつきぬ」

うちはらひ 打拂 (名) 一塵を拭ふ具。綾・布などを用ふ。類聚雜要「又作納(ウチ)亂筥綾一丈、是鏡之打掃」二鉄砲など放ちて敵を打ち拂ふこと。

うちはらひ の はた 打拂筥 打拂を入るる筥。江次第「上卿取之打拂筥、進神殿方前」疏奉之」

うちはらひ 内拂 (名) 内金を支拂ふこと。

うちはらぶ 打拂 (他動ハ) 一拂ふ。はらひ淨む。萬「わが身には霜なふりそと、白たへのはねさしかへて宇知波良比(ウチハラヒ)」二追ひ拂ふ。太鼓「狂言(源門)悪魔降伏、打ち拂ふ鉾を汝に取らせけり」三鉄砲などを放ちて敵を追ひ散らす。

うちはり 内張 (名) 兜の名所。うけはり(浮張)に同じ。

うちばり 梁 (名) うつばり(梁)に同じ。はり。三十二番歌合「雨の日をもらすはをしき酒ひに、うちばりひろき殿作りせん」

うちばり 内張 (名) 人力車・馬車などの車體の、内方に張りたる綾物。

うちばん 打盤 (名) 物を打つに用ふる臺。

うちひ 打樋 (名) うちわたしたるとひ。山家集「苗代の水を霞はたなびきて、うちひの上にかくるなりけり」

うちび 打火 (名) 火打にて打ち出だす火。きりび。 諸暫「恐ろしや、打火かがやく鏡の面に寫る鬼神の眼の光」

うちひく (他動四) さいなむ。いぢめる。落窪「夜ひと夜、知らぬ事によりうちひき給ひつるこそ、いとありなかりつれ」

うちひさす (枕) 宮殿は高大なれば美日差(ひさす)より、宮また都(宮のある所)とつづけていふ。一説に、うちは現(うつ)の義にて、ありありと日の差す意。萬三「宇知比佐受(うちひさす)みやへのぼると」同四「宇知比左須(うちひさす)みやこの人に告げまくは、見し日の如くありと告げこそ」同三「内日刺(うちさす)おほみやづかへ」

うちひさつ (枕) 前條に同じ。萬四「宇知比佐都(うちひさつ)みやのせ川のかほ花の、懇ひてかぬらむ、きぞもこよひも」同三「打久津(うちひさつ)みやけの原ゆ」

うちひそむ 打顰 (自動四) 顰しかみて泣き淫つくる。源帚木「あへなく心ぼそければ、うちひそみぬかし」 榮華「いみじき事どもを申し聞かせ奉り給ひて、ともすればうちひそみ泣き給ふ」

うちびと 内人 (名) 古昔、伊勢大神宮に勤むるもの。物忌以下を率ゐて宿直し、神饌を調ふる事を掌る。熱田・鹿島の神社にもあり。うちんど。 大神宮式「内人二人」

うちびと 氏人 (名) 同じ氏族の人。氏子。萬四「もののふのやそ氏人(うちびと)もよしぬ川、たゆることなく仕へつつ見む」拾遺雜二「大原の神も知るらん我が戀は、今日氏人の心やちなん」

うちひも 打紐 (名) 數筋の絲にて組みたる紐。まるうち・ひらうちの種類あり。賤亭環「細き打ちひもを、幾筋も寄せて拵へたるもあり」

うちひらく 打開 (自動四) ひろびろとしたり。 狂言「蔡六「つっと打ち開いた、景の好い庭でござる」

うちぶ 打歩 (名) 株券又は爲替手形等の價格が額面以上に騰貴したるとき、其の價格と額面價格との差額。

うちぶかんぢゃう 打歩勘定 (名) 打歩を計算するために設くる簿記の勘定科目。

うちふす 打臥 (自動四) 臥す。寢る。勢語「家にきてうちふせり」 枕八「まことに人は、うちふしやすむ所のあるこそよけれ」

うちふだ 打札 (名) たてふだ。たかふだ。 盛衰記「小松殿熊野參詣の次でに、彼の寺に參り給ひたりけるに、書き置き給へる打札あり」

うちふところ 内懐 (名) 最も肌に接近せる懷中。三世相錦繡文章「投げだす財布七郎助ことは取って、うちふところ」 内心。人の密事。「うちふところを見すかさる」 相撲などにて、胸部に接したる處の稱。

うちぶみ 内文 (名) 内印を捺す文。史官記「中納言藤公任卿中務著」 井外文・詰印畢、移著右仗座」

うちぶみ 氏文 (名) 氏の出處及び代代の事蹟を書きたるもの。「高橋氏文」 夫木三「もののふの八十氏文はかたかたに、行きわかれたる跡ぞ見えける」

うちふる (他動四) ふり捨つ。枕「いかで、さつれなく、うちふりてありしなら

うちべ 内邊 (名) うちのかた。うちがは。うちのところ。

うちべり 内耗 (名) 穀物を搗きて其の幾分を減ずること。又、其の減ずる量(外耗の對)

うちべんけい 内辨慶 (名) 内にては强けれども、外に向ひて弱きこと。内にてのみりきむこと。

うちほら 空虛 (名) うつろ(空)に同じ。名義抄「空(ウツホ)」 童蒙頌韻「園(ウツホ)」

うちぼり 内濠 (名) 内部のほり。(外濠の對) 應仁記「義政屋形と一所に持ち續けて、櫓・草楯密く擧げ、外堀・内堀掘り廻し」

うちほろぼす 討滅 (他動四) 打ちて平ぐ。攻め亡ぼす。欽明紀「殲撲(ウチホロボス)强敵」

うちまかす 打任 (他動四) まかす。一任す。 狂言「萬事この上は、打ち任せますぞ」 ありふれてあり。普通一通りの事とす。宇治拾遺「此の病ひのありさま、打ちまかせたる事にあらず」

うちまかせて は 尋常にては。一通りにては。大方は。一概にいへば。古事談「打ち任せては不可有事なれども」 著聞「うちまかせては云ひ出でがたかりける女房のもとへ」 遺藻抄「伯勞鳥とは何鳥ぞ。打ち任せてはもずといふ鳥なり」

うちまき 打撒 (名) 魔除けのため、米をまき散らすこと。おさんごう。散米。宇津保藤原「はらへすとも、うちまきによれいるべし」 源藤原「うちまきし散らしなどして、大だりがはしきに」 米俵。 こめ(米)をいふ、女詞。

うちまき-よね 打撒米 (名) うちまき(打撒)に同じ。

うちまき-をけ 打蒔桶 (名) おしをけ(押桶)に同じ。

うちまく 内幕 (名) 絲の一種。外幕(ソトマク)の内に張る故に名づく。上を横幅に、下を縱幅に縫ひ合はせたるもの。外幕より小なり。半幕。小幕。今川大雙紙「幕の名所中幕小幕とは内幕なり」 うちわの事。内部の事情。

うちまず 打交 (他動四) まず。混ず。混合す。

うちまぜ 打交 (名) 種種混ずること。混合。曾我會稽山「打ちまぜの狩りには鹿論も事喧しと、便りよき岡邊に場を構へ」

うちまた 内股 (名) うちもも(内股)に同じ。

うちまたがらやく 内股膏藥 (名) 彼れに附き此れに附き、一定の憲見なきものを嘲る詞。爲人抄「内股膏藥なる臣も、赤位を竊みて禄を犯し」 松風村雨東帶鑑「どちらへもつく内股膏藥」

うちまたがる 打跨 (自動四) またがる。またがりて乘る。

うちまたげ 打跨 (名) うちまたがること。東海道名所記「馬に乘れども、からじりは駄賃いくばくならず。うちまたげに飛びのり、赤坂まで來さしめんと」 ひきたてて行く」

うちまち 内襠 (名) 裁縫の語。股引の名所。

うちまつ 打松 (名) たいまつ(松明)に同じ。明月記「建仁三年二月二日「甲冑・弓箭以下、打松等」 吉根集「ひまもなく浪に入るなりしまつどり、うち松そへよ暗きかがり火」

うちまねく 打招 (他動四) 招く。手招きす。 源夕顔「わらはのをかしげなる出でて打ちまねく」

うちまはし 打廻 (名) 船具。樫の木を編み列ねたる小さき簾。帆桁に結び附け、滑らして帆を上下す。さるすべり。

うちまはす 打廻 (他動四) 椿へめぐらす。 狂言「東山のあたりに暮打ちまはし」 所きらはずたたく。方方たたく。狂言「あのやうに、棒でうちまはす相撲は、つひに取った事がござらぬ」

うちまめ 打豆 (名) 大豆を少し煮て乾かし、槌にて打ち扁めたるもの。汁などに入れて食ふ。 應節用「扣莢(ウチマメ)」 木工具。

うちまる 内丸 (名) 棒形をけづるための丸鉋(ウチンガ)。

うちまる 宇治丸 (名) うなぎのすし。山城國宇治の名産。 慈丁聞書「宇治丸といふは、うなぎのすし也」 毛吹草「城州宇治の鰻鮨、是れを宇治丸といふ」

うちまろ 内參 (名) さんだい(參内)に同じ。源竹馬「年の數そふままに、うちまるりより外のありきなど、うひうひしくなりにて侍れば」

うちみ 打身 (名) 料理の名。さしみ(刺身)に同じ。世俗立要集「初めの一こん、くらげ・打鮑にて、次うちみ」 料理の語。鯉の左の肉の稱(ひきみの對) 身體を打ち傷めて、時時痛みを感ずること。打撲傷。天神記「牛の脊よりころころとんと落ついれば中間所は濱邊の瓢箪酒、幸ひ打身の藥なる」

うちみ 打見 (名) ふと見たる樣子。

うちみ 内見 (名) うちのけんみ(内檢見)に同じ。

うちみしゃぐ (他動四) こなどなに叩きつぶす。曾我會稽山「物打より切先まで、刃を石にて叩き潰し、打ちみしゃいだる槌同然」 國姓爺「引き寄せて鉤捻ぢ取り、敵き挫き打ちみしゃぎ」

うちめ 氏女 (名) 古昔、諸氏より朝廷に貢する女。中務省式「凡諸氏貢氏女、若閏年卅巳下卅巳上時無夫者」

うちめぬき (名) うちくるぶし(内踝)をいふ。 江國の方言。

うちも 打裳 (名) 打ちて光澤を出だしたる絹物の裳。安法集「大宮のすけの君、ひはだ色のうちもを、法師のために借りて返すとて」

うちもがり 内虎落 (名) 虎落(モガリ)を二重に結びたる時、其の内方の虎落の稱。陣營にては大將の陣所の圍ひとす。

うちもの 打物 (名) 鍛へ打ちたる太刀・槍の類の總稱。保元(内閣文庫)「恐らくは、弓矢とても打物とっても、われこそあらめ」 古事談「打物取りたる者廿人許り圍繞之」 特に、なぎなた(薙刀)の稱。平家十一「薙刀」 親子・主從十四五人、打物の鞘をはづいて、父と一所に寄せ合ったり」 鍛へ打ちて作りたる金屬の器。(鑄物の對) 用明天皇職人鑑「鍛冶屋中間相槌も打ちに打物、もとは燒刃の燒物なれば」 槌にて打ちて光澤を出だすこと。又、其の布帛。宇津保初秋「御紅ぞめは、うちものなどせし所のべたう中間いみじく物染めさわぐ」 打ちて鳴らす小樂器の稱。即ち、鐘・鼓の類。新儀式「承香殿西簾下不立鼓所、打物皆在其間」 著聞「さらばうち物もこそつかまつらめとて、しひて乘りてけり」 乾菓子の一種。砂糖を加へたるみぢん粉を型に打ち込みて製りたるもの。 品物を贈へあふこと。狂言「その儀ならばうち物に致そ中間かものといへば同心してをりやるの」

うちものし 打物師 (名) 刀劍など鍛へ作る職人。

うちものよこし 打物汚 (名) 刃物

(にはのりだみちう)

(うきむちう)

を穢すのみにて、何のかひなきこと。謠太平記「汝等に向かつては打物よごしと思へども、時の敵は力なし」

うちもの-わざ 打物業 (名) 刀劍などにて戰ふ仕業。謠羅生門「打物わざにて叶ふまじ、手取にせんとて」

うち-もも 內股 (名) 股の內がは。內また。續古事談五「日神股にあり、燒き給ふべからず中略內ももと股異なり」

うち-もらす 討漏 (他動四) 取りにがして殺し得ず。狂言「孟嘗君と申す者、うちもらされて隣國へおちて行く時」

うち-や 打矢 (名) 一手突矢(テツヤ)の類。鏃・莖共に六寸許りにて、鏃は劒尻の如く、莖は多く雉の尾にて卷きたるもの。手にて投げうつ。二つぼなげ(投壺)をいへるなるべし。嬉遊笑覽 三射藝の語。童蒙先習「近き物の內、うち矢」 四的に中たりたれども、能く落ち著かぬ矢。四季草

う-ちやう 有頂 (名) うちやうてん(有頂天)の略。榮華根合「この娑婆世界は中略天上の樂みも五衰早く來たり、乃至有頂も輪廻期なし」 法華經「從₌阿鼻獄₋上至₌有頂₋」

うち-やうじ 打楊枝 (名) ふさやうじ(總楊枝)に同じ。人倫訓蒙圖彙「打やうじ・平楊枝」

うちやう-てん 有頂天 (名) 一梵語、阿迦尼吒(アカニタ)の譯。九天の中の最上の天。色究竟天。うちやう。二好む事に熱中して他を顧みざること。得意になりて我れを忘るること。毛吹草「月を見る人の心や有頂天」 東海道名所記「三味線を調べて一曲を謠へば、有頂天になりて」

うちやう-らん (名) 【植】蘭科、ちどりさう屬の多年生草本。莖の高さ五六寸、三四葉、莖の一側に偏して生ず。葉は狹披針形、又は線形、葉脚鞘狀をなす。花は六月頃開き、穗狀花序に排列し、各花は苞によりて抱かる。我が國、各所の山地に自生す。おほいはらん。がんせきらん。こてふらん。せきらん。

うち-やけ 打上 (名) 結婚後、夫が始めて妻の父母の家にゆくこと。美濃國の方言。嬉遊笑覽

うぢ-やっこ 氏奴 (名) うぢのやっこ(氏奴)に同じ。安閑紀「以₌河內縣部曲₋爲₌田部之元₋」

うち-やぶる 打破 (他動四) 一やぶる。二擊ちて敵を走らす。

うち-やめ (自動) 古語。〔うち病ませの約〕病ひにかからせ。記上「うれたくも鳴くなる鳥か、この鳥も宇知夜米(ヤメ)こせね」

うち-やる 打遣 (他動四) 一遣る。二捨て置く。放任す。源常夏「かひなを枕にてうちやられたる御ぐしの、いと長くこちたくはあられど」

う-ちゅう 雨中 (名) 雨の降る中。謠千手「今日の雨中の夕の空」 王維詩「雨中山菓落、燈下草蟲鳴」 杜甫詩「雨中百草秋爛死、階下決明顏色鮮」

う-ちゅう 雨注 雨の如く注ぐこと。吳志朱然「弓矢雨注、將士皆失レ色」

う-ちゅうじゃう 右中將 (名) 官名。うこんゑのちゅうじゃう(右近衞中將)の略。

う-ちゅうべん 右中辨 (名) 官名。ちゅうべん(中辨)を見よ。

うち-ゆき 內往 (名) 外に家を構へて住ましむる妾。

うち-ゆひ 內結 (名) 髮結が、招きに應ぜず、自宅に客を受けて業に從ふこと。

うち-よす 打寄 (自動下二) 一寄せ來たる。古今秋上「川風の涼しくもあるか打ちよする、浪と共にや秋は立つらん」 二馬に乘りて近づく。宇治拾遺二「なほ目のあらざりければ、ただうちにうちよせて見るに」

うち-よする (枕) 〔うちは接頭、よするはゆする(搖)の轉〕 駿河の國には急流の大河ありて、其の水音四方に動(ユ)り轟くより、もとはゆすり河と國名を負ひしならん。さればうちゆするゆする河の國とつづくる意にて、駿河の枕詞となれるなるべし。古義 萬三「なまよみの甲斐の國、打緣流(ウチヨスル)駿河の國と」

うち-よせる 打寄 (自動下一) うちよす(打寄)の口語。

うち-よりあひ 內寄合 (名) ないよりあひ(內寄合)に同じ。

うち-りやうず (他動サ變) なぶり苦む。折檻す。宇治拾遺五「おそろしげなる鬼どもの、わが身をとりどりにうちりやうじつるに」

うち-ろぢ 內露地 (名) 庭園にて、中くぐりより內の稱。

うち-ろんぎ 內論議 (名) 古昔、正月十四日、御齋會結願の日、內裡にて經文の意義を論爭すること。水鏡下「同年同月に、御齋會の內論義といふ事始まりしなり」

うち-わ 內輪 內曲 (名) 一一家內。家族間。二他人に示さぬ事。ないない。三うちば。ひかへめ。

うち-わかる 打別 (自動下二) わかる(別)に同じ。

うち-わかれ 打別 (名) 一別かること。二次條に同じ。

うち-わけ 打分 (名) 圍碁の語。互ひに一勝一敗して、遂に勝負を決せず打ち止むこと。うちわかれ。

うち-わけ 內分 (名) 本家の知行の內を末家に分かち、本家は猶其の全高の名義を稱し居ること。

うち-わけ 內譯 (名) 金錢・物品の總高の內を、更に小分すること。

うちわけ-しょ 內譯書 (名) 內譯を記載したる書面。

うちわ-げんくわ 內輪喧嘩 (名) うちわもめ(內輪揉)に同じ。

うち-わた 打綿 (名) 一繰綿を綿弓にて打ちたるもの。二古綿をうちかへしたるもの。

うち-わたし 打渡 (名) 領地を拜領したる人に、其の地所を引き渡したる證據の狀。わたしじやう。

うち-わたし 內渡 (名) 內金を拂ひ渡すこと。

うち-わたし (副) おしなべて。大方。源宿木「うちわたし世にゆるしなき關川を、みなれそめけん名こそ惜しけれ」

うち-わたす 打渡 (他動四) 一渡す。萬四「千鳥なくさほの川との淸き瀨を、馬打和多思(ワタシ)いつか通はむ」 二見渡す。記下「宇知和多須(ワタス)やがはえなす、き入りまゐくれ」 萬四「打渡(ワタス)たけだの原になくたづの、まなく時なし、我が戀ふらくは」

うち-わたり 內邊 (名) 禁中。內裏。大內。宇津保國讓中「行く先平かにも侍り思ふやうにも侍らば、內わたりの御うしろみはとなん思う給ふるを」 枕二「內わたりなどやんごとなきも、今日はみな亂れてかしこまりなし」

うち-わに 內鰐 (名) 鰐足(ワニアシ)の一。わにあし(鰐足)を見よ。

うちわ-もめ 內輪揉 (名) 家內の爭ひ。味方同志の紛諍。うちわげんくわ。

うちわわれ。內訌。

うち-わり 內割 (名) 內耗(ヘリ)にて減じたる量。(そとわりの對)

うち-わる 打割 (他動四) 一わる(割)を強めていふ語。叩き割る。落窪二「女はさは打ちわりて出でじ。甲のしたるなめり」 宇治拾遺二「額をうちわられたりしぞかし」 二うちあく。「打ちわつて言ふ」

うち-われ 內破 (名) 次條に同じ。

うちわ-われ 內輪破 (名) うちわもめ(內輪揉)に同じ。うちわれ。鎌田兵衞名所盃下「すは內わ割れ面白しと、心に笑みをぞ含みける」

うち-ゑ 打餌 (名) 飯に糠をまぜて餅の如くしたるもの。犬などの餌とす。

うち-を 打緒 (名) うちひも(打紐)に同じ。釋迦如來誕生會四「我が腕われも覺えず、白絲のうちを引きたる如くにて、延びて行くこそ不思議なれ」

うち-をさめ 打納 (名) 打つことの最後。唐船噺今國姓爺中「御劒既に成就と振り上ぐる、打ち納めの相鎚に」

うち-をしき 打折敷 (名) 折敷(ヲシキ)の一種。あしうちをしき(足打折敷)なるべし。高野日記「うちをしきに、粟のいひ・しそ鱒などいふ物とりそへ」

うち-をる 打折 (自動下二) をる(折)自動を強めていふ語。狂言腹突「あばら骨がうちをれた」

うち-をる 打折 (他動四) をる(折)他動を強めていふ語。ぶちをる。狂言腹突「そなたのを折りかやさねばきかぬ。はて荒い事をおしやる人ぢや。なんの荒い、打ち折って見せう」

うち-をれる 打折 (自動下一) うちをる(打折)自動の口語。

うち-んど 內人 (名) うちびと(內人)の音便。

うつ 鬱 (名) 氣のふさぐこと。心のはればれせぬこと。「鬱を散ず」

うつ (自動下二) 一負く。まける。〔相撲などに〕順集「ことの葉はこはく見ゆれどすまひ草、露にはうつるものにざりける」 著聞集祝言「とる手にははかなくうつる花なれど、ひくにはこはきすまひ草かな」 二おさる。まけてよわる。壓倒せらる。開竹「又寄りあひてとるに、此のたびは壇光うてにけり」 保憲女集「くれなゐのせに流れめや菊の花、霜にもうてぬ色ぞかなしき」

うつ 打 擊 (他動四) 一たたく。ぶつ。うちて鳴らす。記下「笹葉に、宇都(ウツ)や霰の」 萬四「みな人をねよとの鐘は打(ウツ)なれど、君をしもへばいねがてぬかも」 同十一「時もりが打(ウ)なす鼓よみ見れば、時にはなりぬ、あはなくもあやし」 勢語「俄かに親、この女を追ひうつ」 二打ちて火を出だす。景行紀「以レ燧出(ウチ)レ火之」 貫之集「をりをりに打ちて焚く火の烟あらば、心ざす香をしのべとぞ思ふ」 三打ちつく。打ちこむ。記中「はつせの川の上つ瀨にいくひを宇知(ウチ)、下つ瀨にま杭を宇知(ウチ)」 四著く。「鍬形打ったる兜」「紋所をうつ」 五砧にて打ちて光澤を出だす。枕四「かいねりうたせたるに」 謠元服曾我「うつを限りの秋衣」 六投ぐ。なげうつ。うちつける。宇津保藏開中「南のおとどより、かうじを一つ投げて大將をうつ人あり」 名義抄「抛ウツ・ナゲウツ」 七伐る。伐り採る。萬廿「さぬ山に宇都(ウツ)やをのとの遠かども、ねもとか、子ろがおもに見えつる」 八斬る。殺す。「首をうつ」 記中「くぶつつい石つついもち、宇知(ウチ)てしやまむ中略今宇多(ウタ)ばよらし」 九針など、刺し入る。つきこむ。「まち針をうつ」 狂言靑「今のやうに動かせられては、針がうたれませぬ」 十うちかけて縛る。「繩をうつ」 十一攻む。攻擊す。征伐す。欽明紀「殲₌撲(ウチホロボサム)强敵₋」 枕十「もろこしの帝中略此の國をうちとらんとて」 十二放つ。發射す。射中つ。「大砲をうつ」「鳥をうつ」 十三綿弓などにて、はじく。「綿をうつ」 十四騎馬にて行く。太平記三十七「手勢百騎とも二百騎ともうたせたる大名は、一人も參らず」 十五かりそめに作る。構ふ。設く。天智紀「于知(ウチ)橋のつめの遊びに出でませ、こ」 宇津保藤原君「賀茂川の邊にさじきうちて」 十六幕を張る。奉公覺悟之事「幕之事中略常は張るといふべし。敵を見かけてはうつといふべし」 謠夜討曾我「うち並べたる幕の內」 十七しめきる。閉づ。「木戸をうつ」「大門をうつ」 十八つくる。製作す。鍛へ作る。「刀劍をうつ」 唐船噺今國姓爺中「祕密を盡くし打つ劍」 十九打ちて延ばす。「箔をうつ」 二十組み合はす。「紐をうつ」 二十一糊にて張る。「紙の裏をうつ」 右京大夫集「ほぐえり出だして中略又さながらうたせて、文字の見ゆるがまばゆければ、裏に物おし隱し」 二十二ねりかため、麵棒にてうちて作る。「蕎麥をうつ」「饂飩をうつ」 二十三まく(撒)。投げ廣ぐ。「網をうつ」「碇をうつ」 狂言文相撲「鞠をなされうほどに、かかりへ水をうたせておけ」 二十四土地の測量をなす。反別を量る。丈量す。「檢地をうつ」 二十五圍碁・雙六等の戲れをなす。源宿木「碁をうたせ給ふ」 大鏡中「久しく雙六つかうまつらで中略此の御博奕は、うちたたせ給ひぬれば」 二十六田畠を鋤きかへす。耕す。記下「やましろめの、こ鍬もち宇知(ウチ)しおほね」 素性集「三月に田うつを」 二十七總金額の內、幾分を渡す。品物の交換などの、不足金を補ひ渡す。「手金を打つ」「其の外に何圓うつ」 二十八纏頭などを與ふ。「花をうつ」 二十九施行す。興行す。「灌頂をうつ」「芝居を十日間うつ」 三十駁擊す。批難す。「人の說をうつ」「批をうつ」 三十一ある所作をなす。あるありさまをなす。「もんどりうつ」「逃げをうつ」 和名四「擲倒(モンドリウツ)」 博多小女郎波枕中「脇差に手をかくれば、や、そりをうっておどかしても、割符を取らずに歸らうか」

うったり まうたり 一人して鼓などを打ちたり、或ひは舞ひたりす。一人して種種の事を兼ね行ひて、甚しく多忙なるに譬ふ。心中宵庚申上「半兵衞料理に心はせく、うったり舞うたり身は一つ」 女殺油地獄下「內のしまひと小拂と、油うったり舞うたりに、三人の娘の世話」

うつ つち は はづる とも 萬萬ある可からざることが、萬一ありとも。地を打つ槌ははづるとも。

うつ にも まふ にも 何事をするにも只一人にて。うったりまうたりを見よ。曾我會稽山三「うつにも舞ふにも京の小四郎」

(諺)打てば響く 一方に打てば他方に響く。原因あれば結果あるなどに譬ふ。當世誰身上「三人かための酒くみかはし、當分沙汰なしにしめし合はせけるが、打てば響くならひとや。此の事家中に隱れなく、ひたつぶやきにぞつぶやき合ひける」

うつ 棄 (他動下二) 古語。すつ。とり棄つ。散らす。記上「邊つ浪そにぬぎ宇弖(ウテ)」 神代紀上「吹棄(フキウツル)氣噴之狹霧」

うつ 內 (接頭) うち(內)の意を表はす語。內部。字鏡「韜(ウツボ)」 同「靫(ウツボ)」 [illegible]

うつ 打 (接頭) うち(打)接頭に同じ。「うったまげる」「うっつらにくし」 謠花月

「はいたる足駄をふんぬいで、大口のそばを高く取り、狩衣の袖をうつ肩ぬいで」

うつ（接頭）㊀全く・圓になといふ意を表はす語。神代紀上「全く・圓になといふ意を表はす語。神代紀上「全く・圓・刺・此云字都」播磨風土記「久なる意を表す語。「うつせみ」「うつゆふ」

うづ　渦（名）㊀水の流るる勢にて、輪の如く巻き廻はること。㊁渦巻の形したる物のあやの稱。うづまき。

うづ（名）古語。貴ぶべきものなること。貴厳なること。賞讃すべきものなること。神代紀上「珍此云于閦」祝詞式「祈年祭「豆」「能幣帛」萬葉「すめらが字頭」「のみ手もて、かき撫でぞねぎ給ふ」

うづ　烏頭（名）とりかぶとの根の名。周圍に附くを附子といふ。毒あり。藥用とす。本草「烏頭與附子同根。附子八月采、八角者良。烏頭四月采、春時莖初生有鬚、頭如烏鳥之頭故謂之烏頭」

うづ　堆（接頭）うづたかき意を表はす語。雄略紀「泰蹟庸調絹練充積朝廷」因賜姓曰禹豆麻佐。佐一云弟豆麻佐。

うつ-あさ　打麻（名）うつそ（打麻）をみのおほ君あまもてや、いらこが島の玉藻刈ります」

うつ-あし　内足（名）ひかがみ（膕）に同じ。ひきかがみ。宇鏡「膕窪」

うつ-いう（鬱憂）鬱憂。鬱悒。

うつ-いう-きやう（鬱憂狂）（名）精神病の一種。次條を見よ。

うつ-いう-びやう（鬱憂病）（名）精神病の一種。人と交じはるを厭ひ、物事に悲哀を感じ、ふさぎがちなる病。其の病勢の昂進したるものを鬱憂狂といふ。不意に自殺を企つることあり。

うつ-いふ（鬱悒）うついう（鬱憂）に同じ。司馬遷文「臣是以獨鬱悒而誰與語」

うつ-うつ（鬱鬱）（副）㊀氣のふさがるさまにいふ語。史記「吾亦欲東耳、安能鬱鬱久居此乎」㊁草木の繁茂したるさまにいふ語。文選古詩「鬱鬱園中柳」

うづ-うづ（副）うずうずに同じ。

うづ-かひ　鵜使（名）鵜飼を業とする人。うかひ。「諸國「是れは鵜づかひにて候が」

うつかり（副）うかと。うかり。ぼんやり。茫然。狂言「鳴山「ことの外ほほけまして、唯うつかりとなりました」同「三本柱「うつかりと心得た。どうしたものであらうぞ」

うつかり-づら（名）ぼんやりしたる顔容。蜻歌加留多「うつかりづらの旅人の腰のまはり・懐・念がけるとこっちの物」

うつかり-ばう（名）うっかりとしてゐる人を嘲る語。ぼんやり。

うつかり-ひよん（名、副）次條に同じ。本朝三國誌「大將始め氣を奪はれ、魂ぬかしてうつかりひよん」

うつかり-ぼん（名、副）うっかりしたる狀をいふ語。又、其の人を嘲りいふ語。ぼんやり。うつかりひよん。

うつかり-もの（名）うっかりとしたる者。うっけもの。

うつき（鬱氣）㊀こもりて開けぬ氣。㊁心の晴晴せぬこと。心のふさぐこと。賀古教信七墓廻「鬱氣の病日に增さり、今を限りと衰へて氣み少なくなりけるが」

うつぎ　溲疏（名）【植】虎耳草科、溲疏屬の落葉灌木。幹の高さ五六尺。葉は對生にして橢圓形鋸頭、鋸齒を有し、粗慥なり。短き葉柄を具ふ。花は白色にして穂狀花序に排列し、五六月の頃開く。我が國、各地の山野に自生す。又庭園に栽培して觀賞用に供せらる。うつげ。うのはな。かきみぐさ。くさうつぎ。くちべにうつぎ。しろうのはな。なつゆきぐさ。はめぎ。ひきたて。卯木。

（ぎつう）

うつぎ（名）【植】くさぎ（海州常山）の異名。

う-づぎ　卯月（名）（卯の花月の略と）陰暦四月の稱。萬「四月（ウヅキ）」とさつきのほどに、藥がりつかふる時に」枕「うづきのつごもり」

うづきのいみ　卯月忌　陰暦四月賀茂祭の前、神事に預かる者、潔齋の爲めに引き籠もること。金葉「歸る春卯月のいみにさしこめて、しばしみあれのほどまてもこん」

うづきのみしめ　卯月御標　うづきのいみ」にこもる時、ひき渡す注連繩。新六帖「ちはやふる卯月のみしめ改めて、きねが諸聲はやうたふなり」

うつぎ-がき　卯木垣（名）次條に同じ。拾玉「春夏をへだつる宿の卯木垣、咲かぬかたには營ぞなく」

うつぎ-がきね　卯木垣根（名）うつぎを生け垣にしたる垣根。枕「うつぎ垣根といふものの、いと荒荒しうおどろかしげにさし出でたる枝どもなど多かるに」

うつぎ-どり　卯月鳥（名）【動】ほとときす（子規）の異名。

うつぎ-の-はな　卯月花（名）うのはな（卯花）の異名。新六帖「神まつる卯月の花の白妙に、ゆふとりしてて山かつらせり」

うつぎ-のゆき　卯月雪（名）前條に同じ。

うづぎ-ばな（名）【植】しゃくなげ（石南）の異名。

うつぎ-はら　卯木原（名）溲疏（ウツギ）の生ひたる野原。曾丹集「うつぎ原てこなが布を晒せると、見えしは花の咲けるなりけり」

うづぎ-ぼん　卯月本（名）謠曲の版本の、最も早くできたるもの。

うつく（他動四）古語。いつく。助く。かしづく。宇鏡集「弼ウツクハム」

うづく　疼（自動四）づきづき痛む。ひびき痛む。著聞「木橋にて四月の頃、盗人をとらへて問ひましめ置きたりけるに、その盗人のよみ侍りける。はきまれて足はうづきの子規、鳴きは」をれども問ふ人もなし」發心集「うづきひびらき、身もほとほとりて」

うつくし（名）（うつくしよしと鳴くより名づく）【動】つくつくぼうし・寒蟬の異名。夫木「わがやどの妻はねよくや思ふらん、うつくしといふ蟲のなくなく」

うつくし　愛（形）いつくし。愛すべし。愛らし。齊明紀「于都倶之根」萬「めこ見ればめぐし宇都久志」同「天つしのいづれの神を祈らばか、有都久之母」に又ことはむ」

うつくし　美（形）㊀形うるはし。あてやかなり。つややかなり。きれいなり。竹取「三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり」宇鏡「娃窈窕美淑」㊁心ふるはし。行ひいやしからず。竹取「心ばへなど、あてやかにうつくしかりつることを見ならひて」㊂いさぎよし。さっぱり、水鳥のあをばの山の色づく見れば」

したり。三世相錦繡文章「厭きたによって、うつくしう別かれてくだんせ」

うつくしがる　愛（他動四）うつくしと思ふ。かはゆく思ふ。枕「松君のをかしう物の給ふを、誰れも誰れもうつくしがり聞こえ給ふ」

うつくしけ　愛（形）うつくし（愛）の活用、うつくしきの訛り。萬「おほ君のみことかしこみ、宇都久之氣」まこがは難れ鳥づたひ行く」

うつくしーけ（副）うつくしさう。宇津保「藤原「男みこたちはいとうつくしげに形よく、人に譽められつつ數多もたり」源「藤原「いとにほひやかに、うつくしげなる人の」

うつくしげ-さ（名）うつくしげなる皮合。うつくしきさま。大鏡「うつくしげさ添ひ給へり」

うつくしーさ（名）うつくしき度合。うつくしきさま。

うつくしーづま（名）㊀かはゆき夫。萬「やそとものをと、出でゆきし愛夫（ウツクツマ）は」㊁かはゆき妻。萬「なみくもの愛妻（ウツクツマ）と、こととはず別かれしければ」

うつくしび　慈愛（名）うつくしみ（慈愛）に同じ。續紀「其王立操厚懷、本乖仁義（ウツクシビ）」崇神紀「汝等二子慈愛（ウツクシビ）共齊」德・王澤記「恩」鴻恩記「恩」

うつくしぶ　慈愛（他動四）うつくしむ（慈愛）に合じ。顯宗紀「兄友（ウツクシビ）弟恭、不易之典」名義抄「仁・惠（ウツクシブ）」

うつくしま（副）うつくづくさま。いそがしげ。宇鏡集「驟（ウツクシマシマシ）」

うつくしみ　慈愛（名）うつくしむこと。うつくしび。慈愛（ア）。恩惠。崇神紀「神・恩（ウツクシビ）」古今序「あまねきおほんうつくしみの波、やしまの外まで流れ」

うつくしむ　慈愛（他動四）いつくしむ（慈愛）に同じ。うつくしぶ。かはゆがる。宇津保「俊蔭「見る人抱きうつくしみて」枕「にくげなる兒を、おのれがこころにかなしと思ふままに、うつくしみ遊ばし」

うつくし-もん　美者（名）うつくしき者。美人。京阪の方言。

うつくし-よし　寒蟬（名）ひぐらしのなくこと。散木集「をみなへしなまめきたてるを、うつくしよしとせみの鳴くらん」

うつ-くつ（鬱屈）心のふさがり開けぬこと。韓愈詩「閉鑑聽其去鬱屈尚不平」

うつくまり　蹲（名）うづくまること。著聞「僅かに岩の上に蹲居（ウツクマリ）して、存命ほとんどあぶなかりけり」

うづくまる　蹲（自動四）㊀膝を折り立てて居る。雲異記「蹲（ウツクマリ）」著聞「うづくまりて居たりけるを見れば、股の程に黒き布を引きまとひたりけり」㊁獄、前足を立ててすわる。

うづ-くり（鵜頭作）に同じ。

うつけ　空（名）㊀中うつろなること。名義抄「虛（ウツケ）」㊁ぼんやりしたること。又、その人。傾城島原蛙合戰「佛を侮るばかりで無い、人をうつけにするは、醉狂か亂氣か」かた言「かしましや此の里すぎよほとときす、都のうつけさこそ待づらめ」塵袋「うつけ-と」

うつけ-ごと（名）【植】うつぎ（溲疏）の異名。

うつけ-ごと　空言（名）うはのそらの言。

うっけつ　鬱結　氣のふさがり結ぼること。莊子「天氣不和、地氣鬱結」中論「おほひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香をもてはやされたる」

うつし　移（名）㊀移すこと。枕「菊紀「神・恩（ウツシビ）」古今序「あまねきおほんうつくしみの波、やしまの外まで流れ」慈惠記

うつけつ　鬱血　氣血の滯ること。充血。

うっけつ-れうほう（鬱血療法）（名）充血せしめて治療する外科療法。

うつけ-め（名）うつけたるを卑しめいふ語。あほう。まぬけ。生玉心中「やいうつけめ、おのれ商人の、又しては又しては、店をあけて餘所歩き」

うつけ-もの（名）うつけたる者。ばかもの。うつかりもの。娥歌加留多「やいそこなうつけ者、その樣な使するものか」

うつける　空（自動下）㊀中うつろになる。神功紀「如鹿角、以無實（ウツケ）國也」㊁心茫然（ウツケ）してあり。顯宗紀「老髦虞（ウツケ）羸」狂言「三人」扨も扨も、うつけたこと致した」同「何處」「新市」うつけた人ぢや。それはたれが損ぢや。そこな人」

うづと　何處（代）古語。いづこ（何處）に同じ。どこ。景行紀「其何處（ウヅコ）有善射者」

うっこんさう（鬱金香）（名）【植】百合科、山慈姑（ウヅ）屬の多年生草本。地下に鱗莖を有す。地上莖は二尺餘、單一なり。葉は廣披針形、又は披針形にして、莖頂に單生し、五六月の頃開き、甚だ美し。品種極めて多きを以て花色一ならず。近年舶載の花草なり。ちうりっぷ。

うっこんさう-じゅ（名）【植】ゆりのきの異名。

うっ-さん（鬱散）鬱したる氣を散らすこと。うさはらし。氣ばらし。

うつし　移（名）㊀移すこと。枕「菊中島おほひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香をもてはやされたる」㊁うつしばな（移花）の略。萬「秋の露は移（ウツ）なりけり、水鳥のあをばの山の色づく見れば」㊂うつしぐら（移鞍）の略。名義抄「移鞍（シウツ）」宇津保「初瀬「伸忠のるともがなかるべき御馬、うつしおかせ給へ」源「夕顔「あしとき御馬にうつしおきて」圖うつしのうま（移馬）の略。宇津保「初瀬「中將うつしに乘りて、車のながえ近くそひて立つ」

うつし　寫（名）㊀寫すこと。㊁寫しとりたる書又は畫。奴師勢之「俳諧師の造れる海の幸といふ書あり。魚の正うつしなり」㊂本書の外、扣へに寫しおく文書。謄本。圖原品に擬へて造ること。又、其の物品。

うつし（名）【植】つゆくさ（鴨跖草）の異名。

うつし　現（形）㊀現（ウツ）なり。生きてあり。あらはなり。現在なり。記上「宇都志夜（ウツシ）青人草」神代紀上「顯（ウツ）此云于都斯（ウツシ）」顯宗紀「顯（ウツ）」㊁心たしかなり。萬「うつせみの宇都思（ウツシ）心も我れはなし、いもをあひ見ずて年の経ぬれば」

うつし-あやまり　寫誤（名）うつしあやまること。誤寫。

うつし-あやまる　寫誤（他動四）うつしちがふ。誤寫す。

うつし-あをひとぐさ　現青人草（名）この世の人。うつしびと。神代紀下「顯見蒼生（ウツシアヲヒトクサ）」者、如木華之俄遷轉當衰去矣」

うつし-いはひ　顯齋（名）神を祀るに現にいますさまにつかふること。神・武紀「顯齋（ウツシ）」

うつし-いろ　移色（名）移し花にて染めたる色。月草の花の色。濱松「いろ

いろにこきまぜたる上に、うつし色なる織物を著たり」

うつし-らま 移馬 (名) うつしのうま(移馬)に同じ。宇津保(藤原)御庭よりうつし馬どもひきたり」

うつし-おほみ 現大身 (名) 次條に同じ。

うつし-おみ 現大身 (名) おほかたの神の如く形を隱し給はずして、現に見え給ふ御身。天皇の尊稱。現人神(アラヒト)。記上「恐我大神、有二宇都志蔡美(ウツシ)者不一覺白而」

うつし-がみ 移紙 (名) うつしばなにしたる紙。

うつし-くさ 移草 (名) 【植】つゆくさ(鴨跖草)の異名。

うつし-ぐら 移鞍 (名) 移(ウツ)の馬に用ふる鞍。古昔は近衛次將などの大賞會御禊行幸の時用ひしもの。後には隨身などの料となり、又乘る人の定まらず移り替はる鞍にもいふ。うつしのくら。東鑑十五、建久六年三月十七日「將軍家御二參大佛殿一中略此鞍一口、令二手搔令十列之移鞍一、同寄進之」

うつし-ごころ 現心 (名) 一うつしき心。常の心。正氣(シヤウキ)。萬三「ますらをの現心(ウツシゴヽロ)も我れはなし、夜昼わかず戀ひしわたれば」同三「うつせみの宇都思情(ウツシゴヽロ)も我れはなし、妹をあひ見ずて年のへぬれば」二移り心。變はる心。萬三「百に千に人はいふとも、月草の移情(ウツシゴヽロ)は我れ持ためやも」古今(春上)「いで人はことのみぞよき、月草のうつし心は色ことにして」

うつし-ごと 現事 (名) うつし心にてなすわざ。正氣にてするわざ。取替(ヒ)「これこそは世の常のことなれ、年ごろの御ありさまは、うつしごととやおぼしつる」

うつし-ざま 現狀 (名) うつしきさま。あらはなるありさま。普通のありさま。源(須磨)「おほやけのかしこまりなる人の、うつしざまにて世の中にありふるは」同(蓬)「ここら世をもて靜め給ふ心みな亂れて、うつしざまにもあらず」

うつし-ちがふ 寫違 (他動ハ) うつしてあやまつ。うつしあやまる。誤寫す。

うつし-ちがへ 寫違 (名) うつしちがふること。うつしあやまり。誤寫。

うつし-どの 遷殿 (名) 本宮に遷さんとする前、假りに神體を安置しおく所。增鏡「春日の御禊、うつしどのにおはしますころにて」

うつし-とる 移取 (他動ラ) 移しかへてこなたにひきとる。宇津保(初瀬)「此の螢を中略なほしの御袖にうつしとりて」

うつし-とる 寫取 (他動ラ) 一こなたに書きとる。うつす。二原物の通りにす。摸寫す。摸造す。宇津保(藤原)「師に法など受け盡くして賢き智慧なりければ、みなうつしとりて行ふをも」源(螢)「ほかにては、同じかほをうつしとりたると見ゆるを」

うつし-の-うま 移馬 (名) 諸國の牧場に飼ひ置たる馬を徵して、左右馬寮に飼ひ置く馬。うつしうま。宇津保(藤原)「大嘗御禊公卿唐鞍中略近衛次將、移馬結唐尾」

うつし-の-くら 移鞍 (名) うつしぐら(移鞍)に同じ。宇治拾遺「うつしの鞍廿具、鞍かけにかけたりけり」

うつし-の-はひ 移灰 (名) 紅色を染むる灰なりといふ(和訓)。(藤原)のうつしの灰や染めつらん、八しほの岡の紅葉しにけり」

うつし-ばな 移花 (名) 染料の一種。つゆくさの花を摘み、紙に移し置くもの。あるがみ。あをばな。東鑑十二、建久三年十二月廿日「移花十五枚」

うつし-びと 現人 (名) 普通の人。在俗の人。源(手習)「うつし人にては、世におはせんもうたてこそあらめ」

うつし-びと (名) 眞實の情ある人。誘(蜻蛉)「鳥でふ人をそどりも心して、うつし人とは誰れかいふ」

うつし-ぶみ 移文 (名) くわいじゃう(回狀)に同じ。

うつ-しほ 渦潮 (名) 渦卷く潮。萬六「これやこの名におふ鳴門の宇頭之保(ウツシホ)に、玉藻刈るとふあま少女ども」

うつし-ぼん 寫本 (名) 一原本より寫しとりたる書。謄本。二書きたる書。(版本の對)しやぼん(寫本)。三うつしもの(寫物)に同じ。

うつし-まこ (名) 眞實の子。一說、美しき子。萬七「ほととぎす中略營の宇都之眞子(ウツシマコ)かも」

うつし-み 現身 (名) 現在せる身。うつせみ。

うつし-もの 寫物 (名) 書物など寫し書くこと。又、其の書きたるもの。書き物。うつしぼん。

うつ-しやう 現世 (名) 人の世。げんせ(現世)。

うつし-ゑ 映繪 (名) 暗室などにて、光線の作用により、がらすに畫きたる繪などを映し出だすもの。かげゑ。轉遊笑覽「今の、硝子に繪をかきて彩色したるうつし繪も、予が幼きころより見しものなれど」

うつし-ゑ 寫繪 (名) 畫き寫したる繪。回國雜記「うつし繪の扇がやつやこれならん、月はうな原、雪は富士のね」變生隅田川「はあ、これは誠の鯉、寫繪とはさらさら思はれず。これはこれはと感じける」

うつす 移 (他動サ) 一座を變はらす。物を置き變ふる。萬七「秋さらば移ツ(ウツ)る時にもせむと我が蒔きし、からあゐの花を誰れかつみけむ」勢語「うつ(移)し植ゑば秋なきときや咲かざらん、花こそ散らめ根さへ枯れめや」宇津保(俊蔭)「わが宿にうつしてしがな、野邊に出でて見れどもあかぬ花の匂ひを」二かはらす。變ず。轉ず。源(宇治)「けふぞ知る空をながむるけしきにて、花に心をうつしけりとは」三色をすりつく。拾遺(雜秋)「秋の野の花のいろいろとりすべて、我が衣手にうつしてしがな」四病など傳染せしむ。枕「ものけにいたうなやむ人にや、うつすべき人とて、大きやかなるわらはの」五過ごす。經過せしむ。徒然草「むやくなる事をして時をうつすを、愚かなる人とも、ひがごとする人ともいふべし」六贈る。廻はし達せしむ。「書を移す」

うつし かたる 移語 傳へ語る。其の儘を話す。まねて話す。源(螢)「かくなんとうつしかたれども、物ものたまはねば」

うつす 映 (他動サ) 一物の影を表はす。光線を引く。拾遺(雜秋)「水うみに秋の山邊をうつしては、はたはり廣き錦とぞみる」榮華(御裳)「御影中略いかにしてうつしとめけん雲井にて、あかずかくれし月の光を」二透かし通す。すかす。

うつす 寫 (他動サ) 一文字又は畫圖を、原物に振へて書きとる。寫寫す。臨寫す。宇鏡(藤原太加太岐)「枕(ありなの)の「物語」

集など書きうつす本に墨つけぬこと」二書き取る。書く。「書を讀み字を寫す」三原物に擬へて作る。他の所爲を學ぶ。履中紀「爲見得(ウツ)忠直者、欲明臣之不欺」枕「ことさらに昔の事をうつし出でたり」名義抄「摸(ウツ)」四光線の作用によりて物の形を印象せしむ。「寫眞をうつす」

うつ-す 鬱 (自動サ) 氣滯る。心ふさぐ。

うつ-す 鬱 (他動サ) 一閉ぢて開けず。二蒸す。「麴をうつす」

うつ-すら 薄 (副) 次條の轉。八笑人(三遍)「目のまはりを、うつすらとぼかさうか」

うつ-すり 薄 (副) 薄く。うすうす。うっすら。「うつすり染まる」

うつ-せ (名) 次條の略なるべし。源(藤袴)「いかなるさまにて、いづれの底のうつせにまじりけん」

うつせ-がひ (名) 一肉なき介殼。かひがら。萬三「すみのえの濱に寄るとふ打背貝(ウツセ)、みなきこともて我れ戀ひめやも」二(動)うづらがひ(鶉貝)の異名。

うつ-せき 鬱積 (鬱ヨリ積モルこと。心のむすぼゝること。張華詩「懷思豈不一隆、感物重鬱積」李時勉文(北京)「定碑鑄而鬱積、專搥衛手邦藏」

うつせ-み 現身 (名) 「現身(ウツシ)の轉といふ」世に現在する身。生存してある身。うつしみ。うつしま。現世。萬三「宇都勞美(ウツセ)もかくのみならし」同三「宇都世美(ウツセ)は戀をしげみと、春まけて思ひしげけば」

うつ-せみ 空蟬 (名) 一蟬のぬけがら。古今(夏)「うつ蟬はからを見つつもなぐさめつ、深草の山烟だにたて」二(動)轉じて、蟬。後撰(夏)「うつせみの屏聞くからに物ぞ思ふ、われもむなしき世にしまへば」三けい(磬)の異名。叩きたる音、蟬の屏に似たるよりいふ。(筑波集)「說法しげる道場に、鳥の形なるうつせみの侍りけるを、聽聞の人中より、うてどもたたぬ鳥もありけり」

うつせみの 空蟬之 (枕) うつせみは現身(ウツシ)の義にて身(ミ)・命(ノチ)・人(ヒト)又は世(ヨ)などにかゝる。萬三「打蟬乃(ウツセミノ)命を惜み波にぬれ、いらどの島の玉藻刈りをす」同四「宇都蟬之(ウツセミノ)人目をしげみ、いは橋のま近き君に戀ひわたるかも」

うつ-ぜん 鬱然 (副) 草木などの、盛んに茂る狀にいふ語。

うつ-ぞ 打麻 (名) 古語。苧をうむ料によく打ち和げたる麻。一說、うつは全の義、工を加へず、直ちにうむべきよき麻。萬三「少女らがうみをのたたり打麻(ウツの訓)かけ、うむ時なしに戀ひわたるかも」

うつ-ぞう 鬱怨 (副) こんもりと繁るさま、又物の盛んなるさまにいふ語。後漢書光武(帝)紀「望二氣者至二南陽一、曰、氣佳哉、鬱鬱葱葱」

うつ-ぞく 鬱塞 氣のこもりふさがること。劉(資)文(正)賦「低徊鬱塞、以俟二陛下感悟一、然後盡二其啓沃耳一」

うつ-そみ (名) うつせみ(現身)に同じ。うつしみ。萬三「宇都曾美(ウツセ)と思ひし時に」同三「宇都曾美(ウツセ)のやそとものをは」

うつそ-やし (枕) 「やしは助辭」うちそはしに同じ。萬三「打十八爲(ウツ)古(ノ)の訓をみの子ら」

うつ-そり (名、副) うっかり又茫然とすること。又、その者。うつけもの。曾根崎心中「銀を握つて歸られしを、此のうつそりが夢にも知らず」槍樞三上「色の上にてたらしこみ、眞の臺子傳授の卷物してやり、樞三めにうつそりさせう」

うつそり-もの (名) うつそりとしたる者。うつけもの。

うつそ-を 打麻 (枕) 古語。打麻(ウツ)を績(ウム)といふより、うむにかけ、又麻(ウツ)にかけていふ。萬「打麻乎(ウツの訓)をみのおほきみ海人なれや、いらどが島の玉藻刈ります」

うつ-た 打田 (名) 打ち耕す田。すきかへす田。萬三「打田(ウツ)にも稗はあまたにありといへど、えらえしし我れぞ夜ひとりぬる」

うつ-たい 鬱滯 ふさがり滯ること。浦島年代記「おほし惱みの御心鬱滯し、御足の起ち居ままならず」淮南子「血脈無二鬱滯一、五藏無二菑氣一」

うづ-だいこん 渦大根 (名) 【植】あかぢさ(紫陽花)の異名。

うつ-たう 鬱陶 (副) 心のふさがりて晴れやらぬさま、又煩はしく思ふさまにいふ語。書經(五子之歌)「鬱陶乎予心」孟子(萬章上)「鬱陶思君爾」注「鬱陶、思之甚而氣不得伸也」

うつ-たう-し 鬱陶 (形シク) 一はればれせず。氣が塞ぐ。「うつたうしく曇る」二煩はし。うるさし。「髮の毛がうつたうし」

うつ-たうし-さ 鬱陶 (名) うつたうしくある狀。

うづ-たか-さ 堆 (名) うづたかきこと。うづだかき度合。傲慢なる態度にもいふ。大鏡冠「ちっとも臆せず悠然と、上座に著すうづ高さ」

うづ-たかし 堆 (形シク) 盛りあがりて高し。宇治拾遺「うづたかくふたおほはさぬ、きぬなどもことのほかにあり」

うつ-たつ 打立 (自動タ) うちたつ(打立)に同じ。しゆったつす。諸(雜)「物の具し、唯今うつたつ氣色見えて」

うづ-たで (名) 【植】げたて(毛蓼)の異名。

うつた-どり (名) 【動】ほととぎす(子規)の異名。(藤原)

うつたひ-ひめ (名) 夏を主る神。(藤原)(和訓)篠目抄「名にしおふうつたひ姫の春日山、夏の梢は花のまにまに」

うつ-たふ 訴訟 (他動ハ) 「うたふの音便」一官府に申し出づ。申し出でて、事の是非・曲直の判決を請ふ。訴訟をなす。うたふ。二神に告げて救助を請ふ。「病を神靈に訴ふるは愚なる人なり」三人に告げて判斷を請ふ。「廣く世人に訴ふ」四或る手段によりて事の解決をなす。「腕力に訴ふ」

うつ-たへ 訴 (名) うったふること。訴訟。「三代實錄十、貞觀七年、刑部奏言、承前之例、訓二刑部省一(醍二訴訟(ウツタヘ)之司一」刑事訴訟法(第六十)「裁判所に訴を爲す可し」

うつ-たへ の きゝか 訴却下 訴訟を受理したる裁判所が、造式の訴へ又は受理・審判すべからざる訴へなどの事由を發見したるとき、原告に其の訴訟を却戻すること。民法(第百四十九條)「訴の却下」

うつ-たへ の とりさげ 訴取下 適法に起訴せられて管轄裁判所に繫屬する訴訟を、原告の意思によりて裁判所より離脫し、其の訴訟手續を追行せしめざること。民法(第百四十九條)「訴の却下又は取下の場合」

うつたへ（副）ひたすら。ひとへ。ひとむき。一概。萬葉「打妙にまがきの委見まくほり、ゆかむといへや君を見にこそ」同「梯にも手は觸るとふを、打細に人妻といへば觸れぬ物かも」李花集「木曾ち川うつた〻瀾瀾の波ならば、行きめぐりても立ちかへらまし」

うたへたたすつかさ　刑部省（名）きやうぶしやう（刑部省に同じ。

うたへ-にん　訴人（名）訴へをする人。そにん（訴人）。

うたへる　訴（他動下）うたふ（訴）の口語。

うつたまける（自動下）たまげるを強めていふ。いたく驚く。浮世風呂「獵師い、夫れ見てうつたまげただあ」

うつたゆ　訴（他動ヤ）うつたふ（訴）の訛り。田世景清「南都の大佛御再興ましまし、既に成就とうたゆれば」

うつたらそう　〔鬱多羅僧〕（名）梵語。上著衣と譯す。七條の袈裟の稱。飜譯名義集「鬱多羅僧、此譯上著衣」

う-づち　卯槌（名）惡鬼を避くるまじなひにするもの。古昔、禁中にて、正月初卯日に絲所より造進す。支那の剛卯の遺風にて、玉又は犀角・象牙、又は桃木を四角に作り、長さ五色の組絲をさげたる物。江次第「絲所造卯槌（識人版之結附畫御帳）懸角柱（副立細木爲柱、槌末出五尺許。可用桃木。又四方可削。近代丸也、失歟）枕（五寸許）五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに、かしら包みなどして」

（うづち）

うつちやらかす　打棄（他動ヤ）なげやりにす。手をつけずに捨てて置く。

うつちやり　打遣（名）相撲の手の一。相手の腰などの浮きたるに乘じて、我が背後にのめり倒れしむること。

うつちやる　打遣（他動ラ）なげやりにす。打ち捨てて置く。投げ捨つ。拋棄す。傾城買二筋道「まあうつちやって置いてくんな」

うつ-ちん（名）うつけもの。ぼんやり。まぬけ（人を罵る語）。河東節「顔出しもせぬうぶ神は、野暮けんじんか、うつちんか」

うつつ　現　顯（名）〔ヰ〕死に對して、世に現在してあること。〔ロ〕夢に對して、心の苦迫の狀態にあること。正氣。萬葉「宇豆都（ウツ）には逢ふよしもなし、ぬばたまの夜のいめにを、つぎて見えこそ」枕「うつつの人の乘りたるとなん、更に見えぬ」名義抄「魯（ウツ）」〔ハ〕心のさだかならぬ境にあること。まぼろし。

うつつ　ね　現無　うつつなし（現無）の略。謠「うつつなや、かかる隈しき隈が屋に、何の宣旨の候べき」同「丸「うつつなの我が妻や」

うつつ　ねげ　現無氣　うつつなきさま。うつつなささう。本朝三國誌「うつつなげなる御ありさま」

うつつ　なし　現無　本心がなし。物くるはし。增鏡「心ばえなども、いかにぞやうつつなく」

うつつ　の　やみ　現闇　やみのうつつ（闇現）に同じ。やみ（闇）の條を見よ。新拾遺集「世の中のうつつの闇に見る夢の、驚くほどは寢てかさめてか」

うつつ　の　ゆめ　現夢　暫時逢ふこと。逢ひてやがて別かるるを、夢のはかなきに譬ふ。多くは男女の上にいふ）續後撰「逢ふと見てさめにしよりもはかなきは、うつつの夢の名殘なりけり」

うつつ　を　ぬかす　心を奪はる。夢中になる。博多小女郎波枕「そりやこそ、お目と色めいて、毛剃が連れどもうつつを抜かし、顏に餘念はなかりけり」

うつつい　美（形口語）うつくし（美）の活用なる、うつくしきの約轉。大黑「うついあねえの袖つまは、ひくて數多であろぞいな」

うつつ-がほ　現顏（名）現在せる如き樣子。新勅撰「契りしも見しも昔の夢ながら、うつつがほにも濡るる袖かな」

うづ-つく（自動ヤ）〔ヰ〕うづく（疼）に同じ。〔ロ〕ぐづぐづする。ぐづつく。世間手代氣質「一生秀でずに、うづついて居やうとは節甲斐ない」

うつつ-ごころ　現心（名）うつし心。本心。正氣。源氏「十二段長生鳥臺「ただ御眠り勝ちなるにぞ、現心もつき給はず、夢路を辿る如くにて」

うつつ-ちや　內津茶（名）江戶時代、尾張國春日井郡內津より產出せし煎茶。

うつつ-びと　現人（名）現に此の世にある人。狹衣「かうまでうつつ人にて見るべかりし人かは」

うつ-つらにくし（形）つらにくしを强めいふ語。狂言「猫も輪廻の妄執は、此の年までも數奇のさからぬ姥竹の戀しさは、我れながらうつつらにくや」

うつて　討手　打手（名）〔うちて の音便〕韓・蛟軍又は部人を追捕する者。平家十二「北條四郎時政に六萬餘騎を差し副へて、うつて に上ぼせらる」

うつて　打棄（他動）打ち棄ての約。萬「さばへなす騷ぐ子どもを宇都豆（ウツ）ては、死には知らず」

うつて-かはる　打變（自動ラ）急に變はる。今くらうらうへとなる。菅原傳授手習鑑「是れまで敵と思ひし松王、打てかはつた所存はいかに、いぶかしさよ」

うつ-てがへ　打替（名）〔ヰ〕祝れと此れと入りかはること。〔ロ〕圍碁などにて前と反對になること。あべこべ。

うつ-てつけ　打附（名）丁度よく適當すること。極めて相應なること。「あの人にはうつてつけの仕事」

うつてん-ばつてん（句）うんでいばんり（雲泥萬里）の訛り。浮世風呂「おらがわけえ時代の行作とは、うつてんばつてんのちげえだあ」

うつとし（形）うつたうし。

うつとしい（形口語）前條の口語。

うつとしいさ（名）うつとしくある度合。うつとしきさま。

うつとり（名、副）氣を喪へる如きさまにいふ語。又、その人。恍惚。醒醉笑「その座にありしうつとり、ふと立ち」鷹筑波「來ぬを待つ我れぞうつとりほとときす」壽門松「別れのつらさに、うつとりと氣抜けの如く」

うつ-なかじまーせん　宇津中島錢（名）元文元年紀伊國名草郡宇都村及び中島村にて鑄造せし寶永銅錢。徑八分五厘・重量九分と、徑八分强との二種あり。新寶永錢譜「宇津中島錢」

うつ-なし（形）古語。疑ひなし。たしかなり。神武紀「破之必也（ウツナシ）」皇極紀「其勝定之（ウツナシ）」

うつなひ（名）古語。うづなふこと。承諾。

うつなふ（他動ハ）古語。うべなふ。うけがふ。うけいる。承諾す。續紀「天坐神・地坐祇乃相于豆奈比（ウツナヒ）奉」

うつ-ぱしる　走（自動ラ）はしる（走）を强めていふ。おっぱしる。膝栗毛「に逆めあ、あに知らずにうつぱしして、仕合せだあ、のし」

うつ-はた　打服（名）打ちて和かにしたる布帛。令集解「麻績連等、麻績面、敷和御衣織奉中臣敷和者宇都波多也」

うつ-はた　內幡（名）裁縫せずして衣裳となるやうに織るきぬ。常陸風土記「所織服自成衣裳、更無裁縫謂之內幡」

うつ-はーもの　器物（名）〔ヰ〕うつは（器）に同じ。和名「瓷器之乃奈豆」勢語「けこのうつはものに盛りけるを見て」〔ロ〕器物。器具。乘仁紀「田器（ウツハモノ）」〔ハ〕器量。才能。安閑紀「天皇爲人壻宇（ウツハモノ）疑峻不可得」源「はかばかしき世の固めなるべきも、まことのうつはものとなるべきを取り出ださんには難かるべしかし」同「御位におはしまし世には、よはひの程も身のうつはしましたるものも及ばず」

うつ-はやし（形）古語。いちはやし。けはし。はげし。字鏡集「崎（ウツハヤシ）」

うづ-はやし　渦速（形）うづまくことはやし。うづまき流るることはやし。山家集「しほぢゆくかこみのともろ心せよ、またうづはやき瀨戶渡るなり」

うつ-はり　僞（名）いつはり（僞）に同じ。

うつ-はり（名）【動】きじ（雉子）の異名。

うつ-ばり　梁（名）屋の上にありて棟を承くる木。はり。萬「すこも敷き青な煮もてき、候（ウツハリ）にむかはきかけてやすめ此の君」和名「梁（字鏡集棟梁也）」字鏡「樑（字鏡集）柄・樑字」

うつ-ばり　の　つばめ　梁燕　うつばりに巢をくひ、そこにて子を育つる燕。子を思ふ親の愛情の譬へ。謠「梁の燕、野の雉、子故に身を忘れ」同「燒野の雉、夜の獨、梁の燕も哲子故にこそ物思へ」

うつ-はり-ごと　虛言（名）いつはりごと。うそ。きょげん（虛言）。允恭紀「虛言（ウツハリコト）」

うつ-はる　僞（他動ラ）いつはる（僞）に同じ。

うづ-ふ　一烏頭布（名）【植】かぢめ（搗布）に同じ。

うつ-ぶき　俯（名）うつむき（俯）に同じ。うつぶし。六帖「ねぶれども袖ひづ川のうつぶきに、戀しき人の影なかりけり」

うつ-ぶく　俯（自動ヤ）うつむく（俯）に同じ。うつぶす。宇治拾遺「うつぶきて見るに、弓のかげは見えず」

うつ-ぶく　俯（他動ヤ）うつむく（俯）に同じ。

うつ-ぶけ　俯（名）うつむけ（俯）に同じ。丹波與作「背骨をどうと蹈みければ、うつぶけにかっぱと伏し」

うつ-ぶ-さま　俯樣（名）うつぶしたるさま。平家「太刀のさきを腹に突き立て、うつぶさま（うつぶしさま）に貫かってぞ失せられける」

うつ-ぶし　俯（名）うつぶすこと。うつぶき。竹取「物に醉ひたるごとちして、うつぶしにふせり」

うつ-ぶし-いろ　空五倍子色（名）〔ふしの中の虛なるより空（ウツ）といふ〕喪服の色。白膠木（ウルシ）よりとりたる五倍子にて染めたる薄黑の色。にび色。

うつ-ぶし-ぞめ　空五倍子染（名）〔ふしの中の虛なるより空（ウツ）といふ〕空五倍子色（ウツブシ）に染むること。古今「世を厭ひこのもとごとに立ちよりて、うつぶし染の麻のきぬなり」

うつ-ぶしめ　俯目（名）うつぶしになりたる狀。ふしめ。今鏡「おほい殿はふと心えて、色もかはりて、うつぶしめになり給へりけるほどに」

うつ-ぶす　俯（自動ヤ）うつむく（俯）に同じ。うつぶく。宇津保「北の方はうつぶして泣き給ふ」同「御腰少しうつぶして給へる」

うつ-ぶす　俯（他動ヤ）うつむく（俯）に同じ。

うつ-ぶせ　俯（名）うつむけ（俯）に同じ。うつぶけ。古事談「餅入りたる折櫃年人、餅隱之、うつぶせにおきたりければ」

うつ-ぶるひのり（名）【植】紅色藻類、紫菜（ウツブルヒ）屬の海藻。あさくさのりの一種。大形帶狀にして、長さ二尺、巾二三寸に及ぶ。食用とす。

うつ-ぶん　〔鬱憤〕積もれるいきどほり。晴れぬ恨。心中萬年草「八年以來鬱憤を散ぜん」班固文花鳥「唱呼鬱憤、未逆厥頗」太平廣記「以鬱憤成疾」

うつ-ぺい　〔鬱閉〕籠もり閉づること。管子「通鬱閉、愼津梁」古事談「水之性、不雜則淸、莫鬱則平、鬱閉而不流、赤不能淸、天德之象也」

うつ-ぽ　空（名）〔ヰ〕うつろ（空）に同じ。和名「半天河（字都保）」宇津保「俊蔭「いかめしき雌熊・雄熊、子を產みつれて棲むうつぼなりけり」〔ロ〕かさね の著物なきこと。源「葵」山吹のうちきの、袖口いたくすけたるを、うつぼにてうちかけ給へり」〔ハ〕「植」ねぎ（青葱）をいふ、女房詞。うつぼぐさ。海人藻屑「葱はうつぼ、如此異名を被附」

うつほ 空穂 靫 (名) 矢の、雨に濡れ物に觸れて損ずるを防ぐため、盛りて

(ぼつう)

(いづるまたかは(ろ)こし(は)かなど(イ)捲き巻(ロ)おかを(ハ)ぞどはり(ニ)さんぼんどう(ホ)とつひのくわん(ヘ)きかわ(ト)ねかは(チ)のどしかは(リ)つけを(ヌ)てかは(ル)のどかたばね(ヲ)つにの(ワ)ゆうけ(カ)みくばり(ヨ)こまひたひ(タ)とんぼうおけず(レ)あがらみ(ソ)こまひたひ(ツ)みより(ネ)やさじたけ(ナ)なふさがのゆひを(ラ)かなど(ム)なふさ背に負ふ具。中空にて外に毛皮を著く。後には木又は竹製にして毛皮を著けざるもあり。著聞集(建保六年)「義家うつぼよりかりまたをぬきて」東鑑(建保六年)「弓二張・羽壺一・太刀一」巻。羽壺。

(ぼつう)

うつほ 靫 (名) 【動】つめたがひ(蛸蟹)の異名。

うつほ 鯉魚 (名) 【動】喉鰭類、うつぼ科に屬する魚。體の長さ四五尺に達するうなぎに似たる形狀にして、鱗を被らざるもの。近海に產す。なまだ。きだか。がたうなぎ。

うつほ-いちご 靫苺 (名) 【植】とくりいちごの異名。

うつほ-かづら 猪籠草 (名) 【植】猪籠草科、猪籠草屬の多年生草本。莖の高さ二尺餘。葉は大形、葉柄は扁平にして莖を抱き、葉先に進むに從ひ、漸次狹小にして紐狀となり、卷鬚の用をなし、末端は瓶狀の異形物に終はれり。瓶狀物の內部には液體を滿して滑澤なり。之即ち捕蟲器にて、瓶口附近より分泌する蜜を漁らんが爲め、集まり來る昆蟲は、滑澤なるが爲め瓶內に滑り落ち、液中に溺死し、遂に消化せられて此の植物の養分となる。花は總狀花序に排列し、單性、雌雄異株なり。此の屬の植物は種類多く、大小一ならざれども、瓶狀物を有することは同一なり。舊世界の熱帶に自生す。

うつほかづらくわ 猪籠草科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。攀緣又は側生性の常綠灌木、又は草本。葉は互生、中肋は强靭にして、葉先に至れば蔓狀となり、先端に瓶狀物を附著す。是れ捕蟲器なり。花は綠色又は褐色の小輪にて單性、雌雄異株、總狀花序に排列す。花蓋は四片、雄花は四乃至十六箇の雄蕊樂合して管狀をなす。子房は上位四室を具ふ。舊世界の熱帶地方に產す。

うつほ-がひ 靫貝 (名) 【動】つめたがひ(蛸蟹)の異名。

うつほ-かもん 空勘文 (名) 古昔、正月女官敍任の時、敍任すべき人なくして名目のみ存し置く申文。

うつほ-ぎ 空木 (名) 中朽ちなどしてうつろなる木。うつろ木。宇治拾遺「我が居たるうつほ木の前に居まはりぬ」現存六帖「ふる枝のふしのみ殘るうつほ木の、たてるもさびしはたのやけ山」

うつほ-ぐさ (名) 【植】ねぎ(青葱)の異名。うつぼ。七十一番歌合「ひともじうり。紅葉せず秋ももえぎのうつほぐさ、露なき玉と見ゆる月かな」

うつほ-ぐさ 豫州夏枯草 (名) 【植】唇形科、豫州夏枯草屬の多年生草本。莖の高さ一尺、四角形なり。葉は對生にして橢圓形、又は卵形、全緣又は鈍鋸齒を具ふ。六月頃紫色の美花を開き、短大なる穗狀花序に排列す。我が國、各地の原野に自生す。しびとのまくら。ひぐらし。

うつほつ 一鬱物 (副) 【植】繁もり積もれる氣の盛んに出づるさまにいふ語。武帝內傳「雲彩鬱物、靈氛香氣」應瑞文「紛鬱物以登陽」 ▽胸中にみちふさがる憂氣の、發動せんとするさまにいふ語。

うつほづけ 空穂附 (名) 角力の手の名。勢强く振りあげて投ぐるもの。後撰夷曲集「名乘れるは弓取なれや、勝方の關のすまひをうつぼづけにて」

うつほつぼ (副) うかうかとして遊びまはる狀にいふ語。うはのそら。うぼっぼ。

うつほのこ 空穂子 (名) 空穂の中に入るる小さき刀。的出張記「うつぼの子と申すは當流の小太刀(太刀)を申すなり、祕事なり」

うつほのみ 空穂實 (名) 空穂に差したる征矢の稱。記

うつほばしら 空柱 (名) 〔中空の柱の義〕雨水をうくる箱のとひにて、柱に孔の通りたる如きもの。禁中殿上の間の隅にあり。たてどひ。はこどひ。平家「殿上「うつほ柱より內、鈴の綱の邊に、布衣の者の候は何者ぞ」新六帖「しのぶわけてうつほばしらにかくるひは、もるてふ水のくちやなからん」

うつほぶね 空船 (名) まるきぶね(丸木船)に同じ。うつろぶね。うつのふね。平家「彼の變化の物をば、空舟に入れて被流けるとぞ聞こえし」

うつまき 渦卷 (名) ▽水の渦巻くこと。後撰「たぎつ瀨のうづまきごとにとめ來れど、なほたづね來るよのうきめかな」 ▽線の圓くまき繞りて、うづまき狀に雞卵をまぜて燒き、餡を包み、卷きて輪切にしたるもの。四次條の略。腰守環「うづまきは市村龜藏が著たりとて、龜藏小紋といふ」

うづまき-こもん 渦卷小紋 (名) 渦卷の形を模樣にしたる小紋。うづまき。

うづまき-づけ 渦卷漬 (名) 胡瓜と二つに割き中子を去りて乾かし、卷きて押しをかけて漬けたるもの。切口渦卷の形をなす。

うづまき-みづ 渦卷水 (名) うづまなしてさかまく水。多識篇「逆流水(ギヤクリウスイ)」

うづまく 渦卷 (自動四) 水、渦をなして卷きめぐる。拾遺四十三「川の淵のうづまく見れば玉もかる、散り亂れたる川の船かも」

うづまさる (自動下) 群がり起こる(雲)などにいふ。爲尹千首「雲や今うづまさるらん、甲斐がねのさやかに見ゆる曙の空」同四「霜れゆけどなほあらはれて風ごしの、峯を雲のうづまさるらん」

うづまたぐさ (名) 【植】をへびいちごの異名。

うつまめ (名) 【植】前條に同じ。

うつまめぐさ (名) 【植】前條に同じ。

うづまる 埋 (自動四) うづもる(埋)に同じ。

うづまる 埋 (自動四) うづもる(埋)に同じ。著聞「其の足駄砂子に深く入り

て、足くびまでうづまれにけり」

うづまれぬな 不埋名 朽ちざる名。不朽の名。馬內侍集「おこし火の炭をば灰にかくしつつ、うづまれぬ名の戀をこそ思へ」出羽鄕集「それと見ん跡はかもなしかばね島、うづまれぬ名を誰れ殘しけん」

うつみ 內海 (名) ▽うちうみ(內海)の約。和訓 ▽日の小さき茶壺。

うづみ-ぐわっかう (名) 【植】かはみどり(排香草)の異名。

うづみ-どうふ 埋豆腐 (名) 料理の一種。細かく切りて煮たる豆腐を椀に入れ、その上より飯を盛りたるもの。うづみめし。五松館華語「王梅谿東坡詩注、山東人以肉埋飯下謂之飯鉢。今のうづみ豆腐・うづみめしは飯鉢といふべし」

うづみ-どひ 埋樋 (名) うめどひ(埋樋)に同じ。

うづみ-ひ 埋樋 (名) 土中に埋めおきて水を通す樋。かくれどひ。暗渠

うづみ-び 埋火 (名) 灰の中に埋めたる炭火。後拾遺「埋火のあたりは春の心地して、散りくる雪を花とこそ見れ」

うづみ-めし 埋飯 (名) うづみどうふ(埋豆腐)に同じ。

うづみ-もん 埋門 (名) ▽家の裏の小門。 ▽城の石垣・土居・築地の下に低く切り抜きたる小門。水を汲み、又は舟を出だす處に用ふ。氏鄕記「豫「其の夜も忍びて、埋門まで行きしに」

うづみ-りう 打身流 (名) 槍術の一派。江戸時代の初め、打身佐內の創めたるもの。

うづむ 埋 (他動四) ▽物の中に入れて覆ふ。物にて覆ひかくす。拾遺「散る花は路見えぬまでうづまなん、別かるる人も立ちやとまると」源東屋「ろくをとらすること、うづむ計りにてもてさわぐ」 ▽沈淪せしむ。めいらす。夫木「思ひやるながめも今は絕えぬとや、心をうづむ夕暮の空」

うづむ 埋 (他動下) 前條の轉。

うづむかゆ 埋粥 (名) 葛粉・豆腐・醬油などにて味をつけたる粥。

うつ-むき 俯 (名) うつむくこと。うつぶき。うつぶし。

うつむきさま 俯樣 (名、副) うつむきたるさま。うつむくひやうし。うつむく時。用明天皇職人鑑「うつむき樣に御顏をじろりと見たるうはまぶた、これ戀知りの目癖ぞや」

うつ-むく 俯 (自動四) 頭を下へ向く。頭を前へ低る。うつぶく。うつぶす。

うつ-むく 俯 (他動四) 頭を下へ向かす。大草相傳閒書「右の手をうつむけて箸を取り、左の手をあをのけて取り」

うつ-むけ 俯 (名) うつむくること。うつぶけ。うつぶせ。

うつむけにす 愚にす。うっかりものと見なす。膝栗毛「やあ、あれが七匁五分だあ。あんまり人をうつむけにしやあがる」

うつ-むける (動詞)の口語。

うつ-むし 渦蟲 (名) 【動】みづすまし(跂蟲)の異名。

うつむ-なし (形) 古語。うつなしに同じ。皇極紀「其勝定之(カツテ)」

うつむろ 無戶室 (名) 古語。戶無き室。神代紀下「乃作無戶室(ムヘノムロ)入居其內」和名上「日本紀私記云、無戶室(ムヘノムロ)」

うづめ-ぐさ 埋草 (名) うめぐさ(埋草)に同じ。野田福島合戰記「九日より野田・福島の堀を、うづめ草を以て悉く埋めらる」

うづめる 埋 (他動下) うづむ(埋)に同じ。

うつ-もも 內股 (名) 古語。うちもも(內股)に同じ。字鏡「酸(ヒ)」名義抄「腿(ムカモモ)」

うづ-もる 埋 (自動四) ▽うづたかく盛り上ぐ。雄略紀「因賜姓曰禹豆麻佐(一云、禹豆麻佐、盛り上ぐ)」 ▽しづむ。沈淪す。取替「かかる身をもてうづもらさんことも、われになして思ふに難しかし」

うづ-もる 埋 (自動下) ▽飛び盛り上ぐ。 ▽物の中に覆はれ隱る。うづまる。うまる。宇津保俊蔭「立ちこめりしもののふ扇るる山にうづもれて、多くの人死ぬれば」新古今冬「常よりもしのやの軒ぞうづもるる、けふは都に初雪やふる」 ▽人に知られずして居る。沈淪す。源東屋「東の方のはるかなる世界にうづもれて、年經けんがにや」

うづもれぬな 不埋名 永く傳はる名。朽ちせぬ名。和泉式部集「もろともに苔の下には朽ちずして、うづもれぬ名を見るぞかなしき」

うづ-もれる 埋 (自動下) うづもる(埋)の口語。

うづ-もん 一鬱悶 心のふさぎ悶(ゆ)ること。柳宗元文「鬱悶結滯、癡騃獃(ヒ)獃(ヒ)難」

うつ-ゆぶ 虛木綿 (名) 中の空虛なる繭(マユ)。一說、內方をうつろに卷きたる木綿(ワタ)。猶、次條を見よ。

うつゆぶの 虛木綿 (枕) うつゆぶは內能もりてあるより、こもりにかけ、また內のせまきより、ささきにかけていふ。神武紀「姸哉乎國之獲矣、雖「內木綿之(ウツユブノ)眞迮國」猶如蟻蚋之憐呰」萬「虛木綿乃(ウツユブノ)」こもりて居れば」

うつ-よく 一鬱抑 よくうつ(抑鬱)に同じ。

うつら 空 (名) うつろ(空)に同じ。

うづら 鶉 (名) ▽動 鶉雞類に屬する鳥。全形やや雞圓にして、頭部小さく尾部發達せず。全身茶褐色にして黑白の斑點を有す。冬季は東部西比利亞及び北支那より、日本海を越えて渡來し、本邦中央以南の諸國に於いて冬を越し、四五月頃產卵し、夏に至り北方大陸に移動す。いとら。こばなどり。和名抄「鶉字豆」 ▽繩の名。樓機(ロウキ)と加賀苧(カガ)とをまじへて綯ひたるもの。其の色鶉の羽の如し。 ▽船の一種。はかせに同じ。四芝居の下桟敷。天井低く鶉德に似たればいふ。

うづら-あづき (名) 【植】豆科、菜豆(インゲン)の一種。種子暗赤色にして、一面に黑斑點を散布するもの。

うづら-あはせ (名) 鶉を鳴き合はせて、其の聲の優劣を競ふこと。犬子集「鶉持ちつれて歸るさの袖の匂ひ暮るるより鶉合せや見てぬらん」

うづら-いし 鶉石 (名) 小さく圓き瑪瑙の稱。津軽瑪瑙。

うづら-いんげん 鶉隱元 (名) 【植】豆科、菜豆(インゲン)屬の一年生草本。菜豆の一種。種子淡紅色にして白斑あるもの。

うつら-うつら (副) 〔うつ(現)の義〕つらつら(熟)に同じ。つくづく。萬「なでしこが花とり持ちて、宇都良宇都良(ウツラウツラ)見まくのほしき君にもあるかな」

うつら-うつら (副) 〔うつ(空)の義〕茫然たる狀、心のうつけたる狀にいふ語。うとうと。昏昏。土佐日記「目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ」正

章千句「雨に窓風に障子を引きたてて、うつらうつらと物思ふさま」

うづら-がらし 鶉格子 (名) 遊女屋の格子の一種。局女郎の居る處に立つるもの。形うづらかごに似たり。[本朝]洞房語圏「おもて通りは横六尺のうづらがうしなり」

うづら-かご 鶉籠 (名) 鶉を飼ひ置く籠。丈低く方形なり。

うづら-かは 鶉革 (名) 革の名。地文を鶉の羽の如くに燻べたるもの。これに糠青にて菊花の形を所所に散らしたるを紋鶉(もんうづら)といふ。

うづら-がひ 鶉貝 (名) 【動】腹足類、うづらがひ科に屬する貝。大なるは三寸に達す。介殼は薄く、兩端尖りたる卵形若しくは楕圓形、螺の外面は茶褐色にして白色の斑紋を存す。ほろがひ。うつせがひ。やつしろがひ。

うづらかふ 携 (他動ハ) 古語。手をとりあふ。たづさふ。[雄略紀]「相携手(あひたづさへて)入于於後宮」

うづら-がみ 鶉紙 (名) うづらの模様の透しある紙。[貞丈雜記]

うづら-がり 鶉狩 (名) 鶉を狩ること。うづらの。[萬代集三]「寒の子は麻呂にたばらん、手にすゑて栗津の原にうづらがりせん」

うづら-きぬ 鶉衣 (名) うづらのころも。[拾白集]「鳴きたえぬ秋くれしより深草や、うづらぎぬ打つ音ばかりして」

うづら-きび 鶉切 (名) 【植】もちきびの異名。

うづら-ぎれ (鶉紙)に同じ。

うづら-ぐさ (名) うづらぐさ(石胡麻)の異名。

うづら-ぐるま (名) 玩具の一。鶉車に車をつけたるもの。

うづら-ごろも 鶉衣 (名) うづらのころも。鶉衣に同じ。うづらぎぬ。雪女五枚羽子板[著行]「錦繡のかさね引き換へて、いつのまに鶉ごろもと綻びて」

うづら-だか 鶉鷹 (名) 鶉を捕へしむる鷹。

(ほろ(ぐらづう))

うづら-だけ (名) 【植】まったけ(松茸)の異名。

うづら-だち 鶉立 (名) [一]兼ねての用意なく、遽かに旅立ちなどすること。[二]食物の給仕などする人の、廻り膝もせず、其のまま立つこと。[俚言集覽]

うづら-ちりめん 鶉縮緬 (名) ちりめんの一種。皺(しぼ)の大なるもの。くさりちりめん。ゑぼしちりめん。

うづら-とり 鶉捕 (名) 鶉を捕ること。[業とするもの。柳樽]「うづらとり少將様を見知りごし」

うづら-どり 鶉鳥 (名) 【動】うづら(鶉)に同じ。[記上]「おほみや人は宇豆良登理(ウヅラトリ)、ひれとりかけて」

うづら-なき 鶉鳴 (枕) 次條に同じ。[萬三]「鶉鳴(ウヅラナク)古郷ふるしと人は思へれど、花たちばなのにほふこの宿」

うづら-なく 鶉鳴 (枕) 鶉は草深き荒野にすみて鳴くものなれば、荒れたる郷・住みすてたる古家などにかけていふ。[萬三]「鶉鳴(ウヅラナク)ふりにし里ゆ思へども、何ぞも、いもにあふよしもなき」同[十一]「人ことをしげみこちたみ、鶉鳴(ウヅラナク)人のふるへに語らひてやりつ」同[十三]「鶉鳴(ウヅラナク)ふるしと人は思へれど、花橘の匂ふこの宿」

うづら-の 鶉野 (名) 野にて鶉を狩ること。うづらがり。[蜷川親俊記天文六年九月十日]

「貴殿鶉野へ御出で」

うづら-の-ころも 鶉衣 (名) つぎはぎしたる衣。繁衣。うづらぎぬ。うづらごろも。夫木[三]「今もなほ野となる里に誰れすみて、秋はうづらの衣うつらん」杜甫詩[教倭中世]「烏机重重縛、鶉衣寸寸針」

うづら-の-とこ 鶉床 (名) [一]鶉の臥す處。新千載[秋上]「風はらふうづらの床は夜寒にて、月影さびし深草の里」[二]いぶせきふしど。

うづらのめはーのや 鶉目樺矢 (名) 櫟のあま皮にてはぎし矢。東鑑[元年九月十八日]「樺矢之、藤口卷也」

うづら-ふ 鶉斑 (名) [一]鶉の羽色の斑様。褐色に黒白の點あるもの。[二]其の羽色したる鷹の稱。

うづら-ぶえ 鶉笛 (名) 鶉の鳴聲の如き音を出だす笛。鶉を招きよするに用ふ。

うづら-まき 鶉卷 (名) 白き革を木に卷きつけ、藁と畑草とをくべてくすぶらせて、色をつけたる革。[俚言集覽]

うづら-まめ (名) 【植】豆科、黄大豆(ハイ)。[鬢の一年生草本。黄大豆の一種。種子、皓赤褐色のもの。

うづら-もく 鶉杢 (名) 鶉の羽の如き木目。

うづら-もち 鶉餅 (名) 次條に同じ。[鷹筑波]「香高き欲にやふけるうづら餅」

うづら-やき 鶉燒 (名) [一]鶉の如く丸くふくらかなる饅頭。皮薄くて鹽餡を入れたるもの。はらぶともち。うづらもち。[祇園物語]「鶉やきはうす皮の十字のたくひならん。餘りにけいはくなるによりて、翁の涙流し感ぜられ候も理りなり」[二]其物を油にていりつけ鶉色にすること。「茄子のうづらやき」

うづら 移 (名) [一]うつること。變遷。玉葉[建久]「人も世も思へばあはれ幾むかし、幾うつりして今になりけん」[二]人よりの贈物の返禮として、其の器物に入れて返す品の稱。紙を用ふるを移り紙といふ。又附木をも用ふ。附木を硫黄(いほう)ともいへば祝ふ義にとる。[三]遊廓の詞。心のうつること。重に女より男の方へうつるにいふ。色道大鑑「男より女へのうつりもあれど、先づうつりといふ時は、男の方へうつりなり」

うつり 映 (名) [一]うつ(映)ること。[二]色と色との取り合せ。配合。聖德太子繪傳記「南天のしん、正眞の紫蕊、龍膽のあしらひ、胴に伊吹のうつりのよさ」

うつり (名) ゆかり。つづきあひ。百日曾我[三]「虎様や少將様のうつりといひ、お二人を如才に思ふ心でも」

うつり-が 移香 (名) 物に移り殘りたる香。殘香。遺薫。古今集[上]「蝉の羽のよるの衣は薄けれど、うつり香濃くもなりにけるかな」

うつり-かはり 移變 (名) うつりかはること。變遷。交替。

うつり-かはる 移變 (自動ラ) [一]次第に變はりゆく。變遷す。源氏物語[桐壺]「世の中さまざまにつけて、はかなくうつりかはるありさまもおぼしつづけられて」[二]人りかはる。交替す。

うつり-がみ 移紙 (名) うつり(移)紙よ。

うつり-ぎ 移氣 (名) 移り易き性質。おちつかぬ人。吾吟我集[五]「かたえにも將す花ありて、鶯の飛びのく如し、うつり氣の人」

うつり-ばし 移箸 (名) 食事の時、飯と菜とを代はる代はる食はずして、此の菜より直に彼の菜に箸をつくること。不作法として嫌ふ。わたりばし。

うつり-やまひ 移病 (名) 傳染し易き病。傳染病。

うつり-ゆく 移行 (自動カ四) 次第に變はる。かはりゆく。萬三「宇都里(ウツリ)由久(ユクラ)時見る毎に心いたく、昔の人しおもほゆるかも」

うつる 移 (自動ラ四) [一]場處易はる。萬三「みかの原くにの都は荒れにけり、大宮人の遷(ウツ)りぬれば」土佐日記「舟のむつかしさに、舟より人の家にうつる」[二]かはる。かはりゆく。變ず。佛足石歌「これの世は宇都利(ウツリ)去るとも、とことはにさ殘りいませ、後の世のため、又の世のため」拾遺[雜上]「春秋に思ひ亂れてわきかれつ、時につけつつうつる心は」[三]色さむ。うつろふ。衰ふ。萬三「見れどあかずましし君が、もみぢ葉の移(ウツ)いぬれば悲しくもあるか」古今[春下]「花の色はうつりにけりな、いたづらに我が身世にふるながめせしまに」[四]散る。新古今[春下]「今日だにも庭を盛かりと移る花、消えずはありとも雪かとも見よ」[五]過ぎ行く。經過す。萬三「宇都里(ウツリ)ゆく時みる毎に心いたく、昔の人しおもほゆるかも」[六]色・香などしみつく。染つむ。後撰[三]「色ならばうつるばかりも染めてまし、思ふ心をえやは見せける」源氏[梅枝]「花の香は散りにし枝にとまらねど、うつらん袖に淺くしまめや」[七]官位かはる。轉任す。源氏[若菜]「右大將の君大納言になり給ひて、例の左にうつり給ひぬ」[八]染まる。傳染す。感ず。源氏[夕顔]「物の怪・いきすだまなどいふものの世人にも更にうつらず、ただ自らの御身に、つとそひたるさまにて」

うつり うつらず 移不移 移るか移らぬか。染まるか染まらぬか。源氏[若紫]「旅ねしてなほ心みよ女郎花、盛かりの色にうつりうつらず」

うつり やす 移易 物にうつり易し。源宿[五]「あだなる方に遊みうつりやすなる人は、女のためのみにもあらず、たのもしげなく」

うつれば かはる 移り變はる。代謝す。源氏[若菜上]「目に近くうつればかはる世の中を、ゆく末遠くたのみけるかな」

うつる 映 (自動ラ四) [一]此の光また影、彼れにあらはる。後撰[秋上]「秋の海にうつれる月を、たちかへり波は洗へど色も變はらず」源氏[絵合]「わが御かげの、鏡臺にうつれるが」[二]よく似合ふ。よく配合す。「其の著物が其の人によくうつる」

うつろ 空 (名) 中の空しきこと。又、其の處。うつほ。から。うろ。空虚。

うつろ-ぎ 空木 (名) 中のうつろなる木。うつほぎ。

うつろ-おゆう 洞中 (名) 一門。天正・慶長頃の語。[俚言集覽]

うつろはす 移 (他動サ) うつろふやうにす。移らす。變はらす。源[玉鬘]「さるべき處にうつろはし奉らんなど」

うつろはす 移 (他動サ) 前條に同じ。元永元年内大臣家歌合「鶯霜などの紅葉を染め、草木をうつろはするは」一字抄上「秋の夜の月にまきるる白菊は、うつろはせてぞ折るべかりける」

うつろひ 移 (名) [一]うつろふこと。うつり。變遷。字津保[祭使上]「これこそあらはなるうつろひなれ」續千載[雜]「のどかなる御代の春し色なれや、雲井の櫻うつろひもせぬ」[二]いへうつり。轉居。宇津保[吹上]「大納言殿北の方また對面し給はねば、うつろひもえし給はず」いほぬし

うつろひ-ぎく 移菊 (名) 襲の色目の名。表中紫、裏青。[貞丈雜記]黄。[類聚雜]女房の五衣には、上に紫、次に薄色に白き絲取りたるものを重ね、草を書にす。[類聚雜]秋用ふ。

うつろひ-ゆく 移行 (自動カ四) 變はり行く。かはる。萬三「いづみ川ゆくせの水のたえばこそ、おほみやどころ遷往(ウツロヒユカ)め」

うつろふ 移 (自動ハ四) [一]場所を易ふ。うつりゆく。移轉す。移動す。萬三「梅が枝になきて移徙(ウツロ)ふ鶯の、はれ自たへにあわ雪ぞふる」宇津保[俊蔭]「この林より西にあたれる梅檀の林にうつろひて」[二]かはる。變ず。萬四「月草の徙(ウツロ)ひやすく思へかも、わがも心人のことも苦げこぬ」同六「世の中を常なきものと今ぞ知る、奈良の都の移徙(ウツロ)見れば」源氏[紅葉賀]「おそろしうもかたじけなくも、うれしくも哀れにも、かたがたうつろふ心もちして」[三]巴さむ。色褪す。神代紀「如二木華之俄遷轉(ウツロヒ)一」[四]散る。雪ふる。古今[春下]「春風は花のあたりをよきて吹け、心づからやうつろふと見ん」[五]しみつく。そまる。萬七「月草に衣色どりすらめども、移變(ウツロ)色といふがくるしさ」

うつろふ 映 (自動ハ四) 光又は影などうつる。後撰[春下]「花さかりまたもすぎぬに吉野川、かげにうつろふ岸の山吹」

うつろ-ぶね 空船 (名) まるきぶね(丸木船)に同じ。うつほぶね。

うづ-わ 渦輪 (名) [一]渦を卷きたる如き圓き形。[二][動]次條の略。雲陽誌[日東[俗]]「うづわがつを 渦輪鰹 (名) 【動】硬鰹類、さば科に屬する魚。體の長さ一尺許り。背は黑くして後方に雲紋あり。東海に多く產す。うづわ。こがつを。

うづ-ね 踞 (名) うずね(踞)に同じ。

うづ-ね-もの 寮大にかまふる人。我がままなる人。[俚言集覽]

うづ-ね 卯杖 (名) 古昔、禁中にて、惡鬼を避くとて、正月の上の卯の日、種種の木を五尺三寸にきり、二本或ひは四本を一束として奉れるもの。初めは大學寮より奉りしが、交德帝の頃より、衞府より奉ることとなれり。いはひのつゑ。持統紀「三年正月乙卯、大學寮獻卯杖(ウヅエ)」

うづね のことぶき 卯杖壽 うづゑほがひ(卯杖祝)に同じ。

うづね のほがひ 卯杖祝 (名) 卯杖を奉るとき奏する壽詞。うづゑのことぶき。榮華[花]「御前に侍ふ人人は念ぜず、おのづからうちさざめき、うづゑほがひなどいふ心地こそすれ」

うづ-ね 鞍 (名) うつほ(空穂)の轉。時秋物語「うつをより文書をとり出でて、時秋に見せけり」

うつを-ばしら 空柱 (名) うつほばしら(空柱)に同じ。夫木[三]「夜もすがら衣うつをばしら浪の、たつかとよそに聞きあかすかな。此の歌は中將うつをばしらを隱し題によみけるによめると」

うで 討手 (名) 征伐に行く人。うちて。うって。追討。後撰[二]「小野好古の朝臣、西の國のうての使にまかりて」

うで 腕 (名) [一]腎と手頸との間の稱。ただむき。和名[三]「腕宇天」名義抄「腕(ウデ)」

ザブ」㊀肩より手頸までの稱。手。狂言宮王松「そのうでは何事ぢや。しかたでござりまする」㊁うでまへ。てなみ。わざ。技量。「うでを見せる」「うでぞろひ」狂言鶴「厚い所を薄う見えい、薄い所を厚う見ゆるやうに作るが、庖丁人のうでぞおやる」四力。腕力。謠[illegible]「さるにても汝おそろしや、うでの強きといひければ」㊄船具。櫓の小名。

うでがなる 腕鳴　事に當たらんとする意氣の抑へ難きさまにいふ。

うでにおぼえあり 我が力量につきて自信あり。

うでによりをかける 奮鬪の準備をなす。

うでをならす 鳴腕　㊀己れの腕力又は技量をふるはんとて、事あれかしと待ちをる。聲肉の歎をなす。㊁技量をふるひあらはす。「昔は政界に腕を鳴らしたもの」

うでをのす 十分に腕前を延ばす。腕をみがきあぐ。泰時御消息「若き者共に馬を馳させ、弓をひかせ、我れと腕をのされんと思はれん時は」

(諺)腕一本、脚一本 我が身の外に頼む所なき譬へ。

(諺)腕なしのふりつんばい 〔つんばいはつばいの訛り。つばいはつぶてをいふ。[illegible]〕腕力もなきものが石投げをしんとする意より、我が力に過ぎたる事をする譬へ。出世景清「其の縛めに逢ひたながら某を獨まんとは、腕なしのふりつんばい」

うで-おし 腕押　(名)　二人腕を立て、臂を下につけて掌を握りあひ、互ひに一方の腕を押し倒さんとする遊戯。うでずまう。義經記「[illegible]腕おし・首引・すまうなどぞ好みける」

うで-かう 腕香　(名)　㊀佛・修驗者などの荒行の一。腕に香を焚くこと。法華狂言花子「頭香なりとも、腕香なりとも、焚かせられい」㊁物貴の一種。腕に刃物をたてなどして財物を乞ふもの。[illegible]

うで-かぎり 腕限　(名・副)　腕の力のある限り。うでまへの有るだけ。國姓爺「敵何萬騎寄せたりとも、命限り腕限り」

うで-がね 腕金　(名)　うでぎを金屬にて製せるもの。

うてかへり-こほし 追返小法師　(名)　おきあがりこぼし(起上小法師)をいふ。伊勢國久居の方言。[illegible]

う-てき 雨滴　(名)　あまだり。あまつぶ。禮記月令「若雲薄漏」日、日照雨滴」則虹生」

うで-ぎ 腕木　(名)　㊀【建築】一端を柱などに附け、他端を横に突き出だしたる横木。持繞天皇歌軍法「築地の腕木に手を掛け、我れ先きに乘り入らんと」㊁架空電線を支持する爲め、電柱に横に取り附くるもの。通常櫟の角材を用ふ。木色の儘なるは低壓電線、赤色に塗れるは高壓電線を支持するものにて危險の標とす。

うで-さき 腕利　(名)　うでまへの鋭きもの。鋭才。

うでぎ-もん 腕木門　(名)　きどもん(木戸門)に同じ。

うで-くび 腕首　(名)　てくび(手首)に同じ。ただむき。

うでくびをとる 取腕首　㊀手首をおさへ握る。宇治拾遺「童の腕首を取りて、引きとどめて」㊁追從する狀をいふ。へつらひおもねる。盛衰記[illegible]「他人の門へ足踏み入れず、うで首取って追從せず」同[illegible]「友時腰の刀を拔いて武士の中へ投げ入れて、腕首をとり腰をかがめ泣く泣く申せば」

うでくびをにぎる 握腕首　前條に同じ。盛衰記[illegible]「我れ爭でか相傳の主を捨てて、今更に平家に腕首を握らん」

うで-ぐみ 腕組　(名)　兩の腕を胸のあたりにて組み合はすること。物を思案するときなどの狀。

うで-くらべ 腕競　(名)　腕力又はうでまへの競爭。松風村雨東帶鑑「犬と猿との腕競べ」

うで-ぐるま 腕車　(名)　腕をつかんで、くるくると引きまはすこと。傾城酒呑童子「小かひなむずと掴んで[illegible]腕車にどうと投げたりける」

うで-ご 腕籠　(名)　うでかう(腕香)の訛り。[illegible]

うで-こき 腕先　(名)　㊀腕の前の方。用明天皇職人鑑[illegible]「腕さき・膝節打ち缺かれ」㊁腕力にうったへてなすこと。(口さきなどの對)曾根崎心中「かう巧んだ事なれば、でんどへ出てもおれが負け、腕さきで取って見せう」

うで-ざた 腕沙汰　(名)　腕力を用ふるに至ること。

うて-ず 　(名)　負け惜しみの強きこと。又、其の人。轉じて、無粹。野暮。冥途飛脚「今日は烏屋で、彼の田舍のうてずにせびらかされて、頭が痛い」

うで-ずまう 腕相撲　(名)　うておし(腕押)に同じ。

うで-そろひ 腕揃　(名)　腕力又は技量ある人の揃ひ居ること。

うで-だて 腕立　(名)　己れの力量をたのみて、他と爭はんとすること。太閤記[illegible]「殊に石動山は溫井・三宅が歸國を心あてにや、腕立最も甚し」

うで-だめし 腕試　(名)　腕力又は技量をためすこと。

うで-づく 腕盡　(名)　㊀腕力の限りを盡くすこと。狂言[illegible]「それならば、腕づくで連れて行って見せう」丹波與作「腕づくならさあ來いと、ぶってかかれば」

うで-っと 　(名)　㊀次條の略。㊁うづくらべ。力くらべ。㊂腕次第。「うでっこで何でもやれる」四腕をおほふもの。

うで-っこき 　(名)　うでこきの訛り。

うで-てんがう 　(名)　手にてするいたづら。手すさび。雙生隅田川「南無三寶、何者の腕てんがう」

うでてんがうかく 　うでてんがうをなす。

うで-とり 腕取　(名)　互ひに腕をとりて力量を爭ふこと。

うてな 臺　(名)　㊀屋なくして、四方を觀望し得るやうに作りたるたかどの。神代紀下「臺宇(ウテナ)の玲瓏」宇鏡「曉榭(ウテナ)加女」和名十「臺宇(奈)積土爲之、所以觀望也」竹取「むぐらはふ下にも年は經ぬる身の、何かは玉のうてなをも見ん」樣[illegible]榭[illegible]名義㊁【植】がく(蕚)の異名。

うてなのたけ 臺竹　禁中清涼殿の東にある呉竹臺の竹。後柏原院集「君が代のためしとなりぬもものしきや、うてなの竹の直き姿は」

うてなのはな 臺花　極樂淨土にある蓮の花。この土に生まるるものの座する所。蓮臺。法然傳「たちかへる夢のただちに教へおく、うてなの花の末の上路」

うで-ぬき 腕貫　腕抜　(名)　㊀二の腕に貫きて塡むる裝飾物。環の狀をなす。うでわ。㊁刀劍の具。刀の柄を握りたる時、手より振り離れしめざらん爲め、柄頭(ツカガシラ)又は鍔より垂れて手首を通す緒。革又は絲製。宗五大雙紙「持たせ候太刀は黑太刀とて[illegible]うでぬき入るべからず」國姓爺後日合戰「兵庫鎖の丸柄に、信玄流の腕拔結び下げ」㊂櫛の石突の處にある穴。うでぬきの穴。いしづきの穴。四鞭の名所。ぬきいれ(貫入)に同じ。

うでぬき-の-あな 腕抜穴　(名)　前條に同じ。

うて-の-つかひ 追討使　(名)　凶賊など有る時、討手として臨時に派遣せらるる使。つゐたうし。後撰雜「小野好古の朝臣、西の國のうての使にまかりて」

うで-はり 腕張　(名)　器械體操の語。さがりたる二條の繩のさきを兩手にとり、片臂を曲げ、他の臂を側方へ突き出だすこと。

うで-びき 腕引　(名)　腕の曲がりめに手拭などの端をはさみ、雙方より引き合ふ遊戯。

うで-ぶし 腕節　(名)　㊀腕の骨のつがひめ。腕の關節。鎌田兵衛名所歌「大弓引くうでぶし、引きぬいて捨てん」㊁韓じて、うて(腕)に同じ。津國女夫池「繩かけんなどとは、どの腕ぶしで」

うて-ほし 腕節　(名)　前條の訛り。堀河波鼓「長刀持ったる腕ぼし共に、捻ぢ折ってくれんず」

うで-ぼね 腕骨　(名)　腕のほね。腕の力。博多小女郎波枕「腕骨だめし、力試し」

うで-まくり 腕捲　(名)　著物の袖口をまくり上ぐること。まくりで。袖まくり。冥途飛脚「腕まくりしてきしみあふ」擼臂。

うで-まへ 腕前　(名)　はたらきぶり。わざまへ。手なみ。うで。

うで-まもり 腕守　(名)　二の腕につけたる腕貫などに入れ置く、神佛の守札。

うてる 　(自動下)　㊀うつの口語。「場にうてる」五十年忌歌念佛「大阪の娘子達に交じりても、うてずおされず」㊁腐る。あざる。「魚がうてる」

うて-ぬかほ 　合點のゆかぬ顏つき。賄に打てぬ顏。天網島「流石の武士もうてぬ顏」

うでる 茹　(他動)　ゆでる(茹)に同じ。

うで-わ 腕環　(名)　腕の飾りにつくる輪。うでぬき。

う-てん 雨天　(名)　雨の降る空。あまぞら。あめふり。

うてんじゅんえん 　(名)　「雨天順延」事を行はんとして、もし雨天ならば順送りに日を延ぶること。

うと 　(名)　「うつ(空)の轉」うつろ。空虛。世話字盡「來鳶(ウトビ)」

う-と 烏兎　(名)　(日の中に烏、月の中に兎の象ありとの義)じつけつ(日月)の異名。歲月。謠曲「それ弓と申すは、本末に烏兎の委を象り、日月を愛に顯はし」張衡文選「日者太陽之精、積而成烏象、烏陽之類、其數奇。月者陰精之宗、積而成獸象、兎陰之類、其數耦」左太沖文選「籠鳥兎于日月、窮飛走之捷術」

うと 　(代)　自の事を卑下していふ、第一人稱の代名詞。

うど 土當歸　(名)　【植】ハマウド。

うど-かづら 　(名)　【植】葡萄科、蛇葡萄(ウビ)屬の落葉漂木にて蔓性なり。葉は大形の羽狀複葉、各小葉は卵形又は長卵形、鋸頭鋸齒を有す。夏の末、白色の小花を密生し、繖形花序に排列す。初春の幼植物は食用に供す。我が國、各地の山中に自生し、又園圃に栽培せらる。しんさう。どたうき。㊁ししうど(獨活の異名。宇鏡「獨活字支、又云乃太、本草和名十「獨活字[illegible]云[illegible]」

(諺)うどの大木 長大にして用をなさぬものの譬へ。

うとう 　(名)　【動】うとうとりの略。

うとうと 　(副)　眠りを催す狀にいふ語。うつらうつら。

うと-うと-し 疎疎　(形)　甚だうとし。極めて疎遠なり。冷淡なり。宇津保「[illegible]、あやしく人にも似給はず、うとうとしく物し給ひしかば」

うとうとし-け 疎疎氣　(副)　うとうとしさう。うとうとしきさま。

うとうとし-さ 疎疎　(名)　うとうとしき度合。うとうとしさなる。狹衣「聞くやうなるうとうとしさならば、かたみなどあながちにしのばでもありなんかし」

うとうとり 　(名)　【動】うとうとりの略。

うとうと-やすかた 　(名)　【動】游禽類に屬する鳥。鷸は鳩の大さにて、羽色は一體に灰黑色、嘴短大にて稍黃色と黑色とを帶ぶ。左右の鼻間に角狀突起を有す。北海道の海岸に多く產す。うとうとり。うとう。謠曲「そもそも善知鳥(ウとう)やすかたの、とりどりに品かはりたる殺生の中に、無慙やこの鳥の」義知鳥。

うと-く 有得　(名)　㊀(富有得分の義といふ)いうふく(有福)。ぶげん(分限)。砂石集「或る山寺に有德の房主、弟子・門徒多くありけり」狂言[illegible]「うとくな人がある。これは金銀・米錢、大分持ってゐらるるほどに」史記[illegible]「居寔有得也、居虛無得也」㊁有得人。

うとく-じん 有德人　(名)　次條に同じ。當流小栗判官「長は海道一の有德じん、三十餘人の流れの君を持たれしが」

うとく-じん 有得人　有德人　(名)　㊀有得なる人。ぶげんじや(分限者)。富豪。狂言[illegible]「うとくにんがあって、片鍋者を召しかかへうとある高札が上がってござる」

うど-ぐらし 薄暗　(形)　うすぐらし。

うと-け 疎氣　(副)　うとさう。うときやう。

うと-さ 疎　(名)　うとき度合。うときさま。榮華[illegible]「知る知らぬほどのうとさ・むつまじさも、おぼしおぼさぬほどのけじめけざやかになどして」

うとし 疎　(形)　㊀親しからず。交り淺し。疎遠なり。神代紀下「吾猶謂汝有疎心」勢語「おのが世になりにければ、うとくなりにけり」㊁善く知らず。

不案内なり。まはり遠し。迂遠なり。「世事にうとし」

うーどねり　内舎人（名）一中務省に屬する職名。朝廷の宿衛・雑使に從事し、行幸あるときは供奉して警護す。初位以上の子孫を選びて之に充つ。攝政・關白に隨身を賜ふ時、此の内舎人を給す。之をうどねり隨身といふ。後には武士を以て此の職に補す。うちとねり。うちのとねり。源氏物語「殿の領し給ふ所所の人人なん、皆、このうどねりといふものの、ゆかりかけつつ侍るなる」二東宮職又は主殿寮の職員。殿中の雑務に從事する判任官。東宮職官制第三條七號の二「内舎人」宮内省官制第五十四條「内舎人」

うどねり-すねじん　内舎人隨身（名）前條「を見よ。本府隨身・小隨身の對。榮華物語「准三宮に内舎人隨身二人、左右近衛の御隨身つかうまつる」

うどの-あし　鵜殿葦（名）【植】次條に同じ。

うどの-のあし　鵜殿葦（名）【植】次條に同じ。

うどの-のよし　鵜殿葦（名）【植】次條の異名。

うどの-よし　鵜殿葦（名）【植】禾本科。蘆に屬の多年生草本。莖の高さ一丈、やや太くして、三四年枯れず。葉は狹長にしてよしに類す。褐色の花を開き、複總穗序に排列す。我が國、暖地の沼澤に自生す。攝津國鵜殿の産特に名あり。うどのあし。うどのよし。せいとのあし。

うとぶ　疎（他動上）うとむ（疎）に同じ。觀詞式「疎夫留（うとぶる）物部目」下往者下手守」

うとーまし　疎（形）疎むべくあり。きらはし。厭はし。宇津保俊蔭「うとましきけだものの滿ちみちたる中を疎ねたる心をば」枕三「くすの木は中略おどろおどろしき思ひやりなどうとましきを」

うとまし-け　疎氣（副）うとましさう。蜻蛉日記「世の中をいとうとましげにて、ここかしこと通ふより外のありきなどもなければ」

うとまし-さ　疎（名）うとましきさま。うとましき度合。

うとまし-びと　疎人（名）うとましき人。傾城島原蛙合戰三「なう、うとましき人やと、小壁になって鎖むれども」

うとむ　疎（他動四）親しまず。忌みきらふ。つれなくす。うとんず。疎外にす。古今夏「子規ながく里のあまたあれば、猶うとまれぬ思ふものから」源氏物語「な、うとみ給ひそ」

うとむ　疎（他動二）前條に同じ。源氏物語「きこえうとむる、なめりと、いとにくげに思しの給へば」濱松中納言「あやにくにおはするよしをのみ、いひうとめ給へど」

うどむ　沈澱（自動四）をどむ（沈澱）に同じ。よどむ。

うどめ　土當歸芽（名）一土當歸（うとう）の若き芽。食物のあへしらひに用ふ。二櫨太（うだう）の若き芽。形ふきのたうに似たるもの。食用に供す。

うどーもどき（名）【植】たらのき（楤木）の異名。

うどろ　空（名）うつろ（空）の轉。唐船噺今國姓爺上「見かけは骨も太けれど、近年骨うどろにて、中がうどろになりました」

う-どん　饂飩（名）うんどん（饂飩）の約。宗五大雙紙「うどんも點心にて候へども、嚴上にても私にても、きっとした一獻に見及ばず」心中二枚繪草紙「道頓堀の、水茶屋の、或ひはうどん・けんどんの、そばで聞くさへ笑止なり」

うどん-くひ　饂飩食（名）仕事の拙き者を嘲る語。醒酔笑「世間に、下手なる者を饂飩くひといふ事は」

うどん-け　優曇華（名）（うどんは梵語、瑞應の義）一印度の傳說にて、想像上の植物の稱。三千年に一度金輪王の世に出づる時、花咲くといふ。宇津保俊蔭「かの不死藥・うどんげに劣らざらん」三界儀「輪王出世時、海水減、柔實出現、道國一由旬、地平如掌、優曇華交ゝ道而生」二殆と有り得べからざること。極めて稀なることの譬へ。狂言花子「只何事も打ち捨てて、たまたま逢ふこそうどんげなれ」三【動】厥翅類のくさかげろふの卵が他物に著きたるもの。莖部四五分にして、卵は白色橢圓形なり。恰も花の咲きたるが如きより名づく。四芭蕉の花の稱。東鑑治承六、寿永元年三月十日之條「芭蕉花之由申之」諸色品「うどんげの花待ち得たる芭蕉葉の」五【植】いちじゅく（無花果）の異名。

（ヨげんどう）

うどんげ　の　はね　優曇華花　うどんげ（優曇華）を見よ。竹取「車持のみことは、うどんげの花持ちてのぼり給へりとのゝしりけり」

うどん-こ　饂飩粉（名）うどんのこ（饂飩粉）に同じ。

うとん-ず　疎（他動サ）【疎みすの音便】うとむ（疎）に同じ。

うどん-どうふ　饂飩豆腐（名）はちはいどうふ（八丁豆腐）に同じ。大草家料理書「うどん豆腐料理は、常には細く切りて湯煮をして、醬油に山椒・胡椒を入れてよき也。但し、別流には作り樣薄く細く長き樣有之」

うどん-ぶくひ　饂飩粉（名）こむぎこ（小麥粉）に同じ。多く饂飩にするより名づく。曾我虎磨（西鶴）「叩きつけられ振りつけられ、うどんのこはい傾城殿、それがけんどんと」

うどん-ぶくひ　饂飩篩（名）饂飩粉をふるふ篩（ふる）。

うどん-や　饂飩屋（名）饂飩を賣る家。又、其れを賣る人。

うな（名）【動一】うなぎ（鰻）の略。「うなどん」二ふな（鮒）の訛り。

うな　項（接頭）うなじ（項）の意を表す語。記上「爲宇伎由比而宇那（うな）賀氣理豆、至今鎭坐也」同上「宇那（うな）かぶし、なが泣かさまく」神代紀下「低倒愁吟（うなだれ）」宇鏡「點頭客（うなだれ）」和名「髮髻（うなゐ）」

うな　海（接頭）うみ（海）の意を表す語。齊明紀「湊のうしほのくだり于那（うな）」天武紀「海水（うなみ）」萬上「宇奈（うな）原の沖ゆく舟をかへれとか、ひれ振らしけむ松浦佐用姫」

うな（句）【うぬはの約】汝は。おのれは。今宮心中上「うな、よく身をぶたせたなあ、覺えて居ろ」

う-ない（名）うだい（宇内）に同じ。

うな-うな（名）おどし叱ることをいふ、小兒の語。浮世風呂上「憎いおっかあめだの、うなうなをしてやらう。かあいい坊にあっつすゑて」

うなかける　項掛（自動四）古語。項に手をかけて互ひに親しみ合ふ。記上「爲宇伎由比而宇那賀氣理（うなかけり）豆、至今鎭座也」萬上「たづさはり宇奈我既刺（うなかけ）ねて、おもほしきことも語らひ」

うながし　促（名）一うながす（促）こと。二古への職。上古、四坊の戸籍を正し、賦役を催促し、猛邪を察することを司るもの。孝德紀「四坊置令（うながし）一人、掌。按檢戶口、督察猛邪」

うながす　嬰（他動サ）古語。項に掛く。うなぐ。記上「おとたなばたの宇那賀世流（うながす）玉のみすまるみすまるに」

うながす　促（他動サ）催したつ。いそがす。催促す。催告す。仁德紀「百姓之不領（うながす）而中略競力爭作」宇津保上「御車どもも中略大臣猶彼れをうながせとて」佛説阿彌陀經

うなーかぶす（自動四）古語。項を垂れ傾く。記上「宇那加夫斯（うなかぶし）なが泣かさまく」

うなーかみ　海上（名）海のほとり。うみべ。海邊。萬上「わたの底沖つ深江の宇奈可美（うなかみ）のこふのはらに」

うなーかみ　髻（名）馬の頭髮（たてがみ）。たてがみ。たちがみ。和名十「髻俗云宇奈加美」長毛也」名義抄「鬢（うなかみ）」

うなかみ-ど　海上砥（名）下總國海上郡銚子の海岸より産出する砥石。其の質粗し。

うなぎ　鰻（名）【動】喉鰭類、うなぎ科に屬する魚。體は圓筒形にして、大なるは二尺餘に達す。細鱗あれども皮膚の中なるを以て著明ならず。皮膚は厚くして粘液に富む。頭はやや尖りて下顎少しく突出し、腹鰭を有せず。脣鰭は後方にありて體長の大半を占む。體色は一定せず。我が國の河川・湖沼及び近海に産す。淡水産なれども、秋期には海に下だりて産卵す。卵より發生したる幼魚は全く異なり、扁平にして無色帶狀のものなるが、春季に至り約二寸許に成長して、うなぎの形態を具ふれば、大群をなして河川に上ぼり、二年乃至三年間を經て漸く成魚となる。多く蒲燒として食料に供す。うな。う。まんり。むなぎ。鰻・鰻。

うなぎ　の　かばやき　鰻蒲燒　鰻を背開きにして蒸し、たれをつけて燒きたるもの。心中刃氷朝日「主は奥の座敷でおやまをくやったさうなれど、わしはは上がり口で鰻の蒲燒ばかり」

うなぎ-かき　鰻掻（名）泥中の鰻を捕ふる具。棒の端に鉤をつけたるもの。佛庚曲「そのさまにまたや汗かき鰻かき」

うなぎ-ころし　鰻（名）【植】たかさぶらう（鰻腸）の異名。

うなぎ-ざる　鰻笊（名）鰻をいるる笊。

うなぎ-つかみ　雀翹（名）【植】蓼科、雀翹屬の多年生草本。莖の高さ一二尺、多く分岐して廣がる。葉は披針形をなし、基部矢根狀なり。莖は四角形、角に沿ひて逆刺列生す。花は紅白色、頭狀に排列す。本邦、各地の圃畔に生じ、四五六月の頃開花し、七月に枯死す。うなぎづる。

うなぎ-つかみ（名）【植】たかさぶらう（鰻腸）の異名。

うなぎ-づる（名）【植】うなぎつかみ（雀翹）の異名。

うなぎ-どんぶり　鰻丼（名）うなぎめしの鰻（鰻飯）に同じ。うなどん。

うなぎ-のかば　鰻皮（名）船具。じゃぶくろ（蛇袋）をいふ。讃岐國の方言。

うなぎ-のせのぼり　鰻瀨登（名）小兒の戲れ。下交を見よ。東海道名所記「都方にては、いとけなき子供の數多集まりて、帶にとりつきて長くならびたる背中の上を、一人のぼりて匐ひありくを鰻の瀨のぼりと名づけて、たはぶれとす」

うなぎ-のぼり　鰻登（名）鰻が、少しの水の所にても滯ることなく泝る如く、次第にのぼり行くこと。浮世風呂上「獨むべいとしても、指の股さ、ぬるぬるめるめるつん出て、によろをりによろをり、鰻のぼりいするだあ」

うなぎ-はり　鰻針（名）眞鍮製にて直角鉤の鉤の針。鰻を釣るに用ふ。

うなぎ-めし　鰻飯（名）蒲燒にしたる鰻を、丼に入れたる飯に載せたるもの。うなぎどんぶり。うなどん。

うなぎ-や　鰻屋（名）鰻を蒲燒にして客にすすむる家。

うなぎ-やな　鰻簗（名）秋、流れに從ひて下だる鰻を捕ふるに用ふる簗。

うなぎ-わた（名）うこん・淺黃などの染綿にて製りだる綿帽子。應筑波「おはぐろを附けぬもかづくうなぎ綿」

うなぐ　嬰（他動四）古語。項に掛く。うながす。神代紀上「以其瓊所嬰（うなぐ）五百箇御統之瓊」萬上「我が宇奈雅（うなぐ）る玉の七つを」

うなぐし（名）【動】養などにつく蛆。

うなーこぶ　項瘤（名）牛の頸にある肉塊。駕を受くる處。宇鏡「龍項瘤加賀鳥宇奈古波」古語。海のさかひ。記上「寒海坂（うなさか）而返入」萬上「海界（うなさか）を過ぎて漕ぎ行くに、わたつみの神の少女に、たまさかにい漕ぎ向かひて」

うなさか　海境（名）

うなされる　魘（自動下一）恐ろしき夢に襲はれて、覺えず聲を立つ。

うなされる　魘（自動四）前條の口語。開上手「さっきからうなされたが、夢でも見たか」

うなじ　項（名）頸の後方。えりくび。くびすぢ。仁德紀「壺體有兩面「中略項合無項（うなじ）和名三項之頸後也」龍鍾字

うなじ　の　した　の　つむじ　項下旋毛　馬の旋毛。とうじや（蹤蛇）に同じ。

うなたま　頂玉（名）項の周圍につくる飾りの玉。日本振袖始「項（うなたま）玉・手玉・足玉の緒の繰り返し」

うなだる　項垂（自動下二）うなじを垂る。物を思ふ狀にいふ。頭を垂る。うつむく。低頭す。神代紀下「低倒愁吟（うなだれ）」拾遺雜五「しばしだにかげにかくれぬ時はなほ、うなだれぬべき撫子の花」俳御紀「鰻の蒲燒のたれをいふ。東京の方言。

うなだれる　項垂（自動四）うなだる（項垂）の口語。

うなぢ　海道（名）うみぢ（海路）に同じ。ふなぢ。航路。

うなつき　頸衝（名）一髮の末にて頸の邊を衝くこと（童兒の狀。萬上「頸著（うなつき）のわらはがみには」二うしろの頸筋の處。盛衰記十三「行佐殿は手洗ひ口濕て是れを請け取りて、領許（うなつき）に入れてぞおはしける」

うなづく　項衝　頷（自動四）頭を前へ動かす承諾の意を示す。がてんす。竹取「さだかに造らせたる物と聞きつれば、返さんことゝ易しとうなづきをり」

うなつるす　聽（自動四）古語。うなづく。仁德紀「納上八田皇女「將爲妃時、皇后不聽（うなつるす）」

うなて　田（名）ひく用水の溝。崇神紀「其多開池溝（うなて）以寬民業」神功紀「引儺河水、欲潤神田（うなて）」夫木「すらしをがうなての道にいぐしたて、水口祭る時はきにけり」溝渠紀

うなーどん　鰻井（名）うなぎどんぶり（鰻丼）の略。

うなね　頸根（名）首の根をいふ。長歌

うなね　つきぬく　頸根徹拔　鯰などの

頸を水に衝き入るる如く、人の頸をもつて地につき敬ふ狀をいふ。つきぬくは突き通すに同じく、語を强めいふ。真觀「詞式」宇事物類根衝拔

うなは 鵜縄 (名) ㊀鵜飼する人の、鵜をあやつるため、鵜の頸につくる縄。新六帖「此の川にさよ更けぬらし、かつら人鵜縄手にまき船下ろすなり」 ㊁漁の具。鵜の羽又は小さき板片を縄に結び附けたるもの。魚を驅りて網の方へ追ひ込むるに用ふ。山家集「見るもうきはうなはに逃ぐるいろくづを、のがらかさでもしたむもち網」

うなはあみ 鵜縄網 (名) 鵜縄を用ふる敷網(しき)の稱。

うなはら 海原 (名) ひろびろとしたる海。うみ。滄海。萬五「宇奈波良(パラ)の沖ゆく舟を歸れとか、ひれ振らしけむ松浦佐用姫」海紀上

うなひ (名) うなふこと。耕作。

うなひ 海邊 (名) 古語。うみべ。

うなひ かいへん。萬三「いさなとり海邊(ウナヒ)をさして」

うなふ (他動四) 〔うね(畝)を活かす〕鍬にて田畠の土を起こしうねを作る。たがへす。たがやす。爲忠百首上「水たまる谷のゑこゑこ掘りかへし、わりなくうなふ小田の苗代」

うなふや 捶矢 (名) 一旦、的に中たりたる矢の、はね返りて鏃の方地に立たるもの。

うなみ 卯浪 (名) 卯月のころたつ波。九州南方の方言。無名抄「四月・五月には、あけくれ浪たちてしづまるまもなし。う月にたつをばうなみといひ、さ月にたつをばさなみとなん申し侍る」

うなめ 畦目 (名) 次條の略。

うなめぬひ 畦目縫 (名) 鎧の菱縅の板に、田畝のうねの如く並べて縅したる飾り。多くは喰木の絲を用ふ。

うなもと 項本 (名) 魚の頭部の名所。頭の方より第一の背のひれ。うを(魚)を見よ。厨事類記「鯉は中華引實、上にうなもと盛りて供之」

うなや 檻 (名) らう(牢)に同じ。牢獄。神功紀「納(ウナ)檻中、以火焚而殺」八雲御抄「うなやは人をこむる所をいふ」

うなり 唸 (名) ㊀うなること。 ㊁鳳につけて、風に當て音響を發(ウナ)さしむるもの。篠又は竹の幾を薄く剝ぎて弓弦につけて張る。風箏。 ㊂理「二箇の發音體が同時に發音し、其の音の大さ終始一樣ならずして、强弱・浮沈を生ずる現象。

うなり 唸獨樂 (名) 獨樂の一種。胴を竹又は薄き金屬にて作り、內部をうつろにし、所所穴を明け、廻はるに從ひ空氣の振動によりて一種の音響を發するもの。

うなり 唸聲 (名) うなる聲。うめきごゑ。傾城酒呑童子「留まれ止まれのうなり聲」

うなる 唸 呻吟 (自動四) ㊀苦しみて聲を發す。うめく。呻吟す。 ㊁眠なと、怒りて聲を發す。曾我虎磨下「うなり出でたる暴れ猪の、槍も矢先も事ともせず」 ㊂くごもりたる聲にて詩歌などを歌ふ。浮世風呂上「江戸節をうなる爺さまにて」 ㊃永く鳴り響く。「鐘ゝ香うなる」

うなね 髣髴 (名) 〔項(ウナ)の義といふ〕 ㊀古へ小兒の髮を、うなじの程にて切り垂れおくもの。うなゐがみ。宇鏡「髣髴髮、和名三髣髴髮(字合)、謂童子垂髮也」卯月名義 ㊁切り蕨。うなゐこ。宇津保竹取「うなゐは びづら結ひて馬に乘れり」同榎茸「おとな廿人、うなゐ・しもづかひなどいと多く召し集めて」

うなゐがみ 髣髴 (名) 前條に同じ。伽羅先代萩中幕「子は孝行におも痩せて、涙を隱すうなゐ髮」

うなゐぐるま 髣髴車 (名) うなゐこの乘りたる車。宇津保藤「うなゐ車五つ、しもづかへ、車五つしてなん參り給ひける」

うなゐこ 髣髴子 (名) ㊀うなゐに髮を結びたる童。拾遺夏「郭公をちかへり鳴け、うなゐこが打ちたれ髮の五月雨の空」 ㊁わらは。童兒。宇津保祭「りようの袴着たるうなゐこに、綾がさねのよそひしたるおとな」

うなゐこ (名) 〔植〕おきなぐさ(白頭翁)の異名。

うなゐこどり (名) 〔拾遺夏「時鳥をちかへりなけうなゐこが打ちたれがみの五月雨の空の歌より出でたるなるべし」〕〔動〕ほととぎす(子規)の異名。

うなゐはなり 髣髴放 (名) 〔結ばずして放ち垂るるよりはなりといふ〕うなゐ(髣髴)髮に同じ。萬三「橘の寺の長屋に吾がるねし、童女波奈理(ウナヰハナリ)は髮上げつらむか」

うなゐまつ 髣髴松 (名) 墓標に植うる小松。源幻「心はせ・かたちなどもめやすくて、うなゐ松におぼえたるけはひ」花鳥餘情「文選に馬鬣松と書きてうなゐ松とはよみ侍り中華たとへば、塚の松をなき人のかたみと見る如く」

うなゐをとめ 髣髴少女 (名) うなゐにて居る少女。夫木「けさ見ればうなゐをとめがすりごろも、春たちそむる軒の柳風」

うに 海栗 海膽 (名) 〔動〕棘皮動物、海膽類の一種。球形にして兩狀をなし、殼板は石灰質より成り、周圍に數多の棘を生じ、棘の外に叉刺及び步足を有す。口は腹面の中央に、肛門は背面の中央に在り。到る處の海濱に產す。其の卵巢は製造して食用に供せらる。和名「蠣蠣子中華」「貌似橘而圓、其中紫色、生芒角者也」雲丹。

うに (名) 〔鎭〕でいたん(泥髮)をいふ。伊勢・伊賀の方言。芭蕉句「香に匂へうに掘る岡の梅の花」

うにう (名) 〔動〕おっとせい(腹脚)をいふ、あいぬ語。

うにうこぎ (名) 〔植〕おにうこぎの異名。

うにくさ (名) 〔植〕かにくさ(海金砂)の異名。

うにこーる (英 Unicorn) (名) 〔動〕いっかく(一角)の異名。平家女護島「彼の唐土のうにこーる・といふけだものは、水上の惡毒をおのれが角にてそそぎ消し、國民の命を助くれども」

うにつぼ 海栗壺 (名) 海栗の殼。うにのす。

うにのす (名) 前條に同じ。

うにやさくら (名) 芝居の隱語。物をうちすてにすること。

うぬ 犬 (名) 〔動〕古語。いぬ(犬)に同じ。崇峻紀「犬(ウ)」

うぬ (代) 己れ。なんぢ。人を卑しめていふ詞。國姓爺「やあやあ、うぬはいづくの風來人」

うぬぼれ 自惚 (名) うぬぼれること。自慢。自負。傾城買二筋道「うぬぼれをだしきつて、いやらしい事をいひなんすを」

うぬぼれかがみ 自惚鏡 (名) 容貌を實物よりよく見る鏡。婦節用「十九文屋の店先のやうに、

うぬぼれ鏡が澤山だよ」

うぬぼれる 自惚 (自動下一) たかぶる。自慢す。自負す。

うぬめ (代) おのれめ。人を賤めいふ語。源氏烏帽子折「うぬめをもらせし無念さに」

うぬめら (代) 次條に同じ。蜻丸「むむきこえた」

うぬら (代) うぬめらは强盜よな」

うぬら (代) うぬめの複數。うぬめら。おのれら。きさまたち。薩摩歌上「うぬらふぜいと太刀打は、武運に盡きた口をしい」

うぬれ (代) うぬに同じ。人を卑しめいふ語。

うね 畦 畝 (名) ㊀田畠の中に、土を堆く盛り起こして長くつづけ、物を植ゑつくる處。靈異記上「畝子」和名「畝字圖」 ㊁うねりに同じ。諸知恩「唯滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し」

うねあひ 畦合 (名) 畦と畦との間。日本振袖始「茂る菜種の畦あひを、一鍬返す土の下」

うねうね (副) 高低屈曲する狀、又、波の寄せ來る狀にいふ語。

うねおび 畦帶 (名) 元祿の頃流行したる帶。縞の畦に似たるよりいふ。

うねおり 畦織 (名) 織物の一種。田畠の畦の如く、凸く絲を起こして織りたるもの。羽後國秋田の名產。

うねくね (副) うねる狀にいふ語。うねうね。

うねくる (自動四) うねるに同じ。

うねくれる (自動下一) 前條の口語。

うねさし 畦刺 (名) 絲にて田畠のうねを作るやうに刺し縫ふこと。小町節「たつ波のうねざしなれや水鳥の杳」

うねざしたび 畦刺足袋 (名) 晒木綿を絲絲にてうねざしにしたる足袋。うねたび(畝足袋)。日本鹿子「肥前國名物の內、長崎木綿・うねざし足袋」

うねしりがい 畝鞦 (名) 馬具の名。うね縞の緒を鞦としたるもの。物具裝束抄「鞦事・連著・畝鞦」

うねたて 畦立 (名) 田圃などに畦を作ること。

うねたび 畦足袋 (名) うねざしたび(畝刺足袋)の略。東海道名所記「うねたびの筒のたくれを直し」

うねどこ 畦床 (名) うね(畦)に同じ。

うねとる (自動四) うねうねと行く。松風村雨東帶鑑幕末「梅の營獨樂、すわりもやらずうねとりて」

うねは (名) 〔植〕みみなぐさ(卷耳)の異名。

うねはば 畦幅 (名) 畦の廣さ。

うねはひ (名) 〔植〕みみなぐさ(卷耳)の異名。

うねべ 采女 (名) うねめ(采女)に同じ。宇津保藤上「時もちがめは、朱雀院の御時うねべをなんし侍りし」

うねべのつかさ 采女司 (名) うねめのつかさ(采女司)に同じ。

うねべのつかさ 采部司 (名) 齋宮寮十二司の一。

うねめ 采女 (名) 天皇の御膳を給仕する官女。水司・膳司に屬す。また後宮に仕ふるものあり。郡領及び掾・目の女の、容儀・材能あるものを選びあつ。うねべ。枕「御てうづ番のうねめ、青裾濃のもへからぎぬ・褂帶・ひれなどして」 ㊁ぎぬ(繪衣)に同じ。

うねめぎぬ 采女衣 (名) ぎぬ(繪)に同じ。

うねめでん 采女田 (名) 王朝時代、采女の資用に供するため、これに班ち賜ひし不輸租田。うねめやうでん。うねめのひれた。主稅寮式上「采女田中幕並爲不輸租田」

うねめぬひ 畦目縫 (名) うなめぬひ(畦目縫)に同じ。

うねめのかみ 采女正 (名) うねめのつかさの長官。職員令「采女司、正一人」

うねめのしやう 采女正 (名) 前條に同じ。

うねめのつかさ 采女司 (名) 官署の名。宮內省の被管。采女の所爲を檢知すること、を掌るところ。うねべのつかさ。

うねめのひれだ 采女肩巾田 (名) うねめでん(采女田)に同じ。續紀三「廢內藏寮、以其所出、諸國采女肩巾田(ウネメノ)依令停之、至是復舊焉」

うねめべ 采女部 (名) 采女司の屬官。史生の次位。

うねめやうでん 采女養田 (名) うねめでん(采女田)に同じ。采女司式「凡采女養田各三町」

うねもおり (名) 〔植〕さいぶりぼく(扶桑)の異名。

うねり (名) ㊀うねること。うねうねすること。うねくれること。源氏十二段長生鳥臺長生殿「萩も枯れも刈萱も、萩の上風吹き添ひて、同じうねりに置く露を」 ㊁徐徐とうねり起つ大浪。「波のうねり」

うねる (自動四) 〔畦をはたらかす〕或ひは左右に、或ひは高く低く屈折・迂廻す。曲がりくねる。うねくる。

うのあし 鵜脚 (名) 〔動〕軟體動物、腹足類の一種。殼は低き圓錐形なれども、十條內外の大なる放射肋あるを以て、鵜の蹼足狀を呈し、全く螺狀を失ひ、殼頂は一方に偏せり。本邦、各地の海底岩石上に吸著して生活す。

うのあしがひ 鵜脚貝 (名) 〔動〕腹足類、うのあし科に屬する貝。形狀、うのあしに似て、陣笠狀の介殼を有すれども螺旋部なし。海濱の岩石に多く附著す。

うのくそ 鵜糞 (名) 鵜の糞。藥用とす。和名「鵜糞華(ウノクソ)鷄糞矢名也」

うのくびづくり 鵜頸作 (名) 刀劍の切先より中程まで、棟の肉を削り落としたるもの。うづくり。かむりおとし。

うのくびむすび 鵜頸結 (名) 結の結び方の名。かめくくし。かもくたし。かもさげ。わさぎ。かしこ結び。

(びすむびくのう)

うのけ 兎毛 (名) ㊀〔動〕うさぎ。拾遺戀草上「露を待つうの毛のいかにしをるらん、月の桂の影を縫みて」 ㊁物の極めて微小なるに譬へていふ語。毫毛。毫末。室町千疊敷「身中に兎の毛の突き嵜も、斬り疵とてもあら不便や」 ㊂ゆて(筆)の異名。冕卷。守武千句「黑軸の筆にて書けする文もうし、うの毛ほどだに心ありてよ」

うのはな 卯花 (名) ㊀うつぎの花。藤なみは咲きて散りにき、宇能波奈(ウノハナ)は今ぞ盛かりと」水晶花。 ㊁染色。襲の色目の名。表白、裏青。女房の五衣には表は皆白けれども、裏は上の二は白、次のは黃、次の二は青の濃淡、單は裏も白。四月用ふ。うのはなが。枕「卯の花のうすやうに」榮華物語「女房色色を著たり中幕うの花十人」

㊁きらず（雪花菜）の異名。豆腐のから。（色白くて卯の花に似たるよりいふ）㊂【鵜】あゆ（鮎）の異名。

うのはな（名）【植】㊀うつぎ（空疎）の異名。㊁たにうつぎ（樹葱）の異名。

うのはないか　卯花烏賊（名）次條に同じ。

うのはないり　卯花煎（名）烏賊を切り、薄たれにて煮たるもの。うのはないか。庖丁聞書「うのはないりとは、いかを切りうすたれにて煮るなり」

うのはないろ　卯花色（名）うのはな（卯花）に同じ。實國駒家歌合「今日やさはうの花色のしらがさね春のつつじにひきかへつらん」

うのはなーがき　卯花垣（名）卯の花の咲きたる生け垣。うのはながきね。夫木「春日山うのはながきにおそ櫻、春と夏とやあふさかの關」

うのはなーがきね　卯花垣根（名）前條に同じ。枕「卯の花垣根近うおぼえて、子規も蔭に隱れぬべうおぼゆかし」

うのはなーがさね　卯花襲（名）うのはな（卯花）に同じ。枕「ただうのはながさねを、ここにかけたるやうにぞ見えける」

うのはなくたし　卯花腐（名）〔卯花をくたす義〕四五月頃の雨。千載「いとどしく蹇のいほりのいぶせきに、卯の花くたしさみだれぞふる」

うのはなぐもり　卯花曇（名）陰曆四月頃の曇天の稱。錦衣卯月「卯月は例の卯の花ぐもりに、蚊屋の香も珍しく」

うのはなごろも　卯花衣（名）衣の染色「又は幣の色目を、うのはなにしたるもの。

うのはなそめ　卯花染（名）卯の花色に染めたるもの。頼城島原蛙合戰「鎧にあらぬ卯の花ぞめ、裾の蹴廻し草摺長に、梶原が前にしゃんと坐し」

うのはなづき　卯花月（名）〔卯の花の咲く月の義〕陰曆四月の異名。うづき。藏玉「十二月四月花」千五百番歌合「しづのをが園ひませたる垣ねこそ、卯の花月の曇りなりけれ」

うのはなづきよ　卯花月夜（名）次條に同じ。新六帖「さ月山雲ははれぬとほととぎす、卯の花づきよさやかにぞ鳴く」

うのはなづくよ　卯花月夜（名）卯の花の白く咲きたるを月に見たてていふ語。萬「さつき山宇能花月夜（ウノハナヅクヨ）、ほととぎす聞けどもあかず、また鳴かぬかも」

うのはななます　卯花鱠（名）ぬたなますの上へ、湯びきたる魚肉を散らし盛りたる料理。又、おろし大根をおきたるをもいふ。庖丁聞書「卯の花なますといふは、ぬたなますの上へゆびきたる魚をちらしもる也」

うのはなの　卯花之（枕）うの花は五月に咲けば、さつきにかけ、又語路の同じきより、うきにかけていふ。萬「時ならず、玉をぞぬける宇能花乃（ウノハナノ）、さつきを待たば、久しかるべみ」同「ほととぎす鳴くをの上の宇乃花之（ウノハナノ）、うきことあれや君が來ざるぬ」

うのはなーひらめ　卯花比目魚（名）煎てたる比目魚の肉をほぐしたもの。

うのはなーぶき　卯花葺（名）卯の花に蔽はれたる屋根。夫木「しはつ山うのはなぶきのかり庵や、よどこもさえぬ雪のしたぶし」

うのはなーめし　卯花飯（名）きらずに雞卵などをまぜ、鰹節の汁などにて味をつけたるを飯の上に盛りたるもの。

うのはなーやき　卯花燒（名）鮎を燒きて酢をかけ、豆腐のからを散らしかけたるもの。

うのはなーやま　卯花山（名）卯の花の咲きたる山。萬「見渡せば宇能波奈夜麻（ウノハナヤマ）のほととぎす、ねのみしなかゆ」

うのはなをとし　卯花縅（名）鎧の縅の名。白と萌黄とにて、段段に色をかへて縅したるもの。又は、上或ひは下の一方を白に、一方を萌黄にをどしたるもの。

うのーはら　海原（名）古語。うなばら（海原）に同じ。古へ東國の方言。萬「大君のみことかしこみ、磯にふり宇乃波良（ウノハラ）わたる、父母をおきて」

うのみ　鵜呑（名）㊀鵜の如く物を噛まずして呑むこと。まるのみ。㊁意味をよく咀嚼せずして、そのままうつしとること。浮世風呂「上「假令楊雄がせんぼを諳んじ、半二がきんしよを鵜呑にするとも」

うのめ　鵜芽（名）うどめ（獨活芽）に同じ。

うのめーがへし　畦目返（名）田畠の畦の如く、裏表より混じて縫ひ出だしたるもの。我衣「將軍吉宗公御鷹野遊ばされ、うのめがへしの御胶引、紺の差し足袋をめしたり」

うのーめつき　有目附（名）能樂の語。うむのめつき（有無目附）を見よ。（無の目附の對）

うのめゆわう　鵜目硫黄（名）硫黄の一種。黄色にして微紅を帶び、光彩明徹なるもの。

うのーよし　鵜野葦（名）【植】うどのよし（鵜殿葦）の異名。笠嶺の義。嘴に用ふ。

うのよ

うはー　上（接頭）うへ又はじめなどの意を表はす語。神代紀「上國（ウハツクニ）、此云羽播（ウハ）豆矩爾」萬「宇波（ウハ）へなきものかも人は、しかばかり遠き家ぢを歸す、思へば」勢語「うはがきに、武藏あぶみと書きて」

うば　祖母（名）そぼ（祖母）に同じ。おほば。隆信集「うばにて侍りし人の身まかりて、母のかの服きられし日」

うば　姥（名）㊀老いたる女。嫗。住吉「むくつけき女うちゑみて、うばが兄のかずへのすけと、七十許りなる翁の」㊁めのと。乳母。まま。著聞「をさなき心にあさましく歎きて、うばにともすれば、うれ（たいじ）やうしけれども」㊂能樂の面の一種。老女の額にかたどる。

（ばう）

うーば　豆腐皮（名）豆腐の液に灰汁を入れて煮、上に生じたる薄皮を取りて乾かしたるもの。ゆば。犬子集「十町もつづけ豆腐のうばざくら」

うばーあいさ　姥秋沙（名）【動】秋沙（アイサ）の一種。眼上に黒き條あるもの。

うばーあさ　上膊（名）次條に同じ。

うばーあご　上膊（名）上の方の膊（ウデ）。

うばーあし　上脚（名）和船の名所。戸立（ヒタテ）の上櫂（カイ）と接するところ。うはあぎ。

うばい　たてて。

うばい　優婆夷（名）梵語。俗家に在りて佛法に近事する女子の稱。〔優婆塞の對〕徒然草「優婆塞より優婆夷は劣れり」圓覺經「優婆塞、優婆夷、此在家二衆」（名）優婆夷、此云清淨女」

うーばい　突いて」

の實。色黑し。藥用又は染料とす。本草「梅實采半黃者、以烟熏之、爲烏梅」

うはー　右方（名）㊀右の方。㊁雅樂にて、高麗樂・渤海樂の總稱。うぶ（左方の對）

うばー　羽旄（名）鳥の羽及び牛の尾を竿頭につけたる幟。孟子「羽旄之美」唐船噺今國姓爺「清道の大旗羽旄風に吹き靡かせ、りうたいや六あん王來臨あれば」

うはうぎーおそび　上置襲（名）古語。うはおそび（上襲）に同じ。字鏡「襟（字義分類）、上置襲（和名抄）」

うはーうす　上臼（名）ひきうすにて、上へ重ねて廻轉する石。

うはーうは　上上（副）氣の浮きて落ちぬ狀にいふ語。

うはーうり　上瓜（名）【植】まくはうり（甜瓜）の異名。

うはーうるし　上漆（名）【植】くまこけもも（烏薬）の異名。

うはーえだ　上枝（名）上部の枝。爲忠集「飛びかふにさはるやつらき尾長鳥、しごきて折るる松のうはえだ」

うはーえり　上領（名）えりの上の方。

うはーおき　上置（名）㊀斷・飯などの上に載せ盛る副食物。頼陵酒呑童子「尤も飯は上置なしの生飯なり」雪女五枚羽子板「ごまめ鱠の素浪人、雜煮の上置輪ん切り大根」㊁料理に、賞翫の物を上に置くこと。鳥類なれば、白鳥は水かき又は首骨、鶴は黃筋、菱喰は黑足、雁は水かき、鴨は赤足の類。（書史・鑑記）

うはーおそび　上襲（名）表衣の上に副へ著る小衣。うはがけ。うはうきおそひ。（類本字鏡「襟（字義分類）、上襲（和名抄）」枕「わらはのあこめのうはおそひは、何色につかうまつるべきと申すを」

うはーおび　上帶（名）㊀衣の最も外に締め纏ふ帶。岡本記「御參宮のお供などには、なか帶に上に十德著、白きうはおびをして」㊁鎧の腰の邊に纏ひ著くる帶。平治「これ程に見限られ奉りては先き立ち申すにしかじとて、既に腹を切らんと上帶を押し切り」㊂籠の上に引き掛けて、腰に結び留むる紐。こしあて。雅亮裝束抄「やなぐひを負ふ。うはおびはひくべし」圖ふとおび（太帶）に同じ。

うはーおほひ　上被（名）物の上に被ふ席・布などの稱。おほひもの。

うはおほめ　上大目（名）（ウハ）の小名。

うはーがい　（名）「うはがへの訛り」うはま（上前）に同じ。うはがさね。

うはーがき　上書（名）書狀・書物・匣などの表面に書く文字。名稱また外題など。勞語「聞とゆれば、つかし聞こえねばくるしと書きて、うはがきに武藏あぶみと書きておこせて」隆信集「文のうはがきにも書きてやりなどせしほどに」

うはーがけ　上掛（名）うはおそひ。

うはーがさね　上重（名）㊀うはぎ（上著）に同じ。

うはーがへ　上交（名）㊀うはま（上前）に同じ。雅亮裝束抄「脇あけのうはがへの裾を足のくびにつかせて、したがへをば一すぢかりひきあげ」㊁軸の物の、表紙の附きたる方。

うはーがみ　上紙（名）上をつつむ紙。書物の表紙。

うばーがみ　姥髮（名）能樂にて、姥の面と共に著くる白髮交りの鬘髮。

うばーがもち　姥餅（名）餅の一種。近江國草津の名產。丹波與作「お姥様」

うばーかぶき　上歌舞伎（名）みえをはること。虚飾。世間娘氣質「世間の女のうはかぶきなること、是れに限らず」

うはーがへ　上交（名）㊀うはま（上前）に同じ。雅亮裝束抄「脇あけのうはがへの裾を足のくびにつかせて、したがへをば一すぢかりひきあげ」㊁軸の物の、表紙の附きたる方。

うはーがみ　上紙（名）上をつつむ紙。書物の表紙。

うばーがみ　姥髮（名）能樂にて、姥の面と共に著くる白髮交りの鬘髮。

うばーがもち　姥餅（名）餅の一種。近江國草津の名產。丹波與作「お姥様」

うばかねさう　（名）【植】いぢせんりやう（杜葉山）の異名。

うばかねーもち　（名）【植】前條に同じ。

うはーかは　上皮（名）㊀皮の上にある皮。㊁物の表を被へるもの。外被。頼城酒呑童子「そも人間の皮一重、下は恐ろし上皮はまづ美しき上薦の」

うはーかは　上側（名）うはつら。うはべ。そとがは。表面。外面。

うはーがひ　上交（名）㊀おくみ（衽）に同じ。字鏡「衽（和名也、俗云衣之）」㊁うはま（上前）に同じ。元服次第「小袖たたみ樣の事、常には下がひを上へなし候。此の時は上がひをうへの方へなるやうにたたみ候也」

うばーがひ　姥貝（名）【動】蝌鰕類、ばかがひ科に屬する貝。介殼は中大にして、其の肉は生のまま又は乾燥して食用に供す。美味なり。ほくきがひ（北寄貝）。精進魚類物語「年老いたれば、うばがひの女貝こそせいしけれ」

うはーがへ　上交（名）㊀うはま（上前）に同じ。雅亮裝束抄「脇あけのうはがへの裾を足のくびにつかせて、したがへをば一すぢかりひきあげ」㊁軸の物の、表紙の附きたる方。

うはーがみ　上紙（名）上をつつむ紙。書物の表紙。

うばーがみ　姥髮（名）能樂にて、姥の面と共に著くる白髮交りの鬘髮。

うばーがもち　姥餅（名）餅の一種。近江國草津の名產。丹波與作「お姥様」

うはーぎ　上著（名）㊀衣服の最も上に著る衣（但し羽織は除く）。枕「すはうの薄物のうはぎなどにて」㊁重ね著たる小袖の、最も上なるものの稱。ないし（内衣）。大名出仕記「上著とは、いちに上にきられ候小袖のことにて候」

うはぎ　（名）【植】よめな（雞兒腸）の異名。萬「妻もあらば採りてたげまし、さみの山ぬのへの宇波奈（ウハ）、すぎにけらずや」

うはぎーがらす　浮氣烏（名）うかれがらす（浮鴉）に同じ。冥途飛脚「浮氣鴉が月夜も闇も、首尾をもとめてあほあほとさ」

うはぎーざかり　浮氣盛（名）最もうはきなること。又、其の年盤。嫗山姥「何が互ひの浮氣盛かり、上がる程に上がる程に」

うはぎーざけ　浮氣酒（名）うはきになりて飲む酒。うかれて飲む酒。淀鯉出

よりまづ姥が餅、一口・二口・みな口どぢやう踊りこえ」

うはーがり　上借（名）金錢などを、一度借りたる上に、又その人より借ること。

うはーがる　上枯（自動）㊀上の方枯る。木末枯る。うらがる。㊁草枯る。當流小栗判官「悉も影も遠山の霧にほのぼの木隱れて、涙に摩もうはがれし」

うはーがれ　上枯（名）うはがること。夫木「うはがれの草葉は霜になほさえて、春めきやらぬ小野のふる道」

うはーき　浮氣　上氣（名）心うはつきて移りやすき性質。氣の多き人。頼城島原蛙合戰「二人の死骸を人が見て、輔樂がうはきな心中したと云ふであらう」

うはーぎ　上著　表著（名）㊀衣服の最も上に著る衣（但し羽織は除く）。枕「すはうの薄物のうはぎなどにて」㊁重ね著たる小袖の、最も上なるものの稱。ないし（内衣）。大名出仕記「上著とは、いちに上にきられ候小袖のことにて候」

うはぎ　（名）【植】よめな（雞兒腸）の異名。萬「妻もあらば採りてたげまし、さみの山ぬのへの宇波奈（ウハ）、すぎにけらずや」

うはぎーがらす　浮氣烏（名）うかれがらす（浮鴉）に同じ。冥途飛脚「浮氣鴉が月夜も闇も、首尾をもとめてあほあほとさ」

うはぎーざかり　浮氣盛（名）最もうはきなること。又、其の年盤。嫗山姥「何が互ひの浮氣盛かり、上がる程に上がる程に」

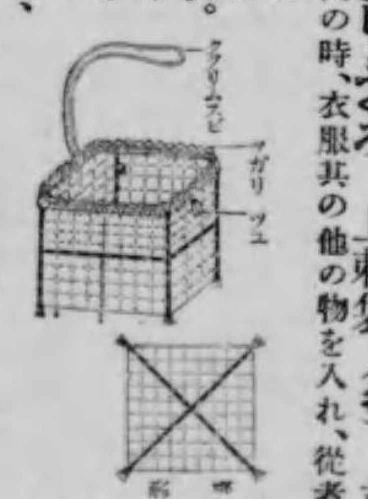
うはぎーざけ　浮氣酒（名）うはきになりて飲む酒。うかれて飲む酒。淀鯉出

世織德下「仁三郎がうはき酒、いき倒れては性根つかず」
うはき‐しゃう 浮氣性 (名) うはきなる性質。多情なるうまれつき。
うはき‐っ‐ぽい 浮氣 (形口語) 浮氣なる傾きあり。心移り易し。
うはき‐もの 浮氣者 (名) うはきなる人。娥歌加留多三「左京の進と云ふ浮氣者にそそのかされ」
う‐はく 〔雨雹〕 雹(ハク)ふること。左傳僖公廿九年「秋大雨雹爲災也」
う‐ばくか 〔右幕下〕 (名) 右近衛大將の居所。又、其の人。
うは‐ぐくり 上括 (名) 指貫のすそを、膝の下の邊にてくくること。
うは‐ぐすり 上藥 (名) 陶器の上にぬり燒きて、光澤を出だす藥。つやぐすり。釉藥。
うは‐ぐそく 表具足 (名) 武具。臑卷の上に著けたる鎧。義經記八「鈴木申し上げけるは、討死のうは具足のよしあしは、いり候まじく候へども」
うば‐くち 姥口 (名) 物の蓋などの、しかと合はずして開きたること。
うは‐くちびる 上唇 (名) 上の方のくちびる。
うは‐くちびろ 上唇 (名) 前條の訛り。
うは‐ぐつ 上靴 (名) 屋内に用ふる淺き靴。
うは‐くび 上頸 (名) 馬の頸の、頭に近き所。手綱祕書「すて鞭といふは手綱をこす馬ある時、もろ口にあたりて上くびをうつなり」
うは‐ぐむ (自動四) あきる。あきれる。

大鏡中「民部卿殿はうはぐみて、人人の御顔をとかく見給ひつつ」
うは‐ぐむ 上汲 (他動四) うは水を汲みとる。夫木廿「沈む身はただ山の井の底なれや、うはぐむ人に恐れてぞすむ」
うは‐ぐもる 上曇 (自動四) 上べくろずむ。枕七「いと濃ききぬのうはぐもりたるに、くちばの織物・うす物などのこうちぎ著て」
うば‐ぐるま 乳母車 (名) 小兒を載せて曳く小形の車。籐にて編み、日覆を附けたるを普通とす。
うは‐げ 上毛 (名) 上の毛。上の羽。榮華岩蔭「をし鳥のつがひ離れて夜もすがら、うはげの霜を拂ひわび」新六帖三「さみだれのひまなき頃もさを鹿の、うは毛の星は曇らざりけり」
うは‐げた 上桁 (名) 和船にて、帆桁の上部の稱。
うは‐こそで 上小袖 (名) 上にかさねて著る小袖。小町踊春上「下下も春は著にけりうは小袖」
うは‐こと 譫言 (名) ㊀然に浮かされて精神を喪ひ、條理のたたぬことを口ばしること。たはごと。㊁不條理なる放言を罵りいふ語。
うは‐ごほり 上氷 (名) 水の面の氷りたること。後拾遺冬「鴎こそよがれにけらし、いな野なるこやの池水うはごほりせり」重之集「うはごほりとくるなるべし、山かげの石まのしみづ音まさるなり」
うば‐ころし (名) 【植】きけまん(黄菫)の異名。
うはさ 噂 (名) ㊀世間に言ひ觸らす話。風說。風聞。世評。曾根崎心中「明日よりは我れも噂の數に入り、世にうたはれん」㊁或る物事また人の上などにつきて話すこと。狂言記落「こちのたのうだ人の噂を聞かせられたか」
(諺)**噂をすれば影がさす** 人の噂をすれば、其の人たまたま來たる。膝栗毛上一「おやおや噂をいへば影がさすと、それ旦那がおけえりだ」

うは‐ざうり 上草履 (名) 板敷などの上にてはく草履。(地上の草履の對)河東節神樂獅子「西施がはけるうは草履、花の鼻緒を踏みしだく」
うば‐さぎ 姥鷺 (名) 【動】涉禽類、さぎ科に屬する鳥。角質の長き嘴を有し、面部に羽毛を生ぜず。
うば‐ざくら 姥櫻 (名) ㊀なまめきたる老女にたとへいふ語。賀古敎信七墓廻文「小町櫻も老いぬれば、身は百歳の姥櫻」㊁【植】ひがんざくら(彼岸櫻)の異名。
うは‐ざし 上刺 (名) ㊀布帛などを、力絲にて、碁盤の目の如く、竪橫に地をさすこと。又、その物。三人法師雙紙「一人をば跡に、うはざしの包み持たせて通り給ひし」㊁うはざしぶくろ(上刺袋)の略。女房方故實「うはざしぶくろの事。男のうはざしは、つがりの數三十三あるべし」㊂狩衣・直垂などの袖ぐくり、又袴の紐などに刺し縫ひたる組緒、又は丸緒の稱。薙亮裝束抄「入れ帽子のていは、平包のうはざしなきなり。冬のは、織物・綾にても」今鏡三「裳の腰にもしろかねをのべて、うはざしは玉を貫きて飾られ侍りける」
うは‐ざし 上差 (名) 次條の略。
うはざし‐の‐や 上差箭 (名) 箙の征矢(ソヤ)に差し添ふる二筋の鏑矢の稱。更に其の傍に差し添ふる二筋の尖り矢を中差といふ。うはざし。今昔廿「此の負ひたる胡籙の上差の箭を一筋、河より彼方に渡りて土に立てて返らん」

うはざし‐ばこ 上刺箱 (名) 禮式の時、衣服などを入るるに用ふる箱。
うはざし‐ぶくろ 上刺袋 (名) 古へ外出の時、衣服其の他の物を入れ、從者に持たせたる袋。絹布などにて作り、うはざしして、四角なる底を入れ、袋の口には組絲にてかがりを垂れ、其れに少し太き組緒を通してくくり緒とす。うはざし。


(うはざしぶくろ)

うはさ‐ばなし 噂話 (名) うはさ(噂)に同じ。文反故「世のうはさばなしもっぱら」
うば‐ざめ 姥鮫 (名) 【動】板鰓類、あをざめ科に屬する魚。體の長さ三十尺に達するものあり。體色やや赤く、齒は圓錐形にして微小なり。海洋を游泳すれども、四五月の交近海に來たる。ざうざめ。うばふか。
うは‐ざや 上鞘 (名) 【商】定期賣買の語。同一物件にて、或る期月の相場が他の期月の相場より高きこと。(下鞘の對)
うは‐さん 上棧 (名) 船具。舵(カヂ)の小名。
うは‐しき 上敷 表敷 (名) ㊀すべて物の上に敷くもの。字鏡集「氈(カモノシキ ケノムシロ)」爲忠百首上「有明の月やどれとや、苯にむす苔にむしろの露のうはしき」㊁

馬具の名。くらしき(鞍敷)に同じ。和名抄「鞍褥久良之岐。俗云字波之岐」布衣記「馬のこしらへ様の事。髮まかず、沓かけず、鞍は水干鞍、切附あざらしの皮、上敷同皮」
うば‐しば (名) 【植】いまめがし(青剛樹)の異名。
うば‐しぎ 姥鴫 (名) 【動】をばしぎの異名なるべし。
うは‐じらむ 上白 (自動四) 上の色さめて白みかかる。源末摘花「ゆるし色の、わりなううはじらみたる一かさね」
うは‐しる 上汁 (名) ㊀うはずみ(上澄)に同じ。心中二枚繪草紙上「久久で金氣に逢うた。先づめでたう一歩のうは汁吸ひませう」㊁うはまへ(上前)に同じ。
うはしる を すふ ㊀上澄(ウハズミ)を吸ひのむ。㊁上前(ウハマヘ)をとる。
うはじろ‐の‐くるま 上白車 (名) あじろぐるま(網代車)を見よ。愚昧記仁安二年十一月十日「今日若宮五十日御行始也。戌剋許出給殿御車上白」
うは‐すぎ 上過 (名) 相場の甚しく騰貴すること。
うは‐すすみ 上進 (名) 價の高くなること。騰貴。
うは‐すだれ 上簾 (名) 車・輿に懸くる簾。(下簾の對)中右記天永二年七月十四日「民部卿談給、檳榔毛車、下簾・上簾倚用同色」
うは‐すべり 上滑 (名) ㊀物の表面のすべすべすること。㊁心のむけ様うはべにのみ走りて、徹底せぬこと。
うは‐ずみ 上澄 (名) ㊀うはずむこと。㊁酒の槽をよどませて、上の澄みたる部分を汲み取りたるもの。
うは‐ずむ 上澄 (自動四) 水などの、上の方澄む。夫木廿四「利根川の下は濁りてうはずみて、ありけるものをさされてくやしも」

うは‐ずり 上摺 (名) 衣の上に色づけたること。拾玉七「山吹を分け行く人の衣手や、春のかたみの露のうはずり」
うは‐ずる 上擦 (自動四) ㊀うはすべりす。上の方滑かにてすべる。㊁輕く浮くやうなり。おもおもしからず。「調子がうはずる」㊂沈重ならず。輕薄なり。浮薄なり。
うは‐ずんべり 上滑 (名) 〔うはすべりの訛り〕表面のみ體裁をつくろふこと。闘八洲繋馬四「上上方はうはずんべり、お心でばかり、くよくよくよくよ思ひ積り」太平記曦鎧三「當分御意に入らんため、上ずんべりの輕薄」
うば‐ぜり 姥芹 (名) 【植】たがらし(石龍芮)の異名。
うばそく 〔優婆塞〕 (名) 佛語。俗家にありて佛門に近事する男子の稱。(優婆夷の對) いぶそく(伊蒲塞)。いばそく(伊婆塞)。宇津保藏開下「うばそくが行ふ山の椎がもと、あなそはそはしとこにしあらねば」楞嚴經「若有男子、樂持五戒、我于彼前、現優婆塞」後漢書楚王英傳注「伊蒲塞、卽優婆塞也。中華翻爲近住、言受戒行、堪近僧住也」
うばそく‐の‐みや 優婆塞宮 (名) にふだうのみや(入道宮)に同じ。
うば‐そだち 乳母育 (名) 乳母の手にて育てられたること。
うは‐ぞめ 上染 (名) 上部を染むること。永久百首秋「ははそ原露のしらはひさしつれば、しぐれの雨ぞうはぞめはする」
うは‐ぞろへ 上揃 (名) あをちゃ(青茶)に同じ。

うは‐たき 上薫 (名) 香の名。沈の一種。香名録
うは‐だな 上棚 (名) 和船の左右の傍板の最上部。
うば‐たま 烏羽玉 (名) 餅菓子の一種。ぎうひに餡を包みて砂糖をまぶしたるもの。
うばたま‐の 烏羽玉之 (枕) ぬばたまのに同じ。古今戀三「いとせめて戀しきときは、うば玉のよるの衣をかへしてぞぬる」後撰雜三「たらちめはかかれとてしも、うば玉の我が黑髮を撫でずやありけん」
うばたま‐の‐すぢ 烏羽玉筋 (名) 黑き髮の毛。夫木廿六「物をのみ亂れてぞ思ふ、誰れにかは今はなげかん、うばたまのすぢ」
うは‐ちどり 上千鳥 (名) 【動】みやこどり(都鳥)の異名。
う‐はつ 〔有髮〕 (名) 剃髮などせずして、頭髮をたてたること。
うは‐つく (自動四) 氣が浮きて落ち著かず。うはうはす。芭蕉句「花蝶ゆうはつきだつや花の雲」
うはつ‐くに 上國 (名) 黃泉(ヨミ)の國・海底の國に對して、此の世の人のすむ國。神代紀下「上國(ウハツクニ)、此云羽播豆矩儞」祝詞式鎭火祭「吾名妹能命波、上津國(ウハツクニ)乎所知食倍志」
うは‐づけ 上附 (名) うはべの書きつけ。和泉式部續集「ふみ箱のうはづけの心もとなさに、はしをあけて見るままに」
うはつ‐そう 〔有髮僧〕 (名) 僧にして頭髮をたてたる者。又、俗人の佛道を修むる者。

うは‐づつみ 上包 (名) ㊀物の上を包むもの。名義抄「幐(ウハヅツミ)」源紅葉賀「うはつつみばかりを見せ奉らせ給ふ」讃岐入道集「少將の返り言侍りしうはつつみの紙に書きつけたりし」㊁書物の帙。
うは‐っ‐ぱり 上張 (名) 衣の汚れを防がん爲め、其の上に被ひきるもの。
うは‐っ‐ぺら 上邊 (名) うはべ(上邊)の訛り。
うは‐づみ 上積 (名) 船・車の積荷の上層のもの。甲板の積荷。上荷(ウハニ)。
うは‐つゆ 上露 (名) 草木などの葉の上における露。源夕顔「光ありとみし夕顔の上露は、たそがれ時のそら目なりけり」
うは‐つら 上面 (名) うはべ。上の方。表の方。表面。外部。
うは‐て 上手 (名) ㊀上の方。うへ。夫木廿「わたのべや橋のうはてを初めにて、多かるきぢのつまやしろかな」平家女護島二「菊王が大音亂しかけ振りかけ、下手・上手に押し合ひて」㊁水の流れ來る方。上流。川上。平家四、橋合戰「弱き馬をば下手に立てよ。強き馬をば上手にならせ」夫木八「さみだれは岸のうはてに舟つけて、なぎさをみをの淀の川水」㊂風の吹き來る方。かざかみ。㊃犬追物にて、我が馬の前に立ちたる射手の稱。我が馬の後に立ちたるを下手(シタテ)といふ。㊄石帶(セキタイ)の名所。建武日中行事「東帶の人はうはてをはづす」㊅技藝・才智などの、他より勝ること。竹齋物語「南無藥師堂は下谷にたてるとも、うはてくすしと我れをなさせよ」
うはて に でる 出上手 識見・力量、相

手よりまさる。

うは-てうし 上調子 (名) 一三味線にて、特に鉛き調子。津國女夫池「詞てんてん上調子」 二浄瑠璃にて、ひき語りならぬ時、更に加はる三味線ひき。又、つれびきに出づる三味線ひき。 三落ち著かぬ性質。輕佻なる氣質。口先のみなること。うはき。

うはて-すかし 上手透 (名) 相撲の手の名。相手の腕を抱き込み、肩・頭をつけて前へ引き落とす手。かしらひねり。

うはて-なげ 上手投 (名) 相撲の手の名。なげ(投)を見よ。

うはて-ひねり 上手捻 (名) 相撲の手の一。四手(ヨツ)に組み、褌を引きて鎧り合ふ喘嗟、上手(ウハテ)に力を入れて捻り倒すもの。 遊廓(キヤクカク)。

うはて-やぐら 上手櫓 (名) うはやぐら(上櫓)に同じ。

うは-とたて 上戸立 (名) うはあし(上脚)に同じ。

うは-どほり 上通 (名) 和船の上櫂(ウハガイ)と下櫂(シタガイ)との接ぎ目。

うは-どよむ 上響 (自動) うはべのみ鳴りどよむ。長能集「うはどよみどよみにけりな淀川の、底にも鰻ひんのどけからぬに」

うは-なげ 上投 (名) 湯をさしたる後に茶を入るること。

うは-なげし 上長押 (名) 【建築】上のなげし。下長押の對)なげし(長押)を見よ。十訓抄「西泉の透廊南へ長くさし出でたる中のほど一間、上長押を打たざりけり」

うは-なだら (名・副) うはべのやはらかなる狀にいふ語。堀河百首「解けねどもうはなだらなる人かとよ、名はひむろにて下は氷れる」

うは-なほし 上直 (名) 根底よりせずして、外部だけ繕ひおくこと。三世相錦繡文章「阿闍がむしはなほるまい。どうせ持病はうはなほし」

うは-なみ 上波 (名) 水の面に立つ波。夫木「岩がねのしわまをわくる山川の、うはなみ凍る冬のあけぼの」萬代「三「入海のせとのさきなる高岩に、うはなみ誘えて荒るる潮風」

うは-なり 後妻 (名) 一後に娶りたる妻。のちぞひ。こうさい。ごさい。記「宇波那理(ウハナリ)が、なこはさば」和名「後妻(字類抄)」 二れたみ。それみ。字鏡「嫉(字類抄)」名義抄「妬(ウハナリ・ネタミ)」 三人の怨讐(類聚抄)。

うは-なり-うち 後妻打 (名) 室町時代の末頃、妻を離別して後妻を迎ふるとき、前妻、親しき女どもを頼みて、その新妻の家を襲ふこと。諸道聚「上「あらあさましや、六條の御息所程の御身にて、うはなりうちの御振舞ひ」

うは-なり-ねたみ 嫉妬 (名) ねたみ。そねみ。しっと。 舞明紀「嫉妬(ウハナリネタミ)」

うは-に 上荷 (名) 一車馬又は船に積み載せたる荷。うはづみ(上積)。萬五「ますますも重き馬荷に表荷(ウラツ)といふことのごと」 二うはにぶね(上荷船)の略。

うは-にごり 上濁 (名) 流物のうはかはのにごること。(うはずみの對)

うは-にぶね 上荷船 (名) 波戸場と本船との間を往來して、上荷を運送する二三十石積の船。七村(ハシケ)上荷・中船上荷・新舟上荷・堀江上荷・播磨上荷・堺上荷・房州上荷等種種あり。其の制、亦各小差あり。

うは-ぬり 上塗 (名) 一壁ぬりなどに最も上の面を塗ること。(中塗・下塗の對) 二物の上に更に添へ加ふること(多く惡しき事にいふ)。女殺油地獄「惡性に上塗する皆朱の善兵衛」博多小女郎波枕「親へは不孝の上塗と」

うは-ね 上直 (名) 【商】今までより高き直段。「上直に寄り附く」

うは-ねかんびき 于撥于引 (句) 漢字の于は下を撥ね、于は引く。字形似たるものの區別を明かならしむる語。

うは-の-おほぞら 上大空 (名) 次條に同じ。千五百番歌合「友さそひ浦わの霧に飛ぶかりは、うはのおほぞらにかくる玉づさ」

うは-の-そら 上空 浮空 (名) 一天の上。上天。源夕顔「山の端の心も知らで行く月は、うはの空にて影や絶えなん」 二一方に浮かれて他事に心のとまらぬこと。心うきうきして落ちつかぬこと。有頂天。源宿木「川づらのすまひいとど心細さまさりて、うはのそらなる心ちのみしつつ明かしくらす」 三あてにならぬこと。根據なき事。虚構。平家六「御書など候はずば、浮(ウハ)の空とや被思召」鮫はんずらん」

うは-の-たまも 烏羽玉藻 (名) 黒き髪。曾丹集「年ふればうばのたまもも老いにけり、鳥の髪に雪つもりつつ」

うは-のり 上乗 (名) 一船舶の航海中、商業上の諸般事務を處理し、貨物の賣却を監督する目的にて、貨物を委託したる商船の雇員。 二うはぬり(上塗)に同じ。膳栗毛「初めの百が惜しくなって、うはのりをした」

うは-は 上端 (名) 一物の上部。夫木「いなみの」を朝踏みわたるかり人の、笠のうはになびく萩はら」 二原位より倍分の端數。

うは-は 上葉 (名) うへの葉。(下葉の對)金葉「しのすすきうは葉にすがくささがにの、いかさまにせば人なびきなん」千載秋上「いかなれば上葉をわたる秋風に、下折れぬらん野べのかるかや」

うは-は 上歯 (名) 上の眼(ガン)につきたる歯。(下歯の對)

うは-はげ 上剝 (名) 塗物などの上部のはげたること。

うは-はならうし 上花漆 (名) 蝦色漆に油を混じたるもの。

うは-はなれ 上放 (名) 今までの直段より遙かに騰貴したること。

うは-はひ 上這 (名) 一表面に出でて這ひあるくこと。浮世風呂「惡しき病人を入れざるは、阿闍佛の化益はあらずも、千手觀音の上這はあるべき歟」 二相場うはむきになりて人氣のよきこと。

うは-ばみ 蟒蛇 (名) 一【動】蛇類の一種。體の長さ二丈餘に達する大蛇にして、水邊に住す。體は背部黄褐色にて暗色の斑紋あり、腹部は白色を帶ぶ。口は大なれども毒牙を有せず。肛門の兩側に後肢の痕跡を存す。常に水邊に棲息して小鳥獸を捕へて食とす。亞細亞南部及び亞弗利加・馬來半島・印度諸島に産す。やまかがち。 二【動】爬蟲類中、蛇類に屬するものの中、巨大なるもの七郎助どの總稱。本邦、古來うはばみに關する傳說・記錄少なからざれども、學術上未だ嘗て棲息せし形跡を認めず。だいじや。をろち。 三大蛇だらなること。曾丹集「うはまだら今朝しも閑の見えつるは、うべこそよはに袖はさえけれ」

うは-まはり 上廻 (名) 水夫の語。船の上半身の稱。

うは-まぶた 上目蓋 上瞼 (名) 上部にあるまぶた。用明天皇職人鑑「うつむき様に、御額をじろりと見たるうはまぶた」

うは-まへ 上前 (名) 一著物の前を合はせて表になる部分。うはがへ。 二取り次ぎして仕拂ふ代金などの中の幾部分。うはまい。うはしる。國姓爺後日合戰「毎日七厘五分づつの金子は申し受けたれども、それそのまっ先なひがら目が、上前に取り上げ、十分一も我れ我れが手につけさせず」

うはまへ-とり 上前取 (名) うはまへを取ること。又、其の人。前條「を見よ。三世相錦繡文章「そんなら七郎助どのは同類で、長庵どのはうはまへとりか」

うは-み 上身 (名) 魚を俎板にあげたる時、上になりたる方の肉。狂言「一の刀にてうはみをおろし」

うは-み 上袴 (名) うはも(表裳)に同じ。和名「三袴條。釋名云、褶襲也。覆袴上之言也」

うはみず-ざくら 【植】薔薇科、櫻(ウハミズ)屬の落葉喬木。幹の高さ三四丈。葉は廣楕圓形、鋭頭に鋸齒を具ふ。五月頃白色五瓣の小花を綴り、總狀花序に排列す。果實は小核果なり。我が國、各所の山地に自生す。うはみそ。かばざくら。きそざくら。にはざくら。

うは-みそ (名) 【植】前條の異名。

うはぶん 上分 (名) はつほ(初穂)に同じ。(松屋筆記)著聞集「上分、佛に參らせんとて、鐘打ちならしに參りたりつるぞと答へける」

うは-べ 上邊 (名) 一表面に見ゆる處。おもて。表面。外面。源胡蝶「白き紙のうはべはおいらかに書い給へり」同帚木「うはべの筆きえて見ゆれど」 二人前にのみよく見せて内實はしからぬ事。外見。陽。源總角「うはべこそあれ、つらきこと多かり」

うは-へなし (形ク) 古語。あいさうなし。情愛なし。萬四「宇波弊無(ウハヘナシ)ものかも人は、しかばかり遠き家ぢを歸す思へば」同四「得羽重無(ウハヘナシ)いもにもあるか、かくばかり人の心を盡くす思へば」

うはべ-ら 上邊 (名) うはべ(上邊)に同じ。

うはほほ 姥頰 (名) 武具。鐵面(ハチメン)の一種。半頰の覆なきもの。

うは-ぼり 上彫 (名) しあげぼり(仕上彫)に同じ。

うはまい 上米 (名) うはまへ(上前)に同じ。

うはまい-とり 上米取 (名) うはまへとり(上前取)に同じ。三養雜記「諸國の年貢の上分米を、當社へ調進することありといへり中略俗に上米取といふはこれより出でたる誤なり。これを口米といひて、譬へば、百石積みたる船にて一俵を取り中略といふが如く、その物につきて歩米を取ることなり」

うはまき 上卷 (名) 白紙を横にして禮紙を包めるもの。之に宛名を書く。らいし(禮紙)を見よ。

うは-まだら 上斑 (名) うはべのまだら(表斑)に同じ。和名「三袴條。釋名云、褶襲也。覆袴上之言也」

うはみず-ざくら 【植】薔薇科、櫻(ウハミズ)屬の落葉喬木。幹の高さ三四丈。葉は廣楕圓形、鋭頭に鋸齒を具ふ。五月頃白色五瓣の小花を綴り、總狀花序に排列す。果實は小核果なり。我が國、各所の山地に自生す。うはみそ。かばざくら。きそざくら。にはざくら。

の物を呑むといふより、よく酒を飲む人の稱。

うはばみ-さう 赤車使者 (名) 【植】蕘麻科、赤車使者屬の草本。莖の高さ一尺許り、直立せずして傾斜するを常とす。葉は互生、淡綠色にして長楕圓形又は卵狀披針形、鋭頭齒牙緣を具ふ。托葉あり。莖・葉共に柔軟平滑なり。四五月頃、葉腋に白色の小頭狀花序を出だし、單性にして雌雄異株。我が國、各地の山中溪谷濕陰の地に自生す。むかごみづ。くちなはじやうご。やまとろろ。

うは-はらおび 表腹帶 (名) 馬具の名。腹帶(ハラオビ)の上に用ふる大きなる帶。和名「鞦(字類抄)馬大帶也」

うは-はらまき 上腹卷 表腹卷 (名) 狩衣・直垂などの上に著たる腹卷(ハラマキ)の稱。盛衰記「八「袋隆紺の小袖に上腹卷著て」

うは-ばり 上張 (名) 一襖(フスマ)などの紙ばりの仕上げ張り。(下張の對) 二上にはふり居る著物。うはっぱり。夕霧阿波鳴渡「この上張りの袷をぬぐ」 三足袋の名所。

うは-はれ 上腫 (名) うへの腫れ。上部のふくれ。

うは-ばん 上盤 (名) 地層・鑛脈などの上側の地盤。(下盤の對)

うは-ひ 上翳 (名) 眼病の一種。そこひ(底翳)に同じ。外障眼。

うはひ-くび 奪首 (名) 味方の取り來たりたる首を奪ひ取りて己れの功とすること。ばひくび。

うは-ひけ 上髭 (名) 唇の上のひげ。鼻下のひげ。(下髭の對)東海道名所記「うは記を松蟲の牽にひねりあげて」

うは-ひも 上紐 (名) 衣の上を結ぶ紐。(下紐の對)曾丹集「なつかしく吹きくる風にはかられて、うはひもささで暮らすこころかな」

うば-ふ 奪 (他動) 一強ひて取る。ひったくる。ふんだくる。神代紀上「有一奪(ウバフ)國之志」歟宇津保藤原忠雅殿上わらは中略もろこし人、我が國に生ひ出づるものにも劣らぬものかなとて、うばひとりてゐていぬ」 二ぬすむ。かすめとる。横取りす。萬十「雪の色を有婆比(ウバフ)て咲ける梅の花、今盛かりなり見む人もがな」名義抄「掠(ウバフ・カスム)」 三君の位を除きて之に代はる。字鏡「簒(字類抄)」 四とりあぐ。剝奪す。「官位を奪ふ」「心膽を奪ふ」 五驚怖せしむ。喪神せしむ。「心膽を奪ふ」

うば-ふか 姥鯊 (名) 【動】うばざめ(姥鮫)の異名。

うば-ぶき 上葺 (名) 一屋根など、葺きたる上を更に覆ひ葺くこと。夫木「すきちをがはにふのこやの棟弱み、幾へになりぬ雪のうはぶき」 二牛車の名所。やかた(屋形)に同じ。う(上)。桃華蘂葉「上葺毛」

うば-ぶし 上臥 (名) うへぶし(上臥)に同じ。盛衰記「院にも近く召し仕はれ參らせければ、廿五日院御所法住寺殿に上臥して候ひけるに」

うば-ぶち 上扶持 (名) ふち(扶持)に同じ。江戸時代の語。

うば-ぶみ 上文 (名) 一書面の上書。うはがき。孝德紀「諫題」名中略不言題(ハヅ)不諫朕愆忘」蜻蛉日記「御かへりに心細く書きて、うはぶみに西山よりと書いたるを」 二書物の外題。

うはみそ-ざくら　（名）【植】前條に同じ。

うは-みづ　上水　（名）一上ずみの水。二江戸時代、米相場會所及び米會所の役員。相場の立會ひに際し、仲買人を集むるため擊柝をなし、又立會ひ終了の際、水を撒布して仲買人を退散せしむるを掌りしもの。

うは-むき　上向　（名）一上に向きたること。仰ぐこと。あをむき。二うはべ。外見。表面。三相場の騰貴に傾くこと。

うは-むしろ　表筵　（名）疊の上に敷く筵。敷物。宇津保物語「面白きしとね・うはむしろ敷きなべて、きんだちつきなみ給へり」源氏物語「うはむしろにおしくくみて」

うは-め　上目　（名）一眦を上へ向くること。「うはめをつかひて人を見る」二はかりざをの上面に記したる星を標準として量ること。「向目」の對）三かいがけ（袴掛）に同じ。四上に出づること。餘分になること。吉野都女楠「博奕中難ひねってもひねっても二寸より上目なく、あげくに今夜三寸繩に縛られました」

うは-め　乳母女　（名）うば。めのと。夫木「いも子もるうばめをうなの重ね持つ、このて柏に面ならべん」

うはめ　姥芽　（名）【植】いまめがし（青剛樹）の異名。

うはめ-がし　姥芽樫　（名）【植】前條に同じ。

うはめ-がしば　姥芽櫧　（名）【植】前條に同じ。

うはめの-さ　姥芽木　（名）【植】前條に同じ。

うはも　表裳　（名）下裳の上に著る裳。うはみ。四時祭式「表裾一腰」俚馬樂「わが門に宇波毛の裾ぬれ、下もの裾ぬれ、朝なつみ夕なつみ」

うは-もり　上盛　（名）一ある上に又盛りそふること。又、其のもの。うはぬり。小町踊奇上「芽出たさの上もりをする雑煮かな」二最も上に盛るもの。三最も上。第一流。若風俗「古今の藝子のうは池」「萬人共に思ひつくこと」津國女夫もり、萬人共に思ひつくこと」津國女夫おもしろの花の廊や、世界の色のうはもり」

うは-もる　上盛　（自動）落ちつかず、惑ひ亂るる。女殺油地獄「心は沈み氣はうはもり、逃げてくれうと駈け出でて」

うは-や　上矢　表矢　（名）うはざしのや（上差箭）に同じ。

うはやのかぶら　上矢鏑　（名）箙に盛れる上差の鏑矢。うはざしのや（上差箭）を見よ。平家「我が身を初めて十三騎が、上矢のかぶらを抜き」

うは-や　上屋　（名）一雨露を防ぐ爲めに、柱の上に屋根を架けて覆ひとしたる建物。停車場・波止場又は作事場に設く。二貨物を留置若しくは貯藏する稅關の倉庫。

うは-や-かかり　上屋掛　（名）稅關にて上屋に貯藏せる貨物の保管及び出入を掌る人。

うは-やかた　上屋形　（名）船のやかたの上。宇治拾遺「うはやかたへ出でて」

うは-やく　上役　（名）上官。

うは-やく　乳母役　（名）乳母となりて見をもりする役目。雙生隅田川「布袋は唐子のおうば役」

うはやぐら　上矢倉　上櫓　（名）相撲の手の一。四手を組み、上手に相手の褌を引き、其の引きたる方の足を相手の内股へ蹴込む心持にて、體を下手の方へ廻しながら投げ倒すもの。此の手が變化して相手を抱へ込みて土俵の外へ出だせば持出しとなり、又褌を引きたる手と抱へ込みたる手とにて、釣り上げて出だせば釣出しとなる。うはてやぐら。

（うはやぐら）

うはやせいど　上屋制度　（名）關稅を賦課、徵收すべき輸入貨物が、輸入の手續を終はり、市場に運搬せらるるに至るまで、其の關稅を徵收せずして、政府の上屋に留置又は貯藏することを許可する制度。此の貨物が再び輸出せらるるときは、關稅を徵收せられざるものとす。

うは-やり　上槍　（名）敵と槍を交じふる時、突き立てんとて、先づ相手の槍柄を我が槍柄にて下へ抑へ附くること。其の下になりたるを下槍といふ。信長記「嶮山赤座上槍に成って、大の母衣武者を突きふせ」

うはや-わたし　上屋渡　（名）【商】賣買せる商品を、上屋に貯藏のまま受渡しをなすこと。

うば-ゆ　鶏羽湯　（名）うぶゆ（産湯）に同じ。

うば-ゆり　蒼麥葉貝母　（名）【植】百合屬の多年生草本。莖の高さ四五尺に達し、單一にして太く、地下に鱗莖を有す。葉は心臟形、長き葉柄を具ふ。花は帶綠白色の大形にて、梢上に生じ、短き總狀花序に排列し、八月頃開く。我が國、各所の山地に自生す。鱗莖より澱粉を採り、又嫩葉を食用とす。かばゆり。こばゆり。しかくれゆり。ししくれゆり。ねずみゆり。

うば-ゆり　（名）【植】かたくり（片栗）に同じ。

うば-より　上縒　（名）最後にかけるより。信實集「さしもこそあはする絲のうばよりの、すぎて思ひのきれにけるかな」

うば-より　上寄　（名）當日の最初の相場が、前日の最終の相場より高くなりたること。

うば-ら　姥等　（名）上方にて、歳末に來る女乞食の稱。滑稽雜談「古へ、京都にて歳末に、乞食の妻、白木棉を以て頭面を覆ひ、腰に赤き前垂を掛け、手に籃を携へ、遍く人家を歴て米錢を乞ひ、みづから婆等と稱す」

うば-ら　【植】のいばら（野薔薇）の異名。勢語「うばら・からたちにかかりて」

うばら-ぐつわ　蒺藜轡　（名）轡の制の一種。轡の菱形なるもの。和名抄「蒺藜銜字義抄」

うば-ね　上繪　（名）一繪・模樣などの上に、更に繪の具を用ひて畫き上ぐること。又、その物。應仁記「上ゑの短册を、硯筥の蓋に入れてさし置きけるを見れば」二塗ら、染めぬきたる布帛の上を、更に繪の具にて畫き添ふること。

うば-ね-かき　上繪書　（名）次條に同じ。

うば-ね-し　上繪師　（名）上繪を畫くことを業とする人。うはゑかき。うはゑや。

うば-ね-や　上繪屋　（名）前條に同じ。又、其の人の家。用明天皇職人鑑「職人、時

雨の雲に染物や、染めてうは玉や・縫物や」

うは-を　後夫　（名）後の夫。再度の夫。和名三後夫「後夫、伊萬乃乎宇止」

うは-を　上尾　（名）鷹の尾羽の名。たか（鷹）を見よ。

うは-をり　上折　（名）上の方を折り曲ぐること。保元「上折りしたる烏帽子の上に、白星の貫をき」

うはをり-えぼし　上折烏帽子　（名）細烏帽子のさきを折り曲げたるもの。

うはん-まへ　上前　（名）うはまへ（上前）の音便。

うひ　初　（名）始めてなること。古今物語「我れは今朝うひにぞ見つる花の色を、あだなるものといふべかりけり」賀古教信七墓廻「ことにうひの子、ひはづ者」

うひ　初　（接頭）名詞に冠して、始めての・最初の、といふ意を表はす語。「初孫」「初學び」孝德紀「初位」

うひ-あゆみ　初歩　（名）始めての歩行。名義抄「蹤」

うひ-うひし　初初　（形）物馴れぬ狀なり。始めてらし。初心なり。宇津保「かかる里ずみにも、うひうひしきことちし侍れば、つづましく思ひ給へられて」枕「憎しと思へど、まだうひうひしければ、ともかくも啓し直さで」

うひうひしげ　初初氣　（副）うひうひしさう。源氏「人に物きこえんやうも知らぬをとて、惠ざまへねざり入り給ふさま、いとうひうひしげなり」

うひうひしさ　初初　（名）うひうひしき狀。うひうひしき度合。源氏「背光る源氏などいふ名は聞きわたり奉りしかど、年頃のうひうひしさに、さしも思ひ聞こえざりける」

うひ-かうむり　初冠　（名）一元服して、始めて冠を著くること。勢語「昔、男、うひかうぶりして」二うひかぶり。初位。

うひ-かうむり　初冠　（名）前條に同じ。井筒榮平河内通「都に殘すうひかうむり、今日は頭のすき額」

うひ-かぶり　初冠　（名）初位。うひかうぶり。孝德紀「制七色・一十三階之冠」

うひ-かむり　初冠　（名）うひかうぶり（初冠）に同じ。諸社著「殿上にての元服の事、當時その例稀なる故に、うひかむりとは申すとかや」

うひ-けんざん　初見參　（名）初めて見參すること。初めての面會。天神記「小見殿のうひ見參引出物も持ち合はせず」

うひ-こ　初子　（名）初めて生まれる子。初産の子。はつこ。うひのこ。國姓爺「此の頃初子を平産し」犬子集「天の原うひ子が出づる太郎月」

うひ-ごと　初琴　（名）初心の人の彈く琴。初めて彈く琴。源宮木「片なりなるうひごとをも隱さずこそあれ」同初音「いはけなきうひ琴習ふ人もあめるを」

うひ-ごと　初言　（名）初めていふ言葉。宇津保藤原「ことたはぶれごとはのたまふとも、このかかる口遊びは更に承らじと聞こゆれば、人のうひごとは咎めぬものぞ」

うひ-ごと　初事　（名）初めてすること。源氏「そのきはきはを、まだ思ひ知らぬうひごとぞや」

うひご-もち　初子持　（名）はじめて子を持つこと。又、その人。

うひ-ごゑ　初聲　（名）生兒などの、はじめてなく聲。うぶごゑ。はつごゑ。

うひ-ざん　初産　（名）初めて子を産むこと。はつざん。

うひ-だ　初　（名）宇津保俊蔭「夏ばかりうひだちすなる子規、巢には歸らぬ年もあらじな」源氏「内などにも餘り久しく參り侍らねば、いぶせさに、今日なんうひだちし侍るを」

うひ-だつ　初立　（自動）初めて出でたつ。立ち始む。曾丹集「子規うひだつ山をさと知らば、このまを行きて聞くべきものを」夫木「いつしかもうひだちにける霞かな、まだいとけなき春の始めに」

うひ-たび　初旅　（名）生まれて初めての旅行。はつたび。

うひ-たび　戴星　（名）次條の略。

うひたび-うま　戴星馬　（名）ほしづき（星月）に同じ。うびたひ。つきじろ。和名抄「戴星馬、爾雅注云、白顙。一名、的顙。俗呼爲戴星馬」

うひぢ　涅土　（名）古語。ひぢ。どろ。神代紀「涅土（ひぢと黏泥とを混ぜたもの）」仁德紀「道路赤澀」

うひ-ぢん　初陣　（名）一始めて出陣すること。初戰。中國治亂記「大内義長は初陣に、石州の吉見大藏大輔正頼を責められる」二若年の者、始めて軍に臨むこと。甲陽軍鑑「廿利藤藏は父備前守に劣らぬ武篇の人にて、其の年十月の御陣より、望みて初陣を仕り、笛吹峠にての合戰、十三歳にて能き武者を討ちて高名仕る」

うひ-の-こ　初子　（名）うひご（初子）に同じ。賀古教信七墓廻「あの子は未だ疱瘡せず、殊にうひの子、ひはづ者」

うひ-はな　初花　（名）はじめての花。はつはな。貫之集「宰相になれるよろこびに到れるに、うひ花さける紅梅を折りて」

うひ-ほうこう　初奉公　（名）初めての奉公。源平布引瀧「潮の尾が首とって、うひ奉公の手柄せよ」

うひ-まくら　初枕　（名）にひまくら（新枕）に同じ。

うひ-まご　初孫　（名）初めて生まれたる孫。はつまご。

うひ-まなび　初學　（名）一學問を修め始むること。二未熟の學問。にひまなび。しょがく。

う-ひゃうご　一右兵庫　（名）ひゃうご（兵庫）を見よ。

うひゃうご-の-かみ　右兵庫頭　（名）右兵庫寮の長官。

うひゃうご-の-さくわん　右兵庫屬　（名）右兵庫寮の主典。

うひゃうご-の-じょう　右兵庫允　（名）右兵庫寮の判官。

うひゃうご-の-すけ　右兵庫助　（名）右兵庫寮の次官。

う-ひゃうごれう　一右兵庫寮　（名）ひゃうごれう（兵庫寮）を見よ。

う-ひゃうゑ　一右兵衛　（名）うひゃうゑふ（右兵衛府）の略。

うひやうゑのかみ 右兵衛督 (名) 右兵衛府の長官。

うひやうゑのすけ 右兵衛佐 (名) 右兵衛府の次官。

うひやうゑのじょう 右兵衛尉 (名) 右兵衛府の判官。

うひやうゑのさくわん 右兵衛志 (名) 右兵衛府の主典。

うひやうゑふ 〔右兵衛府 (名) ひやうゑふ(兵衛府)を見よ。

うひやまぶみ 初山踏 (名) 一はじめて山に登ること。二修験者の、大峯・葛城等へはじめて登山すること。三學藝の道にはじめて入ること。

うふ 〔右府 (名) うだいじん(右大臣)の異稱。

うふ 産 (名) 一産まれたる時のままなること。産むこと。産むこと。兼澄集「撫でけんうぶの黒髪やぶりして、かはれる筋は心細しや」二生來の本質を失はざること。初心なること。うひうひしきこと。「うぶな人」

うふ 〔有封 (名) 封戸を有すること。

うふのてら 有封寺 封戸を有する寺。

うふのやしろ 有封社 封戸を有する神社。

うふ 〔右舞 (名) うはう(右方)に同じ。

うぶ 産 (接頭) 産まれたる時のといふ意を表はす語。神代紀下「産屋」仁德紀「産殿」推古紀「本居」

うぶいはひ 産祝 (名) 出産の祝ひ。孕常弊「いでうぶいはひ申すべし」

うぶがみ 産髮 (名) うぶげ(産毛)に同じ。浦島年代記「ぐっと延びたる男子の姿、うぶ髮左右へ亂れ散り」

うぶがみ 産神 (名) うぶすながみ(産土神)の略。日本武尊吾妻鑑「類美しう生ませたる、うぶ神にも恨みあり」

うぶがみまうで 産神詣 (名) うぶすなまうで(産土神參)に同じ。松風村雨東帶鑑「今日百二十日の御忌明中齡千歳の坂本に、産神まうでと聞こえける」

うぶぎ 産衣 (名) 次條に同じ。國姓爺「うぶぎに越羅・蜀錦を裁ち、御産今やと用意ある」

うぶぎのいはひ 産衣祝 小兒の、産衣を始めて著する祝ひ。

うぶぎぬ 産衣 (名) 小兒誕生の時著する衣。うぶぎ。大鏡「うぶぎぬに書きおきて侍りける」

うぶぎぬぶくさ 産衣袱紗 (名) 赤子を産湯より取り上ぐるに用ふる白羽二重、又は白絹。

うぶけ 産毛 (名) 兒の、生まれたる時より生え居る髮。うぶがみ。胎髮。運歩色葉「産毛ウブ」狂言柿山伏「まだうぶ毛も生えぬものを、飛ばせをって」

うぶこ 産子 (名) うぶすなの神社の管下に隸する人民。うぢこ。神道名目類聚抄「此の地に出生の兒は、上下の御靈社を産社とし、兒を御靈の産子とす」

うぶご 産子 (名) あかご。天神記「女の身の矢先にかかり、うぶ子諸共死したるは、もちごもりも同じこと」

うぶごて 産籠手 (名) 鎧の

(てごぶう)

龍手の一種。

うぶごゑ 産聲 (名) 兒の、生まれて始めて発する聲。國姓爺「血潮の中のうぶ聲は、玉の様なるをのこみこ」

うぶすな 産土 (名) 一人の生まれたる土地。産地。推古紀「葛城縣、元臣之本居ウブスナ也」二次條の略。塵添壒嚢抄「うぶすなといふは何事ぞ。當時は所生の所の神をいふか」孕常弊「背筋に、源氏のうぶすな石清水正八幡の宮所」

うぶすながみ 産土神 (名) 其の人の生まれたる土地の守護神。鎮守の神。うぶすな。うぶがみ。氏神。大鏡狂言鑑石「磁石がうぶすな神もたしかに聞き給へ」

うぶすなのかみ 産土神 (名) 前條に同じ。四季物語「月「腿のめもあげまきもうぶすなの神につかうまつり」

うぶすなまうで 産土神詣 (名) 次條に同じ。

うぶすなまゐり 産土神參 (名) 小兒生まれて後、はじめて其の産土の神に參詣すること。うぶすなまうで。宮參り。うぶがみまうで。うぶすなまうで。走衆故實「天文五年十一月廿八日、若君樣始而御うぶすな參り、遊御候うて」

うぶぞり 産剃 (名) 兒の生まれて七日目に、うぶ毛をそること。

うぶたちのいはひ 産立祝 (名) 子生まれて七日目のいはひ。しちやのいはひ。

うぶち 産血 (名) 産をする時に出づる血。

うぶどの 産殿 (名) 産をする殿。仁德紀「産殿ウブドノ」

うぶね 鵜舟 (名) うかひぶね(鵜飼船)に同じ。蜻蛉日記「うへしたとこがるることをたづねれば、胸のほかにはうぶねなりけり」

うぶのかみ 産神 (名) むすぶのかみ(産靈神)に同じ。

うぶめ 産女 (名) 産をする女。産婦。和名「産婦。食療經云、産婦不可食」梨子「産婦ウブメ」名義抄「産婦ウブメ」

うぶめ 姑獲鳥 (名) 産婦の化生したりといふ想像の化鳥。今昔「此の産女と云ふは、狐の人誅らんとて爲ると云ふ人も有り、赤女の子産むとて死したるが、靈に成りたると云ふ人も有りとなん」本草綱目「姑獲鳥、産婦所化、陰慝爲妖」本草啓蒙「中國には、うぶめといふもの夜中飛行して、小兒を害すというて、夜中は小兒を外に出ださず。此の鳥の鳴く聲、兒の啼くが如しといふ」

うぶや 産屋 (名) 一古へ子を産むために、新たに作りたる家。産所。神代紀「以鸕鷀之羽葺爲産屋ウブヤ」二産をする室。宇津保埋蛍「うぶやのまうけ、白き綾、御調度ども、しろかねにしかへして」三うぶやしなひ(産養)の略。宇津保蛍「うぶやしなひ、御調度ども、しろかねにしかへして」四うぶやしなひ(産養)の略。宇津保蛍「仁壽殿の女御の女一宮の御うぶやの殘り物とて、賜へるぞや」

うぶやさうぞく 産屋裝束 (名) 白き裝束。産所にはすべて白き色を用ふ。宇津保下蛍「もやのみすの内にぞ、うぶやさうぞくしたる衆どもいと多く居たり」

うぶやしなひ 産養 (名) 小兒出産後、三日・五日・七日・九日目に、親族より食物・衣服等を産家に贈りて祝意を表し、賀宴を開くこと。うぶや。宇津保蛍「男みこ産まれ給ひぬ。御うぶやしなひ、さきの同じことなり」同蛍「三日の夜、一の宮うぶやしなひし給ふ。五日夜は大將殿、七日夜なん東宮より、例の御とぶらひはありけり」

うぶゆ 産湯 (名) 生まれたる兒に始めて湯あみせしむること。御産所日記「十五日辰刻、御産湯在」源氏鳥帽子折「生まれ殿、跋陀が口よりぬる湯を出だし、産湯をひかせ奉り」

うぶゐ 産井 (名) 産湯(ウブ)の水を汲む井。

うぶんぼく 〔烏文木 (名) 【槙】こくたん(烏木)の異名。

うへ 上 (名) 一高き處。高き位置。かみ。「下(シタ)の對」仁德紀「はやぶさはあめにのぼり飛びかけり、いつきが宇倍(ウ)のささき取らさね」二おもて。うはべ。表面。萬「下ゆく水の上(ウ)に出づ、わがもふ心やすき空かも」和名「表(ウヘ)衣外也」後撰「蓮葉のうへはつれなきうらにこそ、もののあらがひはつくといふなれ」三はとり。へん(邊)。萬「あらたへの藤原が宇倍(ウ)に、をす國をめし給はむと」四禁中。禁裏。殿上の間。古今「秋上「寛平の御時、七日の夜、うへに侍ふ男どもに歌奉れと仰せられける時」五至尊。主上。宇津保俊蔭「うへも東宮も、召しまつはしうつくしみ給ふ」六高貴の人の御座近き處。宇津保藤原「かうぶり得て兵衛の佐になりぬ。春宮にもうへゆるされて、我懇仕うまつる」枕「あなうれし、しもにありけるよ。うへまでたづねんとしつるものを」七將軍及び貴人の稱。うへつがた。うへさま。太平記「長綱高時「上の御存命の間に、今一度快く敵の中へ懸け入り」八政府。官廳。かみ。九貴人の内室の稱。竹取「離れ給ひしもとのうへは」枕「うへなどいひてかしづきする人たるに、心にくからず」十貴婦人の稱號に添へ呼ぶ語。「葵のうへ」「紫のうへ」十一目上の貴婦人を呼ぶ稱。枕「うへに語らはばかくなんとの給ひしかど」主人をいふ。源若菜「君はうへを戀ひ聞こえ給ひて、泣きふし給へるに」組舟をいふ。濱松四「さるひたぶる世をすて給へりしうへの御かげにて、いとかう手をさへ書きすぐり給ひけん」母をいふ。十二目上の稱の後に附けていふ語。「父うへ」「兄うへ」源柏木「母うへ」同若菜「尼うへ」十三史に添ふること。加ふること。萬「あしびきの山下ひかげかづらけ、宇倍(ウ)にや更に梅をしぬばむ」土佐日記「海賊報いせんことといふなることを思ふうへに、海の又恐ろしければ」十四勝れたること。貴きこと。續千載「あきらけき御代ぞ知らる位山、またうへもなく仰ぐ光に」十五其の物事に就きてのこと。萬「むち鳥の朝たちいにし君が宇倍(ウ)は、さやかに聞きつ、思ひし如く」源若菜「人人花のうへも忘れて、朝に心いれたるを」同若菜「さまざまの人のうへを語り合はせつつ」十六のち。より。から。風雅雜上「もとよりのさながら夢と見るうへは、よしや必ずさめもさめずも」十七物價の高きこと。聽賞。「相場の上か下かきまらぬ間は」六屋根。枕「などかこしかどのやうにあらで、この土御門しもうへ、もなく造り初めけん」十八車の名所。やかた(屋形)に同じ。うはぶき(上葺)。門室有職抄「庇車中齡庇の體は如四方輿上(ウ)目」

うへこす 上越 一そう甚し。狂言「出家の身として、是れにうへこす思出はあるまい」孕常弊「上越す哀れぞなかりける」

うへしらず 上不知 上を恐れず。

うへしる 上知 貴人の御前へ出づる事を許さる。後撰春上「白雲のうへしる今日ぞ春雨の、ふるにかひある身とは知りぬる」

うへよしたよ 上になったり下になったり。狂言「兩馬が間にどうと落ち、上上下下としたりしが」

うへをしたへかへす 上下混亂して騒ぐさまにいふ。盛衰記「十六、三位「貴賤上下、女房・男房、上を下にかへし」太平記「十四、諸國軍起「賢王の横言になる世の中は、上を下へぞかへしたりける」

(誹)**上見ぬ鷲** 心驕りて上を畏れぬ譬へ。新六帖「またはよもはねをならぶる鳥もあらじ、うへ見ぬ鷲のそらの通ひぢ」義經記「七、判官「かやうに城郭を構へて、上見ぬ鷲の如くにておはしけり」

うへ 筌 (名) 竹にて編み、山川などに伏せ置きて、魚を捕る具。萬「山川に筌(ウ)を伏せてもりあへず、年のやとせを我が盗まひし」和名「筌音詮捕魚竹笱也。笱取魚竹器」諸故「王魚を得て筌を捨つ」

うへ 【槙】ときはあけび(野木瓜)の異名。

うへ 宜 (副) 一ふ意にいふ語。實に然るべく。さもあるべく。げに。むべ。なるほど。ほんに。記「宇倍(ウ)な宇倍(ウ)な」萬「今造る久邇の都は、山川の清きを見れば宇倍(ウ)しらすらし」同「ひむがしの市の椒木のこだるまで、逢はず久しみ、宇倍(ウ)戀ひにけり」

うへこそ うへしこそに同じ。うへし(宜)の條を見よ。源常夏「うへこそ、親の世になくは思ふらめと、をかしく見給ふ」

うへなうへね げにげに。うへなりうへなり。記「宇倍那宇倍那(ウヘナヘ)君待ちがたに、我がけせるおすひの裾に月たたなむよ」

うへなり 實に然なり。道理なり。綾靖紀「宜哉乎(ウヘナリカナ)、汝之光臨天位、以承皇祖之業」宇津保俊蔭「うへなりけり、時もちはいと清げに侍りしものなれば」靈異記「諸(ウヘナリ)服(ウヘナリ)」

うへうへし 宜宜 (形) うへ(上)を重ねたる言。うへつがた。狂言上藤「うへうへは申すに及ばず、我れ等如き者まで、御話文は城にかはらず、樣參る」

うへうへし 上上 (名) うへ(上)を重ねたる言。うへつがた。狂言上藤「うへうへは申すに及ばず、我れ等如き者まで、御話文は城消吞童子「うへうへとても、御話文は城にかはらず、樣參る」

うへうへし 宜宜 (形) げにさもあるべし。もっともらし。鶯實らし。儀式めいたり。枕「うへうへしき所のせんざいには薄し」增鏡「この頃は、天下に、いさぎよくうへうへしき人に思はれたる頃なれば」

うへおほめ 上大目 (名) 船のかぢの名所。かぢ(舵)を見よ。

うへかは 上革 (名) 半部車・綱代車・八葉車等の、簾の緒の上端につけて垂るる革帶。緒と同じ色なるを常とす。蜻抄「綱代車中黒簾、大臣・納言・大將無差、大中納言・參議等四緒、此外有上革」

うへざぶし 上雜仕 (名) 宮中にて、五節また女御入内の時、臨時に置かるる卑しき女官。雜役・駈使の役をつとむ。枕「うへざぶし・わらはべども、いみじき色ふしと思ひたる、いとことわりなり」雅亮裝束抄「雜仕の事、馬に乘るべし。車に乘りたらば閑所よりありくべきなり。裝束常の如し。五節の上雜仕・ひすましは車に乘るべきなり」

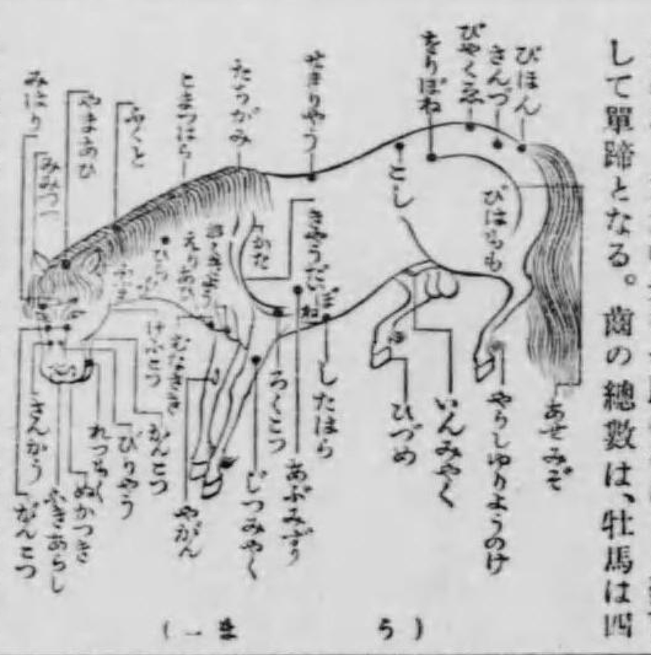
うへさま 上樣 (代) 一うへ(上)に同じ。太平記「七、船上」上樣にはいまだ知ろじ召され候はずや」二うへ(上)に同じ。太平記「長崎入道上樣の御事は、綸ひ敵の中へ御出で候共、矢ひ進らするまでの事は

よも候はじ」
うへ-ざま　上方　(名)　うへのはう。高き方。頭の方。宇治拾遺十「三度うへざまへ蹴上げ蹴上げして、なえなえくたくたとなして落つる所を」
うべ-し　宜　(副)　うべ(宜)に同じ。萬十「宇倍之(ウベシ)神代ゆ始めけらしも」
うべし　かも　うべなるかな。推古紀「宇倍之訶茂(ウベシカモ)蘇我のこらを、おほきみのつかはすらしき」
うべし　こそ　げにこそ。うべこそ。道理にて。記下「高光る日のみこ、宇倍志許會(ウベシコソ)問ひ給へ」萬十「夜くたちて鳴く河千鳥、宇倍之許曾(ウベシコソ)昔の人もしぬび來にけり」
うべし　も　うべも。げにも。貫之集「咲く限り散らではてぬる菊の花、うべしも千代のよはひのぶらん」
うへ-した　上下　(名)　うへとしたと。かみしも。蜻蛉日記中「重ねたりつる衣手は、うへした分かずくたしてき」相模集「霜氷る冬の川瀬に居るをしの、うへした物を思はするかな」
うへ-したくら　上下鞍　(名)　馬具。さひつ(左筆)に同じ。
うへ-しろ　上白　(名)　㊀襲の色目にて、表の白きものの稱。紫式部日記「柳のうへしろの御こうちぎ」㊁牛車の上葺の白きもの。
うへ-すがた　上姿　(名)　直衣を著たること。親長卿記文明四年七月十日「上姿可レ參之由有レ仰、卽令ニ退出、改ニ衣裳一直衣參內、有ニ一獻一」
うへすぎ-ざさ　上杉笹　(名)　紋所の名。ささ(笹)音を見よ。
うへ-だ　上田　(名)　㊀高き所にある田。風雅雜上「松かげの水せき入れて住吉の、岸の上田に早苗とるなり」㊁うへだじま(上田縞)の略。
うへ-たう　(名)　うへつがた(上方)に同じ。百姓などより領主の家をさしていふ。狂言雁かりがね「河内の國のお百姓でござる。毎年うへたうへ、御年貢に初雁を差し上げます」同餅酒「うへたうはいつも正月ぢやと申すほどに」
うへだ-じま　上田縞　(名)　信濃國上田地方より織り出だす紬縞。うへだつむぎ。
うへだ-つむぎ　上田紬　(名)　前條に同じ。
うへ-つ-がた　上方　(名)　身分高き人。うへうへ。狂言牛馬「此の馬と申すは、うへつがたに御重寶なされて」
うへ-つぼね　上局　(名)　主上の御許近くにある局。(下局の對)宇津保藏開中「よるはまうのぼらせ、ひるはうへつぼね賜ひなどしてこそ、例にたがひて聞こゆれば」源桐壺「後涼殿に、もとよりさぶらひ給ふ更衣のさうしをほかにうつさせ給ひて、うへつぼねに賜はす」
うへ-つ-みち　上道　(名)　東の海道。天武紀上「東海(ウヘツミチ)軍」
うへ-とのゐ　上殿居　(名)　殿上にとのゐすること。小大君集「うへとのゐしてお前近くさぶらふ人人、あやしきくれの枕を落として出でたるに」
うへ-なし　無上　(形二)　これより上なし。最上なり。新古今雜三「富士のねの烟も猶ぞ立ちのぼる、上なきものはおもひなりけり」
うべ-なふ　諾　(他動四)　㊀うべと思ふ。うけがふ。うべなむ。承諾す。㊁服從す。罪を謝す。わぶ。神代紀下「其所レ不レ服(ウベナハヌ)者」神功紀「殺ニ王妻一以謝(ウベナヒキ)レ罪」
うべ-なむ　諾　(他動四)　古語。前條に同じ。續紀廿「天地乃宇倍奈(ウベナヒ)由流之天」
うへ-なんば　上南蠻　(名)　船具。なんば(南蠻)を見よ。
うへ-に　於　(副)　「於の字の訓讀」おいて。就いて。名義抄「於ウヘニ。オイテ」
うへ-の-おんぞ　上御衣　(名)　次條の敬稱。源葵「無紋のうへの御ぞ、にび色の御したがさね」
うへ-の-きぬ　表衣　(名)　はう(袍)に同じ。和名廿「袍宇倍乃岐沼」宇津保吹上下「御供の人、例のうへのきぬ櫻の下襲など著たり」同藏開「なほしさうぞくは娘きせたれど、うへのきぬはなし」
うへ-の-にようばう　上女房　(名)　主上の御許近くに奉侍する女房。源桐壺「人がらのあはれに情ありしみ心を、うへの女房なども戀ひしのびあへり」
うへ-の-はうぐわん　上判官　(名)　檢非違使尉にて、六位の藏人に補せられたるもの。枕三「六位の藏人、うへのはうぐわんと打ちいひて」
うへ-の-はかま　表袴　(名)　束帶の時、大口の袴の上に重ねて著る袴。其の製、口狹くして襞(ヒダ)あり。表は白、裏は紅。四時共に用ふ。紋は三位以上は窠(クワ)に霰(アラレ)、晴れの時は浮文、常は堅文、老年は藤の丸を用ふ。四位以下は表は白の平絹、裏は紅の平絹。下方にある横の縫目をひざつき又あしつきといふ。宇津保あて宮「うへの袴をかへざまに著、かたしに足二つをさし入れて」源葵「下襲の色、うへのはかまの紋、馬・鞍まで皆ととのへたり」

(うへのはかま)

うへ-の-みつぼね　上御局　(名)　うへつぼね(上局)に同じ。枕四「殿上人うへのみつぼねに召して、御遊びあり」源桐壺「弘徽殿には、久しううへのみつぼねにもまうのぼり給はず」
うへ-の-めしつかひ　上召使　(名)　王朝時代、太政官の史生の下にありて、雜役をつとむるもの。江次第四、除目「次任ニ上召使一」
うへ-の-をのこ　上男　(名)　次條に同じ。古今秋上「秋たつ日うへのをのこども、鴨の川原に川逍遙しけるともにまかりてよめる」宇津保藏開上「このごろうへのをのこどもは、そこの興ありしことをさまざまいふめる」
うへ-びと　上人　(名)　てんじやうびと(殿上人)に同じ。うへのをのこ。宇津保藏開「大殿、うへ人などして渡り給ひぬ」枕五「うへ人などの聞かんに」
うへ-ぶし　上臥　(名)　禁中に宿直すること。うはぶし。辨內侍日記上「ここのへの雲のうへぶし袖さえて、まどろむほどの時のまもなし」日中行事「うへぶし承る藏人は、鬼の間にたたみ敷きて侍るなり」
うへ-みそ　上御衣　(名)　うへのきぬ(表衣)に同じ。うへのおんぞ。宇津保藤原君「布の太きをうへみそに染めて」
うへ-みだい　上御臺　(名)　御臺所の寡婦となりたる者。建內記嘉吉元年十月廿三日「來レ號ニ上御臺一」
うへ-みやづかへ　上宮仕　(名)　禁中に奉仕すること。みやづかへ。源桐壺「初めより、おしなべてのうへ宮づかへし給ふべききはにはあらざりき」

うべ-も　宜　(副)　げにも。道理にも。萬五「春なれば宇倍母(ウベモ)咲きたる梅の花、君を思ふとよいもねなくに」
うへ-や　上屋　(名)　禁中にて、御座所近き女官の詰所なるべし。枕四「御佛名のあした、地獄畫の御屛風中略入れ見よかしと仰せらるれど、更に見侍らじとて、ゆゆしさにうへやに隱れふしぬ」
うへ-やかた　上屋形　(名)　和船の名所。ふなやかた(船屋形)を見よ。
うへ-わらは　上童　(名)　宮中又は貴族の家に召し使はるる童男・童女。宇津保藏開下「少將の手にいとよく似せて、近く使ひ給ふうへわらは添へて」源椎本「御供にさぶらふうへわらはのをかしきして、奉り給ふ」
う-へん　羽片　(名)　㊀羽毛の一片。㊁【植】植物學上の用語。羽狀複葉に於いて、其の第一回に羽狀に分かれたる各片。
う-べんくわん　右辨官　(名)　官名。右大辨・右中辨・右少辨の總稱。
うべんくわん-きよく　右辨官局　(名)　右辨官のことを行ふ局。右大史ここを率る。
う-ほ　禹歩　へんばい(反閇)に同じ。勘仲記弘安七年六月十三日「陰陽頭國高朝臣參進、禹歩退」
う-ぼく　烏木　(名)　【植】こくたん(烏木)の異名。本草「烏木。葉似ニ椶櫚一其木漆黑、體重堅、可レ爲ニ筋及器物一」
う-ぼくや　右僕射　(名)　うだいじん(右大臣)の唐名。
うぽっぽ　(名)　うっぽっぽに同じ。浮世風呂下「世間の息子さん方を見たが能い、おのしがやうにうぽっぽで遊んであるく者は、又一人とありやあしねえ」
うぼん-さい　盂盆齋　(名)　うらぼんに僧尼に供養すること。事物起源「今世七月十五日、齋ニ僧尼供一謂ニ之盂盆齋一」
うま　午　(名)　㊀十二支の一。第七位。じふにし(十二支)を見よ。㊁方角の名。はうゐ(方位)を見よ。㊂昔の時の名。とき(時)三を見よ。枕八「二月うまの日の曉に」枕六「六七月のうま・ひつじの時ばかりに」
うま　今　(名)　いま(今)に同じ。六帖二「みちのくのうまやうまやと數へつつ、あふみの近くなるがうれしさ」
うま　馬　(名)　㊀【動】奇蹄類、馬科に屬する獸。鬣を有し、尾長くして總狀をなす。元來五趾なれども、其の內四趾は發育極めて不十分にて、僅かに痕跡を止むるのみ。ただ中央の一趾のみはよく發育して單蹄となる。齒の總數は、牡馬は四十枚、牝馬は三十六枚にして、年齡は齒の數及び磨滅の狀態によりて知らる。運搬・農耕・軍旅等用途頗る廣く、主要なる家畜の一たり。身長は從來四尺を標準とし、其れ以上ただ一寸・二寸と寸(キ)を以て計り、九寸より以上は丈(タケ)に餘るといひ、三尺九寸以下は返り何寸(キ)といふ。むま。推古紀「宇摩(ウマ)ならば、ひむかの駒」㊁ふみだい(踏臺)の異名。㊂竈にて火を燒くとき、燒木の枕に置く鐵具。㊃雙六の賽の名か。下の例を、一說、萬歲抄本に、めおりぬすぐろくとあるを正しとて、めの假名に馬の字を充てたるが、馬(ウマ)と訓み違ひて傳はりたるものなるべしと。枕七「つれづれなるもの、うま(萬歲抄によるに)おりぬすぐろく」㊄けいま(桂馬)に同じ。㊅うまつなぐ(馬繫)の略。㊆轉じて、遊廓などにて、遊興費の支拂ひ不足なる客に隨ひ行きて、その不足額を受け取る人。



(うま一)

うま　が　あふ　馬合　意氣投合す。諺門松中「何んぼう分限者・金持でも、町人とは馬が合ふまい」
うま　つなぐ　馬繫　遊里の詞。時めく人の氣にたがはざるやうにす。うま(馬)。色道大鏡
うま　の　かみはさみ　馬髮鋏　馬の毛をきるはさみ。字鏡「鋏馬乃加美波佐美」
うま　の　せ　を　わける　一方は晴れながら一方には雨降り居るにいふ。
うま　の　みみ　馬耳　馬の耳に風の略。心中二枚繪草紙中「人の意見も馬の耳、よそ吹く風のぶうぶうにて」
うま　の　ろくぐ　馬六具　馬面(バン)・胸懸(ムナガケ)・馬鎧(ウマヨロヒ)・鎖手綱(クサリタヅナ)・鎖脚絆(クサリキャハン)・鐵沓(カナグツ)の稱。
うま　の　を　の　たひつり　馬尾鯛釣　小兒の玩具。小弓に附けたる鯛などの、踊りながら弦を下だるやうに造りたるもの。
うま　ひやくこく　馬百石　馬一疋を飼ふには、祿高百石を要すること。
(諺)馬の籠ぬけ　窮屈にして、處置に苦しむ譬へ。姑婦人傳「元日より大晦日まで、月に花に、馬の籠ぬけするやうに仰びつ屈んづ、その苦しさ」
(諺)馬の耳に風　人の意見を少しも感ぜぬ譬へ。檜櫂三上「馬よ聽いたか聽いたかといへどもいかな、馬の耳風に嘶くばかりなり」東坡詩「說向ニ市朝公子一何殊ニ馬耳東風一」
(諺)馬の耳に念佛　前條に同じ。
(諺)馬は馬づれ　同類相伴ふをよしとする譬へ。心中萬年草中「馬は馬連れ、牛は牛連れ」
(諺)馬を鹿　鹿をさして馬といふに同じ。しか(鹿)の條を見よ。
うま　甘　(形)　うまし(甘)の略。狂言宗論「あらうまやと思ひて」
うま　甘　(接頭)　㊀味うまき意を表はす語。祟神紀「宇摩(ウマ)酒、みわの殿の」㊁善き・貴き又快き意を表はす語。繼體紀「ししくしろ、于魔(ウマ)いねしとに」神功紀「宇摩(ウマ)人は于摩(ウマ)人どちや」
うま　馬　(接頭)　同種類中の大なるものに名づけいふ語。「うま芹」「うまびる」
うま-あきんど　馬商人　(名)　ばくらう(伯樂)に同じ。
うま-あげ　馬上　(名)　あげうま(上馬)に同じ。狗鏡中「兩社にて馬あげせさせられけり」
うま-あしがる　馬足輕　(名)　敵陣を襲擊せんとする勢ひを示して、敵を牽制する二三十騎の騎兵。
うま-あそび　馬遊　(名)　うまごと(馬事)に同じ。
うま-あづかり　馬預　(名)　おうまあづかり(御馬預)を見よ。
うま-あぶ　馬虻　(名)　【動】うまばへ(馬蠅)の異名。
うまあらひ-うつぎ　馬洗空木　(名)

【植】どくうつぎ(木本黄精葉飼物)の異名。

うまい　熟寢　(名)　快く寝入ること。熟睡すること。うまいね。繼僧紀「ししくしろ、子麓伊(ねマ)ねしとに」萬三「白たへの袂ゆたけく人のぬる、味宿(ねマ)はねずや懇ひわたりなむ」

うまいかだ　馬筏　(名)　馬をならべつなぎて、川などを渡す一種の方法。宇治拾遺三「馬筏をつくりておよがせけるに、かち人は其れに取りつきて渡りけるなるべし」

うまいくさ　馬軍　(名)　一騎兵。雄略紀「歩・騎(イクサ)夾攻、大破之」二騎兵の戰ひ。騎戰。

うまいし　馬醫師　(名)　一ばい(馬醫)に同じ。二職名。馬寮に屬し、馬允の下にありて、馬の疾病を治療する役。續古事談「此の賞に、忠延馬醫師になされけり」

うまいしゃ　馬醫者　(名)　うまいし(熟寢)に同じ。

うまいね　熟寢　(名)　うまいし(熟寢)に同じ。

うまいひ　甘飯　(名)　味ひうまき飯。萬三「味飯(ウマヒ)を水にかみなし我が待ちし、かはりはぞなき、ただにしあらねば」

うまいり　馬入　(名)　大將、城中に入ること。甲陽軍鑑「いつにもすぐれ大雪ゆゑ敵は見えず、早早御馬入りなり」

うまいれ　馬入　(名)　騎兵にて敵陣を乘り崩すこと。

うまう　一羽毛　(名)　一鳥の羽と、獸の毛。書紀「厳貢羽毛齒革」二鳥のはね。

うまうち　馬打　(名)　馬に乘りて行くこと。

うまうど　馬獨活　(名)　【植】しし

ど(獨活の異名。

うまうま　旨旨　(名)　うまきもの。たべもの。小兒の語。

うまうま　旨旨　(副)　手際よく。巧みに。まんまと。生玉心中上「うまうまと、よう喰はせたなあ」

うまおび　馬追　(名)　一駄馬をつかふこと。又、其の人。うまかた。まご。丹波與作三「千三百石から馬追まで、成りさがるぼんのくぼ」二牧場にて、野馬を追ひ込めて捕ふること。三(動)うまおひむし(馬追蟲)の略。

うまおひごゑ　馬追聲　(名)　まご。丹波與作三「しいと云ふ馬追聲も聞かぬわいの」

うまおひむし　馬追蟲　(名)　【動】直翅類、螽齊科に屬する昆蟲。綠色小形にして、夏季燈火を慕ひて人家に入り來たり、特異なる鳴聲を發するもの。うまおひ。つむ。孕常祭「末まつ蟲の時を得て、馬追蟲に鐙鞍、鐙踏ん張り名乘るべき大將軍とぞ見えにける」

うまかけ　馬駈　(名)　けいば(競馬)に同じ。くらべうま。駒くらべ。

うまかし　馬借　(名)　荷物を馬にて運びて賃錢を取ること。又、其の人。駄賃取。ばしゃく。庭訓往來四月「大津・坂本馬借」

うまかず　馬數　(名)　馬術の語。馬に乘りたる度數。小倉宗家

うまかた　馬方　(名)　一駄馬を曳くを業とするもの。うまおひ。まご。東海道名所記「馬方・船頭・牛つかひなどは、口がましく言葉戯しう我がままなる者なれば」二職名。おうまかた。御馬方)を見よ。(誹馬方・船頭・御乳の人　人を要して專横をはたらく者。馬方と船頭とは旅

客・荷物を皆に取り、御乳の人は嬰兒を質に取りて居る。我がままにねだりがましき事をする譬へにいふ語。丹波與作上「船頭・馬方・お乳の人、こちもそちらと同じこと」

(誹馬方・雞師　前條に同じ。

うまかた　馬形　(名)　一馬の形。中右記天仁元年十二「朝干餘霊・布障子、若畫・馬形」二神馬の代りに、木又は紙などにて馬の形に作りたるもの。陰陽寮式「五十疋、馬形」

うまかたぐび　馬形障子　(名)　【植】さるとりいばら(藤葉)の異名。

うまかたのしゃうじ　馬形障子　(名)　馬形を畫きたる布張の衝立。古へ禁中清涼殿の渡殿の北の邊に立つ。

うまかたぶし　馬方節　(名)　馬子の馬を牽きながら謠ふ歌のふしまはし。又、其の歌。

うまかはら　馬買　(名)　ばくらう(伯樂)に同じ。七十一番歌合「うまかはら」

うまかひ　馬飼　(名)　馬を飼養する人。むまかひ。雄略紀「典馬(カヒ)」典馬(カヒ)、主馬(カヒ)、馬養(カヒ)、馬飼(カヒ)、大鏡上「昔は殿ばら・宮ばらの馬かひ・牛かひ」廣辭苑

うまかひ　馬貝　(名)　小兒の戲れ。貝に綱をつけ、足にはきてありくことか。

うまかひば　馬飼場　(名)　馬を飼育する場處。

うまがほ　馬顔　(名)　馬の如く長き顔(嘲り呼ぶ語)。うまづら。一代女「女も香もなき人、しかも馬顔にして、横へひろがりし面影」

うまがる　甘　(自動)　うましと思ふ。味よく思ふ。

うまき　鵜卷　(名)　鵜集まり、魚を取り卷きて汀に寄すること。

うまきたし　馬衣　(名)　【植】たかさぶらう(鰊腸)の異名。

うまきぬ　馬衣　(名)　馬に著するもの。布にて製る。むまぎぬ。大磯虎稚語源辭典

うまぐ　馬具　(名)　ばぐ(馬具)に同じ。宇津保埋上「ここは銀冶や。しろがね・こがねの銀冶二十人ばかり居て、萬のもの、うまぐ・をりびつなど造る」

うまくさ　秣　(名)　まぐさ(秣)に同じ。宇鏡「秣(字末久佐)」

うまくさ　(名)　【植】のげいとう(青葙)の異名。

うまくさ　甘臭　(形)　次條の略。狂言「いえ、うまくさや、うまくさや、一口食はうか」

うまくさし　甘臭　(形)　うまきにほひす。

うまぐし　馬櫛　(名)　一馬の毛をすくあらぐし。うまはたけ。二馬櫛の圖を描ける小旗。伊達日記「黑地に白馬櫛の指物を、出羽の羽黑山(納め)」

うまくすし　馬醫　(名)　ばい(馬醫)に同じ。

うまくつ　馬沓　(名)　かなぐつ(金沓)に同じ。

うまぐは　馬鍬　(名)　まぐは(馬鉗)に同じ。和名抄「馬杷(字書云、馬鍬、作田具也。鍬柊同上名鐵齒杷名也」

うまくはず　馬不食　(名)　【植】せんにんさう(仙人草)の異名。

うまぐひ　馬杭　(名)　馬を繋ぎとむる杭。

うまくら　馬鞍　(名)　馬にかくる鞍。宇鏡「被鞍(馬久良)、阿久(ラ)」宇津保藤上「馬くらより

始めて、ひびきていそぎたり」

うまくるま　馬車　(名)　ばしゃ(馬車)に同じ。牛車の對。

うまけ　甘氣　(副)　うまさう。うまきやう。蜻蛉日記上「かうたての森に車とどめて、わりごなどものす。みな人の口うまげなり」

うまげた　馬下駄　(名)　こまげた(駒下駄)に同じ。昔は庭下駄にのみ用ひたり。日本武尊吾妻鑑三「馬下駄に鐙踏み分けて、飛石の道を手燭に羅かせ」砂金袋「はねあがるけふ馬下駄の足揃ひ」

うまけむり　馬烟　(名)　馬の駈け走りて起こる塵埃。うまけぶり。太平記十、田舞良「馬物具爽かに見えたりける兵二千餘騎計り、馬烟を立てて馳せ來たる」

うまご　孫　(名)　まご(孫)に同じ。むまご。靈異記上「息子方　宇津保俊蔭「女・おきな・子供・うまごなどゐて、かうべをつどへて」

うまご　馬子　(名)　まご(馬子)に同じ。狂言鳥帽子左「何といふ馬子だち、具足ぶりけるといふか」

うまごあつかひ　孫扱　(名)　わが孫の如く取り扱ふこと。源氏夕顔「夏の御方は、かくとりどりなる御うまごあつかひを羨みて」

うまごころ　甘心　(名)　眞心。眞實。發心集「いみじううまごころに使はるれば、ことにいたはる馬をなん預けて飼はせける」

うまごと　馬事　(名)　小兒の遊戯。馬に乘るまねをすること。うまあそび。うまのり。

うまごのぶし　苜蓿　(名)　【植】豆科、苜蓿屬の一年生草本。莖の高さ一二尺。葉は三小葉より成り、羽狀複葉にして、各小

葉は倒卵形、細かき鋸齒を具へ、裏面は白色なり。托葉は細裂す。春、葉腋より花梗を抽出して、黃色の小蝶形なる數花を著く。果實は螺旋狀を爲し、毛狀の突起を具ふ。我が國、各地の原野に自生し、又栽培することあり。牧草また肥料として佳良なり。おほひ。おほひのみ。かたばみ。からくさ。こっとひどやし。まどやし。みつば。ゑんざつる。

うまごり　の　(枕)　次條に同じ。萬三「味凍(ウマゴリ)の義あやにともしく、鳴るかみの音のみ聞きし」

うまごり　の　(枕)　うまごりは美はしき物の義より、あやにかけていふ。萬六「味凍之(ウマゴリ)を栄とするもの。うまおひ。まご。東海道名所記「馬方・船頭・牛つかひなどは、口がましく言葉戯しう我がままなる者なれば」二職名。おうまかた。御馬方)を見よ。(誹馬方・船頭・御乳の人　人を要して專横をはたらく者。馬方と船頭とは旅

つ月の、見がほし君が馬のあとぞする」

うまさけを　旨酒　(枕)　酒は、醸(カミ)みて造るものなれば、かみにかけていひ、又略してか、或ひは、みにもかけていふ。萬三「味酒乎(サケヲ)、かみなび山の帶にせる」同四「味酒乎(サケヲ)、かみわのはふりがいはふ杉、手觸れし罪か君にあひがたき」同三「味酒乎(サケヲ)、みもろの山にたつ月の、見がほし君が馬のあとぞする」

うまさし　馬差　(名)　江戸時代、人馬の役を指圖する宿驛の役人。丹波與作中「問屋・馬さし・親方へことわって、海道筋のごきのみをぶちあげ、こもかつがせて見せうず」

**うまさはふ　**　(枕)　あぢさはふに同じ。萬一「味澤相(サハフ)の方義めごともたえぬ」同元「味澤相(サハフ)夜畫といはず」

うまさへ　馬副　(名)　うまぞひ(馬副)に同じ。枕三「うまさへの程ぞなどいへば」

うまし　甘　旨　(形)　一味よし。あまし。欽明紀「食不甘(ウマシ)味」萬三「いひ食へど味(ウマシ)もあらず、あるけどもやすくもあらず、あかねさす君が心し忘れかねつも」催馬樂大芹「小芹こそゆでてもうましし」二感じて快し。美し。好し。このましし。神代紀上「可美(ウマシ)、此云于麻時(ウマシ)」三巧萬一「怜柯(ウマシ)國ぞ、秋津島大和國は」四善し。國姓爺二「やあうまい處へ出あうたな」持統天皇歌軍法二「他人にうまい目させうより」五愚かなり。あまし。津國女夫池二「知ったとていふものか、うまい奴ら」

うまいものの　おやかた　甘物親方

**うまいしるをすふ　**　吸甘汁　自ら勞せずして他人の巨利を獲得す。

うまず　不生　(名)　一子をうまぬこ

尤も美味なるもの。美食の王。

うましくに　美國　(名)　よき國。うつくしき國。垂仁紀「傍國可怜國(ウマシクニ)也」萬二「國見をすれば、國原は烟たちたつ、うなばらはかまめたちたつ、可怜國(ウマシクニ)ぞ、秋津島やまとの國は」

うましばぬ　馬芝居　(名)　馬に種種の藝を演ぜしむる見世物。

うましもの　甘物　(名)　甘き物。味よきもの。萬一「わぎもこにあはずぐし、なばらはかまめたちたつ、可怜國(ウマシクニ)ぞ、秋津島やまとの國は」

うましゃうぞく　馬裝束　(名)　馬につけたる飾り。大磯虎稚物語源氏「同しでたちの馬裝束、毛色も同じ白葡萄、二疋列べて牽いたるは」

うましるし　馬標　(名)　武具の名。近世戰陣にて、大將の傍に樹てて隊長の所在を示す具。其の形、扇・御幣・三階笠・提灯・瓢箪・縄張・輪貫等、己れが好みに從ひて種種あり。まとひ。北條五代記上「御馬じるし、金の瓢箪を手づから取りて」信長記十五、下「永祿の頃まで、馬驗と云ふ事なかりき」

うましるしもち　馬標持　(名)　旗奉行に屬し、馬標を持ちて主將の傍を離れざる職。清正記「清正の側にある者は馬印持ち差吉」

(しるじまう)

と。賀古教信七墓廻「一子を授け給へ。用家させて夫婦うまずの業をはらし」㊁

うます-すけ (名) 【植】莎草科、蔎(スゲ)屬の多年生草本。莖の高き六七寸乃至一尺。葉は細長なり。花は單性にして雌雄同株、穗狀花序に排列し、雌花穗は紫褐色にて下部に四箇、雄花穗は莖頂に一箇を生ず。我が國、諸所の水邊に自生す。

うます-め 不生女 (名) 子を生まぬ女の稱。うまずをんな。愚管抄「その御女北政所にておはしましけれど、つひにうまずめにて、御子の出來ざりければ」

うます-をんな 不生女 (名) 前條に同じ。根南志具佐「うまずをんなに燈心をあてがひ」

うま-せ 馬塞 (名) 馬を逐ひいれおくめぐりのかき。萬葉「宇麻勢(ウマセ)ごし麥はむ駒のはつはつに、にひ肌觸れし子ろしかなしも」

うま-せみ 馬蟬 (名) 【動】くまぜみ(熊蟬)の異名。

うま-せり 馬芹 (名) 【植】たうき(當歸)の異名。

うま-そひ 馬副 (名) ㊀公卿の乘馬に附き副ふ從者。うまぞへ。うまさへ。宇津保俊蔭「うなゐの子の、御馬ぞひ多くて渡り給ふ」枕「馬ぞひの細うしたてたるばかりして」物具裝束抄「馬副事。行幸行啓并一員御幸之時、公卿召具之、祭使召具之」同「馬副人數事。大臣十人、大納言八人、中納言六人、參議四人、祭使八人」㊁室町時代、將軍の乘馬に添ひゆくもの。

うま-そひ-わらは 馬副童 (名) 馬副をつとむる童。源氏蜻「うまそひわらはのほど、みなつくりあはせて」

うま-そへ 馬副 (名) うまぞひ(馬副)に同じ。著聞「馬ぞへひきまろばかされて、馬をすててけり」

うま-だし 馬出 (名) ㊀馬場にて、馬を乘り出だす所。馬場本(ウマビ)。宇津保俊蔭「馬だしより馬とどめまて、ひまなく、かちのきぬ著たるをのこども供したり」㊁敵に知らざれる偽めに、城門の前に築きたる土手。角(ツノ)馬出・甲陽軍鑑「馬出等あり。甲陽軍鑑「馬だしを取らせ、田中の城と名づく」

うま-たて 馬立 (名) うまつなぎ(馬繋)に同じ。

うま-だて 馬楯 (名) 馬上にて執る楯。應仁私記「於武具甲冑、槍楯・疊楯・馬楯」。

うま-たはけ 馬姦 (名) 馬と人と姦淫すること。記「馬婚(ウマタハケ)・牛婚・雞婚・夫婚之罪類」

うまたまの (枕) うばたまの(烏羽玉之)に同じ。夫木「うまばたまの夜わたる月の澄む里はげに久方の天の橋立」

うま-だまり 馬溜 (名) 城外の橋際に設けたる空地。甲陽軍鑑「馬だまりの事」

うま-たらう 馬太郎 (名) おろかもの。春花五大力「こちの國の名物を知らぬとは、わいらも、きついうまたらうぢやな」

うま-だらひ 馬盥 (名) ばたらひ(馬盥)に同じ。

うま-つかさ 馬司 (名) うまやのつかさ(馬寮)に同じ。宇津保俊蔭「うまつかさの使には、式部卿の宮のうまの君」新六帖「見渡せばみな青鷺のけつるめを、引きつげける馬つかさかな」

うま-づかひ 馬使 (名) 馬をつかふ人。

うま-つき 馬附 (名) 乘馬の口に附き居る人。くちつき。くちとり。うまとり。馬丁。

うま-つぎ 馬繼 (名) うまや(馬屋)に同じ。驛。丹波與作「泊り泊りは多くとも、十萬億土馬つぎなしの」

うま-つつじ 馬躑躅 (名) 【植】れんげつつじ(羊躑躅)の異名。

うま-つなぎ 馬繋 (名) ㊀馬をつなぎおく處。うまたて。國姓爺後日合戰「御馬繋ぎは椽柱」㊁【植】こまつなぎ(木蓼)の異名。

うまつなぎ-は 馬繋場 (名) 前條に同じ。

うま-つはもの 馬兵 (名) きへい(騎兵)に同じ。仁德紀「精騎(ウマツハモノ)」

うま-つぶて 馬礫 (名) 馬をつぶての如く投ぐること。岡姓爺「騎馬の武者は馬ともに一つに搦んで手玉に上げ、四足を搦んで馬礫」

うま-づら 馬面 (名) うまがほ(馬顏)に同じ。

うま-づら-はぎ 馬面剥 (名) 【動】固顎類、はぎ科に屬する魚。體の長さ八寸許り。平たき長精圓形にして、濃灰色の地に暗色の斑紋を散布す。近海に產す。うまづらかはぎ。

うま-とめ 馬駐 (名) 馬場の留りの所。ばばはす系、馬場末)。宇津保俊蔭「馬だしより馬とどめまて、ひまなく、かちのきぬ著たるをのこども供したり」

うま-とねり 馬舍人 (名) 馬の轡につく舍人。今昔「しのびて竊かに出で立ちて鎭西へ下だりけるほどに、隨身一人、小舍人童一人、馬舍人ばかりにて、只行きつく所をとまりにて」

うま-とび 馬飛 (名) かはづとび(蛙飛)に同じ。

うま-とめ 馬留 (名) 馬を繋ぐ木。駒留め。うまたて。

うま-とり 馬取 (名) 馬の口取。うまつき。くちつき。くちとり。丹波與作「二石二斗は何程ぢや。昔與作が草履取・馬取の切米」

うま-に 馬荷 (名) 馬につけて送る荷。萬葉「重き馬荷(ウマニ)にうは荷うつといふことのごと」宇鏡「馬駄(保加乃波)」

うま-に 甘煮 (名) 料理の一種。肉と野菜とを、味醂・砂糖・醬油等にて甘く煮つけたるもの。

うま-ぬし 馬主 (名) 馬の持ちぬし。著聞「馬ぬし退ひて來けり」

うま-ぬすびと 馬盜人 (名) ㊀馬を盜む賊。今昔「雨の交れに、馬盜人入り來たりて」㊁【動】あかう(赤魚)の異名。

うま-ねぶり 馬眠 (名) 馬に乘りながら眠ること。著聞「はや馬ねぶりをして、たづなうち捨てて、馬にまかせて行く程に」

うま-の-あし 馬脚 (名) ㊀芝居にて馬の形したるものを出だす時、其の前後肢となる役の稱。うまやく。㊁下等の役者を嘲りていふ語。

うま-の-あしがた 毛蓑 (名) 【植】馬

蓑科、毛蓑屬の多年生草本。莖・葉共に毛茸多し。葉は單葉、掌狀に深裂す。四五月頃、葉間より一二尺の花莖を抽出し、黃色の五瓣花を著く。果實は瘦果にして、集合して金米糖狀をなす。我が國、到る處の山野の水邊に自生す。有毒植物なり。おこりおとし。おにぜり。きんぎんふうくわ。きんぽうげ。こがねばな。こまのあしがた。てまりぐさ。

うま-の-あしがた-くわ 毛蓑科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。草本又は灌木。葉は分裂し、根生葉又は互生、稀に對生にして托葉無し。花は兩性、時に單性のものもあり。萼片は往往花瓣樣をなし、普通五箇にて、或ひは二乃至四箇のものあるも稀なり。花冠は離瓣、三乃至五瓣又は多瓣より成る。雄蕊・雌蕊共に多數なれども、雌蕊には數箇又は一箇のものもあり。子房は上位一室にして、一乃至數箇の胚珠を含む。果實は瘦果・蒴葵又は漿果なり。溫帶及び寒帶地方に多く、無色の辛味ある汁液を含み、毒草又は藥草となる。きんぽうげくわ。まうどんくわ。

うま-の-あとあし-むかう 馬跡足向 (名) 劇場の花道の稱。

うま-の-いくさ 馬卒 (名) きへい(騎兵)に同じ。欽明紀「騎卒(ウマイクサ)」

うま-の-かしら 午頭 (名) 和船の名所。とも(艫)を見よ。

うまのかしら-たつ 午頭立 (名) 和船の纜歩(ヒキヅメ)の錨に立てたる臺。

うま-の-かひ 午貝 (名) 午の時を報ずる爲めに吹く螺。千載「今日もまたうまの貝こそ吹きつなれ、ひつじのあゆみ近づきぬらん」

うま-の-かみ 右馬頭 (名) 右馬寮(ウマノツかさ)の長官。勢語「うまのかみなりける人のよめる」

うま-の-さまね 食槽 (名) 馬の下顎なりと。和名抄「食槽(馬飼反)」名義抄「食槽(牛馬飼ウマノキバ子)」

うま-の-くそ 馬糞 (名) そくはつ(束髮)を嘲りていふ語。

うま-の-くち 馬口 轡 (名) くつわ(轡)に同じ。くつばみ。雄略紀「並轡(ウマノクチ)驍騎」

うま-の-くちわ 馬口輪 (名) 前條に同じ。宇鏡「銜(馬口和)」

うま-の-くつ 馬沓 (名) ㊀馬にはかすわらぐつ。㊁馬上にてはく沓。

うまのくぼがひ 馬陰貝 (名) 【動】こやすがひ(子安貝)の異名。和名抄「紫貝。一名、文貝(字末乃久久)」

うま-の-くら 馬鞍 (名) 馬の脊に置く具。くら。宇鏡「鞍(馬乃久良)」

うま-の-さくわん 右馬屬 (名) 右馬寮の主典。

うま-の-じょう 右馬允 (名) 右馬寮の判官。

うま-の-すけ 馬毛 右馬助 (名) 馬の尾の毛。右馬寮の次官。

うま-の-すず 馬鈴 (名) 【植】次條に同じ。

うまのすず-かけ 馬兜鈴 (名) 【植】次條の異名。

うまのすず-くさ 馬兜鈴 (名) 【植】馬兜鈴科、馬兜鈴屬の多年生草本。蔓莖を有して纏繞す。葉は互生、三角狀、長精圓形にて鈍頭、葉脚心臟形をなし、全緣にして帶紫綠色を呈し、一種の惡臭を有す。夏日、帶紫綠色の不整喇叭狀の花を、葉腋に一箇づつ開く。我が國、各地の山野に自生す。うまのすず。うまのすずかけ。おはぐろばな。こまのすず。しやうもくかう。じやかうさう。土青木香。

うまのすずくさ-くわ 馬兜鈴科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。草本、又は纏繞性木本。葉は互生にして全緣、三乃至五裂し、葉柄を具ふれども托葉なし。花は腋生又は頂生、整齊又は不整齊、苞を有するもあり、或ひは之を缺くもあり。花蓋は上位にありて、三裂・二裂又は管狀をなし、彩狀種種なり。雄蕊は六箇或ひは多數、花柱の基部に環生し、砧と無柄にして合蕊す。子房は下位、六室、多胚珠を含む。花柱は合著し、柱頭は分離す。果實は蒴なり。廣く溫帶及び熱帶に分布す。ばとうれいくわ。

うま-の-せうべん 馬小便 (名) 下等なる茶の汁を嘲りていふ語。

うまのせ-ごえ 馬背越 (名) 山路などの、左右に谷などありて、極めて細き道の稱。

うま-の-たいふ 馬大夫 (名) 馬寮の允の、五位に敍せられたるものの稱。

うま-の-たま 馬玉 (名) 馬などの腹中に生ずる石の如きもの。下文を見よ。本草啓蒙「諸の走獸の腹中にある石なり。就中馬に多くあり。馬にあるをうまの玉といひ、牛にあるを牛のこしと云ふ中略糞に混じて出づる故に石糞と云ふ中略その狀一ならず、皆全くして石の如し。灰色あり、油色あり、褐色あり中略馬これあれば、甚だ惱む。遣出すれば愈ゆ。又甚だ輕きあり。內に黑毛或ひは褐毛滿つ。これをけだまといふ。又家猪・野猪・鹿にも酢答あり。鹿の酢答多くは雞卵の形なり。又魚類にも稀に酢答あり」酢答。

うま-の-つかさ 馬寮 (名) めれう(馬寮)に同じ。

うま-の-つかさ 主馬署 (名) しゅめしよ(主馬署)に同じ。

うま-の-つめ 馬爪 (名) ㊀馬の脚に生ひたる爪。萬葉「宇麻乃都米(ウマノツメ)いつくすきはみ、ふなのへのいはつるまでに」㊁ばづ(馬爪)に同じ。

うま-の-と 馬音 (名) 馬の足音。萬葉「馬音(ウマノトの方義のとどともすれば、松かげに出でてぞ見つる、けだし君かと」

うま-の-なみだ-の-つむじ 馬涙旋毛 (名) 馬の旋毛。できるゐ(滴涙)に同じ。

うま-の-はかけ-ぐさ (名) 【植】せんにんさう(仙人草)の異名。

うま-の-はこぼれ (名) 【植】前條に同じ。

うま-の-はなむけ 餞 (名) 〔馬の鼻向けの義〕はなむけ(餞)に同じ。土佐日記「舟路なれどうまのはなむけす」宇鏡「餞(馬乃波奈乃介)」

うま-の-ひゆ (名) 【植】すべりひゆ(馬齒莧)の異名。

うま-の-ひりーぐさ (名) 【植】しばがまぎく(鹿鹿菊)の異名。

うま-の-ぶす (名) 【植】えびづる(蘡薁)の異名。

うま-の-ほね 馬骨 (名) 素性の分からぬ人を嘲りていふ語。「どこの馬の骨か分からぬ」

うま-の-みつば 鼈豆萊 (名) 【植】繖形科、鼈豆萊屬の多年生草本。根出葉は長き葉柄を具へ、五小葉より成り、羽狀複葉にして、夏日葉間より一尺許りの莖を抽く。莖・葉は葉柄短く、三小葉より成り、各小葉は倒卵形、粗鋸齒を有す。夏日淡綠色の花を、分岐せる梢頭に繖形花序に排列し、兩性花と雄花と雜生す。我が國、各地の山野陰濕の地に生ず。おにみつば。

うま-の-め (名) 【植】あをつづら(木防

巳)の異名。

うま-のり 馬乗 (名) ㊀馬に乗ること。㊁馬に乗りたる人。武家名目抄「馬乗七拾二人」㊂馬に乗ることに巧みなる人。著聞十「つつきの平太經家は高名の馬乗・馬飼なりけり」㊃馬に乗る如く跨がること。釋迦如來誕生會二「まっ逆樣に跳ね反し、馬乗にどうと乗り」㊄うまのりどうしん(馬乗同心)の略。㊅羽織の脊の下、又は半纏絆・しやつ等の脇縫の下を、少し縫ひ殘してあけおきたる所。

うまのり-ごろも 馬乗衣 (名) 馬に乗る時に著るころも。一說、下の例の馬乗は馬蚕の誤りにて、まだらなるべしと。萬七「すみの江のなみづま君が馬乗衣(ウマノリゴロモ)、さにづらふあやめをするて縫へるころもぞ」

うまのり-ぞめ 馬乗初 (名) 新年に、始めて乗馬を試みること。ひめはじめ(飛馬始)。うまのりはじめ。

うまのり-たつ 馬乗立 (名) 船の名所。水押(ミヨシ)の附き留りにある立(タツ)。

うまのり-どうしん 馬乗同心 (名) 騎馬の下士卒。

うまのり-ばおり 馬乗羽織 (名) 乗馬の時著る羽織。多くは後をぶっさきにしたるもの。

うまのり-ばかま 馬乗袴 (名) 乗馬の時用ふる袴。まち高く裾廣く作りたるもの。うまばかま。賤孝環「常の袴も中略馬乗袴の如く、手を入れて左右へ廣げてすわりたり」

うまのり-はじめ 馬乗始 (名) うまのりぞめ(馬乗初)に同じ。

うまのり-ばば 馬乗馬場 (名) ばば(馬場)に同じ。

うまのを-むすび 馬尾結 (名) 婦人の髪の結び方の一種。結びて、馬の尾の如く長く垂れたるもの。

(びすむをのまう)

うま-は 馬歯 (名) まぐは(馬鍬)に同じ。和名五十「馬把 宇麻久波。一云、馬歯」

うま-ば 馬場 (名) ㊀ばば(馬場)に同じ。勢語「右近のうまばのひをりの日」宇津保祭使「手つがひ給はんとて、うまばについ給へりけるを」㊁良馬の産地。

うま-ばかま 馬袴 (名) うまのりばかま(馬乗袴)に同じ。

うま-ばくらう 馬博勞 (名) 馬を賣買する人。狂言牛馬「一の杭をこの馬ばくらうが繋いでござる。馬の御用あらば仰せられ候へ」

うま-はしり 馬走 (名) 馬場の馬出(ウマダシ)より馬駐(トドメ)までの間。笠懸記「扇形のすみ、未申かたへ馬の頭を向け中略馬はしりにかき入る所にて、やがて打ち入るべし」

うま-はす (他動四) 古語。ふやす。利殖す。靈異記中「貸用寺息利(利。于萬安(波ス)志。又云、毋す)酒不償」

うま-はだ 馬膚 (名) 鞍の輪の名所。くらつぼ(鞍壺)を見よ。今川大雙紙「馬膚をば、前を左に持ちて後を右に持つ也」

うま-はたけ 馬刷 (名) 馬の毛をはくに用ふる刷毛(ハケ)。うまぐし。和名十五、鞍馬具「馬刷 波太氣」類字鏡「刷 馬波太介」

うまば-どの 馬場殿 (名) 次條に同じ。宇津保吹上下「うまば殿」榮華根合「五月には、うまば殿にて駒くらべせさせ給ふ」

うまば-の-おとど 馬場殿 (名) 馬場にある殿舍。禁中にて五月の騎射の時、中少將の著座する所。花鳥餘情 うまばどの。

うまばのとの。源氏螢「うまばのおとどのほどに、たてわづらひて」

うまば-の-との 馬場殿 (名) 前條に同じ。源藤裏葉「うまばの殿に左右のつかさの御馬ひきならべて、左右の近衞たちそひたる作法、五月のせちにあやめもわかれずかよひたり」

うま-ばへ 馬蠅 (名) 【動】昆蟲類中、雙翅類の一種。體は頭部大にして、觸角短く、眼は小にして三箇の單眼あり。全體淡褐色、翅及び腹部には淡黒色の紋を有す。幼蟲は俗に筍蟲と稱し、馬の胃中に寄生す。うまあぶ。

うまば-や 馬場屋 (名) 馬場に建て設けたる屋舍。榮華初花「くらべ馬をせさせ給はんとて、土御門殿の馬場屋、埒などいみじうしたてさせ給ふ」

うま-はり 馬鍼 (名) 治療のため、馬の血を取るに用ふる鍼。

うま-はり (名) 古語。うまはること。出產。蕃殖。雄略紀「女產兒(ウマハリセリ)」

うま-はる (自動四) 古語。產まる。ふえひろがる。蕃殖す。允恭紀「一氏蕃息(ウマハリ)テ、更爲萬姓」仁賢紀「戸口滋殖(ウマハル)焉」雄略紀 蔓生

うま-ひき 馬引 (名) 馬かた。まご。大礒虎稚物語五「人人を遠國の馬引に拵へ、この近常が手引にて、きやつめを討ち取り」

うま-ひじり 馬聖 (名) こむさう(虚無僧)をいふなるべし。和訓栞 七十一番歌合「厩ふなよ通ふ心のうまひじり、人の聞くべきあの音もなし」

うま-びせき 馬塞 (名) うまふせぎ(馬防)の訛り。かた言

うま-ひと (名) 位高き人。徳高き人。神功紀「宇摩比等(ウマヒト)は于摩臂苫(ヒトマ)どちや」

萬二「みすず刈るしなぬのま弓我が引かば、宇眞人(ウマヒト)さびて否といはむかも」貴人 良家

うま-びと 馬人 (名) 馬を飼ひあつかふ人。宇津保藏開下「よねも炭も、み山の草刈・うま人召しておほせて」

うまひと-の-こ (名) うまひと。又、其の子。顯宗紀「君子(ウマヒトノコ)」萬五「あさりするあまの子どもと人はいへど、見るに知らえぬ有麻必等能古(ウマヒトノコ)と」播紳 顯宗紀

うま-びゆ (名) 【植】すべりひゆ(馬齒莧)の異名。宇鏡草部「白莧 馬比由」

うま-びる 馬蛭 (名) 【動】蛭類の一種。體の長さ三四寸に達するものあり。池沼・淡流等に產し、動物質を食となす。和名廿「馬蛭 無末比比流 蛭之大也」

うま-ふ (他動四) 古語。ふやす。蕃殖す。萬十六「寺寺の女餓鬼申さく、おほみわの男餓鬼たばりて其の兒將播(ウマハム)」

うま-ふせぎ 馬防 (名) ㊀かきね。さく(柵)。うまびせき。㊁栅。宇鏡「栅 馬夫世支」

うま-ぶね 馬槽 (名) ㊀飼葉(カヒバ)を入るる器。かひばをけ。和名廿「槽 和名字萬布禰 馬槽也」宇津保初秋「お前にうまぶねたてて、御馬どもにまぐさ飼はれ」㊁大きなる桶。東海道名所記「熱き湯出で走るを、筧にて家家にとり、うまぶねにたたへて人人に入らせ侍る」

うま-ぶね 馬船 (名) 馬を載する船。制補あり。

うま-ふぶき (名) 【植】ごばう(牛蒡)の異名。

うま-ぶみ 馬蹈 (名) 馬の足あとなどにて、路のくぼみたる所なるべし。夫木廿「瀬田の里橋の馬ぶみ朽ちめおぼみ、底の涙ぞおもかげにたつ」

うま-へん 馬偏 (名) 漢字の偏の名。駒・駄・驛・馳等の左方にある馬の字の稱。むまへん。雙生隅田川狂女「我が詞偏盡くしても、其の馬偏の耳偏に風が吹くとも聞き入れぬ」

うま-まはり 馬廻 (名) ㊀武家にて、大將の乗れる馬の傍。太平記十四矢矧軍「義貞は兼ねてより、馬廻にすぐれたる兵を七千餘騎囲ませて」㊁次條の略。

うままはり-ぐみ 馬廻組 (名) 主公の馬の側に扈從する騎馬の侍。もとは馬の側に供するものの總稱。

うま-み 甘味 (名) うまき度合。よき味。「うまみが少ない」

うま-むしゃ 馬武者 (名) 騎馬の武者。平治待賢門軍「敵の馬武者の遥かに先き立って落ちくるを、八町が内にて追ひつめて首を取りたり」

うま-もち 馬持 (名) ㊀馬の所有主。㊁馬のもてあつかひ方。檜櫂三上「馬持が好いゆゑ、その月毛も、一兩年ぬっきりと良くなった」㊂馬を貸して賃貸を取るを業とする人。四谷怪談「四谷の住人馬もちにて、佛孫兵衞悴小兵衞とあるが證據」

うま-や 馬屋 (名) ㊀馬を飼ひ置く小屋。厩。萬十「宇麻夜(ウマヤ)なるなはたつ駒のおくるがへ、いもがいひしをおきてかなしも」㊁街道の往來に、旅人の便利をはかり、駄馬・人夫を備へ置き、其の求めに應じて、つぎたてをなす處。うまつぎ。しゆくば(宿場)。しゆく(宿)。驛。萬廿「鈴がねのはゆま宇馬夜(ウマヤ)のつつみ井の、水を賜へな、いもがただ手よ」枕十「うまやは、なし原・ひくれのうまや」

うまや づたひ の すず 驛傳鈴 えきれい(驛鈴)に同じ。堀河百首雜「逢阪の關の關守出でて見よ、うまやづたひの鈴きこゆなり」

うまや の すず 驛鈴 前條に同じ。新六帖二「旅人の山越えわぶる夕霧に、うまやの鈴の聲ひびくなり」

うまや を さ 得厩 馬を取り扱ふ事に妙を得たり。孕常磐二「おのれは馬屋をさを得たるとや」

うまやかた-ぶぎやう 厩方奉行 (名) 厩奉行の下に屬する役。齋藤親基日記「御馬三疋被牽之中略加治左京亮御供、御厩方奉行也」

うま-やく 馬役 (名) うまのあし(馬脚)に同じ。

うまや-ごえ 厩肥 (名) 肥料の一。家畜の小屋の敷藁に、糞・尿等の混じたるもの。

うまや-ごし (名) 【植】にがな(黄瓜菜)の異名。

うまや-さぶらひ 厩侍 (名) 武家の邸宅にて、武士の詰むる室の一。遠侍の類なるべし。東鑑十六、正治二年二月二日「義盛於御厩侍問子細」

うまや-たち 驛館 (名) 宿場に設けたる家。神功紀「爲往還路驛(ウマヤタチ)」敏達紀「海石榴市亭(ウマヤタチ)」

うまやだて-の-うま 櫪立馬 (名) 厩にて養ひ上げたる上等の乗馬。

うまや-ぢ 驛路 (名) 驛(ウマヤ)のある街道。えきろ(驛路)。隣女集四「染め染まぬよはの時雨のうまやぢも、けさの紅葉の色に見えけり」

うまや-づかさ 厩司 (名) うまやのつかさ(厩司)に同じ。枕廿「うま(うまや)づかさの、みまくさ積みて侍りける家より」

うまや-づかひ 驛使 (名) 古へ公事によりて、諸國を經て往還する使。驛路の鈴を賜はりて振り行き、宿より宿に遞送せしむ。

うまや-どねり 厩舍人 (名) うまやのとねり(厩舍人)に同じ。

うまや-の-あんず 厩案主 (名) 院・攝關等の厩にて、文案を掌る職名。東鑑一、治承四年九月廿二日「御厩案主」

うまや-の-つかさ 厩司 (名) 攝政・關白の家司に屬し、厩馬の事を司る職。うまづかさ。

うまや-の-とねり 厩舍人 (名) 馬の口取などするもの。厩の中間。うまやどねり。增鏡上「御隨身・居飼・御厩の舍人まで、いかにせんと色色を盡くす」

うまや-の-べったう 厩別當 (名) 馬の事を掌る役。院司・家司及び國司の下にもあり。今昔廿「陸奥の國には、厩の別當を以て一厩に爲すにぞ」

うまや-の-をさ 驛長 (名) 宿驛の長。えきちやう(驛長)。大鏡上「明石の驛といふ所に御やどりせしめ給ひて、うまやのをさのいみじう思へるけしきを御覽じて」

うまや-ぶぎやう 厩奉行 (名) 鎌倉・室町幕府の制。厩馬を掌る役。東鑑廿一、建保元年九月十二日「有駒御覽中略三浦平六左衞門義村御厩別當爲奉行」

うま-ゆみ 馬弓 (名) きしや(騎射)に同じ。皇極紀「射獵(ウマユミ)」天武紀下「馬的」和名四「馬射 宇末由美 今案、馬射謂騎射也」

うま-よろひ 馬鎧 馬甲 (名) ㊀馬の面と頸と胴とに當てて、敵の馬を驚かすに用ふる具。多くは布に金又は革の板を縫ひ附け、或ひは紙にて作る。令義解軍防「具裝者馬甲也」明德記中「栗毛なる馬の八寸にはづみたるに、白覆輪の鞍置きて、金ぐさりの馬鎧かけてぞ乗りたり

(うまよろひ)

ける」㊁馬の平頸及び胴に當つる具のみの稱。續武家閑談「秋月居城姑所山中略亂世故、馬面・馬鎧・白轡といふ事を」

うまら 茨 (名) 【植】うばら(茨)に同じ。古への東國の方言。萬廿「道の邊の宇麻良(ウマラ)の上にはほ豆の、からまる君をはかれか行かむ」

うま-ら (副) 甘く。よく。記中「よくすにかみしおほみき、宇麻良(ウマラ)にきこしもちをせ」國栖

うまら-くつら (名) うばらぐつわ(倭蘗)に同じかるべし。宇鏡「薔蘗衛 宇麻良久豆良」

うまる 埋 (自動四) うづもる(埋)に同じ。うもる。

うまら ぬ ㊀損失を償ふを得ず。ひきあはぬ。堀川狂歌集「夏祓してもうまらぬ借錢の、淵は瀨ならぬあすか川かな」㊁つまらぬ。わりにあはぬ。おもしろくなし。膝栗毛七「いめえましい、今夜のやうにうまらねえ事はねえ」

うまる 生 產 (自動下二) 兒、母の胎より出づ。うまれいづ。出生す。出產す。誕生す。萬五「我がなかの產禮(ウマレ)出でたる、白玉の我が子ふるひは」宇津保藏開上

「うまれ給へる君をいとよく拭ひて、御ほそのを切りて」

うまれも つかぬ うまれつきでもない。天性ならぬ。辨慶物語「數多の疵を つけ、うまれもつかざる片はになし給へば」蝉丸三「生れもつかぬ盲目となりしこと」

(諺)生まれたあとのはやめ灸 時機に後れたること。曾我會稽山三「生まれた跡の早め藥、口ばかりの廣言、云ふな云ふな」

(諺)生まれぬさきのむつき定め 事をはやまりてするを嘲りいふ譬へ。釋迦如來誕生會「今の催し、徒らに生まれぬさきの襁褓定めと、國民の笑ひ種」

うまれ 生 (名) 一うまるること。拾遺物名「うまれよりひつしつくれば山にさる、ひとりいぬるに人ぞていませ」 二生まれたる土地。產地。生地。「うまれは江戸」 三うまれつき。そだち。すじやう。 狂言老武「不調法なうまれで、面目もどざらぬ」

うまれ-あがる 生上 (自動四) まさりて生まる。狂言八句「親御よりも、うまれあがらっしゃれたことでござる」

うまれ-あはす 生合 (自動四) 次條に同じ。

うまれ-あふ 生合 (自動四) 世を同じうして生まる。其の時に生まれ出づ。うまれあはす。新六帖三「同じ世にうまれあひても蜘蛛の子の、ちりぢりにこそ又別かれなめ」

うまれ-いづ 產出 (自動下) うまる(生)に同じ。萬三「我がなかの產禮出(うみいづ)たる、白玉の我が子ふるひは」

うまれ-う 右馬寮 (名) めれう(馬寮)を見よ。一右馬寮の御馬に乘りて」

うまれ-でん 右馬寮田 (名) 右馬寮の御用に充つるために、諸國の樂田等を割きて置きたる公廨田。主稅寮式「左右馬寮田中並爲不輸租田」

うまれう-の-ごけん 右馬寮御監 (名) 職名。めれうのごげん(馬寮御監)を見よ。

うまれ-おち 生落 (名) 生まれおつること。浮世風呂三「生まれ落ちから死ぬまで、生まれた土地を一寸も離れねえよ」

うまれ-おちる 生落 (自動上) 次條の口語。

うまれ-おつ 生落 (自動上) 生まれ出づ。うまる。宇津保俊蔭「うまれおつるすなはち、女おのが布のふところに抱きて」

うまれ-かはり 生變 (名) うまれかはること。轉生。甲陽軍鑑四「萬一と云ふ行人の生まれかはり、その首尾まさしく候由」

うまれ-かはる 生變 (自動四) 死したる魂、再び他のものに變はりて生まる。今鏡四「うまれかはりて、その國の守になりて」

うまれ-かへる 生返 (自動四) 生をかへて生まれ來る。宇津保藤原下「この世にへん限りは更にもいはず、後の世にもかかる中にうまれかへらんなどさへいひ契りて」

うまれ-ご 生兒 (名) うまれたる兒。釋迦如來誕生會「あのうまれ子は朔ながら、妹の敵」

うまれ-こさやう 生故郷 (名) 生まれ出でたる土地。產地。鄕里。國姓爺三「汝が母は生まれ故郷を重んじ、日本の恥ぢといふ字に命を捨てしを忘れし か」

うまれ-ざいしょ 生在所 (名) 前條に同じ。心中萬年草上「生まれ在所の名殘りさへ、親より殿を思ふぞや」

うまれ-しゃう 生性 (名) 生まれつきたる性。うまれじやう。丹波與作三「いかなる因果な生まれ性。現在わが子に馬追させ」

うまれ-じゃう 生性 (名) 前條に同じ。心中宵庚申三「冥利男に緣のない生まれじやうかと、ばかりにて」

うまれ-すぢゃう 生素性 (名) 生まれたる家すぢ。家系。井筒業平河内通三「人にさげしみ疑はるるも、生まれ素性のさもしきゆゑ」

うまれ-そこなひ 生損 (名) 人なみの人に生まれ兼ねること。又、その人。世間娘氣質二「今の世に芝居を嫌ふは、生まれそこなひといふもの」

うまれ-たち 生立 (名) うまれつき。ねびたち。天性。生得。天稟。浮世風呂三「それでも生まれ立ちのわりい野郎なら、おほっぽで遊び歩行いて、今だに役にも立つめえが」

うまれ-たて 初生 (名) 生まれて程なきこと。

うまれ-つき 生附 (名) うまれつくこと。生まれながらのさま。天性。天質。天稟。生得。平家一「幸ひは只、先世の生まれ附でこそ有るなれ」狂言三人「身共はうまれつき、片はではござらぬ」

うまれ-づき 生月 (名) うまれたる月。生月。

うまれつく 生附 (自動四) 生まれながら身につき具はる。自然に身に稟(う)く。狂言三人「身共はうまれついたる片はではなけれども」

うまれ-どき 生時 (名) 生まれたる時。

うまれ-どころ 生所 (名) 生まれたる所。砂石集三「他界の後、彼の生まれ所ゆかしく思ひ」

うまれ-どし 生年 (名) 生まれたる年。せいねん(生年)。

うまれ-なから 生乍 (名副) 生まれたるままなること。生まるるとすぐなること。天稟。狂言鬼恵「あの牛は畜生なれども、善い所(生まれたは仕合せぢや。生まれながら横座になほると申して」

うまれ-ね 生直 (名) 相場の語。毎月發會の時の最初の直段。

うまれ-び 生日 (名) 生まれたる日。誕生日。

うまれる 生 (自動下) うまる(生)の口語。

うま-ぞさ 馬長 (名) 紙鳶の御靈會などの神事に、小舍人童など、美しく飾らせて馬に乘せ、社頭の馬場を練りわたらしむるもの。扶桑略記天慶六年「ごりやう馬の馬をさき」 人事記「小舍人童令乘馬長」

うみ 海 (名) 一地球上、陸にあらざる部分にて、潮水の湛ふる處。記一「かむ風の伊勢の宇美(うみ)の」 二海洋の外、湖など廣く水の湛ふる處の稱。記一「にほ鳥の近江の宇美(うみ)に」萬三「ふせのみづ宇弭(うみ)に」 三水のたまりたるを海に擬へていふ語。「硯の海」「涙の海」

うみ つく 海片附 一方海に傍つ(う)ふ。萬三「なにはの宮は、いさなとり海片就(うみつく)て」

うみつ-みち 海道 海に沿ひたる道。崇神紀「東海(うみつ)道」

うみ のうへ 海上 かいじやう(海上)。海中。竹取「海のうへにただよへる山、いと大きにてあり」

うみ の おもて 海面 うみづら。海上。海面。枕三「海のおもてのいみじうのどかに、淺緑の打ちたるを引きわたしたるやうに見えて」

(諺)海とも山ともつかず いづれとも決著せず。

(諺)海に千年、河に千年 世の中の暗黑面に經驗を積み、老獪なるものの譬へ。諸藝袖日記「そもそも此の內儀と申すは、海に千年、河に千年、苦界を勤め」

(諺)海も見えぬに舟用意 餘りに事をはやまるを嘲る譬へ。日本振袖始「なんぞ今から、海も見えぬに舟用意」

(諺)海を山にす 無理なる事をなす譬へにいふ。浦島年代記「海を山になされうとも儘な女御樣」

うみ 生 (名) うむ(生)こと。うみたること。萬三「字美(うみ)の子の、いやつぎつぎに」

(諺)生みの親より育ての親 次條に同じ。

(諺)生みの恩より育ての恩 實の親の恩より、むしろ養育せられたる親の恩重しとの意。

うみ 膿 (名) 瘡・疵などにより、皮膚・筋肉の潰爛して出づる汁。うみしる。神代紀三「膿(うみ)沸(わき)蟲流」 醫字

うみ-あいさ (名) 【動】鳥類中、游禽類の一種。頭部及び頸の上部黑色にして、後半部は更に鉄色の光澤を有し、頭及び後頭部の羽毛長く、頸の中央部は白色、背部は暗色、上部は赤褐色に黑斑を交じふる部あり、他は黑灰にして各雲紋狀をなし、胸の上部は赤褐色に黑褐色の斑を交じへ、其の下部及び其の他の腹部全面は淡き帶赤黃色を呈し、尾羽は帶褐灰色、嘴は鮮赤色、脚も亦赤色なり。全長凡二尺許り。雌は頭部及び頸部赤褐色なり。北半球の北部に分布し、冬季、本邦・支那地方に來ふ。

うみ-あうむ 海鸚鵡 (名) 【動】鳥類中、游禽類の一種。全體黑色を呈し、頭部・頸部・側部は色やや薄く、胸部及び腹面全體は白色、尾は黑色を呈し、嘴は銅赤色を帶び、基部やや白し。脚は黑色の蹼を具ふ。全長凡そ八寸。繁殖期にあらざる際は、頸・咽喉及び頸の上部も白色となる。北太平洋に產し、本邦、千島群島にも之を見る。

うみ-あつむ 生集 (他動下) 子を多く生む。宇津保俊蔭「よくもうみあつめ給ひつるみ子たちかな」

うみ-いだす 生出 (他動四) 生みて出だす。うむ。宇津保藤原「みめかたちよりも、うち出だしたるさえ、うみいだしたる子などを見るに」

うみ-う 海鵜 (名) 【動】う(鵜)の異名。

うみ-うさぎ 海兎 (名) 【動】あめふもし(雨降)の異名。

うみ-うし 海牛 (名) 【動】軟骨動物、腹足類の一種、裸鰓類に屬す。體は小判形にして、腹面は筋肉質の足となり、背面には著しき二本の觸角及び後部に花彩狀の鰓を具ふ。彩色は種種にして、往往美麗なるものあり。其の卵塊は索麵狀をなす。清人は之を海粉と稱し、食用に供すといふ。本邦、各地の淺海に產す。

うみ-うそ 海獺 (名) 【動】あしか(葦鹿)の異名。

うみ-うちは 石帆 (名) 【動】腔腸動物、珊瑚類に屬す。本邦、各地の海濱にあり。やや堅き角質の骨格を有し、網狀に平たく擴張すること團扇の如し。

うみ-うちほ (名) 【植】うみれいしの異名。

うみ-うなぎ (名) 【動】あなご(穴子)の異名。海鰻

うみ-うま 海馬 (名) 【動】たつのおとし(龍落子)の異名。

うみ-うめ 熟梅 (名) 熟したる梅の實。金葉雜上「葉隱れにつはるると見えしほどもなく、こはうみ梅になりにけるかな」

うみ-うり 熟瓜 (名) うみたる瓜。熟したる瓜。一「うみ瓜が熟柿を啗ふ」

うみ-うを 海魚 (名) 海に產する魚。(川魚の對)

うみ-えら (名) 【動】腔腸動物、珊瑚類の一種。外觀羽狀を呈し、長さ二三寸乃至數寸。中軸角質にして、周圍に柔軟なる肉あり。下部は枝無くして海底泥沙中に

(らえみう)

插入し、上部は左右に短き枝を出だし、枝の上面に多數の水螅を著く。本邦、各地の海中に產し、或る種類は美なる燐光を放つ。

うみ-おちる 生落 (自動上) うまれおつ(生落)に同じ。

うみ-おとす 生落 (他動四) 兒を產む。分娩す。竹取「つばくらめは子うまんとする時は、尾をささげて七たびめぐりてなん、うみおとすめる」

うみ-が (名) 海邊。記三「宇美賀(うみが)ゆけば腰なづむ、おほかはらの植草」

うみ-がき 熟柿 (名) 熟したる柿の實。散木集三「心してこのみもをらん、夕されば世をうみがきに風吹くなり」

うみ-がた 海形 (名) 海上の景に當りたるもの。宇津保嵯峨「左大將殿おほいなるうみがたをして」

うみ-がつき 產月 (名) うみづき(產月)に同じ。臨月。神代紀三「孕月(うみがつき)已滿、產期方急」 榮華初期「かの承香殿の女御うみがつきも過ぎさせ給ひて、いとあやしく音なければ」

うみ-かは 海川 (名) 海と川と。河海。

うみ-がめ 海龜 (名) 【動】あをうみがめ(青海龜)の異名。和名七龜。一名、鷲字加米

うみ-がも 海鳧 (名) 【動】うみがらす(海烏)の異名。

うみ-がらや (名) 【植】をぎ(荻)の異名。

うみ-がらす 海烏 (名) 【動】游禽類に屬する鳥。體形むぐりに似て鳥より大きく、嘴は細くしてやや長く先尖る。脚短くして趾間に蹼を有す。羽毛は黑褐色なれども、冬には白色部大に加はる。我が國にては北海道及び千島の沿岸に產ず。うがも。うみがも。

うみ-ざき (名) 【植】ごんずる(野鴉椿)の異名。

うみ-ずく 海菊 (名) 【動】軟體動物、鳥賊類の一種。殼質厚くほぼ圓形をなし、凡そ六條の強き放射肋を具へ、各肋上に數箇の長き突起を出だし、肋間には密に大小の放射脈を刻し、之に鱗狀の鋭き小突起を密生す。頂部附近は淡朱色をなし、緣部に至るに從ひ漸く鮮朱色を呈す。內面は白色に微紅を帶び、斜めに見る時は美なる紺紫色なり。全長凡一寸五分。珍貴なる種類なり。本邦、西南海に產す。

うみ-さじ 海雉 (名) 【動】しちめんてう(七面鳥)の異名。

うみ-ざし 海岸 (名) 海に沿ひたる地。かいがん。

うみ-きは 海際 (名) 海のほとり。うみべ。海邊。謠曲「いづくともなき海ぎはや、浦なる網に著きにけり」

うみ-くさ 海草 (名) 海中の岩石などに生ずる草の總稱。かいさう。

うみ-くちなは 海蛇 (名) 【動】うみへび(海蛇)の異名。

うみ-ぐも 海蜘蛛 (名) 【動】節足動物に屬すれども、分類上の位置未定なり。體の長さ二三分より一寸餘りに達するものあり。全體やや圓筒狀にて、淡黃又は褐色を呈す。前端に口器・觸鬚等を具へ、脚は四對ありて細長く、末端に爪を有す。腹部は甚だ小さく、無脚にて小突起に過ぎず。海藻・岩石等の下に棲息す。

(もぐみう)

うみ-くわじ 海火事 (名) 海上にて、日光が雲に反射して、空も海も燃ゆる如く赤く見ゆること。

うみ-けむし 海毛蟲 (名) 【動】環蟲類中、毛足類、うみけむし科の一種。體の長さ二三寸乃至四五寸。形長卵形にて扁平。白色の長き剛毛を表面に多く生じ、其の狀けむしの如し。日本海の各所に產す。

うみ-こ 海子 (名) 鮫皮の類違ひの一。

うみ-とく 海石 (名) うみだか(海高)に同じ。

うみ-ごし 海越 (名) 海を隔てること。謠曲「海ごしに見えてぞ向かふ鏡山」 遊遊院家集「波風のひびきは爰も夕立の、空こそこゆれ海ごしの山」

うみ-ごめ (名) 【植】こうぼふむぎ(節草)の異名。

うみ-ざうめん 海索麵 (名) 【植】紅色藻類、うみざうめん屬の海藻。體は單一なる長き紐狀、二枝を有することあり。長さ四五寸、徑一分に及ばず。全體赤紫色にして、質柔軟なり。我が國・各地淺海の岩石上に叢生す。食すべし。

うみ-さち 海幸 (名) 海の獲物。漁りの利得。記上海佐知(うみさち)母、己之佐知佐知」

うみ-しか 海鹿 (名) 【動】あめふらし(雨降)の異名。

うみ-しじみ 海蜆 (名) 【動】蜆貝の一種。海に產するもの。介殼は黑褐色なるものと茶褐色なるものとあり。

うみ-しだ 海羊齒 (名) 【動】海百合類の一種。體驅は甚だ小さく、周圍に分節の腕五本を出だす。各腕は又多くに分岐して小枝となる。小枝は更に小枝を列生するため、外觀羽毛の如し。海產にして、幼時は有柄なるも、後に無柄となる。こまち。

うみ-しる 膿汁 (名) うみ(膿)に同じ。靈異記「膿(うみ)和名三膿(國字考)之疽(字考)之疽(字考)汁也」

うみ-す 產巢 (名) 子を產むもの。母胎。松風村雨東帶鑑(今樣)「三人までの產み巢とは、難じて言はば子過ぎ腹」

うみ-すけ 海鱸 (名) 【植】すがもの異名。

うみ-すずき 海鱸 (名) 【動】すずきの海に產するもの(かはすずきの對) 大草家料理書「海鱸は汁にするは上也。さしみは中也」

うみ-すずめ 海雀 (名) 【動】【一】固頸類中、硬皮類に屬する魚。鱗は堅固にして、頭に二角を有す。いしふぐ。かいぎう。すずめふぐ。【二】海禽類に屬する海鳥。嘴は尖りて翼は短し。前三趾に蹼を張り、羽毛は一般に黑色にて、下部は白色なり。冬期は南方の沿岸に來たれども、蕃殖は北海道以北に於いてす。

うみすひ-いし 膿吸石 (名) 圓く扁き小石。膿を吸はしむるに効ありといふ。

うみ-せきしゃう 海石菖 (名) 【植】しばた(芝菜)の異名。

うみ-せん 海千 (名) 〔海に千年、河に千年の略〕年功・經驗を積みたること。又、その人。(多く惡事に云ふ)

うみ-そ 績麻 (名) 績(う)みたる麻糸。

うみ-そこなふ 生損 (他動ハ四) 安らかに產まず、字治拾遺「彼れが子をうみそこなひて死して」

うみ-だか 海高 (名) 江戸時代の納稅の一種。漁獵及び海草等の收穫高を計りて石高に結び、米或ひは金銀を納めしむること。うみこく(海石)。地方凡例錄「海高」

うみ-たけ 海茸 (名) 【動】軟體動物、鮑・蝦類の一種、かもめがひ科に屬する貝。殼は貧海く且つ脆く、白色にして兩端開き、前部に鏈狀の彫刻あり。長さ一尺餘りの黑色の水管を具ふ。我が國・中國・九州の泥海に產す。水管は乾製して鬻の代用に供し、又煮て食す。味ひ美なり。料理物語「海茸は、あへもの・さしみ」

うみ-だす 生出 (他動サ四) 【一】うみいだす(生出)に同じ。【二】かせぎて財貨を造り出だす。

うみ-だて 績立 (名) 績む樣子をなすこと。狂言記「海ごしに見えてぞ向かふ鏡山」 遊遊院家集「波風のひびきは爰も夕立の、空こそこゆれ海ごしの山」

うみ-ごめ (名) 【植】こうぼふむぎ(節草)の異名。

うみ-ざうめん 海索麵 (名) 【植】紅色藻類、うみざうめん屬の海藻。體は單一なる長き紐狀、二枝を有することあり。長さ四五寸、徑一分に及ばず。全體赤紫色にして、質柔軟なり。我が國・各地淺海の岩石上に叢生す。食すべし。

うみ-さち 海幸 (名) 海の獲物。漁りの利得。記上海佐知(うみさち)母、己之佐知佐知」

うみ-しか 海鹿 (名) 【動】あめふらし(雨降)の異名。

うみ-しじみ 海蜆 (名) 【動】蜆貝の一種。海に產するもの。介殼は黑褐色なるものと茶褐色なるものとあり。

うみ-しだ 海羊齒 (名) 【動】海百合類の一種。體驅は甚だ小さく、周圍に分節の腕五本を出だす。各腕は又多くに分岐して小枝となる。小枝は更に小枝を列生するため、外觀羽毛の如し。海產にして、幼時は有柄なるも、後に無柄となる。こまち。

うみ-しる 膿汁 (名) うみ(膿)に同じ。靈異記「膿(うみ)和名三膿(國字考)之疽(字考)汁也」

うみ-す 產巢 (名) 子を產むもの。母胎。松風村雨東帶鑑(今樣)「三人までの產み巢とは、難じて言はば子過ぎ腹」

うみ-すけ 海鱸 (名) 【植】すがもの異名。

うみ-すずき 海鱸 (名) 【動】すずきの海に產するもの(かはすずきの對) 大草家料理書「海鱸は汁にするは上也。さしみは中也」

うみ-すずめ 海雀 (名) 【動】【一】固頸類中、硬皮類に屬する魚。鱗は堅固にして、頭に二角を有す。いしふぐ。かいぎう。すずめふぐ。【二】海禽類に屬する海鳥。嘴は尖りて翼は短し。前三趾に蹼を張り、羽毛は一般に黑色にて、下部は白色なり。冬期は南方の沿岸に來たれども、蕃殖は北海道以北に於いてす。

うみすひ-いし 膿吸石 (名) 圓く扁き小石。膿を吸はしむるに効ありといふ。

うみ-せきしゃう 海石菖 (名) 【植】しばた(芝菜)の異名。

うみ-せん 海千 (名) 〔海に千年、河に千年の略〕年功・經驗を積みたること。又、その人。(多く惡事に云ふ)

うみ-そ 績麻 (名) 績(う)みたる麻糸。

うみ-そこなふ 生損 (他動ハ四) 安らかに產まず、字治拾遺「彼れが子をうみそこなひて死して」

うみ-だか 海高 (名) 江戸時代の納稅の一種。漁獵及び海草等の收穫高を計りて石高に結び、米或ひは金銀を納めしむること。うみこく(海石)。地方凡例錄「海高」

うみ-たけ 海茸 (名) 【動】軟體動物、鮑・蝦類の一種、かもめがひ科に屬する貝。殼は貧海く且つ脆く、白色にして兩端開き、前部に鏈狀の彫刻あり。長さ一尺餘りの黑色の水管を具ふ。我が國・中國・九州の泥海に產す。水管は乾製して鬻の代用に供し、又煮て食す。味ひ美なり。料理物語「海茸は、あへもの・さしみ」

うみ-だす 生出 (他動サ四) 【一】うみいだす(生出)に同じ。【二】かせぎて財貨を造り出だす。

うみ-たて 績立 (名) 績む樣子をなすこと。狂言記「海ごしに見えてぞ向かふ鏡山」 遊遊院家集「波風のひびきは爰も夕立の、空こそこゆれ海ごしの山」

うみ-たなご 海鯽 (名) 【動】硬鱗類、うみたなご科に屬する魚。體の長さ六七寸、大なるは尺に達す。稍圓形にして側扁、口は小さく、鱗も小圓形なり。背は鋼青色にて、腹は銀白色。我が國の沿海に產す。

うみ-ち 膿血 (名) 【一】膿と血と。東海道名所記「佛のお類に鏈の燒寢つかせ給ひし、膿血の流れ給ひしとなり」【二】血の混じたる膿汁。

うみ-ち 海地 (名) 海に沿ひたる地。卜養狂歌集「卜養江戸築地の海邊にて屋敷を下だし賜はる時、ある人、卜養は本遺とこそ思ひしか、うみちをとるは外科が望みか」

うみ-ぢ 海路 (名) 海上の舟の航路。ふなぢ。萬三「いさなとり海路(うみぢ)に出でて、あへぐつつ我が漕ぎゆけば」

うみ-づき 產月 (名) 妊娠して、子を產むべき月。うみがつき。臨月。源氏冷泉節「產み月までは法眼に預け置き、其の方にて平產させ」

うみ-つく 生附 (他動カ四) 【一】卵などを生みて物に附著せしむ。【二】生みて其の性を受けしむ。

うみ-つける 生附 (他動カ下一) 前條の口語。丹波與作「瓢の道具・手足まで、かかは斯うは產みつけぬ」

うみ-つ-ぢ 海路 (名) うみぢ(海路)に同じ。萬三「海津路(うみつぢ)のなぎなむ時も渡らなむ、かくたつ波に船出すべしや」

うみ-っぱた 海端 (名) うみばた(海端)の訛り。

うみ-つばめ 海燕 (名) 【動】ひとて(海盤車)の異名。

うみ-つむぎ 績紡 (名) 麻を績み絲をつむぐこと。心中二腹帶「うみつむぎなら、人あひなら」

うみ-づら 海面 (名) 【一】海の上。海のおもて。かいじやう(海上)。かいめん(海面)。勢語「伊勢・尾張のあはひの海づらをゆくに」【二】うみべ。海邊。源氏「深き山里、世ばなれたる海づらなどに、はひかくれぬかし」

うみ-つる 生連 (他動ラ下二) うみて引きつる。宇津保俊蔭「いかめしき雄熊・雄熊、子をうみつれて棲むうつぼなりけり」

うみ-て 海手 (名) 海の方。浦島年代記「隼人は山手、平馬は海手、急げ急げと追ひ立てやり」

うみ-てふてふ 海蝶 (名) 【動】軟體動物、翼足類の一種。其の形蝶類の飛翔するに似たる故に名づく。一說、とびのうを(飛魚)の異名ともいふ。

うみ-てんぐ 海天狗 (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種、總鰭類に屬する魚。全體骨板にて被はれたる、身長三寸許りのもの。胸鰭大きくして廣ぐれば翼の如し。多くは熱帶の海に產す。

うみ-どうがめ (名) 【動】かぶとがに(兜蟹)の異名。

うみ-ときか (名) 【動】珊瑚類、あるしをなり類の一種。群體生活をなし、全部軟骨やうの堅さにて、內に石灰質の小骨片を散在す。各箇體の觸手を擴げたるものは美し。淺海・深海に產して、他物に著く。

うみ-どぢやう 海泥鰌 (名) 【動】ぎんばうの異名。

うみ-とらのを (名) 【植】褐色藻類、羊栖(ヒジキ)屬の海藻。體は紐狀にして、羽狀に繁く分枝し、爲めに全形やや指狀又は鼠尾狀の輪廓を呈す。黑褐色にて、大なるものは一二尺に達することあり。我が國・各地の淺海岩礁上に自生す。とらのを。ねずみのを。

うみ-とり (名) 【動】ながにし(香螺)の異名。

うみ-どり 海鳥 (名) 【動】かいてう(海鳥)に同じ。

うみ-ど-り (名) 【動】うみほほづき(海酸漿)の異名。

うみな (名) 古語。をみな(女)に同じ。名義抄「嫉(ウミナ)」

うみ-なか 海中 (名) 海のなか。海上。土佐日記「京の子の日のこといひ出でて、小松もがなといへど、海なかなれば難しかし」

うみ-ながし 產流 (名) りうざん(流產)に同じ。增鏡「御うみながしにて、俄かにうせさせ給ひけりとぞ聞こえし」

うみ-なり 海鳴 (名) 暴風雨・海嘯などの爲めに、遠方の海上に起こる音響。

うみ-にな 海蛯 (名) 【動】いそにな(磯蛯)の異名。

うみ-にら 海蒜 (名) 【植】しばな(芝菜)の異名。

うみねこ 海猫 (名) 【動】鳥類中、游禽類の一種。全體鷗(カモメ)に類す。頭・頸及び尾翼並びに體の下面は白色にして、翼は灰黑色を帶び、肩部其の他は白黑の斑條を交じへ、嘴は帶綠黃色にして先端赤色、脚及び趾は黃色にして、微かに綠色を帶ぶ。全長凡そ一尺五六寸。雌はやや小なり。鳴く聲やや猫に類す。廣く東部亞細亞に分布し、本邦にも產す。

うみ-の-おい 海老 (名) 〔海老の字の直譯〕【動】えび(蝦)に同じ。

うみ-の-おさな 海老 (名) 【動】前條に同じ。續詞花集「世の人はうみのおきなといふめれど、まだはたちにも足らずぞ有りける」

うみ-の-おや 生親 (名) 己れを生みたる親。實の親(養ひ親などの對) 五十年忌歌念佛「生みの親の我れらより、清十郎めが命の親」

うみ-の-かみ 海神 (名) 海を司る神。わたつみの神。かいしん(海神)。神功紀「陽侯(ヨウコウ)峰浪、海中大魚悉浮挾(ハサ)船」 土佐日記「船には紅濃くよときぬ著ず。それは海の神におぢてといひて」

うみ-の-こ 生子 (名) 【一】己れが生みたる子。釋迦如來誕生會「橋婆彌は甥にして、窮うみの子同然なり」【二】子孫。神代紀上「子孫(ウミノコ)八十連屬」 萬三「宇美乃古(ウミノコ)のいやつぎつぎに」

うみ-の-さち 海幸 (名) うみさち(海幸)に同じ。神代紀上「海幸(ウミノサチ)毛左知(ケサチ)」

うみ-の-ちち 生父 (名) 己れを生みたる父。實の父。實父。

うみ-の-つき 海月 (名) 〔海月の字の直譯〕【動】くらげ(海月)に同じ。夫木「海月。わが戀は海の月をぞ待ちわたる、くらげの骨にあふ夜ありやと」 後葉集「くらげを海の月といふよし、人の申しけるを聞きて」

うみ-の-はは 生母 (名) 己れを生みたる母。實の母。實母。冥途飛脚「故郷の土に身を成して、生みの母の墓所一所に埋まれ」

うみ-の-ほか 海外 (名) 外國。かいぐわい(海外)。夫木「みことのり道にそむかぬ故とや、海のほかにもまもりあるらん」

うみ-の-みやこ 海都 (名) りゆうぐう(龍宮)に同じ。草根集「琴れてはなどあはざらん、人住まぬ海の都のありかなりとも」

うみばうず 海坊主 (名) 【一】(動)し

うみ-ひば 海檜葉 (名) 【動】蛭腸類中、ひどろ蟲類の一種。海中の岩石・海草等に附著して、小形の檜葉の如きもの。其の骨格は連續分岐し、各箇の小蟲はこれに著棲す。

うみ-ひば (名) 【植】紅色藻類、珊瑚藻(サンゴモ)屬の海藻。體は紅紫色、多量の石灰分を含有するを以て、硬くして脆く。體の下部は節狀にして扁平、羽狀に分枝す。他の各節は楔形扁平なり。我が國・各地の淺海に自生す。

うみ-ひらめ 海比目魚 (名) 【動】ひらめ(比目魚)の異名。

うみ-ひる 海蛭 (名) 【動】蛭の一種。體の長さは通例二寸許りにて綠色なり。全面に疣狀突起を列生し、體の前部は細く、後部は太く、又前後の兩端に吸盤ありて、えび・さめ等に吸ひ著く。

うみ-ひるも (名) 【植】水鼈朴、うみひるも屬の草本。莖は纖長、水底を匍匐し、各節の下面より根を垂生し、上面よりは一對の葉を出だし、其の基部には二枚の鱗片を具ふ。葉は長楕圓形または楕圓狀にして披針形、全緣鈍頭、質薄し。花は單性、雌雄同株なり。我が國・暖地の淺海に自生す。

うみ-ひろぐ 生廣 (他動カ) 子を多くやうがくばう(正覺坊)の異名。【一】海上にあらはるといふ變化。

うみ-はた 海端 (名) うみべ(海邊)に同じ。

うみ-はと 海鳩 (名) 【動】海雀と同屬の鳥にして、形狀・羽色共に海鳥に似てやや小さきもの。太平洋の北部に產す。

うみ-ひこ-ひ 海緋鯉 (名) 【動】ひめぢ科に屬する魚。全體赤色にして、一條の黃金色の筋あり。我が國の南海に產す。

うみ-ひら 海枇杷 (名) 【動】海鼠類中、海鼠目の海鼠。體は紅紫色、多量の石灰分を含有するを以て、硬くして脆く。體の下部は節狀にして扁平、羽狀に分枝す。他の各節は楔形扁平なり。我が國・各地の淺海に自生す。

うみ-ひらめ 海比目魚 (名) 【動】ひらめ(比目魚)の異名。

うみ-ひる 海蛭 (名) 【動】蛭の一種。體の長さは通例二寸許りにて綠色なり。全面に疣狀突起を列生し、體の前部は細く、後部は太く、又前後の兩端に吸盤ありて、えび・さめ等に吸ひ著く。

うみ-ひるも (名) 【植】水鼈朴、うみひるも屬の草本。莖は纖長、水底を匍匐し、各節の下面より根を垂生し、上面よりは一對の葉を出だし、其の基部には二枚の鱗片を具ふ。葉は長楕圓形または楕圓狀にして披針形、全緣鈍頭、質薄し。花は單性、雌雄同株なり。我が國・暖地の淺海に自生す。

うみ-ひろぐ 生廣 (他動カ) 子を多く

生む。字津保中蔵「又今一つのくぼありて、はちすの如くうみひろぐめり」

うみ-ひろげる　生廣（他動下）前條の口語。女殺油地獄「蚊の子ほどうみひろげ、所帶じみて」

うみ-ぶくれ　海腹（名）かいせう（海嘯）に同じ。

うみ-ぶね　海船（名）海上を行く船。（河船の對）

うみ-べ　海邊（名）海のほとり。うみばた。うみべた。かいへん。海濱。海畔。萬三「潟邊よりわがうちゆかば、宇美邊（ウミ）より廻（もこぬか、あまの釣船」

うみ-べた　海邊（名）前條に同じ。うみばた。神代紀下「遊幸海邊（ウミ）見」一美人」古今雜三「大方はわが名もみなと漕ぎでなん、世をうみべたにみるめ少なし」海畔・濱（ハマ）

うみ-へちま　海絲瓜（名）【動】海綿動物中、硅角海綿類の一種。本邦、沿海に多く生ず。生時は淡紫色を帶び、乾燥する時は淡黄色を呈して強直なり。わたとり。

うみ-へび　海蛇（名）【動】爬蟲類中、蛇類の一種。體の長さ三尺内外、尾は割合に短く、且つ縱扁にして游泳に適す。背面は帶黄緑色、腹面は淡黄色を呈す。有毒蛇にして毒牙を有し、海中の小動物を捕食す。本邦、暖海に産す。うみくちなは。

うみ-ほっす　海拂子（名）【動】はっがひ（拂子貝）の異名。

うみ-ほほづき　海酸漿（名）【動】ながにし貝の卵巣。形長刀また巾著に似たり。孔を穿ちて女兒の口中に含み鳴らすもの。いそほづき。うみどり。

うみ-まつ　海松（名）■海邊の松。源雜藝「うみまつや時ぞともなき陰にゐて、何のあやめもいかにわくらん」■【動】腔腸動物、八射珊瑚類の一種。形狀松に似て小形。骨格は角質なり。色黑し。裝飾具に製せらる。くろさんご。■【植】海松の字の直譯」みる（海松）に同じ。土佐日記「おぼつかな今日は子の日かあまならば、うみ松をだにひかましものを」

うみ-みず　海蚯蚓（名）【動】蠕形動物、環蟲類の一種。貧毛類に屬す。體はみみずの如く圓筒狀にて色白く、やや淡紅を帶び、體壁は多少透明にして、背部の前後に走れる血管は一條の鮮紅色を呈す。長さ凡三寸、幅二分に達し、多數の環節より成り、各節に對をなせる八筒の剛毛を有す。本邦、陸前國松島灣等、干滿兩潮線間の朽腐せる大葉藻等の中に棲息し、釣魚の餌とす。

うみ-も　海藻（名）海の藻。宇津保蔵「底なるや見るにかくるるうみもをばえとこそかづかれ目にさはりつつ」

うみ-やなぎ　海柳（名）■【動】腔腸動物中、八射珊瑚類の一種。鞭狀を呈し、二尺許りに達し、角質の中軸を有す。下部は柄部にして、大部は羽毛狀をなし、各羽枝に相當する部に多數の水螅體を有すること、うみえらに異ならず。我が國各地の海底に産し、中軸に束ねて杖となすべし。■【植】あまも（大葉藻）の異名。

うみ-やま　海山（名）■海と山と。萬三「海山（ウミヤマ）も隔たらなくに何しかも、めごとをだにもこことたともしき」竹取「海山のみちに心を盡くしはて、み石のはちの涙流れき」■海の如く深く、山の如く高きこと。恩惠などの深高なるにいふ。狂言「扨も扨も、いつぞやの忝なさ、うみ山うみ山」雙生隅田川「誠ある海山の志、生を替へても忘れはせじ」

うみゆり　海百合（名）【動】棘皮動物、海百合類の一種。外形うみしだに似たり。長さ二尺餘に達するものあり。終世、柄によりて海底に立つ。とりのあし（鳥脚）。

（うみゆり）

うみゆり-るゐ　海百合類（名）【動】棘皮動物の一綱。體は中央部及び二分又は數分せる五本の腕より成り、全體骨片にて蔽はる。皆一時又は永久に柄を有す。海百合（ウミユリ）・うみしだ等之に屬す。

うみ-れいし（名）【植】褐色藻類、うみれいし屬の海藻。體は扁平にして厚き膜質なり。下部はやや硬く、細き根狀をなして他物に附著し、上部は漸次扇狀に擴張し、數多の同心圓的生長線を有す。全體褐綠色なれども、海中にありては一種美しき碧色の光輝を見ることあり。我が國、各地の淺海岩礁の間に自生す。うみうちは。じやのめぐさ。みみたけ。

うみ-わた　海綿（名）【動】かいめん（海綿）に同じ。

うみを　績麻（名）績（ウミ）みたる麻。萬三「少女らが績麻（ウミヲ）のたるうちそかけ、うむ時なしに戀ひわたるかも」

うみ-をも　海類（名）【動】らっこ（獺虎）の異名。

うみをなす　如績麻（枕）績みたる麻の如く長しといふより、ながにつづけていふ。萬三「績麻成（ウミヲナス）ながとの浦に」

うむ　〜有無（名）■あることとなきこと。諸經題「佛は中庸有無中道を離れて、人を濟度の方便」■有（ウ）と訳。と。何とか、かとか。艶狂劇本地「有無の返事を聞かせてたべ」

うむを いはせず　承知か不承知かをも答へしめず。むりやりに。

うむ　熟（自動四）■果物成熟す。みがいる。つゆ。熟す。今葉「うみたる梅をおこせたりければ」■膿物熟して膿（ウ）をもつ。化膿す。和名「膿（ウ）字又云、猪汁也」

うん だともつぶれたともいはず　膿物が、膿みたりとも、潰れたりともいはず。一言も吾沙汰なし。

うん だものがつぶれたともいはず　前條の轉。盛屋道滿大内鑑「嫁入りの催促は度度なれども、膿んだものが潰れたとも、一言の返答せず」

うむ　倦（自動下）厭る。いやになる。疲る。弱る。退屈す。萬三「少女らが績みをのたりうちそかけ、績（ウミ）時なしに戀ひわたるかも」勢語「なにはづを今朝こそみつの浦ごとに、これやこの世をうみわたる舟」

うむ　生（他動四）■胎児を産す。分娩す。記「爲（ウ）生（ウ）成國土」竹取「そこらのつぼくらめ、子うまざらんやは」■ふやす。生ず。增殖す。「貯金が利息をうむ」

（諺）生んだ子より抱いた子　養ひたる子は生みたる子よりもかはゆきこと。

うむ　績（他動四）麻又は苧（ウ）を細くさきて、長く合はせ繋ぐる。萬三「麻をらををけにふすさに宇麻（ウ）すとも、明日きせざめや、いきせをどこに」名義抄「績（ウム）」

うむ　埋（他動下）■うづむ（埋）に同じ。古語拾遺「美曾宇女（ウ）」宇津保吹上「山を扇し海をうめても」名義抄「埋（ウム）」■沟に水をさしてぬるくす。紫式部日記「御湯まゐる中宮命婦はりま取りつぎて

うめつつ」

うむかし（形シク）古語。よろこぶ。賞愛す。德とす。おむかし。續紀「其人乃宇武何志（ウムカシ）事、歎事（ウムカシ）遂不得忘」

うむがしむ（自動四）うむがしと思ふ。おむがしむ。續紀「伊蘇（ウ）奈宇（ウ）牟賀（ウ）美（ウ）」忘不給（ウムガシ）自」

うむ-かつぎ　産月（名）うみづき（産月）に同じ。神功紀「適當皇后之開胎（ウムカツギ）」

うむぎ　蛤（名）【動】古語。はまぐり（文蛤）の類の稱。景行紀「仍得白蛤（ウムギ）」和名抄「海蛤（ウムギ）」

うむぎ（名）【植】いかりさう（淫羊藿）の異名。

うむぎ-な（名）【植】前條に同じ。

うむく　呻吟（自動四）うめく（呻吟）に同じ。今昔「ねんびをするやうに打ちうむきて、足をはさみ」

うむし-やき　蒸燒（名）むしやき（蒸燒）に同じ。大草家料理書「燒樣の事。下にぬかを敷き上にもかけて、うむしやきにして」

うむす　蒸（他動四）古語。むす（蒸）に同じ。うもす。宇鏡「懷字胡頌反、」宇鏡集「體（ウムスウイイヒ）」

うむ-のめつき　有無目附（名）能樂の語。有の目附は無き物を有りと見立ててすること。高砂の曲にて、相生の松は舞臺には無けれども、橋掛りより松の有る所と見定めてする類。無の目附は有るものを無しと見立ててすること。百萬の曲に、狂亂の態にて子の前を通りながら見落とす類。

うめ（名）みめ（見目）の訛り。「うめよし」

うめ　梅（名）■【植】薔薇科、櫻（ウメ）屬の落葉喬木。幹の高さ二三丈、著しく分枝す。葉は卵形にして鋭頭、鋸齒を有す。花は早春葉に先き立ちて開き香氣あり。元來白色單瓣の五瓣花なれども、淡紅・紅・紫等の色を呈し、又重瓣なるもの等あり。品種頗る多く、三百餘種に上ぼる。果實は核果にて、初夏に至りて熟し、生食すべく、又梅干として必須の副食物となる。材は種種の小細工に用ひらる。支那の原産なれども、野生のものを見ず。古來本邦各地に栽培せらる。かうぶんぼく。かざみぐさ。かぜまちぐさ。かはぐさ。はつなぐさ。このはな。つげぐさ。にほひぐさ。うなぐさ。■うめがさね梅襲の略。雅亮裝束抄「梅のかりぎぬには、縹ひにも著るべし」榮華根合「五節には女房、梅どもに濃き打ちたる青ずりの裳・からぎぬなど著させ給へり」■梅の樹になりたるみ。梅のみ。枕「おなうなの、梅くひてすがりたる」回紋所の名。うめのはな・うらうめ・むかふうめ

（うめのはな）　（うらうめ）　（むかふうめ）

うめ　を　さぐる　探梅　梅の花のある處を尋ねて行く。

（諺）梅は食ふとも核食ふな、中に天神寝でござる。　生梅のたねに毒あればいふ。

うめ（副）古語。うべ（宜）に同じ。神武紀「謂（ウメ）爲宜云字」

うめ-あな　埋穴（名）物を埋むべき穴。井筒榮平河内通「死骸をすぐによい埋め穴と、井戸へすっぷり」

うめ-あはす　埋合（他動四）損と得とを平均す。損益を差除す。

うめあはす　埋合（名）うめあはすること。損益の平均。

うめあはせる　埋合（他動下）うめあはす。埋合の口語。

うめ-がえ　梅枝（名）梅の枝。萬八「ふふめりといひし梅枝（ウメガエ）今朝ふりしあわの雪にあひて咲きぬらむかも」

うめがえ-さう　梅枝草（名）【植】ふうろさう（徳牛兒草）の異名。

うめがえ-でんぶ　梅枝田麩（名）でんぶ（田麩）の異名。一說、餌を細かく削りて田麩の樣に調理したるもの。梅が香。寛天見聞記「長谷川町にうめがえでんぶ・源氏茶漬」

うめ-が-か　梅香（名）■梅の花のかを。古今春上「梅がかを袖にうつしてとどめてば、春はすぐともかたみならまし」■ねり香の名。■前條に同じ。

うめ-がき　梅垣（名）梅の木の、垣の如く立ちつらなりたるもの。爲尹千首冬「今ははや春の隔てや程近き、花になりゆく庭の梅垣」

うめがさ-さう（名）【植】鹿蹄草科、うめがささう屬の多年生草本。莖の高さ二乃至四五寸。葉は卵狀披針形、鋭頭にして細鋸齒を有す。花は六月頃花莖上に單生し、白色にして下向す。我が國、各所の山地に自生す。きぬがささう。

うめ-がさね　梅襲（名）裏の色目の名。表は濃き紅、裏は紅梅。（晒花染）上白き紅梅匂ひて紅、濃き薄芳に濃き單又は青き單。（顯宗紀）十一月より二月までの間用ふ。增鏡「梅がさねの浮織物の半臂」

うめ-がへし　梅返（名）紅梅色の染物。元祿頃多く羽織の裏地に用ふ。若風俗「梅がへしの給羽織に、胸だかに紐をつけ」

うめかん　梅羹（名）羊羹の一種。梅の實をまぜて製したるもの。

うめき　埋木（名）障間に木を埋むること。

うめきごゑ　呻吟聲（名）うめく聲。うなりごゑ。著聞「牛夜毎に必ずうめく事侍りけり。そのうめき聲ただにあらで、物を云ふやうにきこえければ」

うめきざいく　埋木細工（名）種種の木にてうめきをして、花鳥・人物などの形を作り出だす細工。よせきざいく。

うめく　呻吟（自動四）「ううと聲立つる義」■苦しみて大息をつく。歎きて聲を發す。源枕「うちうめかれて、夜深う出で給ひぬ」■苦しみて詩歌を詠み出づ。苦吟す。枕「うめきずんじつる歌も、いとあさましくかひなく」大鏡「世繼もいたく感じて、あまたたび誦してうめきて、かへし」■わめく。をめく。うなる。著聞「牛夜毎に必ずうめく事侍りけり」

うめく　ほど　の　かね　あまたの金錢。女殺油地獄「紙入中間中にうめく程と金入れておいた」姫山姥「うめくほど金まうけて」

うめ-くさ　埋草（名）■缺けたる部分を補ひ、又明きたる處を充たす料。「損のうめくさ」「時間のうめくさ」■城責の時、敵城の堀を塡むるための草。太平記「堀・溝をうめん爲めに、うめ草三萬餘荷を國中の人夫に持ち寄せさせ」■牛などの飼料の爲めに、穴藏などに貯藏せる飼草。

うめ-ごよみ　梅曆（名）梅花のこと。山中にては梅の咲くを見て春を知るよりいふ。小町踊「奏するやけふ早咲の梅曆」

うめ-ごろも 梅衣 (名) 菓子の名。牛皮飴の中に餡を包み、其の上を紫蘇にて巻きたるもの。

うめ-ざき (名) 【植】ばいくわいかりさう(梅花碇草)の異名。

うめざき-いかりさう 【植】面鮓に同じ。

うめ-ざけ 梅酒 (名) 梅をひたして醸したる酒。

うめ-ず 梅酢 (名) 梅の實を鹽漬にして得たる汁。酸味多し。その紫蘇を加へたるは白酢と稱して、共に食用その他種種の用に供す。

うめ-すな (名) 【植】まんさく(金縫梅)の異名。

うめ-その 梅園 (名) 梅の樹を多く植ゑ附けたる庭園。ばいゑん(梅園)。

うめ-そめ 梅染 (名) 一梅やしぶにて、さっと染めたるもの。赤き色に黄ばみある色。數を少し染めたるを赤梅といふ。ある色。數を少し染めたるを黒梅といふ。ひ、度度染めて黒みあるを黒梅といふ。(日文類記)(文明十二)「富樫次郎殿、公方へ御料、梅染十端」 二うめがさね(梅襲)に同じ。

うめ-たつ 埋立 (他動) 一湿みたる處を埋め均(ならし)す。埋む。 二川また海などを埋めて陸地となす。天正日記「小石川の末にてうめたて候所、大方屋敷に割渡して」

うめ-たて 埋立 (名) うめたつること。うめたてたる處。

うめたて-ち 埋立地 (名) うめたてたる土地。

うめ-たてる 埋立 (他動) うめたつ(埋立)の口語。

うめ-だな 梅棚 (名) 床の間・書院などの脇に設くる棚の一種。

うめ-ぢ 埋地 (名) うめたてたる土地。うめたてち。

うめ-ちゃ 埋茶 (名) 次條、久うめちやみせ(埋茶見世)の略。嬉遊笑覽「元祿の初め、五寸局を集め、うめ茶といふもの出來ぬ」諸藝太平記「太夫はやうやう四人、格子八十六人、散茶五百一人、うめ茶二百八十人」

うめちゃ-ぢょらう 埋茶女郎 (名) 埋茶見世(ばいちゃみせ)に居りし女郎。(散茶女郎等の對)

うめちゃ-づくり 埋茶造 (名) 江戸時代、吉原の女郎屋の見世づくりの一種。散茶づくりの次位なるもの。下文を見よ。(本朝洞房語園)「近年散茶みせの模様をかへて、廣き庭をも取らず、大格子の内を局座敷に拵へたるを、散茶に對し、埋茶と戯れにいひけるが、是れも亦此の頃は本名のやうになりたり」洞房語園異本考異「江戸町一丁目巴屋源右衛門家作、埋茶作にてありしが、表總格子にて、廊は壁の方と跡尻の方、二方に女郎並ん居て、離の方に妓夫同座す。籬と表の格子の間を三尺ほどあけて落開あり、妓夫これより出入す。格子の並びに露路あり、それより客を誘引す」

うめちゃ-みせ 埋茶見世 (名) 埋茶造にしたるみせ。(散茶見世等の對)

うめ-づけ 梅漬 (名) 一梅の實の鹽漬。嚴中申次記(文明)「梅漬二桶」狂言(梟盲)「おなも此の中はどうやら氣色がわるいといらて、梅づけばかり食はれます」 二野菜を梅醋に漬けたるもの。 三梅の實のあるこーる漬。

うめ-つ-さつき (名) 〔梅花さくと月の義ならんと〕(右方)(愛)(小愛)「二月、うめつさ月。鶯の通はぬ里の宿はあらじ、花さかりなるうめつさ月に」

うめ-つ-さばな (名) 冬の梅の異名。藏玉「梅つさ花(冬)」

うめ-つ-さをばな (名) 【植】からもも(唐桃)の異名。祕藏抄「となめきのさきさかまきの白妙の、うめつさを花まさかりに見ゆ中略うめつさを花とは李(モモ)の花也」

うめ-つ-つき 梅津月 (名) 陰暦二月の異名。莫傳抄「大空の香や知るらん梅津月、いづくに聞くも風匂ふころ」

うめ-つぼ 梅壺 (名) 禁中の殿舎の名。五舎の一。凝花舎(ぎかしゃ)。勢語「昔、男、梅つぼより、雨にぬれて人のまかるを見て」

うめ-どひ 埋樋 (名) 地中に埋設する樋。うづみどひ。うづみひ。うめみぞ。

うめ-なぶ 諸 (他動) 古語。うべなふ(諾)に同じ。

うめ-の-あめ 梅雨 (名) 〔梅雨の字の直譯〕ばいう(梅雨)に同じ。さみだれ。後京極殿三百首「うめのあめにたち騒ぎぬるはし鷹は、いづくの梢もとめゆくらん」生玉心中「つれなや梅の雨、降り隔ててぞ別かれ行く」

うめ-の-いろ-づき 梅色月 (名) 陰暦五月の異名。

うめのき-はら 梅木原 (名) 梅の木の生ひたる野原。曾丹集「山里の梅の木はもに春はかり、いほりてをらん花も見がてら」

うめ-の-はな 梅花 (名) 一梅の樹に咲く花。梅花。 二うめ(梅)を見よ。

うめのはな-がき 梅花笠 (名) 梅の花を笠に見たてていふ語。古今六帖「青柳をかた絲によりて營の、縫ふてふ笠は梅の花がさ」宇津保(俊蔭)「たちよれば梅の花がさにほふ野も、なほわび人はここら濡れけり」

うめのはな-がひ 梅花貝 (名) 【動】軟體動物、鰓脚類の一種、つきがひ科に屬する貝。殼は細小圓形、白色にして、外觀梅の花瓣の散りたるが如し。主として貝細工に用ひらる。我が國中部に產す。散木集(雜)「春風になみや折りけん、みちのくのまがきの島の梅の花貝」

うめのはな-ざぬ 梅花衣 (名) うめがさね(梅襲)に同じ。

うめのはな-げ 梅花毛 (名) 鷹の目の前にある毛なりと。(和訓栞)

うめのはなの-さかづき 梅花杯 (名) 酒をつきたる盃を、梅鉢の如く、外に五つ中に一つ据ゑ置くこと。今川大雙紙「梅の花の杯を飲むやう、左の方より飲みはじめて、下を中なる盃に入れて、その盞を本の所に置きて、皆順に飲むべし。さて後は中なるを飲むなり。三つ星も左より飲むなり」

うめのはな-のみ 梅花飲 (名) 梅花の盃をすゑて飲むこと。前條を見よ。酒食論「しめのみ・あれのみ・一口のみ、初春は先づ匂ふなる梅の花のみいとやさし」

うめ-ばたけ 梅園 (名) 梅を植ゑたる園。うめぞの。

うめ-ばち 梅鉢 (名) 紋所の名。正面より見せたる單瓣の梅の花の形。けんうめばち・ほしうめばち・しうめばち・けんうめばち・はしうめばち・ばちなど種種あり。天神記「幕の御紋の梅鉢も、共に色香や染めぬらん」

(ちばめう)

うめばち-さう 梅鉢草 (名) 【植】虎

耳草科、うめばちさう屬の多年生草本。根生葉は長さ一二寸、長き葉柄を有し、卵圓形なり。葉脚は心臟形をなす。夏日、葉間より五六寸にして中開に心臟形無葉柄の一葉を有する花莖を抽出し、莖頂に白色梅花狀の五瓣花一つを開く。我が國、各地の山野向陽の地に自生す。ばいくわさう。

(うさちばめう)

うめば-ちも 梅鉢藻 (名) 【植】ばいくわも(梅花藻)の異名。

うめ-はつ-づき 梅初月 (名) 〔梅の開きそむる月の義〕陰暦十二月の異名。藏玉「十二。梅初月。花はまだつぼむ枝かとほの見えて、梅はつ月の心いるめく」

うめ-びしほ 梅醤 (名) 梅干の肉をすり潰し、砂糖を混ぜて製したるひしほ。

うめ-ぼし 梅干 (名) 一梅の實を鹽に漬け、數日の後出だして日に晒らし、再び紫蘇の葉などを加へて漬けたるもの。食料とす。世俗立要集「梅干は俗家の肴也」狂言(鬼)「梅にて思ひだした、梅干ぼし參ったか」 二うめぼしあめ(梅干飴)の略。

うめ-ほし (名) 【動】あかいそぎんちゃく(赤磯巾著)の異名。

うめ-ぼし-あめ 梅干飴 (名) 有平糖の一種。梅干をまぜたるもの。うめぼし。

うめぼし-おやぢ 梅干爺 (名) 梅干の如く皮膚に皺のよりたる老父を罵り呼ぶ語。

うめぼし-がほ 梅干顏 (名) 衰へて皺のよりたる顏。

うめぼし-の-さ 梅干樹 (名) 【植】ごんずゐ(野鴉梅)の異名。

うめぼしばば 梅干婆 (名) 皺のよりたる老婆を罵りよぶ語。壽門松(元祿)「幾の幸い梅干婆が、すいこな奴と思し召す、お恥づかしや」

うめ-ぼぶし 梅法師 (名) うめぼし(梅干)の訛り。精進魚類物語「名をば梅法師とぞ申しける」觀國筆「禪寺で見るや紫蘇づけ梅法師」

うめ-み 梅見 (名) 梅の花を見て賞すること。觀梅。

うめ-みぞ 埋溝 (名) うめどひ(埋樋)に同じ。

うめみ-づき 梅見月 (名) 陰暦二月の異名。藏玉「二。梅見月。とふ人もなき故郷の梅み月、風のなさけを袖に知るかな」

うめ-むしろ 梅筵 (名) 漬梅を干す莚。

うめ-むすび 梅結 (名) 緒の結び方の名。梅の花の形に結びたるもの。

(びすむめう)

うめ-もどき 落霜紅 (名) 【植】冬青科、鵤木(ウツギ)屬の落葉灌木。幹の高さ二三尺乃至一丈五尺。幼枝及び葉柄に毛あり。葉は卵形又は卵狀披針形にて鋭頭、細鋸齒あり。花は淡紫色にして葉腋に叢生し、五六月頃開く。果實は冬に至りて成熟し、紅色・白色又は黄色を呈し、落葉後顧る美なり。我が國、各地の山地に自生す。こうばい。こしようばい。

うめ-もみぢ 梅紅葉 (名) 紅葉したる梅の木の葉。

うめ-やき 梅燒 (名) 魚の身を摺りくづして製りたる料理の一種。下文を見よ。庖丁聞書「梅燒といふは、くづしを梅ほどにまるめ、湯びき、たれ味噌にて味をつけ、青のりを衣につけて、梅の枝に指して龜足を附け添へ、肴などに出だすなり」

うめ-やしき 梅屋敷 (名) ばいゑん(梅園)に同じ。

うめや-しぶ 梅谷澁 (名) 紅梅の木の根を切り、濃く煎じ出だしたる汁。之に明礬を交じへて狩衣・直垂などを染む。其の色赤く黄を帶ぶ。木蘭地といふは是れなり。(古今)

うめ-ゆ 埋湯 (名) 湯に水をさして温くしたるもの。

うめる 埋 (他動) うむ(埋)の口語。

うも 芋 (名) 【植】いも(芋)の古名。萬葉「はちす葉はかくこそあれも、おきまろが家なる物は字毛(モ)の葉にあらし」

うも (代) 己れを卑下していふ第一人稱の代名詞。(古言)

う-もくてう 右木鳥 (名) もくてう(木鳥)を見よ。

うもし (名) 古語。おもし(重)に同じ。おもり。ふんどう。名義抄「秤(サシヒシ)・カ(ハカ)」

う-もじ 文字 (名) 一うちかた(内方)をいふ、女詞。内儀。 二宇治の茶をいふ、女詞。

うもす (他動) 古語。むす(蒸)に同じ。うむす。名義抄「蒸(スウモシタカシム)」

うもる 埋 (自動) うづもる(埋)に同じ。天武紀上「大地震中略伊豫温泉沒(シ)モ而不ル出」源氏「容花殿のうもれたりつるに、はればれしうなりて」

うもれ 埋 (名) うもること。源氏沼「こはなどぞかくさしかためたる。あなうもれや、こよひの月を見ぬ里もありけり」

うもれ-いたし 埋 (形) 心甚しく鬱屈す。いたくむすぼほれたり。餘り内氣なり。源氏「知らぬ國の心地して、いとうもれいたく」同(若き人)「若き人のめでざらんも、いと餘りうもれいたからん」

うもれ-ぎ 埋木 (名) 一木の幹の、水中または土中などに埋もれて、幾多の歲月を經、化石の如くなりたるもの。萬葉「まかなもてゆげの河原の埋木(ウモレギ)の、あらはるまじきこととあらなくに」 二世に捨てられて顧るものなき身に譬へていふ語。和泉式部集「春やくる花や咲くとも知らざりき、谷の底なるうもれぎの身は」 三「源頼政の、うもれ木の花咲くこともなかりしに、みのなるはてぞ悲しかりける」の歌より名づけたるなりといふ。【植】いちじゅく(無花果)の異名。(和訓栞)

(諺)埋れ木に花咲く 有り得べからざることもなかりしに、身のなるはてぞ悲しかりける」續詞花集(春上)「峯に散る櫻は谷のうもれ木に、又咲く花となりにけるかな」

うもれぎ-ざいく 埋木細工 (名) うもれぎにて細工したるもの。陸前國仙臺地方の名產。

うもれぎの-の 埋木之 (枕) うもれぎは下にありて表はれぬものなるより、あらはるまじ又したにかけていふ。萬葉「まかなもてゆげの河原の埋木之(ウモレギノ)、あらはるまじきこととあらなくに」同(天)「あまたあらぬ名をしも惜しみ、埋木之(ウモレギノ)したゆぞ戀ふる、ゆくへ知らずて」

うもれ-ぐさ 埋草 (名) 物の下にうもれて見えぬ草。夫木(雜)「おほあらぎのもとあらの下のうもれぐさ、さもおいらくの末ぞいぶせき」

うもれ-ざは 埋澤 (名) 埋もれて荒廢したる澤。當流小栗判官(陸奥左兵衛尉藤原)「鳥川水の

梁てうもれ澤」

うもれ-ぼり 埋堀 (名) 埋もれて荒廢したる堀。吉野都女楠「溝同前のうもれ堀」

うもれ-まつ 埋松 (名) 物のかげに埋もれて人目にかからぬ松。除信集「二葉よりひく人もなきうもれ松、ひとりも年のふりにけるかな」

うもれ-み 埋身 (名) 世に捨てられて人に顧られざる人。能宣集「うもれみのうへはつれなくありながら、下には深き戀もするかな」

うもれ-みづ 埋水 (名) 草木の陰などに隠れたる水。金葉「もらさばや細谷川のうもれ水、かげだに見えぬ戀に沈むと」

うもれ-ゆく 埋行 (自動四) うもれて歳月を過ぐし行く。新六帖「うもれゆく淺茅が庭の鈴蟲は、秋をかさねてなくなくぞふる」

うもれる 埋 (自動下一) うもる(埋)の口語。

うもれ-ぬ 埋井 (名) 埋もれて荒廢したる井。

うもれ-ゐる 埋居 (自動上一) うもれてをる。人に知られずしてゐる。曾丹集「冬はさびしき宿にうもれゐて、荒れたる宿のひまをわけ」

う-もん 〔右門〕 (名) うゑもんふ(右衛門府)の略。

う-もん 〔有紋〕 (名) 一衣服に紋あるもの(無紋の對)。二能樂などにて、作法正しきこと。(無紋の對)

う-もん 〔有文〕 (名) 俳諧の語。意味を言外に殘したる句の稱。(無文の對)

うもん-の-おび 有文帶 (名) 石帶の一種。せきたい(石帶)を見よ。助無智祕抄「上達部は有文のおび、らでんの劍なり」

うや 禮 (名) 古語。ゐや(禮)に同じ。景行紀「喪夜喧譁、出入無禮」

うや 〔雨夜〕 (名) 雨のふる夜。あまよ(雨夜)。元稹詩「風朝雪積過、雨夜鬼神悲」

うや-うや-し 恭 (形シク) 〔うや(禮)を重ねたる語〕敬ふ狀にてあり。恭(ウヤ)しむさまなり。續紀「宇夜宇夜自然相從事業無怠」

うやうやし-げ 恭氣 (名) うやうやしさうなり。うやうやしきやう。

うやうやし-さ 恭 (名) うやうやしくある度合。うやうやしきさま。

うやかす 飢 (他動四) うやす(飢)に同じ。太平記「其の身食に飢て沙を食ひて死せし事は、母を食やかし殺したりし依也其因果也」

うやく 〔烏藥〕 (名) 一藥品の名。黑褐色にして一種の臭氣あり。二〔植〕てんだいうやく(天臺烏藥)の異名。

うや-ごと 禮事 (名) 古語。禮(ウヤ)を述ぶること。允恭紀「儀匠終而不言禮事(ウヤコト)」

うやし (形シク) 古語。飢ゑたるやうなり。ひもじ。神代紀上「飢(ウヤシ)酒醉時」

うやす 飢 (他動四) 飢うるやうにす。空腹にす。

うや-なし 無禮 (形シク) ゐやなし(無禮)に同じ。景行紀「出入無禮(ウヤナシ)」

うやはふ 敬 (他動四) 古語。うやまふ(敬)に同じ。天武紀「禮儀(ウヤ)言語之狀」

うやび-やか (副) 古語。みやびやか(雅)に同じ。うやか。名義抄「閑(ウヤビヤカ)」

うやまふ 敬 (他動四) 古語。うやまふこと。續日本紀「宇夜宇夜(ウヤウヤ)」

うやまひ 敬 (名) 景行紀「十郎稼のお蹟り、しいしいと、うやまひの礼を聞くにも」

うやまふ 敬 (他動四) 尊びて禮(ウヤ)を盡くす。慎みて扱ふ。ゐやまふ。尊敬す。清寧紀「畏敬肇抱(ウヤマヤマヒ)」佛足跡歌「さかのみあと岩にうつしおき行きめぐり、宇夜麻比(ウヤマヒ)まつり我がよはをへむ、このよはをへむ」

うや-むや 〔有耶無耶〕 (名) 有りや無しや分明ならぬこと。曖昧なること。模糊たること。

うや-ゑぼし 禮烏帽子 (名) たてゑぼし(立烏帽子)なるべし。禮帽。十訓抄「白き衣に赤き袴き給ひて、うや烏帽子してぞゐ給ひたりける」

うゆ 飢 (自動下二) うう(飢)の訛り。

うゆ 植 (他動下二) うう(植)の訛り。狂言「論大地をわり、芋の子をうゆる」

うよ 〔雨餘〕 (名) 雨の霽れたる後。あまあがり。

うよ 〔紆餘〕 一うねりまがる貌にいふ語。司馬相如文「林「紆餘逶迤、經營手其內」」柳宗元文「曲行紆餘、睨若無窮」二遠まはしにして露骨ならざること。

うよう 〔有用〕 やくにたつこと。有用(ヤウ)。「無用の對」莊子「皆知有用之用、而不知無用之用」

うよ-うよ (副) 蠢(ウヨ)く狀にいふ語。うざうざ。

うよく 〔羽翼〕 (名) 一はねとつばさと。禮記「王者帥、師必有殷周之羽翼」史記「羽翼已成難動矣」

うよく 〔右翼〕 (名) 一鳥の右のつばさ。二次條の略。(左翼の對)史記「多爲奇陳張左右翼」漢書「左右翼、統單于」

うよく-たい 〔右翼隊〕 (名) 中軍の右手に備へたる軍隊。鳥の翼を張りたるに譬へていふ。(左翼隊の對)右翼。

うよ-ねはん 〔有餘涅槃〕 (名) 佛語。此の世に肉身の存しながら涅槃に入りたること。

うら 〔占〕 ト (名) 物の象(ウラ)又は徴候(ウラ)により、疑ひを決し、又は未來の吉凶を豫想・豫言する法。古へは、鹿の骨或ひは龜の甲を灼き、其の模様また裂目によりて考ふるもあり、又足うら・石うらなどするもあり。後世は多くめどぎを用ひ、易の法によりて考ふ。萬葉「武藏ぬにうらべかた燒き、ままてにものらぬ君が名字良(ウラ)に出にけり」同「上(ウラ)部すゑ、龜もな燒きそ」

うらの-ふみ 占書 占に關する書籍。うらぶみ。欽明紀「卜書(ウラブミ)」

うら-まき うらなひ正しく。占事、違はず。萬「ことたまのやそのちまたにゆふけとふ、占正(ウラマ)のれ、いもにあはむとよし」新六帖「逢ふことを問ふや夕けのうらまきに、つげの小櫛もしるし見せなん」

うら 裏 (名) 一うち。なか。裏面。(おもての對)萬「あめつちのそこひの字良(ウラ)にあが如く、君に戀ふらむ、人はさねあらじ」拾遺「鏡の鑄つけさせ侍りけるうらに、鶴のかたを鑄つけさせ侍りて」二衣などの內面につくる布帛。萬「針袋とりあげ前におきかへさへば、おのともおのや、字良(ウラ)もつきたり」三うしろ。しりへ。背後。「家のうら」狂言「いつも裏道へはづすと申すほどに、うらへ向けて參らう」四うらはら。うらうへ。反對。「うらを言ふ」

うら-の-うらゆく うらをかくに同じ。伽羅先代萩「うまくこの堤を歸りしも、うらのうらゆく是加減」

うら-おし (名) かなよ(金砥)に同じ。

うら-おもしろし (形ク) 心に面白しと感ず。なにとなくおもしろし。雲葉集「まくず原うらおもしろく飽れつつ、風のままなる秋の夕暮」

うら-おもて 〔裏表〕 (名) 一うらうへ(裏表)に同じ。地下歌合「石など」を取る手よりなほ、うらおもて見ゆる心のかはることの葉」二表面の事實と、內部の事實と。うらはら。かげひなた。表裏。「話にうらおもてがある」十訓「うらおもてなく、親しきをもひかず、疎きをも隔てずしてひとしき思ひをなす、これを賢人といふ」

うら-おもふ (自動四) 一心中にかれこれ思ふ。心配す。おもんぱかる。うらもふ。名義抄「應(ウラオモフ)」二考へて決せず。猶豫す。うらもふ。名義抄「夷猶(ウラフ)」

うら-が-かた 〔占方〕 (名) うらかた(占形)に同じ。狂言「うらがかたにうらなはせてござれば、辰巳の方にあると申す」

うら-がき 裏書 (名) 一紙の裏に字句を書くこと。二古への書籍は奈物なれば、其の裏に、表に漏れたる事又は註釋・勸物等を書くこと。後世綴本(ホン)となりては、本文の末に書きて裏書といふ。著聞「歌中裏書」、裏書に、さまざまの述懷の詞ども書きつけて」三江戸時代、訴訟の文書の裏面に、判決文或ひは出廷期日などを記したるもの。圖「商」指圖證券の演渡又または質權設定を證するため、讓渡人又は質權設定者が一定の方式に從ひ、證書(通例其の裏面)に其の旨を記載し署名すること。記名式裏書と無記名式裏書との別あり。各條を見よ。民法(第四百六)「指圖債權の讓渡は其證書に讓渡の裏書を爲して之を讓受人に交付するに非ざれば之を以

じ。心中卯月紅葉「我れを取って隨とさん爲め、裏の裏を喰はせしを」

うら-を-かく 一與まで突き通す。聖德太子繪傳記「白羽の矢、烏主がまっかうに、うらをかかせてはっしと立つ」二敵の豫想外に出でて、其の計略を出しぬく。うらかく。

うら-を-かへす 遊廓の語。同じ女郎を二度あぐ。

うら-を-くはす 先がけて他のなさんとすることをなす。うらをかく。一杯くはす。鰹山姥「身が一せきのせりふの、裏を食はすはしれ者」

うら 浦 (名) 一海また湖などの、彎曲して陸地に入りこみたる處。萬「君を待つまつらの于良(ウラ)の少女らは、とこ世の國のあま少女かも」和名「浦字良大川旁曲渚、船隱風所也」二海邊。

うら (名) 一末。はし(端)。をはり。「竿のうら」二稍(ウラ)。萬「をさとなる花橘を引きよぢて、折りむとすれど、宇良(ウラ)わかみこそ」

うら (名) 心。思ひ。記「しがあれば、宇良(ウラ)こほしけむ」萬「君待つと、宇良(ウラ)戀ひすなり」同「秋風に今か今かと紐ときて、宇良(ウラ)まち居るに月かたぶきぬ」

うら-も-なし 一心の開てなし。奥底なし。萬「宇良毛奈久(ウラモナク)わがゆく道に、靑やぎのはりてたてれば物もひつつも」宇津保「下「打ちとけてうらもなくこそたのみけれ、思ひの外に見ゆる下ひも」二何事もなし。かれこれいはず。狂言「茶にかうかうぢやとおしやるならば、うらもこざらぬが、だましておこされたと思へば、腹がたちまする」

うら 己 (代) 第一人稱の代名詞。われ。おら。堀河波鼓「うらが寢た懷へ、盜人が這入って」膝栗毛「あにが、しやあしやあといふ音を聞くと、うらも氣が惡く成ったもんだんで」

うら-あそび 浦遊 (名) 浦に出で、魚介などを採りて遊ぶこと。諸集「今日は日もうららに候間、浦遊に出でばやと思ひ候」

うら-あはせ 裏合 (名) 互ひの心のよく合ふこと。鶉衣「指木ときこえしもとに、うら合せの夫婦とはなりける」

うら-あふ (自動四) 心ざま物によく似るる。續後撰「わきて見ん神のつかさのうらあひて、しるき日かげの山藝の袖」

うらい-せん 〔有來錢〕 (名) 〔有來新兵衛の願ひにより鑄造せるよりいふ〕元文元年山城國鳥羽樣大路にて鑄造せし寛永銅錢。銅色黑濁、製作精しからず。徑八分、重量七分。新寛永錢譜「有來錢」

うら-いそ 浦磯 (名) 浦邊の磯。萬「漁びより宇良伊蘇(ウラソ)を見つつ」

うら-いた 裏板 (名) 一屋根裏に張り著けたる板。著聞「裏板とひはだとのあはひに、かつらを持って、ながながと縛りかからめて」二天井。大鏡「寢殿裏板のかべの少し黑ずりければ」

うら-うち 裏打 (名) 一直垂に裏つけたるもの。奉公覺悟之事「武家のひたたれは裏打たるべし。公家は一重ひたたれも也」公方樣正月御事始記「十九日、うらうちを著候、今は小素襖の事也」二紙又は革などの裏に、紙また布など貼り著くること。

うら-うづがひ 裏渦貝 (名) 【動】腹足類、ささえ科に屬する貝。殼は少しく斜立せる小圓錐形にして、周緣に斜めなる刺狀隆起を有し、菊花樣の外觀を呈す。底面は平たく渦狀脈を有し、臍孔無く、臍は紫色なり。甲は紅紫色に彩り、美麗にして玩具となすべし。我が國中部の海中に產す。夫木「たち騷ぐ蘆のもと葉をかきわけて、うらうづ貝をひろひつるかな」

うら-うへ 裏表 (名) 一うらとおもて。外也字彙裏、衣內也字彙」枕「いとゆみじう清げに、うらうへに事多く書き給へる、いとめでたし」源太夢「なほしのうらうへひとしうこまやかなる」二上下。左右。前後。宇治拾遺「うらうへに、二ならびに居なみたる鬼、數を知らず」同「今片かたの顏に投げつけければ、うらうへにこぶつきたる翁にこそなりたりけれ」三物事の全く反對なること。表裏。

うら-うめ 裏梅 (名) 一梅の色目の名。表は白、裏は蘇芳。襲色目春の始め用ふ。二紋所の名。うめ(梅)を見よ。

うら-うら 浦浦 (名) あの浦この浦。諸方の浦。金葉「上」よもの海の浦浦ごとにあされども、あやしや見えぬ生けるかひかな」

うら-うら (副) のどやか。のどか。うららか。遲遲。萬「宇良宇良(ウラウラ)に照れる春日にひばりあがり、心かなしも獨りし思へば」土佐日記「廿九日、舟出だして行く。うらうらと照りて漕ぎゆく」

うらうら-し (形シク) のどかなり。遊仙窟「心虛(ウラウラシ)」

うら-え-り 裏襟 (名) 衣服の襟の裏に縫ひ添ふる布帛。えりうら。補無益委記「大通の羽織長きこと三尺八寸五六分、紐はかかんと、屈き、うらえり白く」蹇孚「うらえりの衣紋、色色のえりを五つも六つも揃へて」

うら-おくび 裏衽 (名) 單物以外の衣服の、裏がはの衽(オク)。

うら-し (名) かなよ(金砥)に同じ。

うら-おもしろし (形ク) 心に面白しと感ず。なにとなくおもしろし。雲葉集「まくず原うらおもしろく飽れつつ、風のままなる秋の夕暮」

うら-おもて 〔裏表〕 (名) 一うらうへ(裏表)に同じ。地下歌合「石など」を取る手よりなほ、うらおもて見ゆる心のかはることの葉」二表面の事實と、內部の事實と。うらはら。かげひなた。表裏。「話にうらおもてがある」十訓「うらおもてなく、親しきをもひかず、疎きをも隔てずしてひとしき思ひをなす、これを賢人といふ」

うら-おもふ (自動四) 一心中にかれこれ思ふ。心配す。おもんぱかる。うらもふ。名義抄「應(ウラオモフ)」二考へて決せず。猶豫す。うらもふ。名義抄「夷猶(ウラフ)」

うら-が-かた 〔占方〕 (名) うらかた(占形)に同じ。狂言「うらがかたにうらなはせてござれば、辰巳の方にあると申す」

うら-がき 裏書 (名) 一紙の裏に字句を書くこと。二古への書籍は奈物なれば、其の裏に、表に漏れたる事又は註釋・勸物等を書くこと。後世綴本(ホン)となりては、本文の末に書きて裏書といふ。著聞「歌中裏書」、裏書に、さまざまの述懷の詞ども書きつけて」三江戸時代、訴訟の文書の裏面に、判決文或ひは出廷期日などを記したるもの。圖「商」指圖證券の演渡又または質權設定を證するため、讓渡人又は質權設定者が一定の方式に從ひ、證書(通例其の裏面)に其の旨を記載し署名すること。記名式裏書と無記名式裏書との別あり。各條を見よ。民法(第四百六)「指圖債權の讓渡は其證書に讓渡の裏書を爲して之を讓受人に交付するに非ざれば之を以

で債務者其他の第三者に對抗することを得ず」商法第四百五十五「裏書」

うらがき きんし 裏書禁止 【商】指圖證券の發行人又は所持人が、其の證券に裏書を禁止する旨を記載すること。此の記載により、該證券は爾後他に讓り渡すことを得ざるものとなる。

うらがきーにん 裏書人 (名) 裏書をなしたる人。商法第四編第三章「裏書人」

うらがきーもの 裏書物 (名) 旅役者又は新派俳優の語。大道具・小道具・髪・衣裳などの總稱。

うらがきゆづりうけにん 裏書讓受人 (名) 【商】裏書により、手形其の他の證券を他より讓り受けたる人。

うらがきゆづりわたしにん 裏書讓渡人 (名) 裏書により、手形其の他の證券を他に讓り渡したる人。

うらーかく (自動四) 一矢又は刀槍など、物の裏まで通る。盛衰記世古太郎「遠矢にのみぞ射ける。されども鎧よければ裏かかず、あきまを射ねば手も不負」二敵の計略の反對に出づ。だしぬく。うらをかく。

うらーかくし 裏隱 (名) 洋服の内ははかくし。

うらーかくる 浦隱 (自動四) 次條に同じ。萬三「風吹けば波かたむとさもらふに、つたの細江に浦隱(ウラガクル)」万葉居り」

うらーがくる 浦隱 (自動下二) 浦邊の陰にかくる。蜻蛉日記上「浦がくれ見ることかたきあとならば、しほひを待たんからきわざかな」

うらーがこひ 裏園 (名) 庭園にて、裏の方のかこひ。

うらーがしや 裏貸屋 (名) うらだなの貸家。「代女「此のあたりのうらがしやに住める女の、物見だけくて」薩摩歌下「鹽の辻なる裏貸屋」

うらがす (他動四) 心を浮きたたしむ。樂しましむ。出雲風土記「乘船而率巡八十島」字良加志(ウラガス)給稱、猶不止哭之世」

うらーかぜ 浦風 (名) 浦に吹く風。はまかぜ。宇津保祭使「うら風にたちてざりける白波の、今よりとのみたのみけるかな」

うらかぜーぐさ 浦風草 (名) 【植】つち(ツチ)り(鱗白草)の異名。

うらーかた 占形 占象 (名) 一古(ウラ)のおもてに現はれたる象(カタ)。うら(占)を見よ。卜兆。欽定紀「遣子弟奏其占狀(ウラカタ)」爲忠前百首「思ひかね戀しき人をえものにて、とふにかなへるうらかたもなし」二うらなひをなす人。陰陽師。うらなひしや。謠大江「大江山の鬼神の事、占方の言葉にまかせつつ、頼光・保昌に仰せつけらる」

うらーかた 裏方 (名) 貴人の内方。御裏御殿。御簾中。

うらーかたき 裏形木 (名) 〔形木は摺形木の略。形を摺ること板木を摺るが如くなればいふなるべし。雜袋「裝束の裏に模樣を附けたるもの。永昌記「應永二年四月十七日「賀茂祭、雜色「海青裏形木、袴狩冬打」

うらかたーばんしょ 浦方番所 (名) 浦浦に設けたる番所。

うらーかつ 浦賤 (名) 海濱に住む賤しき漁人。扶桑拾葉集「田夫・野人、うらがつ・山がつ」

うらーがな 裏假字 (名) 漢字の左傍に附くる假字。

うらーがなし (形) 心中に悲しと思ふ。萬十「春の日の宇良我奈之伎(ウラガナシキ)におくれゐて、君に戀ひつつうつしけめやも」

うらがなしーげ (副) うらがなしさう。源玉鬘「船人も誰れを戀ふとか大鳥の、うらがなしげに聲のきこゆる」

うらがなしさ (名) うらがなしくある度合。うらがなしきさま。源明石「旅衣うらがなしさにあかしかれ、草の枕は夢もむすばず」

うらーがね 裏鐵 (名) 物の裏に打ち附くる鐵の板。心中刃氷刷日「裏鐵の千足や二千足、平兵衛が片腕、半日の仕事ぞ足らぬ」

うらーがね 裏曲 (名) ものさしの一種。曲尺の裏にある尺度の稱。その一尺は表の一尺四寸一分四厘二毛一絲にあたる。うらじやく。

うらーがは 裏側 (名) 裏の方。裏に面する部分(おもてがはの對)

うらーがぶぎやう 浦賀奉行 (名) 江戸幕府の制。相模國浦賀に出入する船舶の荷物、及び奥羽より大阪へ送る米穀を檢査する役。

うらーがへし 裏返 (名) うらがへすこと。うらがへしたること。「著物をうらがへしに著る」

うらーがへす 裏返 (他動四) 裏をかへす。ひっくりかへす。ひっくりかへして表とする。顚倒す。宇治拾遺「それがうへに、圍碁盤をうらがへして置きて」

うらーがへる 裏返 (自動四) 一裏が返りて表となる。ひっくりかへる。榮華松の夢「なには江に心とまりて蘆の葉に、うらがへるべき心地こそせね」二味方が變じて敵となる。うらぎりす。反叛す。唐船嘴今國姓爺「褒美を貪り國守、注進、裏返る陶民子と見立ててか」

うらーかみ 裏紙 (名) 本紙の裏に添へたる紙。明月記建暦年十一「先づ是出納進」

うらーがる 末枯 (自動下二) 草木のこずゑ萬十「わがせこにわが戀ひをれば、わが宿の草さへ思ひ浦萎(ウラガレ)にけり」新古今秋上「うらがるる淺茅が原のかるかやの、隱れて物を思ふ頃かな」

うらーがれ 末枯 (名) うらがること。萬「白とほふをにひた山のもる山の、宇良賀禮(ウラガレ)せなな、とこはにもがも」

うらーがれる 末枯 (自動下二) うらがる(末枯)の口語。

うらーき 末木 (名) こずゑ。木の末(ウラ)。一もと木にまさるうらきなし」

うらーぎく 裏菊 (名) 菊の花を裏より見たる形。鎧の飾り、又は紋所とす。槍樋三「丸に三つ引き」お前の御紋、私は裏菊」

うらーぎく 金盞菜 (名) 【植】菊科、紫菀(ウラギク)屬の多年生草本。莖の高さ二尺。葉は線形全緣、厚くして柔かなり。花は小頭狀花序をなし、花序は纖房狀に排列し、秋季開く。我が國、各地海濱の砂地に自生す。はましをん。

うらーきぬ 裏衣 (名) 袈の裏葉のうらぎぬも、ありしその世の移香を、洗ひ落とすなすもの草」

うらーきり 裏切 (名) 密かに敵に内通して味方を討つこと。内應。反應。報井日記「城中に數多裏切りの見えて、城外の岡を内に合はせ候へて討ち合ひ候へば」

うらきん-じみ (名) 【動】小灰蝶(シジミ)の一種。翅の裏面、銀白色なるもの。

うらぐ (自動四) 古語。たのしむ。愉快になる。記「天皇、宇摩宜(ウラグ)和の歌曰、是所歌之大御酒、而御歌曰」

うらーくぎ 裏釘 (名) 打ちたる釘の末の、裏まで貫き出でたるもの。

うらーくぎ かやす 裏釘返 (名) 裏釘の末を曲げて、表面へ打ちかへす。二念の

上にも念を入る。國姓爺後日合戰「最期に我れを恨むなよ。やあまだるいまだるい、裏釘かやすな、さあ來い來い」

うらーくし 卜串 (名) 大嘗會の時、悠紀・主基の國郡卜定の名を書きたる紙。延喜式「江次第十二「伊勢「上卿仰可遣卜串由」次外記起坂上卜串參入」

うらーくぢ 裏口 (名) 家の後の方の出入口。(表口の對)せど。一代女「しばしありて、うら口より雪踏の音きこえしが」

うらーくづれ 裏崩 (名) 戰場にて、味方の先陣の樣子を見て、後陣の陣立(ヂン)の動き亂るること。武家名目抄「石川伯耆・本多平八郎中務入槍、馬場が後備へ裏崩れして見えければ」最明寺殿百人上臈「殘る軍兵うら崩れして、みな散り散りに逃げ散りける」

うらーくはし (形シク) 古語。心樂し。愉快なり。面白し。雄略紀「こもりくのはつせの山は、あやに于羅度波斯(ウラクハシ)、あやに于羅度波斯(ウラクハシ)」萬十「宇良具波之(ウラクハシ)ふせの水海に、あま船にまかぢかいぬき」

うらーぐはーのき 末桑木 (名) 桑の木の末(ウラ)。仁德紀「磐之媛がおほろかにきこさぬ于羅愚破能紀(ウラグハノキ)、寄るまじき川のくまぐま、よろぼひ行くかも、于羅愚破能紀(ウラグハノキ)」

うらーくみ 裏組 (名) 一琴曲の名。八橋流にて、薄衣・桐壺・須磨・四季・扇・雲井の六曲をいふ。二三味線の曲節の名。賤(ウラ)・錦木・青柳・早舟・八幡(ヤワ)・翠蓮(ミド)・なよし等七曲あり。柳川檢校の作。

うらーくーりう 〔有樂流〕(名) 茶の湯の一派。織田信長の弟、有樂齋の創めたるもの。

うらーこうぢ 裏小路 (名) うらやこうち(裏屋小路)に同じ。

うらーこかる (自動四) 〔裏濃有の義、心(ウラ)こがるにいひかく〕心深く戀ひ慕ふ。拾遺「神な月時雨しぬらし葛の葉の、うらこかるねに鹿もこなくなり」一浦を越すこと。二浦の方より吹きあげて來る風。

うらーこし 浦越 (名) 【建築】天井板などの裏に取り附けたる棧。

うらーこし 裏濃 (形シク) 裏の方濃き色したり。裏に紫又は蘇芳の色あり。夫木「春またずいそぐ花野の梅がえに、うらこき雪のふらぬ日ぞなき」

うらーごし 裏漉 (名) 餡・きんとんなどを漉すに用ふる器。

うらーごし 裏腰 (名) 袴の腰板の裏

うらーごと 卜事 (名) うらなひ事。うらへ。

うらごーのーすはう 裏濃蘇芳 (名) 襲の色目の名。表は薄蘇芳、裏は蘇芳。樺櫻に似たり。三條家襲色目

うらーこひ (名) うらこふること。戀慕。萬十「少女らは思ひ亂れて、君まつと宇良奚悲(ウラヒ)すなり」

うらーこひし (形シク) 心の中戀し。萬十「宇良奚悲之(ウラヒシ)わがせの君はなでしこが花にもがもな、朝なさな見む」

うらーこひしーみ (名) 心の中に戀しと思ふこと。萬十「そこをしも宇良胡非之美(ウラコヒシミ)」

うらーこぶ (他動上) 心の中に戀ひ慕ふ。萬十「わがせこに裏戀(ウラコヒ)をれば、あまの川夜船漕ぎとよむかぢのと聞こゆ」

うらーこほし (形シク) 古語。うらこひしに同じ。記「おふをよし鮪つく蜑よ、しがあれば宇良胡本斯(ウラコホシ)けむ」

うらーごゑ 浦聲 (名) 海上に鳴きわたる鳥の聲。小町踊「浦聲もよしや雜波や郭公」同冬「うら聲が友よびかはす濱千鳥」

うらーどゑ 裏聲 (名) 調子を高くすべきところを、殊更に低くかすめてうたふ聲。

うらーざいしき 裏彩色 (名) 練彩色の絵に、絹の裏より彩色すること。

うらーざくら 裏櫻 (名) 紋所の名。さくら(櫻)を見よ。

うらーざし 裏差 (名) こづか(小柄)に同じ。こがたな(小刀)を見よ。曾我會稽山「三行り半にさらさら去って去狀に、裏ざしの弁、暇の印と卷きこんで」

うらーざしき 裏座敷 (名) おもてだたぬ處にある座敷。(表座敷の對) 甲陽軍鑑「公界は法度なりと、裏座敷にて鄙舞あり」

うらーさだめ 占定 (名) 占にて物事を決定すること。

うらーさと 浦里 (名) 浦近き處の村里。浦邊の里。漁村。桂林集「もしほやくあまのころものうら里の、うらかなしくも立つ烟かな」

うらーさびし (形シク) 心の中さびし。古今夏「君まさで烟たえにし鹽がまの、うらさびしくも見えわたるかな」

うらさびしーげ (副) うらさびしさう。拾遺長歌「鹽竈のうらさびしげに、なぜもかく世をしも思ひなすの渴の」

うらさびしーさ (名) うらさびしきこと。うらさびしき度合。源明石「ひとりねは君も知りぬや、つれづれと思ひあかしのうらさびしさを」

うらーさぶ (自動上) 一心の中さびしくあり。心細く思ふ。萬「浦佐夫流(ウラサブ)心さまねし、ひさかたのあまのしぐれのながらふ見れば」同冬「はしきよし君はこのごろ字良佐備(ウラサブ)て、なげきぞいます」二浦の景色荒れてさびし。萬「さざなみの國つみ神の浦佐備(ウラサブ)て、荒れたる都見ればかなしも」

うらーし 占師 (名) おんやうじ(陰陽師)に同じ。

うらじ 連 (名) 古語。むらじ(連)に同じ。顯宗紀「日下部連(ウラジ)使主」

うらーしけどう 末重藤 (名) すゑしげどう(末重籐)に同じ。

うらーしほ 浦潮 (名) 浦のうしほ。萬「秋山の紅葉をかざし我がをれば、宇良之保(ウラシホ)濡ちく、未だあかなくに」

うらーしま 浦島 (名) 一浦にある島。濱松「いかなれや浦島にのみ浪かけて、高潮の濱によらじとはする」二「蛤」軟體動物。腹足類の一種。たうかむり科に屬する貝。殼質堅固にして形眼れ、往往不規則なる縐膨脹を有し、螺塔低く、殼口廣長にして、外脣反曲し、齒を具へ、内脣は時に擴張して體層を覆ひ、甲は小にして扇形なり。

うらーしまーさう 虎掌 (名) 【植】天南星(ショウ)科、天南星屬の多年生草本。地下に球莖を有し、地上部は高さ一二尺、一葉を生じ、葉は掌狀に分裂し、裂片の數は十數箇に達し、各裂片は長橢圓形全緣なり。四月頃、葉の成長と共に花を開く。花は單性にして雌雄同株、肉穗花序をなし、紫斑を有する佛炎狀の苞に依りて被はる。花軸は肉質にて、其の本體は紐狀に伸長すること尺餘、黑紫色を呈す。我が國、各地の山野陰濕の地に自生す。おほほそみ。まひづるてんなんしやう。

うらーしまーつつじ 浦島躑躅 (名)

【植】石南科、うらしまつつじ屬の落葉灌木。矮小にして、地を匍匐し多く分枝す。葉は枝端に叢生し、倒卵形鈍頭、鋸齒を具へて葉柄あり。六月頃、葉間より出でたる花梗上に、黄白色にて壺狀の小花二三を開き、花後、黒紫色の小果を結ぶ。我が國、諸所の高山に自生す。おほばのくまこけもも。

うらしま-の-はこ 浦島箱 (名) 古へ浦島の子が常世國より携へ來たりしといふ箱。山家集下「いひすててのちの行くへを思ひはてば、さてさはいかに浦島の箱」

うら-じゃく 裏尺 (名) うらがね(裏曲)に同じ。

うら-じゃくや 裏借屋 (名) うらだなの借屋(シャクヤ)。大織冠二「貧になる尾の裏借屋」

うら-しょうもん 浦證文 (名) 江戸時代、米穀・貨物を運漕する際、風波の難等にて數の減損せしことなどを、其の浦役所にて證する書狀。

うら-じろ 裏白 (名) ㊀紙を横に二つ折りにして、表の方にのみ書きたるもの。㊁うらの白き紺足袋。㊂うらじろど(裏白戸)の略。㊃うらじろれんが(裏白連歌)の略。寒川入道筆記「北野裏白の事」

うら-じろ 裏白 (名) 【植】㊀裏白科、裏白屬の多年生草本。根莖を有して地中を匍匐し、諸處より葉を出だす。葉の大なるものは四五尺の葉柄を有す。葉柄は硬剛にして先端二つに分岐し、枝は伸長して夥多の羽狀葉片を著け、各葉片は更に羽狀に深裂し、小裂片は線形鋭頭なり。葉の表面は鮮綠色、裏面は帶白色なり。子嚢群は四箇づつ相集まりて小葉片の裏面に著生す。我が國、暖地の山地に自生す。葉は歳首の裝飾に用ひ、葉柄は箸・籠等を作るべし。うらじろわらび。おほしだ。しだ。㊁うらじろかんばの異名。㊂うらじろのきの異名。㊃かはらさいこ(委陵菜)の異名。㊄やまよもぎ(蓮蒿)の異名。

うらじろ-あかざ 裏白藜 (名) 【植】藜(アカザ)科、藜屬の一年生草本。藜の變種。丈少しく低く、且つ直立せずして横臥す。葉は長橢圓形又は卵狀長橢圓形、上面は綠色、下面は帶白色なり。花は淡綠色の小輪にて、穗狀花序に排列す。我が國、各地の原野に自生す。

うらじろ-いちご 裏白苺 (名) 【植】薔薇科、懸鈎子(キイチゴ)屬の落葉灌木。幹の高さ三四尺、赤色の毛茸密生す。葉は羽狀複葉、各小葉は卵形にして、裏面には白色の軟毛密生す。花は白色、團繖狀にて春開く。果實は赤色を呈して食ふべし。我が國、各所の山野に自生す。えびがらいちご。さるいちご。みやまあしくだし。

うらじろ-うこぎ 裏白五加 (名) 【植】五加(ウコギ)科、五加屬の落葉喬木。幹の高さ三丈、樹皮黒褐色なり。葉は七八枚の小葉より成り掌狀複葉、各小葉は橢圓形鋭頭、全緣にして長き葉柄を具ふ。花は小さく淡綠色にて、葉腋より生ずる花梗上に繖形花序をなし、五月頃開く。果實は黒色の小漿果なり。我が國、各地の山地に自生す。いものき。

うらじろ-うつぎ (名) 【植】虎耳草科、溲疏(ウツギ)屬の落葉灌木。葉は對生、葉柄を有し、卵狀披針形又は橢圓狀披針形、鋭頭にして鋭鋸齒を有し、裏面は白色を帶ぶ。花は白色にて、複總狀花序に排列し、五月頃開く。我が國、中部地方の山野に自生す。

うらじろ-えのき (名) 【植】楡科、うらじろえのき屬の常綠灌木にして小木本たり。葉は卵狀長橢圓形又は長橢圓狀披針形、鋭頭、鋸齒を有し、葉脚心臟形をなし、質硬剛、上面には粗毛、下面には軟毛密生して銀色を呈す。花は單性、雌雄異株又は雜性にて、葉柄より生ずる花梗上に聚繖狀に排列す。我が國、小笠原島・臺灣等に自生す。

うらじろ-がし (名) 【植】やなぎがしの異名。

うらじろ-かんば (名) 【植】樺木(シラカンバ)科、樺木屬の落葉喬木。幹の高さ數丈。葉は橢圓形又は卵形、重鋸齒を有し、上面は平滑なれども、裏面には葉脈上に長き白毛を密生し、葉脚心臟形なることあり。花は單性にして雌雄同株、四五月頃黄褐色の葇荑花序を生ず。我が國、各地の山地に自生す。うらじろ。ねこしで。

うらじろ-きんばい (名) 【植】薔薇科、きじむしろ屬の多年生草本。莖の高さ四五寸。葉は三深裂し、裏面白色なり。花は黄色の五瓣花にして、夏日開く。我が國、高山に產す。

うらじろ-くろもじ (名) 【植】樟科、鈎樟(クロモジ)屬の落葉灌木。幹の高さ一丈許り。葉は橢圓狀披針形、鋭頭、裏面は帶白色。嫩葉は裏面に軟毛密生す。花は繖形花序に排列し、早春開く。我が國、各所の山地に自生す。

うらじろ-くわ 裏白科 (名) 【植】隱花植物、羊齒類の一科。纖長なる根莖を有して匍匐す。葉は葉柄二叉に分岐す。子嚢群は小にして、葉の裏面に著生し、二乃至十箇の子嚢より成り、包被を缺き、無柄又は短き柄を有す。環帶は横に亘り、縱裂して胞子を出だす。熱帶又は溫帶の各地に分布す。

うらじろ-たで 裏白蓼 (名) 【植】けいはたでの異名。みつみねもみ。

うらじろ-つつじ 裏白躑躅 (名) 【植】うらじろやうらくの異名。

うらじろ-ど 裏白戸 (名) 土藏の入口にある漆喰塗の引戸。平日は開きて、火災の時に鎖す。うらじろ。

うらじろ-の-き 裏白木 (名) 【植】薔薇科、梨(ナシ)屬の落葉喬木。葉は廣橢圓形又は圓形、先端尖り、緣邊は重鋸齒を帶び、裏面に白色の軟毛密生し、幼枝また然り。花は小さく白色にて、繖房花序に排列し、春開く。我が國、各地の山地に自生す。うらじろ。

うらじろ-もみ 裏白樅 (名) 【植】松杉科、樅(モミ)屬の常綠喬木。幹の高さ十數丈に達し、樹皮は帶黄褐色なり。葉は線形にて先端鋭尖、裏面やや白色を帶ぶ。花は球花にして、花後長さ二三寸、徑一寸許りの先端窄める球果を結ぶ。我が國、中部の山地に自生す。材は用ふべし。えぞのもみ。へそもみ。

うらじろ-もみ (名) 【植】だけもみの異名。

うらじろ-やうらく (名) 【植】石南科、うらじろやうらく屬の落葉灌木。葉は長倒卵形又は倒卵形、鈍頭、裏面は帶白色なり。花は短き總狀花序に排列し、壺狀に開く。我が國、各地の高山に自生す。うらじろつつじ。

うらじろやうらく-つつじ (名) 【植】前條の異名。

うらじろ-れんが 裏白連歌 (名) 連歌を懐紙の表ばかりに書くこと。うらじろ。案内者「正月三日裏白連歌、是れ北野に有り。懐紙入折にて、百韵を表ばかりに書くゆゑ裏白連歌といふなり」寒川入道筆記「北野裏白の事。毎年正月三日に必ず執行之連歌也。此れ元來に、執筆誤り而、一の折りの裏を書かずして二の面にうつり候、その誤りを改めず、余の折りをも面ばかりに書きて、以上八枚に書之也。是れを裏白といふ」

うらじろ-わらび 裏白蕨 (名) 【植】うらじろ(裏白)㊀の異名。

うら-す 浦洲 (名) 浦邊の洲。記上「わが心宇良須(ウラス)の鳥ぞ」

うら-すごし (形二) 何となく物すごし。保憲女集「うらすごくたつ川霧を見わたせば、朝はむ鵆の上も霞めり」

うら-ずり 裏摺 (名) 掛物の表裝などを仕上ぐるに、無患子(ムクロジ)をつなぎたるものを以てその裏を摺りて、平かに又軟かにすること。

うら-ぜき 裏關 (名) 古へ相撲の關の二人ありし時、第二位の關の稱。右今相撲大全

うら-せど 裏背戸 (名) せど㊁(背戸)に同じ。うらぐち。當流小栗判官四「客達の洗足取って苧を績みて、裏背戸掃いて」

うら-たつ 占 (自動四) 占(ウラ)をたてて問ふ。一說、むらだち(叢立)の誤りと。萬四「まつが浦にさわゑ宇良太知(ウラダチ)、ま人ごとおもほすなもろ、我がもほのすも」

うら-だつ 浦立 (自動四) 波、浦にたつ。壬二集下「霞みゆくまつさへつらき大淀や、浦だつ波にかへるかりがね」

うら-だな 裏店 (名) 人家の後方に建てたる家。路次などにある家。うらや。浮世風呂下「裏店に居る貧乏醫者に、功者なお人があるものさ」

うらだな-がり 裏店借 (名) うらだなを借りて住む人。

うら-ち 裏地 (名) 裏手にある土地。

うら-ぢ 浦路 (名) 浦邊の路。千載旅「旅ねする須磨のうらぢのさよ千鳥、聲こそ袖の波はかけけれ」

うら-ぢ 裏地 (名) 衣服の裏に用ふる布帛。居食住記「裏ぢは紅うら」

うら-ちどり 浦千鳥 (名) 浦邊に住む千鳥。新古今戀五「つくづくと思ひあかしの浦千鳥、浪の枕になくなくぞきく」

うら-つき 裏附 (名) すべて裏の附きたるものの稱。

うらつき-ざうり 裏附草履 (名) うらつけざうり(裏附草履)に同じ。

うら-つけ 裏附 (名) すべて裏をつけたるものの稱。

うらつけ-ざうり 裏附草履 (名) うらをつけたる草履。三枚又は五六枚なるもあり。うらつきざうり。

うら-づたひ 浦傳 (名) 浦づたふこと。源明石「はるかにも思ひやるかな知らざりし、浦よりをちに浦づたひして」

うら-づたふ 浦傳 (自動四) 浦より浦へ傳ひ行く。千載冬「岩こゆるあら磯波にたつ千鳥、心ならずや浦づたふらん」

うら-づみ 裏積 (名) 石・煉瓦などを積みたる裏がは。

うら-て 占手 (名) ㊀相撲の最手(ホテ)に次ぐもの。また、歌合せにて最初の番ひ。寛平歌合「左方占手の歌は」新撰萬葉下「荒金の土のしたにて歷しものを、けふの占手(ウラテ)にあふ女郎花」宇津保初秋「すまひ中略一のは、うらて」新猿樂記「況自餘最手・占手」㊁占の結果。謠鳥帽子折「それ松明の占手といっぱ、一の松明は軍神、二の松明は時の運、三は我れ等の命なるに、三つが三つながら消ゆるならば、今夜の夜討は扨よな」

うら-て 裏手 (名) 裏の方。後方。裏面。背後。

うら-て 浦手 (名) 浦の方。浦島年代記二「浦手の綱子數十人」

うら-とく (自動下二) 心打ち解く。後撰春下「春日さす藤のうらばのうらとけて、君し思はば我れもたのまん」重之集三「山吹の八重さく花をむつまじく、とへやひとへのうらとけにけり」

うら-とふ 占問 (自動四) 占形を問ふ。うらなふ。萬廿「卜部をもやそのちまたも占雜問(ウラトヘド)、君をあひ見むたどき知らずも」

うらとふ-はし 占問橋 はしうら(橋占)を見よ。夫木廿「思ひかねうらとふはしよまさしかれ、世の人ごとをたのみわたらん」同同「なぐさめてうらとふ橋よまさしかれ、つれなき中を待ちもわたらん」

うら-とふ 裏問 (自動四) 人の心中を問ひ試みる。女殺油地獄下「よその方から裏問ひける」

うら-どほし 浦遠 (形二) 浦、遠く長くつづきたり。續拾遺春上「浦どほきなにはの春の夕なぎに、入日かすめる淡路島山」

うら-どほり 裏通 (名) 裏手の道路。うらみち。

うら-な 裏名 (名) いんご(隱語)に同じ。醒睡笑「この寺に、下戸のうら名を小穴と申すと答ふ」

うら-ながや 裏長屋 (名) 家などの裏手にある長屋。うらだなの長屋。

うら-なぎ 浦和 (名) 浦に寄する波の、なぎて靜かなること。萬代雜三「うらなぎに釣りのを垂れてくる我れぞ、いたくなたちそ沖つ白波」

うら-なく (自動四) 心中にて嘆き悲しむ。高く聲を立てず泣く。萬二「心をいたみ、ぬえこ鳥卜歎(ウラナケ)をれば」

うら-なけ (名) うらなくこと。萬廿「奈耳のわぎへに、ぬえ鳥の宇良奈氣(ウラナケ)しつつ」

うらな-さ (名) うらなくある度合。思慮淺きさま。源若菜下「いとたとしへなきうらなさを、いかに見給ふらんと、つつましけれど」

うら-なさけ 裏情 (名) 心の中にある愛情。曾我「戀のくれとや僞りを賴み顏なるうらなさけ、向かひていふも流石なり」

うら-なし 裏無 (名) 〔草履は普通二枚重ねなるを、是れは一枚なればいふ〕㊀藺草などにて編み、紙の緒をつけたる草履。古へは檳榔毛をも用ひて作る。ゐのげげ。藺金剛(ヰコンガウ)。藺履(ヰゲ)。緒太(オフト)。江次第七「置藺履一足(無裏)」近代以藁尻切置之」禁祕抄下「今不取侍臣脫沓裏無二」建武年中行事六月十一日「次にうらなしを下に置きてめして、巽に向かひて三足歩ませ給ふ」㊁竹の皮の草履をいふ、東國の方言。物類稱呼 ㊂かはざうり(皮草履)をいふ、九州の方言。物類稱呼

(うらなし一)

うら-なし (形二) 隔てなし。遠慮なし。おくそこなし。思慮深からず。何心なし。勢語「はつ草のなどめづらしきことのはぞ、うらなく物を思ひけるかな」源「かかりける事もありける世を、うらなくて過ぐしけるよと思ひつづけて」

うら-なじみ 裏馴染 (名) なじみきん(馴染金)を見よ。

うら-なひ 占 (名) ㊀うらなふこと。占象(カタ)を考へて吉凶を判斷すること。宇治拾遺二「この女の親の、易のうらなひの上手にて」㊁うらなひしゃ(占者)に同じ。

うらなひ-さん 占算 (名) うらやさん(占算)に同じ。狂言居杭「うらなひさん、うらやさん、占の御用、しかも上手なり。うらやさん、うらやさん」

うらなひ-しゃ 占者 (名) うらなひを業とする人。うらやさん。うらなひ。はっけおき。うらなひびと。賣卜者。占家。

うらなひ-びと 占人 (名) 前條に同じ。

うらな-ふ 占 (他動ハ四) 占をなす。占にて吉凶を考へ定む。神代紀上「以太占而卜合之」萬二「玉ぼこの道ゆきうらに占相へていもにあはむと我れに云ひつる」

うらな-みな 浦波 (名) 浦に打ち寄する波。萬三「朝風に浦浪さわぎ」

うらな-り 末成 (名) 瓜などの蔓の延びたる先の方に實の結ぶこと。(もとなりの對)

うらなり の へうたん 末成瓢箪 (名) 蒼白くして、虚弱なる人に譬ふる語。

うらな-る 浦馴 (自動ラ下二) その浦に住み馴る。源明石「されどうらなれたちん人は」

うらの-かね 裏印 (名) 馬の右股に押す印(表の印の對) 岡本記「馬のかねは、おもてのかねとは左のかた、右のかたをば、うらのかねとも、又うちとしとも申す也」

うらの-かみ 陰陽頭 (名) 陰陽寮(ウラノツカサ)の長官。

うらの-かみ 浦神 (名) 浦潮を守る神。欽明紀「浦神(ウラツ)嚴忌」

うらの-しつけ 裏熨斗附 (名) 刀劍の話。鞘の差裏(ウラ)にのみ熨斗附けせるもの。のしつけ(熨斗附)を見よ。宗恕聞書「うらのしつけなどは、近年人の御さし餞」

うらの-つかさ 陰陽寮 (名) (占(ウラ)の官の義)おんやうれう(陰陽寮)に同じ。

うらの-め 裏目 (名) うらがね(裏曲)に同じ。

うらは 末葉 (名) 草木の末(ウラ)の葉。記下「ほつえのえの宇良婆(ウラバ)は中巻中つえのえの宇良婆(ウラバ)のうらやすにさぬる夜ぞなき、子ろをしもへば」

うらはぎ 末矧 (名) 矢の名所。や(矢)を見よ。(もとはぎの對)

うらはく 裏箔 (名) 絹地に書きたる墨畫などの裏に、金箔をはること。

うらはず 末弭 (名) 弓の筈の名。射る時、上になる方。(本弭(ハズ)の對) 夫木三「なる矢もて鹿とりなびく夏草に、うらはずふせてねらふさつをか」太平記三十八「弓の本弭・末弭取り違へ」

うらはづかし (形) 心の中恥づかし。

うらはなあふひ 裏花葵 (名) 紋所の名。あふひ(葵)を見よ。

うらはひ 占兆 (名) うらかた(占形)に同じ。神武紀「以夢辭爲吉兆(ウラハヒ)」

うらはみ 卜食 (名) 龜の甲を灼きて占ふに、其の形の縱横に裂くること。うらかた。うらなひ。夫木「月なみのよるの祭の霜の上に、曉をまつうらはみの人」

うらば-やなぎ 裏葉柳 (名) 染色の名。柳の葉の裏の色に似たるもの。うぐひすちゃ

うらはら 裏腹 (名) うらうら(裏表)に同じ。うらおもて。表裏。浮世親仁氣質「世間には御子息故に親御のお世話をなさるる習ひなるに、お前のは裏はらにて」

うらはん 裏判 (名) 文書の裏に署する書き判、又は印判。今宮心中「そんなら父(ヒ)が裏判をと、同じくすると」

うらび-と 浦人 (名) 海人など、浦邊に住む人。源須磨「浦人のしほ汲む袖にくらべ見よ、波ぢ隔つる夜の衣を」

うらひ-びと 占人 (名) うらなひびと。

うらひ-る (自動ラ) うらぶるの轉。古今雜上「秋萩にうらびぬれば、あしびきの山下とよみ鹿の鳴くらん」壬二集「あけぬとてうらびれかへる櫛機の、衣の袖に秋風ぞ吹く」

うらふ 占 (他動ハ四) うらなふ(占)に同じ。神代紀上「以太占而卜合之」景行紀「卜(ウラフ)幸于紀伊國、將奉祭祀群神、而不吉」

うらふ-ね 浦船 (名) 浦に泛べる舟。萬忠百首「秋津島漕ぎはなれゆく浦船は、いくへか春の霞へだつる」

うらふ-みな 占文 (名) 占ひ定めたる趣きを記したる書。せんもん。うらのふみ。徒然草「吉平が自筆のうらふみの裏に書かれたる御記、近衛陽白殿にあり」

うらふ-る (自動ラ下二) 心うく思ふ。わびしくあり。うらびる。萬三「人もねの宇良夫禮(ウラブレ)をるに、たつた山みま近づかば忘らしなむか」同三「うらなけしつつ、下戀に思ひ宇良夫禮(ウラブレ)」

うらへ 占 (名) うらふること。うらごと。うらなひ。神代紀「太古之卜事(ウラヘ)」萬三「武藏ぬの宇良敵(ウラヘ)かた焼き、まさてにものらぬ君が名うらに出にけり」

うらへ 卜部 (名) 昔、神祇官に屬し、卜事(ウラヘ)を掌る職。四時祭式「卜部二人」萬三「卜部(ウラヘ)すゑ亀もな焼きそ」

うらへ-べ 浦邊 (名) 浦のほとり。千載夏「さみだれは蜑のもしほ木朽ちにけり、うらべに烟たえて程へぬ」

うらへ-た 卜田 (名) 收穫する稻穀を神に供ふるために、卜なひ定めたる田。神代紀「以卜定田(ウラヘ)號曰狹名田。以其田稻釀天甜酒嘗之、又用爲浮浪田稻、爲飯嘗之」

うら-べに 裏紅 (名) 【植】りんだう(龍膽)の異名。

うらべに-いちげ (名) 【植】毛茛科、白頭翁(アイヌ)屬の多年生草本。莖の高さ七八寸、單一にして根莖を有す。葉は二回三出複葉、各小葉は無柄、倒披針形又は倒卵形、缺刻あれど、稀に全緣なることあり。總苞の葉は殆ど相同じ。花梗は單一にして、四月頃白色の一花を其の頂に開く。我が國、北部諸所の山野に自生す。

うらほ 末穂 (名) 稻・麥などの末(ウラ)の方にある穂。

うらほたん 裏牡丹 (名) 紋所の名。ぼたん(牡丹)を見よ。

うらぼん 盂蘭盆 (名) 一うらんぼん(盂蘭盆)に同じ。七十一番歌合「うらぼんのなかばの秋のよもすがら、月にすますや我が心てい」二巡方によりては、七月十五日の祭に對し、同月廿四日の後の祭の稱とす。

うらぼん-しゃ 盂蘭盆供會 (名) 前條に同じ。四季物語「又うらぼんぐゑの法事、世になくあはれなる事の限りなるべし」

うらぼん-ゑ 盂蘭盆會 (名) 前條に同じ。

うらま 浦曲 (名) うらみに同じ。一說、うらみの誤りなりと。右雜「萬三「かつしかのままの宇良末(ウラマ)を漕ぐ船の、ふな人さわぐ波たつらしも」同三「宇良末(ウラマ)より漕ぎて渡れば」

うらまき 裏卷 (名) 掛物を卷きたる時、外に出づる所。

うらまさり-とうばい 裏勝紅梅 (名)

襲の色目の名。表は紅梅、裏は紅。春の始め用ふ。

うら-まち 裏町 (名) 表通りの裏にある町。裏通りの町。

うら-まつ 浦松 (名) 浦べに生ひたる松。夫木「はるかなるねのひが崎にすむあまは、うらまつをのみ引きや寄すらん」

うら-まつ (自動ラ四) 心の中に待つ。萬「秋風に今か今かと紐ときて、宇良麻知(ウラマ)をるに月かたぶきぬ」

うらみ 怨恨 (名) 一うらむること。人を惡み思ふこと。竹取「これよき事なり。人の恨みも有るまじ」二不滿足。不足。源夕顏「此の世に少しうらみ殘るは、わろきわざとなん聞く」

うらみ の そこ 怨底 うらみの最も深きところ。玉葉五「涙こぼれ心亂れていはれぬに、うらみの底ぞいとど苦しき」

(諺)怨み骨髓に入る 甚しく怨み思ふ。史記春秋「繆公之怨此三人、入於骨髓」

(諺)怨みを義ゆるに德を以てす 怨みを以て報ゆべきときにも、なほ德を以て之に報ゆ。老子「報怨以德」

うらみ 浦見 (名) 浦を見ること。(多く恨みにかけていふ) 蜻蛉日記「濱千鳥あとのとまりをたづぬとて、ゆくへも知らぬうらみをやせん」源須磨「鳥部山燃えし烟もまがふやと、あまのしほ焼くうらみにぞゆく」

うらみ (名) 浦の彎曲したるところ。うらま。うらわ。萬三「いなみづま浦箕(ウラミ)を漕ぎて」同三「かつしかのままの宇良末(ウラマ)若歌を漕ぐ船の、ふな人さわぐ波たつらしも」

うらみ-うた 怨歌 (名) うらみの意を述べたる歌。狹衣「ただうらみ歌を早くよみかけよと、ささめくなれば」

うらみ-がほ 怨顏 (名) うらみたるかほ。新古今「身を知れば人の咎とも思はぬに、うらみがほにも濡るる袖かな」

うらみ-ぐさ 怨草 (名) 恨みの種。淀鯉出世瀧徳「それは若草、身をうらみ草、なんのそなたに眠いたではなし」

うらみ-くち 怨口 (名) 恨みをいふ口上。傾城酒呑童子「親・請人に尋ねれば、却ってこなたを恨み口」

うらみ-こいなし (形) 互ひにうらむことなし。うらみっこなし。

うらみ-ごと 怨事 (名) 恨むやうの事。源橋姫「なぜこのおとどは、をりをり思ひ放たずうらみごとはし給ふ」

うらみ-ごと 怨言 (名) うらみていふ言葉。松の葉卷末「やまがらが籠の内でのうらみごと、籠が小籠で、もんどりうたれぬ」

うら-みごろ 裏身頃 (名) 袷・綿入などの身頃の裏ぎれ。

うらみ-ごゑ 怨聲 (名) うらむが如き聲。堀河百首「恨みつるほどのすぎやしぬらん、衣うつきぬたの音のうらみ聲なる」

うらみ-じに 怨死 (名) うらみつつ死ぬること。十調「くちをしと思ひ給ひけるにや、七日といふに、恨死にに死に給へり」

うらみち 裏道 (名) 一裏口より通ずる路。狂言鬼笑「きやつめは、いつもうらみちへはづすと申すほどに、裏へむけて參らう」二街道の外にある道。ぬけみち。間道。冥途飛脚「里の裏道・畔道を、すぢりもどりて藤井寺」

うらみ-っこ (名) 互ひにうらむこと。「うらみっこなしに分けてやる」

うらみ-っこい (名) 前條に同じ。浮世風呂「恨みっこいのねえやうに、おめえとおれと中藏斯う五人つれて行く筈だ」

うらみ-っぽい (形ロ語) ややもすればうらむやうなり。うらみがちなり。柳樽「うらみっぽい歌ばかりよむ源三位」

うらみ-つらみ (名) 彼のうらみ此のうらみ。種種のうらみ。貧我會稽山「今の怨みつらみより、增さった歎きも有らうかと思ふゆゑ」

うらみ-て 怨手 (名) うらむ人。

うらみ-どき 怨時 (名) うらむる時。清少納言集「契りてし繁きこずゑのほどもなく、うらみどきにはいかがなるらん」

うらみ-どころ 怨所 (名) うらむべきところ。後撰三「これはかくうらみどころもなきものを、うしろめたくは思はざるらん」

うらみ-なき 怨泣 (名) うらみて泣くこと。丹波與作「胸あても絞るばかりの恨泣き」

うらみ-なみだ 怨涙 (名) うらみ泣きして流す涙。關取千兩幟「連れ添ふ女房に隱してゐるお前の心がきこえぬと、怨涙に時うつり」

うらみ-ね 怨寢 (名) 怨みながら寢ること。几董句「うらみねの蒲團そなたへゆがみけり」

うらみ-ぶかし 怨深 (形ク) ややもすればうらむかたむきあり。うらみがちなり。狂言鬼笑「かれがねおうらみ深いお方でござるによって、これはお出でなされたならばようございませう」

うらみ-ぶみ 怨文 (名) 怨みを述べたる書面。賀古教信七墓廻「うら紫の恨文、くるくるしやんとひん結び」

うらむ 怨 恨 (他動ハ四) 前條に同じ。

うらむ 怨 恨 (他動ハ四) 一人の處置に對して不平を抱く。又、之を惡しく思ふ。不足に思ふ。神代紀「恨之曰」神武紀「常懷憤憤(イキドホリ)」宇津保藤原「うらむれどなげく數にもみぬ鹿や、深きあたごの峯となるらん」源夕霧「何か身をうらみんよりは松島の、あまの衣にたちやかへまし」二くちをいふ。不平を述ぶ。源藤袴「女も猶いとえんにうらみかくるを」同末摘花「うらむるもねたけれど」三悔ゆ。惜しと思ふ。回恨みをはらす。出世景清「右大將頼朝を一太刀恨み、平家の恥辱をすすがんと」

うらみ よ がし うらみよといはぬばかり。俗曲「胸のほむらの火にかけて、怨みよがしに幾筋か、解けぬ思ひの黑髮ながら」

うら-むかひ 浦向 (名) 向かひあひたる浦。謠鳥辺「此の湖より村鳥あがって、浦むかひの田をはみ候間」

うらむ-らく-は 怨 (副) 〔怨むるはの延〕怨むるには。うらめしきことには。

うら-むらさき (名) 〔うらは末の義〕紫(ウラ)といふに同じ。歌などに多く、恨むにかけていへり。詞花春下「とはぬまをうら紫に咲く藤の、何とて松にかかりそめけん」

うらめ-ぐり 浦巡 (名) 浦を巡りあるくこと。夫木「ひきつれていづ方へとかむら千鳥、うらめぐりして友さそふらん」

うらめし 怨 恨 (形シク) うらみに思ふ。殘念なり。萬三「宇良賣斯金(ウラメシ)妹のみことの、あれをばもいかにせよとか」

うらめし-け 怨氣 (副) うらめしさう。堀河百首「たのめおきしほどふるままに、さよ衣うらめしげなる槌の音かな」

うらめし-さ 怨 (名) うらめしくある

さま。うらめしき度合。源花宴「左のおと どうらめしさも忘れて、涙おとし給ふ」

うらめしむ 恨 (自動) うらめしく思ふ。うらむ。萬四「わきもこをあひ知らしめし人をこそ、懇のまされば根三(ケタ)も へ」靈異記上「怖(オソレ)美(ヨシ)来」

うらめづ (他動) 心中にてめづ。輔親集「かたしけるをみの衣のうらめでて、けさの日影はまばゆかるらん」

うらめづらし (形) 心中にめづらしと思ふ。古今秋上「わがせこが衣の裾を吹き返し、うらめづらしき秋の初風」

うらめづらしげ (副) うらめづらしさう。うらめづらしきやう。

うらめづらしさ (名) うらめづらしき度合。うらめづらしきさま。

うらもとなげ (副) うらもとなきやう。心もとなささう。

うらもとなさ (名) うらもとなきさま。心もとなき度合。

うらもとなし (形) 心もとなし。氣づかはし。萬四「いはほろのそひの若松、限りとや君が來ますぬ、宇良毛等奈久(ウラモトナク)も」

うらもひ (名) うらもふこと。繼體紀「陰謀(ウラモヒ)叛逆、猶殘(ノコリ)經年」

うらもふ (自動四) うらおもふに同じ。萬三「すがのねのねもごろいもに懇せまし、卜思(ウラモフ)心おもほえぬかも」

うらもやう 裏模樣 (名) うらにつけたる模樣。裏にある模樣。賤等環「安永・明和の頃より なる べし。そのころより、女の小袖の裏もやうはやり出でて中略表は無地別條古風の縞或ひは紋附などの無地にして、裏は模樣をつけたり」

うらもん 裏門 (名) 邸宅のうらにある門(表門の對)。後門。羽尾記「内處へ入ると見えしが、裏門より退出し、越後をさして落ち行きけり」

うらもん 裏紋 (名) かへもん(替紋)に同じ。

うらもんきってはんがしら 裏門切手番頭 (名) 江戸幕府の制。大奥に通ずる御切手門を守衛して、通行を監査する役。

うらや 裏屋 (名) 人家の裏手に建てたる家。うらだな。生玉心中上「晦日・節季は前垂掛けて、裏屋・せとや・けんどん屋三界、かけ取りに歩く樣な」

うらやくせん 浦役錢 (名) 室町時代、課稅の一日。必要に應じて、臨時に浦浦に住居せる者に課したるもの。大内家壁書「於赤間關御座船之事被仰附之處、以浦役錢可致通調之由、地下仁申請之間」

うらやくば 浦役場 (名) 主として遭難船の救護に關する事務を取り扱はしむるため、沿海の大市及び商船輻湊の地に設けたる特殊の役場。海濱の町村役場に併設するを例とす。町村制第六十九條「浦役場の事務」

うらやぐら 裏櫓 (名) 昔、江戸深川仲町にて、遊廓の側にある女郎屋の稱。(おもてやぐらの對)

うらやこうぢ 裏屋小路 (名) 裏屋にある路次。うらこうぢ。夕霧阿波鳴渡「稲荷あたりの裏屋小路を覗き廻はり」

うらやさん 占算 (名) 一うらなひし。うらな。二うらなひしや。寶卜者。卜者。狂言屋島「うらなひさん、占の御用、しかも上手なり。うらやさん、うらやさん」

うらやす (名)・心安きこと。安泰なること。萬四「春べ咲く藤のうらばの宇良夜須(ウラヤス)に、きぬる夜ぞなき、子ろをしもへば」

うらやすのくに 浦安國 (名) 心安く安泰なる國。日本國の異稱。神武紀「目(ニ)此國(ヲ)曰、日本者浦安國(ウラヤスクニ)」

うらやすみ 裏家住 (名) うらやに住むこと。又、其の人。天網島「南邊に賃仕事して裏家すみ」

うらやなぎ 裏柳 (名) 裏の色目の名。表は白、裏は萌黄。

うらやま 浦山 (名) 浦と山と。山海。山水。謠(宮島)「夫婦一所にありながら、遠き住の江・高砂の、浦山國を隔てて住むといふは、いかなる事やらん」狂言(鶴)「浦山をかかへて中略ことの外、景の多い所でござりまする」

うらやまかぜ 浦山風 (名) 浦邊の山を吹く風。十六夜日記「知らざりき浦山風も梅が香は、都に似たる春のあけぼの」

うらやまし 羨 (形) うらやむべし。ねたまし。靈異記上「妬忌(ウラヤシ)」宇津保(俊蔭)「何事ぞ、あなうらやましとのたまふ」同(藤上)「いみじうねたうらやましうおぼしたるに」

うらやましがる 羨 (他動四) うらやましく思ふ。枕三「うらやましがりて、いま一つして同じくばなどいへば、いなと仰せらるれば聞きもいれず」

うらやましげ 羨氣 (副) うらやましさう。

うらやましさ 羨 (名) うらやましくある度合。うらやましきさま。

うらやまぶき 裏山吹 (名) 襲の色目の名。表は黄、裏は濃き山吹。女房の襲も是れを五衣とし、單を青とす。物語(螢)「異説、表は黄、裏は紅。(梅擬)表は黄、裏は萌黄、或ひは紅。(物具)」春用ふ。榮華(初花)「内侍の娘、うらやまぶきども三つにて、一重ども みな打ちたり」

うらやみ 羨 (名) 一うらやむこと。枕三「なほこれ一人ばかりはなどのたまふ。うらやみあり、いかでかなど固くいふに」二そねむこと。ねたむこと。枕三「物うらやみし、身の上なげき」

うらやみねし 羨無 互ひにうらやむことなし。うらみこいなし。源玉鬘「かたかたに、うらやみなくこそものすべかりけれ」同宿木「こなたかなたに、うらやみなくもてなして」

うらやみがほ 羨顔 (名) うらやむやうなる顔つき。うらやむやうなるやうす。源末摘花「橘の木のうづもれたる、御簡身召して拂はせ給ふ。うらやみがほに、松の木のおのれと起きかへりて、さとこぼるる雪も」

うらやむ 羨 (他動四) (心ウラ)病む義) 一人のよきを見て、己れも其の如くならんことを希望す。古今序「花をめで、鳥をうらやみ」拾遺雜三「わびぬれば常はゆゆしきたなばたも、うらやまれぬるものにぞありける」二人の己れよりよきを憎く思ふ。ねたむ。そねむ。推古紀「群臣百寮、無有(ナシ)嫉妬(ウラミネタム)」宇鏡集「猜(ウラヤム)」

うらゆき 裏行 (名) おくゆき(奥行)に同じ。紺綿綿卯月紅葉「表口五間半、裏行き町並み二十間」

うらら 己等 (代) うら(己)に同じ。われら。おれら。俳諧故事談「田を刈るに暑うも寒うもあらなくに、うららがいねは色になる稲」かなをほし「近江・丹波などにては、みづからの事をうらぞ・うららなどいへり」

うらら (副) 次條に同じ。源御産「春の日のうららにさしてゆく舟は、さをのしづくも花ぞ散りける」堀河百首雜「春の日のうららに照らす垣根には、友まつ雪ぞ消えがてにする」

うららか 麗 (副) 一天晴れてのどか。ほがらか。ほんのり。うらら。宇津保(俊蔭)「いみじう高くふる雪、たちまちにふりやみて、日いとうららかに照りて」枕三「日のうららかなるに、滲絲の打ちたるを引きわたしたるやうに見えて」榮華(玉飾)「日いとうららかすぎて、暑くわびしきにもさはらず」二靡あざやか。さやか。源御産「簪のうららかなるねに、鳥の樂はなやかに聞きわたされて」三心中さっぱりとして。さわやか。はればれしく。濱松「うららかに打ちとけ給へば」

うららかげ 麗氣 (副) うららかなるやうす。うららかさう。

うららかげさ 麗氣 (名) うららかげなるさま。源野分「年たちかへるあしたの空のけしき、名殘りなく曇らぬうららかげさには、霞ならぬ垣根の中だに」

うららかさ 麗 (名) うららかなるさま。うららかなる度合。

うららけし 麗 (形) うららかにてあり。のどかにてあり。

うらりう 裏流 (名) 茶道の流派の語。(おもてりうの對)

うらわ 浦回 (名) うらみに同じ。うらま。萬一「かざはやのみほの浦廻(ウラワ)の白つつじ、見れどもさぶし、なき人思へば」新古今雜三「野べの鐘うらわの波をかこちても、ゆくへも知らぬ袖の月かげ」出觀集「あま小舟うらわの里にことづけよ、おきつ島山子規鳴く」

うらわかげ (副) うらわかさう。

うらわかさ (名) うらわかくある度合。

うらわかし (形) うらわかきさま。

うりあ 瓜 (名) 一植 瓜類の總稱。萬五「宇利(ウリ)はめば子どもおもほゆ、栗は若くみづみづし。萬四「をさとなる花橘をひきよせ、折らむとすれど宇良和可美(ウラカミ)こそ」二をさなし。わかわかし。物なれぬさまなり。蜻蛉日記「さしはなれたる谷の方より、いとうらわかき屏に」同「八月近きこころもて、見る人は猶いとうらわかく、いかならんと思ふ事しげきにまぎれて、わが思ふ事、今はたえはてにけり」

うらわけごろも 浦分衣 (名) 浦路を行く人の衣。壬二集「夕風浦わけ衣吹きはらへ、もしほのけぶり袖にたなびく」

うらわたり 浦渡 (名) 浦を渡ること。堀河百首雜「綱ゑ引くなたの小舟や入りぬらん、難波のたづのうら渡りする」

うらわ 裏繪 (名) 雜誌などの裏側の表紙にある繪。

うらんぼん 一盂蘭盆 (名) 〔盂蘭は梵語。倒懸を解く義〕陰曆七月十五日の佛事の稱。種種の飲食を盆に供へて佛及び死者の靈を祀り、冥土の苦患を救はんとすること。たままつり。ぼん。うらぼん。精靈祭(シンレイサイ)。牛靈祭(ギウレイサイ)。十七帖(夕顔)「始令(ハジメテ)大膳備(ヒ)盂蘭盆(ボウラン)」拾遺(雜)「翻譯名義集「盂蘭盆、西域之語、轉此翻倒懸。盆是此方貯食之器。三藏云、盆難百味、式貢三祭(ヲ)仰(ク)大衆之恩光、救倒懸之窘急」

うり 賣 (名) 賣ること。「うりかひ」狂言(鶴)「河原の市へ、酒をうりに遣はしてござる」

うり 瓜 (名) 一植 瓜類の總稱。萬五「宇利(ウリ)はめば子どもおもほゆ、栗は

(三)り

めばましてしぬばゆ」二(植)まくわうり(甜瓜)の異名。かげのうり・こくもちにうり・ねぢうり等あり。

(**謠瓜の愛に茄子はならぬ** 物は相應したる結果より外、生ずることなし。傾城色三味線「とかく瓜の蔓に茄子はならぬといへば、この子が成人の末も心もとなし」

(**謠瓜を二つにわったやう** 極めてよく似たるものの譬へ。謠(百万)「げにげに御申し候へば、瓜を二つにわったるやうにて候」雙生隅田川「お前が松若君かいの。扨も似たり、誰れが見ても瘠若樣、瓜を二つにわったやうな」

うりあぐ 賣上 (他動四) 一賣り盡くす。二賣り終へて代金を收む。

うりあけ 賣明 (名) 引渡物件の準備なくして賣ること。

うりあげ 賣上 (名) 一うりあぐること。營業稅法(第三條)「賣上」二うりあげきん(賣上金)に同じ。

うりあげかんぢゃう 賣上勘定 (名) 一商品を賣り上げたる代金の計算。二委託販賣の受託者が、其の委託者に對して賣上金の計算をなすこと。

うりあげかんぢゃうしょ 賣上勘定書 (名) 委託販賣の受託者が、賣上げの結果を明記して、委託者に交付する勘定書。賣上計算書。賣上仕切書。賣上仕切狀。

うりあげかんぢゃうしょちゃう 賣上勘定書帳 (名) 委託販賣の委託者が、賣上勘定書を、受取の順序に從ひて貼附する帳簿。

うりあげかんぢゃうちゃう 賣上勘定帳 (名) 商店にて、毎日の販引一切を記入する帳簿。賣上帳。

うりあげきん 賣上金 (名) うりあげそうだか(賣上總高)に同じ。營業稅法(第十六條)「賣上金」

うりあげけいさんしょ 賣上計算書 (名) うりあげかんぢゃうしょ(賣上勘定書)に同じ。

うりあげしきりじゃう 賣上仕切狀 (名) 前條に同じ。

うりあげしきりしょ 賣上仕切書 (名) 前條に同じ。

うりあげそうだか 賣上總高 賣上總額 (名) 商品を賣却して得たる一日又は一箇月の總金額。うりあげだか。うりだか。商法(第五條)「日日の賣上總額」

うりあげだか 賣上高 (名) 一商品を賣却して得たる總金額より、諸入費を控除したる殘額。純益金。二前條に同じ。

うりあげちゃう 賣上帳 (名) うりあげかんぢゃうちゃう(賣上勘定帳)に同じ。

うりあげてすうれう 賣上手數料 (名) 委託販賣の受託者が、賣上げの報酬として、委託者より受くる金錢、又は物品。

うりあげひん 賣上品 (名) 賣りあげたる品。

うりあげもとちゃう 賣上元帳 (名) うりさばきかんぢゃうもとちゃう(賣掛勘定元帳)に同じ。

うりあげる 賣上 (他動) うりあぐ(賣上)の口語。

うりあます 賣餘 (他動四) 賣りてなほ品物を餘す。うりきれず。狂言(惡)「法石都でござる。かほどに毎日持って參っても、つひに賣り餘いて戻った事がござら

ぬ」

うり-ありく 賣歩 (他動ヵ) 次條に同じ。續詞花集「女の、善きつみや召すと賣りありきけるを聞きて」

うり-あるく 賣歩 (他動ヵ) 商品を賣らんとてあるきまはる。行商す。

うり-いそぎ 賣急 (名) 機會を失ふを恐れて、急ぎ賣ること。

うり-いだす 賣出 (他動ヵ) 賣りはじむ。發賣す。うりだす。

うり-いへ 賣家 (名) うりや(賣家)に同じ。柳樽「うりいへと唐様に書く三代目」

うり-いを 賣魚 (名) 賣物にする魚。七十一番歌合「いをうり。はやくこそ六角町のうりいをの、なれぬさきより變はりはてけれ」

うり-うち 賣擊 (名) うりたたき(賣叩)に同じ。

うり-うめ 賣埋 (名) 取引所の語。先の買物に對して、其の契約期限内に轉賣し、實際に其の現物の受取をなさずして取引を完結すること。「當切には其の空會相應にありて、昨日之を賣り埋めたり」

うり-うり 瓜賣 (名) 瓜を賣る人。語籠「瓜賣が瓜ふりうりに賣りにきて、賣りうり瓜をかふる瓜賣」

うり-おひ 賣追 (名) 取引所の語。從來高直なりし相場が、早晩下落すべきを見越して、續りに賣ること。

うり-かけ 賣掛 (名) 後に代價を受け取る契約にて、物を賣り渡すこと。又は其の代價。かけ。一代玄「うりかけ取れなどいひて、十四五人の手代共、物經屋へ行く事を爭ひげる」

うり-かけ 瓜蔭 (名) 紋所の名。かげのうり(蔭瓜)に同じ。うり(瓜)を見よ。

うりかけ-かんぢやう 賣掛勘定 (名) 得意先に對する掛賣の總勘定の稱。得意先勘定。賣掛先勘定。掛賣勘定。掛先勘定。

うりかけ-さん 賣掛金 (名) 賣掛の代金。

うりかけさき-かんぢやう 賣掛先勘定 (名) うりかけかんぢやう(賣掛勘定)に同じ。

うり-かた 賣方 (名) 一物を賣る方法。二賣る方の人。賣屋のなかま。うりて。(買方の對)三江戸時代、家祿の藏米を買ひ取らんとする米商人、又は其の周旋人。

うりかた-とうほん 賣方謄本 (名) 仲買人が、委託品賣捌の手續を委託者に通知する書面。

うりかた-なかがひ 賣方仲買 (名) 賣方より証文を委託せられたる仲買。

うり-かつ 賣勝 (自動ヵ) 彼れより此れ、多く賣れる。芭蕉句「蔓蔕に今日はうりかつ若菜かな」

うり-かづら 瓜蔓 (名) うりづる(瓜蔓)に同じ。義孝集「立ちわびてはひかかりける瓜かづらならし顔にや人の見てけん」

うり-かは 賣側 (名) 江戸時代、札差に支拂ふ口錢。

うり-かは (名) 【植】澤瀉科、慈姑ヵヲ屬の多年生草本。葉はみな根生葉にして柔軟、線形、巾三四分長さ四五寸に達す。夏秋の際、葉間より五六寸の花莖を抽き、頂端に數箇の白色三瓣花を開く。我が國、各地の水田に自生す。うりかはくさ。おほぼしさう。やなぎおもだか。

うりかは-ぐさ (名) 【植】前條の異名。

うりかは-けしぐくり 瓜皮芥子括 (名) 芝居の衣裳の一。唐風の女のつくるもの。

うり-がはせ 賣爲替 (名) 送金爲替・電信爲替の如く、銀行にて賣り出だす爲替。(買爲替の對)

うり-かひ 賣買 (名) 一賣ることと買ふことと。ばいばい(賣買)。あきなひ。吉野都女楠「賣り買ひ・耕作に妨げず」二賣買する相場。あたひ。天網島「うりかひ高い世の中でも、金とたはけは澤山な」

うりかひ-てがた 賣買手形 (名) うりかひのてがた。ばいばいのてがた。

うり-かひ 賣買 (他動ヵ) 賣り又買ふ。

うり-かへで (名) 【植】めうりのきの異名。

うり-き 賣木 (名) 賣りものにする樹木。生玉心中「賣木の花に氣をはらし」

うり-きたる 賣氣 (名) 賣らんとの氣配。

うり-きたる 賣來 (他動ヵ) 引きつづき賣りて今に至る。狂言「此の茶屋は昔より樣子あって、代代うりきたったに」

うり-きよく 賣玉 (名) 取引所の語。うりもの(賣物)に同じ。「百十一圓臺より賣玉を建て」

うり-きり 賣切 (名) 一賣りきること。二賣り渡すこと。

うり-きり 瓜切 (名) 瓜を切るやうに眞二つに切ること。太平記「世三「或ひは胴中を瓜切に斬って落とされけるほどに」

うり-きる 賣切 (他動ヵ) 品物のありたけ悉く賣りつくす。狂言「河原「定めて酒も、もはや賣りきったであらうと思うて」

うり-きる 賣切 (自動ヵ) 品物のありたけ賣れる。

うり-きれ 賣切 (名) 賣りきれしこと。うりきるること。

うり-きれる 賣切 (自動ヵ) うりきる(賣切)の自動の口語。

うり-くさ (名) 【植】玄參科、あぜたうがらし屬の一年生草本。莖の高さ二三寸、よく分岐す。葉は對生、卵形、鈍鋸齒を有し、短き葉柄を具ふ。四月頃、淡紫色唇形の花を、葉腋に一箇づつ開く。我が國、各地の田野に自生す。

うり-くすり 賣藥 (名) 兼ねて調合しおきて賣るくすり。ばいやく(賣藥)。若風俗「和中散うりぐすりあり」

うり-くち 賣口 (名) うりさき(賣先)に同じ。さばけくち。販路。

うり-くづし 賣崩 (名) 多額の賣物を出だして、相場を崩落せしむること。「某の賣崩しに三十三錢と落とし」

うり-ぐひ 賣食 (名) 所有の物品を賣りて、其の日其の日の生計を立つること。傾城色三味線「神慶七つ道具の賣食といふ總外題」

うり-くらげ 瓜水母 (名) 【動】腔腸動物、水母の一種。長さ三四寸、幅一寸五分乃至二寸にして、全形は扁圓錐形、又は扁卵形をなす。體面に沿ひ八箇の纖毛板ありて縱に走る。本邦の暖海に產す。

うり-けん 賣券 (名) 賣り渡したる證據の券狀。うりけんぢやう。朽木文書「爲後日沙汰賣券之狀如件」

うりけん-じやう 沽券狀 (名) 前條に同じ。

うり-こ 賣子 (名) 商家にて、品物を賣りあるかしむる者。狂言「靜「位に負

けたらば、その方は賣子になるか」

うり-こかす (他動ヵ) 入用の器物を賣り拂ひて代價を無益に遣ひ果たす。

うり-こきやく 賣沽却 (名) 賣拂ふこと。

うり-こし 賣越 (名) 取引所の語。定期取引にて、賣買の受渡日に至らざるに先だちて、前に買ひたる額より賣りたる額の超過すること。

うり-こし 賣腰 (名) 賣方の意氣込み。

うり-ことば 賣言葉 (名) 他の怒りに觸れしむる言葉。他の怒りを求むる言葉。

うりことばに かひことば 賣言葉買言葉 他よりいひかけられたる詞に相當する返事をなすこと。惡言を言ひ返すこと。狂言「鳴「さればこそ詞を直いた中「昔も賣詞に買ふ詞とは、よういうたものぢやなあ」他我身上「世話に、賣詞に買詞、けんによなければ胸墓が」とある。をかしげなることなれども、よく理にかなひしことなり」

うり-こみ 賣込 (名) 賣りこむこと。うりさきを擴ぐること。

うり-こみ-しやう 賣込商 (名) 貿易港にて、地方荷主の委託を受けて、外國商館に賣り込む商人。

うり-こむ 賣込 (他動ヵ) 一賣り入る。二賣り讓る。賣先をひろむ。

うり-ごゑ 賣聲 (名) 行商の、商品を呼びあるく聲。

うり-さうば 賣相場 (名) 商品の原價に、諸掛り及び利益を加算したる値段。販賣すべき商品の價格。賣捌値段。うりね。

うり-さき 賣先 (名) 品物を賣りこむべき相手。うりくち。さばけくち。得意。

うりさき-しりよく-ほしよう-れう 賣先資力保證料 (名) 【商】委託販賣の受託者が、受託物賣先の支拂を保證するの場合に、普通の賣上手數料以外に、委託者より受くべき料金。代金支拂保證手數料。

うり-さぐ 賣下 (他動ヵ) 官府より、品物を民間に賣る。

うり-さげ 賣下 (名) 賣りさぐること。

うりさげ-じよ 賣下所 (名) うりさぐるところ。

うりさげる 賣下 (他動ヵ) うりさぐ(賣下)の口語。

うり-さきへ 賣支 (名) 賣りにより て相場を維持して、下落に至らしめざること。

うり-さし 瓜刺 (名) 串を五寸二三分に丸くけづりて一方にかど有る、楊枝の如きもの。古へ瓜を食する時に用ひたり。(貞丈雜記)

うり-さね 瓜核 (名) 一瓜のたね。鹿筑波「なかごまでただしき刀賣りにきて、瓜さねなりの牢人の額」二次條の略。「一うりざね、二丸額、三平額に、四長額、五まてさがった馬面頰」

うりざね-がほ 瓜核顏 (名) 瓜のたねの如く、圓くしてやや長き額。丹波與作「瓜ざね額の旦那殿」

うり-さばき 賣捌 (名) 賣りさばくこと。賣りひろむること。收入印紙賣捌規則第二「收入印紙の賣捌」

うりさばき-かんぢやう-もとちやう 賣捌勘定元帳 (名) 掛賣をなしたる商人が、其の得意先の氏名又は商號を口座として、賣捌に關する一切の勘定を整理する帳簿。賣上元帳。

うりさばき-じよ 賣捌所 (名) 賣捌をなす場所。收入印紙賣捌規則第三「郵便切手賣捌所及收入印紙賣捌所」

うりさばき-にん 賣捌人 (名) 賣捌をなす人。收入印紙賣捌規則第四「賣捌人」

うりさばき-ねだん 賣捌値段 (名) うりさうば(賣相場)に同じ。

うりさばき-のたく 賣捌委託 (名) みたくはんばい(委託販賣)に同じ。

うり-さばく 賣捌 (他動ヵ) 賣る。販賣す。賣りひろむ。

うり-さばける 賣捌 (自動ヵ) 品物よく賣れゆく。

うり-ざら 瓜盤 (名) 瓜を載する盤(ザラ)。仁賢紀「立置刀子於瓜盤(ザラ)」

うり-したぶ 賣慕 (他動ヵ) 取引所の語。賣手の意にかなふ時機ありて、續りに賣る。

うり-しぶる 賣澁 (他動ヵ) 賣手の滿足する相場なくて躊躇す。

うり-しろ 賣代 (名) 品物を賣りて得たる代金。うりあげ。

うりしろ-なす 賣代爲 賣り上げて錢とす。

うり-すゑ 賣据 (名) 家屋など、すゑ置きのまま賣ること。

うり-そそぐ 賣注 (他動ヵ) 取引所の語。賣物を盛んに出だす。うりたたく。

うり-そへ 賣添 (名) 取引所の語。賣手の賣る時、他の人來たりて之に壓接を與ふること。

うり-ぞめ 賣初 (名) うりはじむること。うりだし。狂言「河原「善い酒かきいて見て賣らせうと申せど、いやまだうりぞめ致さぬと申して飲ましませぬ」

うり-だうぐ 賣道具 (名) 賣り拂ふ道具。「雪女五枚羽子板「折紙は百貫、町人方の賣道具」

うり-だか 賣高 (名) うりあげそうだか(賣上總高)に同じ。

うり-だし 賣出 (名) 一うりだすこと。賣り始むること。發賣。二或る時日を限り、特別に安賣すること。三世間に名を弘むること。

うり-だす 賣出 (他動ヵ) 一賣り始む。發賣す。うりいだす。二世間に名を弘む。

うり-たたき 賣叩 (名) うりたたくこと。うりうち。「軟派の賣叩」

うり-たたく 賣叩 (他動ヵ) 盛んに賣りて、相場を非常に下落せしむ。

うり-たて 賣建 (名) たて(建)を見よ。

うり-だにいし 瓜溪石 (名) 紀伊國日高郡南部川の支流なる瓜溪(ダニ)より產する石。概ね青色を帶び、盆石に用ふ。

うり-だね 賣溜 (名) 次條の略。源氏十二段長生鳥蓑「さざ大分にまうけがあらん、さあさあ賣溜め見せよ」

うりだめ-きん 賣溜金 (名) 賣上げ代金のたまりたるもの。うりだめ。

うり-ち 賣地 (名) 賣る土地。うりぢめん。

うり-ぢめん 賣地面 (名) 前條に同じ。

うり-ちやう 賣帳 (名) 賣りたる品物と其の代金とを記す帳簿。

うり-つく 賣附 (他動ヵ) おしつけに賣る。强ひて買はしむ。

うり-つくす 賣盡 (他動サ) 有る限りを賣りて、一つも無きやうにす。宇津保 忠こ「みくしげの物、さては田・はたけうりつくして」

うり-つくり 瓜作 (名) 瓜をうる作る人。催馬樂「山城のこまのわたりのうりつくり、なよや、らいしなや、さいしなや」拾遺 雜下「晉に聞くこまのわたりの瓜つくり、となりかくなりなる心かな」

うり-づけ 瓜漬 (名) 瓜の漬もの。

うりつけ-はうこうしょ 賣附報告書 (名) 仲買人が商品賣買の顚末を賣買兩者に報告するに當たり、其の賣手に報告する書狀。商品の數量・價格・引渡しの時期、代金受取の期限、仲買手數料等を記載するもの。

うり-つける 賣附 (他動) うりつく (會附)の口語。狂言 合巻「おのれは横著者ぢや、渋柿を賣りつけうとした」

うり-つなぎ 賣繋 (名) 取引所の語。現物の所有者が、其の現物を定期取引に賣建をなすこと。「持株筋の賣繋ぎ」

うり-づめ 賣詰 (名) 絶間なく賣ること。吉野忠信「明日からでも、外からなら、年中なりとも賣りづめよ」

うり-づら 瓜蔓 (名) 次條に同じ。義孝集「何事もなるともなしに瓜づらの、名にのみ立たん事の怪しき」

うり-づる 瓜蔓 (名) 瓜の蔓。うりづら。うりかづら。謠 小塩「蔓かなくに何を種とて瓜づるの、畑のうねをまろびころびあるくらん」

うり-て 賣手 (名) 賣る人。うりにん。うりかた。うりぬし。(賣手の對)

うり-どころ 瓜所 (名) 瓜を產するところ。小大君集「うりどころここにはあらじ、山城のつらを尋ねて我れならさなん」

うり-とばす 賣飛 (他動サ) 惜しげなく賣り拂ふ。

うり-なかがひ 賣仲買 (名) 商品の賣捌方に關して、他人の商行爲を媒介する商人。

うり-ながす 賣流 (他動サ) 遠方へ賣りやる。賀古教信七墓廻「如何に勸めとて、此の神崎まで賣り流され、繁昌の全盛のといはれて、譯の立つべきか」

うり-なほし 賣直 (名) 取引所の語。新規に更に賣ること。「解合をなしたる後、直ちに中限の賣直しをなす」

うり-にん 賣人 (名) うりて(賣手)に同じ。

うり-ぬし 賣主 (名) 一物を賣る人。二賣買によりて、相手方に財產權を移轉する義務を負ふ人。民法 第五百五十七條「賣主」

うり-ぬし 瓜主 (名) 瓜の持ちぬし。狂言 瓜盜「瓜ぬしかと思ひ、幾せの思ひ迷惑した」

うりぬし-かぶ 賣主株 (名) 或る事業を會社組織に變更するとき、其の事業の關係人が、現金の代りに受くる株式。

うり-ぬすびと 瓜盜人 (名) 一瓜を盜む人。狂言 瓜盜「是れはいかさま、けだ物のわざではない。瓜盜人め、ゆふべうせたものであらう」二悖德なる人を朝りいふ語。蓮如上人御文章「たとひ瓜ぬすびとといはるとも」

うり-ね 賣直 (名) 賣るべき價。うりさうば。ばいか(賣價)。元直の對)

うり-のき 賣退 (名) 取引所の語。先の買ひを不利益と見たるとき、下落に先だち、轉賣して其の賣買を終了すること。

うり-のき 瓜茱萸 (名) 【植】一瓜茱萸科、うりのき屬の落葉灌木。幹の高さ一丈に達す。葉は互生、廣濶なる掌狀脈葉にして、やや梧桐(アヅサ)に類す。五六月の頃、葉腋より花梗を出だし、數箇の白花を著け、顚る甜瓜(マクワ)に似たる香氣を有し、花瓣は外反する傾きあり。果實は漿果なり。我が國、各所の山地に自生す。うりはのき。かうもりかへで。かはほりかへで。こんじのき。はなうり。二うりはだかへでの異名。

うり-のせ 賣乘 (名) 取引所の語。賣りにより利益ありと見たる場合に、更に其の賣玉を增すこと。「紋淵の賣乘せ」

うり-ば 賣場 (名) 一賣品の賣捌をなす一定の場所。女殺油地獄「はためく門の幟の音、あふちに賣場の火も消えて」二劇場にて、棧敷・土間の見料を掌る所。又、其の所の役員。

うり-ばう 瓜坊 (名) 豬の兒。(幼獸 豬)

うりはだ-かへで (名) 【植】槭樹(カヘデ)科、槭樹屬の落葉喬木。幹の高さ三丈、樹皮綠色なり。葉は對生にして心臟形、通常三乃至五淺裂し、各裂片は三角形、銳頭にして、葉脚に近き裂片は甚だ小なる を常とす。葉後は何れも鋸齒を具ふ。春日、淡黃色の花を開き、總狀花序に排列す。我が國、各所の山地に自生す。うりのき。おほうりかへで。かもうりかへで。

うり-ばたけ 瓜畑 (名) 瓜をつくる畑。瓜をつくりたる畑。狂言 瓜盜「方方に瓜ばたけが數多ござれども、今日見ておいたやうな見事な瓜はござらぬ」

うりはーのき 瓜茱萸 (名) 【植】うりのき の異名。

うり-はへ 瓜蠅 (名) 【動】鞘翅類、金花蟲科に屬する昆蟲。體の長さ二分四厘乃至二分六厘。體は濃黃褐色にして、前胸に深き橫溝を有す。年に二三回の發生をなし、成蟲にて冬を越え、翌春出でて胡瓜・西瓜・南瓜等の葉を食害する害蟲。和名抄「爾雅注云、蠰一名、守瓜字洞食瓜葉者也」

うり-はらひ 賣拂 (名) うりはらふこと。賣却。

うり-はらふ 賣拂 (他動ハ) 賣り放つ。賣りすつ。

うり-ひろぐ 賣弘 (他動ナ) うりひろむ(賣弘)に同じ。

うり-ひろげる 賣弘 (他動ナ) 前條の口語。

うり-ひろむ 賣弘 (他動ナ) 廣く賣り出だす。うりひろぐ。

うり-ひろめ 賣弘 (名) うりひろむること。

うり-ひろめる 賣弘 (他動ナ) うりひろむ賣弘の口語。

うり-ぶね 瓜生 (名) 瓜のはえてある處。瓜畑。長方集「しばかこふ園のうりふの一つらに、なるとしならばまくりあへかし」

うり-ぶね 瓜舟 (名) 瓜を二つに割りたる其の一片、舟の形したるよりいふ。散木集 遠雜「うり船はうみすぎてこそ參りたれ、浪に振られてみなそこに見ゆ」二かしぶね(食船)に同じ。

うり-ぶね 賣船 (名) 一賣るべき船。二「賣船の船頭ふぜい、軍といふ物は夢にも見たこともござらぬ」

うり-へぎ 賣剝 (名) 他人の物を賣りて、其の代價の幾分を私すること。長町女殺切「先度の脇指三十二兩に賣り拂ひ中間八兩で買ひ替へ、二兩で銘を彫らせ中間其の賣りへぎの二十兩」

うり-べらし 賣減 (名) うりへらすこと。

うり-へらす 賣減 (他動サ) 品物を賣りて數を少なくす。損をして資本を減ず。

うり-まい 賣米 (名) うりよね(賣米)に同じ。

うり-まはる 賣廻 (他動ラ) 賣らんとてあるきまはる。狂言 酢茎「一人の酢うり、禁中をうりまはる」

うり-まろび 瓜轉 (名) 瓜の如くまろぶこと。行宗集「ふく星の今日より見ゆる身にしあれは、瓜まろびして悅びぞする」

うり-むかひ 賣向 (名) 買方に對して賣ること。「强氣の買ひに對して、紋淵の賣向ひあり」

うり-もつ 賣持 (他動タ) 賣ることを為す。うりはじむ。狂言 酢茎「この邊から賣りもつて參らう」

うり-もの 賣物 (名) 賣渡しの目的となる物件。賣るべき品。販賣品。「紋淵の賣物絕えず」宇治拾遺「うり物など持たせて、きて見るに」

うりもの やすもの 賣物安物 公然と賣る物には、やすくて下等なるもの多きこと。天網島「ええ流石賣物安物め、どしやう骨見遣へ、魂を奪はれし巾著切め」

うりもの-け 賣物氣 (名) 賣物らしき樣子。商賣氣。百合若大臣野守鏡「そこへ見える女房衆、町人でなし、武家でなし、賣物けも離れた。合點がいかぬ」

うりもの-ちゃう 賣物帳 (名) 日日賣却せる商品を記入する帳簿。

うりもの-みせ 賣物店 (名) 賣物をならべたるみせ。賣店

うり-もみ 瓜揉 (名) 瓜を薄く刻み、鹽にて揉み、三盃酢をかけたるもの。

うり-や 賣家 (名) 賣るべき家。うりいへ。

うり-や 賣屋 (名) 取引所の語。賣りによりて利を射んとする人。

うりや さしきん 賣屋差金 定期取引に於いて、相場の變動の爲め契約解除を行ふ時、賠償として賣主より買主に支拂ふ打歩。

うり-やう 賣樣 (名) 賣るやうす。賣る方法。うりかた。狂言 貳盃「なるほど賣りやうがござる、賣りましよ」

うり-やう 一雨量 (名) 雨又は雪などの降りたる分量。降水量。雨雪量。

うりやう-けい 一雨量計 (名) 亞鉛又は銅などにて製りたる圓筒器にて、雨量を量る具。

うりよう 一雨龍 (名) あまりよう(雨龍)に同じ。

うり-よね 賣米 (名) 貯へたる米を賣り出だすこと。又、其の物。うりまい。(かひよねの對)

うり-わたし 賣渡 (名) 賣り渡すこと。

うりわたし-しょう 賣渡證 (名) 次條の略。

うりわたし-しょうしょ 賣渡證書 (名) 商品賣渡しの證として、其の種類・數量及び代價等を記載し、賣主より買主に交付する書面。賣渡證。

うり-わたす 賣渡 (他動サ) 賣りて物品を渡す。

うり-わり 瓜割 (名) うりぎり(瓜切)に同じ。狂言 鬼瓦「瓜わりにしてやらう」

うり-をしみ 賣惜 (名) 賣り放すことを躊躇すること。

うり-りん 一羽林 (名) この名ふ(近衞府)の唐名。漢書 百官公卿表「又期門羽林皆屬焉。師古曰、羽林亦宿衞之官、言其如一羽之疾、如一林之多也」

うりん-け 一羽林家 (名) 古への公卿の家格。侍從より近衞府の中少將になりて、大中納言・參議に昇るを得るもの。

うりん-じしゃう 一羽林次將 (名) この名のせうしゃう(近衞少將)の唐名。

うりん-じゃうしゃう 一羽林上將 (名) この名のたいせう(近衞大將)の唐名。東鑑 正月十一日、建久三年「羽林上將」

うりん-たいしゃうぐん 一羽林大將軍 (名) 前條に同じ。

うりん-ちゅうらうしゃう 一羽林中郎將 (名) この名のちゅうじやう(近衞中將)の唐名。

うる 粳 (名) 稻・粟・黍等の種子の、炊ぎて粘(ネバ)り少なきもの。(糯(モチ)の對) 和名抄「秔米 字書云、粳」

うる 賣 (自動ア) 商品よく賣れゆく。買はれる。うれる。狂言 太郎冠「たとへ賣初めをせぬ内に人にふるまうたとて、賣るる酒ならばうれうぞ」

うる 賣 (他動ア) 一代金を受けて物を渡す。ひさぐ。うりさばく。販賣す。古今 雜下「家をうりてよめる」二名を世に弘む。「近來急に賣りだした人」三自ら街ひて名を求む。四欺く。だしぬく。「友をうる」

うる-あは (名) 【植】あは(粟)の異名。

うる-い (名) 【植】たうぎばうしゆ(玉巻)の異名。

うる-か (名) 鹽づけの香魚(アユ)の腸。又、鮎の子のみを鹽漬にしたるを子うるかといふ。拾遺 雜五「この家のうるかいりても見てしがな、あるじながらもかはんとぞ思ふ」七十一番歌合「いをうり。かつらを鹽にして揉み、三盃酢をかけたるもの。

うるか 鮎捕りてうるかとやみまたば、月の價はなくなりぬべし」驟鱗。

うるさ (名) 【植】稷(キビ)の一品種。種子の含有物に粘力少なきもの。主として食用に供す。

うるさ-さび (名) 【植】稷(キビ)の一品種。種子の含有物に粘力少なきもの。主として食用に供す。

うるけ-ぢ (名) 古語。うるぢ(字流鈎)に同じ。神代紀 一書 蹴鞠鈎、此云二于棲底鼠一(ウルケヂ)

うるける 潤 (自動ア) うるほふ。うるふ。ふやける。

うる-ごめ (形) うるうち(粳)に同じ。

うるさ (形) うるさし の略。「うるさ加げん」源野分「末の世に餘るまでざえたぐひなくうるさながら、人としてかく難なきことは難かりける」

うるさ-うるさ (副) うるさく。煩はしく。六帖 秋萩の玉まくくずのうるさうるさ、われをな戀ひそあひも思はず」

うるさ-がる (他動ラ) うるさく思ふ。煩はしく思ふ。後撰 戀四「つねに來てとて、うるさがりて隱れければ」

うるさ-げ (副) うるささう。うるささ。

うるさ-さ (名) うるさくあるさま。うるさき度合。

うるさし (形ク) 煩はし。厭はし。勢語「武藏あぶみさすがにかけて頼むには、とはぬもつらし、とふもうるさし」枕「いみじう呼く人のあるに、うるさしなどいひ合はせて、ねたるやうにてあれば」名義抄「煩(ウルサシ)」

うるさし (形ク) 一うるせしに同じ。枕「すべて花のにほひなど、咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけん」二巧みなり。

枕に、ただごとには、うるさく思ひよりて侍りつかし」

うるし 漆 (名) 一、植漆樹科。漆樹の落葉喬木。幹の高さ三丈。葉は羽狀複葉。各小葉は卵形又は橢圓形、鋭頭全緣なり。六月頃、黄色小形の花を開き、單性雌雄異株、圓錐花序に排列す。果實は扁圓形の小漿果にして、十月頃黄熟す。東部亞細亞の原産にて、我が國、各地に栽培せらる。樹皮を傷けて漆汁を採り、果實よりは又蠟を搾り取りて蠟燭を製す。材も亦用ふべし。和名抄「漆 ウルシ」 二、漆の樹皮を傷け、流出する樹脂を採り、乾燥劑及び著色劑を加へて製せるもの。塗物を製するに用ふ。成分は重に、水分・漆酸・護謨質・含炭素物・揮發性酸及び油分より成る。其の油分多きは劣等品なり。

うるしい (形口語) うれし(嬉)の活用、うれしきの訛り。ト養狂歌集「みやげとて、木地の三組の重箱を賜ばり、堅地申し附けたり。塗りて使へとて、是れも欲よみおこせと有りければ、當世はやり言葉にてよめる。たまはりし木地三つ組の塗物は、うるしいうるしいかたぢゆうけない」

うるしいし 漆石 (名) 色黑く光澤ありて漆の如き石。北國に多く産す。こくえうせき。からすいし。

うるしかき 漆掻 (名) 漆の液を掻き取ること。

うるしがき 漆書 (名) 又、これをとる人。

うるしがき 漆書 (名) しっしよ(漆書)に同じ。

うるしかせ 漆乾 (名) 漆の毒に中たりて、斑なる點を生ずる皮膚病。うるしまけ。うるしくひ。和名抄「漆菁 ウルシカセ 漆之人見之漆中毒其菁而膿、是也」

うるしかぶれ 漆 (名) 次條に同じ。

うるしくさ (名) 【植】褐色藻類、うるしぐさ屬の海藻。體は褐色絲狀、再三分岐し、薄き膜質なり。中肋を有し、緣邊に毛あり。我が國、北部地方の淺海に自生す。

うるしくひ 漆喰 (名) うるしかぶれに同じ。

うるしくわ 漆樹科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。本科に屬するものは木本なり。往往辛味ある樹脂又は乳糜の液汁を含む。葉は互生、稀に對生のものありて托葉無く、單葉又は複葉なり。花は小形、整齊、單性又は雜性、或ひは兩性花なり。萼は三乃至七裂し、離瓣花冠は赤雽と同數の花瓣より成り、之と互生す。花盤を有し、扁平なる盃形又は環形をなす。雄蕊は花瓣と同數又は倍數、花盤の基部に著生す。雌蕊は單室又は四乃至五室、上位子房を有し、花柱は一乃至三本なり。子房は各室に一胚珠を有す。果實は小核果なり。新舊兩世界の熱帶に分布し、温帶には少なし。有用なる種類少なからず。しつじゆくわ。

うるしげし (名) 【植】ほろし(芻羊泉)の異名。

うるしこし 漆漉 (名) 漆を漉すに用ふる吉野紙の稱。うるしこしがみ。狂言「漆漉に水を入れて飲まんとすれば、程なく火焔と燃え上がって」天網島「漆漉程な薄元手で」

うるしこしがみ 漆漉紙 (名) 前條に同じ。

うるしざいく 漆細工 (名) 器物に漆を塗りて細工すること。又、其の器物の稱。うるしぬり。

うるしぢ 漆地 (名) 漆にて塗りたるもの。

うるしぬり 漆塗 (名) 一、漆にて物を塗ること。又、其の器物。うるしざいく。天武紀上「漆絵 ウルハタノリ 縁」和名抄「疊子 ウルハタノリ 出雲佐陀」 二、漆を塗るを業とする人。字治拾遺「漆の價のほどはまづ得て、箔もきせ、うるしぬりにも取らせんといひけれども」

うるしね (名) 粘力少なき米、又は粟。和名抄「秫米 本草云、秫米 ウルシネ 一名、粳米 字鏡」

うるしはぎ 漆矧 (名) 矢の羽の下を白き片絲にて卷き、其の上を漆にて塗りたるもの。頭文 高忠聞書「うるしはぎの事 中略 絲の上を何も濃き赤うるしに塗るべき也」

うるしはけ 漆刷毛 (名) 漆を塗るに用ふる刷毛。狂言「あら心うるしばけの、ばけそこなはばいかがならん」

うるしばたけ 漆畑 (名) 漆を植うる畑。江戸時代、檢地にて、この畑を上上の位とす。地方凡例錄「漆畑」

うるしぶぎやう 油漆奉行 (名) 江戸幕府の職名。勘定奉行の支配に屬し、燈油の支給、漆の收納及び社寺の什器等の事を掌る。

うるしべーつかさ 漆部司 (名) ぬりべのつかさ(漆部司)に同じ。

うるしへら 漆篦 (名) 漆を塗るに用ふる篦。大鏡 狂言「平六 中略 漆へら持つ」

うるしまけ 漆負 (名) 一、うるしかぶれに かかり易きこと。 二、うるしかぶれ。うるしくひ。

うるしむろ 漆室 (名) 漆を塗りたる器物を入れ置きて乾かす處。註和名抄「窰 ウルシムロ 漆室」

うるしもん 漆紋 (名) 漆にて畫きたる紋形。窰のすきみ「生平のかたびらに漆紋などつけ」

うるしや 漆屋 (名) 漆を製して賣る店。

うるしゆみ 漆弓 (名) ぬりゆみ(塗弓)に同じ。兵部省式「凡武官人等、皆用漆弓」

うるしゑ 漆繪 (名) 一、漆塗りの器物に、更に色漆又は生漆にて畫きたる繪。 二、錦繪などにて、墨刷のうへに膠を塗りて漆の如く光らせ、又金泥などをも用ひたるもの。嬉遊笑覽 膠脂畫。

うるせし (形) 善し。心ざまうるはし。宇津保 初秋「仁壽殿はうるせき人にぞありけれ 中略 手など走り書き」宇治拾遺「かしこく、心ばへもうるせかりければ」

うるち 粳 (名) 粘力少なき米。飯に炊きて常食とす。うるごめ。

うるぢ (名) 古語。不雲 アマ 竿を釣るといふ釣針。のろひていへる語。うるけぢ。記上 宇流 ウルヂ 鉤 ハリ

うるちさび (名) 【植】きび(稷)の異名。

うるちごめ 粳米 (名) うるち(粳)に同じ。

うるつぶさう (名) 【植】玄參科、うるつぶさう屬の多年生草本。地下に匍匐せる根莖を有し、葉は肉質、長卵形又は倒卵形、鋸齒を有し、根生葉は葉柄を具ふれども、稍葉はそを缺き、葉腋に穗狀花序を著け、夏日紫色の花を開く。我が國、北部の高山に自生す。

うるはし 麗 (形) 一、つくし。つやつやし。たをやかなり。記「たたなつく青垣山、こもれるやまとし宇流波斯 ウルハシ」 神代紀上「光華明彩 ウルハシ 沃 ウルハシ 姝 ウルハシ 美 ウルハシ」同「嬋娟 ウルハシ 美 ウルハシ 麗 ウルハシ 姝紀 上」 二、いとほし。いつくし。親しみ愛す。記下「宇流波斯 ウルハシ と、さねしさねてば」萬「宇流波之 ウルハシ とあがもふいもを、思ひつ

つ行けばかもとな行きあしかるらむ」 三、友情厚し。仲よし。神代紀「天稚彥 中略 與二味耜高彥根神一友善 ウルハシ」勢語「むかし男、いとうるはしき友ありけり」善・交功紀 回、祇れず正し。端正なり。宇津保 中略 穴を求め給へど、いみじくうるはしく造りたれば、ひまもなし」枕「いとよくうるはしうて來たり。あらず、私事なり」

うるはしけ 麗氣 (副) うるはしさう。うるはしきやう。

うるはしさ 麗 (名) うるはしくあるさま。うるはしき度合。

うるはしだつ (自動ツ) うるはしきさまに見ゆ。源 若菜「うるはしだちてはかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心ちするを」

うるはしむ (他動四) うるはしく思ふ。親しみ愛す。記「みちのしり、こはた少女は、爭はず寢しくをしぞも宇流波志美 ウルハシ 思ふ」

うるはす (自動四) 古語。心を通ず。親しむ。欽明紀「腹心 ウルハス 新羅 中略 陰搆 對心」

うるひ 潤 (名) うるふ(潤)こと。うるほひ。夫木「咲く花のかざいろはとてふる雨の、はぐくみたつるうるひとぞ見る」

うるひ 閏 (名) うるふ(閏)に同じ。六帖「うるひさへありて行くべき年だにも、春に必ずあふよしもがな」

うるひ (名) 【植】でふにひと(筋骨草)の異名。

うるひいろ (名) 打疵などの色附きたる如き色。うるみいろ。

うるふ 閏 (名) 閏ひて餘りあふ義。太陽曆に三百六十六日の年をいふ。地球の太陽を一周するには、三百六十五日二四二二を費やす故に、三百六十五日を平年とすれば、四年の後には零日九六八八の剩餘を生じ、ほぼ一日となるを以て、これを二月の終りに加へて二十九日となすを例とす。此の年を閏年といふ。かくして四年間の不足を積み、四百年間に三回の閏年を省く。太陰曆にては三百六十日を平年として、之を十二箇月に分かち、剩餘を積みて一箇月とし、之を一年に加へて閏月といひ、五年に二回、十九年に七回の閏月をおく。蜻蛉日記「といふほどに、うるふさ月にもなりぬ」

うるふ 潤 (自動四) うるほふ(潤)に同じ。公任集「一つ雨にうるふ草木はことなれど、終にはもとにかへらざらめや」榮華 月蓮「あめの下とみの小川の末なれば、いづれの秋かうるはざるべき」名義抄「霑 ウルフ」

うるふ 潤 (他動四) うるほす(潤)に同じ。著聞「そこにも、のんどうるへ給へといへば」

うるふづき 閏月 (名) うるふ(閏)を見よ。欽明紀「以去年閏月 ウルフヅキ 四日、到來」古今序「やまひにうるふ月ありける年、よみける」蜻蛉日記「年ごとに餘れるこひか君がため、うるふ月をばおくにやあるらん」

うるふどし 閏年 (名) うるふづきのある年。うるふ(閏)を見よ。

うるほす 潤 (他動四) 一、水氣を含ましむ。ぬらす。しめす。ひたす。長秋詠藻「昨日こそうるほす雨のけしきにて、時にあふひの昔とぞ思ふ」宇鏡「潤 ウルホス」 二、利益を施す。富ます。豐かにす。 三、恩澤を受けしむ。

うるほひ 潤 (名) 一、うるほふこと。しめり。散木集 雜 植名おきし心のはちすひらけなん、顯ふ淚をうるほひにして」 二、富むこと。まうけ。利潤。利益。 三、めぐみ。恩惠。輔親集「うるほひにぬるべき身とし知りぬれば、降る夏の夜の雨もうれしき」

うるほふ 潤 (自動四) 一、不氣を含む。ぬる。しめる。皇極紀「流汗沃 ウルホフ 身」新古今 雜 「おほみ田のうるほふばかりせきかけて、ゐぜきに落とせ川上の神」 二、富む。豐かになる。まうかる。心中萬年草「二親、屋ない打ちうるほひ、はあ目出度い目出度い」 三、恩澤を蒙る。惠みを受く。保元 物語 河原「恩光に照らされ、德澤に潤ひ」

うるまに (名) 【植】いちゐ(一位)をいふ、北海道の方言。

うるみ 潤 (名) うるむこと。にごり。

うるみいろ 潤色 (名) うるみたる色。うるびいろ。

うるみーしゅ 潤朱 (名) 黑色を帶びたる朱の漆塗。

うるみーわん 潤椀 (名) うるみ朱の椀。

うるむ 潤 (自動四) 一、透明ならず。すきとほらず。曇る。玉また漆の色など) 二、くもりて鮮かならず。光澤うすし。(染皮色など) 三、羽たれ又つめられなどして、皮膚に青黑く色づく。和名抄「痍 漢書音義云、痍 ウルム 以杖擊人、其膚皮起青黑也」萬「忠百首「かたみにとうるむばかりもつみしかな、人にすみれの花と知る知る」 四、涙勝ちに朦濃る。

うるめ 潤目 (名) 【動】次條の略。

うるめいわし 潤目鰯 (名) 【動】鰊類、にしん科に屬する魚。體形いわしに似たり。身長六寸許りにして狹長、背鰭に腹鰭より前方に位す。體の背部は淡蒼色にして、腹部は白色に黄味を含む。我が國、南海に多く産す。うるめ。

うるりこ 細魚 (名) 【動】小魚の名。篁註和名抄「生魚、いさ(鮧)の一名なりと。和名抄「細魚 ウルリコ 古」

うるるく (自動四) 古語。おそる。をののく。わななく。名義抄「怯 ウルルク 怯 ウルルク」

うれ 末 (名) 木又は草の末端。すゑ。うら。梢。萬「のち見むと君が結べるいはしろの、こ松が宇禮 ウレ を又見けむかも」同「とよ國のきくの池なる菱の宇禮 ウレ を、つむとよやいへがみ袖ぬれけむ」古今 雜 上「笹の葉にふりつむ雪のうれを重み、もとくだちゆく我が盛かりはも」

うれ 賣 (名) 賣れゆくこと。賣れゆき。賣れ口。「賣れがはやい」「賣れが遠い」

うれくち 賣口 (名) 賣れゆき。賣れさき。販路。

うれこみ 賣込 (名) 賣れこむこと。

うれこむ 賣込 (自動四) うれくち附く。うれて行くやうになる。

うれさき 賣先 (名) 賣れ行くさき。うれくち。

うれさむ 賣醒 (自動四) 賣れ口がへりゆく。商ひ衰へゆく。風流軍配團「つひにはうれさめて、次第にあきなひ薄くなりぬ」

うれし 嬉 (形シク) 心樂し。喜ばし。愉快なり。續紀「有 中略 志 ウレシ 與呂許保 中略 見 義」萬「あめつちとあひ榮えむと、大宮をつかへまつれば、たふとく宇禮 ウレシ 之伎 ウレシ」

諺うれしやみず 古へ喜び事のありたる時、うたひはやしたる詞。辨内侍日記「たちかへし、うれしや水とはやす 中略 長やす、一膚になりたる悦びやと聞く

も」平家「藤」うれしや太、鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずたちたり」と囃しつつ」

うれし-がほ 嬉顔（名）うれしさうなる顔。風雅抄「ますげ生ふるあら田に水をまかすれば、うれしがほにも鳴くかはづかな」

うれし-がらせ （名）うれしがらしむる詞。うれしと思はしむる言。八笑人「所繁昌、家繁昌、その外うれしがらせ、うけの善き事ばかり云ひならべ」

うれし-がる 嬉（自動）うれしく思ふ。枕「さらばいかにめでたからんなど申す。うれしがりて」

うれし-げ 嬉氣（副）うれしさう。うれしきさま。古今「玉かつらはふ木あまたに成りぬれば、たえぬ心のうれしげもなし」

うれし-けく 嬉（副）うれしく。よろこばしく。萬「ここをしもあやにたふとみ、字禮之家久（ウレシケク）いよよ思ひて」

うれし-さ 嬉（名）うれしきさま。うれしき度合。源「うれしさを今日は何にかつつむらん、朽ちはてにきと見えし袂を」

うれし-さう 嬉（副）うれしきやう。うれしげ。狂言「鬼の國」にとり當たったというて、今のやうに嬉しさうに、鬼はこれに候と申しまする」

うれし-なき 嬉泣（名）嬉しさの餘りに泣くこと。砂石集「餘りの事にて、うれしなきにぞ泣きける」

うれし-なみだ 嬉涙（名）うれしさの餘りに出づる涙。感涙。浮世風呂「少しうれし泪で、泪ぐみたるおもむき」

うれし-の-ちや 嬉野茶（名）肥前國藤津郡不動山嬉野邊より製出する一種の茶。

うれしぶ 嬉（自動）次條に同じ。欽明紀「踊躍歡喜（ウレシブ）、不知所如」萬「思ひのべ字禮之備（ウレシブ）ながら、枕つくつまやのうちに」宇津保「俊蔭」かくなんときしめさば、いかにうれしびの給はん」和漢「悅色」

うれしむ 嬉（自動）うれしく思ふ。うれしがる。推古紀「有大幸而泊聖帝之邊境、以歡喜（ウレシブ）」欽「遊」

うれ-たか 賣高（名）商品の賣れる數量。又は其の價格。

うれたけ 憂氣（名）うれたき度あひ。うれたきさま。神樂「榊」きりぎりすのねたさ宇禮太佐（ウレタサ）」

うれたし 憂（形）一うれはし。歎かはし。記上「宇禮多久（ウレタク）も鳴くなるとりか」神武紀「慨哉（ウレタシカナ）」

うれたさ 憂氣（名）うれたき度あひ。

うれたす 賣出（自動）一販路次第に廣がる。賣れはじまる。二世間に名が弘まりゆく。

うれつ 優劣（名）いうれつ（優劣）に同じ。

うれつ 羽裂（名）古語。羽狀に分裂すること。

うれ-づく 賣（名）古語。「うれはうれたく、づくは價ひの義なり」うれたく思ひて出だす賭物（カケノ）。記「山河之物悉備設、爲宇禮豆玖（ウレヅク）」云爾中略其兄懷佩弟之婚、以不價其宇禮豆玖（ウレヅク）之物」中略元亨釋書「

うれ-っこ 賣子（名）一流行の藝娼妓。二富世に盛んにもてはやさるる人。

うれ-のこり 賣殘（名）うれのこること。又、その品物。

うれ-のこる 賣殘（自動）賣れずに後へ殘る。

うれは 末葉（名）末の葉。うらは。拾遺「員外」はつ雪の窟の吳竹ふしながら、おもるうれはのほどぞ聞こゆる」夫木「み山ぢをゆふ越えくれば椎柴の、うれはにつたふ玉霰かな」椎柴。

うれはし 憂（形）憂ふべきさまなり。なげかはし。なげかはし。古今「足引の山田のそほづおのれさへ、我れをほしといふうれはしきこと」名義抄「憂（ウレハシ）」

うれはし み うれはしさに。後撰「厭はるる身をうれはしみいつしかと、あすか川をもたのむべらなり」

うれはし-げ 憂氣（副）うれはしさう。うれはしきやう。

うれはし-さ 憂（名）うれはしきさま。うれはしき度合。源「ここら悲しきさまざまのうれはしさは、さしおかれて」

うれひ 憂（名）うれふること。うれへ。萬「旅の憂（ウレヒ）をなぐさもる」中略愛（ウレ）はやみぬ」靖鈴日記「心細きうれひを聞こえしを、傳へ聞こえ給ひけるに」薩松「いみじうれひをやすめ、思ひをのぶるに」

うれひ-ごと 憂事（名）一うれふべき事柄。二芝居にて、悲歎の狀を演ずること。女殺油地獄「やつしは黃左衛門、幸左衛門が思案ごと、四郎三がうれひごと」

うれひ-さんぢゅう 愁三重（名）劇場のはやしの一種。悲嘆の場に用ふ。

うれひ-ぶし 愁節（名）悲嘆の場を演ずる節。世間娘氣質「田舍芝居の阿波太夫がうれひぶしに打ちこみ、四十八願記の三段目を覺えて、ひとり思みに語っては泪をこぼし」

うれふ 憂（他動）一設（他動）二次條に同じ。萬「年長くやましわたれば、月かさね憂（ウレフ）の石藏さまよひ」三代實錄「日夜無間、久憂（ウレフ）於医師」御坐」

うれふ 憂（他動）一我がなげきを他に告ぐ。歎き訴ふ。悲訴す。六帖「かた戀は苦しきものとみごもりの、神にうれへて知らせてしがな」宇津保「貴宴」「まつりごとかしこき世に、うれへ奉らんとて」二悲しむ。歎く。神代紀「何故悲（ウレフ）於此處乎」同「夫妻共愁（ウレフ）」三心もとなく思ふ。心配す。不安心に思ふ。「國を憂ふ」土佐日記「浪のたつなる事と、うれへいひてよめる」四病む。なやむ。わづらふ。患。

うれへ 憂（名）一歎き訴ふること。悲訴。嘆願。竹取「かのうれへせしたくみらをば、かくや姫よびす玉て」宇津保「藤原君」「身のうれへある時、おほやけ・わたくしにうれへをなし」二悲しみ。嘆き。源「夕顏」いみじきうれへにしづむを見るに、たへがたくて」三おそれ。心配。憂慮。濱松「かんつけの宮と卑す人」中略おほやけの御爲めに、少なからぬうれへをおひて、筑紫に流され給ひけるに」四人の憂へとなるべきこと。わざはひ。害患。「國のうれへをなす」五忌中。天武紀「重服（ウレヘ）」六やまひ。病氣。「痘瘡のうれへにかかる」

うれへ-の-くも 悲雲（悲雲の字の直譯）憂悲の氣の滿ち籠もること。夫木

「思ひ」の空に滿つうれへの雲のかさなりて、冬の雪とも積もるなりけり」

うれへ-の-まゆ 愁眉（悲眉の字の直譯）しかめたる眉。うれふる顏のさまの歎。諸國「髮」愁への眉も忽ちに開くる花の歎」

うれへ-の-を 愁緒（悲緒の字の直譯）悲へ亂ること。夫木「よそぢまでうれへのみにはつながれぬ、さて我れゆるせ住よしの神」

うれへ-がほ 憂顏（名）うれふる如き顏つき。源「分」日の僅かにさし出でたるに、うれへがほなる庭の鑑、きらきらとして」

うれへ-の-け 愁毛（名）鷹の心煩はしき時立つるといふ、額の背のきはの毛。狩詞記

うれへ-ぶみ 愁文（名）一そじやう（訴狀）。嘆願書。請願書。宇津保「俊蔭」「政かしこき代にうれへ奉らんとて、うれへぶみを作りて、ふむばさみにはさみて」二神に奉る新願書。兼盛集「もとの人の許にはまからざりければ、神にうれへ侍りけるうれへぶみにはし侍りける」

うれへる 憂 愁（他動）一うれふ（憂）の口語。

うれへ-わするるくさ 憂忘草（名）【植】くわんざう（萱草）の異名。兼輔集「かた時も見てなぐさめよ昔より、うれへわするる草といふなり」

うれへ-をはらぶはばき 掃愁箒（名）うれむ-そ（酒）の異名。

うれむ-そ （副）古語。如何ぞ。萬「わたつみの沖に持ちゆきて放つとも、宇禮本曾（ウレムソ）これがよみがへりなむ」同「なし由の小松がうれの有廉敍（ウレムソ）は、わが思ふ妹にあはずやみなむ」

うれゆき 賣行（名）うれゆくこと。

うれゆく 賣行（自動）商品つづけて都合よく賣れる。

うれる 賣（自動）うる（賣）の自動の口語。狂言「太郎」酒が賣れずば、しやうがあるぞ」

うれ-わわらは （名）古語。末（ウレ）の亂れそそけたる葉。末のわわけたる葉。萬「玉にぬきけたずたばらむ、秋萩の宇禮和和良葉（ウレワワラハ）における白露」

うろ 虛（名）一うつろ。空洞。二あな。

うろ （名）うへ（笠）に同じ。

うろ 雨露（名）一あめとつゆと。諸「野草」草木は雨露の惠み、蓑ひ得ては花の父母たり」禮記「春雨露既潤、君子展之、必有怵惕之心、如將見之」大戴禮「陽氣勝則散爲雨露、陰氣勝則凝爲霜雪」二恩澤のあまねきこと。高適詩「聖代祇今多雨露、暫時分手莫蹉跎」

うろ 烏鷺（名）一烏（ウ）と鷺（サギ）と。二黑と白と。三碁。「うろを戰はす」

うろ 迂路（名）まはり路。遠き路。

うろ 有漏（名）佛語。煩惱の爲めに、衆生の色界・無色界を脫離する能はざること。世俗の凡夫の稱。新勅撰「雜」「うろの身は草葉にかかる露なるを、やがてはちすに宿らざりけん」大藏法數「因果不亡曰有、卽色界無色界、見思煩惱也。謂、衆生因不能出離色無色界、故名有漏」

うろ-うろ （副）一定の目的なく、あちこちとさまよふ狀にいふ語。狂言「塩」人の後へ何者やら來て、此の太刀に目をかけて、うろうろする」骨董抄心中「若い衆とは同じ樣にうろうろせずと、まあこちへはいらしやんせ」彷徨。

うろ-がほ （名）迷ひてうろつく狀なる顏。浦島年代記「垣は高し、手がかりなし。足も心も越えかねて、立ちさまよひしうろうろ顏」

うろうろ-なみだ （名）おろおろなみだに同じ。薩門松「恨みまじりのうろうろ涙」

うろうろ-ぶね 賣賣船（名）飲食物などを載せて、停泊せる船舶の間を賣りあるく小船。

うろうろ-まなこ （名）心おちつかずうろつく目つき。うろうろする目つき。槍權三「どうぞ脫けて歸りたいと、うろうろまなこになりければ」

うろうろ-め （名）前條に同じ。松風村雨「束帶」「瞳乳」「瞳の底ののうろうろ目、睨むも相手ありげなり」

うろ-おぼえ 鱗（名）確かならぬ記憶。

うろ-くづ 鱗（名）一次條に同じ。二【動】うを（魚）の異稱。榮華「宇治河の底にしづめるうろくづを、網ならねどもすくひつるかな」

うろこ 鱗（名）一【動】哺乳類の一部、魚類及び爬蟲類の皮膚を蔽へる葉片。其の性質と構造とは、類によりて大に異なり。哺乳類に屬する穿山甲の鱗は、表皮の化骨により生じ、魚鱗は眞皮の中に生じたる物にして、粘滑の表皮これを被ひ、又爬蟲類の鱗は表皮の變じたるものなり。いろこ。いろくづ。うろくづ。こけ。二【動】もろこの異名。三頭のふけ。四うろこがた（鱗形）の略。五紋所の名。いつつうろこ・ひとつうろこ・みつうろこなど種種あり。

うろこ-いし 鱗石（名）散石の三角形したるもの。

うろこ-がた 鱗形（名）一模樣の名。二うろこ（鱗）に同じ。陳摩歌「鱗形の腰替り、白頭の振秀、二本松の城主とかや」

（一たがころう）

うろこ-ぐも 鱗雲（名）けんせきうん（卷積雲）に同じ。

うろこ-しだ （名）【植】りゅうびんたいの異名。

うろこ-ちゃのみ 鱗茶實（名）紋所の名。

うろこ-むすび 鱗結（名）結び方の名。行器の緒の結びに用ふ。

（びすむころう）

うろこ-よつめ 鱗四目（名）模樣の名。

うろそか （副）古語。おろそか（疎）に同じ。名義抄「稀」

（めつよころう）

うろ-だう 有漏道（名）佛語。うろ（有漏）に同じ。「無漏道の對」

うろたへ-ねずみ 狼狽鼠（名）逃路を失ひて狼狽する鼠。人を屬りてもいふ。薩門松「たはけ鼠の狼狽へ鼠、この合點がいかぬか」

うろたへ-ばう 狼狽坊（名）うろたへもの（狼狽者）に同じ。用捨箱「もちめん棒は、うろたへばうといふほどのことなり」

うろたへ‐まなこ 狼狽眼 (名) 驚きあわてたる目つき。春花五大力「夜の内に立ち退かさうと、うろたへたる目つき、うろたへまなこで駈けつけたのぢやはいの」

うろたへ‐もの 狼狽者 (名) うろたへ易き人。あわてもの。室町殿日記廿「我が君こそうろたへものなれ、といひければ、いかに新左衞門、熊谷内藏助をうろたへ者と惡口するか、よく覺え候へ」

うろたへる 狼狽 (自動下一) あわて惑ふ。迷ひさわぐ。狼狽す。狂言〈謎盗人〉「某はうろたへた。人に聞かすまいと思うて、我が耳をちやっとふさいだ」

うろ‐ぢ 有漏路 (名) 有漏(ウロ)の者の居る所。この世。元可集「うろぢより入りにしむろの泊り舟、法にもとまる心はなれよ」

うろ‐つく (自動四) 迷ひ歩く。あわて惑ふ。うろうろする。槍權三上「裏門はなし、塀高し。飛んづ、押しつ、うろつく間に」

うろ‐ぬく 虚拔 (他動四) 多くあるものの中より、間を隔てて拔き取る。まびく。おろぬく。「大根をうろぬく」

うろ‐の‐せかい 有漏世界 (名) 佛語。うろ(有漏)に同じ。

うろ‐の‐み 有漏身 (名) 凡夫の身。うろ。

うろろこ (名) 【動】だぼはぜの異名。

う‐ろん 胡亂 〔胡亂の字の廣東音なりと〕 ㊀覺束なきこと。たしかならぬこと。いぶかしきこと。狂言〈武悪〉「汝がやうならうろんな奴は、何も物によそへては覺えぬか」 ㊁怪しく疑はしきこと。下學集下「烏亂(ウロン)」 合點のゆかぬこと。 宗五大草紙「近習中略わろきには、一に胡亂・猛惡にして欲心にふける人」 大慧書〈江湖〉「不可將古人垂示言教胡亂穿鑿」 明呂毖事物初略「胡亂。祕書云、五胡亂華之日、漢人之避兵者、凡事皆倉卒爲之、不能完備、即相率曰胡亂且罷、謂備一時之急也。今人凡事苟且者稱胡亂、始此」

うろん‐ざ 胡亂座 (名) 禪寺の法會などにて、席次の順によらず、勝手に席に就くこと。

うろん‐もの 胡亂者 (名) うろんなる人。怪しきもの。井筒業平河内通三「頭は子供に見ゆれども、からだは七十のなから男、見す見すのうろん者」

うわう‐さわう 右往左往 (副) 右へ往き左へ往き、散散(チリヂリ)になる狀にいふ語。しどろもどろ。平治〈院御所仁和寺御幸〉「兵ども右往左往に馳せ違ひ」 宗長手記「舊冬以來、京都右往左往、うつつの事にもあらず」

うわじま‐ざさ 宇和島笹 (名) 紋所の名。ささ(笹)四を見よ。

うわる 植 (自動四) 植ゑらる。風俗歌「をちかたや中略あだちの原にたたるからに、宇和流(ウワル)からに」

う‐ゐ 有爲 (名) 佛語。因縁和合にて、生・住・變・滅の四相を帶ぶること。保元〈法皇崩御〉「有爲無常の習ひ、生者必滅の掟て」 新勅撰〈釋教〉「法性のむろどといへどわが住めば、うゐの波風よせぬ日ぞなき」 金剛經「一切有爲法、如夢幻泡影」

うゐ てんぺん 〔有爲轉變〕 佛語。世上の事物の、變轉して暫くも止まらぬこと。常磐嫗物語「しばらくとどまらぬは、うゐてんぺんの諭しかや」

うゐ の よ 有爲世 有爲轉變あるはかなき世。永久百首〈雜〉「うゐの世は今日かあすかの寺の鐘、あはれいつまで聞かんとすらん」

うゐうゐ‐けう 回回教 (名) ふゐふゐけう(回回教)に同じ。

うゐ‐きやう 茴香 (名) 【植】繖形科、茴香屬の多年生草本。莖の高さ五六尺。葉は大形なれども絲狀に細裂せり。花は黄色にして小形、複繖形花序に排列し、夏季開く。果實は乾果にして强き香氣を有するを以て、藥用に供し、又食物に香氣を附するに用ふ。幼莖葉は食すべし。地中海沿岸の原產なり。くれのおも。茴香〈下學集〉

うゐきやう‐あぶら 茴香油 (名) 揮發油の一。茴香の草の實より取りたるもの。

うゐ‐らう 外郎 (名) 〔外郎の字の唐音。元の歸化人、禮部員外郎、陳氏延祐の賣り始めたるよりいふ〕 ㊀次條の略。東海道名所記「小田原中略名物には中略宿の右の方に外郎あり」 ㊁うゐらうもち(外郎餅)の略。心中宵庚申上「奉書代は愚かな事、君に掛かつて、一貫五百が外郎積んだ此の甚藏」

うゐらう‐ぐすり 外郎藥 (名) とうちんかう(透頂香)に同じ。うゐらう。

うゐらう‐とうちんかう 外郎透頂香 (名) 前條に同じ。

うゐらう‐まめ 外郎豆 (名) たんきりまめ(痰切豆)の異名。

うゐらう‐もち 外郎餅 (名) 〔形・色共に、うゐらうぐすりに似たるよりいふ〕 菓子の一種。米の粉を黄に染め砂糖を加へ、蒸して製したるもの。

うゑ 飢 饑 (名) 飢うること。飲食物の缺乏。神代紀下「飢饉(ヱ)之始、困苦之根」

うゑ 植 (名) 植うること。

うゑ 植 (接頭) 植うる意を表はす語。記中「おほかはらの宇惠(ヱ)ぐさ」 萬十「うちなびく春ともしるく、鶯は宇惠(ヱ)きのこまを鳴きわたらなむ」

うゑ‐かへ 植換 (名) いしよく(移植)に同じ。

うゑ‐き 植木 (名) ㊀植ゑてある木。宇津保〈俊蔭〉「家廣く、うゑ木おもしろく」 榮華〈月宴〉「さばかり植ゑ集めつくろはせ給ひし前栽・うゑ木ども」 ㊁鉢などに植ゑたる小さき木。盆栽。徒然草「植木を好みて中略鉢に植ゑられける木ども、皆掘りすてられにけり」

(諺)**植木靜かならんと思へども風やまず** 木靜かならんと欲すれども風やまずに同じ。き(木)の條を見よ。榮華〈嶺〉「うゑ木靜かならんと思へども風やまず。子孝ぜんと思へども親またず」

うゑき‐だな 植木店 (名) うゑきを賣るみせ。

うゑき‐ばち 植木鉢 (名) 植木を植ゑおく鉢。方圓種種あり。

うゑき‐ぶぎやう 植木奉行 (名) 江戸幕府の職。植木の事を掌る奉行。

うゑき‐むろ 植木室 (名) 冬季寒さを畏るる植木、又は花を早く咲かせんとする花木などを入れ置く暖室。

うゑき‐や 植木屋 (名) 植木を養ひ又は手入れをなし、又庭など作るを業とする者。園丁。生玉心中上「見渡せば、數數の花屋・植木屋立ち並び」

うゑ‐ぐさ 植草 (名) 植ゑおほしたる草。記中「おほかはらの宇惠具佐(グサ)、うみがはいさよふ」

うゑ‐こなぎ 植小水葱 (名) 植ゑおほしたるこなぎ。萬十四「かみつけぬ伊香保の沼に宇惠古奈宜(コナギ)、かく戀ひむとや

種もとめけむ」

うゑ‐こみ 植込 (名) 草木を繁く植ゑたる處。松風村雨束帶鑑三「これ此處の植込みの松原に、かがんで居られまする」

うゑ‐こむ 植込 (他動四) 間繁く草木を植う。爲忠百首上「かりにだにくる人もなき柴の戸は、ただうゑこめよ、むろのはやわせ」

うゑ‐じ 植字 (名) ㊀くわつじ(活字)に同じ。學山錄「云凡印書籍、欲急于印行而取于簡便者、又有活版、或稱活字、今俗所云植字是也。此自宋時既兆端」 ㊁活字を組みたつること。しよくじ(植字)。

うゑ‐じに 餓死 (名) 飢ゑて死ぬること。がし(餓死)。

うゑじ‐の‐かみ 右衞士督 (名) 右衞士府(ウヱジフ)の長官。

うゑじ‐の‐さくわん 右衞士志 (名) 右衞士府(ウヱジフ)の主典。

うゑじ‐の‐じよう 右衞士尉 (名) 右衞士府(ウヱジフ)の判官。

うゑじ‐の‐すけ 右衞士佐 (名) 右衞士府(ウヱジフ)の次官。

うゑじ‐ばん 植字版 (名) くわつじばん(活字版)に同じ。

う‐ゑじふ 右衞士府 (名) ゑじふ(衞士府)を見よ。

うゑ‐た 植田 (名) 苗代に仕立てたる苗を植うる田。長元二年大納言家歌合「程もなくしげきうゑ田の早苗かな、まじる草葉のとりもあへぬまで」 地方凡例錄三「植田」

うゑ‐たけ 植竹 (名) 植ゑたる竹。萬廿「宇惠多氣(タケ)のもとさへとよみ出でていなば、いづし向きてかいもがなげかむ」

うゑ‐たけたば 植竹束 (名) 武具。地を掘りて竹束を立て、柵の如くにしたるもの。〈和漢三才圖會〉

うゑ‐たつ 植立 (他動下二) うう(植)に同じ。伊勢集「うゑたてて君がしめゆふ花なれば、玉と見えてや露もおくらん」

うゑた‐ばたらき 植田働 (名) 五月頃、敵の植ゑたる稻を踏みあらし、或ひは竹木を以てこれ返して損傷せしむること。

うゑ‐つき 植月 (名) 苗などを植うべき月。夫木七「今見ればうゑつき近み我がかどの、わさだの苗はみぎはおひにけり」

うゑ‐つく 植附 (他動下二) 草木を植ゑて生ひ立たす。

うゑ‐つけ 植附 (名) ㊀うゑつくること。㊁たうゑ(田植)。

うゑ‐つける 植附 (他動下一) うゑつく(植附)の口語。

うゑ‐ばうさう 植疱瘡 (名) 天然痘の豫防のため、輕症の疱瘡の膿液を取りて人の體に移し植うること。今は專ら、牛に移して得たるものを以てす。牛痘。種痘。

うゑ‐ひげ 植髯 (名) 髯を面(ツラ)に書かず、毛を植ゑてそれに似せたるもの。

うゑ‐びと 飢人 (名) 飲食物にうゑたる人。拾遺〈哀傷〉「うゑたる人、道のほとりにふせり中略紫の上の御ぞをぬぎて、うゑびとのうへにおほひ給ふ」

うゑ‐びと 植人 (名) 草木などを植うる人。今昔廿「その苗を船にひきいれて、うゑ人などやとひ具して」

うゑ‐まつ 植松 (名) 植ゑ生ふしたる松。爲尹千首〈雜〉「心ありて誰れすむならん大方の、岩木の外の庭のうゑ松」

うゑ‐め 植女 (名) たうゑめ。田に苗を植うる女。さをとめ。夫木七「早苗とるみ田の植ゑ女もいろいろの、袖をつらねて祝ふ今日かな」

うゑ‐もの 植物 (名) しよくぶつ(植物)の總稱。特に畑に植うる蔬菜。

う‐ゑもん 右衞門 (名) うゑもんふ(右衞門府)の略。

うゑもん‐の‐かみ 右衞門督 (名) 右衞門府(ウヱモンフ)の長官。ゑもんのかみ。榮華〈月宴〉「三郎、右衞門督までなり給へりつるも」

うゑもん‐の‐さくわん 右衞門志 (名) 右衞門府(ウヱモンフ)の主典。

うゑもん‐の‐じよう 右衞門尉 (名) 右衞門府(ウヱモンフ)の判官。

うゑもん‐の‐すけ 右衞門佐 (名) 右衞門府(ウヱモンフ)の次官。

うゑもん‐の‐だいぶ 右衞門大夫 (名) 右衞門の尉にして、五位に敍せられたるもの。ゑもんのだいぶ。榮華〈本雫〉「宮たちは、右衞門大夫致行が家に渡し奉らせ給ふ」

うゑもん‐の‐ふしやう 右衞門府生 (名) 右衞門府(ウヱモンフ)の下官。

う‐ゑもんふ 右衞門府 (名) ゑもんふ(衞門府)を見よ。うもん。

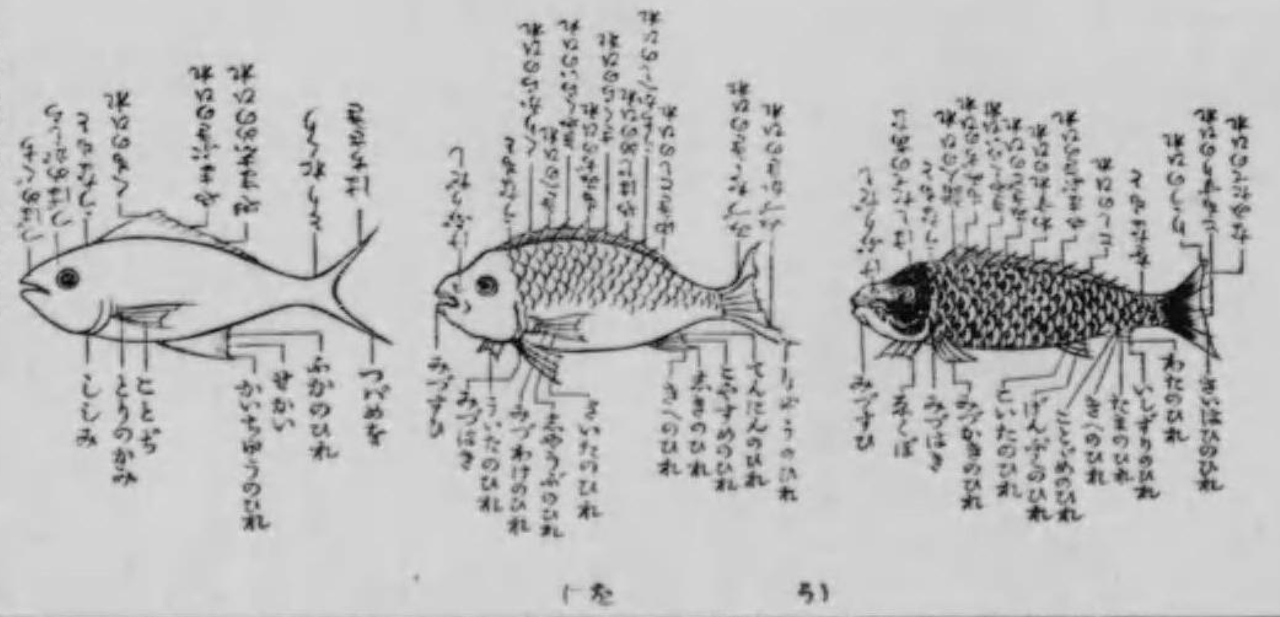
うゑる 飢 (自動下一) うう(飢)の口語。

うゑる 植 (他動下一) うう(植)の口語。

うゑ‐わけ 植分 (名) 苗を分けて植うること。

う‐ゑん 迂遠 ㊀まはりどほきこと。實用に適せぬこと。史記〈孟子〉「以爲迂遠、而闊於事情」 ㊁道路の迂回して遠きこと。

うを 魚 (名) ㊀【動】魚類の總稱。體軀は概ね紡錘狀にして側扁、四肢は悉く偏鰭に變じて、水中生活に適應す。鰓にて呼吸し、冷血・卵生なり。鰭は脊部にあるを脊鰭、肛門の後部なるを臀鰭、體末なるを尾鰭といふ。尾鰭は鯉・鯛等の如き、上下兩片の形狀・大小相等しきものを正尾、等しからざるものを不正尾といふ。以上の鰭はいづれも奇數なれば奇鰭といふ。此の他胸鰭と腹鰭とあり。其の數偶數なれば偶鰭といふ。魚類を大別すれば、肺魚類・硬骨類・硬鱗類・軟骨類・圓口類等とす。其の中、最も種類に富みて、人生との關係大なるは硬骨類なり。いを。



右の三圖は庖丁の名所なり。

いろづく。うろくづ。和名抄「魚字平俗水中遊行蟲之總名也」〔二〕古への料理法の語。さけ(鮭)の異名。聞書秘傳「うをとばかりおし出だして申し候は、鮭の事也。鳥とばかりおし出だして申し候は、雉子の事也。小鳥とさして申し候は、しとどの事也」

うをの　はちちゃう　魚庖丁　鯉の料理の式。

(諺)魚心あれば水心　他が己れに好意あれば、己れも亦他に好意を有すとの譬へ。關取千兩幟「それとも取って見ようと思ふなら、魚心あれば水心ある。岩川、土俵で逢はう」

(諺)魚と水　中のよき譬へ。義經記四「今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥をすすぎ、亡魂の憤りを休めん」三國志「孤之有孔明、猶魚之有水也」

(諺)魚の釜中に遊ぶが如し　禍ひの眼前に迫れるに譬ふ。通鑑「廣陵賊張嬰曰、相棄偷生、若魚遊釜中、知其不可久」

(諺)魚は江湖に相忘る　悠悠自適のさまをいふ。莊子「孔子曰、魚相忘於江湖、人相忘於道術」

(諺)魚は鯛　花は櫻に人は武士に同じ。はな(花)の條を見よ。堀河波鼓「きぬは紅梅、魚は鯛、いふも管槍、人は武士」雞波橋心中「魚は鯛、人は侍、木は檜、木口八分の節なしもの、懸直に舌をまき板や」

(諺)魚を得て筌を棄つ　次條に同じ。蒙求「浦の漁の釣船は、魚を得て筌を棄つ」

(諺)魚を得て筌を忘る　本を忘るるに譬ふ。莊子「筌者所以在魚、得魚而忘筌、蹄者所以在兎、得兎而忘蹄」

うを-あきんど　魚商人　(名)　うをうり。さかな屋。さかなうり。

うを-あみ　魚網　(名)　魚を捕ふる網。さかなあみ。いをあみ。

うを-いち　魚市　(名)　次條に同じ。

うを-いちば　魚市場　(名)　魚を賣買する市場。うをいち。さかないち。

うを-うり　魚賣　(名)　魚を賣るを業とする者。いをうり。さかなうり。山の手はなや。江戸職人歌合「魚うり。さかなや。かたぶく月を惜むとて、あいのいをだにねられざりけり」

うを-がし　魚河岸　(名)　魚市のある河岸。さかながし。

うを-ぎれ　魚切　(名)　魚が余くきれはてたること。少しも魚類の無きこと。春花五大力「銀杏屋も横町のも、うをぎれぢやと云うてぢやわい」

うを-くし　魚串　(名)　魚を刺して燒く串。竹または鋼・鐵にて作る。いをくし。

うを-じゃゆ　魚醤油　(名)　醤油の一種。魚類及びその腸などより製したるもの。

うを-じらみ　魚蝨　(名)　魚類の皮膚に附く小蟲。

うを-ずみやき　魚住燒　(名)　攝津國明石郡中尾より製出する陶器の稱。主として茶器に用ふ。

うを-せんべい　魚煎餅　(名)　魚類の肉を他の物に交じへて、煎餅の形にしたるもの。

うを-たか　魚鷹　(名)　〔鵜(うみさ)の異名。ふよりいふ〕〔鵜(うみさ)の異名。うをや。さかなや。

うを-だな　魚店　(名)

うを-だな　魚棚　(名)　魚を置く棚。

うを-つなぎ　魚繋　(名)　ざよくわん(魚貫)に同じ。渡邊勘兵衛覺書「柴田方より四人、米筋を魚つなぎに此方へ進み出ぐ」

うを-つり　魚釣　(名)　魚をつりて捕ふること。さかなつり。いをつり。

うを-とり　魚取　(名)　だいあみ(臺網)に同じ。

うを-に　魚荷　(名)　魚類を運ぶ荷。淀鯉出世瀧登「上から下だる魚荷の戻り、歩き歩きの高哨し」

うを-にかは　魚膠　(名)　魚類の皮・骨・鰭等より取る膠。

うを-のたな　魚棚　(名)　魚屋の多き街。芭蕉袖日記「鹽鯛の齒ぐきも寒し魚のたな」

うを-のめ　魚目　(名)　〔形、似たるよりいふ〕手足に、白大豆の如く堅く突起したる肉。いをのめ。いをめ。

うを-ひしほ　魚醬　(名)　魚肉のしほから。

うを-へん　魚偏　(名)　漢字の偏の一。鯉・鮎などの文字の左につく魚の字。ぎよへん。吉野忠信「鱉(ひしほ)といふ文字は、誰が魚へんに書き初めし」

うを-み　魚見　(名)　漁獵をする時、魚の所在を見分くること。又、其の人、及び場所。

うを-や　魚屋　(名)　魚類を賣る家。うをだな。さかなや。

うん　糞　(名)　くそをいふ、小兒の語。

うん　運　(名)　身にまはり來る善惡の象。めぐりあはせ。運命。大鏡「いとどかかる運におかされて、御兒たちは取りもあへずほろび給ひしにこそおはすめれ」千載「運を出づる百首の歌よみ侍りける中に、よめる」莊子「陽子之相理、橋運之相使、竅則始於毛、物之所有、注氣運之屈伸相感、如橋之有升有降、若或使之」班彪文「諒時運之所爲、咎令、永伊鬱其誰愬」

うん-しだい　〔運次第　運命の如何によりて決すること。壽門松「馬鹿奴が事は運次第」〕

(諺)運は天にあり　人世の事、多くは天運によりて決せらる。七十一番歌合「運は天にあり、命は義によりて輕し」織留「一切の人間、運は天にあり。神なり落ちてつかまれけるも、死は前生よりの定まり事といへり」

うん　暈　(名)　〔理〕太陽又は月の周圍に現はるる有色の輪。大氣の上層にある氷の細片が、光線を屈折・分散するに依りて生ず。

うん　己　(代)　〔うぬの轉〕うぬ。なんぢ。おのれ。肥前國長崎の方言。博多小女郎波枕「生れは長崎國訛り、こりや、うんだち」膝栗毛「うんどもは長崎のもんぢやが、能毛川島のぼうぶら枕で、髮插しぼつきりでも、やらうばいよお」

うん　(感)　〔承諾の意を表はす發聲。はい。三世相錦繡文章「兄が惡い事を云ふものかよ。うんといや」〔二〕氣絶など、又いたく驚き、或ひは一氣に力を入るる時などに發するうなり聲。う。ん。艶狩劍本地「握拳七つ・八つ、うんといふほど叩かれて」生玉心中「南無阿彌陀佛と差し通せば、うんと斗りにのり返る」〔三〕思ひ出だしたる時の聲。「うんさうであった」

うん-と　極めて多く。十分に。思ふさま。「うんと金を持つ」「うんといぢめる」

うん-とも　すん-とも　なんともかとも。ただ一言も。いなおうの返事も。博多小女郎波枕「責ぼっちはっちと咬耳潰し、うんともすんとも言はれぬ佛の

方便にて」

うん-あう　〔蘊奥　(名)　〔うん(蘊)は蓄ふ、あう(奥)はふかし〕學術・技藝又は理義の奥深き處。奥そこ。奥義。國姓爺「眞法の蘊奥を悟り開いて候」宋史「發揮聖賢蘊奥、有補治道」

うん-う　〔雲雨　(名)　〔一〕くもとあめと。詩經「山出雲雨、以潤天下」吳志「恐蛟龍得雲雨、終非池中物」〔二〕男女の契り。宋玉文「楚襄王夢一婦、曰、妾巫山之女、朝爲行雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下」

うん-うん　〔云云　詞を略するに用ふる語。斯くく斯くく。しかじか。うんぬん。宇治拾遺「數へんとて見れば、ちひさき文字にて、金御嶽云云と悉く書かれたり」史記「吾欲云云」

うん-うん　(感)　苦痛に堪へずしてうなる聲。博多小女郎波枕「乘手はうんうんぬくにぞ、やれ駕籠の内で自害した」

うん-えい　〔雲影　(名)　〔一〕くもるもの。

うん-えい　〔雲翳　(名)　〔翳はくもる〕雲のすがた。「谷風拂〻修薄、油雲鬱〻高岑」王勃文「仙楹賀雨、若拔〻雲翳之宮、蘇檻臨風、似過扶搖之路」

うん-えき　〔瘟疫　(名)　〔一〕はやりやまひ。やくびやう。熱病。字貫「獨鬼爲疫、疫、瘟疫也」

うん-えん　〔雲烟　(名)　〔一〕くもとけぶり。〔二〕陸機詩「秋草漫長柯、寒水入雲烟」謝靈運詩「遂登、群峯首、迤若升雲烟」〔三〕山水の畫。畫。

うんえん　くわがん　〔雲烟過眼　雲烟の眼前を過ぐるが如く、餘り心に留めざること。蘇軾文「譬之烟雲之過眼、百鳥之驚耳、豈不欣然接之、去而不復念也」

うん-か　浮塵子　(名)　〔動〕有翅類、浮塵子科に屬する有名なる稻の大害蟲。種類頗る多し。蟬に似て小形なり。體の長さ多くは二分許り、頭は突出し、觸角は三節乃至數十節にて、梅眼の前方に位し、其の末端節は刺毛狀にて細し。前翅に鱗毛なく、口吻は尖りて植物の汁液を吸收するに適す。多數群をなして來たり、稻の軟き葉又は花の汁液を吸收して枯槁せしむ。いなづまよこばひ・うすばよこばひ・かばいろよこばひ・くはよこばひ・くはきよこばひ・つまぐろよこばひ・ふたてんよこばひ・まだらよこばひ・むつてんよこばひ・よつもんよこばひ等は主なるものなり。ふぢんし。

うん-か　〔雲霞　(名)　〔一〕くもとかすみと。諸江島「江野・南海・湖水・滸の口に、雲霞暗く蔽ひて」南史「時而振翼、何患不出雲霞之上」杜甫詩「雲霞出海曙、梅柳渡江春」〔二〕物の多く集まり來るにいふ語。宇治拾遺「渡りせんとする者、雲霞の如し」保元「軍兵雲霞の如く召し倶して、高松殿に參じたり」

うん-が　〔運河　(名)　荷物などの運漕・灌漑・排水等のために、陸地を掘り割りて通じたる河。ほりわり。宋史「水運之程、自大江而下、至鎭江、則入閘、經行運河、如履平地」

うん-かい　〔雲海　(名)　渺渺とはてなき廣き海。又、雲の滿ちたる空を海に譬へていふ語。平家「七、雲海沈沈として、青天既に暮れんとす」孟浩然詩「雲海泛〻甌閩、風潮沿〻鳥濱」李白詩「明月出〻天山、蒼茫雲海間」

うん-かう　〔芸蓍　(名)　〔植〕へんうたの異名。

うん-かう　〔運行　運ごり行くこと。易經繫辭「日月運行、一寒一暑」

うん-かう-くわ　〔芸香科　(名)　〔植〕へんうたくわの異名。

うん-かく　〔雲客　(名)　てんじやうびと(殿上人)に同じ。雲の上人。太平記「一、殿上人、適〻臥したる月輪・雲客も」

うん-かく　〔芸閣　(名)　〔芸は草の名。能く蠹魚を防ぐより、藏書の所に名づく。藏書の所。圖書室。新續古今序「これによりて、延喜に芸閣の風香ばしく」元結文「雲卿始典校芸閣」龜蒙典略「芸香辟蠹、故藏書臺稱芸臺、閣稱芸閣」

うん-かく　〔雲鶴　(名)　模樣の名。雲と鶴とを配合したるもの。綾・錦等に多し。古へ、親王及び太閤となりたる人、之を著す。

うんかふ-むしふ　〔雲合霧集　(句)　雲霧の如く、むらがり集まること。史記「天下之士、雲合霧集、魚鱗襍遝、烟至風起」

うん-かん　〔雲閒　(名)　雲の間。くも。雲の中。くもま。後漢書「足下兼能騎龍弄風、翔〻碧雲間者、亦非狐狸燕雀所敢謀也」晉書「雲間陸士龍」

うん-かん　〔雲漢　(名)　〔一〕あまのがは(天河)に同じ。詩經「倬彼雲漢、爲章于天」〔二〕おほぞら。魏文帝詩「比翼翔雲漢、羅者安所羅」

うん-き　〔雲氣　(名)　〔一〕雲の動く象。雲ゆき。左傳「公登臺、以望、雲氣」〔二〕空中にたちと上ぼる異樣の氣。廻山姥「紫の雲氣たなびき、斗牛の間に英英たり」史記「李所居、上常有雲氣」

うん-き　〔運氣　(名)　自然の現象を人の運命にあてて考ふること。めぐりあはせ。うん(運)。

うん-き　〔溫氣　(名)　〔一〕あたたまり。〔二〕むしあつきこと。暑氣。周禮「鑑以盛氷、置之食物于中、以禦溫氣」論衡「火與溫氣同、水與寒氣類」

うん-さゝぐ　〔雲脚　(名)　〔一〕雲の垂れたる如く見ゆるもの。雲の行くさま。雲あし。韓愈詩「雲脚飛〻銀綿」〔二〕祖惡なる茶。下學集「雲脚(茶名)惡茶(茶)」〔三〕香煎。室町殿日記「北野天滿宮(茶)」「別賣、雲脚、なたて參らす中間かるがると香煎を出だす事、言語道斷いふばかりなし」

うん-さゝぐ　〔運脚　(名)　古へ調・庸を運ぶ人夫。ぶぶぼろ。

うん-さゝぐ-だい　〔雲脚臺　(名)　足を雲形にくりたる臺。禁中及び院中へ捧ぐる物を載するに用ふ。

うん-く　〔雲衢　(名)　雲のちまた。雲ある所。謝靈運詩「或ある詩に曰はく、國風として海嶠を隱れ、冉冉として雲衢を出づ」

うん-く　〔雲鼓　(名)　鄙寺にて、食時の合圖に打ち鳴らすもの。

うん-ぐわい　〔雲外　(名)　雲表。張衡文「雲外極めて遙かなる天空。雲表。雲のほか。

うん-けい　〔雲霓　(名)　〔げい(霓)はにじ〕雲のたち上ぼること。孟子「望之、若大旱之望雲霓」「民

うん-けい-べり　〔繧繝緣　(名)　うんげんべり(繧繝緣の訛り。狂言「高麗べり」)に高麗べり」

うん-けん　〔繧繝　暈繝　(名)　〔一〕染色又は彩色の名。閒をくまどりて、同じ色を次第に濃くしたるもの。〔二〕上の如き色合に織りたる織物。〔三〕錦の名。赤地に色色の絲を以て、花形・菱形などを縱筋(ぎ)の間に織り出だしたるもの。本朝式「韋繧錦」國姓爺後日合戰「阿克勝がいでたちは、うんげんの赤裝束」〔四〕うんげんべりのたたみ(繧繝緣疊)の略。增鏡。

「西の一間にうんげん二帖」

うんげん-べり 繿襴縁 (名) 次條の略。うげんべり。海人藻芥「畳之事。帝王・院・繿襴縁也。神佛前半畳用繿襴縁。此外實不可用者也」

うんげん-べり-の-たたみ 繿襴縁疊 (名) 繿襴の錦にてへりを附けたる疊。主上及び院の御用の外は、神佛の前にのみ用ひ、他は禁制せらる。

うんこ (名) くそ(糞)をいふ、幼兒の語。うん。

うんこく-は 雲谷派 (名) 〔雪舟の、周防國山口の雲谷寺に住みしよりいふ〕唐畫の一派。雪舟を祖とす。

うん-こん 雲根 (名) 〔石は雲の生ずるもとといへる說よりいふ〕山の石の異名。賈島詩「過橋分野色、移石動雲根」蘇軾詩「東籠雲根擘角牙」雲笈七籤「雲母、赤色厚重、名陽起石。是五雲之根」

うん-さい 運座 (名) 俳諧にて、多人數集まりて、各自題によりて句を詠出し、それを互選する會の稱。

うん-さい 雲際 (名) 雲のはて。遙かなる天空。陳子昂詩「古木生雲際、孤帆用霧中」

うん-さい 雲齋 (名) うんさいおり(運齋織)の略。

うん-さい 運載 (名) 舟車等に物を載せて運送すること。

うんざい (名) 人を罵りていふ語。日本武尊吾妻鑑「やあ賤しいうんざいめら」頼城鳥原蛙合戰「斬らずとも死すべきうんざいども」

うんさい-おり 雲齋織 (名) 地を粗く斜めなる織文に織りたる厚き綿布。足袋の底などに用ふ。雲齋といふ人の創製したるものなりといふ。一代男「うんさい織の袋足袋、中ぬきの細緒をはき」

うんさい-たび 運齋足袋 (名) 底にうんさいおりをつけて仕立てたる足袋。

うん-さう 蘊藻 (名) みづくさ。水草。詩「蘊藻之菲薄、感應のみるめ・うきめの花も咲く」

うん-さう 運漕 舟にて物を運び送ること。魏志「水當通運漕」

うん-ざう 〔溫糟〕(名) 次條に同じ。庭訓往來十月「溫糟」下學集「紅糟」狂言「汝がたべたは、うんざうのかいであらう」

うんざう-がゆ 糟精粥 (名) 味噌及び四角にきざみたる酒のかすを少し入れて煮たる粥。貞丈雜記「一說、あま酒を引き、中に餅・燒栗・菜の葉を細かにきざみて煮たる粥」内侍所行事「うんざう」

うんざう-てん 運漕店 (名) 運漕の事を取り扱ふ店。

うんざり (副) 倦み厭きたる狀にいふ語。「うんざりする」

うん-ざん 雲山 (名) 雲のかかれる山。崔曙詩「三春雲山皆北向、二陵風雨自東來」

うん-さん 運算 (數)式の示す規則に從ひ、加・減・乘・除又は移項等を行ひて數を算出すること。

うん-しう 溫州 (名) 〔植〕次條の略。

うんしう-みかん 溫州柑 (名) 〔植〕芸香科、柑類の落葉喬木。柑の一品種。葉も果實も大にして、果皮薄く、種子無く、甘味多きもの。紀伊國其の他の暖國に產す。支那の溫州の原產なりといふ。うんしう。うじゆきつ。眞柑錄「其類合二十七、而乳柑推第一、故溫人謂乳柑爲眞柑、溫數邑俱種柑、而出泥山者、僅然推第一」

うん-じ 雲實 (名) 〔植〕じやけついばら(雲實)の異名。

うん-じつ 雲集 雲の如く多く集まること。

うん-しふ 葵華 黑白衣之雲集、豈唯三州五郡之淺契」

うんしふ むさん 〔雲集霧散〕多くのものの集散すること。班固文「朝發河海、夕宿江漢、沈浮往來、雲集霧散」

うん-しや 運者 (名) 天幸のある人。運よき人。發心集「近江はゆゆしき運者かな。坂のまじらひしていまだ三年にだに滿たぬに、ほうちやくゆりたるは有り難き事ぞかし」

うん-しや 〔蘊藉〕溫藉 醞藉 も柔かにして穩かなること。史記「敢行少而蘊藉」詩經「能溫藉自持」淨書「爲人溫雅有醞藉」

うん-じや 雲蛇 (名) 雲の中をかけるといふ蛇。用明天皇職人鑑「左の眼ぬけ出で、がん火あたりに散亂し、うんじやに卷かれて飛行する」

うん-じや 〔雲壤〕(名) 〔じやう(壤)は土〕うんでい(雲泥)に同じ。韓偓詩「阡陌無雲壤、園畦隔芷芝」

うん-じや 〔雲上〕(名) 雲のうへ。謝靈運「水中の遊魚は釣針と疑ふ、雲上の飛鳥は弓の影とも驚く」禁裏。禁中。諺「上雲上の月卿より、下萬民の民間までも」

うん-じや 運上 〔運送上納の義〕武家時代、率を定めて工商等の營業に課したる稅。東鑑「文治二年「依此米催事、民戶殊費、於今者、殆無乃貧運上計之由、頻有領家訴之間、及此儀」雜筆往來「併食公物、永無運上之心、抑留年貢、奪取資財」

うん-じや 運上方 (名) 武家時代、運上を取り立つる役人。稅吏。

うん-じや 運上所 (名) 武家時代、運上を取り扱ふところ。

うん-じや (自動) 倦み勞る。勞力盡きて、已むを得ず成行にまかす。

うん-じや-びと 雲上人 (名) くものうへびと。雲上人に同じ。

うん-じや-まい 運上米 (名) じやうぶまい。上分米に同じ。

うん-じや-もの 運上物 (名) うんじやう(運上)に同じ。式目編追加「點定諸方運上物、令致煩費事、近多有其聞」

うん-じや-れう 運上料 (名) 運送賃。東鑑「文治三年「非指運上料、非私相料」」

うんしゅ 運輸 うんゆ(運輸)を見よ。

うんじゅう-りゅう-へん 雲蒸龍變 (句) 英傑の士、機を見て種種形式を變じて蹶起すること。史記「得尺寸之柄、雲蒸龍變」

うん-じる 倦 (自動) うんず(倦)の口語。

うんしん-はぶ 運針法 (名) 裁縫にて、針を運ぶ仕方。

うん-ず 倦 (自動) 倦む。心厭す。失望す。がっかりする。竹取「うんじて皆歸り給ひぬ」宇津保「それに思ひうんじて、こもりたるとなんうけ給はりし」いやに思ふ。厭ふ。勢語「世の中を思ひうんじて、京にもあらず、遙かなる山里に住みけり」

うんす-うんす (感) 力をこむる時うめく聲。うんうん。「うんすうんす跡おしする」

うん-すゐ 雲水 (名) 雲と水と。杜甫詩「稻穗空雲水、川平對石門」雲と水と。

うんすゐ-そう 雲水僧 (名) 行脚僧の僧。黃庭堅詩「淡如雲、行」

うん-すん (感) 苦しみて呻る聲。浮世風呂「息子は息子で便毒をふみ出して、うんすんと寢てゐる」

うんすん-がるた (名) かるたの一種。明和・安永頃大に行はる。薩州府志「或又謂加字、又謂比伊幾、或又謂字牟須牟加留多、其法有若干」

うん-せい 運勢 (名) 運の勢ひ。

うん-せう 雲霄 (名) 雲のある霄。宮齊「首高唱、聲徹雲霄」西京雜記「後宮齊「首高唱、聲徹雲霄」

うんせん-かん 雲鱈羹 (名) 料理の一種。摺立ての山のいも壺升、砂糖壺斤、雞卵二十入れてねり合はせ蒸籠にかけ、むして雲形に切りたるもの。精進料理には雞卵を入れずして、口なしにて色を附く。

うんせん-つつじ 溫泉躑躅 (名) 〔植〕石南科、石南屬の落葉小灌木。よく分枝し、葉は廣卵形又は橢圓形、短き葉柄を有し、數葉枝端に叢生す。春季、淡黃色の花を葉間より抽出す。我が國、肥前國溫泉嶽其の他諸所の山地に自生す。

うん-そ 運祚 (名) 〔ス(祚)は位〕天子の御位。天運を享けて帝位に登ること。荷唐書「政元典、克膺運祚」

うん-そう 雲窻 (名) 學びの窻。書窻。學窻。うんかく(芸閣)を見よ。朱器封詩「九霄月傍綠芸窻」

うん-そう 運送 (名) 物を運び送ること。運搬。運輸。太平記「年貢運送の煩ひありとて」北齊書「我兵士相代穀食豐饒、運送不絕」(名) 旅客又は貨物を一定の場所より他の一定の場所に移し送ること。其の移送の方法によりて陸上運送と海上運送とに分かち、其の移送の目的によりて旅客運送と物品運送とに分かつ。各條を見よ。營業稅法第五「運賃又は手數料を受けて旅客貨物の運送を爲し」

うんそう-いたくしょ 運送依託書 (名) 貨物の運送を依託する場合に、運送狀に代用せらるる書面。其の書式はほぼ運送狀と同一なれども、運送狀の如き嚴密なる法定の形式及び條件を要せざるもの。

うんそう-えいけふ 運送營業 (名) 運賃又は手數料を受けて、物品の運送をなす營業。運輸營業。商法第三編第八章「運送營業」

うんそうえいけふ-しゃ 運送營業者 (名) 運送營業を爲す人。郵便法第三「運送營業者」

うんそう-くわぶつひきかへしょう 運送貨物引換證 (名) 荷送人の請求によりて、運送人の交付する有價證券。貨物引換證。印紙稅法第四條「運送貨物引換證」

うんそう-けいやく 運送契約 (名) 當事者の一方が相手方に物の運送をなすことを約し、他の一方がこれに對して運送賃を拂ふことを約する契約。商法第三百三十三條「運送契約に因りて生じたる荷送人の權利」

うんそうけいやく-しょ 運送契約書 (名) 運送契約の成立を證する書面。舊商法第八百八十七條「運送契約書」新商法第五百一十九條「運送契約書」

うんそう-けふ 運送業 (名) うんそうえいけふ(運送營業)の略。營業稅法第四「運送業」

うんそう-しゃ 運送者 (名) うんそうにん(運送人)に同じ。

うんそう-じゃう 運送狀 (名) 荷送人が物品の運送につき、法定の事項を記載し且つ署名して、運送人に交付する證書。運狀。商法第三百三「運送狀には左の事項を記載し荷送人之に署名することを要す」同四「運送狀の作成地」

うんそう-せん 運送船 (名) 運送に用ふる船舶。陸海軍に屬して、運送・通信の用に供せらるる船舶。

うんそうせん-き 運送船旗 (名) 海軍旗章の一。運送船たることを表示するため、其の船舶(船長が海軍將校たるときを除き)の大檣頭に揭ぐるもの。其の横の寸法は縱の一と二分の一にて、白地に紺色の山形二條を描く。海軍旗章條例第三條「運送船旗」

うんそう-ちん 運送賃 (名) 運送の報酬として、運送人の受くる賃錢。向拂運送賃(ムカハラヒウンソウチン)と後拂運送賃(アトバラヒウンソウチン)とに分かつ。各條を見よ。運賃。商法第三百十四「運送賃」

うんそう-とりあつかひ-えいけふ 運送取扱營業 (名) 自己の名にて、物品運送の取次を爲す營業。商法第三編第七章「運送取扱營業」

うんそう-とりあつかひ-けいやく 運送取扱契約 (名) 當事者の一方が相手方のために物品運送の取次を爲すことを約し、相手方がこれに報酬を與ふることを約する契約。商法第三百十二「運送取扱契約を以て運送賃の額を定めたるとき」

うんそう-とりあつかひ-けふ 運送取扱業 (名) うんそうとりあつかひえいけふ(運送取扱營業)に同じ。

うんそう-とりあつかひ-てすうれう 運送取扱手數料 (名) 運送品を運送人に引き渡したる運送取扱人が、報酬として受け取る料金。

うんそう-とりあつかひ-にん 運送取扱人 (名) 運送取扱營業を爲す人。商法第三百三「運送取扱人とは自己の名を以て物品運送の取次を爲すを業とする者を謂ふ」

うんそう-なかだちにん 運送仲立人 (名) 前條に同じ。

うんそう-にん 運送人 (名) 陸上又は湖川・港灣にて運送營業をなす人。商法第三百三「運送人とは陸上又は湖川港灣に於て物品又は旅客の運送を爲すを業とする者を謂ふ」

うんそう-ひ 運送費 (名) 貨物の運送に要する諸雜費。

うんそう-ひん 運送品 (名) 運送の目的たる物品。商法第三「運送品」

うんそう-ほけん 運送保險 (名) 損害保險の一。陸上又は河川・港灣にて、運送品につき生ずべき損害を保險するもの。〈海上保險の對〉商法第三編第六章「運送保險」

うんそう-ほけん-けいやく 運送保險契約 (名) 當事者の一方が、陸上又は河川・港灣にて貨物の運送につき、偶然なる一定の事故によりて生ずべき損害を塡

補することを約し、相手方が之に其の報酬を與ふることを約する契約。

うんそうほけん-しょうけん 運送保險證券 (名) 保險者が運送保險の證として、被保險者に交付する要式の有價證券。商法(舊四編)三運送保險證券には第四百三條第二項に掲げたる事項の外左の事項を記載することを要す」

うんそうや 運送屋 (名) 物品の運送を營業とする家。運送營業者。

うんそう-れう 運送料 (名) うんそうちん(運送賃)に同じ。

うんそうれうきん 運送料金 (名) 前條に同じ。郵便法(舊三)運送料金」

うんそう-ねたくじゃう 運送委託狀 (名) 鐵道によりて貨物を運送するとき用ふる委託狀。鐵道會社の名、發送人・荷受人の氏名、貨物の數量、運賃等を記載するもの。

うん-そん 雲孫 (名) 仍孫(ジンソン)の子。已れより九世に當たる孫。

うんだめし 運試 (名) わが運命の吉凶を試みること。

うん-ちく 運籌 籌策を運らすこと。

うん-ちく 蘊蓄 學問・智識など蘊(つ)み蓄へて深きこと。左傳(昭公廿年)「子家子曰、衆怒不可蓄也、蓄而弗治、將蘊(蘊蓄)民將生心」

うん-ちゃ 雲茶 (名) ひきちゃ(磨茶)に同じ。許六文(雪茶)銘茶めせめせ、雲茶・散茶御用次第にめさるべし」

うん-ちゅう 雲中 (名) 雲のなか。(雲外・雲表などの對)

うん-ちん 運賃 (名) うんそうちん(運送賃)の略。神宮雜例集(二運賃)營業稅法(舊五)運賃又は手數料を受けて旅客貨物の運送を爲し又は其の取扱を爲す者を運送業として營業稅を課す」

うんちんさって 運賃切手 (名) 運賃支拂濟の證として、船舶周旋人より荷主に交付する切手。運賃切符。

うんちん-きっぷ 運賃切符 (名) 前條に同じ。

うんちん-こめ-ねだん 運賃込値段 (名) 〔商〕商品の原價に、荷造費・運賃を加算し、保險料を加(ざ)るもの。即ち沖著値(オキヅケ)より保險料を差し引きたるもの。運賃持値段。運賃持代價。

うんちん-さきばらひ 運賃先拂 (名) 運送貨物が目的地に到著したるとき、其の到著地にて運賃を支拂ふこと。

うんちん-とんすう 運賃噸數 (名) くわぶつっせきさいとんすう(貨物積載噸數)に同じ。

うんちん-へう 運賃表 (名) 運賃率を詳細に記載して、運送業者の發行する表。

うんちん-ほけん 運賃保險 (名) 揖害保險の一。運送賃を保險に附するもの。

うんちんほけんれう-こめ-ねだん 運賃保險料込値段 (名) 商品の原價に、其の運賃及び保險料を加算したるもの。即ち、運賃込値段に保險料を加算したるもの。

うんちん-まへばらひ 運賃前拂 (名) 運送貨物發送の際、運賃を支拂ふこと。運賃元地拂。運賃元拂。

うんちんもち-だいか 運賃持代價 (名) うんちんこめねだん(運賃込値段)に同じ。

うんちんもち-ねだん 運賃持値段 (名) 前條に同じ。

うんちん-もとちばらひ 運賃元地拂 (名) うんちんまへばらひ(運賃前拂)に同じ。

うんちん-もとばらひ 運賃元拂 (名) 前條に同じ。

うんちん-りつ 運賃率 (名) 運賃の割あひ。運賃のたか。

うんちん-わりまし 運賃割增 (名) 運賃表に定めたる運賃率以外、臨時に請求する運賃。

うん-つく (名) 智慧の無き者を卑めいふ語。のろま。ぼんつく。「うんつく太郎左衞門」

うん-づく (名) 運次第。運命のままなること。大織冠(舊)「此の上は運づく、神力に任せん」

うん-てい 雲梯 (名) 長き梯子の類。城を攻むるとき、掛けて乘り入るに用ふる具。雲のかけはし。戰國策(宋)公輸般爲楚設機、將以攻宋、宋何罪之有」

うん-でい 雲泥 (名) 雲と泥土。懸隔の甚しきに譬ふる語。天地の差。雲壤。十調(唐)「何事をもしたらんは、雲泥の心地して」平家(四)「朝敵を平げ宿望を遂ぐる事は、源平何れ勝劣無かりしかども、今は雲泥交はりを隔てて、主從の禮にも猶劣れり」

うんでいばんり 〔雲泥萬里〕 うんでい(雲泥)に同じ。蘇山姥三「娘をころりと落としたと、首をころりと落とすとは雲泥萬里」橘正通詩「花月一窗交昔隨、雲泥萬里眼今窮」

うんでう-じゅく 溫調粥 (名) あづきがゆ(赤小豆粥)に同じ。下學集「紅調粥(コウチョウシュク)(正字通)赤豆粥(赤豆粥)也」

うん-てん 運轉 (名) めぐりまはること。列子「運轉亡已、天地密移、曠覺之哉」莊子「窹者其運轉、而不能自止邪」

うんてんし 運轉士 (名) 遠洋航海船に乘り組み、船長の命を受けて、船舶の運航を分掌する船員の職員。

うんてんしほん 運轉資本 (名) りうつうしほん(流通資本)に同じ。

うんてんしゅ 運轉手 (名) 電車・汽車・汽船等の運轉を掌る人。

うんでんばんでん (名) うんでいばん(雲泥萬里)の訛り。浮世風呂(三)「おらん所の氣位とは、雲泥萬里(ウンデイバンデイ)の違えよ」

うん-と (副) おほく。澤山に。

うん-どう 運動 (名) 一めぐりうごくこと。董仲舒文(舊)「運動抑揚、更相動海」 二體育の一方法として、身體を動かすこと。 三そぞろあるき。散歩。「食後運動に出かける」 四〔理〕或る物體が、他の物體に對してその位置を移すこと。 五或る目的を達せんため、奔走盡力すること。「選擧の運動」「就職の運動」

うんどう の えねるぎー 〔理〕物體が運動の狀態にある爲めに有する勢力。例へば、流水又は飛行する彈丸の如し。其の流るるや水車を運轉し、其の命中するや人畜を斃す潜勢力を有するが如きこれなり。

うんどう の ていりつ 運動定律 〔理〕物體の運動に關する定律。三つあり。第一、外力の作用を受くるにあらざれば、靜止せる物體は常に靜止し、運動せる物體は一直線上に等速運動をなす。第二、或る力の作用により起こる運動量の變化は、その作用する力に正比例し、其の力の方向に起こる。第三、總べて力の作用する場合には、必ず其の强さ相等しくして方向反對なる反作用起こる。

うんどう の まさつ 運動摩擦 〔理〕一物體が、他物體の面に接觸して運動する際に受くる摩擦。

うんどう-がく 運動學 (名) 物體の運動に就きて、其の幾何學的性質を論ずる學。

うんどう-かんかく 運動感覺 (英 Sensation of movement) (名) 五體を動かす時に起こる感覺。關節感覺・筋覺等より成る。

うんどう-き 運動器 (名) 〔動〕動物學上の用語。動物が體の移動を行ふ爲めの機官の稱。其の構造は住所の異なるにより一等しからず。空中飛翔の爲めには鳥の如く翼を有し、昆蟲の如く翅を有し、水中游泳の爲めには、魚類の如く鰭を有し、地上運動には牛馬の如く四肢を有し、或ひはばった・いなご等の如く數節より成れる肢を有するもあり。

うんどう-くわい 運動會 (名) 種種の遊戲・運動をなす多人數の會合。

うんどう-けんかく 運動幻覺 (英 Hallucination of movement) (名) 〔心〕動かさるに動けるが如く感ずること。能動性幻覺・受動性幻覺の二種あり。各條を見よ。幻覺。

うんどう-しってう 運動失調 (英 Ataxia) (名) 筋肉の働きの調節を缺くこと。即ち、隨意運動を調節するに困難なるか、又は其の力を失ひたること。

うんどう-しゃ 運動者 (名) 或る物事の爲めに奔走盡力する人。

うんどう-しゃつ 運動襯衣 (名) しやつの一種。特に運動に便なるやうに作りたるもの。

うんどう-しんけい 運動神經 (名) 中樞の運動命令を、筋の末梢に傳ふる神經。

うんどうせい-しつごしゃう 運動性失語症 (英 Motorophasia) (名) 失語症の一。言語を話し、若しくは文字等を書く力を失ひ、又は其の弱きもの。

うんどう-ばうし 運動帽子 (名) 運動に便なるやうに造りたる帽子。椀形にして、白・赤又は色別にしたるもあり。

うんどう-ふく 運動服 (名) 運動に便なるやうに作りたる洋服。

うんどう-りゃう 運動量 (名) 〔理〕運動せる物體の質量と、その速度との相乘積。

うん-どん 饂飩 (名) 小麥粉に鹽を加へ、水にて堅く煉りて薄く展べ、細く切りたるもの。ゆでて汁に浸して食ふ。うどん。庭訓往來十月「饂飩」狂言文藏「てんじんの部類(ぶるい)さうめんか、そけいか、うんどんか」

うんにゃ (副) いな(否)の訛り。浮世風呂(三)「うんにゃ、ほんのことさ」

うん-ぬん 云云 (名・副) うんうん(云云)の音便。

うん-のみ (名) 〔鵜呑みの訛り〕噛まずに呑むこと。まるのみ。うのみ。

うん-のろ (名) うすのろの訛り。潮來絲誌「よけいの仕事をしめえものでもねえが、うんのろにされちやあ、間尺にあはねえ」

うん-ぱう 運報 (名) しあはせ。果報。よき報い。愚管抄(舊)「義朝といふ程の武士に、此の意趣結ぶべしや。運報の限り、時の至れる也」

うん-ばん 雲版 (名) 樂器の名。唐銅又は鐵の板にて雲形に鑄附く。寺院などにて、合圖に敲き鳴らすに用ふ。

(んぱんう)

うん-ぱん 運搬 貨物を運び搬(ハン)すること。運送。夢溪筆談「運搬之勞」

うんぱん-かうぬ 運搬行爲 (名) 貨物の所在を移轉する經濟行爲。

うんぱん-ぐ 運搬具 (名) うんゆきくわん(運輸機關)を見よ。

うんぱんけぶ 運搬業 (名) うんそうげふ(運送業)に同じ。

うんぱん-しゃ 運搬者 (名) うんそうにん(運送人)に同じ。

うんぱん-ぜい 運搬稅 (名) 消費稅の一。消費物が販引・賣買のため運搬せらるるとき、其の運搬の始終又は中途にて課稅せらるるもの。發送稅・關稅及び貯藏稅の三種に分かつ。各條を見よ。

うんぱん-にん 運搬人 (名) うんそうにん(運送人)に同じ。

うんぱんひ 運搬費 (名) 運搬に用する費用。

うん-ぴつ 運筆 筆の運び方。筆づかひ。書き方。梁武帝文「夫運筆邪則無芒角、執手寬則書綫弱」

うん-びゃう 溫病 (名) ねつびやう(熱病)に同じ。愚管抄(舊)「平相國入道は同五年閏二月五日溫病大事にて、程なく薨逝しぬ」

うんぷ-てんぷ 運否天賦 (句) 運の吉凶は天の然らしむる所なること。

うんぺいざいく 雲平細工 (名) 雲平糖にて乾菓子を作ること。又、其の菓子。

うんぺいたう 雲平糖 (名) 白砂糖に微塵粉を加へ、薯蕷を混じて捏ね固めたるもの。

うん-ぺう 雲表 (名) うんぐわい(雲外)に同じ。

うん-ぼ 雲母 (名) 〔鑛〕あるみにゅーむ・かりゅーむの硅酸化物。白色及び黑色の二種あり。何れも紙の如く薄く剝げ易き性あり、彈性に富む。硝子に代用し、耐火力大なるを以てすとーぶ・の窗等に用ひられ、又電氣の絶緣體として用ひらる。うんも。西京雜記「昭陽殿有雲母扇・雲母屏風」

うん-む 雲霧 (名) くもときりと。列子「虹蜺也、雲霧也、風雨也、四時也。此積氣之成乎天者也」張衡文(四)「雲霧吞冥」

うん-めい 運命 (名) めぐりあはせ。運。諸葛亮「平家の運命、悉くつきの夜すがら解たてて」南史(陳)文帝嘗曰、人仕宦非唯須才、亦須運命」

うんめいろん 運命論 (英 Fatalism) (名) 〔哲〕しゅくめいせつ(宿命說)に同じ。

うん-めん 溫麪 (名) 汁に煮たる饂飩。

うん-も 雲母 (名) 〔鑛〕うんぼ(雲母)に同じ。

うんもん-しゅう 雲門宗 (名) 佛語。五家七宗の一。支那後漢の雲門を祖とするもの。

うんもん-ちく 雲紋竹 (名) 〔植〕禾本科、苦竹(ハ)屬の竹類。淡竹(ハ)の一變種。稈に斑紋雲形を呈するもの。近江・丹波等の山野に自生す。こはんちく。はんちく。

うん-やだい 雲屋臺 (名) 錦又は蕊帶などに、雲の中に樓閣屋臺の模樣あること。

うん-ゆ 運輸 〔うんしゅの習慣音〕物品を、一定の場所より他の一定の場所へはこびうつすこと。明治四年十二月布告第六百四十八號「諸運輸の便利を興し」司馬相如文(舊)「都又擅巧、轉運輸」

うんゆ-えいけふ 〔運輸營業〕（名）運賃又は手數料を受けて、運輸の業を營むこと。運送營業。

うんゆえいけふ はりこく 〔運輸營業報告〕運輸營業者の發行する營業報告。

うんゆえいけふ-しゃ 〔運輸營業者〕（名）運輸營業をなす人。

うんゆ-さくわん 〔運輸機關〕（名）貨物の運搬を助け、且つ生産者と消費者とを、一定の場所より他の場所に移送するもの。運輸線路と運搬具との二種あり。運輸線路とは湖海・河川・運河・街路・鐵道等の天然及び人工の陸路及び水路をいひ、運搬具とは人車・馬車・荷車・汽車・船舶等の運搬の用に供する器械をいふ。

うんゆ-けふ 〔運輸業〕（名）うんゆえいげふ（運輸營業）の略。

うんゆ-ぜい 〔運輸稅〕（名）かうつうぜい（交通稅）に同じ。

うんゆ-せんろ 〔運輸線路〕（名）うんゆきくわん（運輸機關）を見よ。

うんゆ-ちゃう 〔運輸長〕（名）鐵道廳の職員。鐵道の運輸及び鐵道用電氣通信並びに信號に關する事務を掌理し、所部の係員を監督する職務を掌るもの。

うん-よう 〔運用〕運ぶらし用ふること。はたらかすこと。活用。袁宏又三國名臣略「運用無方、動撫二群會」

諺 運用の妙は一心に存す 臨機應變の妙用は其の人の心一つにあり。宋史呂端「舊曰、陣而後戰、兵法之常、運用之妙存乎一心」

うんよう-じゅつ 〔運用術〕（名）舵・帆などにて船を操縱する術。安全かつ迅速に目的地に到るを主眼とす。

うん-らう 〔雲廊〕（名）雲の如く長く續きたる廊。國銓斎「花飛び蝶驚けども人愁へず、水殿・雲廊別に春を置く」

うん-らん 〔柳穿魚〕（名）〔植〕玄參科、柳穿魚屬の草本。莖の高さ五六寸。葉は輪生、葉柄無く、下部の葉は箆狀、長楕圓形鈍頭にして、上部の葉は長披針形なり。十月頃、黃色の小花を莖頂に開き、總狀花序に排列す。我が國、各地の海濱に自生す。きんぎょさう。

うん-りゃう 〔雲量〕（名）雲の空を覆へる分量。全く雲なきを零とし、全空の覆はれたるを十位として觀測す。

うんりゅうすゐ 〔雲龍水〕（名）古への消火用の唧筒。

うん-ゐ 〔云爲〕云ふことと行ふこと。人のしわざ。言行。

え

五十音圖にて第四、即ち阿行衣列の假名、又、第三十九、即ち也行衣列の假名。伊呂波歌にては第三十四の假名。歴史的假名遣にて、是れと晉同じきゑ及びゑ、語中・語尾のへと區別せん爲め、之を中のえともいふ。伊呂波歌中の順序によりて名づけたるなり。又えの字體元の字に似たるより、もとえとも云ひ、其の形狀、物の縮みたる如くなるより、ちぢみえともいふ。

字體 〔萬葉假名〕愛・哀・埃・娃・衣・依・延・絵・曳・叡・駅・餌・益・榎・得・栄・可・愛・江・枝・吉・柄・兄。〔平假名〕え。〔ち。ち以上衣より出づ。〕ゑ（愛より）。ゑ（益より）。ゑ（得より）。ゑ（片假名）エ・エ・エ以上江の旁より）。ゑ・ヱ以上衣より）。

え 古語。吉きこと。又、そのもの。記中「かつがつも、いやさきだてる延えをしまかむ」

え 荏 （名）〔植〕えごま（荏胡麻）の異名。和名抄「荏中麻葉大而有毛、其實白者曰荏衣」

え 榎 （名）〔植〕えのき（朴樹）の異名。萬二吾がかどの榎えの實もりはむ百千鳥、千鳥はくれど君ぞきまさぬ」和名抄「榎字亦作榎曰一名、楢衣」

え （副）〔善えの義か〕能く。よう。敢へて。（下に打消しの語を用ふ）神代紀上「不敢來」「見つけ奉らず」

え （感）一 古語。ああ。天智紀「愛えくるしるし」二 呼びかくる語。い。よ。古へ東國の方言。萬十「父母江にいはひて待たね、筑紫なるみづく白玉とりて來まこに」三 上代、二に同じ。曾我會稽山「もう別かれんす、其の内え」四 疑問の意を表はす語。「え、なに」「見たか、え」五 承諾の意を表はす語。はい。「え、行きます」

え （接頭）古語。愛すべき又は吉き意をあらはす語。記上「阿那邇夜志、愛えをとめ」古袁「可愛えをとめ」

えーくる （英 Acre）（名）英米國地積の單位。四八四〇平方ヤード。に等し。我が國の四段餘に相當す。えーくる。

えーてる 依的兒 （英 Ether）（名）前條に同じ。

えーてる 〔理〕物質の何たると眞空中なるとを問はず、宇宙間到る處を塡充する極微・輕薄なる彈性體。光・熱・電氣及び磁氣等を傳播する媒介物として想像せらるるもの。

えーてる 〔化〕一種の芳香を有し、無色にして流動し易く、且つ極めて揮發し易き液體。えちるあるこーる・に硫酸を混じて製し

え 肢 （名）〔身體の枝の義〕古語。えだ（肢）に同じ。雄略紀「張夫鄰四支於木」

え 枝 （名）えだ（枝）に同じ。「梅がえ」記下「梅が枝」記下「うぐひすが延えはほつ延えの延えのうら葉は中葉にしつ延えに中葉しもつ延えに中葉しつ延えの延えのうら葉は」

え 役 （名）古語。えだち（役）に同じ。崇神紀「更科調役」仁德紀「役丁」

え 江 （名）陸地に入りこみたる湾又は湖沼の一部分。いりえ。記上「くしかの延えの入り延えのはちす」和名抄「江衣江海也」

えに あらふ にしき 江洗錦 しょくこうのにしき（蜀紅錦）に同じ。山家集下「今日ぞ知るその江に洗ふ唐錦、萩さく野邊にありけるものを」

えき 疫 （名）流行性の惡病。えやみ。疫病。崇神紀「國内多疾疫、民有死亡者、且大半矣」大鏡「時のえにおはしまさず」

え 柄 （名）器物を手に把り易からしむるため、長く出だしたる處。把手。和名抄「柄。器物莖柯也」宇津保「上「山の高きより落つる瀧の、からかさのえさしたるやうにて」枕「ひさげのえの倒れふすも、耳こそとどまれ」

えが ながい 柄長 話に餘談多し。

え 緣 （名）えん（緣）に同じ。ゆかり。勢語「秋かけていひしながらもあらなに、木の葉ふりしくえにこそ有りけれ」後撰四「水鳥のはかなきあとに年をへて、通ふばかりのえにこそ有りけれ」

え 宴 （名）〔宴えの約〕さかもり。酒宴。堤中納言集「三月しもの十日、京ごく藤の花のえし侍りけるとき」清正集「十月十四日に、つぼのせざいの菊のえに」

え 鬼 （名）古語。記中「かつがつも、いやさきだてる延えをしまかむ」

えー 〔接頭〕古語。愛すべき又は吉き意を表はす語。記上「阿那邇夜志、愛えをとめ」古袁「可愛えをとめ」

えーかー （英 Acre）（名）英米國地積の單位。四八四〇平方ヤード。に等し。我が國の四段餘に相當す。えーくる。

えーくる （英 Acre）（名）前條に同じ。

えーてる 依的兒 （英 Ether）（名）一 〔理〕物質の何たると眞空中なるとを問はず、宇宙間到る處を塡充する極微・輕薄なる彈性體。光・熱・電氣及び磁氣等を傳播する媒介物として想像せらるるもの。二 〔化〕一種の芳香を有し、無色にして流動し易く、且つ極めて揮發し易き液體。えちるあるこーる・に硫酸を混じて製したるもの。其の蒸氣を永く吸入すれば感覺を失ふを以て、外科手術にて麻醉劑として用ひ、脂肪・樹脂其の他を數の物質を能く溶解するを以て、溶媒として最も貴重せらる。俗に、えちるえーてる・をも稱す。

えーてるせい 依的兒精 （名）〔化〕依的兒一、滴精三より成る液。無色澄明にして揮發し易し。興奮藥・吸入劑として用ひらる。

えーる （英 Ale）（名）大麥・忽布（ホップ）及び水を原料とし、醱酵せしめて製する麥酒（ビール）。英國に產す。

えい 纓 （名）冠の具。もと巾子（コジ）の根を締めたる紐。後には、別に羅にて作り、背に垂る。

えい 影 （名）えいざう（影像）の略。ゑすがた。著聞「北面・下臈・御隨身などの影（ヱ）を、左京權大夫信實朝臣を召して書かせられけるに」平治「山門大師の御影もおはします」

えい 裔 （名）祖先より傳來せる血屬の關係。後裔。子孫。「源氏の裔」

えい 英 （名）ひいで。すぐれたること。又、そのもの。禮記「大道之行也、與三代之英、丘未之逮也」

えい 永 （名）〔ゑい（永）の習慣音〕一 えいらくせん（永樂錢）の略。永錢。深谷記「御褒美に、次郎兵衛に被下候事」二 古へ、ぜに（錢）の異稱。德川實紀附錄「明の永樂錢は遍く海内に流行せしゆゑ、ふるく、人に用地與ふるにも、永樂錢何貫の地などいひ、果てには、永とさへいへば即ち錢の事になり來たりしは、誠に驚嘆打ち驚き、典章・制度、敗壞きはまりしが致す所なり」

えい 榮 （名）〔ゑい（榮）の習慣音〕さかえ。ほまれ。名譽。「一身の榮之に過ぐるなし」

えい 詠 （名）〔ゑい（詠）の習慣音〕一 詠ずること。歌ふこと。源氏「詠などし給へるは、是れや佛の御かりようびんがの聲ならんと聞こゆ」

えい 鋭 （名）一 するどきこと。（鈍の對）「其の鋭當たるべからず」二 えりすぐりたる兵。「鋭を盡くして來たり攻む」三 するどき武器。堅固なる甲冑。「鋭を執る」

えい 嬰 （名）音樂の符號の一。或る音符の高度を半音高くせんとする時、其の音符の左側に附記する井形のもの。

えい 穎 （名）一 稻の穂を田租に用ふる時の稱。主稅寮式「穀若干束中穎若干束」江次第鈔「九抄云、稻者、刈本謂之稻、切穗謂之穎」二 莖ながらをば稻と云ひ、もみながら籠くを穎と云ふ。三 〔植〕植物學上の用語。禾本科植物の小穗の最下部に位する二枚の苞にして、其の腋には花を有せざるもの。

えい 營 （名）軍隊の宿舍。ぢんや。史記「足下深溝高壘、堅營勿與戰」

えい 翳 （名）一 おほひかくすこと。くも

りかすむこと。「青空一點の翳なし」國語「是去其藏而翳其人也」司馬相如文「揄長袂以自翳兮」㊁さしば(翳)に同じ。

えい 善 (形口語) えし(善)に同じ。いい。狂言賀茂「おお、したらえいは」同文右「おのしとおれと組みあうたぎせいは、えいぎせいではないか」

えい (感) 呼ばれて答ふる聲。え。はい。宇治拾遺「えいといらへたりければ」

えい 曳 (感) ㊀力を入るる時發する聲。諸鳥「えいやえいと舟引き起こし」曾我扇八景「拳をぬいて月の輪を、えいうんと突きふせ」國姓爺「竹馬「聲を力にえいえいえい」㊁呼びかくる聲。やい。盛衰記「このほど風氣有りて見參に入らずといへ、曳と出であはれず」諸國風「こちの風、向うて西に爲さうぞ、えい」狂言「いそげ、えい。はあ」㊂驚きたる時發する聲。やあ。諸鳥「えいえいい、何と何と、彼の者兄弟は餘の者五十騎・百騎にはまさうずるものを。ああ切ったり切ったり。きやつは曲者よ」狂言「えい、ここな、何と思うてお出ででござるぞ」㊃激したる時發する聲。薩摩歌「えい、よい加減な事ばかり」

えい-あづけ 永預 (名) 江戸時代、終身他家に禁しめ置きて、赦さざる刑名。

えい-い 鋭意 心を鋭くすること。後漢書朱穆「及壯就學、鋭意講誦」

えい-えい 永永 (副) 永久に。末永く。津國女夫池「未來永永うき目を見せん、思ひ知れ」

えい-えい 營營 (副) あくせくする狀にいふ語。奔走する貌。詩經小雅「營營青蠅」

えい-えい 曳曳 (感) ㊀力を入るる時發する聲。えい曳)を重ねていふ。狂言「やっとな」㊁笑ふ聲。やあ。宇治拾遺「えいえいやっとな」㊂人を呼びかくる聲。盛衰記「水社八文字屋本「いかに海龍王共はなきか、曳曳とぞ呼びたりける」㊃戰場にて揚ぐる鬨の聲。

えい-えい-おう (感) えいえい(曳曳)に同じ。狂言「えいとうえいとう、えいえいおう。扨も扨も強いやつでござる」

えい-えい-ごゑ 曳曳聲 (名) 力を入るる時などに出だす、えいえいといふ聲。國姓爺「押しあひ詰めあひ我れ先にと、えいえいごゑをかけはしの」

えい-えい-とう (感) えいえいおうに同じ。えいとう。大蘇「狂言「つきまくられてぞ逃げたりける。えいえいとう」

えい-えう 榮耀 榮ゑ耀ようく)こと。はでやかなること。榮華。ほまれ。ええう。朗詠「人間榮耀因緣淺」狭衣「もとより此の世のえいえうは、ことに好まずなりにしみ心なれば」曹植詩「榮耀難久持」歐陽修文「「天下之士、得一識面者、退誇於人、以爲榮耀」

えい-か 詠歌 ㊀歌を吟誦すること。諸鳥「眞如朽ちせずあひ見つと詠歌あれば」菅書「夫性靈之表、不知所以發于詠歌」㊁詠みたる歌。よみうた。諸鳥「げにげに此の歌は和泉式部の詠歌ぞと、田舍までも聞き及びしなり」㊂巡禮父は淨土宗の信者が唱ふる一種の歌。ごえいか。

えい-がい 嬰孩 (名) 「えい嬰ゑ)は笑ふほどになる義」ちのみご。みどりご。嬰兒。老子「若嬰兒之未孩」郭璞詩「千歲方嬰孩」顏氏家訓「教婦初來、教兒嬰孩」

えい-がう 影向 (ようがう(影向)に同じ。

えい-かく 銳角 (名) 【數】直角より小なる角度。(鈍角の對)

えい-がく 英學 (名) 英吉利國の語學。英語學。

えいかく-さんかくけい 銳角三角形 (名) 【數】三角形の總べての內角が銳角なるもの。

えい-かん 叡感 天子の御感。保元「朝敵追討、早速に其の功を致す由、叡感思召なり」李嶠詩「叡感酒三極、天識貫六幽」

えいかん-ぶし 永閑節 (名) 江戸淨瑠璃ぶしの一種。貞享・元祿頃行はる。淨雲の弟子にて、四天王の一人なる虎屋永閑の始めたるもの。

えい-き 英氣 (名) すぐれたる氣性。唐書「羅紹威少有英氣」

えい-き 銳氣 (名) 鋭き氣象。はげしき氣勢。史記「銳氣挫于險塞、糧食竭于內府」

えい-き 盈虧 ㊀月影の、位置によりて滿ちと缺かくること。㊁盛んなることと衰ふることと。增減。消長。榮枯。易經「益、盈者虧、則謙者受益也」李白詩「田賓相傾奪、賓客互盈虧」

えい-きう 永久 ㊀水く久しきこと。永遠。詩經小雅「來歸自鎬、我行永久」祭邕文「若社稷之臣、永久之策也」㊁英 Eternity) 時の、限りなく窮まりなきこと。永劫。恢久。

えいきう-がす 永久瓦斯 (名) 【化】如何なる低溫度と强壓とを以てするも、液化せずと假想せられし氣體。

えいきう-きよくぐわいちゅうりつ 永久局外中立 (名) 【法】えいせいちゆうりつ(永世中立)に同じ。

えいきうきよくぐわいちゅうりつ-こく 永久局外中立國 (名) 【法】えいせいちゆうりつこく(永世中立國)に同じ。

えいきう-こうさい 永久公債 (名) 【經】えいゑんこうさい(永遠公債)に同じ。

えいきう-し 永久齒 (名) 乳齒に代はりて生ふる人類の齒牙。上下兩顎各十六箇づつ三十二箇。

えいきう-じせき 永久磁石 (名) 【理】普通の鋼鐵製磁石の類にて、外より作用せる磁力の止みし後も、尙其の物自身にて磁力を示すもの。軟鐵の如く、磁力の作用を受け居る間のみ磁性を示すものを、一時の磁石といふ。

えいきう-ちゆうりつ 永久中立 (名) 【法】えいせいちゆうりつ(永世中立)に同じ。

えいきうちゆうりつ-こく 永久中立國 (名) 【法】えいせいちゆうりつこく(永世中立國)に同じ。

えいきう-ねんきん 永久年金 (名) 其の人の生存中のみならず、其の子孫に至るまで、永久に交付する年金。世襲年金。

えいきう-の-かうすゐ 永久硬水 (名) 【化】硫酸かるしうむ等を溶解含有し、煮沸によりて軟水となし能はざる硬水。酸性炭酸かるしうむ・炭酸まぐねしうむ・を溶解し、煮沸すれば硬度を減ずるものを一時の硬水といふ。

えいきう-しやう 氷氣鐘 (名) 中に空氣を滿たし、工夫などを入れて、水中へ沈下する鐘の如きさましたるもの。水中にて工事などなすに用ふ。

えい-きやう 影響 (影の形に隨ひ、響きの聲に應ずる如き義) 關係の及ぶこと。きしびき。書經大禹「禹曰惠迪吉、從逆凶、惟影響」

えい-きよ 盈虛 盈(こつることと、虛(ゑ)しきこととと。盈虧。易經下經「日中則昃、月盈則食、天地盈虛、與時消息」

えい-きよく 郢曲 詠曲 (名) 「郢は古へ支那の楚の都。客あり、郢中にて、初め、下里巴人などいへる俗曲を歌ひしに和するもの多かりしが、高尙なる陽春白雪の曲には和するもの次第に少なかりきといへる故事より出づ」㊀當世風のうたひもの。俗曲。鮑照詩「陽春四、郢曲發陽春」㊁催馬樂・風俗・朗詠・今樣歌等の總稱。東鑑「八月廿四日、酒宴郢曲之際、鎌隆入興」著聞「朗詠あり。嘉辰令月、次に泰山不讓土壤、次に今世世俗の句なり中略この三箇の郢曲の心をもて」十訓「「成通卿郢曲にすぐれ給へり中略君だにも今やう遊ばさばおち候ひなん」

えい-きよし 銳鋸齒 (名) 【植】植物學上の用語。葉緣(ふちの一種。えふえん(葉緣)を見よ。

えい-ぎん 詠吟 ㊀詩歌などうたふこと。朗吟。吟味。諸東北「のどけきを種として、天道にかなふ詠吟たり」㊁歌の會の時、歌を讀み上ぐる人。謠師。

えい-ぐ 影供 神佛又は故人などの骨像に、供物を捧ぐること。降信集「人丸のえいぐ」擯古今「建長六年正月、柿本影供し侍りしに、眞影をわたしつかはすとて、つつみ紙に書き附け侍りし」

えいぐ-うたあはせ 影供歌合 (名) 影供の爲めに行ふ歌合。柿本人麿の影像にそなふるを普通とす。明月記「十月廿三日、夜南宮御幸、內府影供所中略當座有歌合」

えい-くわ 英貨 (名) 英吉利國の貨幣。

えい-くわ 穎花 (名) 【植】植物學上の用語。花の一種、外部の穎と稱する苞に依りて包まるるもの。例へば、いね・むぎの如し。

えい-くわ 穎果 (名) 【植】植物學上の用語。果實の一種、熟するも裂開せず、複子房一室より成り、中に一種子を藏し、果皮は種子に密著して薄く、且つ乾燥せる果實。例へばいね・むぎの如し。

えい-ぐわ 榮華 (名) 世にときめくこと。榮ゆること。當貴なること。勢語「おほきおとどの榮華のさかりにみまそかりて」莊子「有榮辱者、必有憔悴」淮南子「若夢而覺、其榮者、必有憔悴」

えいぐわ-の-さくら 榮華櫻 次條に同じ。諸春山「またしやは、またしやは、花一時の榮華の櫻」

えいぐわ-の-はな 榮華花 盛んに咲きほこりたる花。(散り易きにいふ)諸雜部「榮華の花も一時の夢とはしら雲の」

えいぐわ-の-はる 榮華春 榮華の盛なるを、春の萬物萌え出でんとする時に譬へていふ語。諸雜部「榮華の春もよろづとし、君も嬰かに、民榮え」

えいぐわ-の-ゆめ 榮華夢 榮華に世を過ごしたる夢。永續せずしてさめやすきに譬へていふ語。諸雜太「「盧生が見し榮華の夢は五十年」

えい-ぐわい 營外 (名) 兵營のそと。(營內の對)

えいぐわい-きよおうゆう 營外居住 (名) 軍人・軍屬が、兵營以外の場所に居住すること。(營內居住の對)

えいぐわ-ぞえう 榮華榮耀 (名) えうえいぐわ(榮耀榮華)に同じ。濱松「「榮華榮耀にたはぶれ、花紅葉をもてあそびて」

えい-けつ 英傑 (名) 才智の衆に優れたる人。英雄。豪傑。荀子「其窮也俗儒笑之、其通也英傑化之」

えい-けつ 永訣 永き訣かれ。死別。永別。江淹文「別賦「誰能摸二暫離之狀、寫二永訣之情一者乎」

えい-けふ 營業 ㊀營利の目的にて、永續且つ獨立に行ふ經濟的事業。㊁商行爲の業務。

えいけふ-きんし 營業禁止 【法】營業を爲すことを禁ずる行政處分。古物商取締法第六條「行政廳は何時たりとも營業禁止を解くことを得」

えいけふ-せいせき-いちらんへう 營業成績一覽表 一定期間內の營業の成績を、一目瞭然たらしむるため、營業者の作成する表。

えいけふ-ていし 營業停止 一定の期間、營業を停止すること。又、其の行政處分。取引所法第二十七條「會員又は仲買人の營業停止若は除名」

えいけふ-か 營業家 (名) えいげふしや(營業者)に同じ。

えいけふ-かをく 營業家屋 (名) 【商】簿記の勘定科目の一。營業のために使用する家屋。

えいけふ-さきうせい 營業行政 (名) 【法】經濟行政の一。營業の保護取締を目的とするもの。

えいけふ-くみあひ 營業組合 (名) 【商】一定の地域にて、或る種の營業をなす同業者、又は營業上の利害を共にする者が、營業上の弊害を矯正し、其の共同の利益を圖ることを目的として設立する公共團體。

えいけふ-くわいしや 營業會社 (名) 【商】營利の目的にて、或る行爲をなすことを常業とする會社。官吏服務紀律「營業會社の社長又は役員」

えいけふ-くゐき 營業區域 (名) 【商】營業をなし得る土地の區域。歌謠免許規則第十「營業區域」

えいけふ-けいさつ 營業警察 (名) 【法】警察の一。安寧・秩序に對する危害を豫防又は排除する目的にて、營業の自由を制限するもの。警視廳官制第十五「營業警察」

えいけふ-ざいさん 營業財產 (名) 【商】特に、營業のために所有する財產。(私有財產の對)

えいけふ-じぶき 營業什器 (名) 【商】營業に必要なる器具。卽ち、椅子・机・火鉢等の類。

えいけふ-じぶき-かんりやう 營業什器勘定 (名) 【商】營業什器を整理するため設くる、簿記の勘定科目。營業用什器勘定。

えいけふ-しや 營業者 (名) 營業の名前主。卽ち、自分の名義にて自ら營業をなし、又は他人に營業をなしむるもの。營業人。營業主。營業家。營業稅法三條「、營業者」

えいけふ-しゆ 營業主 (名) 前條に同じ。銀行條例第九「營業主」

えいけふ-じゆんび 營業準備 (名) 【商】銀行が、預金引出しの請求に應ずるため、資金を準備すること。此の準備の方法に營業準備集合法及び營業準備分離法の二種あり。營業準備集合法とは、諸銀行の營業準備金を、中央銀行の如き或る中心に預け入るることをいひ、營業

準備分離法とは、各銀行が、分離して、各自に其の必要と思量する準備金を蓄ふることをいふ。

えいけぶじゅんびきん 〔營業準備金〕（名）〔商〕營業準備として積み置く金額。

えいけぶじゅんびしぶがぶぶ 〔營業準備集合法〕（名）〔商〕えいげぶじゅんび（營業準備）を見よ。

えいけぶじゅんびぶんりぶ 〔營業準備分離法〕（名）〔商〕えいげぶじゅんび（營業準備）を見よ。

えいけぶしょ 〔營業所〕（名）〔商〕營業者の營業の本據たる場所。商法第九條「營業所」

えいけぶしようにん 〔營業使用人〕（名）〔商〕營業者が、其の營業の事務を處理せしめ、又は補助せしむるため使用する人。民事訴訟法第五條十一「營業使用人」

えいけぶぜい 〔營業稅〕（名）一定の營業者に賦課する租稅。現行法にて營業稅を賦課せらるるは、物品販賣業・銀行業・保險業・金錢貸付業・物品貸付業・製造業・運送業等凡そ二十餘種にて、法定の條件を具ふるものに限る。營業稅法「營業稅」

えいけぶぜいしんさゐゐん 〔營業稅審査委員〕（名）營業稅審査委員會を組織する委員。商業會議所代表者及び納稅義務を有する營業者中より、大藏大臣これを命ず。

えいけぶぜいしんさゐゐんくわい 〔營業稅審査委員會〕（名）政府より通知したる營業稅の課稅標準の算定に不服なる者が異議を申し立てたる場合に、課稅標準の審査をなさしむるため、各稅務監督局所轄内に設けたる政府の諮問機關。營業稅審査委員を以て組織す。

えいけぶぜいーかぶぜい 〔營業稅附加稅〕（名）營業稅に附加して、營業稅を納むる者に課する地方稅。明治四十一年法律第三十七號第三、北海道府縣其の他公共團體は左の制限以内の營業稅附加稅を課するの外營業稅を納むる者の營業に對し課稅することを得ず」

えいけぶち 〔營業地〕（名）營業をなす土地。

えいけぶーぢゃう 〔營業場〕（名）〔商〕營業をなす場所。營業稅法第三一定の店舗其の他の營業場」

えいけぶちーわたし 〔營業地渡〕（名）〔商〕賣買せられたる物品の受け渡しを、賣主の營業地にてなすこと。賣主の營業地にて受け渡しするときは、運搬に關する諸費は買主の負擔に歸し、買主の營業地にて受け渡しするときは、運搬に關する諸費は賣主の負擔に歸す。

えいけぶーにっし 〔營業日誌〕（名）〔商〕營業に關する日日の出來事を記載して、後日の參照に供する帳簿。

えいけぶーにん 〔營業人〕（名）えいげぶしゃ（營業者）に同じ。

えいけぶーぬし 〔營業主〕（名）前條に同じ。

えいけぶーねんど 〔營業年度〕（名）〔商〕利益の配當・收支の決算等の便宜のため、營業者の定めたる一定の年度。商法第六十八條「營業年度」

えいけぶーはうこく 〔營業報告〕（名）〔商〕商人が、營業年度に於ける營業の狀況を詳細に記載して、利害關係人に公告するもの。

えいけぶはうこくーしょ 〔營業報告書〕（名）〔商〕營業報告の書面。商法第百九十「營業報告書」

えいけぶひ 〔營業費〕（名）〔商〕營業を繼續するに直接必要なる一切の費用。明治二十九年三月法律第三十三號營業稅法第十一條「相當の營業費」

えいけぶひーうちわけちゃう 〔營業費内譯帳〕（名）〔商〕營業費に屬する費目を口分けして、其の使途を詳細に記入する帳簿。

えいけぶひーかんぢゃう 〔營業費勘定〕（名）〔商〕營業費を整理するため設くる簿記の勘定科目。

えいけぶーかぶぜい 〔營業附加稅〕（名）えいげぶぜいふかぶぜい（營業稅附加稅）の略。

えいけぶほしょつきん 〔營業保證金〕（名）〔商〕株式會社組織の取引所が、其の營業の保證として、營業の開始前、政府に納むべき金。此の金額は其の資本金の三分の一とし、其の納入の後に非ざれば開業することを得ざるものとす。取引所法第四條「營業保證金」

えいけぶほじょにん 〔營業補助人〕（名）〔商〕一營業の補助となるべき行爲をなす人の總稱。二特に、營業者の機關として、其の營業の補助となるべき行爲をなす人の稱。

えいけぶようーじぶぎーかんぢゃう 〔營業用什器勘定〕（名）〔商〕えいげぶじふきかんぢゃう（營業什器勘定）に同じ。

えいーこ 〔榮枯〕（名）榮ゆることと枯るることと。盛衰なることと衰ふることと。盛衰。曹植詩「積善有餘慶、榮枯立可待」

（諺）榮枯常なし 人世の盛衰定まりなし。

えいーご 〔英語〕（名）英吉利國の言語。

えいーご 〔英悟〕英(イ)でて悟(ヒ)りのはやきこと。すぐれてさときこと。菁莪書曹「上仁愛英悟、得之天然」

えいーご 〔穎悟〕穎(ヒ)れて悟(ヒ)りのはやきこと。さとくかしこきこと。晉書王羲「幼而穎悟、神彩秀徹、見日不眩」

えいーこう 〔營功〕乘田を耕作すること。大日本農史

えいこうーせいさん 〔永恆生産〕（英 External generation）（名）神父と神子との關係に關する一種の見解を表せる語。即ち、神父は嘗て一定の時に神子を生みしにあらず、今も常に生みつつあるものにして、其の生産は永久に續くものなりといふこと。恆久生産。

えいーこさく 〔永小作〕（名）一法）小作料を拂ひて、他人の土地に耕作又は牧畜をなすこと。吟ずること。二法）小作の一。地主が期間を定めずして、其の田畑を數十年間小作せしむるもの。地方凡例錄「永小作と云ふは、賃地の小作にてはなく、自分所持の田畑を、年季を取り極めず、數十年間小作致さするを云ふ。永小作は、地主にて謂はれなく地面を取り上げ、外の者へ作らする儀は成りがたし」

えいこさくーけん 〔永小作權〕（名）〔法〕物權の一。小作料を拂ひて、他人の土地に耕作又は牧畜をなすもの。其の存續期間は二十年以上、五十年以下とす。民法第二編第九章「永小作權」

えいこさくーにん 〔永小作人〕（名）永小作權を有する人。民法七十二條永小作人は小作料を拂ひて他人の地上に耕作又は牧畜を爲す權利を有す」

えいーこの （感）かけ聲、又はやし聲。源氏十二段長生島蓬萊の「お手を引きつつ腰押しつ、つづらをりをば、えいこのえいこの」

えいーごぶ 〔永劫〕（名）極めて永き年代。ごふ（劫）を見よ。曾我扇八景「田家して、永劫の苦患を救ふが功德になるか」

えいーごゑ 〔曳聲〕（名）えいと力を入れて發する聲。宇治拾遺「すぢりもぢり、えいごゑを出だして、一座を走りまはり舞ふ」

えいーこん 〔英魂〕（名）ひいでたる人のたましひ。英雄の魂。英靈。賈彥璋詩「茂績當年舉、英魂此地銷」

えいーさ （感）力を入るる時のかけ聲。謠曲「吹きよせよ、えいさ、えいさらえいさと」

えいーさい 〔英才〕（名）すぐれたる才。秀でたる才。又、その人。孟子盡心「得天下英才而教育之」風俗通義「伯林不世英才也、當爲國家幹輔」

えいーさう 〔詠草〕（名）作歌の草稿。歌稿。慈京集「飛鳥井中納言雅世卿へ消息し奉りて、添削の詠草奉る時」

えいーさう 〔營倉〕（名）ぢゆうえいさう（重營倉）及びけいえいさう（輕營倉）の總稱。

えいーざう 〔影像〕（名）肖像。えい（影）ぞう（像）。榮華物語「この聖は御えいざうを書かんとていそぎけり」

えいーざう 〔營造〕一土木・建築などを營(イト)み造ること。營作。普請。建設。陳書世祖紀「惟製・穿鑿・各肆營造技業徒繁、本源日駱」北史齊紀「詔、土木營造、金銅鐵諸雜作工、一切停罷」二法）えいざうぶつ（營造物）の略。會計檢査院法第十三條「各官廳及官立諸營造の收支及官有物に關する決算」

えいざうーしゅうはい 〔影像崇拜〕（英 Image-worship or Iconolatry）（名）偶像崇拜の一種なれども、影像其のものを崇拜するにあらずして、唯或る觀るべからざる威力の代表物として、單に影像を拜するのみなるもの。ぐうざうしゅうはい（偶像崇拜）を見よ。

えいざうーぶつ 〔營造物〕（名）一設け造りたる家など。二法）直接に、公共の用に供する目的にて設けたる建設物。即ち、學校・病院・鐵道・道路・公園等の類。內務省官制第七條「府縣立以下の貧院盲啞院孤獨院及育兒院其の他慈惠の用に供する營造物に關する事項」

えいーさく 〔營作〕えいざう（營造）に同じ。史記孟嘗君「乃營作朝宮渭南上林苑中」

えいさくぶん 〔英作文〕（名）英語の作文。

えいさーどぶ （名）えいさと發するかけ聲。えいごゑ。曾我會稽山「えいさ聲して早乘物、見世さきにどうとおろし」

えいーさっき （感）押す時などに、力を入るるかけ聲。博多小女郎波枕「心いそげば、えいさっき中略押すや櫓腕の續くだけ」

えいざま 永樣（名）草體に書きたる樣の字。

えいーさら （感）次條に同じ。毛吹草「たづなをば引くはえいさら野草かな」

えいさらーえい （感）物を引く時などに發する聲。えいさら。本朝三國誌「熊手にかけてえいさらえい」

えいさらーえいさ （感）前條に同じ。謠百萬「えいさらえいさ、引けや引けや此の車」

えいさらーおう （感）えいえいおうに同じ。日本武尊吾妻鑑「海手に渡をきり、えいさらおうと漕ぐ船に」

えいーさん 〔叡算〕（名）「えい（叡）は諸事に通じ深く明かなること、帝王のことにいふ。算はかぞふ」天子の御年齡。寶算。歐陽修文粹「叡算綿長、等乾坤而不老」

えいさんーかたばみ 〔叡山酸漿〕（名）〔植〕みやまかたばみの異名。

えいさんーごけ 〔叡山苔〕（名）〔植〕くらまごけ（地柏）の異名。

えいさんーすぎ 〔叡山杉〕（名）〔植〕松杉科・杉屬の常綠喬木。杉の一變種、葉短く先端曲がりたる棘を有するもの。庭園に栽培して觀賞用とす。

えいさんーすみれ 〔叡山菫〕（名）〔植〕えぞすみれ（胡菫草）の異名。

えいさんーにんにく 〔叡山大蒜〕（名）〔植〕ぎやうじやにんにく（茖葱）の異名。

えいさんーはぐま （名）〔植〕らんかうはぐまの異名。

えいさんーびる 〔叡山蒜〕（名）〔植〕ぎやうじやにんにく（茖葱）の異名。

えいさんーゆり 〔叡山百合〕（名）〔植〕やまゆり（山百合）の異名。

えいーし 〔叡旨〕睿旨。（名）天子の思し召し。天子の仰せ。梁元帝文「仰寰神規、恭承睿旨」

えいーし 〔英志〕（名）すぐれたる志。

えいーし 〔英資〕（名）すぐれたる性質。

えいーし 〔英姿〕（名）すぐれたる容貌。雄雄しきすがた。

えいーし 〔詠史〕（名）歷史の事實を詩歌に詠むこと。（詠物の對）

えいーし 〔鋭師〕（名）勢ひ鋭き軍兵。左傳隱公元年「我以銳師、宿加於邸」

えいーし 〔英詩〕（名）英吉利國の詩。

えいーし 〔榮賜〕【法榮譽の表章として下賜せらるる物件、又は權利等の總稱。官吏服務紀律第二條「官吏外國の君主又は政府より授與せんとする所の勳章榮賜俸給並贈遺」

えいーじ 〔詠〕（名）詠ずること。吟ずること。謠曲「撥音・爪音、ばらりからり、ばらりと、感涙もこぼれ、えいじも劣るばかりなり」

えいーじ 〔嬰兒〕（名）みどりご。ちのみご。謠曲「嬰兒の蟲を以て巨海を測り、螢螂が斧を以て隆車に向かふ如くなり」老子「嬰兒之未孩者、終日號而不嗄」倉頡篇「男曰兒、女曰嬰」

えいーじ 〔英字〕（名）英吉利國の文字。

えいーしき 〔英式〕（名）英吉利國に行はるる式。英國流の法式。

えいじーさん 〔永字銀〕（名）えいじちやうぎん（永字丁銀）及びえいじまめいたぎん（永字豆板銀）の總稱。永中。永中銀。中字銀。二寶字銀（ニホウジギン）。二寶銀（ニホウギン）。貨幣通考「寶永七年三月六日又新銀を鑄る。其の銀、寶字兩頭に二つ、中に永字の極印あり。之を中銀とも、永字銀とも、二つ寶字銀とも云ふ」貨幣疑錄「寶永七年庚寅三月二つ寶銀を改む。兩頭に寶字、中に永字の極印あり。永字銀又は中字銀といふ。享保六年辛丑十二月通用止む。凡そ十二年」

えいじーぎんぱん 〔永字小判〕（名）陸奥國にて鑄造せる小判。

えいじーちゃうきん 〔永字丁銀〕（名）寶永七年三月、江戸幕府の發行せし丁銀。面の兩頭に寶字二つ、中に永字の極印あるもの。縱は三寸二分、橫は一寸、重量は四十七匁八分、品位は銀四・銅六。享保六年十二月其の通用を廢せられたり。金銀

圖錄「永字丁銀」

えい-じつ　〔名〕一永日。詩「竹院君閑銷永日」〔范成大詩「永日屋頭槐影暗、微風扇裏麥花香」〕二別かるる時などの挨拶の語。他日ゆるりと逢はんとの意。夕霧阿波鳴渡「隨分弓鳥の稽古精だし申さうぞ。永日永日と暇乞して歸りけり」

えい-じつ　〔名〕營實　薔薇の實。藥用とす。

えいじ-はっぱふ　〔名〕永字八法　書法傳授の一法。永の字によりて、側・勒・努・趯・策・掠・啄・磔の八種の筆法を知らしむるもの。

えいじ-まめいたぎん　〔名〕寶永豆板銀　寶永七年三月、江戸幕府の鑄造せし豆板銀。面に寶の字、背に永の字の極印あるもの。縱は五分强、横は五分五厘、重量は二匁八分、品位は百分中、約銀四十分、銅六十分。享保六年十二月其の通用を廢せられたり。金銀圖錄「永字豆板銀」

えい-しゃ　〔名〕映寫　原圖の如く、精密にうつしとること。

えい-しゃく　〔名〕榮爵　一高く貴き爵位。史記「寵倖榮爵、身受肺腑」二五位の稱。其れに敍せらるるを敍爵といふ。今昔「東の方より、榮爵たづねて買はんと思ひて、京にのぼりたるものありけり」

えい-しゅ　〔名〕英主　すぐれたる君主。南史「卒被知英主」

えい-しゅ　〔名〕贏輸　ゆえい(輸贏)に同じ。

えい-じゅう　〔名〕影從　影の形に於ける如くに從ふこと。榮華「內外戚之影從、抑亦見佛聞法之大緣」

えい-しゅつ　〔名〕詠出　歌など、詠みいだすこと。又、その詠歌。

えい-しゅん　〔名〕英俊　〔しゅん(俊)はすぐるる義〕才智の、衆に秀でたる人。英傑。史記「異姓並起、英俊鳥集」

えい-しょ　〔名〕營所　兵營。ぢんや。後漢書「桓帝擢爲度遼將軍、蒞到營所、先宣恩信」

えい-しょ　〔名〕英書　英語の書物。

えい-しょう　〔名〕詠誦　しようえい(誦詠)に同じ。

えい-じょく　〔名〕榮辱　榮(ほまれ)を受くることと、辱めを受くることと。易經繫辭「樞機之發、榮辱之主也」

えい-しん　〔名〕榮進　貴き官位の進むこと。魏康書「又讀老莊「重增其放、故使榮進之心日類、任實之情轉篤」」陸機文「擢自群萃、累蒙榮進」

えい-しん　〔名〕詠進　詩歌などを詠みて、朝廷などにたてまつること。

えい-しん　〔名〕鋭進　鋭く進むこと。早く進むこと。

えい-じん　〔名〕鋭刃　〔名〕守るどきやいば。鋭利なる刃物。

えい-じん　〔名〕英人　〔名〕英吉利國の人。英國人。

えい-ず　〔名〕映　〔自動詞〕一影現る。うつる。「山影水に映ず」二かがやく。反射す。「夕日波に映ず」

えい-ず　〔名〕詠　〔他動詞〕一詩歌などを歌ふ。吟ず。吟誦す。書經「受擊鳴球、搏拊琴瑟以詠」二詩歌などを作る。詠むむ。

えい-すけ　〔名〕榮助　〔名〕情狀を知りながら、盜品を寶買する者をいふ、盜賊の隱語。

えいすゐ-くわう　〔名〕鋭錐鑛　〔名〕〔鑛〕正方晶系に屬する鑛物。成分は酸化ちたん。金紅石・板ちたん鑛と同成分にして異象をなす。硬度は六、比重は三・九内外。藍・黑・赤・灰等の色を呈し、金剛光澤を有す。火成岩・石灰岩等の裂罅に存す。鑛物標本となす外、實用上重要ならず。

えい-せい　〔名〕英聲　〔名〕すぐれたる名聲。英名。「諸孔晏「岐伯が絕技を先にあげ、張儀が英聲を後に馳す」」

えい-せい　〔名〕營生　生業を營むこと。すぎはひ。くちすぎ。渡世。晉書「不營生業」

えい-せい　〔名〕叡聖　天子のすぐれて賢明にましますこと。聰明にして叡智なること。漢書「賈生嬌矯、弱冠登朝、遭文叡聖、屢抗其疏」後漢書「昔文王、承積德之緒、加之以叡聖」

えい-せい　〔名〕永世　永き世。世のあるかぎり。永代。詩經「於乎皇考、永世克孝」書經「作資于王家、與國咸休、永世無窮」

えい-せい-さよくぐわいちゅうりつ　〔名〕永世局外中立　えいせいちゅうりつ(永世中立)に同じ。

えい-せいさよくぐわいちゅうりつ-こく　〔名〕永世局外中立國　えいせいちゅうりつこく(永世中立國)に同じ。

えい-せいせい-せん　〔名〕永精錢　〔名〕えいらくせん(永樂錢)に同じ。

えい-せい-ちゅうりつ　〔名〕永世中立　〔名〕〔法〕國家が、永久に、外國の戰爭に關與し、他國の保護を受け、他國と同盟し、又は國際爭議を生ずる恐れある行爲をなす等を得ざる、條約上の義務を負擔すること。永久局外中立。永久中立。永世局外中立。

えい-せいちゅうりつ-こく　〔名〕永世中立國　〔名〕〔法〕永世中立の義務を負擔する國家。即ち、瑞西國・白耳義國等の類。永久局外中立國。永久中立國。永世局外中立國。

えいせいちゅうりつ-てうやく　〔名〕永世中立條約　〔名〕〔法〕永世中立を其の內容とする條約。

えいせいろく　〔名〕永世祿　明治維新の際、下賜せられたる無期限の家祿、及び賞與祿の稱。明治九年、政府は金錄公債證書を發行して、一時にこれを下付せり。明治九年八月第百八號布告「金祿公債證書發行條例」「永世祿の者」

えいせつの-さい　〔句〕詠雪才　文才ある人を稱する語。下文を見よ。晉書「王羲之、晉謝奕女字道韞、聰識有才辯、叔父謝安、嘗內集、俄而下雪、安曰何所似、未若柳絮因風起」

えい-せん　〔名〕叡船　〔名〕天子の召し給ふ船。東鑑「三、證水三、廿日、關東武士等、襲來于叡船之汀」

えい-せん　〔名〕永錢　〔名〕一穀類に代へて納める錢。二えいらくせん(永樂錢)の略。永。漢谷記「つら役と名づけ、永錢壹文づつ、三十三郷御取り被り成」

えい-ぜん　〔名〕營繕　建築物を營み繕ふこと。修復。修繕。修理。晉書「比年營繕、並已修整」

えいせん-あんざんがん　〔名〕英閃安山岩　〔名〕〔鑛〕安山岩の一種。新期の噴出岩にして、斜長岩の外、石英及び角閃石の斑晶を主成分とし、輝石及び雲母等を副成分とするもの。伊豆・三河・中國地方に此の種のものを產す。英閃富士岩。

えい-せんじ　〔名〕永宣旨　僧官の中、上奏を經ずして、永久に任命する事を得る特權許可の宣旨。東寶記「永宣旨

權律師」

えいせん-とう　〔名〕鋭尖頭　〔名〕〔植〕植物學上の用語。えふせん(葉先)を見よ。

えいせん-は　〔名〕永泉派　〔名〕浮世繪の一派。寶歧頃、菊川英山より起こりたるもの。門人溪齋・英泉、漢畫の筆法を交じへて畫風を變じ、一時大に行はる。

えいせん-ぶじがん　〔名〕英閃富士岩　〔名〕〔鑛〕えいせんあんざんがん(英閃安山岩)の異名。

えい-そ　〔名〕永祚　〔名〕えいそのかぜ(永祚風)の略。狂言「えいその如くなる大風吹き來たり」

えい-ぞく　〔名〕永續　永く引き續くこと。永く保ちて絕えざること。

えいぞく-せい　〔名〕永續性　〔名〕〔英 Perdurability〕〔哲〕事物が、同一の狀態を永く持ち續け得る性質。

えい-そつ　〔名〕鋭卒　〔名〕勢ひ鋭き兵卒。强勇なる兵士。漢書「大發興調關東輕車鋭卒」

えいそ-の-かぜ　〔名〕永祚風　〔名〕のちの世までも傳へきこゆべき大風なりといふ。撰集抄「永祚の風とて、末の世まできこゆる風吹きて、つりがね遠かに落ちて、人の家十ばかりうちひしぎて」

えい-たい　〔名〕映帶　映(うつり)あふこと。相映射すること。王羲之「交帶(ヤウ)、又有清流激湍、映帶左右」

えい-たい　〔名〕永代　えいせい(永世)に同じ。著聞「國に屋敷など、永代限りてあて給ひけり」魏武帝文「植奔寶樹之爲將也、受賜千金、一朝散之、故永代流解」

えい-だい　〔名〕永代　〔名〕永樂錢に積もりて、當時の通用錢を換算すること。

えいたい-さきゃう　〔名〕永代經　〔名〕寺院にて、亡者のため、永代讀經をなすこと。

えいたん-こう　〔名〕永代講　〔名〕寺院にて、永代變はらず、毎年一度亡者の供養のため、信者に說教をなすこと。

えい-たいしゃく　〔名〕永貸借　〔名〕〔法〕舊民法にて、三十箇年以上、五十箇年以下の期間なる不動產上の有償貸借の稱。現行民法の永小作に該當す。民事訴訟法「其時期の訴訟物なるとき」

えい-たいし-ゃくち　〔名〕永代借地　〔名〕永代借地權を設定せる土地。明治三十四年法律第三十九號「永代借地の上に存する建物に關する登記」

えいたいし-ゃくち-けん　〔名〕永代借地權　〔名〕〔法〕現行條約實施の際、日本の市區に編入せられたる外國人居留地にて、締盟國の人民が、永久に且りて其の土地を使用・收益・處分し得る權利。明治三十四年法律第三十九號「永代借地權」

えいたいしゃくち-けん　〔名〕永代借地券　〔名〕政府より、永代借地權を有するものに交付する證券。永代借地權の賣買・讓渡しは、其の土地所在地を管轄する地方廳にて、其の旨をこの證券に記載するにあらざれば、第三者に對抗することを得ざるものとす。明治三十四年法律第三十九號「政府の永代借地券を以て外國人又は外國法人の爲に設定したる永代借地權」

えいたいし-ゃくち-たてもの-とうさぼ　〔名〕永代借地建物登記簿　〔名〕永代借地の上に存する建物に關する事項の登記につき、特別に設けたる登記簿。明治三十四年勅令第百七十八號「永代借地建物登記簿」

えいたいしゃくち-とうさぼ　〔名〕永代借地登記簿　〔名〕永代借地に關する事項の登記につき、特別に設けたる登記簿。明治三十四年勅令第百七十八號「永代借地登記簿」

えいたいしゃくち-けん　〔名〕永代借地權　〔名〕永代借地に關する權利。

えいたいしゃくち-ゐ　〔名〕永代借地人　〔名〕永代借地權を有する人。

えいたい-じょうゆん　〔名〕永代證文　〔名〕年期を限らず、永代まで有効の證文。

えいたい-だうぐ　〔名〕永代道具　〔名〕永代に使用すべき精巧・堅牢なる道具。

えいたい-ちぎゃう　〔名〕永代知行　〔名〕永代に領すべき知行所。鎌田兵衞名所盃「山田の郷と申す二百町の所、永代知行に進上す」

えいたい-ちゃう　〔名〕永大帳　〔名〕古昔、國郡の戶數を記して、其の課戶・不課戶を記載し調査する帳。

えいたい-どきゃう　〔名〕永代讀經　〔名〕亡者のため、永代に讀經すること。

えいだう　〔名〕影堂　〔名〕先祖の影像・位牌などを祀る堂。雍陶詩「秋聲數聲天欲曉、影堂斜掩一燈深」

えい-だか　〔名〕永高　〔名〕田畑の收穫を、永樂錢に積もりたる高。(こくだか・くわんだかの對)えいもり(永盛)。えいつみ(永積)。田園類說「永高は貫高とは別にして、石高以前、關東諸國にて年貢辻を永樂錢につもりて、知行・領知などに直ちに此の永高を用ふる」

えい-たつ　〔名〕榮達　貴き官位に進むこと。榮華富貴となること。「充倉子「窮厄則以命自寬、榮達則以道自正」」

えい-たつ　〔名〕穎脫　穎を脫したること。得て處囊中乃穎脫而出」

えいたん　〔名〕容歎　叡嘆　主上の御嘆き。盛衰記「院の御涙誠に押へがたしと勅定あり。當座の叡嘆、山門の眉目なり」

えい-たん　〔名〕詠歎　詠嘆　一感歎を永く引きてうたふこと。うたひて感歎すること。禮記「詠歎之、淫液之」二文法〕助動詞の用法の一。助動詞なりを用ひて詠歎の意をあらはすもの。良行變格の動詞の連體形に連續する外、動詞の終止形に連なる。

えい-だん　〔名〕英斷　きつぱりとしたる決斷。速かにして躊躇せざる決斷。晉書「劉裕忠武英斷、誠冠終古」

えいち　〔名〕容智　叡智　〔名〕深遠なる智識。易經「古之聰明容智、神武而不殺者夫」

えい-ち　〔名〕英智　〔名〕すぐれたる智識。

えい-ちう　〔名〕裔冑　〔名〕遠き子孫。後裔。左傳「公十二、謂我諸戎、是四嶽之裔冑也」

えいちゃ-がうし　〔名〕永宣旨　僧官の中、上奏を經ずして、永久に任命する事を得る特權許可の宣旨。東寶記「永宣旨

えいちゃ-がうし　〔名〕江市屋格子　〔名〕〔元祿頃、江戸、江市屋宗助の創作なれば云ふ〕窗などの格子の一。京格子を細かくして三角に削りたるを、透間なきが如く打ちたる物。

えい-ちゅう　〔名〕營中　〔名〕一兵營の中。營內。齊書「高季「營中驚、太祖臥不起」」二將軍の居所。東鑑「二、治承六年、四月廿六日」「文學上人依調、參營中」」

えい-ちゅう　〔名〕永中　〔名〕えいちゅうぎん(永中銀)の略。三貨圖彙「正德四年の頃は、私の賣買、錢一貫文代銀三十五匁前後也。此の三十五匁は、永中・三つ寶・四つ寶(此の三品を通の相場也)」

えい-ちゅう　〔名〕永住　永く一所に住み

附くこと。

えいちゅうざん 永中銀（名）えいしきん（永字銀）に同じ。

えいつみ 永積（名）えいだか（永高）に同じ。

えいづもり 永積（名）前條に同じ。

えいてつ 映徹 すきとほりてうつること。平治物語「朝日の光、映徹して」

えいてつ 英哲 ［てつ（哲）は明知］すぐれて聰明なること。左思文「英哲雄豪、佐命帝室」

えいてつ 睿哲 物事に深く通じて、明かにさとき事。蔡邕文「聰明睿哲、思心瘁容」

えいてん 榮典（名）㊀光榮ある典例。㊁名譽なる儀式、又は制度。㊂人の榮譽を表彰するために設けたる制度。又はこれによりて表彰するもの。大日本帝國憲法第十「天皇は爵位勳章及其の他の榮典を授與す」

えいてん 榮轉 名譽ある官爵又は位置に轉任すること。在來より進みたる官爵・位置に轉ずること。

えいでん 營田（名）王朝時代、官府より、壯丁を使役して營作せしめたる田地、又は私費を以て開墾せる田地の稱。公營田と私營田とに分かつ。各條を見よ。類聚三代格「調庸者、夏月以正稅充、宜價而交易、秋收之後、以營田之穫返納」

えいと 榮途（名）榮譽ある立身の途。

えいとう 鋭頭（名）【植】植物學上の用語。えふせん（葉先）を見よ。

えいとう （感）㊀ものかけ聲。えいえいおう。俚言集覽「上を下へえいとう山の花見かな」狂言「老武者ども、きっさきをそろへてかかりけり。えいとうえいとう」㊁劇場などにて、發語の詞。永く・幾久しくの意を含む。

えいとな （感）或る所作をなす時、發する聲。狂言「これではゆかれまい。まづちっと、や、えいとな」

えいとも・えいとも （感）物をひくときなどのはやし聲。狂言「嚊すぞ、嚊すぞ。ちようさや、ようさ。えいとも、えいとも、えいとも、えいとも、なあ」

えいない 營內（名）兵營のうち。營中（營外の對）

えいないきょおちゅう 營內居住（名）軍人・軍屬が、兵營內に居住すること。（營外居住の對）

えいにん 榮任（名）名譽なる務め。光榮ある任務。吳志「委以腹心、遂荷榮任」

えいねん 永年 えいせい（永世）に同じ。ながねん。北史「臣寧容不稱永年之宅」

えいはつ 英發 すぐれて利發なること。南史「帝聰悟俊朗、天才英發」

えいはふ 英法（名）㊀英吉利國の法式。英式。

えいばーぶし 榮ばぶし（名）【植】榮草科、えいばぶし屬の多年生草本。莖の高さ一二尺、傾臥する性を有し、且つ別に匐枝に依りて蔓延す。葉は卵形又は倒卵形全緣、質やや厚く、下部に生ずる葉は葉柄を具ふれども、上部のものには無し。紫紅色の花を開き、葉腋花序に排列す。我が國、北部の海濱に自生す。取りて藥用とす。はまべんけいさうさ。

えいはふーばんさうかつ 英法絆創膏（名）皮膚の創傷を接合又は被護する爲めに貼る外科用の硬著劑。魚膠の熱水溶液及び氣ぐりすりん・酒精溶液を白絹の表面に塗布乾燥し、裏面に安息香丁幾を布き、乾燥して製す。

えいびん 鋭敏（名）㊀才の鋭く敏（はや）きこと。左傳「孟詣子語、人曰、我不如顏羽、而賢於祁溲、子羽銳敏」㊁感覺の甚だするときこと。

えいぶ 英武 すぐれて勇武なること。唐書「太宗爲人聰明英武、有大志」

えいぶつ 英物（名）すぐれたる人物。技能なる人。傑物。晉書「溫生未葉、溫嶠見之、目、此兒有奇骨、可試使嘗。及聞其薨、曰、眞英物也」

えいぶつ 詠物（名）詩の一體。事物に託して自己の懷を敍ぶるもの。（詠史の對）燕村句「詠物の詩を口ずさむ牡丹かな」

えいぶん 英文（名）英語にて記載したる文章。

えいぶん 叡聞 天子の聞としめすこと。保元「武士ども入洛の由、叡聞に及ぶ聞」

えいぶんがく 英文學（名）英文を研究する學。英國の文學。

えいぶんてん 英文典（名）英語の文典。

えいべつ 永別 ㊀永く別かること。永訣。㊁えいだか（永高）に同じ。

えいまい 英邁 ［まい（邁）は他に超えすすむ義］心のさとく人にすぐれたること。梁簡文帝詩「英邁八解心、高超七花窟」宋史「雍高明英邁、迥出千古」

えいみん 永眠 ［永き眠りに入る義］死ぬること。

えいめい 榮名（名）はえあるほまれ。光榮ある名譽。榮譽。本朝三國誌「小節をはかるものは榮名をなすことなく、少しき恥をにくむ者は大功を立つる事能はず」史記「與世浮沈、而取榮名哉」

えいもり 永盛（名）えいだか（永高）に同じ。

えいもん 營門（名）營所の門。兵營の門。

えいや 永夜（名）明くるに永き夜。ながよ。諸葛孔明「江月照らし松風吹き、永夜の清宵何のなす所ぞや」

えいや （感）㊀刀を入るる時、發する聲。平治「頂邊に打ち懸けて、えいやと引けば」㊁次條に同じ。狂言「三人「えいや、さあさあ順の舞ぢや。唖も舞つやれ」

えいやあ （感）ほめて、はやす聲。えいや。やんや。狂言「えいやあ、扨も扨も、舞うたり舞うたり」

えいやう 營養 生物が外界より養料を攝取し、體質の消耗を補ひて生活力を保持すること。

えいやうーえき 營養液（名）毛細管の管壁より滲透する無色の液體。善良鮮紅なる血液より賦與せらるるもの。外皮を始めとし、百般の器官皆之によりて營養を受く。血清あるぶみーん・を主要成分として、糖・水・窒・酸素及び硫黃の化合より成る蛋白質なり。

えいやーうん （感）えいや一に同じ。國姓爺「聲をかけて、一時にえいやうんと投げつけ」

えいやーおお （副）えいやつとに同じ。夕霧阿波鳴渡「金子は當月一ぱいにお渡しなさるる約束で、えいやおおと首尾成り」

えいやーども （名）えいやと力を入るる時發するかけごゑ。又、喚喊する時發す

る聲。鰮鳥御幸記「なぎたる朝の海に、舟人のえいやごゑ、めづらしくぞきこゆる」應永記「山名民部少輔兄弟二人は一足も不退、敵の中へえいや聲を上げて切つて入る」

えいーやっと （感・副）㊀かけ聲、又、力を入るる時發する聲にいふ語。狂言「又「下よりも、えいやっと云うてはねかへし」曾我扇八景「諸手に摑んでえいやっと、引くに搖がぬ五郎樣」㊁どっさり。たくさん。狂言「鰹の鮨をえいやっと頬ばって」㊂を盡くして。辛うじて。やうやくのことで。えいやらやっと。膝栗毛「ねっから急がず餘ほどに、えいやっと函根の宿に著きて候」

えいーやっとう （感）前條に同じ。國姓爺「木刀かざし、跳り上がって聲をかけ、えいやっとう、えいやっとう」

えいやらーや （感）えいやっとに同じ。雙生隅田川「俄かに轟く地車、えいやらやあのきやりの聲は磯打つ波」

えいやらーやっと （副）えいやっとに同じ。

えいゆ 贏輸（名）［えいしゆ（贏輸）の習慣音］ゆえい（輸贏）に同じ。

えいーゆう 英雄（名）㊀才能・智力の絕倫なる人。朗詠「習其衆邑、不視上邦者、未知英雄之所纏」魏志「太祖謂劉備曰、天下英雄、惟使君與操耳」人物志「聰明秀出謂之英、膽力過人謂之雄」同「草之精秀者爲英、獸之特羣者爲雄」㊁せいぐわ（清華）に同じ。平家「德大寺殿は一の大納言にて、花族英雄、才學雄長」平治「當家はさせる英雄には非ざれども、偏へに有道の臣に伴つて、讒侯の黎にくみせざりし故に」

（諺）英雄人を敬く 英雄は權謀を用ひて人の意表に出づ。

えいゆうーけ 英雄家（名）清華の家柄。せいぐわ（清華）を見よ。英雄。

えいよ 贏餘（名）［えい（贏）はあまる］物のあまり。のこり。

えいよ 榮譽（名）はえある名譽。常建詩「榮譽失本眞」

えいよけん 榮譽權（名）【法】㊀榮譽の表彰を授與する權利。㊁榮譽の表彰を授與する權。

えいよしはらひ 榮譽支拂（名）［商］さんかしはらひ（參加支拂）に同じ。

えいよしはらひーにん 榮譽支拂人（名）［商］さんかしはらひにん（參加支拂人）に同じ。

えいよひきうけ 榮譽引受（名）［商］さんかひきうけ（參加引受）に同じ。

えいよひきうけーにん 榮譽引受人（名）［商］さんかひきうけにん（參加引受人）に同じ。

えいーらう 永牢（名）江戸時代の刑罰の一種。終身牢內に禁錮し置くこと。

えいーらく 榮樂（名）榮華なる樂しみ。曹植詩「生時同榮樂」

えいーらく 永樂（名）えいらくせん（永樂錢）の略。東大寺文書「地ぜにの內よき永樂を大觀嘉定以上、うらに文字のあるぜに、よき錢の內たるべし」

えいらくーきんせん 永樂金錢（名）天正の頃、豐臣秀吉の發行せしといふ金錢。面に永樂通寶の文あり。背に桐紋の極印あるものと、極印なきものとあり。泉奏「永樂金錢」

えいらくーぎんせん 永樂銀錢（名）天正の頃、豐臣秀吉の發行せしといふ銀錢。面に永樂通寶の文あり。徑は八分强、重量は一匁一分。

えいらくーせん 永樂錢（名）㊀支那明朝の永樂九年（我が應永十八年）に鑄造せし銅錢。面に永樂通寶の文あり。大小・輕重種種あれども、徑は八分、重量は一匁內外のものを善品となすといふ。室町時代、我が國に渡來して盛んに行はれしが、慶長十三年十二月其の通用を廢せられたり。永樂通寶錢・永錢。永精錢。永。永樂。中古治亂記「永樂錢渡宇日本一事」北條五代記「關東永樂錢すたる事」㊁紋所の名。陳摩歌「永樂錢の駕籠じるし」

永通寶樂（一ぬぜくちいえ）

えいらくーつうぼうせん 永樂通寶錢（名）㊀えいらくせん（永樂錢）・えいらくきんせん（永樂金錢）及びえいらくぎんせん（永樂銀錢）の總稱。㊁單に永樂錢の稱。

えいらくーやき 永樂燒（名）㊀京燒の一種。支那明朝の永樂年中の磁器に模して作れるもの。京都の人、善五郎了全の創作。㊁こすやき（吳須燒）に同じ。

えいーらん 叡覽 叡覽（名）天子の御覽ぜらるること。上覽。諸葛孔明「法皇は池の汀を叡覽あつて」錢起文「責重華之叡覽」

えいーり 榮利（名）榮達と利得と。後漢書「不以榮利滑其生術」魏志「範曄性恬靜、樂道淡泊、不榮利」

えいーり 贏利（名）まうけ。利益。利得。左傳「賈而欲贏」杜注「言譬如商賈求贏利者」

えいーり 英里（名）まいる（哩）に同じ。

えいーり 營利 利益を營むこと。財產上の利益をはかること。かねまうけ。民法第三十「營利を目的とする社團」

えいーり 鋭利 刀劍などの、鋭くして切れ味のよきこと。田錫文「太一詳鋭利之符」

えいーりーからね 營利を目的とする行爲。

えいーりーぐわいしゃ 營利會社（名）營利を目的とする會社。

えいーりーしほん 營利資本（名）營利の目的に供せらるる資本。

えいーりーしゃだん 營利社團（名）營利を目的とする二人以上の團結。

えいーりーぜい 營利稅（名）【經】租稅の一。各人が、其の所得又は財產を取得する事實に課するもの。（所有稅・使用稅の對）

えいーりーだんたい 營利團體（名）營利を目的とする團體。

えいーりーほうじん 營利法人（名）［法］營利を目的とする法人。

えいーりょ 叡慮 天子・上皇の思し召し。保元「一の宮重仁親王を位に即け奉らんとや思し召しけん、叡慮計り難し」

えいーりん 營林 森林を經營すること。森林法「營林の監督」

えいーれい 英靈（名）㊀すぐれてえらき人。隋書「陳使江總目、送之曰、此河湖之英靈也」同文學「江漢英靈、燕趙奇俊、並該天網之中、俱爲大國之寶」㊁えいこん（英魂）に同じ。

えいーろく 榮祿（名）榮譽ある官職。蔡邕文「才美者荷榮祿、而蒙賜」

えいーわ 英和（名）英吉利國と日本國と。和英。

えいーゐ 榮位（名）光榮ある地位。名譽なる位。

えいーゐ 英偉（名）［ゐ（偉）は大なる

義」なみすぐれたる大人物。英俊。晉書羅憲「夫英偉大賢、多出于山澤」

えい-ぢき 〔塋域〕（名）はかば。墓地。晉書羅憲並不開墓位、更爲塋域制度「耳」

えい-ゑん 〔永遠〕 年月、永く遠く。いつまでも。すゑず遠まで。書經君奭「我亦不敢寧于上帝命、弗永遠念天威」

えいゑん-こくさい 〔永遠公債〕（名）【經】確定公債の一。償還の期限を定めざるもの。永久公債。

えいゑん-こくさい 〔永遠國債〕（名）【經】確定國債の一。償還の時期を定めざるもの。

えいゑん-ほぞんひん 〔永遠保存品〕（名）時日の經過又は使用のために、其の品質及び價格に變化を及ぼさざる物品。

えう 〔要〕（名）一物事の肝心なる處。かなめ。肝要。要點。史記太史公「儻者博而寡要」同上「采儒墨之長、撮名法之要」二必要。要用。ようの物なり」同上「ふみども、えうあるは取り出で給ふ」（用）。宇津保書「物はきやうざくなるえう

えう 〔幼〕（名）をさなきとき。をさなきこと。又、其の者。禮記曲禮「人生十年曰幼學」同上「敬長慈幼」

えう 〔曜〕（名）一日・月と火・水・木・金・土の五星との稱。二日・月・火・水・木・金・土を日に配したる稱。

えう 〔妖〕（名）一わざはひ。禮記月令「季冬行秋令、則白露蚤降、介蟲爲妖」二あやしきこと。又、その物。妖怪。

（諺）妖は德に勝たず 不祥の事も、有德のものに害を加ふる能はず。太平記吉野殿「佳傳奏吉田中納言宗房卿、妖は不勝德と宣ひて、さまでも驚き給はず」

史記殷本紀「帝太戊立、伊陟爲相、亳有祥桑穀共生於朝中略伊陟曰、臣聞妖不勝德、帝之政其有闕與、帝其修德、太戊從之、而祥桑枯死而去」

えう 〔徭〕（名）ぶやく（夫役）に同じ。徭役。「徭役」之、而祥桑枯死而去」

えう 〔瑩〕 瑩貝（ぎやく）にてみがきて、光澤を出だすこと。榮華玉鳥「青く裏えうしたるきぬばかま著て」

えう 〔杳〕（副）はるか。小時く。杳杳。

えう 〔腰〕（助數）袴・太刀等、腰のあたりにつくるものを數ふる語。こし。四時祭式「表裙一腰」同上「螢籠一腰」運步色葉「一腰（ぎやく）太刀」

えう-いん 〔要因〕（英 Factor）（名）【哲】事物・事件の成立又は發現するに當たりて、直接に其の原因又は條件となるもの。要件。

えういん-さいけん 〔要因債權〕（名）【法】賣買・交換の如く、債權發生の原因が、其の債權存在の實質的要素をなす債權の稱。（不要因債權の對）

えういん-さいむ 〔要因債務〕（名）【法】債務の存在が、其の原因を實質的要素となすものの稱。義務の方面より見たる要因債權。（不要因債務の對）

えう-えい 〔搖曳〕（えう（搖）はうごき、えい（曳）はひく義）ゆらゆらとなびくこと。長く引きはふること。たゆたふこと。鮑照詩「搖曳高帆擢」常建詩「孤琴又搖曳」李白詩「搖曳滄洲傍」

えう-えい 〔耀映〕 てりかがやくこと。保元鎮西八郎爲朝「其耀映光輝房事、更不可有疑者也」

えう-えう 〔杳杳〕（副）はるかなるさまにいふ語。班彪文「飛雲雲霧之杳杳、涉積雪之皚皚」王逸文九昌「衆穢盛兮杳杳」

えう-えう 〔天天〕（副）わかわかしく美しきさまにいふ語。太平記卷七「楊貴妃と云ふ美人あり中略天天たる桃の花の、曉の露を含んで、墻より餘る一枝の霞に匂へるが如くなり」詩經桃夭「其葉蓁蓁」

えう-えう 〔呦呦〕（副）鹿の鳴く聲にいふ語。曾我會稽山「呦呦と鳴くさを鹿の」詩經小雅「呦呦鹿鳴」

えう-えう 〔搖搖〕（副）動搖して定まらざるさまにいふ語。詩經黍離「中心搖搖」

えう-えう 〔（感）物の喉につまりたる時などに出だす聲。宇治拾遺「大きなる骨喉にたてて、えうえうといひけるほどに」

えう-えき 〔徭役〕 ぶやく（夫役）に同じ。徭。えだち。

えうえき-ち 〔要役地〕（名）地役權の行使によりて、便益を受くる土地。（承役地の對）民法第二編第六章「要役地」

えう-えん 〔妖艷〕 なまめきつややかなること。あやしきまで美しきこと。

えう-おん 〔拗音〕（名）【語】や・ゆ・よ又はわを他の假名の下に添加して表はす一箇の音節。清濁兩種あり。きゃ・きゅ・きょ・しゃ・しゅ・しょ・ちゃ・ちゅ・ちょ・びゃ・びゅ・びょ・くわ・ぐゃ・じょ・ぢゅ・ぢゃ・ぐわの類。此れ等の音節を構成する子音は、大概阿行音を構成する子音の口蓋音化又は脣音化したるものなり。

えう-が 〔幼芽〕（名）【植】植物學上の用語。種子中の胚の一部。子葉の間にあり、種子萌發の後、葉及び莖・幹となる部分。

えう-がい 〔要害〕 一地勢險阻にて、敵を防ぐに便宜なる處。史記高祖「良將勁弩、守關中、欲以制諸侯、此所謂金城千里、天府之國也、高帝曰、善」同上「項羽之所以敗者、以其有天下之勢、而背義帝、以力相征、以強相滅、以故諸侯皆畏強楚、今漢王之出關、收三秦、發號令、而天下莫敢不從者、其所欲王者皆得意、所擊者皆服、所以古今之功、未嘗有也、以漢王之資、入關而王關中、以此觀之、天下可定也」橋本、欲「構」要害」「東鑑」「要害之處」俗語錄「師古曰、在我爲要、於敵爲害也」二用心。大鏡「狂言綺語、鼻に要害を致いては、何とでござらう」

えう-がい 〔幼孩〕（名）をさなご。みどりご。嬰兒。嬰孩。

えうがいたのみ 〔要害頼〕 要害に依頼すること。國姓爺「前は巖壁、後は海、要害頼みの油斷を見て」

えうがい の ろくぐ 〔要害六具〕 敵を防ぐに必要なる具。亂杙（ラン）・逆茂木（ぎも）・麥（ムギ）・井樓（ゼイロウ）・竹束（ヂクソク）・楽堂（ガクダウ）の六種。

えうがいとり 〔要害取〕（名）要害の地を便りて城を築くこと。

えうがいの-いた 〔要害板〕（名）兜の眼廂と鉢と接合するところの內面に當つる薄き鐵板。

えう-かう 〔要港〕（名）海軍の防禦・警備の地區の一。軍港に亞ぐもの。要港部條例第二「要港」

えうかう-ぶ 〔要港部〕（名）各要港に置きて、要港の防禦及び其の附近の海岸・海面の警備を掌り、兼ねて軍需品の配給をなす所。司令官・參謀長・參謀・副官・機關長・軍醫長・主計長の職員を置く。要港部條例「要港部」

えうかうぶ-さんぼう 〔要港部參謀〕（名）要港部の職員。要港部參謀長の命を承けて、事務に服するもの。

えうかうぶ-さんぼう-ちゃう 〔參謀長〕（名）要港部の職員。要港部司令官を佐けて、幕僚の事務を統べ、部務を整理するもの。

えうかうぶ-しれいくわん 〔要港部司令官〕（名）要港部の長官。天皇に直隸して、部下諸隊の統率、部務の總理等に任じ、又海軍大臣の命を承け軍政を掌るもの。

えうかうぶ-ふくくわん 〔要港部副官〕（名）要港部の職員。要港部參謀長の命を承けて、人事及び庶務を掌るもの。

えう-がく 〔幼學〕（名）幼き時の學問。うひまなび。禮記曲禮「人生十年曰幼學」

えう-がひ 〔瑩貝〕（名）貝にて作り、紙・帛などを瑩（ぎ）きて光澤を出だす具。金或ひは竹にても作る。えうがひべら。

えうがひ-べら 〔瑩貝篦〕（名）前條に同じ。

えう-き 〔妖氣〕（名）あやしき氣。人の害をなす氣。邪氣。左傳哀公「周大史曰、其當王身乎、社注日爲人君「妖氣守之、故以爲當王身」」

えう-き 〔妖姬〕（名）一なまめきて美しき姫。二美しき女の變化（へ）。

えう-きう 〔要求〕 一こひもとむること。請求。楚辭「下垂釣於谿谷兮、上要求於仙者」二他人に對して、強ひて或る行爲又は不行爲をなさんことを求むること。民事訴訟法第二編第七十三「相手方の要求格外に過分なるに非ず中略容易に過分の要求を避くることを得さりしとき」

えう-きう 〔要劇〕 要職にありて、事務の繁劇なること。

えう-きう 〔要劇科〕（名）古へ要劇の官職の者に、特に賜ふ俸祿。

えう-けつ 〔要訣〕（名）肝要なる奥義。奥の手。

えう-けつ 〔妖孽〕（名）あやしき孽（ハツビ）。わざはひ。中庸「國家將亡、必有妖孽」

えう-けつ 〔要月〕（名）農の要事ある月。（閑月の對）

えう-けつ 〔窯業〕（名）陶器・瓦・せ

えうき 〔瑤玉〕（名）たま（玉）に同じ。

えう-く 〔幼駒〕（名）五歲未滿の馬。（牡馬（ぼ）の對）

えう-くわい 〔妖怪〕（名）あやしきもの。ばけもの。へんげ。韓愈詩「火維地荒足妖怪、天假神柄專其雄」論衡「不常有、而忽見曰妖、說於衆而突出曰怪」

えう-くわ-かり 〔沃化加里〕（名）【化】KI 食鹽に類する立方形無色の晶をなし、水に溶け易きもの。藥用・化學分析用及び寫眞術等に用ひらる。

えう-くわ-すゐそ 〔沃化水素〕（名）【化】HI 無色刺戟臭ある氣體。頗る水に溶け易く、強酸性反應を呈す。沃化加里に燐酸を作用せしめて製す。

えう-くわん 〔遙官〕（名）遙任の官。

えう-くん 〔幼君〕（名）幼き君。幼主。

えう-けき 〔要擊〕 待ちうけて敵を擊つこと。左傳哀公十二「要而擊之」漢書匈奴「將五千騎、要擊漢軍于夫羊句山狹」

えう-けき 〔要劇〕 要職にありて、事務の繁劇なること。

えうけき-れう 〔要劇科〕（名）古へ要劇の官職の者に、特に賜ふ俸祿。

えう-けつ 〔要訣〕（名）肝要なる奥義。奥の手。

えう-けつ 〔妖孽〕（名）あやしき孽（ハツビ）。わざはひ。中庸「國家將亡、必有妖孽」

えう-けつ 〔要月〕（名）農の要事ある月。（閑月の對）

えう-けぶ 〔窯業〕（名）陶器・瓦・せ

えうけ 〔要件〕（名）一大切なる用事。肝要なる事件。必要なる條件。大日本帝國憲法第十「日本臣民たるの要件」二えういん（要因）に同じ。

えう-けん 〔妖言〕（名）怪しき言ひふらし。禍害を預言する如き言。大鏡「今年こそは天變しきりにし、世の妖言などよからずぞ聞こえ侍るめれ」左傳僖公十二「有夜登丘而呼「某氏故作妖言」」

えう-けん 〔要言〕 ちかひごとをなすこと。誓言。左傳僖公廿「王子虎盟諸侯于王庭「要言曰、若獎王室、無相害也」」同襄公「昭「大神」要言焉、若可改也、大國亦可叛也」

えう-こ 〔腰鼓〕（名）古への鼓の一種。面の徑一尺四寸、胴の長さ一尺五寸。黃條にて革を約し、紐にて腰に懸くるもの。初めは雙手にて擊ちしが、のち桴（ばち）を用ふ。

えう-こ-し 〔腰鼓師〕（名）官名。腰鼓生を教ふることを掌るもの。

えう-こ-せい 〔腰鼓生〕（名）古昔、奥樂に用ふる腰鼓を習ふ者。

えう-こつ 〔腰骨〕（名）こしぼね。腸骨・坐骨・恥骨各一對より成る骨盤。

えう-こん 〔幼根〕（名）【植】植物學上の用語。種子の胚の一部。胚軸の下端にして、種子發芽の後は根となる部分。

えう-さい 〔要塞〕（名）〔塞はとりで〕一國境などにある要害の寒（ヂ）。禮記月令「因山封强、備邊竟、完要塞」二永久の防禦工事を施し、兵力を以て守備する地域の稱。陸軍要塞と海岸要塞とに分かつ。各條を見よ。

えうさい-かんぶえんしぶりょかう 〔要

めんと・硝子・石灰等の製造工業の稱。

えう-けん 〔要件〕（名）一大切なる用事。肝要なる事件。必要なる條件。大日本帝國憲法第十「日本臣民たるの要件」二えういん（要因）に同じ。

えう-けん 〔妖言〕（名）怪しき言ひふらし。禍害を預言する如き言。大鏡「今年こそは天變しきりにし、世の妖言などよからずぞ聞こえ侍るめれ」左傳僖公十二「有夜登丘而呼「某氏故作妖言」」

えう-けん 〔要言〕 ちかひごとをなすこと。誓言。左傳僖公廿「王子虎盟諸侯于王庭「要言曰、若獎王室、無相害也」」同襄公「昭「大神」要言焉、若可改也、大國亦可叛也」

えう-こ 〔腰鼓〕（名）古への鼓の一種。面の徑一尺四寸、胴の長さ一尺五寸。黃條にて革を約し、紐にて腰に懸くるもの。初めは雙手にて擊ちしが、のち桴（ばち）を用ふ。

えう-こ-し 〔腰鼓師〕（名）官名。腰鼓生を教ふることを掌るもの。

えう-こ-せい 〔腰鼓生〕（名）古昔、奥樂に用ふる腰鼓を習ふ者。

えう-こつ 〔腰骨〕（名）こしぼね。腸骨・坐骨・恥骨各一對より成る骨盤。

えう-こん 〔幼根〕（名）【植】植物學上の用語。種子の胚の一部。胚軸の下端にして、種子發芽の後は根となる部分。

えう-さい 〔要塞〕（名）〔塞はとりで〕一國境などにある要害の寒（ヂ）。禮記月令「因山封强、備邊竟、完要塞」二永久の防禦工事を施し、兵力を以て守備する地域の稱。陸軍要塞と海岸要塞とに分かつ。各條を見よ。

えうさい-かんぶえんしぶりょかう 〔要

寨幹部演習旅行の一。要塞司令部(警備隊司令部を含む)・重砲兵隊・要塞所在地兵器支廠及び築城部支部の將校を演習員とし、當該要塞司令官の統裁するもの。將校演習旅行條例第五條第二項「要塞幹部演習旅行」

えうさい-さんぼう〔要塞參謀〕(名) 要塞司令部の職員。要塞司令官の命を承けて、要塞防禦計畫に關する事項を掌るもの。

えうさい-しれいくゎん〔要塞司令官〕(名) 要塞司令部の職員。要塞所管の師團長(臺灣にては臺灣總督、關東洲にては關東都督、朝鮮にては朝鮮總督)に隸し、要塞の防禦計畫を擔任し、要塞諸部隊の動員計畫を統監し、要塞備附けの兵器・器具材料及び防禦營造物を管理し、軍需品の整備に任ずるもの。

えうさい-しれいぶ〔要塞司令部〕(名) 要塞を統理する官署。要塞司令官・要塞參謀・要塞副官・要塞部員・主計・軍醫正・軍醫・准士官・下士及び判任文官の職員を置く。要塞司令部條例「要塞司令部」

えうさい-せん〔要塞戰〕(名) 要塞の攻擊及び防禦の戰鬪。

えうさい-ちたい〔要塞地帶〕(名) 要塞を築きたる部分の、周圍一帶の地域。

えうさい-はうへい〔要塞砲兵〕(名) 明治三十九年前の、ぢゆうはうへい(重砲兵)の稱。

えうさいはうへい-しやげき-がくかう〔要塞砲兵射擊學校〕(名) りくぐんえうさいはうへいしやげきがくかう(陸軍要塞砲兵射擊學校)の略。

えうさい-ふくくゎん〔要塞副官〕(名) 要塞司令部の職員。要塞司令官の命を承けて、庶務を掌るもの。

えう-ざん〔腰斬〕 支那、秦時代の刑の一。腰より斬りはなすもの。

えう-し〔幼子〕(名) 幼少なる子。いとけなき子。禮記曲禮「幼子常視毋誑」

えう-し〔要旨〕(名) 肝要なる主旨。

えう-し〔夭死〕 年わかくして死すること。わかじに。夭殤。夭折。

えう-じ〔要事〕(名) 要用なる事。北山抄四「功課之定、朝之要事也」 宇治拾遺四「加持する間、死人忽ちに蘇生して、要事をいひて後、又目をとぢてけりとか」史記貨殖「悉受其要事」 晉書華廙「集經書要事、名曰善文、行於世」

えう-じ〔幼兒〕(名) 幼少なる童兒。いとけなきちご。

えう-しき〔要式〕(名) 一定の方式を履むを要すること。

えうしき-かうゐ〔要式行爲〕(名) 【法】法律に定めたる方式に從はざるときは、成立又は完全なる效力を生ぜざる行爲。

えうしき-けいやく〔要式契約〕(名) 【法】契約の一。法律に定めたる方式に從はざるときは、成立又は完全の效力なきもの。(不要式契約の對)

えう-しや〔幼者〕(名) ㊀をさなきもの。幼年者。㊁未定年の者。

えうしや-いうかいざい〔幼者誘拐罪〕(名) 【法】舊刑法の犯罪の一。詐僞の手段により、滿二十歲以下の幼者を奪ひ取りて、隱匿又は他人に交付するもの。舊刑法第三編第二章第十節「幼者を略取誘拐する罪」

えうしや-りやくしゆざい〔幼者略取罪〕(名) 舊刑法の犯罪の一。暴行・脅迫の手段により、滿二十歲以下の幼者を奪ひ取りて、隱匿又は他人に交付するもの。

えう-しやう〔要償〕 つぐなひをもとむること。「損害要償」

えう-しやう〔夭殤〕 えうし(夭死)に同じ。わかじに。釋名「少壯而死曰夭、未二十而死曰殤」 韓愈詩「誰云經險難、百口無夭殤」

えう-じやく〔幼弱〕 年わかなること。幼年。周禮秋官司刺「掌三刺三宥之法、壹赦曰幼弱」 禮記明堂位「成王幼弱、周公踐天子之位、以治天下」

えう-しゆ〔幼主〕(名) 幼き主君。わかぎみ。愚管抄七「幼主とて、四つ・五つより位に即かせ給ふを、然るべからず」 陳琳文「繕修郊廟、翊衛幼主」

えう-しゆ〔要須〕(名) 必要なるもの。要用。必需。東鑑十七、建仁三年正月廿九日「仁田入道上西者、源氏遺老、武家要須也」 太平記六、關東上洛「國の爲めに要須なり」 邢劭文論射用奏「自今非有要須者、請皆不受」

えう-じゆ〔遙授〕 えうにん(遙任)に同じ。

えう-しゆく〔曜宿〕(名) 〔しゆく(宿)は座、ゐどころ〕七曜星と二十八宿と。ほしまはり。保元閱伏「應曜宿頁辰」

えう-じゆつ〔妖術〕(名) あやしき術。魔法。幻術。元史順帝紀「以妖術陰謀聚衆」

えうじゆつ-しや〔妖術者〕(名) まほふつかひ(魔法遣)に同じ。

えう-しよ〔要處〕(名) 肝要なるところ。要衝。

えう-じよ〔要處〕(名) かはや(厠)に同じ。撈海一得上「明の胡應麟が甲乙剩言に、不能不爲鶩鶩要處、掩鼻耳、とあるを引いて、支那語に、厠を要處といふより出づ」

えう-しよう〔要衝〕(名) 要(カナメ)ともいふべき大切なる處。敵の目がけて來べき肝要の場所。要處。杜甫詩「此邦俯要衝」

えう-しよく〔要職〕(名) 樞要なる職。

えう-しん〔要津〕(名) 重要なるふなつき。

えう-しん〔妖神〕(名) 怪しき神。禍ひをなす神。左傳僖公十九年「用鄫子于次睢之社」杜注「此水次有妖神」

えう-す 夭(自動變) 年わかくして死す。わかじにす。列子「或夭、或壽」 莊子「不終其天年、而中道夭」

えう-す 要(他動變) ㊀必ずと要(モト)む。是非入用にてあり。㊁もとむ。請求す。要求す。㊂人を途に待ちうく。待ち伏す。敵の進路を遮る。

えう-ず 耀(他動變) かがやかす。光らす。宇津保藏開中「壁代には、白き綾を打ちえうじたり」

えう-ず 要(他動變) えうす(要)㊀㊁に同じ。竹取「かぐや姬のえうじ給ふべきなりと承りて」 宇津保胡秋下「さる要えうずる后ありともなくて、假かに親をすてわたらんに」

えう-せい〔妖星〕(名) あやしき星。常には見えざる星。左傳昭公十年「今玆歲在顓頊之虛、姜氏任氏實守其地、居其維首、而

有妖星焉、告邑姜也」

えう-せい〔妖精〕(名) 妖(アヤ)しき精靈。へんげ。

えう-せう〔幼少〕 幼く少(ワカ)きこと。いとけなきこと。又、其の人。保元新院召爲義「餘りに不用に候ひしかば、幼少より西國の方へ追ひ下だして候」 禮記月令「養幼少、存諸孤」

えう-せつ〔夭折〕 〔せつ(折)は婚嫁する年齡に達せざる內に死すること〕 えうし(夭死)に同じ。吳志孫登「顏回有上智之才、而尙夭折」

えう-せん〔要船〕(名) 軍用に充てたる運送船。軍用船。

えう-せん〔徭錢〕(名) えうぶんせん(徭分錢)に同じ。

えう-そ 沃素(名) 【化】黑褐色板狀の結晶をなす物質。刺戟臭を有し、熱すれば黃褐色の液となり、紫色の蒸氣となる。昇華し易く、水に溶け難きも、あるこーる・にはよく溶解す。藥用に供す。

えう-そ〔要素〕(名) ㊀事物の成立などに必要なる條件。必要なる根源。㊁(英 Element) 更に簡單なる形に分析すること能はざるもの。

えう-たい〔腰帶〕(名) せきたい(石帶)に同じ。內匠寮式「馬瑙御腰帶一條」

えう-だい〔瑤臺〕(名) ㊀瑤(タマ)にて飾りたる臺(ウテナ)。玉樓。朗詠「瑤臺霜滿、一聲之玄鶴唳天」 淮南子本經訓「紂爲璇室瑤臺」 ㊁つき(月)の異名。離騷「望瑤臺之偃蹇兮、見有娀之佚女」

えう-たう〔夭桃〕(名) わかわかしく美しく咲きたる桃の花。太平記一、三位殿御局「天桃の春を傷める粧ひ、垂柳の風を含める御貌」 詩經周南「桃之夭夭」 謝莊詩「夭桃晨暮發、春鶯且夕喧」

えう-ち〔幼稚〕 幼(オサナ)く稚(イト)なきこと。幼少。幼弱。漢書王莽「君年幼稚」

えう-ちやう〔徭帳〕(名) 一年中の徭役の人數を記載したる帳。

えう-ちゆう〔幼蟲〕(名) 【動】動物學上の用語。卵子より孵化して、未だ成蟲とならざるものの總稱。其の形狀・生態等は、動物の種族によりて各異なり。幼蟲と成蟲とは、形態・性質等よく相似たるものもあれども、全く形狀を異にするもの頗る多し。

えう-ちゆう〔幼沖〕 〔ちゆう(沖)は童〕えうせう(幼少)に同じ。書經大誥「惟我幼沖人」

えう-ぢよ〔幼女〕(名) 幼き女。いとけなき女子。元稹詩「陸家幼女託良壻」

えう-ぢよ〔妖女〕(名) ㊀へんげの女。妖姬。㊁外貌美しくて、內心奸惡なる女。

えうち-ゑん〔幼稚園〕(名) (獨 Kindergarten) 就學年齡以前の幼兒を收容して、是れが心身自然の發達を助け、以て家庭教育を補ひ、又將來の教育の爲め、完全なる基礎を與ふる所。獨逸國ふれーべる氏の創めしもの。

えう-ちん〔要鎭〕(名) 肝要なる地點として守護する處。溫子昇書「定襄陵廟之至重、平城守國之要鎭」

えう-つう〔腰痛〕(名) 腰の痛み。神仙傳「臣年六十五、時苦腰痛」

えう-つゐ〔腰椎〕(名) 【醫】脊椎中、下部の五箇の眞椎。

えう-てい〔幼弟〕(名) 幼き弟。弱弟。

えう-てう〔窈窕〕 美しくたをやかなること。しとやかにおくゆかしきこと。詩經周南「窈窕淑女、君子好逑」傳「善心曰窈、善容曰窕」

えう-てん〔要點〕(名) 肝要なる處。大切なる箇處。

えう-ど 沃土(名) 【化】えうそ(沃素)に同じ。

えう-どう〔幼童〕(名) をさなき童(ワラハ)。こども。わらはべ。童子。蔡邕文「年踰三十、鬢髮二色、叔父親之、猶若幼童」

えう-どう〔妖童〕(名) あやしきまで美しき童。美しきちご。

えうど-かり 沃土加里(名) 【化】えうくわかり(沃化加里)に同じ。

えうど-ちんき 沃度丁幾(名) 【化】沃土のあるこーる溶液。褐黑色にして刺戟臭あり、塗劑として藥用に供せらる。

えうど-ほるむ(名) 【化】(英 Iodoform) 特異の臭ある光輝ある黃色の結晶。殺菌力强く、防腐劑として傷口等に塗る。あるこーる又はあせとーん・に、沃土と炭酸曹達とを作用せしめて製す。

えう-にん〔要人〕(名) ようにん(用人)に同じ。東鑑廿六、貞應三年六月廿八日「要人之外、不可參入之旨、被加制止之間」 太平記卅三、新田義興自害「傍輩ども皆、是れに過ぎたる御要人有るべからずと、悅ばぬ者は無かりけり」

えう-にん〔遙任〕 中古、公卿などの地方官を兼帶しながら、京都にありて赴任せず、目代などに政務を行はしむること。遙授。

えう-ねん〔幼年〕(名) 幼き年齡。弱年。漢書昌邑王「朕以幼年」

えうねん-がくかう〔幼年學校〕(名) りくぐんえうねんがくかう(陸軍幼年學校)の略。

えうねん-しう〔幼年囚〕(名) 十六歲未滿の囚人。

えう-の-もの 妖物(名) えうくわい(妖怪)に同じ。

えう-はい〔遙拜〕 隔たりたる地より、神佛などを遙かに拜むこと。太神宮式「太神宮司、率諸宮禰宜內人及神郡司等、遙拜諸宮」 徒然草「太神宮の遙拜は、巽にむかはせ給ふ」 晉書江逌「按漢儀、祭天于雲陽、祭地于汾陰、在于別宮遙拜、不詣壇所」

えうはい-しき〔遙拜式〕(名) 遙拜をなす儀式。

えうはい-じよ〔遙拜所〕(名) 遙拜をなすために設けたる場所。「神武天皇の遙拜所」

えう-ふ〔徭夫〕(名) 公用に使役せらるる人夫。夫役に出づる人。

えうぶつ-けいやく〔要物契約〕(名) (英 Substantial contract) 【法】當事者の意思の一致のみにより成立せずして、更に目的物の引渡しを必要とする契約。

えう-ふん〔妖氛〕(名) あしき氣。禍ひをなすべき氣。左傳昭公十五年「吾見赤黑之祲」杜注「祲、妖氛也」

えう-ぶん〔徭分〕(名) 次條の略。

えうぶん-せん〔徭分錢〕(名) 古へ租・庸・調の外、一年間三十日役せらるるを定めとし、其の役に出でざるものの上納する錢。徭錢。徭分。雜徭。

えう-べう〔杳渺〕(副) ひろびろと見

渡さるるさまにいふ語。

えうへん 〔妖變〕（名）あやしき變事。左傳昭公十七年「有星孛於大辰」杜注妖變非常、故書」

えうへん 〔窯變〕陶磁器を燒く時、竈の内にて自然にゆがみなどして變形すること。曜變。

えうほう 〔妖法〕（名）魔法。邪道。

えうま 〔妖魔〕（名）妖怪。惡魔。まもの。（へんげ）。用明天皇職人鑑「紙も燒けぬは妖魔の術、信ずるに足らず」歐陽修「詩」存之警」後世」古鑑照」妖魔」

えうみゃう 〔幼名〕（名）えうめい（幼名）に同じ。

えうむ 〔要務〕（名）大切なる務。肝要なる事。史記「叔孫生誠聖人也、知」當世之要務」

えうめい 〔幼名〕（名）幼き時の名。をさなな。えうみゃう。

えうめい 〔要盟〕人をして無理に誓はしむること。左傳襄公九年「且要盟無質、神弗臨也」同昭「明神不降、要盟背之可也」

えうもん 〔要文〕（名）肝要なる文句。謠「新しき卒塔婆を立ておきたり。亡き人の追善とおぼしくて、要文さまざま書きしるし」

えうやくしゃ 〔要約者〕（名）【法】契約の申込みをなしたるもの。申込者。

えうやくしん 〔妖厄神〕（名）人に禍ひをなす神。吉野忠信「一度にぐわらりと投げ倒し、さあらぬ體にて立ったりしは、妖厄神も斯くやらん」

えうよ 〔腰輿〕（名）手にて輦を腰の邊まで擡げ行く輿。故に手輿ともいふ。簡單輕便にして、屋形柱を取り外しても用ふ。貴人、山坂の登降、又は密行などに乘用し、天皇も大臂會御覽の時、河原頓宮にて乘り給ひ、又火事・地震等火急の行幸に用ひ給ふ。貞觀儀式「火事」左右近衛府、左右各騎陣十人、步陣十人、腰輿在」其間」菅蓋・紫蓋次之」中務内侍日記「主上えうよに召して、はらへ殿へなる」

えうーよう 〔要用〕ぜひ入用なること。必用。重大なる用事。漢書「賦要用」魏書「鄧艾傳」「鑾輿」治」爲」軍農要用」

えうーらく 〔搖落〕搖ゆきて落つること。朗詠「城柳宮槐漫搖落、秋悲不」到」貴人心」

えうーらん 〔搖籃〕（名）一小兒を入れ、之を搖かして、愚め又は眠らしむる釣かご。二物事の幼稚なる時。端緒。

えうーりゃう 〔要領〕（名）「要は衣のすそ。領は衣のえり。衣を持つには要と領とを執るといふより、事の主要の義とす」事の重なるところ。要點。漢書「從月支至大夏、竟不能得月支要領」

えうーりゃく 〔要略〕其の要を采りて、其の餘を略したること。あらまし。大略。齊書「子顯」「集學士抄五經百家、依皇覽例、爲四部要略千卷」

えうーれい 〔要領〕（名）えうりゃう（要領）に同じ。

えうれいぼし 〔妖靈星〕（名）あやしき星。えうれいぼし。妖星。太平記「足利殿、雲嘯「天王寺のや、えうれいぼしを見ばやとぞ嘯しける」

えうろ 〔要路〕（名）一肝要なる道路。二政治上、樞要なる地位。古詩「何不策」高足、先據」要路平」唐書「盧」丈夫當」先據」要路」以制」人、豈能默默受」制于人」哉」

えうーねん 〔要員〕（名）所要の人員。徵兵事務條例「要員を充し能はざるとき」

えうねんてうくわめいぼ 〔要員超過名簿〕（名）徵兵に關し、壯丁の身體檢査及び抽籤を終はりたる後、聯隊區司令官又は警備隊司令官が、徵集名簿によりて作製し、要員超過の裁決を受けたる者の姓名を記錄する名簿。徵兵事務條例第三十「要員超過名簿」

えーえ （感）一ああ。國姓爺「ええ情なや」同「ええありがたし」二思ひ當たりたるとき發する聲。むむ。おお。蜉丸「老母をいづくに置くべきぞ。ええ屈强の庵室、御免と言ひ捨て、つっと入り」

ええまうし 人を呼びかくる時にいふ語。ああもし。狂言「人「念いで詞をかけう。いや、なうなう、ええ申し」

ええいや （感）歌などの囃し聲。大鑑「狂言」「千歲の春こそ日出度けれ。やあ。ええいや」

えーえう 〔榮耀〕（名）一えいえう（榮耀）に同じ。謠「夜・晝となき榮しみの、榮華にも、ええうにもげに此の上やあるべき」二榮耀に乘じて增長すること。おごり。驕奢。槍權三「ええう言はずと、殿御に持ちや」

（謠）榮耀に餅の皮をむく 餅は其のままにて食ふべきものなるを、驕奢の極、其の皮を剝ぎて食ふ。極めて贅澤なるに譬ふ。

えーかうろ 〔柄香爐〕（名）柄のつきたる香爐。聖德太子繪傳記「緋の袂に柄香爐をくゆらせ」

（ろうかえ）

ええう-えいぐわ 〔榮耀榮華〕（名）榮耀を極むること。えいがわえええう。曾我扇八景「榮耀榮華に、大事の子勘當が成るものか」

ええう-ぐひ 〔榮耀食〕（名）食物に贅澤なること。美食すること。

ええう-ぐらし 〔榮耀暮〕（名）奢りてくらすこと。贅澤なる生活。

ええう-たうぐ 〔榮耀道具〕（名）虛飾に用ふる道具。日常、必用に非ざる道具。

ええう-づかひ 〔榮耀使〕（名）奢侈なる生活をなさんために、金錢を費やすこと。重井筒「四百目といふ銀」女夫の中の榮耀使ひか」

ええう-もの 〔榮耀者〕（名）豪奢を極むる者。おごりもの。贅澤者。日本振袖始「其の上に奢り者・榮耀者、讓りの田畑も尖うた」

ええしゃ-こしゃ （感）古語。喇りていやしむ辭。記「疊疊志夜胡志夜」「此者伊恭能布曾」

ええ-と （感）思案する時に出だす聲。

ええん （感）咳拂ひする聲。えへん。國姓爺後日合戰「萬禮これにと知らせのため、主君に力をつけんため、ええんええんとつっ立ちしは」

えが 〔栗毬〕（名）いが（栗毬）の訛り。

えーがう 〔影向〕（名）やうがう（影向）に同じ。謠「ありがたのえがうやうがうや、月すみよしの神遊び、み影を拜むあらたさよ」

えーかがみ 〔柄鏡〕（名）柄のつきたる鏡。鏡筑波「柄鏡の月影を汲む水柄杓」

えーかさがひ （名）【動】軟體動物、蝶鰒類の一種、からすがひ科に屬す。殼は長楕圓形。翼部大にして、齒は前側齒は左右各二箇、後側齒は右一箇、左二箇なり。本邦、各地の淡水に產す。

えかくーのーしゅう 〔依學宗〕（名）信仰を本とせず、學問として依り學ぶ宗派。俱舍宗・成實宗の類。

えーがち 〔得勝〕（副）得意がほ。心得がほ。扨「なんてうことなき人の、すずろにえがちに物いたういひたる」

えーかは 〔江川〕（名）川の入江。爲尹千首夏「鷺のゐる江川におほふふし柳、今は波こすさみだれの頃」

えーかーはう 〔痦〕（名）古語。小兒の腹の病。和名抄「痦小兒腹病也」

えき 〔易〕（名）占ひの法。算木と筮竹とを用ひて吉凶を判斷すること。宇治拾遺「易のうらなひして金とり出だしたる事」易經繫辭「易者、象也」同昭「生生之謂」易。荘除陽轉易、以成化生」周禮六「掌三易之法、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易。註易者操」蓍變」易之數可占者也」

えきーの-うら 〔易ト〕易によりてうらなふこと。えき。保元「左府御「易後」龜の卜と易のうとの淺深を論じ」

えき 〔驛〕（名）船車・人馬の發著する所。うまや。宿場。今、鐵道の停車場。すて一しょん。唐書「百官志」駕部掌」傳驛」凡三十里有」驛、水驛有」舟」

えき 〔役〕（名）一人民を公用に使ふこと。夫役。二戰爭。左傳「桓公十三年」蒲騷之役」

えき 〔液〕（名）流動物。液體。しる。つゆ。史記「扁鵲」「病不」以」湯液」白虎通「吮」露英、飲」泉液」

えき 〔益〕（名）まうけ。利益。利得。（損の對）國姓爺「慈ある父も益なき子は愛することは能はず」易經繫辭「損以遠害、益以興」利」書經「禹貢」「滿招損、謙受益」

えき 〔疫〕（名）流行病。えやみ。え。疫病。禮記「月令」孟春中氣「行」秋令」則其民大疫」

えき 〔緣起〕（名）えんぎ（緣起）の略。宇津保「藤原」其の寺にも、めぐりの寺にも、御讀經ささせ、えぎ讀ませなどし給ひて」

えきーいう 〔益友〕（名）我が爲めに益となる友人。よき友。論語「季氏」孔子曰、益者三友、損者三友」

えきーえふ 〔奕葉〕（名）（えき（奕）はかさなる、えふ（葉）は世）世を重ぬること。累世。奕世。曹植文「伊君顯考、奕葉佐時」

えきーか 〔驛家〕（名）古へ宿驛の船・馬等を取り扱ふ家。驛戶。

えきーが 〔腋芽〕（名）【植】植物學上の用語。芽の一種。葉腋に生ずるもの。

えきーかーざい 〔液膏劑〕（名）さつさい（擦劑）に同じ。

えきーがく 〔易學〕（名）易の學問。うらなひの學問。漢書「馬」「蘇」是、易有」高氏學」

えきがくーしゃ 〔易學者〕（名）易の學問にくはしき人。

えきーき 〔疫鬼〕（名）妖怪。妖魔。太平記「在世」「太」我れ已に疫鬼に魂を奪はれ、今は如何に武く思ふとも叶ふまじ」

えきーこ 〔奕棊〕碁を打つこと。碁。圍碁。西京雜記「杜陵杜夫子善」奕棊」爲」天下第一人」

えきーさたう 〔驛起稻〕（名）驛田の收穫米。驛家の用途に充つるもの。驛稻。續紀「天平寶字三年」「諸國大租、驛起稻及義倉」

えきーさん 〔益金〕（名）利得したる金。利益金。作業會計規則第四十一條「受入の總額より拂出の總額を控除し殘餘あるときは作業の益金として」

えきーくわ 〔液果〕（名）【植】しやうくわ（漿果）に同じ。

えきーくわ 〔液化〕【理、化】氣體が冷却又は壓力を加へられて、液體に變ずる現象。

えきーくわん 〔驛館〕（名）えきか（驛家）に同じ。爲仲集「宇佐の驛館に、宮づかさまんのりまうで來て侍りしに」

えきーこ 〔驛戶〕（名）前條に同じ。廐牧令「凡驛、各置長一人。取」驛戶內、家口富幹事者」爲之」

えきーご 〔益後〕（名）九星の語。家作・婚禮等によき日。

えきーざい 〔液材〕（名）【植】しらた（白木質）に同じ。

えきーさう 〔繹騷〕（えき（繹）は絡繹にて、ひきつづく義）人の往來繁くして、騷がしきこと。詩經「大雅」「徐方繹騷、震驚徐方」

えきーさく 〔易簀〕（さく（簀）は牀）死ぬること。死亡。昔、支那の曾子、死に臨みて我が臥したる牀を換へしめたるよりいふ。下文を見よ。禮記「檀弓」「曾子疾病中略」寢子曰、華而睆、大夫之簀與中略」曾子曰然、斯乃季孫之賜也、我未」之能」易也。元起易簀。曾元曰、夫子之病革矣。不可」以變」幸而至」且、請敬易」之。曾子曰中略」吾得」正而斃焉斯已矣。舉扶而易」之、反」席、未」安而沒」

えきーしゃ 〔易者〕（名）うらなひを生業とする人。うらなひしゃ。賣卜者。

（謠）易者身の上知らず 除陽師身の上知らずに同じ。おんやうじ（除陽師）の條を見よ。

えきーしゃ 〔驛舍〕（名）えきか（驛家）に同じ。

えきーしん 〔疫神〕（名）やくしん（疫神）に同じ。

えきす 〔越幾斯〕（名）えくす（越幾斯）に同じ。

えきーす 〔役〕（他動詞）一公用の爲めに人民を使ふ。二召し使ふ。おひつかふ。使役す。

えきす （名）【植】いきす（海髮）の異名。

えきすとらーでんりう （英 Extra electric current）（——電流）（名）【理】電流の通ずる輪道を急に切るとき、自己感應によりて起こる瞬間の電流。切斷點に於いて火花の生ずるは此の電流による。

えきすぱんだー （英 Expander）（名）運動具の一。中央を護謨索にて作り、兩端を持ち得るやうに作りたるもの。之を伸縮して胸部を强大にするに用ふる。

えきーせい 〔腋生〕（名）【植】植物學上の用語。芽・花序・花等の、葉腋より生ずしもの。

えきーせい 〔奕世〕代を重ぬること。代代。累世。國語「奕世載德、不」忝」前人」

えきせるさいざー （英 Exerciser）（名）使」後漢書「盧」役使鬼神」

えきじゅうもくしつ 〔液汁木質〕（名）【植】しらた（白木質）に同じ。液材。

えきーしゃ 〔益者〕（名）交じはりて益ある者。益友。論語「季氏」益者三友、損者三友」

えきーしゃ 〔易者〕（名）うらなひしゃ。賣卜者。

えきーしゃ 〔益友〕（名）うらなひをなす人。うらなひしゃ。賣卜者。

えきーしゃ （同）

えきーしん （同）

えきす （同）

えきーす 〔役〕（他動詞）一公用の爲めに人民を使ふ。二召し使ふ。おひつかふ。使役す。

えきーす （名）【植】いきす（海髮）の異名。

えきすとらーでんりう （——電流）（名）【理】電流の通ずる輪道を急に切るとき、自己感應によりて起こる瞬間の電流。切斷點に於いて火花の生ずるは此の電流による。

えきすぱんだー （英 Expander）（名）運動具の一。中央を護謨索にて作り、兩端を持ち得るやうに作りたるもの。之を伸縮して胸部を强大にするに用ふる。

えきーせい 〔腋生〕（名）【植】植物學上の用語。芽・花序・花等の、葉腋より生ずしもの。

えきーせい 〔奕世〕代を重ぬること。代代。累世。國語「奕世載德、不」忝」前人」

えきーし 〔驛子〕（名）驛馬を扱ふ驛夫。令義解「公式」別給」驛子一人」「注」「驛子」者」「馬」おひつかふこと。めしつかひ。使役。禮記「玉藻」「士踐而給役

室内運動具の一。護謨索より成り、其の端を室内の柱等に保たしめ、護謨索の彈力を利用し、之を引きて運動するもの。

えきせん 【駅船】（名）古へ、港に備へ、官使の往來に具へたる船舶。

えきたい 【液體】（名）【理】分子間の凝集力弱く、容積の彈性を有すれども形狀の彈性を有せずして、容器の形狀に從ひ其の形狀を變ずるもの。水・油の如き是れなり。（固體・氣體の對）

えきたい-くうき 【液體空氣】（名）【理】溫度と壓力との作用により、液化せしめたる空氣。りんかいをんと臨界溫度、及びりんかいじやうたい（臨界狀態）を見よ。

えきたう 【駅稻】（名）えきたう（驛起稻）に同じ。飯牧令「諸道置駅馬」中略若馬有闕失者、即以駅稻市替」

えきち 【易置】（名）【動】（おくこと。かふること。史記「趙世家」趙括既代廉頗、悉更易其約束」易置軍吏」

えきちゃう 【役丁】（名）古へ諸國より、夫役に徵發せられて京に上ぼる者。

えきちゃう 【駅長】（名）一宿驛の長。うまやのをさ。大鏡「駅長勿驚時變改」二鐵道停車場の長。助役以下を監督して、汽車の發着、旅客・貨物の取扱ひ、庶務・會計等の事務を司るもの。

えきちゅう 【益蟲】（名）【動】直接又は間接に人類に利益を與へ、或ひは植物などの成長を助くる昆蟲。（害蟲の對）

えきてい 【掖庭】（名）【えき（掖）ば宮殿の旁の舍、轉じて宮庭】宮中の奥ごてん。後宮。漢書「宣帝紀」詔掖庭養視」同注顔師古曰、掖庭者、宮人所居之處也、故謂之掖庭也」

えきてい 【駅亭】（名）つぎば。宿驛。旅亭。晉書「天文志」主馬之官、若今驛亭」齊書「百官志」行禮郎、驛亭」

えきてい 【駅逓】（名）一驛舍。うまつぎ。隋唐嘉話「請驛遞表」起居」二いうびん（郵便）の稱。刑事訴訟法「第二十七」驛遞官信鐵道の官署」

えきていきよく 【駅逓局】（名）明治十年一月以後、同十八年十二月官制改革以前の郵便局の稱。

えきていきよくちよきん 【駅逓局貯金】（名）明治十三年一月以後、同二十年三月以前の郵便貯金の稱。明治十八年五月布告第十三號「預金規則」第一條「驛逓局貯金」

えきていきよくちよきんあづかりしよ 【駅逓局貯金預所】（名）明治二十年四月以前の郵便貯金預所の稱。

えきていく 【駅逓區】（名）いうびんく（郵便區）の舊稱。

えきていし 【駅逓司】（名）明治四年八月以前の郵便局の稱。

えきていれい 【腋庭令】（名）ぬひどのかみ、縫殿寮の唐名。

えきていれう 【駅逓寮】（名）明治四年八月以後、同十年一月以前の郵便局の稱。

えきでう 【益鳥】（名）【動】田園の害蟲を食する鳥類の總稱。燕・小雀・四十雀等の類。ほごてう（保護鳥）を見よ。（害鳥の對）

えきでん 【駅田】（名）古へ驛家の用途に充つるための田地。驛戶の人、之を耕作す。不輸租田なり。田令「凡驛田皆隨近給、大路四町、中路三町、小路二町」

えきでん 【易田】（名）王朝時代、土地荒廢して毎歲耕種するに堪へず、隔年に耕種する不輸租田。かたあらし（片荒）。令義解「田令」凡給口分田者、中略易田倍給、凡田皆其地瘠薄、隔歲荒廢者、依令文、給二段之報也」

えきでん 【駅傳】（名）一宿繼ぎに送る馬。うまつぎ。禮記「王制」士曰傳遽之臣、註「駅傳車馬、所以供急遽之命、士馳而給役使、故自稱如此」張蠡詩「逢明乘駅傳、偏與禮靈場」二宿驛によりて傳送すること。驛遞。

えきば 【駅馬】（名）古へ宿驛に備へ置きて、官使の用に供する馬。えきま。厩牧令「凡諸道置駅馬、大路廿疋、中路十四、小路五」史記「孟嘗君傳」每五日洗沐、常置駅馬長安諸郊」

えきば 【役馬】（名）だば（賦馬）に同じ。

えきびやう 【疫病】（名）やくびやう（疫病）に同じ。

えきふ 【役夫】（名）にんそく（人足）。にんぶ（人夫）。列子「周穆王」寬其役夫之程」左傳「文公元年」江芈怒曰呼役夫、宜君王之欲殺女而立職也」

えきふ 【駅夫】（名）一宿驛の人夫。二鐵道停車場にて使役する下級の職員。主に車輛の聯結・貨物の運搬・場内の掃除等の勞務に服するもの。

えきま 【駅馬】（名）えきば（驛馬）に同じ。

えきよう-どうぶつ 【役用動物】（名）耕作・運搬等の勞役に用ふる畜類の總稱。牛・馬・駱駝等の類。

えきり 【疫痢】（名）【醫】急性傳染病の一。夏季に流行し、主に小兒を襲ふもの。突然發熱して、頭痛・嘔吐・下痢を起こし、死に至ることあり。

えきれ 【赤鱈】（名）方言。赤鱈の裁賣り。京畿

えきれい 【駅鈴】（名）一驛鈴。

諸國へ赴く時、驛馬を徵發する證に賜はる鈴。驛路の鈴。驛傳鈴。公式令「親王及一位、驛鈴十剌中略三位以上、驛鈴八剌中略四位、驛鈴六剌中略五位、驛鈴五剌」二現今郵便器具の一。郵便・電報の配達人が、猛獸の豫防又は渡船場の舟子召呼の爲めに携帶する鈴。

えきれい 【疫癘】（名）えやみ。疫病。後紀「四年七月癸巳」疫癘之時、民庶相殞、不通水火」周禮「春官、占夢」以乾禮哀國凶札」註「札謂疫癘也」後漢「東夷傳」「詔以疫癘水潦、令人半輸今年田租」

えきろ 【駅路】（名）宿驛ある道路。うまやぢ。北山移文「馳胡駅路、勒山移庭」祖詠詩「淄水行人渡、商山驛路溪」

えきろのすず 【駅路鈴】えきれい（驛鈴）に同じ。朗詠「驛路鈴摩夜過山」

えきろのふね 【駅路舟】すずぶね（鈴舟）に同じ。

えきわ 【腋窩】（名）腋と腕との間の凹き所。わきのした。

えきわ-どうみやく 【腋窩動脈】（名）【醫】頸骨下動脈に連なり、大胸筋附著部の下端に終はる動脈。胸部及び上膊の動脈は之より分枝す。

えぐいも 【芋】（名）【植】さといも（青芋）の異名。

えくす 【越幾斯】（英 Extractum）（名）動物質又は植物質の水分を蒸發せしめて之を濃厚にし、又は乾燥せしめて得たる主要成分。藥用又は食用とす。えっきす。

えきす。

えこ 【依怙】一方に偏して肩を持つこと。片びいき。偏頗。えこひいき。平家「灌頂巻」「廳のしもべの習ひ、かやうの事については、自らのえこも候へ」法華經「品三」無所依怙」

えご 【谷】（名）一谷などの、水の流れ込みたる處。爲忠百首「水たまる谷のえごえご掘りかへし、わりなく植うる小田の苗代」二川の入江。

えご 【植】（名）えごのき（齊墩果）の異名。

えこう-ひいき 【依怙贔負】（名）自己の訛り。

えこ-ぢ 【依怙地】（名）かたいぢ。いこぢ。執拗。

えごのき 【齊墩果】（名）【植】齊墩果科、齊墩果屬の落葉喬木。幹の高さ三四丈。葉は卵形鋭頭、鋸齒を有す。花は白色にて總狀花序又は聚繖花序に排列し、初夏開く。我が國、各地の山林に自生す。材は器物細工に用ひ、種子よりは油を採るべし。あかんちや。あぢさ。いっさいえご。えご。こがのき。こはづ。ちさのき。ちしやのき。ろくろぎ。

えごのきくわ 【齊墩果科】（名）【植】顯花植物、雙子葉類の一科。灌木又は喬木。葉は互生單葉。花は整齊完全、稀に雜性、叢生す。萼は多少子房に合著す。花冠は合瓣又は離瓣樣、四乃至八筒の裂片又は花瓣より成る。雄蕊の數は花冠の裂片又は花瓣の數に二倍し、花冠の筒部又は基底に著生す。花絲は單體又は多體をなす。子房は二乃至五室、各室二胚珠を藏す。花柱は細長、柱頭は單一又は二乃至五に淺裂す。蒴果又は核果を結び、種子は多量に肉質の胚乳を藏す。本科に屬するものは熱帶又は溫帶地方に產し、有用なる木材及び油を與ふるものあり。

えこひいき 【依怙贔負】（名）えこ（依怙）に同じ。かたびいき。狂言「清水」えこひいきの無いやうに、よう聞きやれ」

えこ-じま 【荏】（名）【植】脣形科、紫蘇屬の一年生草本。方莖にして、高さ二三尺。葉は對生、廣卵形鋭頭、葉脚に向かひて狹少、鈍鋸齒を有し、又長き葉柄を具へ、粗毫にして淺綠色なり。夏日、白色の小花を開き、總狀花序に排列し、小痩果を結ぶ。種子も亦えごまと稱し、小球形にて、黑白の二品種あり。我が國、各地の園圃に栽培せらる。種子より荏油（えごまあぶら）を搾り、又小鳥の飼料に用ふ。えごまのみ。じうね。しろじそ。荏胡麻。

えこむ 【自動】（名）はひりこむ。落ちこむ。曾我五人兄弟「松の桁椽釘離れ、礎、土にぞえこみける」

えこ-もじき 【紅色藻類】（名）【植】紅色藻類、えごもどき屬の海藻。體は絲狀にしてよく分枝し、錯綜して圓塊をなす。枝端は鈎狀に曲がり、丁場石藻「ハ」其の他の大海藻に鈎著す。全體淡赤色なり。我が國、暖地の淺海に產す。

えざけ 【江鮭】（名）【動】あめのうを（鮭魚）の異名。

えさし-ばうき 【柄差帚】（名）他の柄を、帚の莖につけたるもの。冥途飛脚「柄差し帚逆手に取り、二階の下から板敷を、ぐわたぐわたと突き鳴らし」

えさ-ささ （感）力を入るる時發するかけ聲。榮華「榮花」大きなる木どもには太き綱をつけて、聲を合はせてえささまと引き上げ曳ぐ」

えさらーず 【得不避】（句）避けられず。のがれ難し。よんどころなし。勞語「かた時もえさらぬ道にいきにけり」紫式部日記「ただえさらずうちかたらひ、少しも心とめて思ふ」源氏物語「ある時は、えさらぬ馬道の戶をさしこめ」

えし 【善】（形）よし（善）に同じ。天智紀「鮎こそは島べも曳岐」同「あか駒のいゆきはばかるまくず原、何のつてこと、ただにし曳雜むむ」萬「たくぶすま白山風のねなへども、子ろがおそぎの、あろこそ要之」も

えしいも （副）（しもは助辭）えし（副）に同じ。勞語「うきながら人をばえしも忘れねば、かつ恨みつつ猶ぞ戀しき」

えしもや （句）あらんや、あらじ。いかであるべき。（反語の意を表はす）源氏「さやうにをかしき方の御かさやどりにはえしもやと、つきなげにこそ見え侍れ」

えしもやは （句）前條に同じ。宇津保「藤原」いでや、君の耳留め給ふばかりはえしもやは、などいふ」

えず （形）次條の略。傾城反魂香「ありの死骸の傍へ出ることか、ああえず。去りながら、いやと云ふも仔細らし」

えずい （形）一おそろし。こはし。西國の方言。二人に超えて狡智あり。得手勝手强し。薩摩國の方言。

えすてる （英 Esterm）（名）【化】酸の水素原子を炭水基にて置換したるものと考ふべき組成を有する化合物の總稱。脂油は脂油酸のぐりせりんえすてる・なる類。

えすぺらんと （Esperanto）（名）わるそー・のざーめんほーふ氏が、各國交通の便に供する爲めに發明せし語。ぜるまん語及びろーまんす語を組み合はせて作り、文法極めて簡單なり。

えすゑ 【枝末】（名）枝の末の方。新六帖「くれかかる山の雫をうけためて、えずゑにうつすならの葉がしは」基佐集「山かつもまだ星かげに餐の、はたたきてなく梅のえずゑに」

えせ 【似非】（接頭）一其のさまして實は然らぬ。似て非なる。「えせかたうど」「えせざいはひ」「えせわらふ」二其の物とも見えぬ見苦しき。卑しむべき。「えせ牛」「えせ車」「えせ板敷」

えせ-うし 【似非牛】（名）其の物とも見えぬ見苦しき牛。みすぼらしき牛。枕「六、わびしげなる車に、えせ牛かけてゆるがし行くもの」

えせ-うた 【似非歌】（名）歌とも見えぬ歌。雜のある歌。つたなき歌。無名抄「えせ歌に至りては、又いづれもよろしからず」舉白集「例のえせ歌を書き流し侍れば」

えせ-おや 【似非親】（名）親とも見えぬつまらぬ親。親がひなき親。枕「有衛門のごとなるものの、えせおやを持て」

えせ-かたうど 【似非方人】（名）かたうどらしくなきかたうど。たのもしげなきかたうど。義經記「五、忠信」中略一人になりて、中中えせかたうどありつるは、足にまぎれてわろかりつるにといひて」

えせ-かたち 【似非形】（名）見苦しき形。しやがはしき形。枕「夏、ひるねして起きたる中略えせがたちは、つやめき寢はれて、ようせずば頬ゆがみもしつべし」

えせ-き 【似非木】（名）いかがはしき木。あしき材木。七十一番歌合「我し、山國や、えせ木の樽はかさなれど、きらはるるみは獨こそをれ」

えせ-ぐるま 【似非車】（名）車とも見えぬ苦しき車。卑しき車。枕「追ひのけられたるえせぐるまども、牛かけて、所ある方にゆるがしもてゆく」

えせ-ごと　似非事　（名）笑ふべきこと。いかがはしきこと。ひがごと。

えせ-ざい　似非賽　（名）見苦しき賽（ざい）。賽らしくなき賽。七十番歌合「さいすり。ねたやげにかたつきしたるえせざいの、かくかひもなきめをも見るかな」

えせ-ざいはひ　似非幸　（名）幸ひらしくて實は然らぬこと。枕「生ひさきなく、まめやかに、えせざいはひなと見てゐたらん人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて」

えせ-ざむらひ　似非武士　（名）武士にして武士の精神なき者。

（謡）**えせ武士の刀いちり**　實際に膽力なくして、徒らに人を威す譬へ。

えせ-さんだんろんぱふ　似非三段論法（英 Pollacy）（名）【論】えせするろん（似非推論）に同じ。

えせ-すりやう　似非受領　（名）受領らしくなき受領。見すぼらしき受領。源氏「えせ受領の娘などさへ、心の限り盡くしたる車どもに乘りて」

えせ-すゐろん　似非推論（英 Fallacy）（名）【論】論理上の三段論法の規則を破れる推論。似非三段論法。謡曲。

えせ-たくみ　似非匠　（名）たくみらしからぬたくみ。わざ拙き大工。十訓「人を使ふ事は工の木を用ふるが如くすといへり」中世民部卿はえせだくみにてぞおはしけるやらん」

えせ-だち　似非太刀　（名）太刀らしからぬ太刀。なまくらがたな。鈍刀。曾我（十五郎藤原祐成出世の話）「これ程のえせだちを持ちて君の御前にて、かかる大事しける不思議さよ」

えせ-びと　似非人　（名）えせもの（似非者）に同じ。謡曲「大江山」「大師坊と云ふえせ人」

えせ-ぼふし　似非法師　（名）法師らしくなき法師。いかがはしき法師。吉野忠信「「鞆慶といふえせ法師に」

えせ-もの　似非者（名）いかがはしき者。卑しき者。つまらぬ者。馬鹿者。えせびと。枕「昔はえせものも、皆すきをかしうこそありけれ」謡曲小袖曽我「箱根の寺にありし、箱王といふえせものが」

（謡）**えせ者の空笑ひ**　えせ者はそら笑ひをして、人の機嫌を取ること。

えせる　（自動）いやらしくあり。厭はしくあり。運歩色葉「惡（エセ）」四季物語（四月）「蛙といふものは、えせたる蟲にて」

えせ-れんが　似非連歌　（名）連歌らしくなき連歌。拙き連歌。建武年間記「京・鎌倉をときまぜて、」座擬はぬえせ連歌」

えせ-わらひ　似非笑　（名）えせわらふこと。

えせ-わらふ　似非笑（自動）そらわらひをす。嘲り笑ふ。せせら笑ひをす。長町女腹切「傍若無人のままにて、えせ笑ひ」

えそ　鰔（名）【動】喉鰓類、えそ科に屬する魚。體の長さ三尺餘り。口は濶くして細かき齒を生ず。背部は淡赤黒色にて、腹部は銀白色なり。我が國、南西及び東海に產す。鮭（書紀下卷）鮭（仁徳紀）鮭集（万葉集）鮭柳（用字集）狗母魚（復言）

えそ　蝦夷（名）古昔、關東より奥羽及び蝦夷が島、卽ち今の北海道にかけて住み居りし人種。今も北海道及び樺太の一部に生存す。えみし。顯輔集「あさましや千島のえぞの造るなる、毒木の矢こそひまはもるなれ」新古今舞上「みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬ、書きつくしてよ壺の石ぶみ」

えぞ-あかばな　（名）【植】柳葉菜（ヤナギバナ）科、柳葉菜屬の多年生草本。莖の高さ一二尺にして單一、或ひは少許の枝を有す。葉は對生、長卵形鋭頭、鋸齒を有し、殆ど葉柄なし。花は淡紅色にて、上部の葉腋より生じ、夏日開く。果實は長き彌なり。我が國、北海道の山野・水邊に自生す。

えぞ-あざみ　蝦夷薊　（名）【植】菊科、薊（アザミ）屬の多年生草本。莖は平滑分枝し、葉は鋸齒又は缺刻を有す。花は紫色にて頭狀花序に排列し、夏日開く。我が國、北海道の山野に自生す。

えぞ-ありどほし　蝦夷蟻通　（名）【植】茜草科、えぞありどほし屬の常綠灌木。草本狀の小灌木、匍匐性を有して地上に蔓延し、一尺餘に達す。葉は對生、革質、廣卵形なり。夏日、淡紅色の美花を、葉間より生ぜる花莖上に二箇づつ開き、香氣あり。我が國、中部以北の高山に自生す。

えぞ-いたち　蝦夷鼬鼠　（名）【動】いたちに類する肉食獸の一種。北地に產す。

えぞ-いちげ　蝦夷一華　（名）【植】次條の略。

えぞ-いちげさう　蝦夷一華草　（名）【植】毛茛科、白頭翁（ハクトウオウ）屬の多年生草本。莖の高さ五六寸。根葉は二回三出複葉、各小葉は缺刻狀鋸齒を有す。總苞の葉は三箇、根葉に似たり。花は白色にて、葉腋より生ぜる唯一箇の花梗上に單生し、五月頃開く。我が國、北海道に自生す。えぞいちげ。

えぞ-いちご　蝦夷苺　（名）【植】薔薇科、懸鈎子（ケンコウシ）屬の落葉灌木。幹の高さ四五尺。葉は羽狀複葉にして、各小葉は長卵形鋸齒を有す。花は繖房花序に排列し、白色にして春開き、夏季に至て赤黄色の果實を結ぶ。我が國、北部地方の山野に自生す。

えぞ-いも　蝦夷薯　（名）【植】じやがたらいも（馬鈴薯）の異名。

えぞ-うはみずざくら　（名）【植】薔薇科、櫻（サクラ）屬の落葉喬木。幹の高さ四五丈。葉は倒卵形鋭頭、葉脚は心臟形、微鋸齒を具ふ。花は白色にて、總狀花序に排列し、初夏開き、梅に似たり。小核果を結ぶ。我が國、北海道の山地に自生す。

えぞ-えびね　（名）【植】さるめんえびねの異名。

えぞ-えんごさく　（名）【植】とまさうの異名。

えぞ-えんぴせんのう　（名）【植】石竹科、剪夏羅（ビ）屬の草本。莖の高さ一二尺。葉は卵狀披針形、對生なり。夏日、鮮赤色の美花を開き、小數にして大形なり。我が國、北海道に自生す。

えぞ-おとぎり　（名）【植】次條の略。

えぞ-おとぎり-さう　（名）【植】金絲桃（ビセイ）科、金絲桃屬の草本。莖の高さ三四寸乃至一尺、やや四角形をなす。葉は卵狀長楕圓形、鈍頭全緣にして、透明の小點を散布す。花は黄色にて、葉腋より生ずる花梗上に著生し、七月頃開く。我が國、北海道其の他の山地に自生す。えぞおとぎり。

えぞ-おほあぶ　蝦夷大虻　（名）【動】北海道に產する大形の虻（アブ）。

えぞ-おほばこ　蝦夷車前　（名）【植】車前（オホバコ）科、車前屬の多年生草本。葉は根生し、挾狀長楕圓形全緣、或ひは鋸齒あり。五條の縱走せる葉脈著しく、長き葉柄を具ふ。花莖は葉間より抽出し、穗狀花序

に排列せる綠色の花を著く。我が國、北部地方の山野に自生す。

えぞ-おほやまはこべ　（名）【植】石竹科、繁縷（ハコベ）屬の多年生草本。繁縷屬中の大形なるもの。莖は叉狀に分枝し、細毛密生す。葉は對生、披針形、鋭尖頭にして柄なし。七八月頃、葉腋及び莖頂に生ぜる長き花梗上に、白色の花を開く。我が國、北海道に自生す。

えぞ-がき　蝦夷牡蠣　（名）【動】なががきの異名。

えぞ-ぎく　蝦夷菊　（名）【植】さつまぎく（翠菊）の異名。

えぞ-さつねあざみ　蝦夷狐薊　（名）【植】菊科、薊（アザミ）屬の多年生草本。莖の高さ二乃至四尺。葉は長楕圓狀披針形、葉緣は一定せず、小刺を具へ、葉柄無し。花は紫色にて單性、雌雄異株、頭狀花序に排列し、各花序は莖頂に總苞狀に集合し、夏日開く。我が國、北海道の山野に自生す。

えぞ-さんばい　（名）【植】薔薇科、えぞきんばい屬の多年生草本。全形稍おらんだいちごに似たり。莖は匍匐し、葉は長き葉柄を有し、三乃至五箇の小葉より成る。初夏、黄色の花を開き、繖房花序に排列す。我が國、北海道の山地に自生す。

えぞ-さんみづひき　（名）【植】薔薇科、龍（リウ）屬の多年生草本。莖の高さ二三尺、單一なり。葉は羽狀複葉、各小葉は卵形、粗鋸齒を具ふ。夏日、黄色の小花を開き、總狀花序に排列す。我が國、北海道の山野に自生す。根を黄色の染料に供す。

えぞ-さんれいくわ　（名）【植】まるばきんれいくわの異名。

えぞ-くろくもさう　（名）【植】虎耳草（ユキノシタ）科、虎耳草屬の多年生草本。くろくもさうの變種。花は白色にして、複總狀花序に排列す。我が國、北海道に自生す。

えぞ-くわんりやう　蝦夷管領　（名）鎌倉幕府の職名。奥羽及び蝦夷を鎮撫し、邊境を防備するもの。えぞ夷代官。

えぞ-こざくら　蝦夷小櫻　（名）【植】櫻草（サクラソウ）科、櫻草屬の多年生草本。葉は根生し、笹形、粗鋸齒を具へ、長き葉柄を有す。七月頃三四寸の花莖を葉間より抽出し、頂端に一乃至數花を繖形狀に著け、紅紫色にて美し。我が國、北海道の山地に自生す。えぞこざくらさう。

えぞ-こざくらさう　蝦夷小櫻草　（名）【植】前條の異名。

えぞ-ごしろね　（名）【植】百合科、しろね屬の多年生草本。莖の高さ尺内外、四角形、粗齒牙緣を有す。花は各葉腋に數多生じ、極めて細小なり。我が國、北海道に產す。えぞしろね。

えぞ-ごすみれ　蝦夷小菫　（名）【植】菫菜科、紫花地丁（ムラサキバナ）屬の多年生草本。莖は甚だ短く、根莖は斜形をなし、また短し。葉は殆ど叢生し、托葉は半ば葉柄に附著し、最下葉は腎臟狀心臟形、其の他は心臟狀卵形なり。花は淡色にて、葉間より生じ、五月頃開く。我が國、北海道に自生す。

えぞ-ごせんたちばな　（名）【植】山茱萸（ミヤマ）科、山茱萸屬の多年生草本。根莖を有す。地上莖は高さ二乃至七八寸、單一なり。葉は對生、卵形、鋭頭、全緣にして、葉柄無く、莖の上部に至るに從ひ、葉形漸く大なり。夏日、紫色の微小花を莖頂に簇生し、繖形花序をなし、四枚の花瓣様の苞にて包圍せらる。我が國、北海道の山地に自生す。

えぞ-さんざし　（名）【植】薔薇科、山楂子（サンザシ）屬の落葉灌木。枝に針を有す。葉は羽狀に分裂し、各裂片は鋸齒を有し、托葉あり。花は繖形花序に排列す。我が國、北海道の山地に自生す。

えぞ-しもつけ　（名）【植】薔薇科、繡線菊（シウセン）屬の落葉灌木。幹の高さ二三尺、枝細長なり。葉は卵形又は長楕圓形、中部より葉先に至るまで鋸齒を有す。表・裏共に細毛密生す。花は白色の小花にて、繖形様に簇生し、五月頃開く。我が國、北海道に自生す。

えぞ-しやくなぎ　蝦夷石南　（名）【植】いそつづじの異名。

えぞ-しやくなげ　蝦夷石南　（名）【植】前條に同じ。

えぞ-しやうま　蝦夷升麻　（名）【植】るゐえふしやうまの異名。

えぞ-しろてふ　（名）【動】昆蟲類中、鱗翅類の一種。中形の蝶類にして、全翅白く、多少透明、殊に雌に於いて然りとす。翅脈は黑くして明かなり。觸角は黑く、體も黑くして毛を粗生す。幼蟲は苹櫛（ヘイシ）を害す。夏季、北海道に普通なり。

えぞ-しろね　（名）【植】えぞごしろねの異名。

えぞ-すかしゆり　（名）【植】百合（ユリ）科、百合屬の多年生草本。地下に鱗莖を有す。地上莖は細長綠色、高さ二三尺なり。葉は線形、葉柄無く、莖の上部にては輪生す。花は莖頂に生じ、繖形又は短き總狀花序に排列し、七月頃開き、淡赤褐色にて美し。我が國、北海道の海岸に自生す。

えぞ-すぐり　（名）【植】虎耳草科、すぐり屬の落葉灌木。全形すぐりに似たり。夏季、紫色の花を開く。我が國、北海道に產す。

えぞ-すげ　蝦夷菅　（名）【植】莎草科、菅（スガ）屬の多年生草本。莖の高さ一乃至三尺、三稜形にして平滑。葉は細長。花は單性、雌雄同株、穗狀花序に排列し、雄花穗は二乃至四箇、柄を有して直立し、雌花穗は二乃至五箇にして細き柄を有し下垂し、夏日褐色を呈す。我が國、北海道の山地・水邊に自生す。

えぞ-すずしろ　（名）【植】十字花科、えぞすずしろ屬の二年生草本。莖の高さ一二尺。葉は線狀、披針形、波狀緣を有す。花は總狀花序に排列し、七八月の頃開き、多くは黄色なれど稀に紫色なるものあり。我が國、北海道に自生す。きたみはたざを。

えぞ-すぞらん　（名）【植】あをすぞらんの異名。

えぞ-すみれ　胡堇草　（名）【植】菫菜科、紫花地丁（ムラサキバナ）屬の多年生草本。莖を有せず。葉は三裂し、又二三小裂片をなし、各裂片また缺刻あり。四五月頃、葉間より抽出せる花梗上に淡紫色の花を開く。我が國、北海道及び内地の山地に自生す。えいざんすみれ。おほすみれ。かくれがさ。かくれみの。

えぞ-せきしやう　蝦夷石菖　（名）【植】芝草科、えぞせきしやう屬の多年生草本。根莖を有す。地上莖は高さ尺許、葉は線形、下部の葉は往往莖よりも長く、大なる葉鞘を具へ、上部に至るに從ひ葉身漸く短小、遂に葉鞘のみとなる。夏季、自色の花を莖頂に開き、總狀花序に排列す。我が國、北海道其の他二三の地に自生す。

えぞ-せみ　蝦夷蟬　（名）【動】昆蟲類中、有吻類の一種。本邦最大の種類にして、全形普通の蟬類に同じく、體は赤褐色なり。北海道に產す。

えぞ-たいくわん　蝦夷代官　（名）えぞくわんりやう（蝦夷管領）に同じ。

えぞ-たちつぼすみれ　（名）【植】菫菜科、紫花地丁（ツボスミレ）屬の多年生草本。莖は直立し、一尺に達するものあり。葉は卵狀心臟形、鈍鋸齒を具へ、葉柄を有し、托葉は線形、鋸齒狀に細裂す。花梗は葉腋に生じ、五六月頃白色又は淡紫色の小花を開く。我が國、北部地方の山野に自生す。

えぞ-たまかひ　蝦夷玉貝　（名）【動】軟體動物、腹足類の一種、たまがひ科に屬するもの。殼は平滑にしてほぼ球形をなし。水管溝無く、外唇は平滑にして銳く、內唇も亦平滑なり。大形にして、褐色に淡帶部を有す。

えぞ-つつじ　蝦夷躑躅　（名）【植】石南（シャクナゲ）科、石南屬の落葉灌木。地上に横臥する性あり。葉は倒卵形又は卵形鈍頭、葉柄無し。七月頃、紫紅色の花を枝端に開く。我が國、北海道の山地に自生す。

えぞ-ななかまど　（名）【植】ななかまどの異名。

えぞ-なみさ　（名）【植】脣形科、たつなみさう屬の多年生草本。卿枝に依りて蔓延す。莖は高さ一乃至三尺。葉は橢圓狀披針形、又は卵狀橢圓形、銳頭、葉脚は圓く或ひはやや心臟形をなし、齒牙緣を具へ、葉柄有り。夏日、藍青色の脣形花を葉腋に單生し、短き花梗を有す。我が國、北海道の山地に自生す。

えぞ-にがくさ　（名）【植】脣形科、にがくさ屬の多年生草本。莖の高さ五寸、根莖を有す。葉は長き葉柄を有し、心臟狀卵形、鈍頭鋸齒を有し、表・裏兩面共に毛茸あり。花は總狀花序に排列し、葉腋及び莖頂に生じ、拾一個に向かひて開く傾向あり。我が國、北海道に產す。

えぞ-にしき　蝦夷錦　（名）錦の一種。支那產にして、蝦夷の地を歷て渡來したるもの。金銀絲を交ぜ用ひ、裏は浮かして織り、多く雲龍の模樣を織り出だす。五爪の龍を最とし、三爪・四爪のもの之に亞ぐといふ。

えぞ-にら　（名）【植】繖形科、鹹草（ケガラ）屬の多年生草本。大形の草本にして、高さ一二丈、周圍亦此れに准ず。根際の葉は長き葉柄あり、三出複葉、各小葉は廣卵形、三乃至五に淺裂す。莖部の葉は葉柄濶大して、莖を包め り。白色の小花を密生し、複繖花序に排列す。我が國、北部の高山、又は北海道の山地に自生す。せいき。

えぞ-ぬかぼ　（名）【植】禾本科、萱（ヨシ）屬の多年生草本。莖は細くして長き一尺許り。葉は細長。莖・葉共に平滑。夏日、綠色の花を著け、複總狀花序に排列し、苞は披針形にして芒なし。我が國、北部地方に自生す。

えぞ-ねぎ　蝦夷葱　（名）【植】百合科、青葱（ネギ）屬の多年生草本。地下に鱗莖あり、小にして多數叢生し、各圓柱狀中空の葉を出だす。花莖は長き葉とほぼ同じ。花は紫紅色にて繖形花序に排列す。我が國、北海道の山野に自生す。

えぞ-のいぬなづな　（名）【植】十字花科、蔊菜（ヤマハタザホ）屬の一年生草本。莖の高さ二乃至六七寸、卿枝を有す。花無き莖の葉は倒卵形又は篦形、銳頭或ひは鈍頭、花有る莖の葉は卵形又は菱狀倒卵形、銳頭全緣、又は少しく鋸齒を有す。春夏の候、白色の小花を開き、總狀花序に排列す。我が國、北海道に自生す。しろばなのいぬなづな。

えぞ-の-かはおさ　（名）【植】玄參科、木威靈仙（ヤマハハコ）屬の多年生草本。卿枝又は有葉の枝に依りて蔓延す。莖は傾臥し、下部の節より根を生ず。葉は橢圓形・卵形又は橢圓狀披針形、銳鋸齒を具へ、鈍頭にして、葉柄を有す。春の末、藍青色又は殆ど白色なる花を開き、總狀花序に排列す。我が國、北海道の濕地・水邊に自生す。

えぞ-のこぎりさう　蝦夷鋸草　（名）【植】菊科、著（ヲナモミ）屬の多年生草本。根莖を有す。莖は殆ど單一にて分枝せず、概ね平滑、一二尺の高さに達す。葉は線形又は線狀披針形、葉柄は殆ど無く、少しく莖を抱き、銳頭にて規則正しく、細かく、して深き鋸齒緣を有す。夏日、白色の花を開き、頭狀花序に排列す。我が國、北海道の濕地に自生す。

えぞ-のこすみれ　蝦夷小菫　（名）【植】ひかげすみれの異名。

えぞ-のじゃにんじん　（名）【植】あいぬわさびの異名。

えぞ-のたけかんば　（名）【植】とすがんびの異名。

えぞ-のちちこぐさ　（名）【植】菊科、えぞのちちこぐさ屬の多年生草本。莖は地上を匍匐し、葉は倒卵形、白毛を密生す。花莖は單一、細長にして白毛密生し、數多の線形葉を著け、頂端に數箇の頭狀花序を著生し、花序には雌雄の別あり。我が國、北海道に自生す。

えぞ-のみづたで　蝦夷水蓼　（名）【植】蓼（タデ）科、蓼屬の多年生草本。莖は匍匐し、水中又は水邊の土中に生ず。莖の太さ二三分乃至四五分。葉は長橢圓形にして先端丸し。六七月頃、淡紅色の花を開き、穗狀花序をなす。我が國、北海道に產す。

えぞ-のもみ　蝦夷樅　（名）【植】うらじろもみ」の異名。

えぞ-ばらふふ　蝦夷防風　（名）【植】繖形科、えぞばらふふ屬の多年生草本。莖の高さ一尺許り。葉は二三回羽狀複葉、各小葉に卵形、缺刻あり。夏日、白色の花を開き、複繖花序に排列す。我が國、北海道の山野に自生す。

えぞ-はこべ　（名）【植】石竹科、繁縷（ハコベ）屬の多年生草本。莖の高さ四五寸。葉は長橢圓形、銳頭にして葉柄無し。白色の小花を葉腋及び莖頂に開く。我が國、寒地に自生す。

えぞ-はたざを　（名）【植】十字花科、南芥（ヤマハタザホ）屬の草本。莖の高さ二三尺、毛茸を有す。下部の葉は長橢圓狀卵形、鋸齒を有し、葉脚漸く狹くして、少しく莖を抱く。上部の葉は披針形に近く、葉柄無し。八月頃、白色の小花を開き、總狀花序に排列す。我が國、北海道に自生す。

えぞ-はりゐ　（名）【植】莎草科、蒯籌（ウキヤガラ）屬の多年生草本。根莖を有し、莖は剛直、一乃至五尺に達す。葉は葉身を缺き、葉鞘は褐色を呈す。夏日、綠褐色の花を開き、穗狀花序に排列す。我が國、北海道の水邊に自生す。

えぞ-はんしょうづる　（名）【植】くろばなのはんしょうづるの異名。

えぞ-ふうろ　（名）【植】牻牛兒苗（フウロソウ）科、牻牛兒苗屬の多年生草本。塊根を有す。莖は直立し、枝は開出す。葉は掌狀脈を有し、三乃至五深裂し、各裂片は銳頭、缺刻を有す。紅色又はやや紫色の五瓣花を開く。我が國、北海道に自生す。

えぞ-ふさ　蝦夷蕗　（名）【植】あきたぶき（秋田蕗）の異名。

えぞ-ふすま　（名）【植】石竹科、繁縷（ハコベ）屬の多年生草本。莖の高さ尺餘、纖弱にして平滑なり。葉は披針形銳頭、葉脚ほぼ心臟形をなし、葉柄無し。六七月の頃白色の小花を開き、聚繖花序に排列す。我が國、北海道に自生す。しらおひはこべ。

えぞ-ぶね　蝦夷船　（名）蝦夷人の乘る船。夫木三「我が戀はあじかをねらふえぞぶねの、よりみよらずみ浪間をぞまつ」

えぞ-へうたんぼく　（名）【植】忍冬（ニンドウ）科、忍冬屬の矮少なる落葉灌木。葉は長橢圓狀倒卵形、銳頭、葉脚心臟形をなし、短き葉柄を具ふ。花は紅色にして葉腋に生じ、纖弱なる花梗上に二箇對生す。我が國、北海道に自生す。

えぞ-ほら　蝦夷螺　（名）【動】軟體動物、腹足類の一種、ゑぞちゆうばい科に屬するもの。殼は表面汚褐色にて、長さ大凡五寸、質重厚、多少肩角を具へ、數條の不規則なる螺肋を繞らし、肋には密に細脈を刻す。殼口は大にして、その內部は柑色又は白色なり。

えぞ-ほら-もどき　（名）【動】軟體動物、腹足類の一種。ゑぞちゆうばい科に屬するもの。殼は螺塔高く、質やや薄く、全面に大小の螺脈を繞らし、體層には凡そ十七八條を具へ、肋間更に五六條の細脈を刻す。全體帶黃白色にして、時に口內は柑色を呈す。長さ四五寸。肉は食ふべし。日本海に產す。

えぞ-ぼん　蝦夷盆　（名）とど又はぶなの木にて造り、小刀のみにて巧みに彫刻をなせる盆。蝦夷人之を製す。

えぞ-まつ　蝦夷松　（名）【植】松杉科、はりもみ屬の常綠喬木。幹の高さ十乃至十數丈、全形圓錐形なり。樹皮は黑褐色、鱗狀に剝落す。葉は線形、長さ七八分、幅一分、表面は暗綠色、裏面は灰白色なり。花は單性、雌雄同株、雄花は枝頂に生じ、長橢圓形にして黃綠色に、雌花は橢圓形なり。長橢圓形二寸許りの球果を結び、秋成熟す。我が國、中部以北及び北海道の深山に自生す。材は建築・造船等に用ひらる。くろえぞ。くろえぞまつ。

えぞ-みみなぐさ　（名）【植】石竹科、卷耳（ミミナグサ）屬の一年生草本。莖の高さ三寸乃至一尺、毛茸密生す。春季、淡色の小花を開き、密集せる聚繖花序に排列し、花瓣は萼片より短し。我が國、北海道の原野に自生す。

えぞ-むらさきにがな　蝦夷紫苦菜　（名）【植】菊科、黃瓜菜（ヲニアザミ）屬の草本。莖は直立す。葉は披針形全緣、又は齒牙銳尖頭、葉脚心臟形をなし莖を抱き、葉柄無し。夏季、藍紫色の花を開き、頭狀花序に排列し、花序は總狀に集合す。我が國、北海道の原野に自生す。

えぞ-もみ　蝦夷樅　（名）【植】らびえ（白檜曾）の異名。

えぞ-やなぎ　蝦夷柳　（名）【植】楊柳科、柳（ヤナギ）屬の落葉灌木又は喬木。幹の高さ一二丈、枝條やや紫色を帶び、芽大なり。葉は狹橢圓形又は線狀披針形、銳尖頭にして細鋸齒を有し、裏面白色を帶び、托葉あり。花は單性、雌雄同株、葇荑花序に排列し、初春葉に先だちて開く。我が國、北海道の原野に自生す。

えぞ-やまどり　蝦夷山鳥　（名）【動】鳥類中、雞類の一種。大さ鳩大にして、嘴は雉子の如し。上面は複雜なる斑紋を呈し、純白・灰白・茶褐・黑等の諸色を混ず。尾羽の中央の二枚は全く鷹狀なれども、其の他は末端白く黑帶あり。翼の風切は茶褐色にて、其の外緣は白茶色なり。下面は類白色にて、數多の黑色と暗褐色との斑點あり。脛は下端に至るまで白色の羽毛を被り、趾は裸出す。眼上の肉冠は、雌にありては甚だ小なり。我が國、北海道に產す。保護鳥の一なり。えぞらいてう。

（やまどりもどき）

えぞ-やまざきしょうま　（名）【植】薔薇科、やまざきしょうま屬の多年生草本。莖は高さ二尺許り。葉は三回羽狀複葉、各小葉は長橢圓形又は長卵形にして、著しき鋸齒あり。花は復總狀花序に密生し、黃白色にして細小なり。

えぞ-ゆづりは　蝦夷讓葉　（名）【植】ちやぼゆづりはの異名。

えぞ-ゆり　蝦夷百合　（名）【植】くろゆりの異名。

えぞ-らいてう　蝦夷雷鳥　（名）【動】えぞやまどり（蝦夷山鳥）の異名。

えぞ-わかめ　蝦夷若布　（名）【植】ちがいその異名。

えぞ-われもかう　（名）【植】薔薇科、地榆（ワレモカウ）屬の多年生草本。地榆の一變種。北海道に產す。からいとさう。

えぞ-をぐるま　蝦夷小車　（名）【植】菊科、ぎをん屬の多年生草本。莖の高さ五寸乃至三尺、單一にして枝無し。葉は長橢圓狀倒卵形、銳頭又は鈍頭、深き又は細き齒牙を具へ、毛茸密生す。花は黃色にして、頭狀花序に排列し、花序は又數多てしほまつ。まつはだ。

えぞ-まんてま　（名）【植】石竹科、むしとりなでしこ屬の多年生草本。莖の高さ尺餘、上部の各節下に粘液を分泌する處あり。葉は披針形、銳尖頭なり。夏日、白色の花を開き、聚繖花序に排列す。我が國、北海道の海濱に自生す。

えぞ-みたはさ　（名）【植】千屈菜（ミソハギ）科、千屈菜屬の多年生草本。甚だ千屈菜に似たれども、萼筒に毛茸を生じ、全形はやや小なるが如し。

えぞ-むらさき　（名）【植】菊科、黃瓜菜（ヲニアザミ）屬の草本。葉は直立す。葉は披針形全緣、又は齒牙銳尖頭、葉脚心臟形をなし莖を抱き、葉柄無し。夏季、藍紫色の花を開き、頭狀花序に排列し、花序は總狀に集合す。我が國、北海道の原野に自生す。

えぞ-やなぎ　蝦夷柳　（名）【植】楊柳科、柳（ヤナギ）屬の落葉灌木又は喬木。幹の高さ一二丈、枝條やや紫色を帶び、芽大なり。葉は狹橢圓形又は線狀披針形、銳尖頭にして細鋸齒を有し、裏面白色を帶び、托葉あり。花は單性、雌雄同株、葇荑花序に排列し、初春葉に先だちて開く。我が國、北海道の原野に自生す。

えぞ-やまどり　蝦夷山鳥　（名）【動】鳥類中、雞類の一種。大さ鳩大にして、嘴は雉子の如し。上面は複雜なる斑紋を呈し、純白・灰白・茶褐・黑等の諸色を混ず。尾羽の中央の二枚は全く鷹狀なれども、其の他は末端白く黑帶あり。翼の風切は茶褐色にて、其の外緣は白茶色なり。下面は類白色にて、數多の黑色と暗褐色との斑點あり。脛は下端に至るまで白色の羽毛を被り、趾は裸出す。眼上の肉冠は、雌にありては甚だ小なり。我が國、北海道に產す。保護鳥の一なり。えぞらいてう。

えぞ-やまざきしょうま　（名）【植】薔薇科、やまざきしょうま屬の多年生草本。莖は高さ二尺許り。葉は三回羽狀複葉、各小葉は長橢圓形又は長卵形にして、著しき鋸齒あり。花は復總狀花序に密生し、黃白色にして細小なり。

えぞ-ゆづりは　蝦夷讓葉　（名）【植】ちやぼゆづりはの異名。

えぞ-ゆり　蝦夷百合　（名）【植】くろゆりの異名。

えぞ-らいてう　蝦夷雷鳥　（名）【動】えぞやまどり（蝦夷山鳥）の異名。

えぞ-わかめ　蝦夷若布　（名）【植】ちがいその異名。

えぞ-われもかう　（名）【植】薔薇科、地榆（ワレモカウ）屬の多年生草本。地榆の一變種。北海道に產す。からいとさう。

えぞ-をぐるま　蝦夷小車　（名）【植】菊科、ぎをん屬の多年生草本。莖の高さ五寸乃至三尺、單一にして枝無し。葉は長橢圓狀倒卵形、銳頭又は鈍頭、深き又は細き齒牙を具へ、毛茸密生す。花は黃色にして、頭狀花序に排列し、花序は又數多

えだ　枝　（名）一【植】皮芽の發育せるもの、卽ち、莖の側出部。記下「わが造げのぼりし、ありをのはりの木の延陀（エダ）」和名抄「枝條。玉篇云、枝柯（エダ）木之別也」末遊雜記「本より分かれ出でたるもの。分派。」拾遺集「ましてかすがの杉むらに、いまだ枯れたるえだはあらじ」名義抄「條（エダ）」

えだ　きる　かぜ　枝切風　枝を吹き切るばかりのはげしき風。山家集「山櫻えだきる風のなごりなく、花をさながら我がものにする」

えだ　もせ　枝狹　枝に無せばきほど。夫木「山がつのすとがたかぬ枝、枝もせに夕顏なれり、すがひすがひに」

えだ　わかれ　せぬき　れんりのえだ（連理枝）に同じ。れんり（連理）の條を見よ。六帖「君もあれも生まれはかへで今だにも、えだわかれせぬ木ともなりたん」

えだ　を　かはす　交枝　前條に同じ。れんり（連理）の條を見よ。源氏物語「はねをならべ、枝をかはさんと契らせ給ひしに」

（諺）枝も動かず　世の治まりて、太平なるにたとふ。月詣集「玉柳枝もうごかぬ君が代に、なびくや風のしるしなるらん」

（諺）枝を撓めて花を散らす　一部分の缺點を直さんとして、却つて全體を傷ふに譬ふ。八犬傳「たとひ緣運等を除くとも、主君を敵に擊たしては、枝を撓めて花を散らし、角を砍つて牛を殺すといふ諺語にだも劣りたり」

（諺）枝を鳴らさず　枝も動かずに同じ。

榮華(榮耳)氷解く風もゆるく吹きて枝をならさず」西京雜記「太平世、則風不ㇾ鳴ㇾ條、雨不ㇾ破ㇾ塊」

えだ　肢　(名)　(體躯の枝の義)手又は足。え(肢)。和名「肢體。野王案、肢(又本作擘)奈太」今川大雙紙「馬御目に掛くる事。馬を引き立てむかうに立て、兩方に輪をして、しさらせてえだを揃へ」

えだ　枝　(助數)　〔一〕古へ、木の枝につけたる贈物を數ふる語。源氏(若菜)「きじ一えだ來らせ給ふ」同上(若菜)「こもの、よそえだ」大和物語「捧げ物、一えだ・二えだせさせて」〔二〕柄などのつきたる長き物を數ふる語。

えだ-あぶぎ　枝扇　(名)　木(樹)(笠)ある枝を、扇のやうに手に持つことなるべし。枕「稍の木のはるかに高きが(中略)もとより打ちきりて、定證僧都のえだあぶぎにせさせばや」

えだいこ　柄太鼓　(名)　柄の附きたる太鼓。

えだう　錠道　(名)　えんだう(錠道)に同じ。(醍醐寺本)

えだうぐ　得道具　(名)　えもの(得物)に同じ。得意の道具。孕常磐「銀のづく打ったる鎧の枠拔げ、これは源氏の大將鎭西八郎爲朝が得道具」

えだうち　枝打　(名)　樹木に手入れするため、下枝を打ち伐ること。

えだうち-あをのり　枝打青海苔　(名)　【植】綠色藻類。乾苔(ノリ)屬の海藻。體は綠色絲狀、中空、單一或ひは側枝を生じて分岐し、生長するに從ひ膜質となる。我が國、各地の淺海に自生す。

えだうち-わおみざさ　枝打縮笹　(名)　【植】禾本科、萩(ヤナギ)屬の多年生草本。莖の高さ一二尺、横臥する性ありて、各節より根を下生す。葉は披針形、縮皺あり。花は四つ五つ岐せる穗狀花序に排列し、長き芒ありて夏季開く。我が國、沖繩に產す。

えだうち-ふくじゅさう　枝打木宮齒　(名)　【植】毛茛科、附金鳳草(ツボクサ)屬の草本。葉は多裂し、葉は枝を分かつ。二月頃、枝端に一箇の黃色なる花を開く。

えだうち-ほんぐうしだ　枝打木宮齒朶　(名)　【植】水龍骨科、烏韭(ヒカゲノカヅラ)屬の多年生草本。短き黑褐色の根莖を有し、之より葉を叢生す。葉柄は長く細くして硬直、又は少しく彎曲し、平滑なり。葉身は線狀披針形にして、一回羽狀複葉なし、各小葉は菱狀扇形・半月形或ひは菱狀楕圓形、鈍頭、全緣又は鈍齒を有す。子囊群は小葉の葉先緣に並列し一線をなす。我が國、沖繩・臺灣・小笠原島等に自生す。

えだ-うつり　枝移　(名)　枝より枝に移ること。後撰夏「こがくれてさつき待つとも子規、はねならはしに枝うつりせよ」

えだ-えだ　枝枝　(名)　〔一〕多くの草木の枝。「この枝、この枝。天智紀「橘はおのが曳多曳多なれれども、玉にぬくときおや亡緒にぬく」〔二〕親族。子孫。連枝。榮華(榮耳)「えだえだ榮え出でさせ給ふを、春日の神も心ゆかせ給ひてや」

えだ-おとり　枝劣　(名)　〔一〕木の、幹より枝の劣りたること。〔二〕父祖より、子孫の劣りたること。宇津保(藤原)「もと見れば高きかつらも今日よりや、えだおとりすと人のいふらん」

えだ-がき　枝柿　(名)　〔一〕枝につきたるまま、折りたる柿の實。〔二〕くしがき(串柿)に同じ。白柿。嘉禎二年大饗次第「居菓子、蘇・甘栗・枝柿」

えだ-がは　支川　枝川　(名)　本流の川より分流して流るる川。支流。草根集「波にふす萩の下はふ枝川の、みどりも花の色ぞこうつろふ」

えだ-がみ　支神　枝神　(名)　本社に附隨して祭る社。末社の神。儀式帳「枝神」

えだ-き　枝木　(名)　木の枝の部分。宇津保(藤原)「山木の下には風ははやくとも、えだ木はつゆもすくなとぞ思ふ」

えだ-ぎく　枝菊　(名)　紋所の名。

えだ-ぐり　枝栗　(名)　枝につきて居る栗の實。夫木(雜)「えだ栗のしぶるしぶるもわが方に、むけるを見るぞゑむここちする」

えだ-ざし　枝差　(名)　草木の枝のさし出てたるさま。枝の形。えだぶり。宇津保(藤原)「えだざしをかしう、めづらかなる木ども」枕「あすはひの木(中略)枝ざしなどの、いと手ふれにくげに荒荒しけれど」

えだ-さんごじゅ　枝珊瑚樹　(名)　樹の枝の狀をなしたる珊瑚。大織冠「寶のなる枝珊瑚樹十本」

えだ-した　枝下　(名)　最も下なる枝より、根元までの長さ。

えだ-しゃくとり　枝尺蠖　(名)　【動】昆蟲類中、鱗翅類の一種、中形の蛾類。翅は灰黑にて、前翅に二箇、後翅に一箇の黑條あり。幼蟲は灰褐若しくは灰白色にして、小さき黑紋並列せり。桑樹を害すること甚し。本邦、到る處に產す。

(りとくやしだえ)

えだ-じろ　枝城　(名)　根城の外に築きたる出城。

えだ-すみ　枝炭　(名)　蹈鞴の小枝を燒きて製したる炭。又くぬぎの小枝をも用ふ。茶家にて、池田炭に加へて爐火の用とす。これに胡粉・石灰を塗りたるを白炭(ビヤウ)といひ、塗らざるを山色(ヤマイロ)といふ。和泉國横山より多く產するより横山炭ともいふ。

えだ-たちばな　枝橘　(名)　紋所の名。たちばな(橘)を見よ。

えだ-たち　役　(名)　〔一〕えだつこと。課役。夫役。徭役。徭。崇神紀「科(ホセ)調役(ヨエノエダチ)」萬(ヨロヅ)「だむをちやしかもないひそ、てこら我が課役(ヨエノエダチ)はたらば、なれもなからかむ」〔二〕軍。戰役。神武紀「是役(ヨエノエダチ)也、天皇志存(ココロザシ)必克」

えだ-たつ　役　(自動)　記「爲(ヨエノエダチ)役(ヨエノエダチ)之堤池」而作」百濟池」

えだ-つき　枝附　(名)　えだざし(枝差)に同じ。えだぶり。

えだつき-ほたん　枝附牡丹　(名)　紋所の名。

えだ-つたひ　枝傳　(名)　此の枝より彼の枝を傳ひて移り行くこと。類城鳥原蛙合戰「塀に辟きし片枝は天の敎(中略)枝傳ひにと思ひ込んだる植込みに」

えだ-づめ　支爪　(名)　脚の爪。盛衰記(巻十九、俊佐)「商人馬なれば、肢爪堅くしてなづまざりけり」

えだ-て　柄立　(名)　傘などの柄を立つるため插し込む筒。牛の角の大きなるをくりぬきて作り、又革にても作る。

えだて-がは　柄立革　(名)　前條を見よ。雜兵物語「柄立革へつっぱめて持つべえ」

えだ-ながれ　枝流　(名)　しりう(支流)に同じ。

えだな　なんてん　枝南天　(名)　紋所の名。

えだ-の-がう　支郷　(名)　附屬の郷。東鑑(八、文治四年十二月十七日)「相模國大藏支郷」

えだ-の-はな　枝花　(名)　しんわう(親王)の異稱。(醍醐寺本)

えだ-の-ゆき　枝雪　(名)　〔支那晉の孫康の、雪の光にて書を讀みたる故事による〕學窓の燈。源少「世界の榮華にみたはぶれ給ふべき御身をもちて、窓の螢をむつび、枝の雪を馴らし給ふ志の、すぐれたるさまを」

えだは　枝葉　(名)　〔一〕枝と葉と。新六帖「しらかしの枝葉おしなみ雪ふれど、馴れたる山は道もまよはず」〔二〕本筋にあらぬこと。末。しえふ(枝葉)。「議論が枝葉になる」

えだ-ふね　枝船　(名)　大船に從ふ小舟。供舟(ムカヒブネ)(大船を本船(ヤカタ)といふ對)

えだ-ぶり　枝振　(名)　えだざし(枝差)に同じ。聖德太子繪傳記(醍醐寺本)「木立・枝ぶり、つりもよく」

えだ-ほね　枝骨　(名)　手足の骨。丹波與作「枝骨もいでくれうと立ち上がれば」

えだ-まめ　枝豆　(名)　莢(サヤ)のまま枝につきたる大豆の稱。ゆでて中の實を食ふ。奴師勞之「夏の頃、枝豆をありきながら喰ふは、明和の頃、三つまたに築き出しの新堀出來し時よりなり」〔一〕本道より分かれたる路。よこみち。小徑。〔二〕本筋を離れたること。えだは。枝葉。「議論がえだみちに入る」

えだ-やしろ　支社　枝社　(名)　しや(支社)に同じ。賀古教信七墓廻(巻五、總)「日本國中の八百萬の枝社」

えたり-かしこし　得賢　(句)　我が望む所にうまく出合ひたり。思ふつぼにはまる。鎌田兵衛名所盃「寄手、源平色めく所を、爲朝得たり賢しと、さし取り引取り雨の如く」

えたり-がほ　得顏　(名)　得意なる顏つき。「したりがほ。今鏡「隆方かうまつりて侍らんなど、えたりがほにいひけるを」

えたり-や　(感)　思ふつぼにはまりたる意を表はす語。しめたり。著聞「をどりかかりていだきてけり。すなはち、えたりや、えたりやと大聲を出だす時」

えたりや-おお　(感)　心得て受けとむる時、又うまくしとめたる時、發する聲。今昔「ひたと抱きつきて音を高くあげて、えたりやおうといひて、脇とおぼしき所に刀を鐔口まで突きたてつ」保元(平治方下分)「ひるむところを、得たりやおおと、十騎の兵、轡を並べて馳けたりければ」

えだる　柄樽　(名)　柄の、兩角の如く上に出でたる朱塗の樽。匣の中に納れて酒を贈る時などに用ふ。つのだる。天野樽。人形樽。

えだ-をり　枝折　(名)　枝を折ること。新六帖「ふるさとの花橘の枝をりに、かたみおぼゆる一むかしかな」

えだ-をれ　枝折　(名)　枝の折れたること。折れたる枝。

えち-もの　(名)　容貌のみ飾りて、精神柔弱なるもの。甲陽軍鑑(三、三番に、えちなどと申すは、小袖・諸道具をもいつくしくばかり思案して、女の好むやうに仕り、微若なる奴をえち者とて、何の役にも立たぬ臆病者にて、甘に餘り、冊に成りてもよき事なく、恥をはぢとも思はず」

えちゅーど　(英 Etude)　【音樂】奏樂の練習の爲めに作れる曲。

えちる-あるこーる　エチルアルコール　(英 Ethyl Alcohol)　【化】C_2H_5OH 無色にして特有の臭ある液體。味ひ燒くが如く、流動し易し。比重は攝氏零度に於いて〇・八〇六。沸騰點は七八度。凝固點は零下一三〇度にて水と任意の割合に混ず。光輝弱き焰を發して燃ゆ。燃料・溶媒等として多く使用す。馬鈴薯を原料として製し、又糖類の醱酵によりて生ず。諸酒類の主成分なり。あるこーる。

えちる-えーてる　エチルエーテル　(英 Ethyl ether)　(名)　【化】C_2H_5O えーてる(三)に同じ。

えちれん　エチレン　(英 Ethylene)　(名)　【化】C_2H_4 あるこーる・と濃硫酸との混合物を熱して生ずる、無色可燃性の氣體。燈用瓦斯中に混在し、燈をして光輝を保たしむ。鹽素を加ふれば油狀の液體を生ずるを以て、一に生油氣(ユユキ)ともいふ。

えつ　悅　(名)　喜ぶこと。うれしがること。機嫌よきこと。悅喜。「えつにいる」

えつ　一閱　著書・詩文などを檢閱すること。「閱を請ふ」　梁昭明太子文「鑑閱六經、汎濫百氏」

えつ　一謁　えっけん(謁見)に同じ。「謁を賜ふ」

えっ　(感)　えい(曳)に同じ。やい。狂言(鬼瓦)「そこ立ってうせう、えっ。はっ」

えっ-つき　役調　(名)　古語。えだち(役)と、みつぎ(調)と。欽明紀「脫(ヌ)籍免(ヌ)課(ヨエノエダチ)者衆」

えっ-つき　柄附　(名)　柄の附きて居ること。國姓爺「柄附の鏡取り出だし、月に映ろふ父の顏、鏡の面に近近とうつし取って」

えっ-き　一悅喜　うれしくよろこぶこと。よろこび。喜悅。悅。諸藝(中略)「父が悅喜此のことなりしに」

えっ-き　嘔吐　(名)　えづくこと。はきけ。嘔吐。

えっ-さす　越幾斯　(名)　えくすす(越幾斯)に同じ。

えっ-さす　(英 X)　(名)　〔一〕あるふぁぐっとの一。未知數の代りに用ふる符號。〔二〕未知數又は未知の事物。

えっ-さす-くわうせん　X光線　(名)　えっさすはうさんせん(X放散線)に同じ。

えっ-さす-さい　越幾斯劑　(名)　えくすにしたる藥劑。

えっ-さす-せん　X線　(名)　【理】次條の略。

えっ-さす-はうさんせん　X放散線　(名)　【理】くるーくす管内にて放電するとき、管内より發出する一種の放散線。次の特性を有す。(イ)目には見えず。(ロ)普通光線に對し、不透明なる物體を透明ならしむ。(ハ)普通の寫眞種板を感ぜしむ。(ニ)普通光線の如く、屈折・分極することなし。(ホ)或る物體に螢光を放たしむ。(ヘ)之を受くる瓦斯體をして、電氣の導體たらしむ。以上の特性を應用して封包物を檢し、又は醫術上、人體内を檢診す。X光線。X幅射線。

えっ-さす-ふくしゃせん　X幅射線　(名)　【理】前條に同じ。

えづく　嘔吐　(自動)　はく。へどつく。もどす。

えっ-けん　一謁見　貴人又は目上の人の目の前へ出づること。まみゆること。まみえ。謁。曹文晦詩「貧來休謁見、謁見多逐客」

えっ-けん　一閱檢　けんえつ(檢閱)に同じ。閱。

えっ-さい　一悅哉　(名)　【動】猛禽類、たか科に屬する鳥。鷹の一種。ひよどりの大さにて、よく小鳥を捕食するもの。す

ずめだか。　和名抄「唐韵云、鮆[魚偏]、鮆[魚偏]、小魚也」

えっさっさ-ぶし　(名)　安政五年、大阪にて流行せし小唄の一種。

えっさら-おっさら　(副)　驟け行くさまにいふ語。御苦勞にも。わざわざ。浮世風呂「お辨當が遲いと宿まで取りに參りますはな。さうして、えっさらおっさら、お師匠樣へ持ってってたべます」

えっ-しゃ　一　謁者　(名)　一とりつぎ。まうしつぎ。漢書[百官公卿表]「謁者、掌賓讚受事」　二　謁を求むる者。

えつた-むぎ　(名)　【植】みのごめ(丙草)の異名。

えっつう　(名)　えっとうに同じ。

えっつづみ　兄鼓　(名)　おほつづみ(大鼓)に同じ。(弟鼓[ツヅミ]の對)

えっづつみ　荏裏　(名)　食物の名。荏[エゴ]の葉に裹みたるもの。今の紫蘇巻[マキ]の類。[倭訓栞]　一說、澁納豆の類にて、瓜・茄子などを入れて作りたるもの。大膳職式下「餐瓜糟漬、瓜荏裏、各一顆」　江次第[十四節]「造酒居[廿]廿糟・荏裏・甘子・橘等」

えっと　(副)　やっとに同じ。[物類呼稱]

えっとう　(名)　つりながし[釣流]ぶね(釣流船)に同じ。

えっ-ぷく　一悅服　心から、悅びて服從すること。　書經[武成]「大賚于四海、而萬姓悅服」

えっ-ぺい　一閲兵　軍隊を整列せしめて檢閲すること。　觀兵。

えっぺい-しき　一閲兵式　(名)　軍隊を整列せしめ、閲兵官其の前を通過して檢閲する式。分列式に先だちて行ふ。　觀兵式。

えつ-らん　一閲覽　しらべ　みること。檢閲。

えつり　棧　(名)　一　茅屋の椽の上に並べて、葺下地としたる竹簀。綱にて絡ひ、蘆・蓑[ミノ]・小竹[ササ]など用ふ。瓦屋・板屋にもいふ。顯宗紀「蘆葦[重編]、[資治通鑑]」　建・樓[編字]　二　次條に同じ。

えつり-だけ　棧竹　(名)　茶屋などに用ふる、木と竹とをかはるがはるまぜて架したる化粧棧[ケサウザン]。えつり。

えつり-れき　一閲歷　月日を經[フ]ること。經歷。　舊唐書[叶蕃]「發兵以助、閲歷三旬」

えって　得手　(名)　一　最も得意なること。其の事に巧みなること。又、その物。　二　「動」さる(猿)の異名。(さるの、去るに通ずるを忌みていふ)　三　戸のさるかぎ。枝[ツヱ]。

(諺)得手に帆　次條の略。槍權三[ニ]得手にほふ昇恪氣、瞋恚のいかり綱きれて」

(諺)得手に帆を揚げる　得意の場合に、なほ調子にのるに譬ふ。

えって　得　(副)　とかくあり得ることで。ともすれば。ややもすれば。よく。[大藏狂言[鼓]]「此のやうな事をば、えて例にしたがるものぢや」

えって-かって　得手勝手　(名)　他を顧みず、我が意に任せてなすこと。わがまま。堀河波鼓[ニ]「お看もない酒なれば、飲んであげるが御馳走と、得手勝手よりかへ銚子」

えって-さち　得手吉　(名)　一　得意なること。有りがちなること。えてもの。　二　なんこん(男根)の異名。

えって-ぐそく　得手具足　(名)　得意の武具。えだうぐ。富樫記「政親の得手具足、藤右馬尉が打ったる白柄の長刀、柄も六尺、身も六尺あり」

えって-は　(副)　えて(得)に同じ。ややもすれば。膝栗毛[ニ]「こんな所へ來ても、えては喰ひ逃げをして、ぶちのめされるもんだ」

えって-もの　得手物　(名)　一　最も得意とするもの。雪女五枚羽子板[ニ]「殿はな、小鼓の、やり、得て物」　膝栗毛[十]「女中方をころころと面白がらせることが、えて物でござりやす」　二　えて(得手)[ニ]に同じ。

えてる　得手　(自動)　得手にてあり。巧者なり。熟練なり。得て居る。

えっ-と　干支　(名)　〔兄弟[ケイテイ]にて、其の關係兄弟の如き義と〕陰陽家の語。十干と十二支とを順次に配合したる甲子[キノエネ]・乙丑[キノトウシ]等の六十配の稱。之を年・月・日等に當てて用ひ、六十回を以て一週す。じっかん(十干)及びじふに し(十二支)を見よ。かんし(干支)。

えっ-と　江戸　(名)　一　むさし(六指)をいふ。相模・上總の方言。[物類呼稱]　二　えどぶし(江戸節)の略。　三　えどかんばん(江戸看板)の略。

えど-あかざ　(名)　【植】あかざ(藜)の異名。

えど-あきなひ　江戸商　(名)　商品を江戸へ持ち來てあきなひをなすこと。江戸に出でてあきなひをすること。博多小女郎波枕[ニ]「江戸あきなひ閉だるく、佐夜の中山、無間の鐘撞きあてた福福長者」

えど-あぶぎ　江戸扇　(名)　蕉摺にしたる扇に、白く濯を畫きたるもの。[編年記]　東日記「波淺し石はしる濯江戸扇」

えど-いちづけ　江戸一漬　(名)　ひやくいちづけ(百一漬)に同じ。

えど-うた　江戸唄　(名)　江戸の座唄及び長唄の稱。京阪にていふ語。

えど-うちば　江戸團扇　(名)　江戸にて製りたる團扇。白紙貼・墨繪・紅繪・漆塗等種種あり。

えど-う-ひしぐひ　(名)　【動】ひしくひの一種。嘴と脚とは黒色にして、眼上に淡白色の條あるもの。

えど-かのこ　江戸鹿子　(名)　一　こだいふかのこ(小太夫鹿子)をいふ。京阪の方言。　二　棹物菓子の一種。紫と白との原料を卷きて棒の如くにし、それを小口切にしたるもの。

えど-がは　江戸川　(名)　次條の略。

えど-がはながみ　江戸川紙　(名)　紙の一種。東京市小石川瓜の江戸川にて製するもの。えどがは。

えど-がはら　江戸瓦　(名)　長屋に用ふる屋根瓦。

えど-がらう　江戸家老　(名)　昔時、大名の江戸づめの家老。

えど-がらし　(名)　【植】しろがらし(白芥)の異名。

えど-かんばん　江戸看板　(名)　劇場の看板の一。上部に庵の形なきもの。えど。

えど-きく　江戸菊　(名)　【植】さつまぎく(絮菊)の異名。

えど-きゃはん　江戸脚絆　(名)　現今普通の脚絆。表は紺のめくら縞、裏はあさぎ木綿にて作りたるもの。

えど-こばん　江戸小判　(名)　けいちやうえどざこばんきん(慶長江戸座小判金)の異名。金銀圖錄[ニ]「慶長中、大久保長安等より、甲州松木へ與ふ古文書に、其の元之金子、碁石にてまね判多く候間、のし金に江戸小判の如く可仕由御意に候と見えたれば、當時江戸小判とも云ひしにや」

えど-ざ　江戸座　(名)　俳諧の一派。榎本其角の流。

えど-さくら　江戸櫻　(名)　【植】よしのざくら(吉野櫻)の異名。賀古教信七墓廻[ニ]「武藏に神田江戸櫻」

えど-さ-こばん　江戸座小判　(名)　江戸幕府が、江戸にて鑄造せし小判金。即ち、慶長江戸座小判・元祿江戸座小判の類。

えど-さらさ　江戸更紗　(名)　江戸にて染めたるさらさ。

えど-じゃうるり　江戸淨瑠璃　(名)　江戸に起こりたる淨瑠璃節[ブシ](京阪のものの對)

えど-じゅんれい　江戸順禮　(名)　江戸の富家の婦女又は茶屋の女など、衣裳に伊達をつくし、順禮の姿して市中の寺巡りすること。

えど-すがかき　江戸清搔　(名)　すがかき(清搔)をいふ。京阪の方言。

えど-すけ　江戸助　(名)　人の盃を助[ヨ]けて殘らず飲みほし、又一杯に酌みてかへすこと。[物類呼稱]

えど-そめ　江戸染　(名)　江戸にて染むること。又、その物。(京染などの對)柳樽「江戸ぞめは一反價千金なり」

えど-たで　江戸蓼　(名)　【植】蓼[タデ]の科、蓼屬の一年生草本。かはたでに似て、葉は基部より著しく分岐し紫色を帶ぶ。葉は披針形にして密生す。花は一寸許りにて、穗狀花序に排列す。本邦、各地に產す。あさぶたで。

えど-っこ　江戸兒　(名)　江戸生れの者。

えど-づま　江戸褄　(名)　次條の略。

えど-づまもやう　江戸褄模樣　(名)　「もと、江戸幕府の大奧より創まりたればいふ。」後身には無くて、衽と前身との裏・表へ附けたる縫模樣。

えど-づめ　江戸詰　(名)　江戸に出でて、勤務すること。丹波與作[ニ]「情なや、父樣が江戸詰めの山谷通ひ、大事の所を仕損ひ」

えど-てんまやく　江戸傳馬役　(名)　江戸城内の諸物の運搬に從事する職掌。

えど-ところ　(名)　【植】おにどころ(山草藨)の異名。

えど-とも　江戸供　(名)　江戸に參る供。堀河波鼓[ニ]「礫邊床右衞門は病氣とて、江戸供免され在國せしが」

えど-な　江戸菜　(名)　【植】からしな(芥)の異名。

えど-なまり　江戸訛　(名)　江戸風の、ことばの訛り。

えど-に　江戸煮　(名)　章魚[タコ]を一寸ばかりに切り、酒を等分にして久しく煮たるもの。半に醬油・酢を加ふれば柔かになるといふ。[調味]

えど-にしきゑ　江戸錦繪　(名)　えどゑ(江戸繪)に同じ。

えど-はらひ　江戸拂　(名)　江戸時代の刑罰の一種。江戸市中より追放すること。

えど-ばん　江戸判　(名)　けいちやうえどざこばんきん(慶長江戸座小判金)の異稱。本朝寶貨通用事略「慶長六年の後に、大判・小判・丁銀・豆板等の制定まる。駿河判・江戸判などといふは、皆皆造られしを以て稱す」

えど-ばんこ　江戸萬古　(名)　萬古燒の一種。天明年中、江戸小梅にて製出せしもの。むさしばんこ。

えど-ふう　江戸風　(名)　一　江戸の流儀。江戸前。　二　うきよふう(浮世風)に同じ。しやれふう。

えど-ぶし　江戸節　(名)　俗曲の一種。江戸半大夫の創作にて、大薩摩節の分れ。半大夫節。楠無益委記「江戸ぶしもまだまだひくしと、高くとまって神樂・俗馬樂をうたふ」

えど-ぶらう　(名)　【植】いんげんまめ(菜豆)の異名。

えど-ほほづき　江戸酸醬　(名)　色の勝れて赤きほほづき。

えど-まちどしより　江戸町年寄　(名)　町奉行の下にありて、江戸市町に關する政令の傳達其の他一切の事を掌るもの。御役所。

えど-まちぶぎゃう　江戸町奉行　(名)　江戸幕府の職名。老中の支配に屬し、江戸市内の行政・司法・警察に關する一切の事を掌るもの。寺社奉行・勘定奉行と相並びて三奉行の一とす。

えど-まへ　江戸前　(名)　江戸の流儀。江戸風。膝栗毛[ニ]「江戸前の魚のうまみに、豐島屋の鉛菱」

えど-まんざい　江戸萬歲　(名)　明治以前、江戸に居りし萬歲(三河萬歲などの對)

えど-みそ　江戸味噌　(名)　東京にて製る味噌。あまみそ(甘舍味噌の對)

えど-むらさき　江戸紫　(名)　江戸にて染むる紫の染色。藍がちの紫色。

(諺)江戸紫に京鹿子　東西京の染色の名物を並べあげたる語。

えど-もとゆひ　江戸元結　(名)　江戸より製出する元結。長町女腹切[ニ]「はれ、好い男の。江戸元結に縞子髮、天窗つきは兩替町」

えど-もの　江戸者　(名)　江戸の者。えどっこ。柳樽「江戸者で無けりやお玉が痛がらず」

(諺)江戸者の梨を食ふやう　氣象淡泊なる江戸人の梨を食ふ如く、さくさくとして物事の遲滯せざる譬へ。

えども　江戸桃　(名)　【植】げんべいたう(日月桃)の異名。

えど-ゆぶね　江戸湯船　(名)　昔時、江戸にありし湯船。

えどりはの-つき　得鳥羽月　(名)　陰曆四月の異名。藏玉「藤の花夏にかかれる奥山の、下にやまたんえとりはの月」

えどろふ-うみすずめ　擇捉海雀　(名)　【動】鳥類中、游禽類の一種。體色、背面は黑色にして、頭部の側面・頸・喉及び腹面は黑灰色なり。額には長くして弧狀に前曲せる暗褐色の毛冠を有し、頰部には淺き白色部あり。脚は藍灰色を呈し、全長大凡八九寸に達す。本邦、千島朔島より北太平洋沿岸に亘りて產す。

えど-ゑ　江戸繪　(名)　美麗なる一枚摺の彩色繪。もと菱川師宣より起こる。勝川流・歌川流の派あり。勝川流は宮川長春を祖とし、歌川流は西村豐春より起こる。にしきゑ。えどにしきゑ。

えな　胞衣　(名)　胎兒を包める膜、及び胎盤などの總稱。え。はらい(胞衣)。名義抄「胞衣[エナ]」

えな-が　柄長　(名)　【動】鳥類中、燕雀類に屬する小鳥。尾は體軀の長さを超ゆ。額より頭上は純白、其の兩側即ち眼上より後方に伸延して黑色部あり。背は黑と淡紫赤色とを交じへ、頭以下下面は白色、腹部に至りて淡紫赤色を帶ぶ。翼は全羽黑色、又は一部白色、尾羽は中部の四枚は黑く、外側の三枚は多少白色部あり。我が國、本土の各地に產す。禁止鳥の一。えびしやく。まつさがり。

(がなえ)

えな-がたな　胞衣刀　(名)　えなを切

るに用ふる竹刀。

えながたなーつつみ 胞衣刀包 (名) 折形の名目。

えなが-ひさご 柄長杓 (名) 長き柄を籐にて卷きたる柄杓。柄口の金物にとぢがねを打ち、越後布一幅にて柄を卷く。路次にて水を飲まんとする時、此の布にて水を漉さんためなり。鎌倉年中行事「二番目の御力者、柄長抄(ヒサゴ)を持つ」

(みつつなたがなえ)

えなが-ひしゃく 柄長柄杓 (名) 柄の長き柄杓。えながひさご。

えなさ 胞衣著 (名) 宮參りの時、小兒の産衣(ウブ)の上に著せしむる衣類。

えなつぼ 胞衣壺 (名) えなをけ(胞衣桶)に同じ。

えな-まき (名) かます(叭)をいふ。肥前國鳥屋の方言。(物類呼稱 Kinnaro)

えなめる (英 Enamel colours) (名) はふらう(韮郎)に同じ。

えなめる-からー (英 Enamel colours) (名) 色油に種種の彩料をまぜたる裝飾用の塗料。それを塗抹したる表面は、浴かにして光澤あり。

えなめる-ぺーんと (英 Enamel-paint) (名) 乾燥性油にして、樹脂及び顔料より成れる光澤ある塗料。光澤ぺーんと。

えな-らず (句) 言ふにいはれず。えもいはれず。一通りならず。拾遺(曇)「あしねはふうきはうへこそつれなけれ、下はえならず思ふ心を」源(曇)「琴のねも月もえならぬ宿ながら、つれなき人をひきやとめける」

えな-をけ 胞衣桶 (名) 中古、胞衣を納れて土中に埋むる曲輪(ヒ)もの。外面を胡粉にて塗り、雲母(ヒ)にて松・竹・鶴・亀などを畫く。凡そ高さ八寸、廣さ七寸ありといふ。おしをけ(押桶)。

えな-をさめ 胞衣納 (名) 産後、吉日・吉方を擇び、胞衣を壺に入れて土中に藏むる儀式。

えに 縁 (名) 〔絲(ヒ)の字音の轉〕ゆかり。えん。縁故。「歌に多く江にかけていふ」勢語「秋かけていひしながらもあらなくに、木の葉ふりしくえにこそありけれ」後撰(曇)「水鳥のはかなきあとに年をへて、通ふばかりのえにこそありけれ」

えに-し 縁 (名) えに(縁)に、しの助詞をそへたる語。轉じて縁と同義として用ふ。勢語「かち人の渡れと濡れぬえにしあれば」後撰(曇)「深緑そめけん松のえにしあらば、薄き紬にも浪はよせてん」更科日記「さきに上總介にて下だれしえにしあれば、かみつふさに行く」新續古今(曇)「世間かけて深くぞたのむ、住の江のえにしありつる神につかへて」

えにした 金雀兒 (名) 〔植〕豆科、金雀兒屬の常綠灌木。幹の高さ四五尺乃至丈餘。枝は叢生し深綠色を呈す。葉は退化し極めて小なり。三小葉より成る複葉上部に至れば一小葉のみとなることあり。各小葉は倒卵形全緣なり。初夏、美しき黄金色の蝶形花を葉腋に一二箇づつ開く。歐洲の原産にして、我が國、各地の庭園に栽培し觀賞せらる。

えにす 縁 (名) えにし(縁)の訛り。狂言(鷺)「のりの漆のえにちあれば、ふたたび閑浮に歸るなり」

えぬのこ-ぐさ (名) 〔植〕えのころぐさ(狗尾草)の異名。

えねるぎー (英 Energy) (名) 〔理〕仕事を爲し得べき勢力。其の量は爲し得べき仕事の量を以て量る。宇宙に於けるえねるぎーの總量は一定不變のものにして、一物より他物に移り、又は其の狀態を變ずることあれども、新たに創成せられ又は消滅することなきものとす。〔事〕事を爲す元氣。精力。

えの-あぶら 荏油 (名) 荏胡麻(ヒ)の子(ミ)より取りたる油。桐油紙・雨傘などを塗るに用ふ。七十一番歌合「えの油が足らぬげなし」

えの-かす 荏糟 (名) 荏の油を取りたるあとの滓。

えの-き 朴樹 (名) 〔植〕楡科、朴樹屬の落葉喬木。幹の高さ三四丈、徑數尺に達す。葉は楕圓形、鋭頭、葉脚は圓形又はほぼ心臓形をなし、葉先に近き葉緣に鋸齒を有す。初夏、淡綠色の花を開き、雜性にして複總狀花序に排列し、基部にある花は雄花、中軸部にある花は兩性花なり。果實は小豆大、赤黄色にして甘味あり。鳥類の啄む所なり。我が國、各地の山野に自生す。材は種種の用に供せらる。え。めむくのき。よのき。宇鏡「榎(衣乃)」朴(崇神紀)

えの-ぐさ (名) 〔植〕大戴科、えのきぐさ屬の一年生草本。莖の高さ一尺許り、單一なり。葉は楕圓形、鋭頭、鋸齒ありてやや朴樹(ヒ)に似たり。花は單性、雌雄同株、七八月頃、葉腋に生ぜる花軸上に、淡褐色の雌雄花を著け、大形の苞を以て包擁すること恰かも綸笠を著けたるに似たり。我が國、到る處の畦畔・路傍に自生す。あみがささう。えのきさう。

えのき-さう (名) 〔植〕前條の異名。

えのき-たけ (名) 〔植〕擬子菌類、褶菌屬の菌類。朴樹(ヒ)・柳等の幹に叢りて寄生す。傘部は黄褐色なり。食用とすべし。我が國、各地に產す。

えの-ご 痙 (名) 胶のつけ根、又は腋の下の膿れ痛む疾。いぬこ。いのご。

えのこ-ぐさ (名) 〔植〕えのころぐさ(狗尾草)の異名。貞應三年百首「えのこぐさおのがころころほに出でて、秋おく露のたまやどるらん」

えのこ-ほ (名) 〔植〕前條に同じ。

えのころ 犬兒 (名) いぬころ(犬兒)の訛り。狂言(成上物)「えのころが親犬になりあがります」

えのころ-ぐさ 狗尾草 (名) 〔植〕禾本科、粟(ヒ)屬の一年生草本。莖の高さ一二尺、枝を分かつ。葉は平滑、長披針形、葉鞘また平滑なり。夏日、淡綠色の花を複總狀花序に密生し、全花序の外形一二寸の圓柱狀を爲す。果實は秋に至りて熟し、稍稗(ヒ)に似たり。我が國、各地の原野に自生す。いぬこぐさ。えねのこぐさ。えのこぐさ。

えのころ-なげ 狗兒投 (名) 柔術の語。いぬころを投げるが如く、たやすく人を投ぐること。

えのころ-やなぎ (名) 〔植〕ねこやなぎの異名。

えの-じ エ字 (名) 〔片假名のエの字の形に似たればいふ〕釜を提げて上げおろす木。(物言集覽)

えのしま-に 江島煮 (名) 〔相模國江島にてする煮方の義〕料理の語。うしほに(潮)煮に同じ。

えのみ-ごせう (名) 〔植〕こせう(胡椒)の異名。

えの-やまひ 疫病 (名) えやみ(疫病)に同じ。やくびやう。え。崇神紀「國内多く疾疫(ヤマヒ)ありて民有死亡者、且大半矣」

えはう 吉方 恵方 (名) としとくじん(歳德神)を見よ。江次第(十四日節會御祭)「用御門吉方、御祓吉方」

えはう-だな 吉方棚 (名) 歳德神を

祭る神棚。夕霧阿波鳴渡「吉方棚・神の棚」

えはう-まわり 吉方參 (名) 年の始めに、吉方の方角にあたれる神社に參詣して、年中の福德を祈ること。夕霧阿波鳴渡「天滿とやらの神明樣へ吉方參り」

えーはち 一衣鉢 (名) 〔え(衣)は袈裟、はち(鉢)は僧の食器〕〔佛〕佛家にて、始祖の袈裟と鉢とを相傳受して、法統を繼ぐ者の信とすること。傳統。謠(殺生石)「然らば衣鉢を授くべし」傳燈錄、池州使君問(五祖)曰、會中有五百僧、不傳衣鉢、爲甚邪附與盧行者」〔〕受け傳はりたる學問・技藝の奥義。見聞錄「范質擧進士、主司和凝愛其才、以第十三登第、謂賀曰、君文宜冠多士、旭居十三者、欲君傳老夫衣鉢爾」

えーはつ 一衣鉢 (名) 前條に同じ。

えーばり (名) えばること。

えーばる (自動) いばるに同じ。

えび 蟹 (名) 〔動〕板鰓類に屬する魚。種類多けれども、孰れも體縱扁にして胸鰭大なるが爲め、圓扁狀をなす。大なるものは方六尺に達し、五對の鰓孔は腹面に開く。海底に住し、專ら貝類・甲殼類等を食とす。卵生のものと胎生のものとあり。あかえび・ぶんぎえび・とびえび・しびれえび等の種類あり。えぶた。〔和名抄〕魚部(魚鳴)「鰕(袁比似)・鰕(同)青、長鼻骨者也」〔〕陽魚・鰭甲魚・鮑魚(本草和名)「鰕(袁比)香(名)」

えーび 袁衣香 (名) 香の名。栴檀の樹皮を採り、春き飾ひて製したるものなりといふ。えびかう。和名抄「袁衣香(袁比云)」宇津保(俊蔭)「えび・丁子、かなうすにいれてつかせ給ふ」源(花宴)「えびの香、いとなつかしうかをり出でて」花鳥餘情「香字抄云、採栴檀樹葉皮春飾爲香、故云葉皮

えび 蝦 鰕 海老 (名) 〔動〕甲殼類中、長尾類の總稱。其の種類多しと雖も、體は頭胸部及び腹部に分かれ、頭胸部は一大甲を以て蔽はる。前端には一對の複眼と二對の觸角とを有す。口の周圍には一對の大顎、二對の小顎、三對の顎足あり。五對の步足を具へ、腹部は七節の可動環節より成り、其の各節に橈脚を生ず。呼吸器は頭胸部の步足の基部に存し、甲に蔽はれて見えず。これを鰓といふ。この類は孰れも卵生にて、概ね發生中に變態す。いせえび・くるまえび・しばえび・あかえび・もえび・さくらえび・ぬまえび等は其の主要なるものなり。うみのおい。うみのおきな。かいらう。和名抄「鰕(袁比)・海鷄魚(俗名海老)」〔〕えびもの異名。〔〕「堀は廣くて水深し、門は高くてえびさしたり」〔〕わげ(髻)をいふ。伊勢國の方言。(物類呼稱)〔〕紋所の名。えびのまる・ちがひえび・むかひえび・等種種あり。

(ちがひえび　むかひえび　えびのまる　いびえ)

えび の ふねもり 蝦船盛 鮒のなまずをかはらけに高盛りにして、その上に小海老を盛りたる料理。(貞丈雜記) 文祿三年卯月八日加賀之中納言殿へ御成之記「かばやき・つみいり・えびふなもり」

えび の やう 蝦樣 寒さの爲めに、手足の赤くなるさま。宇津保(俊蔭)「小さき子の深き雪をわけて、足・手は蝦のやうにて走り來る」

(謠)蝦て鯛釣る 與ふる所少なくして、得る所多きに譬ふ。

(謠)蝦の鯛まじり 雜魚のととまじりに同じ。ざこ(雜魚)の條を見よ。

えび (名) 〔〕ぶだう(葡萄)の異名。〔〕〔植〕えびつる(蔓)の異名。神代紀「上」蒲陶(ヒ)

えび-いばら (名) 〔植〕さるとりいばら(菝葜)の異名。

えび-いろ 蝦色 (名) いせえびの生なる色。即ち、紺の赤みを帶びたるもの。

えび-いろ 葡萄色 (名) 葡萄染(ヒ)の色。

えび-かう 袁衣香 (名) えび(袁衣香)に同じ。源(初音)「火桶に侍從をくゆらかし、物ごとにしめたるに、えびかうのかのまがへる、いと艷なり」

えび-かすがひ 蝦鎹 (名) 蝦の形に曲がりたるかすがひ。

えび-かづら (名) 〔〕〔植〕すひかづら(忍冬)の異名。和名抄「紫葛(衣比加豆須賀)」〔〕〔植〕やまぶだう(紫葛)の異名。和名抄「紫葛(衣比加豆須賀)」〔〕びたんかづらの類にて、髮をつくろふものなるべし。(俗語考) 一說、髻にて入髮すること。(謠曲集) 源(初音)「えびかづらしてぞ、つくろひ給ふべき」

えび-かづら-いちご (名) 〔植〕うらじろいちごの異名。

えび-がに 蝦蟹 (名) 〔動〕さりがに(蝤蛑)の異名。

えび-がら-いちご (名) 〔植〕うらじろいちごの異名。

えび-がら-しだ (名) 〔植〕水龍骨科、ひめうらじろ屬の多年生草本。根莖を有す。葉は叢生し、葉柄は長く細くして硬く且つ平滑にて、黑褐色を帶ぶ。葉身は卵狀長楕圓形、三出羽狀複葉、各小葉は披針狀三角形、また羽狀に深裂し、各裂片は線狀長楕圓形なり。子囊群は小にして圓形なり。我が國、九州・臺灣に自生す。

えび-がら-すずめ (名) 〔動〕昆蟲類中、鱗翅類の一種。中形の蛾。腹部に赤色の輪紋ありて恰も蝦の腹部を見るが如く、口吻頗る長し。幼蟲は甘藷(ヒ)・蓼花(ヒ)・朝顔等の葉を食す。

えび-くさ (名) 〔植〕〔〕えびもの異名。〔〕いぶきとらのを(拳參)の異名。

えび-こうりゃう 蝦虹梁 (名) 彎曲せる虹梁。本柱と向拜柱(ハラハシ)とを間の連結に用ひらるるもの。形蝦の如きよりいふか。

えび-ごし 蝦腰 (名) 老人などの、蝦の如く曲がりたる腰。

えび-こほろぎ (名) 〔動〕おかまこほろぎ(蟋蟀)の異名。

えび-さらめん 蝦索麵 (名) 蝦の科理の一。蝦の肉を搗り、鼻漉して索麵の如くし、これに味をつけたるもの。

えびさく-もち 蝦作餅 (名) 江戸南鍋町えびや作兵衛が製せし餅菓(菓子)。

えび-ざこ 蝦雜魚 (名) 小蝦の中に小魚の雜じりたるもの。

えび-さやまき 蝦鞘卷 (名) 刀の鞘を、蝦の殼の如く刻み目をつけて、朱塗にしたるもの。酌並記「ひきめ下緒の事。うらじろ屬の多年生草本。根莖を有す。葉は叢生し、葉柄は長く細くして硬く且つ平滑にて、黑褐色を帶ぶ。葉身は卵狀長楕圓形、三出羽狀複葉、各小葉は披針狀三角形、また羽狀に深裂し、各裂片は線狀長楕圓形なり。子囊群は小にして圓形なり。我が國、九州・臺灣に自生す。

(うらじろこびえ)

是れは必ずえびさや卷にさげたる也」

えび-じゃらぶ 蝦上蔦（名）小兒の戯れ。蝦の目を頭とし、紙の衣裳をきせ、びいなにつくること。えびぢよらう。俳諧三物「うら白や海老上蔦のしたがさね」

えびしゃく 柄柄杓（名）【動】えなが（柄長）の異名。

えび-じゃこ 蝦雑魚（名）えびざこ（蝦雑魚）の訛り。東京語。

えびす 夷（名）（えみしの轉）[一]えみし（蝦夷）に同じ。月清集「わが思ふ人だに住まば、みちのくのえびすの里もうときものかは」[二]邊鄙の未開の民の稱。猛惡なる民。宇津保（藤原俊蔭）「天上の吉祥天女もたるものの、えびすなりともわが宮をばとおぼしつつ」榮華（月物語）「かかることはえびす・町めなどこそいへ、あさましう心うき事をいひ出でて」[三]あらあらしき武者。武人。徒然草「法師は兵の道をたて、えびすは弓引くすべ知らず」[四]未開の外國人。戎狄。蟹寺「敏達紀「毛人（えびす）」諸書「もろこしは、心なきえびすの國と聞きつるに」

えびす 恵比須 夷（名）蛭子（えびす）の神の稱なりといふ。七福神の一にて、其の像、風折烏帽子に狩衣・指貫を著けて、鯛を釣り上げたる狀をなす。商家の神として祭る。夷（えびす）三郎。「慶田社歌合「世を救ふえびすの神のちかひには、もらさじものを、數ならぬ身も」

（諺）恵比須が鯛釣りしやう　容貌の極めて寡ばしげなる譬へ。

えびす-あふぎ 恵比須扇（名）年の始めの祝ひに用ふる扇。伊勢國山田より製出す。伊勢音頭二見眞砂「今宵ぞうれし顔と顔、笑ふにあうたる掛鯛の、えびす扇の千代かけて」

えびす-うた 夷歌（名）未開の民のよむ歌。猶き歌。小夜のねざめ「日本紀・萬葉集などは、いまだ假名もなかりし世のえびす歌、國國の遠談とて、賤しき民の言葉をひろひ集めたるものなれば、よみとく事だにも難かりしを」

えびす-かき 恵比須舁（名）昔、撫津國西の宮のえびす神社のほとりに居て、人形を操りたるもの。東海道名所記「淨瑠璃は、其の頃京の次郎兵衛とかや云ふもの、後に淡路の亟と受領せし西の宮のえびすかきをかたらひ、四條河原にして、鎌田の政清が事を語りて人形をあやつり」

えびす-がけ 夷懸（名）[一]仮方此方へ、折線の形にやりちがへたること。夫木「わがごとは奥のこほりのえびすがけ、とにもかくにも引きちがへつつ」[二]裏袴（ばかま）の股立の處にかがりたる絲の名。三條裝束抄「股立有一夷懸絲（えびがけいと）」

えびす-がひ 夷貝（名）【動】軟體動物。腹足類の一種。馬蹄螺（ばていら）科に屬す。殼は大さ六七分、螺層及び底面眼れ、臍孔無し。體層大にして、周緣に鈍角の栗白交互の一狹帶を繞らし、螺肋は美にして、淡黄褐色に栗色の不明なる斑紋あり。我が國、中部の海中に產す。

えびす-がほ 恵比須顔（名）恵比須神の像に似たる顔。龥相なる顔。長町女腹切「お寺ならば大黑、愛ではわっさり、恵比須顔して見せましや」

えびす-がみ 恵比須紙（名）紙を重ねて裁ったるもの。つとき、角の折れこみて裁ち殘りたるもの。ゆがみて見にくき故、忌みてえびすと祝したるなり。一說に、十月は諸神みな出雲國へ行き給ふに、夷神のみ殘る故、かみのたち殘りといふ意にていへり。（嬉遊笑覽）寛永發句帳「書きぞめやまづ心よきえびす紙」　五元集「えびす紙かけとり帳の三枚目」

えびすぎれ 恵比須切（名）呉服屋にて、恵比須講の時賣るよせぎれ。

えびす-ぐさ 決明（名）【植】豆科、山蔦豆（ケツメイシ）屬の一年生草本。莖の高さ三尺、多くは單一なり。葉は羽狀複葉、各小葉は倒卵形、鈍頭または微凸頭なり。夏日、深紅色の花を葉腋に二箇又は一箇開き、果實は線形の莢なり。我が國、各地に栽培せらる。えびすぐすり。けつめい。和名抄「決明（久佐）」茯苓（字鏡）

えびす-ぐさ 夷草（名）【植】[一]しゃくやく（芍藥）の異名。[二]われもかう（地楡）の異名。

えびす-ぐすり 夷薬（名）【植】[一]えびすぐさ（決明）の異名。[二]しゃくやく（芍藥）の異名。和名抄「芍藥（衣比須久須利）、芍藥（久須利）」

えびす-すくび 蝦掬（名）さての一種。蝦をすくひとる器。

えびす-こう 恵比須講（名）陰曆十月廿日に、商家にて行ふ恵比須神の祭。往時は正月十日、江戸にては廿日）と、十月廿日との二度行へり。えびすまつり。

えびす-どころ 夷心（名）未開の民のあらあらしき心。物のあはれを知らぬ心。夢語「女限りなくめでたしと思へど、さるさがなきえびすごころを見ては、いかがはせんは」

えびす-どころも 戎衣（名）（戎衣の字の直譯）よろひ（鎧）をいふ。書經の武成篇に、一戎衣天下大定と有るより出づ。小島口號「朝衣の人はなくて、えびすごろもとかやの姿、めづらしき事なり」

えびす-さぶらう 夷三郎（名）えびす（恵比須）の異名。盛衰記（九中略）「彼の岳には夷三郎殿と申す神を祝ひ奉り、岩殿と名附けたり」

えびす-すがた 夷姿（名）えびすごろもを著たるすがた。小島口號「羅大納言今出川宰相中將などは、なほえびす姿にて、行幸には供奉せず。御とまりどまりに出參りあひける」

えびす-ぜに 恵比須錢（名）[一]古錢の一。[二]金を分配する時、殘りたる端錢。

えびす-ぜん 夷膳（名）膳の側面を向けて、人の前にすうること。禮ならずとて忌む。えびすをじき。

えびす-だな 夷棚（名）若夷神（ワカエビス）のある神棚。雅楽酔狂集「釣揚年玉「若夷樂（ニヤエビス）」

えびす-だひ 夷鯛（名）【動】[一]魚類中、硬骨類の一種。體形まだひに類し、扁平にして高し。全體灰褐色を呈し、腹部色なる部あり。鰓に不規則なる斑を見る。眼甚だ大なり。本邦、沿海に產す。いしばりだひ。[二]まつかさうを（松毬魚）の異名。

えびす-ね 夷根（名）【植】われもかう（地楡）の異名。和名抄「地楡、一名、玉鼓（阿波文太郎）、一子黑似鼓、故以名之」

えびす-は 恵比須齒（名）大黑齒とならびてある大なる齒の稱。（動）鮨の一種。肩に節を有し、首甚だ小なるもの。かたいかり。

えびす-ぶな 夷鮒（名）えびすこう（恵比須講）に同じ。

えびす-まつり 恵比須祭（名）えびすこう（恵比須講）に同じ。

えびす-まはし 恵比須廻（名）傀儡師の一種。春の初め、撫津國西の宮より出で、夷三郎の姿をまねびて舞ひ歩くもの。滑稽なる所作をなして、家の繁榮を祈る。

えびすめ （名）【植】まこんぶ（昆布）の異名。本草和名「昆布（衣比須奈）」

えびすめく （自動）夷（えびす）の如く見ゆ。田舍人の風にてあり。源東屋「えびすめきたる人をのみ見ならひて、少將をかしこきものに思ひけるを」

えびすやまび 夷病（名）咳氣の出づる病。明月記（寛喜三年三月廿七日）「近日咳病、世俗稱夷病」

えびすゆみ 夷弓（名）（外國より渡來の弓か。顧定東鑑（建久元年十月廿九日）「弓二張（蝦夷合和弓）、箭（蝦夷征箭）」　太平記（巻三十後）「黑革の腹卷に、夷弓持ちて」

えびすれんが 夷連歌（名）狂體の連歌。えみし連歌。

えびすをじき 夷折敷（名）えびすぜん（夷膳）に同じ。寛永發句帳「さくらの鯛すゆるはえびす折敷かな」しかたばなし「出家あり中略お大黑と並ばせられてござるほどに、えびすをじきにすうるというた」

えびすをたたらぐるいくさのさみ 征夷大將軍（名）（征夷大將軍）に同じ。

えびす-をとこ 夷男（名）えびす心の男。あらあらしき男。日本武尊吾妻鑑「七尺有餘の夷男」

えび-ぜめ 蝦責（名）江戸時代に行はれし拷問の一。兩手を背にさせ、あぐらをかきたるまま體を曲げさせて、頷と足とを密著する樣に縛ること。

えび-そめ 葡萄染（名）[一]染色の名。薄紫色。[二]綾色の名。經は紅、緯は薄紫。一說、表は蘇芳、裏は花田。（枕花　春翠）　宇津保（藤原蔭）「えびぞめの綺の直衣きて」

えび-そろ （名）【植】えびつる（蝦蔓）の異名。

えび-ちゃ 葡萄茶（名）[一]濃き赤の、黑みあるもの。[二]えびちやばかま（葡萄茶袴）の略。女學生。「えびちや仲間」

えび-ちゃう 蝦錠（名）[一]門扉の貫木に著くる、鐵棒の彎曲したるもの。貫木錠掴んでえいやっとこぢ放し、八つの鐵鎖を捻ぢ切り捻ぢ切り」「[二]なんきんぢやう（南京錠）に同じ。

えびちゃ-しぶ 葡萄茶式部（名）（えびちや袴をつけたるよりいふ。一きぶは紫式部などの名にちなむ）ぢよがくせい（女學生）の異稱。

えびちゃ-はかま 葡萄茶袴（名）[一]葡萄茶の色したる袴。おもに女學生の用ふるもの。[二]ぢよがくせい（女學生）の異稱。葡萄茶式部。葡萄茶。

えび-ぢょらう 蝦女郎（名）えびじやうらふ（蝦上蔦）に同じ。

えびつり-うた 蝦釣唄（名）蝦を釣る時うたふ俚歌。浦島年代記「道道開いた海老釣り唄」

えび-づる 蘡薁（名）【植】葡萄（ブドウ）科、葡萄屬の多年生草本。蔓性灌木樣の草本にして、他物に攀絲す。葉は心臟形、三乃至五裂し、不等の齒牙を具ふ。裏面には綿樣毛密生し、淡褐色を呈す。七月頃、淡黄色の花を開き、複總狀花序に排列し、基脚に往往卷鬚を有す。果實は黑色の小漿果なり。我が國、各地の山野に自生す。食ふべし。いく。いぬえび。いぬぶだう。いぼおとし。うまのぶす。えびぞろ。かまえび。くさぶだう。こいひ。どよき。どよみ。

（るづびえ）

えび-で 蝦手（名）南蠻陶器の一種。耳に蝦の形ある水さし。或ひはその形なきもあり。

えび-と 江人（名）古昔、御厨子所の膳部の下に屬して、御用の魚類などを捕る役。

えび-どう 蝦胴（名）鎧の胴を、蝦の殼の如くに刻み目をつけて、朱塗にしたるもの。

えび-ね （名）【植】蘭科、えびね屬の多年生草本。根莖は節多くほぼ蝦の脊に似たり。冠春新芽を生ず。莖は長短一ならず。葉は莖端に叢生し、大なる長橢圓形にして全緣なり。花莖は五月頃葉間より、葉の未だ十分開展せざるに先だちて抽出し、數花を總狀に著く。色は帶紫色・白色其の他種種あり。我が國、各地の山地に自生すれども、又園圃に栽培し觀賞用に供せらる。

（ねびえ）

えび-の-さ （名）【植】ねむのき（合歡）の異名。

えび-の-まる 蝦丸（名）紋所の名。えび（蝦）の丸を見よ。

えび-みみ 蝦耳（名）南蠻陶器えびでを模して造りたる佛前燒の陶器。

えび-むし 蝦蟲（名）【動】やまめ（水蕨）の異名。

えーひめ 兒姫（名）古語。第一のむすめ。長女（おとひめの對）皇極紀「長女（エヒ）」

えび-も （名）【植】眼子菜（ヒルムシロ）科、眼子菜屬の多年生草本。水中に生じ、水流に從ひて、莖の長さ五六尺に及び、多く分枝し、やや扁平なり。葉は沈生して薄く、線形又は線狀長橢圓形、鈍頭、細鋸齒を有し、葉緣波狀に皺曲す。夏日、淡紅色の花を開き、穗狀花序に排列して葉腋より抽出す。我が國、各地の細流に自生す。

えびら 箙（名）[一]矢を入れて藏を作らしむる器。和名抄「箙簿、俗名苑云、箙作（ヤナグイ）」[二]箙（ヤナグイ）より轉じたるもの。制により、逆頼（ヤナグイ）・箙・竹（ヤナグイ）・箙（ヤナグイ）・革箙・柳箙・指（ヤナグイ）箙等の名あり。爲忠百首「えびらには菖蒲やさしくさしそへて、左のまゆみ今日やひくらん」

（ちびえ）

えびら-がたな 箙刀（名）箙の中に藏する短刀の稱。幸若舞曲「鉢慶」「ゆうて、今度は菜が死に番に當たって候と申しもあへず中略えびら刀・びかき刀」

えびら-ごし 箙腰（名）箙を腰につけたること。

えびら-しだ 箙羊齒（名）【植】水龍骨科、えびらしだ屬の多年生草本。根莖は細く多く分枝し、淡褐色の鱗片を以て被はる。葉柄は蹼生し、細長一尺に達し、平滑なり。其の先端、葉身に接する處に關節を有し、葉身と互ひに角度を爲す。葉身は質柔かにして薄く、三角形又は披針狀三角形、羽狀に深裂し、各裂片亦羽狀に深裂す。子囊群は葉身の全裏面に散布し、橢圓形にして大小不同なり。我が國、各地の深山に

自生す。くらさはしだ。

えびら-はぎ (名) 【植】しながはぎ(草零陵香)の異名。

えびら-ふぢ (名) 【植】豆科、藤豆(ヒラフジ)屬の多年生草本。莖の高さ一二尺、ほぼ三稜形なり。葉は偶數羽狀複葉、先端は細く軟かなる刺に終はり、托葉を有し、各小葉は披針形なり。夏季、濃紅色の花を開き、穗狀花序に排列し、各花序は葉腋に生ず。我が國、各地の山中溪間に自生す。

えび-を 蝦尾 海老尾 (名) 【一】琵琶の名所。びは(琵琶)を見よ。宗吾大雙紙「琵琶を人に參らするには中略琵琶をあをのけて、海老尾の方を左になるやうにすべし」【二】三味線の名所。さみせん(三味線)を見よ。【三】鵜金魚(ヤマメ)の一種。其の尾蝦に似たるもの。

えび-をり 蝦折 (名) 蝦の形したる男子の結髮。俳書皮籠摺「えびをりの襟にかくるる紙子かな」

えふ 一葉 (名) 【一】【植】は(葉)に同じ。【二】荷物に附けし荷主の名札。【三】曲線相會して尖りたる角をなしたる所。窩の紋の外廓のくひこみの類。いばら。徒然草「閑院殿の櫛形の穴は、丸くふちもなくて、ぞ有りし中略是れはえふの入りて、木にてふちをしたりければ、あやまりにてなほされにけり」

えふ 一葉 (助數) 紙などの如き、薄きものを數ふる語。枚。「紙一葉」

えふ-ぶ 厭舞 (名) えんぶ(厭舞)の約。

えふ-ぶ 閲浮 (名) えんぶだい(閲浮提)に同じ。

えふぶのみ 閲浮身 俗世界の身。凡俗の身。古今長歌「降る雪のけなげはぬべく思へども、えふぶの身なれば猶やまず思ひは深し」續千載長歌「えふぶの身なれいはずさうぞかせて」源明石「えもいはぬ入江の水など、繪にかかば心の至り少なからん」【二】いふぶに足らず。榮華巻玉「えもいはぬものまで涙を流して、觀音觀音と申きぬなく」

えも いひしら ず よく言ひ盡べられず(善惡に通じていふ)。

えもぎ (名) 【植】よもぎ(艾)の訛り。(言)狂言(形)「からえもぎが、いかいことおぢやる」

えもし 一女字 (名) 【動】【一】えび(蝦)をいふ、女詞。【二】えび(鰕)をいふ、宮女の詞。

えもにんぎゃう (名) えもんにんぎゃう(衣紋人形)の訛り。

えもの 得物 (名) 【一】獵り又漁りにて捕り獲たる物。雪玉集「知らじかしただいたづらに狩人の、熊にもあらぬえものありとも」【二】己れが得意に使ふ武器。えだうぐ。用明天皇職人鑑「五人が五人にわけわかって、得物、得物に渡り合ひ」【三】最も得意とするもの。えてもの。

えもり 柄漏 (名) 傘の柄の上部より、雨の漏ること。

えもん 一衣紋 (名) 【一】裝束を整へて著用すること。裝束著用の式。今鏡「大將どのは、ことの外にえもんをぞ好み給ひて」海人藻芥「鳥羽院の御時より强き裝束を用ふるゆゑ、衣紋の沙汰出來するなり」衣文。【二】著物のえりを胸にて合はせたる處。

えもんか 一衣紋家 (名) 裝束の制度・著用の事を掌る家。

えもんかがみ 衣紋鏡 (名) えもんを結ぶに用ふる鏡。すがたみ。犬子集「天人の衣紋鏡か空の月」

連絡す。

えふ-へん 一葉片 (名) 【植】えふしん(葉身)に同じ。

えふ-みゃく 一葉脈 (名) 【植】植物學上の用語。葉身の表面に見ゆる網狀或ひは縞狀の條にして、葉身の骨格をなすもの。梅・櫻の如く、網狀をなすものを網狀脈といひ、竹・稻の如く、縞狀をなすものを平行脈といふ。

えふり 杁 (名) 【一】土砂を均し、物を掻き集むるなどに用ふる具。柄長く、頭は橫板にて、齒なきを常とす。字鏡「杁【工夫】和名十五(爲)杁中略江東杷之無齒者爲杁杁(ヒキ)鈎(ヒキ)天」海道記「天の中川棹さしえねば、大いなるえふりを持ちて、橫ざまに水を掻きて渡る」【二】次條に同じ。

えふり-いた 杁板 (名) 【建築】塀又は出桁などの端を覆ふために著けたる化粧板。えぶり。

えふり-こ (名) 【植】菌類中、擔子菌類、えぶりこ屬の一種。莖は鱗片狀にして菌傘のみより成り、質堅く幹く、帶黃白色を呈し、主として落葉松・とどまつ等に寄生す。本邦、北海道其の他の寒地又は深山に產す。採り乾かして藥用に供し、熊の膽と同じき効果ありといふ。

えふ-りょく 一葉綠 (名) 【植】植物學上の用語。日光の作用に依り、葉綠粒中に生ずる綠色の色素。此は日光の作用を借りて、水及び炭酸より有機物を形成する機能を有す。葉綠質。葉綠素。

えふりょく-しつ 一葉綠質 (名) 【植】前條に同じ。

えふりょく-そ 一葉綠素 (名) 【植】前條に同じ。

えふりょく-たい 一葉綠體 (名) 【植】次條に同じ。

えふりょく-りふ 一葉綠粒 (名) 【植】植物學上の用語。葉綠を含める色素體。主として葉其の他植物の綠色なる部分の細胞中にあり。分裂に依り漸次增殖するが故に、若き細胞にては少なけれども、成長するに從ひて其の數を增加す。形は球形・楕圓形・卵形等を多しとす。葉綠體。

えふわん 一葉椀 (名) 古へ食物を盛りたる木の葉。

えべすす (名) えびす(惡比須)の訛り。(言)かた

えーへへ (感) 笑ふ聲。又作り笑ひする聲。堀河波話「あほんに、えへへえ、おはづかしやと會釋する」

えーへん (感) せきばらひする聲。狂言(主殿)「その馬のあとで咳ばらひをすれば、必ずとって出る中略落としてくれう、思ひついた、えへん、えへん」博多小女郎波枕「えへんえへん、今朝から風引き頭痛致す」

えーほうし 烏帽子 (名) えぼし(烏帽子)の延。

えほ-かくか 一衣鉢閣下 (名) 【一】(衣)は僧のころも、ほ(鉢)は僧の持つ鉢(ハチ)。僧侶に贈る書狀の宛名の傍に書く詞。

えーほし 烏帽子 (名) えぼし(烏帽子)に同じ。

えぼない-と (英 Ebonite) (名) 硫黃と護謨とに高熱を加へ、融和して造りたるもの。一見黑檀の如し。電氣の絕緣體なり。櫛・醫療器具等にも用ふ。えぼにっと。

えぼにっと (名) 前條に同じ。

えぼひ (名) えぼふこと。

えぼふ (自動四) いぼふの訛り。「灸がえぼふ」

えぼふ (名) 【植】ぶだう(葡萄)の異名。

えみし 蝦夷 (名) えぞえ(蝦夷)の古稱。神武紀「愛瀰詩(エミシ)を、ひたり、ももな人、人は云へども、たむかひもせず」景行紀「東夷之中有日高見國、其國人中略是總曰蝦夷(エミシ)」

えみし-れんか 蝦夷連歌 (名) えびすれんが(夷連歌)に同じ。

えみす 蝦夷 (名) えみし(蝦夷)に同じ。日本紀私紀「蝦夷(エミシ)」

えみゅー (英 Emu) (名) 【動】鳥類中、走禽類の一種。頗る鴕鳥に似たり。丈五尺乃至七尺許り。脚に三趾を具へ、頭部その他には長くして背上より兩側に懸垂する羽毛を生ずれども、胸部は裸出す。濠洲の產なり。

えむ M (名) 【英 Money の頭字を取りていふ】きんせん(金錢)の隱語。

えーむすめ 姉娘 (名) あねむすめ(おとむすめの對)。綴靖紀「事代主神之大女(オホ)也」

えめ-むし (名) 【動】わらむむし(草鞋蟲)の異名。類字鏡「蝦夷女本」

えめらるど (英 Emerald) (名) 【鑛】りょくぎょく(綠玉)に同じ。

えめらるど-りょく (英 Emerald green) (名) 砒石と綠青とを熱して濃厚液とし、等分に混じて放置する時沈澱する淺綠色の顏料。性劇毒なり。

えも (副) 【一】古語。淺はかにも。萬八十「懇ふといふは衣毛(エモ)名づけたり、云ふすべのたづきもなきはあが身なりけり」【二】よくも。ようも。拾遺長恨「世の中を思へばくるし、忘るればえも忘られず」

えも いは ず 【一】言ふにいはれず。えならず。宇津保祭使「舍人三十人、えもいはずさうぞかせて」源明石「えもいはぬ入江の水など、繪にかかば心の至り少なからん」【二】いふぶに足らず。榮華巻玉「えもいはぬものまで涙を流して、觀音觀音と申きぬなく」

えも いひしら ず よく言ひ盡べられず(善惡に通じていふ)。

えもぎ (名) 【植】よもぎ(艾)の訛り。(言)狂言(形)「からえもぎが、いかいことおぢやる」

えもし 一女字 (名) 【動】【一】えび(蝦)をいふ、女詞。【二】えび(鰕)をいふ、宮女の詞。

えもにんぎゃう (名) えもんにんぎゃう(衣紋人形)の訛り。

えもの 得物 (名) 【一】獵り又漁りにて捕り獲たる物。雪玉集「知らじかしただいたづらに狩人の、熊にもあらぬえものありとも」【二】己れが得意に使ふ武器。えだうぐ。用明天皇職人鑑「五人が五人にわけわかって、得物、得物に渡り合ひ」【三】最も得意とするもの。えてもの。

えもり 柄漏 (名) 傘の柄の上部より、雨の漏ること。

えもん 一衣紋 (名) 【一】裝束を整へて著用すること。裝束著用の式。今鏡「大將どのは、ことの外にえもんをぞ好み給ひて」海人藻芥「鳥羽院の御時より强き裝束を用ふるゆゑ、衣紋の沙汰出來するなり」衣文。【二】著物のえりを胸にて合はせたる處。

えもんか 一衣紋家 (名) 裝束の制度・著用の事を掌る家。

えもんかがみ 衣紋鏡 (名) えもんを結ぶに用ふる鏡。すがたみ。犬子集「天人の衣紋鏡か空の月」

えびら-はぎ (名) 【植】しながはぎ(草零陵香)の異名。

えびら-ふぢ (名) 【植】豆科、藤豆(ヒラフジ)屬の多年生草本。莖の高さ一二尺、ほぼ三稜形なり。葉は偶數羽狀複葉、先端は細く軟かなる刺に終はり、托葉を有し、各小葉は披針形なり。夏季、濃紅色の花を開き、穗狀花序に排列し、各花序は葉腋に生ず。我が國、各地の山中溪間に自生す。

えび-を 蝦尾 海老尾 (名) 【一】琵琶の名所。びは(琵琶)を見よ。宗吾大雙紙「琵琶を人に參らするには中略琵琶をあをのけて、海老尾の方を左になるやうにすべし」【二】三味線の名所。さみせん(三味線)を見よ。【三】鵜金魚(ヤマメ)の一種。其の尾蝦に似たるもの。

えび-をり 蝦折 (名) 蝦の形したる男子の結髮。俳書皮籠摺「えびをりの襟にかくるる紙子かな」

えふ 一葉 (名) 【一】【植】は(葉)に同じ。【二】荷物に附けし荷主の名札。【三】曲線相會して尖りたる角をなしたる所。窩の紋の外廓のくひこみの類。いばら。徒然草「閑院殿の櫛形の穴は、丸くふちもなくて、ぞ有りし中略是れはえふの入りて、木にてふちをしたりければ、あやまりにてなほされにけり」

えふ 一葉 (助數) 紙などの如き、薄きものを數ふる語。枚。「紙一葉」

えふ-ぶ 厭舞 (名) えんぶ(厭舞)の約。

えふ-ぶ 閲浮 (名) えんぶだい(閲浮提)に同じ。

えふぶのみ 閲浮身 俗世界の身。凡俗の身。古今長歌「降る雪のけなげはぬべく思へども、えふぶの身なれば猶やまず思ひは深し」續千載長歌「えふぶの身なれ

えふ-かう 一葉鋼 (名) 鋼を機械によりて薄く延ばし、その兩面に錫の鍍金を施したるもの。窯器等を製するに用ふ。

えふかん-たくえふ 一葉閒托葉 (名) 【植】植物學上の用語。對生葉の中間に生ずる托葉。

えふかん-たんだう 一葉閒膽道 (名) かんさいぼう(肝細胞)を見よ。

えふ-さゃく 一葉脚 (名) 【植】植物學上の用語。葉身の基脚。其の形狀に從ひ、心臟形 腎形 楕圓形 耳形 箭形 (くやきふえ)

えふくわ-さう (名) 【植】しきみ(樒)の異名。

えふ-けい 一葉形 (名) 【植】植物學上の用語。葉の全形。圖はその重なるもの。腎狀形 心臟形 楕圓形 倒卵形 針形 (いけふえ) 鍬形 鼓形 線形 (えふけい)

えふ-けつ 一葉月 (名) 陰曆六月の異名。節用「葉月」

えふ-こん 一葉痕 (名) 【植】植物學上の用語。葉の、莖又は枝より脫落したる痕。概ね滑かなり。

えふ-し 一葉子 (名) をりほん(折本)に同じ。

えふじゃうたい 一葉狀體 (名) 【植】へんけい(扁莖)の異名。

えふ-じょ 一葉序 (名) 【植】植物學上の用語。莖又は枝の表面上、或る葉の著點と、其の直上に位する葉の著點に至る間の各葉の著點とを通じて畫ける想像上の螺旋。

えふ-しん 一葉身 (名) 【植】植物學上の用語。葉の扁平に濶大し、かつ綠色なる部分。

えふ-しん 一葉針 (名) 【植】植物學上の用語。葉の一部又は全部の、針狀に變形したるもの。例へば、小蘗(ヤ)にては葉の全部數本の針に化し、柊(ヒイラギ)にては葉緣變形して針狀をなせる類。其の用は動物の食害を防ぐに在り。

えふ-せい 一葉聲 (名) 風などの、葉にあたる聲。諸葛孔明天元「風、葉聲を動かして山犬吠ゆ」

えふ-せう 一葉鞘 (名) 【植】植物學上の用語。禾科植物に見る變形せる托葉。二枚の托葉相癒合して管狀を成し、莖を包めるもの。

えふ-せん 一葉牋 (名) 五色の紙にて、木の葉のやうに作りたる詩箋。

えふ-せん 一葉先 (名) 【植】植物學上の用語。葉身の先端。其の形狀に數種あり。鋭頭 鈍頭 鋭尖頭 截頭 回頭 微凹頭 微凹頭 (んせふえ)

えふた (名) 【動】えび(鰕)の異名。

えふ-てい 一葉底 (名) 【植】えふきゃく(葉脚)に同じ。

えふ-てつ 一葉鐵 (名) 鐵を機械によりて薄くし、その兩面に錫の溶液を著せたるもの。各種の色を著けたるもあり。小匣類を製するに用ふ。

えーぶな 江鮒 (名) 【動】鯉(コイ)の幼なるもの。(精進)(異魚)一種つくろつぼゐの水のひく末に、えぶな集まる落ち合ひのはた」

えふ-にく 一葉肉 (名) 【植】植物學上の用語。葉身より葉脈を除ける總べての部分の稱。一體に柔膜細胞より成る。

えふ-へい 一葉柄 (名) 【植】植物學上の用語。葉の柄部。葉身と莖又は枝とを

えもん-かけ 衣紋掛 (名) いかう(衣桁)に同じ。みぞかけ。

えもん-さを 衣紋竿 (名) 衣裳をかくる竿。

えもん-たけ 衣紋竹 (名) 竹にて造れる衣紋かけ。

えもん-つき 衣紋附 (名) 衣服の著方。衣裳つき。えもんふう。博多小女郎波枕三「顔を見合はす荒男、俄かに嗜む衣紋つき」

えもん-ながし 衣紋流 (名) 鞠の曲の名。蹴たる鞠の勢にいふ。曾我會稽山(浄瑠璃)「駒の蹴上げの鞠子川、衣紋流しのああ曲もなや」

えもん-にんぎゃう 一衣紋人形 (名) 江戸時代、女のぬき衣紋の土人形。

えもん-ふう 一衣紋風 (名) えもんつき(衣紋附)に同じ。曾我會稽山三「二人の稚御、衣紋風よく著せ給へ」

えや (副) いかでか。えやは。源氏三「皆しもやにおろし侍りぬるを、えやまかりおりあへざらん」榮華(音楽)「この僧たちのさま姿も、ただかの靈山の法會に菩薩衆の參り集まり給ひけんも、かくはえやと見ゆ」

えやは (副) 前條に同じ。後撰(和歌)三「色ならばうつるばかりも染めてまし、思ふ心をえやは見せける」

えやみ 疫病 (名) 一流行の惡病。ときのけ。(え(疫)やみ)。やくびやう。崇神紀「國内多疾疫(イエヤミ)」(本民有死亡者)且大半矣」和名三「疫(エヤミ)疫癘(ヤクビヤウ)民皆病也」二おこり。わらはやみ。きやく(瘧)。和名三「瘧病(俗云ワラハヤミ)熱寒并作、二日一發之病也」

えやみ-くさ (名) 【植】一をけら(蒼朮)の異名。二りんだう(龍膽)の異名。本草和名三「龍膽(衣良乃美久佐)一名(龍加奈)」和名三「龍膽(衣良乃美久佐)一云(奈)味甘苦、故以膽爲名也」

えやみ-の-かみ 疫病神 (名) 疫病を司るといふ神。和名三「癘鬼(疫良乃美)」

え-よほろ 役丁 (名) 役(えだち)に出づる男丁。課役の人夫。仁德紀「役丁(エヨホロ)」(孝德紀)

えら 豪 (名) (えらしの略) 一えらきこと。仰山なること。えらさ。二高慢。五十年忌歌念佛三「廣い世界を、己れが口から世間手代の慣ひとは、えらが過ぎて聞き憎い」

えら 鰓 (名) 【動】水に溶けて存する空氣を呼吸する動物の呼吸器。其の構造は各類多少の相違あれども、大體は相同じ。即ち、海き柔き膜より成り、肺・氣管等の如く體の内部へ凹み込まず、反りて體外に突出すること多し。これ水は空氣より重く、これを運動せしむるには多大の努力を要するを以て、寧ろ鰓を水中に露出せしむれば、水流によりて、新鮮の空氣に觸れしむること容易なるによる。例へば、兩棲類の幼時、昆蟲類の水生幼蟲、甲殼類の橈足に存する鰓の如きこれなり。

えら 豪 (接頭) 【えらしの略】勝れたる、又大層・仰山なる意を表はす語。「えら驚き」「えらひどし」「えらもの」浮世風呂二「ゆふべはえら受けぢやげな」

えら-がる 豪 (自動ラ) 自らえらしと思ふ。自尊す。

えら-け 豪氣 (副) えらきやう。えらさう。

えら-こ 鰓蟲 (名) 【動】ほや(保夜)の異名。

えら-さ 豪 (名) えらくある度合。えらきさま。

えら 豪 (形) 一勝れてあり。非凡なり。二大層なり。仰山なり。澤山なり。甚し。浮世風呂三「えらう寒いな」

えらび 選擇 (名) 一えらぶこと。えりとること。選擇。源氏三「そもまことに、その方を取り出でんえらびに、必ず洩るまじきはいと難しや」二選らび集むること。編纂。撰。

えらび-て 選手 (名) 一えらぶ人。二せんじゃ(選者)に同じ。

えらー-ひどし 選 (形) いらひどしに同じ。

えらぶ 選擇 (他動ラ) 一多くの中より、見分けて抜きとる。える。えらむ。すぐる。えりすぐる。よりどりす。神代紀三「選(ヨラ)當遣於葦原中國者」萬三「家の子と選(ヨラ)給ひて、おほみことと戴きもちて」古今序「種種の歌をなんえらばせ給ひける」二選らび集む。編纂す。撰す。榮華(月宴)「萬葉集をえらばせ給ひ」三抜いて其の職に擧ぐ。

えらぶ-うなぎ 永良部鰻 (名) 【動】うみへび(海蛇)の異名。

えらぶ-た 鰓蓋 (名) 【動】動物學上の用語。硬骨魚類の後頭部兩側に見る片狀物。四箇の骨より成り、前端は頭骨に續き、後端は新月狀の遊離緣に終はれり。此の緣と體との間隙は即ち鰓孔にして、口腔に通ぜり。

えらぶほね (名) あこぼね。女殺油地獄三「やいちよこざいなげさい六、えら骨ひっかいてくれべえ」

えらみ 選擇 (名) えらむこと。えらび。

えらむ 選擇 (他動マ) えらぶ(選)に同じ。大藏狂言(文蔵)「相手組を定む。源氏の方には、岡崎の惡四郎が鎮子、眞田與市義定をえらむ」

えらん 榮蘭 (名) 【植】たこの木(露兜樹)の異名。

えらん-くわ 榮蘭科 (名) 【植】たこのきくわ(露兜樹科)の異名。

えらん-たい 一依蘭苔 (名) 【植】堀衣類、依蘭苔屬の樹枝狀地衣。體は樹枝狀、高さ二三寸、灰白色にして少しく綠色を帶び、枝の緣邊に毛狀の突起多し。我が國、諸國の高山に自生す。食用また藥用とす。いすらんどごけ(乙斯蘭土苔)。

えり 襟 (名) 一衣服の、頸を廻はりて前にて打ち交ふ部分の稱。ころもの くび。二うなじ(項)に同じ。えりくび。ぼんのくぼ。くびすぢ。三から一の一名。回上著・下著を重ねて、一つに前を合はすること。譬へば、三枚を一つに重ね合はするを三つえりといふ類。條條問書「三つえりに物を著候事。見・若衆などのえりをいろへて、うつくしく見せ候はえりに つく 附襟 權勢の人に諂ひ附く。利慾に奔り就く。えりもとにつく。永正狂歌合「さしたる垢はなくとも、布子のえりにつき侍らんと」曾我會稽山三「京の小四郎と云ふ種蒔はりの大惡人、慾に耽けり、襟に附き」

えり を みる 見襟 前條に同じ。

えり 鰓 (名) 川・湖などにて魚を捕らふる具。棕櫚繩にて編みたる竹の簀を水中に立て、細長く屈曲せしめて、魚を適當の場所に入らしめ、出づること難きやうに作りたるもの。近江國琵琶湖などにて多く用ふ。新六帖三「鮒のぼる溜江のえりの淺からず、人のしわざのなさけなの世や」

えり さす 鰓を構へて魚を捕る。曾丹集「ささき津にすがきさぼせり、春ごとにえりさす民がしわざならしも」

えり-あか 襟垢 (名) 襟につきたる垢。

えり-あし 領脚 (名) えりくびの毛のはえぎはの所。

えり-あて 襟當 (名) 襟の裏にあてて、衣服の汚れを防ぐ布片。我衣三「今はえりあてを賣る呉服屋もあり」

えり-あひ 襟合 (名) 馬の名所。胸前の下、兩脚の根の前。

えり-いだす 選出 (他動サ) えり分けて抜き取る。よりだす。

えり-いづ 選出 (他動下) 前條に同じ。源氏(帚木)「中の品のけしうはあらぬ、えりいでつゝきころほひなり」

えりいと-ぎぬ 選絲絹 (名) 古へ和泉國堺に、唐の織工來たりて、始めて織り出だせし絹といふ。堺鑑

えり-いはひ 襟祝 (名) たちいはひ(裁祝)に同じ。

えり-うち 選討 (名) 敵をえらびて、然るべきものを討ち取ること。平家四「縋り向かひて撰り討ちなども可い仕」

えり-うら 襟裏 (名) 襟の全部の裏に附くるきれ。うらえり。

えり-おしろい 襟白粉 (名) 女のえりくびにつくる白粉。

えり-かう (副) いちづ。(廣京僅)「えりかう に 行む」

えり-ごかり (名) よりかかり(寄掛)に同じ。

えり-かざり 襟飾 (名) 洋服を著けたる時、えりにつくるかざり。絹・繻珍・緞子等にて作る。ねっくたい。

えり-かた 襟肩 (名) 衣服の名所。前後のみどろの境目にて、襟のつきたる部分。浮世風呂三「解き物をする時、襟かたを引っ裂いた事と」

えり-がへ 襟替 (名) 雛妓が一人前の藝妓となる時、赤色の襦袢の襟を他の色に改むること。

えり-がみ 襟髮 (名) 頸のうしろの髮。

えり-がら 選殼 (名) えりくづ(選屑)に同じ。

えり-さらひ 選嫌 (名) 好むをえり取り、嫌ふを捨つること。すききらひ。えりこのみ。

えり-ざり 選斬 (名) えりとりて斬ること。唐船噺今國姓爺「軍兵の選り切りさせんと走り寄る」

えり-くづ 選屑 (名) えり取りたる後の殘物。えりから。よりのこり。宇津保(楼上)「身に餘りたる事したらん人ぞさはあらん、えりくづの人はなとて笑ふ」同(藤原)「つたなきが中にも、えりくづなるが侍るを」

えり-くび 襟頸 (名) うなじ(項)に同じ。えり。

えりくり-えんじよ (名) 出入・高低多き場所。當流小栗判官(毛利小栗鬼薊)「くるくるくる、えりくりえんじよの馬場の土手、乘り上げ乘り下げ乘りおろし」

えり-このみ 選好 (名) えりきらひ(選嫌)に同じ。

えり-さき 襟先 (名) 衣の襟の下の端の、腰の邊に當たる處。

えり-した 襟下 (名) 衣の襟先より捷(ツ)に至る間の稱。

えり-しめ 襟締 (名) 一しつけ針の一種。やや長く太きもの。二柔道の語。稽古著の襟又は手にて、相手の咽喉を締むること。

えり-しやう 襟章 (名) 陸軍各兵科各部の定色、また附屬聯隊の番號・數字などを襟に附して、識別を容易ならしむるもの。

えり-しん 襟心 (名) 著物の襟のしんに入るる布。

えり-すぐる 選擇 (他動ラ) 善き中にも最も善きもののみをえりて取る。えりにえりてすぐりとる。榮華(太平)「冷泉院の御領の所所多く侍りしも、この院にえりすぐりてしらせ給ひけり」

えり-すつ 選捨 (他動ナ) えりぬきて、殘れるを捨つ。榮華(太平)「御供に參る人人、隨身など、少しもかたくなしきは、えりすてさせ給ふ」

えり-たけ 襟丈 (名) 衣の一方の襟先より他方の襟先までの長さ。又背より襟先までの長さ。

えり-たぶさ 襟髻 (名) 襟もとのたぶさ。傾城反魂香三「道太が襟たぶさ、ひつ咥はへ打ちかたげ、くるりくるり」

えり-つき 襟附 (名) 一衣裳を重ねたる襟のやうす。えりもと。二重ね著たる上下の衣裳。狂言(鳴)「あしたのえりつきは、どうしたものであらうぞ」一代女「えりつき見立てらるるが口惜しい。木綿布子ではこそあれ、つぎの當たったを著たことは無い」

えり-とどまる 選止 (自動ラ) えり殘されて、あとにとどまる。榮華(衣笠)「さまざまいとあまた失ひ給ひて、ただ此のうへ一所えりとどまり給ひて」

えり-どり 選取 (名) えりとること。よりどり。

えり-とる 選取 (他動ラ) 多くの中より、好むものをえりて取る。よりとる。

えり-ぬき 選拔 (名) えりぬくこと。又、其の物。よりぬき。粹。

えり-ぬく 選拔 (他動カ) 多くの中よりえらびて、抜き出だす。よりぬく。

えり-はば 襟幅 (名) 衣の襟の幅。

えり-びと 選人 (名) 衆人中よりえり抜きたる人物。

えり-まき 襟卷 (名) 頸の廻はりに纏きて、寒を防ぐもの。絹布・綿布・毛布・毛皮等を用ふ。

えりまき-しぎ (名) 【動】鳥類中、涉禽類の一種。體色は背面灰褐色、背面下部はやや暗褐色に、尾羽も暗褐色にして先端のみ白色、頭・頂及び頸部は淡褐色を呈し、頸部に汚色の條を見る。體の下面は白色、嘴は暗褐色なり。全長大凡一尺に達す。夏季は羽色の變化甚し。本邦及び歐亞兩大陸に產す。

えり-まはり 襟周 (名) 一襟の周圍。襟のあたり。えりもと。二襟合せのむきに從ひて、順に右へ廻はりゆくこと。(廣辭苑)

えり-もと 襟元 (名) うなじ(項)に同じ。

えりもと に つく 附襟元 えりにつく(附襟)に同じ。えり(襟)の條を見よ。

えりもと の よのなか 襟元世中 えりもとにつく人の多き世の中。利慾に走る世の中。

えり-やく 選役 (名) 江戸時代、銀座の役名。出來上がりたる銀貨の善惡を選擇することを掌るもの。金銀御吹替次第(七編)「選役」

えり-やなぎよしぶ 鰀簗類漁業 (名) 定置漁業の一。一定の水面に支柱を以て簗若しくは網を建設し、又は竹・木・石・堤等を建設して、陷穽の裝置若しくは漁堰を設くるもの。漁業法施行規則(第二條)「鰀簗類漁業」

えり-わ 襟輪 (名) 【建築】木材を組み又は繼き合はする場合に、一方の木の緣に設けたる突出せるもの。いりわ。

えり-わく 選分 (他動カ) 多くの中よりえらびて善惡を區別す。よりわける。

えり-わけ 選分 (名) えりわくこと。

と。より わけ。區分。

えり-わける 選分（他動）えりわく（選分の口語。

えり-わざ （副）わざとをいふ、尾張國の方言。

えり-わり （副）わざとをいふ、東武の方言。

える （英 Ell）（名）布帛を測る西洋尺度の名。各國一定せず。英國の一ば我が三尺七寸七分餘に當たる。

える 選擇（他動）えらぶ（選）に同じ。雄略紀「難擇骨」枕「人多くいどみたる中に、えられて聖にとられたるも、我れはと思ひぬべし」

えり に える えらびたるものを再びえらぶ。念を入れてえらぶ。

える 撰（他動）よる（撰）に同じ。吉野忠信「李經七筋えり合はせ、三保谷に投げかくれば」

える 得（他動）う（得）の口語。

えるぐ （英 Erg）（名）【理】仕事の絶對單位。一だいん・の力に反對して、物體を一せんちめーとる動かすに要する仕事。

えるこ-さら （名）【植】あんざんじゅ（含生草）の異名。

えるじ-てつ L字鐵（名）横斷面がLの字の形をなせる鐵材。建築材料等に用ふ。

えれき （名）次條の略。

えれきてる （名）（關 Electricité の訛り）でんき（電氣）に同じ。平賀鳥溪實記「此の間閑居の時分、紅毛のえれきてる・と申す奇妙なる道具を求め候也」

えれ-さら （名）【植】えれいさら（延齡草）の異名。

えれべ-たー （英 Elevator）（名）階段によらずして、水力・電力等を用ひて、上下に人又は物を運搬する機。

え-をち 兄小父（名）古語。父の兄。字鏡「阿伯」和名「伯父。釋名云、父之兄曰世父、又曰伯父」

え-をとこ 好男（名）古語。よき男。かはゆき男。記上「愛袁登古」袁」

え-をとめ 好女（名）古語。よきをとめ。かはゆきをとめ。記上「愛袁登賣」

えん 一緣（名）一ゆかり。ちなみ。かかりあひ。てがかり。關係。枕「遠きありきする人の、つぎつぎ緣たづねて文えんといはすれば」源宮木「宮の御方に、えんを尋ねつつ參り集まりて」二人倫のつづきあひ。特に夫婦の關係。「親子の緣がらすい」「緣遠い」狂言「もとの女に媒なしといふが、かりそめながら二度のえんぢや」三佛語。いんえん（因緣）を見よ。狂言「これは定めて、他生のえんでござらう」

えん に つける 附緣　女を嫁せしむ。よめ入りせしむ。心中刃氷朝日上「あの子を國で緣につけるとて」

えん を むすぶ 結緣　えんをつなぐ。久安六年百首「岩清水えんをむすべる人はみな、うるほひをえぬものはなきかな」

（諺）**緣と浮世は末を待て** 良緣と時機とは其の自然に來たるを待つべし。吉原小唄總まくり「思ひすてるな、叶はぬとても、緣と浮世は末を待て」　佛緣なき衆生は度し難し　佛緣なき衆生は濟度し難きが如く、忠言を納れざる者は救ひ難し。諸藝袖日記「世界の者は皆百年で埒があきませぬといって戻せば、左平次は佛書も少し讀みたる人にや、ええ、緣なき衆生は度し難しぢやというて濟んだる由」

（諺）**緣につるれば唐土の物を食ふ** 事の成り行きにつれては、疎遠なるものにも接す。國姓爺「互ひに通ずる詞の末、緣につるれば唐のもの、くいの八千度くりかへす昔語そあはれなる」毛吹草「緣につるれば唐土の物を食ふ」

（諺）**緣の切れ目は子で繋ぐ** 絶えんとしたる夫婦の緣も、子によって繋がる。

（諺）**緣は異なもの** 男女の緣は不可思議のものなること。丹波與作「緣は異なもの、其の時に起請一枚書かねども、雲津の川淵二世・三世」

（諺）**緣は異なもの、あちなもの** 前條に同じ。

えん 一緣 椽（名）居宅の、座敷の外側に添へたる細長き板敷。古への寢殿造りにては、入側（ヰリガハ）の外方にあり。廣きもの、長きもの、一段低きものによりて、廣緣（ヒロエン）・長緣（ナガエン）・落緣（オチエン）等の名あり。えんがは。竹取「えんに這ひのぼり給ひぬ」枕「わた殿は細きえんなれば」

えん 一衍（名）えんじ（衍字）の略。

えん 一筵（名）一しきもの。むしろ。二酒宴の席。

えん 一延（名）えんおん（延音）の略。

えん 一鹽（名）【化】酸及び鹽基の化合物。

えん 一宴　酒食・歌舞などして、遊び興ずること。さかもり。うたげ。酒宴。字津保吹上「九月の宴は、かしこにてきこしめさんとて」同藤原「やよひばかり、御前の花のさかりに、えんし給ひけるに」拾遺「延喜の御時、八月十五夜、藏人所のをのこども、月の宴し侍りけるに」左傳昭公廿三「明日宴、飲酒樂」　あだめきたること。つやめきたること。艶。色めきたること。優美なること。又、その姿、或ひは人。枕「青きすやうを、えんなる視のふたにしきて」源宮木「えんに物はぢして、怨みいふべきことも見知らぬさまにしのびて」同藤合「えんにすきたる沈の箱に」謠「眞色を重んじ、艶を專らとし給ふにより、容色無雙の美人を得給ふ」

えん 一烟（助數）戶數をかぞふるに用ふる語。常陸風土記「神戶六十五烟」

えん-あん 一宴安　安んじ樂しむこと。安逸。左傳「宴安酖毒、不可懷也」

えん-いう 一緣由（名）ゆかり。緣故。杜甫詩「中原正格調、後會何緣由」

えん-いた 緣板（名）板緣（ヱンブチ）を張る板。

えん-いん 一延引　時日の、豫定より延びおくること。えんにん。遲延。日本紀略「天慶三年三月十三日、自今日、內裏有大死穢、仍大原野祭延引」　通鑑「延引歲月、賊勢益張」

えん-いん 一宴飲　讌飲　さかもりすること。酒宴。宴會。左傳「宴有好貨、宴飲以貨爲好」

えん-う 一烟雨（名）うちけぶりてふる雨。杜牧詩「南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中」

えん-うん 一烟雲（名）一烟と雲と。雲烟。水經註「青泠羊腸、超烟雲之際」二雲の如く高く上ぼる烟。平治「黑煙、猛火空に充ちて、暴風烟雲を揚ぐ」

えん-えい 一掩映　互ひに相映ずること。てりあふこと。庾信文「秀華掩映」畫史「溪橋漁浦、洲渚掩映」

えん-えき 一演繹（英 Deduct）一一事より他事に推し及ぼして論ずること。（論理）えんえきはふ（演繹法）に同じ。（論納の對）

えん-えき-かくは 一演繹學派（英 Deductive school）（名）【經】經濟學派の一。主として演繹的研究方法によりて研究し、歸納的方法は全く又は比較的に重要視せざるもの。りかーど等の英國經濟學者これに屬す。

えん-えき-てき 一演繹的（英 Deductive）（形）一定の根本原理を基とし、之より出發して、漸漸特別の事柄に推し下だるが如きさまにいふ語。

えん-えき-はふ 一演繹法（英 Deduction）（名）【論】既知の一般原理に基き、未知の特種事項を推論して論斷する方法。

えん-えぶ 一烟葉（名）烟を飾めたる木の葉。朗詠「烟葉蒙籠侵夜色」

えん-えん 一烟燕（名）烟と燕（ツバメ）と。北史「護兒驟破其營、因縱火、烟燕漲天」

えん-えん 一燕燕　炎炎（副）火の盛んに燃え立つさま、又暑さの甚しきさまにいふ語。朗詠「花光燕燕火燒春」謠「頭に火燕を戴けば、百節の骨頭より燕燕たる火を出だす」詩經「旱既大甚、則不可沮、赫赫炎炎」書經「無若火始燕燕、厥攸灼敍弗其絕」

えん-えん 一奄奄（副）息の絶えんとするさまにいふ語。「氣息奄奄」

えん-えん 一艷艷（副）つやつやと美しきさまにいふ語。謠「小町」蟬妍たりし兩髮も膚にかじけて、墨みだれ、艷艷たりし雙蛾も遠山の色を失ふ」

えん-おん 一延音（名）一音の、延びて二音となること。のたまふをのたまはく、いますをいまさふといふ類。

えん-か 一緣家（名）姻姻の續きあひ。姻族。緣者。みうち。甲陽軍鑑「親類・緣家」唐書「緣家在壽陽」

えん-か 一烟霞（名）烟と霞と。轉じて、山水。朗詠「烟霞遠近應同戶」南史「獨浪烟霞、高臥風月」

えん-か の こしつ 烟霞痼疾　常人に超えて山水を愛する癖あるを、痼疾の愈えざるに譬ふる語。唐書「高宗幸嵩山、親至其門、遊巖野服出拜。帝曰、先生比佳否。答曰、臣所謂泉石膏肓、烟霞痼疾者」

えん-か 一嚥下　のみ下だすこと。

えん-かい 一沿海（名）一海に沿ひたる地の部分。二陸に沿ひたる海の部分。沿岸海。「沿海の漁業」「沿海貿易」

えん-かい 一緣海（名）【地】大陸の緣邊にあり、列島などによりて區劃せられたる海。

えん-がい 一掩蓋（名）兵語。上を覆ひて、敵彈を防ぐに用ふる木材・土石等の稱。

えん-かい-からかい 一沿海航海（名）沿海諸港の間を航海すること。沿岸航海（遠洋航海の對）

えん-かい-からせん 一沿海航船（名）沿海航海に用ふる船。船舶。沿海通航船（遠洋航船の對）船舶職員法「沿海航船」

えん-かい-かろう 一沿海航路（名）沿海諸港間の航路。（遠洋航路の對）船舶職員法附錄第一號表「沿海航路」

えん-かい-ぎょげふ 一沿海漁業（名）きんかいぎょげふ（近海漁業）に同じ。

えん-かい-しゃうげふ 一沿海商業（名）えんかいしゃうげふ（沿海商業）に同じ。

えん-がく-かい 一緣覺界（名）佛語。十界の一にして、四聖の第二。緣覺の世界。

えん-がく-じょう 一緣覺乘（名）佛語。二乘または三乘の一。緣覺による佛乘。

えん-かづら 一緣葛（名）【建築】緣東（ヘツリ）の間に通して、緣板を承けしむる横木。

えん-がは 一緣側（名）座敷の外に添へたる細長き板敷の處。おちえん・きりめえん・くれえん・すのこ・ぬれえん等の數種あり。各條を見よ。

えん-がまち 一緣框（名）【建築】根太の端を承け、緣束より外に出だして取り附けたる横木。

えん-がる 艷（自動）艷なる風をなす。いきがる。紫式部日記「えんがりよしめく方はなし」源梅枝「何事も物好みし、えんがりおはする御子にて」

えん-がん 一沿岸（名）一海湖又は川に沿ひたる岸。沈佺期詩「淇上風日好、紛紛沿岸多」二陸地に沿ひたる海また川の部分。

えん-がん-かい 一沿岸海（名）陸に沿ひたる海の部分。沿海。

えん-がん-からかい 一沿岸航海（名）えんがんかいからかい（沿海航海）に同じ。

えん-がん-きょげふ 一沿岸漁業（名）きんかいきょげふ（近海漁業）に同じ。

えん-がん-くわいさう-めんじゃう 一沿岸槽免狀（名）輸入手續未濟の保稅品を、同國內の他の港灣に轉送せんとするとき、稅關より發行する免狀。

えん-がん-しゃうげふ 一沿岸商業（名）えんがんかいしゃうげふ（沿海商業）に同じ。

えん-がん-せいそう 一沿岸成層（名）【地】海岸に沈積せる地層。概ね粗粒碎片質にして、礫岩・角稜岩・砂岩・粘土等之に屬す。まま植物化石、又は海岸に生息

する貝類の化石を藏し、地形上しばしば海岸段丘をなす。

えんがん-せきかい 一沿岸小航海 (名) 短距離の沿岸航海。

えんがん-つうしゃにん 一沿岸通商人 (名) 沿岸商業に從事する人。

えんがんぼうえき 一沿岸貿易 (名) えんがんいぼうえき(沿海貿易)に同じ。

えんがん-りゅう 一沿岸流 (名) 潮流などの爲めに、海水の、海岸に沿ひて流るること。

えんき 一寃鬼 (名) 無實の罪などにて死にたる人の亡魂。

えんき 一鹽基 (英 Bases) (名) [えん(鹽)のもとゐ(基)の意][化] 酸を中和して鹽を生ずる物質。金屬の酸化物及び水酸化物、又は金屬に代はるべき或る原子團の水酸化物は之に屬す。

えんき 一延期 定めたる期限を延ばすこと。

えんぎ 一緣起 [一]佛語。因と緣と相應じて、萬有の生起すること。倶舍論「明本緣起」 [二]事物の起源・沿革。由來。「榮任防文章緣起一卷」 [三]神社・佛閣の草創・沿革又は其の霊驗などを言ひ傳ふること。又、其の文書。類聚符宣抄「此宮、從世初之時、已爲日本之固其奇異緣起、不可勝計」 圓珠[ジュ]。兆[ジウ]。兆候。「えんぎがよい」 狂言[狂言]「ことしは、えんぎをかへて、我が身に盛らぬほどに」 緣喜。 [四]えんぎだほし(緣起直)の略。三世相錦繡文章「そなたも病中の門出、一すなりとも口を祝って、ほんに、えんぎに盃を取りや」

えんぎ を いはふ 祝緣起 祝德あらんことを祝ひ祈る。

えんぎ 一演義 [えん(演)は敷衍、ひきのばす義] 事實を敷衍しておもしろく述ぶること。「演義三國志」 潘岳文「蠻雍川以止闕、脊演義以獻說」

えんぎ 一演戲 えんげき(演劇)に同じ。

えんきう 一淹久 久しく留まること。左傳[三公十三年]「豈敢求罪于晉、二三子無淹久」

えんぎ-しき 一延喜式 (名) [延喜式は倩式を書きたる書なればいふ] かたくろしき事をいふ者を嘲る語。太平記[北野天神縁起]「ちと禮義をも振る舞ひ、極信をも立つる人をば、あら見られずの延喜式や、あら氣詰まりの色代やとて、目を引き、仰きに倒れ笑ひ輕設す」 蟻遊笑贄[蟻]。若は かたくるしき事をいふ者をば延喜式といへり。後に古文眞寶といへるが如し」

えんぎしき-えん 一鹽基式鹽 (英 Basic salt) (名) [化]多酸鹽基を一部分中和して得る化合物。鹽基性炭酸鉛の如し。鹽基性鹽。

えんぎ-じゃう 一緣起狀 (名) 社寺の由來を記したる文書。緣起。 東鑑[四、元、七月十二日]「捧緣起狀、申下御手印」

えんぎ-しょう 一延期證 (名) 約束の期限を延ぶるための證文。

えんきせい-えん 一鹽基性鹽 (名) [化]えんきしきえん(鹽基式鹽)に同じ。

えんきせいさくさんなまり 鹽基性酢酸鉛 (名) [化] $Pb(C_2H_3O_2)OH$ 酢酸の蒸氣と空氣とが、共に鉛に作用するとき成生する可溶性の鹽。炭酸の作用を受け分解して鉛白となる。

えんきせい-さんくわぶつ 一鹽基性酸化物 (名) [化]水と化合してあるかり・を生じ、或ひは酸を中和して鹽を生ずる酸化物。酸化かるしうむ・酸化亞鉛等の類。

えんきせいさんどう 一鹽基性炭酸銅 (名) [化] $CO_3Cu \cdot Cu(HO)_2$ 銅器の面に生ずる綠色の錆。硫酸銅液に炭酸加里或ひは炭酸曹達液を加ふれば成生す。藍銅鑛・孔雀石等となりて天然に產出す。綠色の顏料となす。有毒なり。

えんきせい-たんさんなまり 鹽基性炭酸鉛 (名) [化] $2PbCO_3 \cdot Pb(OH)_2$ 白色不溶性の重き粉末。鉛白又は唐の土と稱し、白色顏料となす。工業上の製法には種種あり。毒性あると、硫化水素に逢ひて黑變するとの缺點あり。鹽基性酢酸鉛に炭酸瓦斯を通ずれば成生す。

えんきせん 一延喜錢 (名) えんぎつうはうせん(延喜通寶錢)の略。

えんきだな 緣起棚 (名) 藝人・商家・劇場・藝娼妓の家等の客商寶のもの、及び消防夫など緣起を祝ふ家にて設くる、神佛混淆の神棚。提燈・鈴・御鏡・箱等を列ぶ。

えんぎつうはう-せん 一延喜通寶錢 (名) 醍醐天皇延喜七年十一月より村上天皇天德元年まで鑄造の銅錢。面に延喜通寶の文あり。徑六分、重量一匁と、徑六分、重量七分と、徑六分、重量五分五厘との三種あり。一を以て舊錢の十に當てたり。[大日本貨幣史]

えんぎど 一鹽基度 (名) [化]諸種の酸は、金屬にて置換せらるべき水素原子の多少によりて、之を中和するに要する鹽基の量を異にするものにて、酸に於ける此の特性を鹽基度といふ。たとえんぎさん(多鹽基酸)を見よ。

えんぎ-なほし 緣起直 (名) 前兆の惡しかりしを祝ひ直すこと。

えんぎの-かうべん 延期抗辯 (名) [法]訪訴抗辯の一。債權者より訴へを受けたる保證人が、債務者を訴訟に參加せしめ、これをして答辯をなさしめ、又債務者の敗訴のときは、これに對して賠償(即ち求償)の言渡しを受くる目的にて、一時本案につきての辯論を担むもの。民事訴訟法第二百七條[二百六條]「延期の抗辯」

えんぎの-かね 緣起金 (名) 土などにて金銀の形を造り、神棚に供ふるもの。

えんぎ-ぶみ 緣起文 (名) 神社・佛閣等の緣起を記したる文書。緣起狀。古事談[一]「德道緣起文」

えんぎ-もの 緣起物 (名) 神佛への參詣人をあてこみて賣る物品。

えんぎゃうだう 一緣行道 (名) 踊經しながら、長廊下などを運り行くこと。盛衰記[六、內大臣殿以下、其本]「そけんの衣に長念珠うしろでにくりて、緣行道して」 長門本平家[本]「まだ早旦なる心地して、緣行道してましけるに」

えんきょ 一燕居 [えん(燕)はやすんず]休息して家に居ること。ひまにて居ること。翌德太子繪傳記「地頭の出仕も無く、燕居せる川勝」 大學「仲尼燕居」論語述而「子之燕居、申申如也」

えんぎょ 一鹽魚 (名) 鹽漬にしたる魚。鹽物。

えんきょく 一宴曲 延曲 (名) 鎌倉時代に行はれし一種の謠ひもの。後世の謠曲は之に基きたるものなるべし。「宴曲抄」「延曲口傳」

えんぎり 緣切 (名) 人倫上の關係を絕つこと(多く夫婦の離緣などにい

ふ。心中萬年草[二]「これはお梅が飲んだ盃、これを形身の緣切りと、愛に入れければ」

えんぎ-ゑ 緣起繪 (名) 社寺の由來・霊驗等を畫けるもの。

えんぐみ 緣組 (名) [一]結婚して、姻族の關係をつくること。百合若大臣野守鏡「立花上より仰せの緣組、いな有らうとは存ぜねども」 [二][法]やうしえんぐみ(養子緣組)に同じ。民法[十八條]「緣組又は婚姻に因りて他家に入りたる者」

えんぐみ-じけん 緣組事件 (名) やうしえんぐみじけん(養子緣組事件)に同じ。

えんくわ 一鉛華 (名) [鉛より取る華の義] おしろい(白粉)の異名。

えんくわ 一烟火 (名) [一]烟と火と。飯を炊ぐ烟。列子「庖廚之下、不絕烟火」 史記[孟嘗君]「鳴雞吠狗、烟火萬里」 [二]のろし。烽火。漢書[匈奴傳]「數世不見烟火之警」 [三]はなび。朱子狀「有婺州人周四會放烟花」

えんくわ-あんもにうむ 一鹽化安母紐謨 (英 Ammonium chloride) (名) [化]白色・鹽狀の水に溶け易き結晶體。あんもにあ・と鹽化水素とより製す。染料の補藥、又乾電池の製造等、用途甚だ廣し。磯砂[ジャ]。

えんくわい 一宴會 酒食・歌舞などの會。さかもり。酒宴。古詩「今日良宴會、歡樂難一具陳」

えんくわ-えちる (英 Ethyl chloride) [鹽化——] (名) [化] C_2H_5Cl あるこ・る・と鹽化水素とが化合して生ずる無色の液。點火すれば燃燒す。焰の緣に綠色を附するは其の特性なり。

えんくわ-かどみうむ 一鹽化カドミウム (英 Cadmium chloride) [鹽化——] (名) [化] $CdCl_2$ 二分子の結晶水を含める無色柱狀の結晶。空氣中に風化し、水に溶け易し。

えんくわ-かりうむ 一鹽化加留謨 (英 Calium chloride) (名) [化] KCl 食鹽狀の無色の結晶體。水に溶け易し。他のかりうむ化合物の製造、並びに肥料に使用す。北部及び中央獨逸の鑛床より多量に採掘せらる。

えんくわぎん 一鹽化銀 (名) [化] 白色凝乳狀の固體。日光に逢へば灰紫色に變ず。水及び酸に溶け難きも、あんもにあ及び次亞硫酸曹達液に溶解す。硝酸銀液に鹽酸又は鹽水を加ふれば成生し、角銀鑛として天然に產出す。

えんくわすいぎん 一鹽化水銀 (英 Mercury chloride) (名) [化]鹽素と水銀との化合物。鹽化第一水銀・鹽化第二水銀の二種あり。各條を見よ。

えんくわすいそ 一鹽化水素 (名) [化] HCl 無色刺戟性の臭ひある氣體。空氣よりも重し。他物の燃燒を助けず、又自ら燃ゆることなく、極めて水に溶け易し。其の水溶液を鹽酸といふ。空氣中に出でて白烟を放つ特性あり。食鹽に硫酸を注加すれば直ちに發生す。

えんくわすいそさん 一鹽化水素酸 (名) [化]えんさん(鹽酸)に同じ。

えんくわだいいちすいぎん 一鹽化第一水銀 (名) [化] Hg_2Cl_2 鹽化水銀の一。白色粉末狀の不溶性の固體にして、下痢・利尿劑等として內服藥となす。工業上にては、硫酸第二水銀に食鹽及び水銀を加へて、昇華せしめて製す。甘汞[カン]。輕粉[ケイフン]。

えんくわだいにすいぎん 一鹽化第二水銀 (名) [化] $HgCl_2$ 鹽化水銀の一。通常無色半透明の結晶體。硫酸第二水銀に食鹽を加へて熟し、昇華して之を得。水にやや溶け易く、劇毒あり。殺菌劑に用ふ。昇汞[ショウコウ]。猛汞[モウコウ]。

えんくわなとりうむ 一鹽化ナトリウム (英 Natrium chloride) (名) [化] NaCl 鹽素となとりうむ・との化合物。無色立方形の水に溶け易き結晶にして、海水中に多量に存在す。食用として必要なり。食鹽。しほ。

えんくわ-ぶつ 一鹽化物 (英 Chloride) (名) [化]鹽素と他の元素との化合物の總稱。

えんくわ-まぐねしうむ (英 Magnesium chloride) [鹽化——] (名) [化] $MgCl_2$ 苦味を有する結晶體。水に溶け易く、空氣中に於いて潮解す。粗製の食鹽中にはこれを含む。滴汁[ジ]の主成分なり。

えんくわん 一烟管 (名) [一]きせる(烟管)に同じ。 [二]煙烟を通す管。

えんくわん 一鉛管 (名) 鉛[ナマリ]の管。

えんくわん 一閹官 (名) くわんぐわん(宦官)に同じ。

えんくわん 一捐館 平生居る館を去りて、黃泉に赴くこと。死去。下學集[下]「捐館[エンクワン]新四郎義一人死去[ヨリ]生死[シ]」

えんくわんしきじょうきくわん 一烟管式蒸汽罐 (名) じょうきくわん(蒸汽罐)を見よ。

えんくん 一烟薰 魚類を燻製すること。烟の熱によりて水分を除き、かつ烟の中にあるくれおそーと等により細菌を殺すを以て、貯藏に適す。通常烟薰する前に、少量の鹽を吸收せしむ。

えんけ 一嚥下 えんか(嚥下)に同じ。

えんけ 一艷氣 (名) 艷なるやう。あだめきたるさま。なまめきたるさま。源氏「今やうのわか人たちのやうに、えんげにももてなさで」

えんけい 一烟景 (名) 京都五山の僧の名附けたる、錢五百文の稱。類聚名物考[九、賞翫十]「京都五山の僧、昔は學問好み詩作など心がけし故、ことに風流を事とせしが、錢の數をよむに、異名をつけていへりとぞ」 中華五百文、烟景は五湖烟景有誰爭といふ句より名附けしなり」

えんけい 一演藝 落語・講談・演劇などの如き藝を演ずること。又、そのもの。

えんけき 一演劇 又、そのもの。芝居。狂言。

えんけき 一掩擊 兵語。小部隊にて、敵の不備に乘じて襲ひ擊つこと。

えんけきぢゃう 一演劇場 (名) げきぢゃう(劇場)に同じ。

えんけた 緣桁 (名) えんのふち。えん。 槍權三[ごんえ]「ええ恨めしい腹立ちや」と、身を緣桁に打ちつけて、こぼす涙の袖雫」

えんけつ 一烟月 (名) 烟れるが如くかすみたる月。張九齡詩「林岡事發簡、烟月賞恢徐」 劉長卿詩「歲時長寂寞、烟月白氣氣」

えんけつ 一假月 (名) [一]半月の形。國姓爺「假月の戟、令釋も無く振り廻はし」 [二]陣立の名。半月形に隊伍を列するもの。[軍鑑] 甲陽軍鑑「一手・二手にて分けて、あとを假月と遊ばし」

えんけつ 〈 (ごつばへ)

えんけ-ぶつ-ぎょう 一鹽業調査所 (名) 明治三十二年四月に置き、農商務大臣の管理に屬して、鹽業の改良に關する調査及び試驗の事務を掌りし所。所長・技師・技手・書記の職員を置く。三十六年十二月廢せられたり。明治三十二年三月勅令第九十一號鹽業調査所官制「鹽業調査所」

えんけ-ぶてうさしょ-ちゃう 一鹽業調査所長 (名) 鹽業調査所の長官。技手を以て之に充て、農商務大臣の指揮・監督を承けて、所中全般の事務を掌理せるもの。

えん-けん 一延見 面會を求むる人を延き入れて、對面すること。引見。漢書「宣帝紀」「正殿延見群臣」〔講習録〕 二ねぶりたかぶる

えん-けん 一偃蹇 彼皆偃蹇、將棄子之命」

えん-けん 一延言 (名) 音を引き延べたる語。

えん-けん 一艷言 (名) なまめきたる言。いろめきたる言葉。

えん-こ (名) 坐することをいふ、幼兒の語。

えん-と 一緣故 (名) 一ゆかり。ちなみ。よしみ。關係。 二縁つづき。縁びき。つづきあひ。

えんこ えんびき 縁故縁引 人は先づ、己れに縁故ある者を引き立つるものなること。

えん-ご 一緣語 (名) 修辭上の語。歌又は文に、縁故ある語を巧みに用ひて修飾すること。源氏の桐壺に、「例の作法にをさめ奉るを、母北の方、同じ烟にものぼりなんと泣きこがれ給ひて」の如く、火葬の縁に烟又こがれなどの語を用ふる類。

えん-ご 一掩護 兵語。或る部隊をして、味方の作業又は或る目的物を保護せしむる爲め、敵に當たらしむること。

えん-こう 一咽喉 (名) のど。いんこう。

えん-こさく 一延胡索 (名) 【植】罌粟科・紫草(ムラサキ)屬の多年生草本。地下に塊莖を有す。莖は高さ七八寸、基部に近く一枚の長卵形の苞を有し、其の腋より一枝を出だす。葉は二回三出複葉、各小葉は倒卵形全緣、或ひは一二の缺刻を具ふ。五月頃、碧紫色の花を、莖頂に生ぜる花軸上に總狀に排列す。我が國、北部地方の山地に自生す。

えん-ごたい 一掩護隊 (名) 兵語。掩護の任に當たる部隊。

えん-ざ 一宴座 (名) えんのざ(宴座)に同じ。

えん-ざ 一緣坐 連累にて罪せらるること。北史「隋紀」諸家緣坐配流者、所在會赦」

えん-さう 一烟草 (名) たばこ(烟草)に同じ。

えん-ざう 一醃藏 鹽藏 鹽漬にすること。又、其の物。しほもの。

えんさかほい (感) 重き車などを曳く時のかけ聲。

えん-さき 一緣先 (名) えんのさきの方。えんのはし。丹波與作「お前近くも無遠慮に、縁さきにあげ足して」

えん-ざしき 一緣座敷 (名) 座敷の外、縁側の内にある座敷。疊敷にて、幅一間を普通とす。いりがは。

えん-さだめ 一緣定 (名) 夫婦などの縁を取り定むること。持統天皇歌「軍法「常陸帶の縁定めとて、鹿島の神の結び給ひし神祕あり」

えん-さん 一鹽酸 (名) 【化】HCl 鹽化水素酸の水溶液。强き酸の一。純粹なるものは醫藥又は化學藥品として用ひ、不純なるものは黄色を帶び、工業上に用ひらる。其の少量は消化を助け又は殺菌の作用あるを以て、飲料水に一二滴を加へて用ふるときは、惡疫を豫防する效あり。

えん-ざん 一鉛槧 (名) 〔えん(鉛)ほ鉛粉、即ち胡粉のこと。文字を塗抹するに用ふ。ざん(槧)は板にて、文字を書くもの。文筆のこと。西京雜記「揚雄懷鉛提槧、從諸計吏、訪殊方絕俗之語、作方言」〕

えん-ざん 一演算 うんざん(運算)に同じ。

えんさん-かり 一鹽酸加里 (名) 【化】えんそさんかりうむ(鹽素酸加個謨)に同じ。

えんさん-こかいん (英 Cocaine hydrochloride) 〔鹽酸——〕 (名) 【化】こかいんを見よ。

えん-し 一鉛絲 (名) 一端に鉛の玉をつけたる絲。重力の方向を見るに用ふるもの。

えん-じ 一臙脂 (名) 一べに。二儀錄「臙脂起自匈奴、以紅藍花汁凝作脂、以爲桃花裝、蓋燕國所出、故曰臙脂」 二しゃうえんじ(生臙脂)に同じ。 三綿の具。紫と赤とを混じたるもの。

えん-じ 一衍字 (名) 〔えん(衍)はあまる〕誤りて語句の中に入りたる不用なる文字。衍。「時經「尚之以瓊英乎而弭今定本云、瓊英猶瓊華瓊瑩、狀言瓊瑩者、蓋衍字也」

えんじ-いろ 一臙脂色 (名) 臙脂(ヱンヂ)にて染めたる色。べに色。

えんじえる (英 Angel) (名) てんし(天使)に同じ。

えん-しくわ 一燕子花 (名) 【植】かきつばた(燕子花)に同じ。

えん-しつ 一烟突 (名) 火管式汽罐にて、燃燒したる烟を一旦集まらしめて後、烟突に出でしむる室。火管と烟突との間に設く。

えん-しつ 一鉛室 (名) 鉛の板を繼ぎ合はせて作りたる大なる箱。硫酸の製造に用ふ。

えんしつ-けっしゃう 一鉛室結晶 (名) 【化】$SO_2(OH)NO_2O$ 硫酸製造の際、鉛室中の水分不十分なる時生ずる結晶。

えんしつ-りうさん 一鉛室硫酸 (名) 【化】硫酸製造鉛室より採りたる儘の硫酸。比重は約一・五五。硫酸含量は約六割。蒸發して强硫酸を得。

えん-しふ 一沿襲 沿習 昔より行ひ來たりし習慣。避暑錄話「士大夫家祭多不同、蓋五方風俗沿習、與其家法、所從來各異」

えん-しふ 一演習 一けいこ。練習。 二軍隊を、實戰に熟せしめんがために行ふ、假設の軍事的動作。

えんしふ-せうしふ 一演習召集 (名) 陸海軍の召集の一。演習のため、陸軍にては在郷陸軍軍人を召集し、海軍にては豫備役・後備役の海軍軍人を召集するもの。陸軍の演習召集は定期演習召集及び臨時演習召集に分かち、海軍の演習召集は大演習召集及び小演習召集に分かつ。各條を見よ。陸軍召集條例「第五・土」演習召集とは演習の爲在郷軍人(第二補充兵を除く)を召集するを謂ふ」海軍召集條例「第八」演習召集とは演習を行ふ爲平時に於て豫備役後備役軍人を召集するを謂ふ」

えんしふ-りょかう 一演習旅行 (名) 演習のためになす旅行。將校演習旅行條例「將校演習旅行」

えんしふ-りん 一演習林 (名) 林學研究に從事する學生の實地研究のため、特に設置したる森林。東京帝國大學官制「第五・廿七」農科大學附屬演習林に演習林長を置き」

えんしふりん-ちゃう 一演習林長 (名) 農科大學附屬演習林の職員。農科大學教授・助教授より文部大臣之を補し、帝國大學總長の監督の下に、演習林の事務を掌理するもの。東京帝國大學官制「第五・廿五」「演習林長は總長監督の下に於て演習林の事務を掌理す」

えん-じ-まがき (名) ついぢ。築地に同じ。祕藏抄「住みすてて年へし宿を來て見れば、えんじまがきもかたくづれつつ。えんじまがき、もとは築地也」

えん-じ-むし 臙脂蟲 (名) 【動】昆蟲類中、有吻類の一種。雌雄共だ其の形態を異にす。雄は長形扁平、暗褐色を呈し、頭部は小、腹部は後端に二本の長毛あり、翅は透明にして腹部を超えて延長す。雌の大さは雄に二倍し、且つ翅を缺き、吻頗る發達せり。めきしこ國の產にして、仙人掌科の植物に寄生す。之を採り乾かして洋紅と稱する染料を製す。

えん-じゃ 一緣者 (名) 縁家の人。つづきあひの者。身内の者。東鑑「北條者已爲彼緣者」承久記「其の後緣者尋ね來たり」

〔諺〕**緣者の證據** 信用し難きにいふ諺。

えん-じゃ 一緣書 (名) 縁を求めて差人とやらんにて、深くは頼まれず」

えん-しゃう 一烟障 (名) 烟雲の横たはれる山。太平記「巻十四・天皇遷幸」石を集めては烟障の色をかり、樹を植ゑては風濤の聲をうつす」

えん-しゃう 一炎症 (名) 【醫】身體の一部に灼熱・潮紅・腫脹・疼痛・官能障害等を起こすもの。諸種の刺戟によりて起こる組織の障害と、其の反應等とに原因す。

えん-しゃう 一緣生 佛語。一切の衆生は因緣によりて生ずること。華嚴經「緣生法」

えん-じゃう 一艶狀 (名) えんしょ(艶書)に同じ。若風俗「一度のえんじやう頼まれて書きしうき名の、末の世までもやむことなし」

えん-じゃう 一炎上 火の燃え上がること。大なる建築物の火災に罹かること。平家「巻五」「南都炎上の事は、王命と申し、武命と云ひ、君に仕へ世に隨ふ法、逝れ難しして」書經「洪範「火曰炎上」」孔叢子「論勢」「檀突炎上、棟宇將焚」

えん-じゃく 一燕雀 (名) 二燕(ツバメ)と雀(スズメ)。小鳥。禮記「三年」小者至于燕雀、猶有哢噍之頃焉、然後乃能去之」孔叢子「論勢」「燕雀戲堂、子母相哺、嗷嗷然其相樂也」 二小量の人に譬ふる語。

〔諺〕**燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らん** 小人の智は偉人の意を量る能はず。史記「陳涉世家」陳涉大息曰、嗟呼燕雀安知鴻鵠之志哉」

えんじゃくくわん 一燕雀類 (名) 【動】鳥類中の一目。概ね小形にして、脚小なり。巧みに巣を作り、雄は美音を發して囀る。多くは果實・穀類及び昆蟲を食とす。種類甚だ多く、鶯鳥の大部は之に屬す。鳴禽類。

えん-じゃ-つづき 一緣者續 (名) 縁つづき。つづきあひ。縁家。雪女五枚羽子板「巻五」「畠山の重忠も、緣者續きの先祖にて」

えん-しゅ 一燕首 (名) くらうどのかみ(藏人頭)の唐名。

えん-じゅ 一延壽 壽命を延ぶること。蘇軾文「毎加節儉、亦是惜福延壽之道」

えんじゅ-だう 一延壽堂 (名) 二博家の語。老者又は病者をおきて摂安するために設けたる家。禪林寶訓音義「延壽堂撫安老病之所也。古者叢林・老僧送安樂堂、病者送延壽堂也」 二禪家の語。くわさうば(火葬場)の忌詞。庶添壇嚢鈔「茶毘所を、禪家には延壽堂といふ」

えんじゅ-よそ 一延壽屠蘇 (名) 〔屠蘇は壽命を延ぶといふよりいふ〕とそ(屠蘇)の異名。

えん-しょ 一炎暑 (名) 夏のもゆるが如きあつさ。酷暑。炎熱。李尤正文「暑門銘」「正陽南面、炎暑赫赫」儒光義詩「六月無炎暑」

えん-しょ 一緣書 (名) 縁を求めて差し出だす書面。太平記「巻六・俊基朝臣」罪科有って所帶を沒收せられたる人、緣書を以て執事兄弟に屬し、いかが仕るべきとなげけば」

えん-しょ 一艶書 (名) 男女の間にて、戯慕の意を書き送る文。いろぶみ。えんぶ(艶書)。けさうぶみ(戯想文)。艶肚。東鑑「七・建久六・四・廿四」「被通御艶書」

えん-じょ 一艶書 (名) 前條に同じ。

えん-しょ-あはせ 一艶書合 (名) 艶書を合はせて、優劣を判じ勝負を定むるもの。けさうぶみあはせ(戯想文合)。金葉「巻十二・堀河院の御時の艶書合せによめる」

えんしょう-せん 一厭勝錢 (名) 凶災を避け、吉祥を求むるため、禁厭(マジナヒ)として用ふる錢。

えんしょ-うた 艶書歌 (名) 艶書合せをなす歌。續詞花集「巻三・堀河院御時、艶書歌殿上の人人に召して、歌よむ女房どものもとへつかはしける」

えん-しょく 一艶色 (名) つややかなる容色。傾城反魂香「三・浄瑠璃」「艶色あてなる二人の遊女」孟浩然詩「艶色本傾城」

えんしょく-はんおう 一焰色反應 (名) 【化】物體をあること一種又はぶんぜん燈等の焰中に入れたるとき、焰に色を附する反應。

えん-じらす 一艶次郎 (名) 〔山東京傳の作、江戸生艶氣樺燒の主人公の名。その性格に似たれば云ふ〕自ら好男子を以てゆるす者。うねぼれの强き男の稱。

えん-す 一燕巢 (名) 雨燕の巣。色白く透明にして、處處に黒き羽の附きたるあり。支那人食用として賞玩す。燕窩。燕窩菜。

えん-すみさ 一緣隅木 (名) 【建築】すみさす(隅投首)に同じ。

えんすゐ 一瀛水 (名) しほみづ。

えんすゐ 一烟水 (名) 烟の籠めたる水。温庭筠詩「誰解乘舟尋范蠡、五湖烟水獨忘機」陸龜蒙詩「不知潛鱗虞、但知籠烟水」

えん-ずね 一延髓 (名) 【醫】腦と脊髓との連絡をなす部分の稱。後頭の頸部にあたり、反射運動・呼吸及び心搏等を司る。

えんすゐ-せん 一鹽水選 (名) 浮皮を被れる穀類に行ふ選種法の一。食鹽を水にまぜたるものに種子を投じて、沈むもののみを採用すること。

えん-せい 一延性 (名) 【理】物質の、線狀に引き伸ばし得る性質。

えん-せい 一厭世 世の中を厭ふこと。此の世をいやに感ずること。(樂天の對)莊子「天道」「千歲厭世、去而上僊」鮑照詩「情高不戀俗、昔厭世樂、尋仙」

えんせい-くわん 一厭世觀 (英 Pessimism) (名) 【哲】此の世界は全然惡にして、しかも吾人が想像し得る中にて、最惡の世界なりとなす見解。悲觀說。苦觀說。多著說。(樂天觀の對)

えんせい-しゅぎ 一厭世主義 (英 Pessimism) (名) 【哲】厭世觀を其の主

義とせるもの。(樂天主義の對)

えん-せう (シヤウ) 【化】せうせき(鍾石)に同じ。本草「消石。一名、芒消、一名、苦消、一名、焰硝、一名、火消、一名、生消」 ㊁くわやく(火藥)の俗稱。合藥。

えん-せう (シヤウ) 緣礁。(名) 【地】瑚礁の一。島の周圍に海水を隔てて存するもの。堡礁。

えん-せう (シヤウ) 延燒。(名) 火災の他に及ぶこと。類燒。「三代實錄」「西京失火、延燒數十家」「史記」「河内失火、延燒千餘家」

えんせう-び (シヤウ) 焰硝火。(名) 芝居にて、大砲・小銃、又幽靈の出づる時などに用ふる焰硝の火。

えん-せき (シヤク) 宴席。(名) 酒宴の坐席。宴會の席。「著聞集」「有絃有管有頌聲、宴席悠退」「延久跡」「閑天遣事」「馬氏子弟、取大米、琢成山、周圍宴席、坐客皆寒」

えん-せき (シヤク) 筵席。(名) 敷もの。坐席。「禮記」「曲禮」「注」「錦陳曰筵、藉之曰席」

えん-せき (シヤク) 燕石。(名) 玉に似て見ゆれども價値少なき石。「雪女五枚羽子板」「中華山雞を鳳凰とし、燕石を珠と見て」「闕子」「宋之愚人、得燕石于梧臺之東、歸而被之、以爲寶、中華客見之、掩口而笑曰、此特燕石耳、其與瓦甓不殊」

えん-せき (シヤク) 鹽石。(名) いしぶろ(石風呂)なりといふ。

えん-せき (シヤク) 鹽析。(名) 或る鹽類を或る溶液へ溶かし入れて、前に溶解し居るものを沈澱せしむること。

えん-ぜつ (ゼツ) 演說。(名) 公衆の前にて、意見を演べ說くこと。古事談「最勝御八講に、權少僧都澄憲勤仕講師、當第二日之夕座、演說吐玉」「北周書」「生」「一演說」

えんぞ (ゾ) 艶書。(名) えんしよ(艶書)に同じ。

えん-そく (ソク) 偃息。(名) やすむこと。休息。「朗詠」「室有師跡、莫以偃息於五臺之雲」

えん-そく (ソク) 堰塞。(名) 水の流るゝをふさぐこと。

えんそく-こ (ソク) 堰塞湖。(名) 【地】山崩れ又は噴火などにより、水の堰きとめられて成りたる湖。

えんそさん-かりうむ (ソサン) 鹽素酸加留謨。(名) 【化】KClO$_3$ 水酸化かりゆうむ・の熱濃溶液に鹽素を通ずるとき生ずる白色板狀の結晶。容易に酸素を遊離するを以て、まつち・爆發藥等の原料として多く用ひられ、又含嗽劑となる。

えんそさん-ぼたしうむ (ソサン) (英 Potassium Chlorate) (名) 【化】前條に同じ。

えん-たい (タイ) 艶態。(名) 艶態に同じ。

えん-たい (タイ) 延滯。(名) どこほること。延び滯(とゞ)ほること。遲滯。停滯。左傳「隱公十年」「詩」「蓋慝暴滯」

えん-たい (タイ) 緣臺。(名) 腰かけ臺。涼み臺。

えん-だい (ダイ) 演題。(名) 演說の題目。

えん-だい (ダイ) 演臺。(名) 講演・演說などする時、前に設く臺。

えんたい-にち (ニチ) 厭對日。(名) 九星の語。婚禮及び出行を忌む日。正月は辰の日、二月は卯の日、三月は寅の日。以下十二支を逆の順序に配當す。「東鑑」「寿永二年九月廿日」「十六日御入洛者、厭對日也。出行可憚之」

えんたい-の-ふで (ノ) 椽大筆。(句) てんだいのふで(椽大筆)の讀誤。

えんたい-ひぶ (ヒブ) 延滯日歩。(名) 支拂ひの延滯せる時、其の延滯の日數に應じて支拂ふべき日歩。「倉敷料延滯日歩」「保險料延滯日歩」「貸借金延滯日歩」

えんたい-りそく (リソク) 延滯利息。(名) 支拂ひの延滯せる時、其の延滯の日數又は月數に應じて支拂ふべき利息。

えん-たう (タウ) 鉛刀。(名) 鉛にて作りたる刀。雪女五枚羽子板「莫耶を鈍しとし、鉛刀を銳しといひ」

えんたう いっかつ (タウ) 【鉛刀一割】鉛の刀は只一度物を割くべけれども、再び用ふる能はざること。八幡愚童訓「聖人の德は鉛刀一割、大善薩の通力は莫耶の利劍」左太冲詩「鉛刀貴一割、夢想騁良圖」

えん-たう (タウ) 鉛糖。(名) 【化】[Pb(C$_2$H$_3$O$_2$)$_2$]醋酸に醋酸鉛を溶解し、之を濃厚にしたるもの。白色の光輝ある六角柱狀の結晶體にして、甘味を有し、顏料の製造及び醫藥に用ふ。

えん-だう (ダウ) 延道。(名) 貴人徒歩の時、裾の汚れを防ぐため、門より母屋の間などの通路に敷く莚(むしろ)。枕「びらうげの車などは、門もひさければさはりてえ入らねば、例の莚道しきて下るに」「江次第」「十四」「昇殿御座」「入夜御帳置之、有莚道」

えんたう の きぬ (ダウ) 莚道絹。(名) 莚道に敷く絹。庭訓往來「九月」「莚道絹」

えん-だう (ダウ) 烟道。(名) 蒸汽罐より排出する石炭の煤烟を、烟突に送る通路。通常煉瓦造暗渠より成る。

えん-だう (ダウ) 沿道。(名) 行路に沿ひたる處。

えんだうしき-じょうきくわん (ダウ) 烟道式蒸汽罐。(名) じようきくわん(蒸汽罐)を見よ。

えん-だつ (ダツ) 艶立。(自動) あだめく。いろめく。つやめく。枕「異なる事なき男の、ひきいれ聲してえんだちたる」

えん-たり (タリ) (いんだりの轉)何れにても結果の同じきこと。「行かうが歸らうが、どっちしてもえんだりだ」

えん-たん (タン) 【鉛丹】(名) 【化】Pb_3O_4 炭酸鉛又は一酸化鉛を、空氣中にて高溫度に熱して製する紅色結晶性の粉末。繪の具及びふりんと硝子の製造に用ふ。

えん-だん (ダン) 緣談。(名) 夫婦又は聟養子の緣組につきての相談。結婚の議。

えん-だん (ダン) 演壇。(名) 講演演說などをする人の立つ場。

えん-ちゃう (チヤウ) 延長。(名) ㊀長く延ばすこと。「鐵道の延長」「漢書」「禮樂」「稱湯洋、遇延長」 ㊁【哲】事物の表現せるさまに就きて

いふ語。即ち、幅・廣さ・高さ・長さ・厚さ・深さ・距離・方向等の語によりて言ひ表はさるる擴がりの總稱。廣延。

えん-ちゃう (チヤウ) せん 延長線。(名) 延長すべき、又は延長せる線。

えん-ちゃく (チヤク) 延著。(名) 一定の時期に後れて到著すること。「汽車の延著」

えん-ちよ (チヨ) 艶女。(名) 容貌艶なる女。「保元」「新院御所」「詩には艶女を貶り、書には晉姬を讓めたり」

えん-ちよく (チヨク) 鉛直。(名) 地平線に直角なること。

えんちよく-せん (チヨク) 鉛直線。(名) 【理】地面上の一點に於いて垂れたる鉛絲の取る方向。即ち、重力の方向と一致する直線。

えん-ぢん (ヂン) 烟塵。(名) ちりほこり。塵埃。黃滔詩「縱微終不起、相與鎖烟塵」

えんつう-じ (ツウ) 緣通寺。(名) 【緣の通じなしといふを、寺號の圓通にいひなしたるなるべし】はたとふさがりて、少しも通ぜぬこと。俚言集覽

えん-づか (ヅカ) 緣束。(名) 【建築】えんのつかばしら(緣束柱)に同じ。

えん-づき (ヅキ) 緣附。(名) 緣づくこと。よめ入り。聟入り。用明天皇職人鑑「異見をすれども、緣づきはいやといふ」

えん-づく (ヅク) 緣附。(自動) とつぐ。嫁入りす。嫁す。

えん-づける (ヅケル) 緣附。(他動) 緣づかしむ。とつがしむ。よめ入りせしむ。嫁せしむ。

えん-つづき (ツヅキ) 緣續。(名) 緣のつづけること。又、その家。緣者つづき。つづきあひ。緣家。

えんで (デ) 燕手。(名) 芝居の聲の一。

えん-てい (テイ) 炎帝。(名) 支那にて、夏の時を司るといふ神。又、火の神。天神記「夏の神は炎帝とて」

えん-てい (テイ) 堰堤。(名) 永久に流水を湛ふる爲め、砂石の類にて、之を横切りて築きたる堤防。

えん-でう (デウ) 烟條。(名) 絲すぢの如く立ち上ぼる烟。「謠曲集」「風絲野に牧まつて烟條直し」

えん-てき (テキ) 簷滴。(名) 簷(ノキ)の雨だれ。「潘岳詩」「春風緣櫺來、晨響承簷滴」

えん-てん (テン) 炎天。(名) えんで(燕手)の訛り。

えん-てん (テン) 炎天。(名) 夏の炎暑の天(テン)。照りつける夏の日。小町踊「富士山や、炎天に見る雲の峯」「孔融詩」「嚴嚴鍾山首、赫赫炎天路」

えん-でん (デン) 鹽田。(名) 海水より食鹽を製する爲め、海濱に設けたる場所。しほばま。

えん-とう (トウ) 烟筒。(名) ㊀きせる。㊁えんとつ(烟突)に同じ。

えん-とう (トウ) 檐頭。(名) のきば。のきさき。

えん-とき (トキ) 緣說。(名) 理由を說明すること。因緣・關係の說明。

えん-とく (トク) 鉛毒。(名) 鉛に含める毒。

えん-とつ (トツ) 烟突。(名) 石炭其の他の燃料を完全に燃焼しむる爲め、蒸汽罐の火爐に適量の空氣を吸入し、同時に燃料より生ずる煤烟を外氣に排出する裝置。煉瓦造りと鋼板製の二種あり。えんとう。けむりだし。

えん-ねん (ネン) 延年。(名) ㊀年齡を延ぶること。壽命を延ぶること。庭訓往來「二月」「詩」し。若風俗「ことさら、緣遠き娘の親」

えん-なげし (ナゲシ) 緣長押。(名) 【建築】緣板の上にて、柱に取り附けたる長押。

えん-なぶ (ナブ) 延納。(名) 期限に後れて納むること。明治二十三年十一月勅令第二百七十一號印紙類賣下實捌規則「第七條」「六箇月以内の延納を許す」

えん-にち (ニチ) 緣日。(名) 神佛の祭日にて、詣づるに有緣なる日。著聞集「十五日。十八日は阿彌陀・觀音の緣日なれば、斎生なれども心あればさもありぬべし」太平記「第十三卷」「其の日松殊更、聖廟の御緣日にて」

えん-にち (ニチ) 厭日。(名) 申の日。此の日、事を行ふに惡しと。「陰陽寮式」「凡新年鎭害氣者、申日正月上厭日遲明、官人率陰陽師設鎭處於害氣之地」「明月記」「元年十三、廿七」「明日者可明後日歟」

えんにち-あきんど (ニチ) 緣日商人。(名) 緣日に、露店を出だして物を商ふ商人。

えん-にん (ニン) 延任。(名) 地方官の任期滿ちたる時、特に一二年を延べて、更替を免ぜらるること。金葉集「上」「爲仲の朝臣、陸奥守にて侍りける時、延任しつと聞きてつかはしける」官職難儀「一任四箇年を、又四箇年任ずるを重任といふ。四箇年の内を、一年にても又二箇年・三箇年にても、のべてなさるるを延任と申す也」

えん-にん (ニン) 延引。(名) えんいん(延引)の音便。

えん-ねつ (ネツ) 炎熱。(名) 夏のもゆるが如き暑氣。甚しき暑熱。醋熱。杜甫詩「五嶺皆炎熱、宜人獨桂林」唐文宗詩「即事」「人皆苦炎熱、我愛夏日長」

えん-ねん (ネン) 緣年。(名) 神佛などの祭典、或ひは祝賀を行ふべき年。

えん-ねん (ネン) 延年。(名) ㊀年齡を延ぶること。壽命を延ぶること。庭訓往來「二月」「詩」歌、管絃者「遇齡延年之方也」 ㊁えんねんまひ(延年舞)の略。東鑑「八文治四年」「御酒宴之間、見汰及延年」「著聞集」「建長四年」「の維摩會の延年に」

えんねん-さう (ネン) 延年草。(名) 【植】えんれいさう(延齡草)の異名。

えんねん-まひ (ネン) 延年舞。(名) 僧家の舞ひ。少年の法師二人、髮頭とて頭を白き袈裟にて包み、赤き袍を著し、白き大口をつけ、短刀を脇に指し、中啓・鼻高者を用ふ。又舞ひの中に△の形せる立烏帽子を著る。唱方は六人の内、五人は赤き袍、一人は白き袍にて、みな五條袈裟・標帽子・中啓・鼻高者等なり。各一行に進み出でて唱ふ。舞ひ畢はりて舞方・唱方一同に退去し、僧徒天下安全の爲めに修行するもの。「日葡辭書」

(ひまんねんえ)

えんの-ざ (ノ) 宴座。(名) 古へ朝廷の節會、臣下の大饗等の酒宴の稱。單に獻酬のみなるを宴の座といひ、更に成儀をくつろげ、管絃の興などを添へてするを禮

（之）の座といふ。太政官式「大臣已下史已上、謝座著宴座」

えん-の-した　縁下　（名）ゆかした。狂言「鬼瓦」「平等院の縁の下、これなる砂の上に圍碁を打ち敷き」

（誹）**縁の下の蹴づかひ**　窮屈にして働きの自由ならぬ譬へ。

（誹）**縁の下の蜀**　世に出づる能はざる譬へ。

（誹）**縁の下の力持**　他の見知らぬ所にて、徒らに勞する譬へ。放屁論「生まれついたる不物好、わるかたまりにかたまつて、縁の下の力持ち、むだ骨だらけの其の中に」

（誹）**縁の下の舞ひ**　前條に同じ。

えんのした-こほろぎ　縁下蟋蟀　（名）【動】おかまこほろぎ（蟲馬）の異名。

えん-の-つかはしら　縁束柱　（名）【建築】縁の下の短き柱。えんづか。

えん-の-つな　縁綱　（名）寺にて開帳の時、内陣より堂前に立つる供養塔まで、延べて結びつくる白木綿。手を之に觸るれば、佛に觸れしと同一の功德ありとするもの。

えん-の-まひまひ　縁舞舞　（名）まひまひ（舞舞）に同じ。

えん-の-もの　縁者　（名）まひまひ（舞舞）に同じ。

えんは　（名）水烟の立ちて、廣廣と見ゆる波。朗詠「范蠡扁舟之泊、烟波惟新」江總詩「日向烟波長」唐太宗詩「烟波澄舊碧」

えん-は　馮馬　（名）字畫の類似して誤り易きことにいふ語。又、文字の誤り。刀の誤りの類。

えん-はい　烟煤　（名）ゆえん（油烟）に同じ。

えん-はい　（名）鹽梅　一うめぼし（梅干）に同じ。二食物の味ひ。あんばい。東鑑「建暦三年」竹葉勸「宴酣、鹽梅調」鄙味、所被獻之」書經「說命」若作「和羹」爾惟鹽梅」三政務を調和して、寛厳宜しきを得ること。天神記「菅丞相は古今の學者、朝廷鹽梅の臣下なり」

えん-ばう　（名）掩堡　えんがう（掩壕）に同じ。

えん-ばく　（名）鉛白　（名）【化】白色の顔料。えんきせいたんさんなまり（鹽基性炭酸鉛）を見よ。

えん-はしら　縁柱　（名）縁の處にある柱。國姓爺後日合戰「御馬繋ぎは縁柱」

えん-はな　縁端　（名）縁のはしの方。えんさき。椿七部集「縁ばなにはれたる足を投げだして」

えん-ばん　（名）鉛版　活字を組みたてて紙型（ネ）にとり、それに鉛を鑄込みて作りたる印刷版。すてろばん。

えん-ぴ　燕飛　（名）撃劍の語。燕の飛ぶ如く、身がるにちゆうがへりすること。

えん-ぴ　（名）捐費　しゆつし（出費）に同じ。日英通商航海條約第三「兩締盟國の一方の臣民にして他の一方の版圖内に住居する者は一切の强募公債及び軍事上の賦斂或は捐費を免るべし」

えん-ぴ　燕尾　（名）一冠の名所。江次第「君五位、入若「次加冠立座廊通入、冠者額結燕尾退復坐」雅亮裝束抄「冠のえんぴのやうなるが、二つあるを」字鏡集「纓（ヱイ）の一種。

（えんび）

えん-び　（名）鳶尾　（名）【植】いちはつ（鳶尾）の漢名。

えんび-がた　燕尾形　（名）細長くして、燕の尾の如く、二つに分かれたるものの稱。

えん-びき　縁引　（名）えんと（縁故）に同じ。津國女夫池「縁引き・手引きを以てたばからば」

えんびきさっかぶ　縁引龜甲　（名）模様の名。

（えんびきさっかぶ）

えんび-くわ　（名）【植】いちはつくわ（鳶尾科の異名。

えんび-せん　（名）【植】次條の略。

えんび-せんさう　（名）【植】石竹科、前夏經（ビ）屬の草本。莖の高さ二尺許り、平滑なり。葉は披針形、葉脚に向かひて狹小となり、少しく莖を抱く。花は莖頂に生ずる花軸上に聚繖狀に排列し、秋季開き鮮紅色なり。我が國、諸所に栽培せられ、觀賞用とす。燕尾仙翁。

えん-ぴつ　（名）鉛筆　（名）（古へは石墨の代はりに鉛を用ひたればいふ）石墨の粉末に水を加へ、微細の粘土をまぜて練り、水氣を搾取して壓したるを、小孔より突き出だして線香の如くにし、乾かして、木の軸に入れなどしたるもの。色鉛筆は石墨の代はりに、蠟などに絵の具を加へて製す。

えんぴつ-ぐわ　（名）鉛筆畫　鉛筆を用ひて畫きたる畫。多くすけっち又は畫稿用とす。

えんび-ひは　燕尾檜葉　（名）【植】檜（ヒ）の變種。

えんび-ふく　（名）燕尾服　現今の通常禮服。黑羅紗にて製す。上著の下腹の邊より兩横腹まで、前をかきおとし、うしろは割れて、燕の尾のごとく垂れたるもの。

えん-びん　（名）えんび（燕尾）の訛り。言葉

えん-ぶ　（名）一脈舞　（名）【脈（ミヤク）】宮廷の舞ひの義。二宮廷の舞ひの所崎の爲め、鎮樂の始めに奏する樂。えぶ。振舞。

えん-ぶ　（名）閻浮　（名）えんぶだい（閻浮提）の略。諸大經「猶妄執の閻浮の世を忘れもやらで、浮名を又洩らせば洩るる涙の色」

えんぶ-の-ちり　閻浮塵　俗世の塵。此の世の汚れたる塵。賀古教信七墓廻「教へて罪を造らせて、明日の命は閻浮の塵」

えんぶ-の-み　閻浮身　えぶのみ（閻浮身）に同じ。えぶ（閻浮）の條を見よ。

えん-ぶ　（名）演武　武藝を演習すること。

えん-ぶ　（名）偃武　（ウセ）兵亂を平げ、武器を偃（ウセ）藏（ヒ）めて復用ひざること。書經「武成「偃武修文」

（ぶんえ）

えんぶ-くわはう　閻浮果報　（名）閻浮、即ち、此の世にて受くる果報。

えんぶ-だ　（名）閻浮提　（名）次條の略。

えんぶ-だい　（名）閻浮提　（名）【梵語】。閻浮は樹の名。提は洲の義）佛語。此の世界の稱。此の洲の上に閻浮樹の林あるよりいふと。えぶ。南瞻部洲。今昔「閻浮提の善惡の事を語り給ふ」法華經「閻浮提内、廣令流布、使不斷絶」

えんぶだ-ごん　閻浮提金　（名）佛語。南瞻部洲、閻浮樹の林中にある河の底に產する金砂。佳金の稱とす。諸經「當寺の佛閣の、み作りの品品塔婆の金寶に至るまで、閻浮提令なるとかや」

えん-ぶん　（名）鉛粉　（名）鉛にて作り

たるおしろい。繪の具に用ふるごふんに代用す。

えん-ぶん　（名）衍文　誤りて、語句の中に入りたる不用の餘りの文言。左傳「成公十一月己酉、定王崩。杜注「案家傳、悉無此八字、或衍文」

えん-ぶん　（名）鹽分　しほけ（鹽氣）に同じ。

えん-ぶん　（名）艷聞　色めきたるうはさ。

えん-ぶん　（名）艷文　えんしよ（艶書）に同じ。

えん-ぺい　（名）掩蔽　一掩ひかくすこと。禮記「月令」「蔡「阿黨」則罪無有掩蔽」二【天】月或ひは悉星が、他の天體の前に來たりて之を遮蔽して隱すこと。

えんぺい-ぶ　（名）掩蔽部　兵語。散兵壕・掩壕に掩蓋を設けたる部。火戰に參加せざる閒、軍隊を敵の砲彈より防ぐもの。

えん-ぺん　（名）緣邊　えんか（緣家）に同じ。井筒屋平河内通「たつた今、緣邊の盃取りかはす」

えん-ほう　（名）延袤　（名）（えん（延）は遠さ。ぼう（袤）は南北のひろさ）長さ。廣さ。土地の廣きこと。史記「蘇秦傳「起」臨洮至遼東、延袤萬餘里」

えん-ほうし　（名）烏帽子　（名）（えぼうしの音便）「鹽壇紫字江本保」烏帽子（烏頭子）に同じ。宇鏡「男女服裝」

えん-ま　（名）【閻魔】（名）【梵語】閻摩羅の略。逝止の義にて、惡業を止むる意）佛語。亡者の魂魄を司り、其の行事により、賞罰する地獄の王者。閻羅。靈異記「忽然而生「閻魔國」時王校」之、不」合」死期」著聞「えんま王宮の御使なり。うけぶみ鉄とて」

えんま-の-ちから　閻魔力　閻魔大王の

えんま-ぢやう　（名）一閻魔帳　（名）一閻魔の廳にて、亡者の名を記しおく帳。二教師が生徒の行狀・學力などを記しおく帳の稱。

えんまちやう-に-つく　附閻魔帳　閻魔が死者の姓名を控ふる帳に記さる。あの世のものとなる。死す。

えんま-づら　（名）閻魔面　えんまがほ（閻魔顏）に同じ。毛吹草「千本の花見てなほせ閻魔面」

えんま-てん　（名）閻魔天　えんまわう（閻魔王）に同じ。

えんま-てん-く　（名）閻魔天供　閻魔王を祭ること。

えんま-ほふわう　（名）閻魔法王　えんまだいわう（閻魔大王）に同じ。諸歌古「釋迦大師の慈悲の教へを忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の呵責の言葉を聞く」

えんま-まをり　（名）閻魔參　正月及び七月十六日、閻魔堂へ參詣すること。俗に、此の日地獄の釜の蓋開きて、亡者も苦を免るる日と稱す。

えんま-むし　（名）閻魔蟲　【動】昆蟲類中、直翅類の一種。蟋蟀（コオロギ）に似て全體黑褐色、大なる頭を有す。豆類に大害を與ふ。

えんま-もつ　（名）閻魔卒　佛語。閻魔の廳の鬼。賀古教信七墓廻「十王經に曰はく、閻魔卒三魂を縛して賜樹下に到る」

えんま-だいわう　（名）閻魔大王　佛語。えんま（閻魔）の尊稱。狂言「地獄」「此の閻魔大王が六道の辻に出て、罪人が來てあらば、地獄へ責め落とさうと存じ候」

えんま-だう　（名）閻魔堂　（名）閻魔を祀りてある堂。當流小栗判官「上野が原の閻魔堂へ參詣せしに」

えんま-ぢやう　（名）一閻魔帳　（名）一閻魔の廳にて、亡者の名を記しおく帳。二教師が生徒の行狀・學力などを記しおく帳の稱。

えんまちやう-に-つく　附閻魔帳　閻魔が死者の姓名を控ふる帳に記さる。あの世のものとなる。死す。

えんま-づら　（名）閻魔面　えんまがほ（閻魔顏）に同じ。毛吹草「千本の花見てなほせ閻魔面」

えんま-てん　（名）閻魔天　えんまわう（閻魔王）に同じ。

えんま-てん-く　（名）閻魔天供　閻魔王を祭ること。

えんま-ほふわう　（名）閻魔法王　えんまだいわう（閻魔大王）に同じ。諸歌古「釋迦大師の慈悲の教へを忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の呵責の言葉を聞く」

えんま-まをり　（名）閻魔參　正月及び七月十六日、閻魔堂へ參詣すること。俗に、此の日地獄の釜の蓋開きて、亡者も苦を免るる日と稱す。

えんま-むし　（名）閻魔蟲　【動】昆蟲類中、直翅類の一種。蟋蟀（コオロギ）に似て全體黑褐色、大なる頭を有す。豆類に大害を與ふ。

えんま-もつ　（名）閻魔卒　佛語。閻魔の廳の鬼。賀古教信七墓廻「十王經に曰はく、閻魔卒三魂を縛して賜樹下に到る」

えんま-だいわう　（名）閻魔大王　佛語。えんま（閻魔）の尊稱。狂言「地獄」「此の閻魔大王が六道の辻に出て、罪人が來てあらば、地獄へ責め落とさうと存じ候」

えんま-だう　（名）閻魔堂　（名）閻魔を祀りてある堂。當流小栗判官「上野が原の閻魔堂へ參詣せしに」

えんまみやう-ぶくろ　（名）延命袋　（名）俗間に傳へていふ寶の名。膨脹れたる囊の、口を括りたるを畫きたるもの。えんめいぶくろ。

えん-みやく　（名）緣脈　（名）【植】植物學上の用語。葉の緣邊に沿ひて走れる葉脈。

えん-む　（名）一烟霧　（名）一烟と霧と。北史「高丘之「近瞻烟霧、遠歸風雲」鮑照詩「短棚不能飛、徘徊烟霧裏」二細廊の浮遊して、大氣の混濁すること。

えん-むすび　（名）緣結　一男女の緣を結ぶこと。えんぐみ。拝統天皇歌軍法「悉くも天皇と引き合ふ帶の緣結び」二遊女などの する一種の遊戯。多くの男女の名を紙に記して捻り、無心に結び合はせて配合をトふこと。三男女の名を小さき紙に記し、社寺の格子などに、紅指又は小指にて結びおき、其の人と夫婦とならんことを祈る一種の迷信。

えん-めい　（名）一延命　一命を延ぶること。長命。字津保「梅花笠「女はおしなべては、えんめい・良災をむねとして」漢書「鄭「錦行重道延命方」二【植】えんれいさう（延齡草）の異名。平治「内裏「扁鵲が門には何かあるといふ。延命といふ草を植ゑたり」

えんめい-さく　（名）延命菊　（名）【植】ひなぎくの異名。

えんめい-ぶくろ　（名）延命袋　（名）【植】あつもりさう（萩盛草）の異名。

えんめい-さう　（名）延命草　（名）【植】ひきおこしの異名。

えんめい-ぶくろ　（名）延命袋　（名）えんれいさう（延齡草）の異名。

えん-めつ　（名）烟滅　（名）烟の如く消え滅ぶること。陳琳文「隨波漂流、與烟俱滅者、亦甚衆多」

えん-もじ　（名）閻文字　（名）えんま（閻魔）をいふ、女詞。狂言「八尾「先づ口上斗を見やう。閻文字樣參る、地よりと書かれ

た」

えんや 〔艶冶〕 なまめきて美しきこと。

えんやう 〔炎陽〕（名） けうやう（驕陽）に同じ。

えんやらやっと 〔縁由〕（名） ゆかり。たより。つづきあひ。由来。

えんゆ 〔縁由〕（名） 修辞法の一。縁ある語句を添へて主材を修飾するもの。枕詞・序詞の類。

えんゆ-はふ 〔艶容〕（名） あてやかなるすがた。色香ふかきかたち。

えんよう 〔掩抑〕 おさへとどむること。朗詠「第五絃聲敢掩抑、瀧水凍咽流不得」

えんよく 〔閻羅〕（名） えんま（閻魔）に同じ。

えんら 〔閻羅〕（名） えんま（閻魔）に同じ。

えんらう 〔烟浪〕（名） えんば（烟波）に同じ。平家三「妙典是れを賜はって、萬里の烟浪を凌ぎつつ大宋國へぞ渡りける」

えんらく 〔宴樂〕 酒を飲み樂むこと。酒宴して樂むこと。易經上篇「君子以飲食宴樂」左傳昭公元年「宴樂以早、亦非禮也」

えんらわう 〔閻羅王〕（名） えんまわう（閻魔王）に同じ。陪書「生爲上柱國、死作閻羅王、斯亦足矣」

えんらん 〔烟嵐〕（名） 〔らん（嵐）は山の氣〕けむりともやと。朗詠「重疊烟嵐之雖處、殿寺僧歸」賈島詩「浩渺浸雲根、烟嵐沒遠村」

えんり 〔厭離〕 佛語。穢れたる此の世を厭ひ離るること。徒然草「六塵の樂欲多しといへども、皆厭離しつべし」

えんりう 〔淹留〕 久しく逗留すること。楚辭九懷「塞淹留而無成」

えんりやう 〔炎涼〕（名） 炎ゑさと涼しさと。勢ひの盛んなることと衰ふることと。齊書豐之「裁化變於寒暑、布政司於炎涼」李白詩「衆枯異炎涼」

えんるゐ 〔縁類〕（名） つづきあひ。縁者。縁邊。桃歌加留多「親有り、兄有り、一門有り、縁類ゆかりの悅びの」

えんるゐ 〔鹽類〕（名） 〔化學の水素原子を、金屬又は之に相當する原子團にて置換して得たる化合物。

えんるゐ-せん 〔鹽類泉〕（名） 一鹽類を含む鐵泉。

えんれい 〔延齡〕 齡を延ぶること。延年。拾遺記「體如草之香、久食、延齡萬歲」

えんれい 〔艶麗〕 あてやかに、うつくしきこと。あだめきうるはしきこと。南史張貴「采其尤艶麗者、以爲曲調、被以新聲」

えんれい-さう 〔延齡草〕（名） 【植】百合科、延齡草屬の多年生草本。莖の高さ一尺許り、其の頂に三葉を輪生す。葉は卵圓形鋭頭なり。花梗は葉間中央より生じ、一花を著け、五月頃帶紫色の花を開き、球形の小漿果を結ぶ。我が國、各地の山地陰濕の地に自生す。往時は地下莖を藥用に供せり。えんねんさう。えんめい。えんめいさう。

（うさいれんえ）

えんろ 〔沿路〕（名） えんだう（沿道）に同じ。

えんわ 〔燕窩〕（名） えんず（燕巢）に同じ。

えんわう 〔閻王〕（名） えんまわう（閻魔王）の略。發心集七「閻王の御使、白髮丸にて侍る」

えんわさい 〔燕窩菜〕（名） えんず（燕巢）に同じ。

えんね 〔炎威〕（名） 夏の暑さの、もゆるが如き威（イキホヒ）。劉禹錫詩「吟風起、天籟、蔽日無炎威」

えんを 〔厭惡〕 いとひにくむこと。緣語。智度論「色界中多味著、禪定樂、無厭惡心」

えんを-の-ざ 〔宴穩座〕（名） えんのざ（宴座）と、をんのざ（穩座）との略。えんのざ（宴座）を見よ。

お

お 五十音圖にて第五、即ち、阿行於列の假名。伊呂波歌にては第廿七の假名。歷史的假名遣にて、之と音同じきを及び語中・語尾のほとに區別せんが爲め、奥のおとも云ふ。伊呂波歌中の順序によりて名づけたるなり。

字體 【萬葉假名】 淤・於・飫・哈・意・奚・隱・憶・應・愛。 【平假名】 お・おゝお。 【片假名】 オ・ヰ・オ・オ・才（以上於の偏より）。 ヲ（於の旁より）。 ヱ（於より）。

表はす音 淤・於・飫・哈は吳音オ、意・奚は漢吳音イ、隱は吳音オン、憶は吳音オク、應は吳音オウ、愛は漢吳音アイなり。此れ等を以てオの音を表はせり。現今おの表はす音は、

一、表音的假名遣にては （イ）イの母音、即ち、咽喉より鼻腔への通路を閉ぢ、口を稍廣く開き、舌の後部を高めて軟口蓋に近づかしめ、脣を窄めて兩脣の間を圓形となし、聲帶を振動せしめて發する樂音にして、聲音學にては o を以て表はすもの。之を他の母音に比するに、開口の度は略エと同じくして、アよりも狹くウよりも廣し。されば オは開口の度を少なくすればアに近づく。此の音は種種の子音の後に來たり、之と合して一音節をなし、於列音を作る。（ロ）初の下にう又はーを添へたるものは、前項に舉げたる音の長音を表はす。「おうえん」（應援）。「おーすとりや」（墺地利）。「おーでる」（河名）などの如し。地方によりて、之をオオ又はオウと二音節に發音することあり。

二、歷史的假名遣にては （イ）一の（イ）に同じ。（ロ）一語中にて初の直下にう・ふ又はほあるものは、オの長音に發音す。「おうたい」（應對）。「おうな」（嫗）。「おふし」（音オ（啞）。「おほし」（音オ（多）。「おほやけ」（音オ（公）の類。之等はもとオウ・オフ・オホと發音せしが、音變化の結果、オフがオウと混同し、オホもオオとなり、次いでオウ及びオオは音の同化及び音連續上の便宜によりて、オの長音となりしなり。（ハ）漢語の熟語に於いて上の語がんを以て終はる時、下の語の初めなるおはノと發音することあり。「くわんおん」（音カンノン（觀音）の類にて、之は或る特殊の語に限り、一般には行はれず。其の由來につきては**あ**の條二の（ト）を見よ。（ニ）漢語の熟語に於いて、上の語が入聲にてつを以て終はる時、下の語の初めなるおはトと發音し、同時に上の語の終はりのつを促音とする事あり。「ぜつおん」（音ゼツオン（舌音）の類。之は或る特殊の語に限る事にして、一般には行はれず。其の由來につきては**いの**條二の（ト）を見よ。

オ （名） 〔おもて（表）の略〕索引などにて、書籍の丁數の、表なることをあらはす符號。「十三丁オ」

お （感） 一應ふる聲。一說、をなりと。今は、伴信友の應聲考、及び義門の於乎輕重義による。源氏物語「いづら、此の近江の君、こなたにと召せば、おといとけざやかに聞こえて出で來たり」落窪「御心しと世、思さん方にしなし給へとの給へば、おとて立ちぬ」 二俄かなる物事に出合ひて、やや驚きたる時、發する聲。

お 〔接頭〕 一尊敬・親重また親愛の意を表はす語。おん。ど（御）。み。景行紀「麻呂（ヲミ）」宇津保俊蔭「上きこしめして、お前に召し出でて」同藤原忠雅「麥のおものまぜたり」枕「ひのおましの方に、お物まる足普高し」 二中古以來、婦人などの名に冠せて呼ぶ語。太平記「菊亭紀に、御妻（ヲミ）とて、みめかたち類ひなく、其の品賤しからで、なまめきたる女房ありけり」三河物語「お千代樣、十三にして」

おーけすとら （英 Orchestra）（名） 一劇場内などにある奏樂所。二諸種の管絃樂器、并びに太鼓類にて組織せる音樂隊。

おーちゃーど-ぐらす （英 Orchard-grass）（名） 一植かもがや（蒋）の異名。

おーと-ぐらす （英 Oat-grass）（名） 一植おほかにつりの異名。

おーとみーる （英 Oatmeal）（名） 一種の食品。大麥の皮を去り、焙煎（ヒ）にて乾燥し、之を挽きわりたるもの。

おーと-むぎ （英 Oat）（名） 一麥（名） 一植からすむぎ（燕麥）の異名。

おーばー-こーと （英 Over-coat）（名） 洋服の外套（ガイトウ）。羅紗などにて作くる。外套。

おーむ （英 Ohm）（名） 【理】でんきていかう（電氣抵抗）を見よ。

おーらい （英 All right）（名） これにてよろしといふこと。又承諾の意を表はす語。

おーるごーる （名） 〔蘭 Orgel の轉〕 一西洋の樂器。樂譜に合はせて小針を植ゑたる圓筒を彈機にて廻轉し、櫛齒形の音階板に觸れしめて音を出だすもの。置時計などに裝置す。自鳴琴。

お-あいにく-さま 御生憎樣（名） あやにく（生憎）の敬語。

お-あかし 御明（名） らふそく（蠟燭）をいふ、女詞。

お-あがり 御上（名） 食物の敬稱。めしあがりもの。

おあがり-すぎはら 御上杉原（名） おぼびら（大廣）に同じ。

お-あさもの 御淺物（名） 廣蓋・硯蓋などの蓋をいふ女詞。

お-あし 御足（名） ぜに（錢）の異稱。あし。伊勢兵庫助注記「御養具」一、えなのをさめやうは、其の壺の中へ御きぬ一尺、くれなゐに染めて入れ申し候。御ふでかたがた、太平の御あし三十三、壺のなかへ入れ申し候。大方此の分に候」

お-あはせ 御合（名） 〔貝合せを合はするよりいふ〕〔動は まぐり（蛤）をいふ、面語。

お-あひ 御會（名） おめみえ。拜謁。

お-あひだ 御間（名） 物事の適合せざる狀にいふ語。不適當。

おあべ 御蜜（名） あへもの（雜物）に同じ。狂言「りやうばりのおあへ、白い飯ばし參ったか」

お-あん 御庵（名） 尼をよぶ敬語。おあん物語「子供集まりて、おあん樣昔物語なされませ」狂言「此のお寮を、皆おあんおあんと仰せらるるほどに」

おい 老（名） 老ゆること。年寄りたること。又、其の人。ちう（老）。古今雜上「大かたは月をもめでじ、これぞこの積もれば人のおいとなるもの」竹取「物思ひには、片時になん老いになりにけりと見ゆ」諸葛孔明「老いをな隔てそ、垣穂の梅」

おい かくる 老隱 老いたるが見えなくなる。古今春下「鶯の笠に縫ふてふ梅のはな、折りてかざさんおいかくるやと」

おい-が-み 老身 年老いたる身。おいの身。續古今雜上「七そぢに一とせ足らぬ老いが身の、いつとたのみて花をまつらん」

おい-が-よ 老世 おいの よ（老世）に同じ。後撰雜三「なには潟みぎはの葦の老いがよに、うらみてぞふる人の心を」

おい-に-ほる 老いてぼける。おいぼる。大織冠「やれ、老いに惚れたる有風」

おい-の-あゆみ 老歩 年よりての歩行。老人の歩行。謠天鼓「玉の床に、老いの歩みも足弱く、薄氷を踏む如くにて」

おい-の-いってつ 老一徹 老人の頑固にして、思ひこみたる事を必ず通さんとすること。

おい-の-いりまへ 老入前 年老いて後のくらしむき。五十年忌歌念佛「清十郎といふ子を持って、老いのいりまへ暮らしよき」

おい-の-おに 老鬼 年のくれに、人を老いしめんとて來るといふ鬼。大貳集「わがすつる年はくれぬと宿ごとに、やらふは老いの鬼にざりける」

おい-の-かくもん 老學問 年老いて學問すること。老人の學問。おいがくもん。宇津保藤原忠雅「よろづあやしくならはぬここちこそ、よき物の師なりや中將老いの學問をなどなん」

おい-の-かげ 老影 老い衰へたるかげ。續拾遺雜三「見るままに老いのかげこそ悲しけれ、むそぢ餘りの有明の月」

おい-の-かざし 老插頭 老いて頭に附くるもの。白髮などに譬へてもいふ。續拾遺釋教「今はまた佛のために手折るかな、老いのかざしの秋の白菊」

おい-の-かず 老數 老いたる年の數。古今春歌「積もれる年をしるせれば、五つの六つになりにけり。これに添はれるわたくしの老いの數さへやよければ」

おい-の-くりごと 老繰言 年老い、記憶鈍くなりて、同じ事を繰りかへし言ふこと。吾吟我集「口のうちに唱ふる阿彌陀佛かみし、手に持つ數珠も老いのくり言」齋門松「老いの繰言、眼に涙。問はず語りに、古へを思ひ出したる風情なり」

おい-の-さか 老坂 年の六節に積みのぼるを、坂路を上ぼるに譬へていふ語。後拾遺雜三「君を祈る年の久しくなりぬれば、老いの坂ゆく杖ぞうれしき」

おい-の-しぼみ 老萎 老い衰ふるを、花のしぼむに譬ふる語。新六帖「年どとに撫づとはすれどゆづるはの、かひこそなけれ老いのしぼみは」

おい-の-すゑ 老末 老年の末。源氏「いくばくも侍るまじき老いの末に、うちずてられたるが、つらくも侍るかな」

おいのそこ 老底　老いて年齢のはてに至れるを、物の底に至れるに譬ふる語。おいのすゑ。夫木「月日のみ流るる水とはやければ、老いの底より年はかへらず」

おいのたもと 老袂　老人の著たる衣のたもと。續千載「さのみなど涙の咎とかこつらん、袖にも濡るる老いの袂を」

おいのつかひ 老使　使の來りて、年老ゆるを知らずるものと見ていふ語。夫木「君が代の盡きぬ千歳の友とならん、老いのつかひに無しと答へて」

おいのつと 老土産　おいづと老土産に同じ。清輔集「この世には忘れかたみにつみもちて、老いのつとなる忍ぶ草かな」

おいのつまぎ 老爪木　老人の樵りたるつまぎ。六帖「落ちつもる松をひろひて歳ふれば、おいのつまぎと人や見るらん」

おいのつもり 老積　年の多く積もりて老いたること。老いの末。源「いよいよ老いのつもりそひて、さかしきことと侍らじ」同「この常陸の守、老いのつもりにや、なやましうのみして」

おいのつゑ 老杖　老人のつく杖。謠「汐汲む桶の苦しきに、又力づく老いの杖」

おいのてならひ 老手習　おいのがくもん(老學問)に同じ。

おいのとも 老友　老人仲間の友。老年の相手。風雅「庭のおもに老いの友なる白菊は、むそぢの霜やなほかさぬべき」

おいのなみ 老波　年老いて面に皺のよるを、波に譬へていふ語。おいなみ。源「老いの波かひある浦に立ち出でて、しほたるるあまを誰れかとがめん」同「この國の事に沈み侍りて、老いの波さらにたちかへらじと思ひとぢめて、此の浦に年ごろ侍りし程も」公任集「年をへてわかの浦なるあまなれば、おいのなみには猶ぞぬれける」

おいのねざめ 老寐覚　老人のねざめがちなること。著聞「いかにせん山鳥のをも長き夜を、おいのねざめに憂ひつつぞなく」夫木「夜や寒き月や涼しき、明け方のおいのねざめに風ぞ身にしむ」

おいのはる 老春　春のふけたるを、人の年老いたるにたとふる語。暮春。續拾遺「いつまでか雲ゐの櫻かざしけん、をり忘れたる老いの春かな」

おいのひがみ 老僻　老いて、心のひがむこと。源「思ひのままに、こめたる所おはせぬ本性に、いとどおいの御ひがみさへ添ひにたれば」

おいのひがみみ 老僻耳　老いて、耳遠くなり、聞き過りの多きこと。大鏡「遠きほどに、おいのひが耳にこそはと思ひ給へし」

おいのひがめ 老僻目　老いて視力衰へ、見過りの多きこと。住吉「おいのひがめやらんとて、うちかへしうちかへし、よくよく見給ひて」

おいのふくろ 老袋　老いかがまりて、衣の腰などうちふくらみたるをいふ語。源氏「保憲女集「おいのふくろ腰に餘りて、家とじまち喜び」

おいのまくら 老枕　老人の臥床。續後撰冬「いかにせんひとり昔を慰ひかねて、老いのまくらに年のくれぬる」夫木「霜におく魂起きの鐘のねを、老いの枕にたぐへてぞ聞く」

おいのみ 老身　おいがみ(老身)に同じ。夫木「老いの身に見ても聞きても悲しきは、萩咲く宿のひぐらしの聲」

おいのやまひ 老病　老人の病氣。老衰の病。源手習「おいのやまひのいつともなきが、くるしと思ひ給へし」

おいのよ 老世　年老いたる時。おいが世。宇津保「かしこまりて、賜はせたりつる。おいの世に流れて清きくれ竹の、末の世にこそ結ぶ名もたて」

おいをおくる 送老　老年をおくりくらす。夫木「石の稀松の柱と住みそめて、老いをおくりし山ぞゆかしき」

おいをかむ 噛老　老いて齒の脱けたる口を噛み合はす。應筑波「おいを噛む齒もおちぶれて見苦しや、高野ひじりをおどすむく犬」

おいをせく 塞老　老いを塞き止む。何時までも老いぬやうにする。新古今「山川の菊の下水いかなれば、流れて人のおいをせくらん」

おいをたむく 手向老　老いたる年をたむけささぐ。夫木「ちはやふるかつまの宮の姫小松、おいをたむけてつかへまつらん」

おいをのぶ 延老　年の老いて來るを長引かす。謠「岩井の水は藥にて、老いを延べたる心こそ、なほ行く末も久しけれ」

おい (感) 一お既二に同じ。枕「物も云はでみすをもたげて、そよろとさし入るは臭竹の枝なりけり。おい、この君にこそと云ひたるな」二呼ばれて答ふる聲。源「おい、さりさりとうなづきて」三人を呼びかくる時、發する聲。(同輩以下に對して)

おいあし 老葦　枯れたる葦。かれあし。藻鹽草「老葦」

おいいり 老入　(名) おいいれ(老入)に同じ。

おいいりのがくもん 老入學問　おいのがくもん(老學問)に同じ。おい(老)の條を見よ。

おいいれ 老入　(名) 老いたる後。老年になること。又、その境遇。おいいり。枕狩倒本地「おい入れの榮華まで、此の頃思案しめて置いた」

おいうぐひす 老鶯　(名) 暮春より、夏にかけて鳴く鶯。らうあう(老鶯)。

おいうま 老馬　(名) 年老いたる馬。らうば(老馬)。著聞「老うまは草喰ふべくもなかりけり」

おいえび 老蝦　(名) 老いたる蝦(老人の腰の、蝦の如く曲がるに譬ふ)。夫木「今はわれ世をうみにすむ老えびの、もくずが下にかがまりぞする」

おいおい (感) 「おいを重ねていふ」一承諾したる時、發する聲。おう。榮華「おいおい、さなりさなりとの給ふほど」二泣く時、發する聲。落窪「からうじてはひ乘りにけれど、かひなつきそこなひて、おいおいと泣き給ふ」

おいおいし 老老　(形二) 年よりめきて見ゆ。老人らし。榮華「御息所も清げにおはすれど、ものおいおいしくいかにぞやおはして」

おいおとろふ 老衰　(自動二) 老いて衰ふ。老衰す。竹取「老いおとろへ給へるさまを見奉らざらんこそ慰しからめ」

おいかがまる 老屈　(自動四) 老いて腰曲がる。老いくづほる。源「おいかがまりて、むろのとにもまうでずと申したれば」

おいがくもん 老學問　(名) 老年になりての學問。おいのがくもん。宇津保「かく、おいがくもん皆せらるるなかに、おいくちる　老朽　(自動上) 次條の口語。

おいくづ 老朽　(自動上) 老いて物の用に立たぬやうになる。老いくづほる。老朽す。

おいくづほる 老崩　(自動二) 老いて弱る。老いぼる。枕「昔おぼえて「色好みの老いくづほれたる」源「少女「老いくづほれたらん人のやうにもの給ふかなとの給へば」

おいぐむ 老曾我　(自動四) 年ふく。榮「母これを見給ひて、遙かに見ねばや、おいぐみて見ゆるものかな。十郎よりおいぐみて見ゆ」

おいこ 老子　(名) 年老いて生みたる子。年寄り子。狭衣「おいごは人の大事なる事と聞かせ給へば、さてげにくるしうさせ給ふ」

おいこころ 老心地　(名) 老いたる心。おいごころ。落窪「中納言、老ごころにまどひ給ひぬ」

おいこころ 老心　(名) 前條に同じ。謠「親子は三世の首枷と、聞けば誠に老心」

おいこたち 老御達　(名) 年老いたる女房たち。老女ども。源「おまへの梢ほろほろと殘らぬに、おいごたちなど、ここかしこの御木丁のうしろにかしらをつどへたり」

おいこみ 老込　(名) 老いこむこと。老衰。「あれはおいこみて用にたたぬ」

おいこむ 老込　(自動四) 次第に老いに至る。老衰す。天明は「やり歌「頭巾かぶっておいこみ麥の畝殿、云はねど知れし蒔老人」

おいこゑ 老聲　(名) 衰老に近き聲。終はりに近き聲。枕「鶯中舞夏・秋の末までおいごゑに鳴きて」

おいさかる 老盛　(自動四) 晩年になりて榮ゆ。榮華「おいさかり命のぶらんやうにおぼゆる、殿のありさまになん」

おいさぶ 老荒　(自動上) 老いの度進む。新六帖「野邊見れば花のさかりのすぎはて、おいさびにける草の霜かな」

おいさらぼふ 老晒　(自動四) いたく老い衰ふ。老い朽つ。徒然草「むく犬の、あさましく老いさらぼひて、毛はげたるを」

おいさり 老曳　(副) おう、さなり。おう、さうである。納得する時にいふ語。源「おいさりおいさりと、うなづきて」

おいし (形二) 「御美(オ)しの義」味佳し。うまし。美味なり。浮世床「なんぞおいしい物がございますなら、押掛けのお客に參ります」

おいしげ 老茂　(副) おいしさう。うまさう。

おいしさ 老舌　(名) おいしき度合。うまさ。浦島年代記「丹後の主醫「そのおいしさはなんとして」

おいした 老舌　(名) 老いて齒落ち、物いふ時、出てがちなる舌。萬「もものせに老舌(オイ)出でてよよむとも、われは脈はじ慰はますとも」

おいしに 老死　(名) 老いて死ぬること。もうし老死。平家「今年は六十四にぞ成られける。老死と云ふべきにはあらねども、宿運忽ちに盡きぬれば」

おいしょ (感) 人の注意をうながし、又人の注意をうけて事を爲す時などの掛聲。よいしょ。

おいしらく 老白　(自動四) 老いて色白む。又、老人の白髮となれるに譬へていふ。清輔集「山かげにおいしらけたる椎柴の、わかばえ出づる春もありけり」

おいしらぶ 老痴　(自動四) 老いぼける。老いしる。老耄す。源石「院の御時よりさふらひて、老いしらへるどもは」同「馬中に、おいしらひて打ちなき給ふ」

おいしらむ 老白　(自動四) 老いて髮白くなる。宇治拾遺「むかし晴明が土御門の家に、老いしらみたる老僧きたりぬ」

おいしる 老痴　(自動二) おいしらぶ(老痴)に同じ。宇津保「われのみ貧しくおいしれにたるやとぃふ」

おいしれる 老痴　(自動下) 前條の口語。

おいせぬみや 不老宮　(名) わかぎみ(若君)の異稱。長壽を祝ひていふ語。老いしれたる者。

おいそげもの 老急物　(名) 紫式部日記「はづかしく、人にはかうおいそげものと見おとされにけるとは思ひ侍れど」

おいそれ (感) とくと前後を考へず、直ちに應ずる時の聲。

おいそれもの (名) おいそれと、深く考へずに物事をなす人。

おいた 御板　(名) かまぼこ(蒲鉾)をいふ。宮女の詞。大上臈御名之事「女房詞。一、かまぼこ。おいた」

おいた 小兒の語。いたづら。わるさ。

おいた 惡戯　(名) しほ(鹽)をいふ。宮女の詞。大上臈御名之事「女房詞。一、しほ。おいたみ。しろものとも」

おいたみ 御市　(名) 一いちまつにんぎやう(市松人形)をいふ。上方の方言。二菓子の一種。浮世風呂「夫れはお市といふ菓子でござります」

おいづき 老月　(名) 陰暦十四日以後の月。

おいづく 老就　(自動四) 一老年になる。年よる。萬「かく慰ひぬ、意伊豆久(イヅク)あが身、けだしあへむかも」二年よりめきてあり。老人らしくあり。源「みちのくに紙に、おいづき書き給ひて」

おい-づと 老土産 (名) 老いのみやげ。老人のみやげ。おいのつと。山家集「おいづとに何をかせまし、此の春の花待ちつけぬ我が身なりせば」

おい-づま 老妻 (名) 年老いたる妻。らうさい(老妻)。犬子集「しほの無きにぞ厭きはてにける。匂おい妻の思はれ顔のしれ笑ひ」

おい-つむ 老積 (自動ま) 年つもる。年よる。貫之集「若菜つむ春のたよりに年ふれば、おいつむ身こそわびしかりけれ」

おい-づる 老鶴 (名) 年老いたる鶴。東國紀行「旅衣うらやましさはおいづるの、とびたちぬべき心ちを知れ」諸書「若きを先立てて、つれなく残る老鶴の」

おい-て 於 (接) (おきての音便)にて。で。名義抄「於ニ保元ニ」保元三巻「日頃申す所の昇殿において、疑ひあるべからず」

おい-で 御出 (名) 一出づ・往く、又來ること等の敬語。「何處へ御出でになる」狂言「すきはり障子をするりとあけ、するすると入いて」同「鎌西の八郎爲朝が、鬼が島へ御出でなされ」同「今日は聖様のおいでぢや」同「ようおいでなされた」二をる居の敬語。「内においでになる」三おたび(御旅)に同じ。

おいで おいて 御出御出 小兒などを、手招きして呼ぶこと。

おいて なさい 一來たれ・居れ・行けの敬語。二よく來たれりと、來客に對していふ語。

おいて-さぶらひ (名) 次條に同じ。

おいて-けぼり (名) 〔東京本所區の堀の名より起こると〕跡に見棄てて立ち去ること。おいてきぼり。おきざり。

おいで-ぶぎやう 御出奉行 (名) 鎌倉・室町時代の制。將軍家の出行あるとき、供奉人の交名を定め、路次の行列を整へなどすることを掌るもの。

おい-いでる 御出 (自動ま) 一出づ・往く、又來る等の敬語。二をる居の敬語。

おい-なすび 老茄子 (名) 枝につきて、時を經たるなすび。小大君集「くひどころ見ればうねなる老いなすび、饑ゑたる人のくへるなるべし」

おい-なみ 老波 (名) おいのなみ(老波)に同じ。おい(老)の條を見よ。諸芸「打つや打たずや、老波の立ち寄る影も夕月の」

おい-なみ 老次 (副) おいゆくまま。おいゆくにつけて。萬葉「こともなくありしものを、老奈美にかかる戀にも我れはあへるかも」

おい-なむ 古語。老ゆ。名義抄「衰ニ老ニ」

おいなり-さん 御稲荷様 (名) いなりずし(稲荷鮨)に同じ。

おい-なる 老成 (自動ら) おゆ(老)に同じ。源浮舟「いと見にくく老いなりて」

おい-にふだう 老入道 (名) 年老いたる入道。砂石集「常州筑波山の麓に、老入道有り」

おい-にようばう 老女房 (名) 老いたる女房。年上の妻。老妻。雪女五枚羽子板「此の女が私に六十二の老女房、當年八十五歳」

おい-ぬ 御犬 (名) 次條の略。柳樽「三角な雪見お犬が嬉しがり」

おいぬ-こども 御犬子供 (名) 江戸幕府、大奥に仕ふる少女。お鎧口詰以下、お三の間までの雑用を爲す。おいぬ。

おい-ねずみ 老鼠 (名) 年を經たる鼠。能馬樂屋風西寺の於以鶴須美「若鼠、御もつむづ、袈裟つむづ、袈裟つむづ、法師に申さん、師に申せ」

おい-の 老方人 (名) 老いて、學藝などにつき、一方の重しとなる人。其の道に老功なる人。徒然草「年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、此の人の後には誰れにか問はんなどいはば、老いのかたうどにて、生けるもいたづらならず」

おい-の-け 老氣 (名) 老衰の風。老老。大鏡「老いのけの甚しきは、皆忘れ侍り」

おいのり-ぶぎやう 御祈奉行 (名) 鎌倉時代の制。將軍家にて、息災を祈り、また水旱・疾病などのをり、陰陽家・佛家などに命じて祈請せしむることなどを掌る臨時の職。

おい-はつ 老果 (自動ま) 極めて老い衰ふ。萬葉「者奚ぬわが身一つに、七へ花咲く」日本紀竟宴和歌「十つ乙餘り八つ乙をこゆるたつの駒、君すさめねば於伊波傳ぬべし」

おい-はひ-かた 御祝方 (名) 室町時代の制。將軍家にて規式を行はるるとき、將軍家及び御相伴衆などに賜はるべき酒肴を調進する役。

おいはひ-とり 御祝取 (名) 吉凶の事ある家に至り、慶弔の詞を述べて物を乞ふもの。

おいはひ-ぶぎやう 御祝奉行 (名) 室町時代の制。將軍宣下・任大臣大饗・拜賀など、祝儀の式行はるる時の饗饌のことを掌る役。

おい-はむ (自動ま) 老いたる容になる。年よりめく。枕「老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて」

おい-ひがむ 老僻 (自動ま) 老いて心ひがむ。源氏物語「さはいへど、深からぬけにや、おいひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる」

おい-ひと 老人 (名) 年老いたる人。らうじん(老人)。天武紀上「古老(ヒトオヒ)」萬葉「古へゆ人のいひける、老人(ヒトオヒ)のわかゆてふ水ぞ、名におふたきのせ」黄菊亭記「貴人の一家の敬稱。二人の妻の敬稱。奥方。内室。内儀。

おい-へ 御家 (名) 一貴人の一家の敬稱。二人の妻の敬稱。奥方。内室。内儀。

おいへ おら おら 〔からは柄と空とに通ず〕家柄を誇る者を嘲る語。

おいへ-さやうけん 御家狂言 (名) おいへもの(御家物)に同じ。

おいへ-さうどう 御家騒動 (名) 江戸時代、諸藩の家の内訌。

おいへ-さま 御家様 (名) 内室。奥方。妻。

おいへ-ほま 御家頬 (名) 面頬(ホホ)の一種。繊も髭もなく、なめらかに作りたるもの。

おいへ-もの 御家物 (名) 御家騒動を脚色したる芝居狂言。

おいへ-やう 御家様 (名) 次條に同じ。梅寛筆記「當時の書家に、御家様といふ事あり」

おいへ-りう 御家流 (名) 伏見天皇の皇子、青蓮院尊圓法親王の筆法を傳へたる書體の一流。御家やう。

おい-ほく 老耄 (自動く) おいほる(老耄)に同じ。老耄す。落窪「おいほけて、もののおぼえぬままにのたまへば」榮華本紀「殿、あさましうおいほけ給ひて」

おい-ほくれる (自動下) 前條に同じ。

おい-ほける 老耄 (自動下) おいほく(老耄)の口語。

おい-ほふし 老法師 (名) 年老いたる法師。枕「老法師のいみじげなるが手にて」

おい-ほる 老耄 (自動ら) 老いて心鈍くなる。おいほく。ほる(耄)。老耄す。老屈す。顯宗紀「老耄(オイボレ)虚羸」宇津保物語「まかりありきもせず物うくなりにたるは、むとくになりもて侍るにや侍りつらん、老いほれたるとだに思ひ定めぬ」

おい-ほれ 老耄 (名) おいほれたること。おいぼれ。新六帖「たらちねの親のいさめも昔にて、身は老いほれのはてぞ悲しき」

おい-ほれ 老耄 (名) 一前條の訛り。二老人を罵りていふ語。國姓爺「おのれ老いぼれ餘さじと、一文字に切りかかる」

おい-ほれる 老耄 (自動下) おいほる(老耄)の口語。

おい-まつ 老松 (名) 年經たる松。(若松の對)諸芸「年をおい松も、緣は若木の櫻小松」

おい-いみ 御忌 (名) 〔此の月は神出雲國に集まり給へば、忌み慎むべき時なる義〕陰暦十月を言ふ。出雲國の方言。

おいみ-あれ 御忌荒 (名) おいみ即ち陰暦十月、空の荒るること。神荒れ。

おい-むしゃ 老武者 (名) 一年老いたる武者。(若武者の對)平家七「實盛、そのうへ老武者ではあり、手塚が下にぞ成りにける」二老巧なる武者。「三河物語」「信玄は老むしやと申し、度度の合戰に馴れたる人なり」

おい-や (感) お嘘に同じ。源宿木「おいや、聞きし人ななりとおぼし出でて」丈夫なり、娘はそれぞれにかたづくし」

おいや (感) 一思ひ當たりし時、發する聲。なるほど。おお。狂言「おう、それそれ、その伊勢寺本、伊勢寺本」同「おう、これは映えやうてよかろ」二應諾の意を表はす聲。狂言「いやでも、おうでもさする」同「おう、抱きませう抱きませう」三驚き叫ぶ聲。宇治拾遺「ただつね、おうといひて逃げにけり」

おう-あ 〔一〕歐亞 (名) 歐羅巴洲と亞細亞洲と。

おう-おう (感) 〔おうを重ねたるもの〕一呻吟する聲。わめく聲。宇治拾遺「往生すべき相あるもの、見きられてはいかでか見んや、おうおうとをめきければ」同「人の妻まくものあり、やうやうおうおうといひて」二大に泣く聲。國姓爺後日合戰「ただおうおうと哮く聲は、磯山風に音添へて」

おう-か 〔一〕謳歌 聲をあはせて一齊に歌ふこと。衆人、其の德を稱詠して鬻謳することの。孟子上「謳歌者、不謳歌堯之子、而謳歌舜」

おうか の せつ 謳歌說 誰れ云ふとなき風說。太平記十八「天下の反覆遠からじと、謳歌の說、耳に滿ち候」

おう-き 〔一〕嘔氣 (名) 〔おう(嘔)は嘔吐〕へどをつかんとする氣もち。

おう-さ 〔一〕應器 (名) 僧の托鉢の器。

おうぎ-しゃ 〔一〕應議者 (名) 古代の刑法にて、議(ギ)の特典を得る者。

おう-きふ 〔一〕應急 急場の間に合はすること。急に應ずること。魏志「所送馬甚應其急」

おうきふ-てあて 應急手當 (名) 負傷又は急病などの時、その急に應ずる手當。

おう-くわ 〔一〕歐化 歐米諸國の風俗・思想等を學びて、其れに同化すること。

おう-くわ 〔一〕應化 (英 Adaptation) 一(生物)生物が其の周圍の事情に應じて、自己の組織、若しくは機能を變じ行く作用。又、此の作用によりて變化したる狀態。二(哲)吾人の心が、外部の事情に隨ひて、或ひは其の作用を變じ、或ひは傾向を改むること、及び其の結果。適應。順應。

おう-け 〔一〕應化 佛語。佛の、時に應じ、本身を異體に變化して出現すること。應現。應作。西域記「降迹應化、爲一老父」

おうけ-しん 〔一〕應化身 (名) 佛語。おうじん(應身)に同じ。

おう-けん 〔一〕應現 佛語。おうげ(應化)に同じ。觀經私記「釋迦許說、彌陀應現」

おうけん-しゃ 〔一〕應減者 (名) 古代の刑法にて、減(ゲン)の特典を得る者。

おう-さ 〔一〕應作 (應現の作用の義)おうげ(應化)に同じ。太平記「宮殿大極、兩所權現はこれ伊弉諾・伊弉册の應作なり」

おう-さい (名) 〔うさいおう(于思翁)に同じといふ〕申樂(サルガク)にて、三番目(サンバメ)の唱ふる詞。

おうしい (名) おしおしを見よ。

おうし-しう 〔一〕歐洲 (名) 歐羅巴(ヨーロッパ)・洲の略。「歐洲諸國」

おう-しう 〔應酬〕人に應(オウ)へ酬ゆること。應答。王令詩「清坐想高絶、語言誰應酬」陸游詩「老來萬事嬾、不獨廢應酬」

おう-しゃう 〔毆傷〕【法】おうださうしやう。〔毆打創傷〕の略。明治二十二年十一月法律第二十八號第五、第二條第三條の罪を犯し因て議員を毆傷したる者は刑法毆打創傷の條各本に照し一等を加へ重きに從て處斷す」

おう-しょう 〔應鐘〕(名) ㊀十二律の一。じふにりつ(十二律)を見よ。周禮大司樂「乃奏太蔟歌應鐘、鉦成湏、以祭地示」 ㊁陰曆十月の稱。禮記月令、律中應鐘注孟冬氣至、則應鐘之律應」

おう-じん 〔應身〕(名) 佛語。佛の三身の一。佛が衆生濟度のため、種種の形となりて人界に現はるるもの。應化身。大藏法數「應身者、應周萬物、化治衆生、隨其心量、現種種身、譬如一月現於衆水、而无去來之相」

おうじん-ぶつ 〔應身佛〕(名) 佛語。應身の佛身。

おう-ず 〔應〕(自動サ) ㊀答ふ。返答す。應答す。 ㊁從ふ。つれて起つ。和して起こる。「指揮に應ず」「募集に應ず」「響きの如く應ず」 ㊂合ふ。かなふ。あてはまる。適合す。「病に應じて藥を投ず」「狂言、分限に應じて、それぞれに禮を致します」

おう-せい 〔應制〕天子の命により、詩歌を詠進すること。菅家文草「九日侍宴、同賦〈吹〉花酒、應制」「時御會部類記」「松色春久といへる事をよめる、應制するやまとうた」

おうせい-しゃ 〔應請者〕(名) 古代の刑法にて、請(オウ)の特典を得る者。

おうせい-ちゅう 〔應聲蟲〕(名) 病氣の一種。下文を見よ。閑田次筆「應聲蟲の病ある由聞き傳へて中略いかにも腹中に人聲ありて、病人の聲に應じて、その詞の如く言ふこと分明にきこゆ」

おうせう-ぬん 〔應召員〕(名) 陸軍又は海軍の召集に應じて、指定地に參集すべき人。陸軍召集條例第十條第二項「應召員とあるは召集に應ずへき者を謂ふ」

おう-せつ 〔應接〕 ㊀人に應(オウ)へあへしらふこと。あひしらひ。 ㊁人に出會ふこと。面會。會見。晉書百石、獨處一室、簡于應接」

おうせつ-じょ 〔應接所〕(名) 應接の爲めに設けたる室。

おう-せん 〔應戰〕敵の挑みに應じて戰ふこと。

おう-そ 〔應訴〕原告の訴へに對して、被告が陳述すること。民事訴訟法第百九十八條五項「被告は陳訴訟費用の辨濟を受くるまで應訴を拒むことを得」

おうそく-しゃ 〔應贖者〕(名) 古への刑法にて、犯罪あるとき、贖(オウ)を納めて罪を贖ふことを得る資格ある人。即ち、應議者・應請者・應減者、及び八位・勳七等以下十二等以上の人、若しくは官位・勳等減を得る者の父母・妻子。

おう-だ 〔毆打〕うつこと。人の身體に暴行を加ふること。打擲。舊刑法第三百「毆打に因り誤て他人を創傷したる者」

おう-たい 〔應對〕人の問ひに對(オウ)ふること。あへしらひ。應接。左傳襄公廿年「事成乃授子子大叔、使行之、以應對賓客」論語子路「嘗酒掃應對進退、則可也」

おう-たう 〔應當〕あてはまること。あたること。民法第百四十一條三項「其の起算日に應當する日の前日」

おうたう-じつ 〔應當日〕(英 Corresponding day) (名) 或る一定の日に應當する日。民法第百四十一條三項「月又は年を以て期間を定めたる場合に於て最後の月に應當日なきとき」

おう-だく 〔應諾〕應じて承諾すること。

おうたく-わい 〔御歌會〕(名) 宮中に催さるる和歌の御會。

おうたくわい-はじめ 〔御歌會始〕(名) 年の始めの御歌會。

おうた-さうしゃう 〔毆打創傷〕(名) 【法】人を毆打して、其の身體を傷害すること。毆傷。舊刑法第三百九十五條、第乃至第三百五條「毆打創傷」

おうたさうしゃう-ざい 〔毆打創傷罪〕(名) 【法】舊刑法の罪名の一。人を毆打創傷して、休業・廢疾・篤疾又は死に致したる等によりて成立するもの。其の傷害の輕重と、犯謀の有無とによりて、其の刑に差等あり。舊刑法第三百三十三條「毆打創傷の罪」

おうた-わし 〔毆打致死〕(名) 【法】殺害の意思なくして人を毆打し、死に致したること。

おうた-どころ 〔御歌所〕(名) 宮內大臣の管理の下に、御製・御歌及び歌御會に關する事務を掌る所。所長・主事・錄事及び寄人・參候の職員を置く。御歌所官制「御歌所」

おうたどころ-さんこう 〔御歌所參候〕(名) 御歌所の職員の一。歌御會の事を分掌する奏任官待遇の名譽職。

おうたどころ-しゅじ 〔御歌所主事〕(名) 御歌所の職員の一。庶務を掌る奏任官。

おうたどころ-ちゃう 〔御歌所長〕(名) 御歌所の長官。御製・御歌の事を祗承し、所務を掌理し、所部職員を監督する勅任官。

おうたどころ-よりうど 〔御歌所寄人〕(名) 御歌所の職員の一。詠歌に關する編纂・撰述を分掌する勅任官、又は奏任官待遇の名譽職。

おうたどころ-ろくじ 〔御歌所錄事〕(名) 御歌所の職員の一。庶務に從事する判任官。

おう-たふ 〔應答〕おうたい(應對)に同じ。左傳僖公十二年「狄應且憎。杜注言狄難應答秦、而心實憎秦、無信」梁書傅昭「商較縱橫、應答如響」

おう-ち 〔御打〕(名) のしあはび(貽斗鮑)をいふ、女詞。

おう-つり 〔御移〕(名) うつり(移)を見よ。

おう-と 〔首〕(名) おひと(首)の音便。

おう-と 〔嘔吐・歐吐〕(おう(嘔・歐)と(吐)、何れもはく義)飲食物などを吐きもどすこと。吐すこと。へど。山海經「薄魚、一目、其音如歐。郭璞曰、如人嘔吐聲也」

おう-な 〔老女・嫗〕(名) 老いたる女。おむな。うばよ。老婆。靈異記中「嫗是子」宇津保藤原君「京わらはべ・おうな・おきな、召し集めてのたまはく」

おう-なし 〔奥無〕(形ク) あうなし(奥無)に同じ。

おう-ばう 〔應報〕善惡の所行に應じて現はるる吉凶の報い。中論「況人事之應報乎」

おうばう-しゅぎ 〔應報主義〕(獨 Vergeltungstheorie) (名) 【法】刑罰權の基礎に關する主義の一。刑罰を、犯罪に對する應報なりと說くもの。

おうば-ひがさ 〔御乳母日傘〕(名)

乳母に抱かれ、日傘をさしかけられて、大切に養育せらるること。骨董集「今の世、賤しき者の人に誇るに、おうば日傘にて育ちたる者ぞといふ諺あり」

おう-ぶん 〔歐文〕(名) ㊀歐米諸國に行はるる文字。橫文字。 ㊁電報にて、羅馬字・亞剌比亞數字及び歐文電報に用ふる記號の稱。

おう-ぶん 〔應分〕身分に相應せること。ほどにかなふこと。

おうぶん-でんぱう 〔歐文電報〕(名) 電報の一。歐文にて記載したるもの。和文電報の對。電報規則第八條「歐文電報」

おうぶん-りゃくがう 〔歐文略號〕(名) 電報の受信人が、自己の住所・氏名に常用する歐文の略號。此の略號を常用せんとする受信人は、其の配達を受くべき電信局所に登記料を納めて、登記を經るを要す。

おう-へ 〔御上〕(名) 勝手方より、奥の間を指していふ語。かみのま。太閤記「名古屋城主山里おうへ(十二間に七間半)には亭主夫婦、上がり口に料理人」

おう-へん 〔應變〕不慮の變に應じて、程よく處置すること。晉書羊祜「廟勝之算、應變無窮」

おう-ぼ 〔應募〕募集に應ずること。臨時事件公債規程第二十條「應募の申込」

おうぼ-かかく 〔應募價格〕(名) 【商】公債・社債又は株式等の募集に應じて、應募者の申し込む價格。臨時事件公債規程第八條「應募者は應募高應募價格及住所氏名を詳記したる申込書に申込高百圓に付金五圓の保證金を添へ」

おうぼ-かぶしき 〔應募株金〕(名) 【商】株式の募集に應じて、申し込みたる金額。應募資本金。

おうぼ-しほんきん 〔應募資本金〕(名) 【商】前條に同じ。

おうぼ-しゃ 〔應募者〕(名) 募集に應ずる者。臨時事件公債規程第八條「應募者」

おうほう-しゃみ 〔應法沙彌〕(名) さんしやみ(三沙彌)を見よ。

おうま-あづかり 〔御馬預〕(名) 江戸幕府の職名。官馬の飼養・調習等の事を掌る役。御召馬預。

おうま-かた 〔御馬方〕(名) 江戸幕府の職名。將軍の厩の事を掌るもの。

おうまんがとき 〔御まんがとき〕(名) おほまがときの訛り。

おうもと 〔御もと〕(代) おもと(御許)の訛り。かた言。

おうもん 〔御問〕質問に應(オウ)ふること。

おう-やう 〔鷹揚〕おほやう(大樣)の訛り。凱陣八島「さも鷹揚に來たりるる」「艶狩綱本地「物いひの鷹揚さ」

おう-よう 〔應用〕 ㊀ものに應じて用ふること。はたらき。宋書袁粲「器以應用、商以通財」宋史長孫「文章曉麗、應用不窮」 ㊁原理を實際に應じてはたらかすこと。又、理論を主とせずして、其の運用を論ずること。「應用化學」「應用心理學」「應用數學」 ㊂教授法にて、教授せられたる既得の知識を、他に應用せしむること。

おうよう-くわがく 〔應用化學〕(名) 【化】 ㊀化學上の應用に關する部分のみを研究する學科。生物化學・農藝化學・工業化學に分かつ。 ㊁こうげふくわがく(工業化學)に同じ。

おうよう-けいざいがく 〔應用經濟學〕(名) 【經】經濟學の一分科。經濟の理想、及びその理想に到達する手段を研究するもの。實地經濟學。(純正經濟學・理論經濟學等の對)

おうよう-りがく 〔應用力學〕(名) 【理】力學を應用する學科、即ち器械學の稱。

おう-よる 〔奥寄〕(自動ナ) あうよる(奥寄)に同じ。

おうら-ごてん 〔御裏御殿〕(名) うらかた(裏方)に同じ。

おうら-さま 〔御裏樣〕(名) うらかた(裏方)の敬稱。

おうりゃう-さく 〔應量器〕(名) おうき(應器)に同じ。祖庭事苑「鉢、梵語鉢多羅、此方云應量器」

おう-ろう 〔歐露〕(名) 歐羅巴にある露西亞の國土。(東鑑の對)

おう-ゑん 〔應援〕援(オウ)け救ふこと。すけぜい(助勢)。加勢。援兵。

お-お (感) ㊀應答の聲。いい。唯唯。祝詞式「神主・祝部等、稱唯(オオ)」 ㊁神樂の時、曲終はりて唱ふる聲。もと笑ふ聲より出づ。磐淨の聲といふは誤りなり。隨聲抄「神樂、阿知女法。本方拍子出、阿知女拍子」 ㊂思ひ出だしたる時、又、俄かなる事に遇へる時などに發する聲。おう。「おお、さうであった」「おお、寒い」賀古教信七墓廻「おお、それよ、人の話に聞きおきし」圓喬「おのれ、狂言三人片端「唖と申すものは中略おおさへ申せば濟む事でござる」

おお-こは 〔にかく〕女の、人を誑して金を取る手段をなす。(名言)妖計に陷しいる。

おお-い (感) 遙かに行く人を呼びかくる聲。狂言花荒「後から、おおい、おおい、田舍者、返せ返せと申して」

おおう (感) おおに同じ。狂言鳥追「おおう、お寺樣が善からう」

おおさ (感) おおに同じ。文武五人男「何の爲めの關所にか候ぞ中略おおさ、聞きも及ぶらん中略きっと搦め取らんための關所よ」

お-おさへ 〔御押〕(名) おさ(抑)に同じ。瓢箪鯰「又おおさへのお手元は、しつこい飲手ぢやないかいな」

お-おそれながら (名) 「御恐れながらの義」おそれながら(有恐)に同じ。長門平家「おおそれながら、君もくやしくとそ渡らせ給はんずらめ」

おおら (代) 自己を卑下していふ第一人稱。言おら。

おおん (感) 唖などのうめく聲。おお。おおん、大藏狂言三人片端「竹取り出し、おおんおおんというて叩く」

おが (名) おほが(大鋸)の略。下學集「大鋸、おが」

お-かあ (名) 小兒の、母をよぶ稱。

お-からはこ 〔御香箱〕(名) 女兒の陰門をいふ。隱語。俚言集覽

お-かか (名) をいふ、女詞。

お-かがみ 〔鏡餅〕(名) 次條の略。曾我會稱山「供へのおみき・お鏡に、向かふ心のますぐなる」

お-かがみもち 〔御鏡餅〕(名) かがみもち(鏡餅)に同じ。おかがみ。

おかーくづ 〔大鋸屑〕(名) 大鋸にて、材木など挽きて出でたる屑。ひきくづ。三十二番歌合「のこぎりのこめもはるの山風に、花の香ながらおがくづぞ散る」

(諺)大鋸屑も言へばいはる 無用なるおがくづも、有用なりといへばいはる。如何なるものにても、つけやうにて道理のつくに譬ふ。毛吹草「おがくづもいへばいふ」

(諺)大鋸屑も取りえ　前條に同じ。

おかけ　(名)　㊀小兒の著くる前懸。胸より膝の下の邊まで被ふ。㊁しる(汁)をいふ、女詞。

おかげ　御蔭　(名)　㊀神佛のたすけ。冥助。加護。狂言釣女「惠比須三郎殿のおかげにより、定まる妻を授けて下だされい」㊁人より受けたる惠み。恩。狂言米市「毎年毎年、おかげでしまひます。忝うござります」犬子集「待人はおかげからぶる月夜かな」

おかげさま　御蔭樣　(名)　おかげといふ語に、敬意を含めていふ語。三世相錦繡文章「どうぢや、ちっとは開いたかや。おかげさまで落ち附きました」

おかげまゐり　御蔭參　(名)　江戸時代、主人又は父兄に告げず、沿道の人人の御蔭により、伊勢の內外宮に參詣すること。又、その人。ぬけまゐり。

おかこ　(名)　かこひもの(圍者)の略。浮世床上「さあさあ見さっし、いかいこと女が揃った。ありやありや、おかこまで出て來たぞ。何を寄せるだらう。先の旦那を寄せるのさ」

おかさ　御蓋　(名)　きざら(木皿)の異名。

おかさね　御重　(名)　小兒の物を乞ふ時、手を重ぬること。

おかさま　(名)　おかみさま(御上樣)に同じ。冥途飛脚下「忠三殿におか樣は無かったが、こなたには誰れでばしござるぞ」

おかざり　御飾　(名)　㊀神佛の前の裝飾。又は供物。㊁正月のしめかざり。大藏狂言松譲葉「上堂へ、正月のお飾りになるゆづりはを捧げまする」

(諺)御飾りの下を餘計くゞって居る　年を多く重ねて、經驗に富みたるに譬ふ。

おかし　置　(他動)　古語。おく(置)の敬語。萬五「二つの石を中略みてづから意可志(オカシ)給ひて」

おかし　(形)　をかしを見よ。

おかしまい　御借米　(名)　江戸幕府が、旗本・御家人に下げ渡したる、春・夏兩期の扶持米。

おかす　犯　侵　(他動四)　をかす(犯)を見よ。普通にはおかすの假名なれど、古書皆をかすなれば、其れに從ふ。

おかず　御數　(名)　〔數數取り合はする義〕飯の菜(サイ)をいふ、女詞。持統天皇歌軍法三「御兄弟の辨當とて、おかずの品品、同じやうなは見苦しい」

おかずごのみ　御數好　(名)　飯の菜をえりきらひすること。又、其れを多く食ふこと。浮世風呂上「そんならお辨當にしてやるから、お菜(サイ)好みはならないよ」

おかた　御方　(名)　㊀人をさしていふ敬稱。狂言ぢじ聟「六兵衛樣とて、何も巧者なお方がござるほどに」㊁古くは貴人の妻妾、又は子女の敬稱。後には普通の人の妻をもいふ。東鑑卅三、延應元年八月八日「二棟御方御著帶」竹齋物語三「頭巾は三條唐物屋甚吉殿のお方より、赤き錦を百日ばかりのその內に、心を盡くし縫ひ立て」㊂貴人の家にて、部屋住の子息の敬稱。貞丈雜記

おかたごしょ　御方御所　(名)　將軍家又は大臣などの相續者たるべき人。おかたずまひ。康富記應永廿七年十月十三日「御方御所へ御太刀進入之」鎌倉年中行事「大御所樣・御方御所樣へも役人參り」

おかたざむらひ　御方侍　(名)　武事にたづさはらぬ侍。下文を見よ。本朝俗談正誤三「今時の人の云ふは、武役にて無き人を皆女房侍(オカタザムラヒ)とす。公卿・醫者に使はるる士、その外、武家のうちにても、右筆・茶童の類をいへり」

おかたじけ　(形)　〔おかたじけなしの略〕かたじけなし(忝)に同じ。浮世風呂上「幸さん、おかたじけ」

おかたずまひ　御方住　(名)　おかたごしょ(御方御所)に同じ。

おかたばうちゃう　御方庖丁　(名)　和泉國、堺より出だす庖丁の稱。

おかため　御固　(名)　江戸時代、海岸の守備。

おかためく　(自動四)　おかたらしく見ゆ。貴人の妻らしく見ゆ。一代女「もの柔く、人のおかためきたるしかけ」

おかち　御徒　(名)　かちめつけ(徒士目附)に同じ。

おかちゃう　御蚊帳　(名)　かや(蚊屋)をいふ、女詞。

おかちん　(名)　もち(餅)の異名。かちん。

おかつ　(名)　かつを(鰹)をいふ、女房詞。大上臈御名之事「一、かつを。おかつ。からからとも」

おかっさま　(名)　人の妻の敬稱。おかみさま。狂言釣女「釣ろよ釣ろよ。おかっさまを釣ろよ」膝栗毛七上「おかっ樣が飯をたくも、大ていのこんではない」

おかったるい　(形口語)　㊀かひだるしに同じ。だるし。たゆし。㊁手ぬるし。及ばず。十分ならず。傾城買二筋道「五郎樣などと取り組まうと思はば中略三谷の毘沙門から、百足を後見に賴んでも、まだ、おかったるい」

おかは　(名)　〔おかはや(御厠)の略〕おまる(御虎子)をいふ、女詞。

おがひき　大鋸引　(名)　大鋸(オガ)にて木材を引き伐るを業とする人。こびき。三十二番歌合「おがひき。鋸のこのめも春の山風に、花の香ながらおが屑ぞ散る」

おかひこ　御蠶　(名)　㊀【動】かひこ(蠶)に同じ。㊁きぬおりもの(絹織物)の異名。蠶の絲にて織るよりいふ。博多小女郎波枕上「ははあ此の乞食は、おかひこを著てゐる」

おかひこぐるみ　御蠶纏　(名)　上より下まで、絹物の衣服を身に纏ひ居ること。

おかぶ　御株　(名)　ややもすれば、癖の如く常になすこと。

おかぶともち　御兜持　(名)　將軍の兜を持つ役。

おかぶら　御蕪　(名)　かぶら(蕪)三に同じ。

おかべ　御壁　(名)　〔その色を白壁に譬へていふ語〕とうふ(豆腐)をいふ、女詞。正章千句「田樂を翫びしも秋にして、とくにおかべは霧も及ばず」東海道名所記「蕎豆腐今一しほに味ぞよき、名さへおかべの宿と思へば」

おかぼ　(名)　【植】たうなす(南瓜)をいふ、女詞。

おかま　御釜　(名)　㊀かま(釜)の敬語。㊁げぢょ(下女)の異名。大阪故事　㊂しり(臀)の異名。㊃男色。㊄妻。本朝俚諺「東國の俗、妻を呼んで阿釜と云ふ」

おかま を おこす　起御釜　家產を裕かにす。家名を舉ぐ。源氏十二段長生島臺四「やれやれお釜を打ち起こした。是れ程嬉しい事はなし。憎い藤太は打ち殺し、大分金は貰ひはする」膝栗毛七上「さういけば、あいつめはおかまを起こす話だが」

おかま を ほる　雞姦をなす。

おかまこほろぎ　竈馬　(名)　【動】直翅類、きりぎりす科に屬する昆蟲。觸角細長にして翅を有せず。全身赤褐色にして裸出す。後肢頗る發達して跳躍に適す。晝間は床下に潛み、夜出でて厨房・竈の傍等に來たる。いいぎり。えびこほろぎ。えんのしたこほろぎ。おさるこほろぎ。かまご。かまどうま、

おかみ　龗　(名)　古語。たつ。龍。豐後風土記鏡野郡「此村有泉、同天皇行幸之時、奉膳之人擬於御飲、令汲泉水、卽有蛇龗謂於箇美」

おかみ　御上　(名)　㊀みかど。主上。㊁政府。官廳。㊂きぞく(貴族)の敬稱。

おかみ　(名)　料理屋などの女主人の稱。

おかみさま　御上樣　(名)　次條に同じ。大藏狂言花子「あのおかみ樣は、よのおかみ樣と違ひまして、ことの外わわしうござりまするによって」傾城酒呑童子二「百官の上に立てば女御樣、今で申さばおかみ樣ぞや」

おかみさん　(名)　人の妻の敬稱。多く中流以下にいふ。おかみさま。三世相錦繡文章「何から何まで、おかみさんの御介抱」

おかめ　阿龜　(名)　㊀おたふくめん(阿多福面)に同じ。㊁おたふくめんに似たる女の顏。又、女を嘲りていふ語。おたふく。四方山人文選「阿龜・阿德・阿多福、盡是息災延命名」㊂おかめそば(阿龜蕎麥)の略。

おかめざさ　(名)　【植】ぶんござさ(拾原草)の異名。

おかめそば　阿龜蕎麥　(名)　蒲鉾・松茸などを入れたるつゆ蕎麥。

おかもじ　(名)　かもじ(母)に同じ。

おかもじさま　(名)　前條の敬語。女詞。松風村雨束帶鑑今様乳母「お主に袖を引かれ初めたる阿漕が浦、おかもじ樣悋もじに、まづお暇といふ籬」

おかり　(自動四)　古語。おけり(おきてありの義)の訛りなるべし。萬廿「しほ船の於可禮(ヲカレ)ばかなし、さ寢つれば人ごとしげし、なをとかもしむ」

おかる　阿輕　(名)　〔假名手本忠臣藏七段目に、阿輕が二階にある事あるよりいふ〕にかい(二階)をいふ、盜賊の隱語。

おかれい　(形口語)　おそろし(恐)をいふ、伊勢國の方言。物類稱呼

おかん　御羹　(名)　江戸時代、遊廓の語。下文を見よ。洞房語園異本考異「おかん。正月中の節の食物のことなり中略今は絕えていはず。かんは羹というて、あつものといふ事なり」

おかん　御燗　(名)　酒の燗(カン)。かん。堀河波鼓上「お燗を見てと引き受けて、さらりとほし」

おかんあげ　御髮揚　(名)　〔かんはかみの音便〕髮を結ぶこと。又、其の人。若風俗「數多のおもと人・おかんあげ」

おき　沖　澳　(名)　㊀海・湖また河などの、陸より遙かに遠き處。記上「淤岐(オキ)つ鳥、むな見るとき」萬三「やくもさす出雲の子等が黑髮は、吉ぬの川の奧(オキ)になづさふ」同十「近江のみ奧(オキ)つ白浪知らねども、いもがりといはば七日越えこむ」㊁野の遠き處。和訓栞　㊂左の稱。(右をへといふ對)萬三「奧(オキ)つ櫂いたくなはねそ、へつ櫂いたくなはねそ」

おき を こゆ　越沖　技藝、至ってすぐれたり。上手の上をこゆる義なるべし。俚言集覽

(諺)沖にも附かず、磯にも離る　よるべなきさまに譬ふ。太平記廿八、慧源禪巷南方合體「澳にもつかず磯にも離れたる心地して、進退歩みを失へり」

(諺)沖のはまち　あてにならぬ譬へ。

おき　息　(名)　古語。いき(息)に同じ。安寧紀「息石耳命」萬五「おほぬ山霧たちわたる、わがなげく於伎(オキ)その風に霧たちわたる」

おき　置　(名)　㊀おくこと。すておくこと。除くこと。浮世風呂上「なんの洒落っ臭え、おきにするがいい」㊁中に隔つること。「一日おき」「五つおき」

おき　起　(名)　起くること。千五百番歌合廿「あひ見てもなごりをじまのあま人は、けさのおきにぞ袖ぬらしつる」

おき　熾　燠　(名)　㊀おきび(熾火)の略。靈異記中「熾於記」古今物名「おきのゐて身をやくよりも悲しきは、みやこしまへの別かれなりけり」信明集「手すさびに火桶のおきやわりてけん、戀しき人にあはぬころかな」㊁薪などの燃えはてて、炭火の如くなりたるもの。謠基盛「數萬の兵ども皆燒け死にて、其の跡の燼は積もって山の如し」

おきあかす　起明　(他動四)　おきゐて夜をあかす。後撰秋下「わが如く物思ひけらし、白露の夜をいたづらにおきあかしつつ」

おきあがり　起上　(名)　おきあがりこぼふし(起上小法師)の略。嬉遊笑覽六「芥子人形。一代男に、小宮をさがし、芥子人形・おきあがり・ひばりぶえを取りそろへ」

おきあがりこぶし　起上小法師　(名)　おきあがりこぼふし(起上小法師)に同じ。鷹筑波「散れば咲く花はおきあがりこぼしかな」

おきあがりこぼし　起上小法師　(名)　次條に同じ。狂言長光「なに、おきあがりこぼしぢや、子供たちの土產に、これが好からう」

おきあがりこぼふし　起上小法師　(名)　紙の張拔きにて達磨などの人形を造り、底におもりを附けたる玩具。上輕く下重き故に、之を倒すとも直ちに起き上がるやうにしたるもの。おきあがりこぼし。不倒翁。

おきあがる　起上　(自動四)　臥したるより起(タ)つ。竹取「えおきあがり給はで、ふなぞこに臥し給へり」

おきあげ　起揚　(名)　彫物、又は蒔繪などに、模樣を地より高くしたるもの。

おきあげ　置上　(名)　器物を高くおくために、下に他の物をおくこと。

おきあさり　沖淺蜊　(名)　【動】あさりの一種。介殼は厚くして毛を生ず。表面に種種の斑紋を有す。かざりがひ。

おきあはせ　置合　(名)　程よく取りあはせて置くこと。又、其の物。あしらひ。配合。東海道名所記「置物には欒平の書かれし御成敗式目、おきあはせには馬の角、牛の玉」

おきあひ　沖合　(名)　㊀海などの沖の方。㊁次條の略。

おきあひせんどう　沖合船頭　(名)　沖合に乘り出でて漁りする船頭。おきあひ。

おきあふ　起合　(自動四)　起き出でて出であふ。著聞十二「或る所に偸盜入りたりけり。あるじおきあひて、歸らん所を打ちとどめんとて」

おきあみ　置網　(名)　まちあみ(待網)に同じ。若風俗「薄暮におき網をあげて、魚をとりての樂しみ」

おきあみ　沖網　(名)　ひきあみ(引網)を見よ。

おきあみ を いふ　おきあみは沖網の義にて、未だ手に入らざるものをあてにしていふ意なるべし。

おきいし　置石　(名)　みぎりの石。殿中以下年中行事「御幣の役は、砌石近くにて、馬よりおりて」

おきいた 置板 （名） 船の吾妻表（アヅマ）の名所。

おきいたす （他動サ） 出しぬく。（俗語）十訓抄「からびどにおき出ださるる事、左右に及ばず、かたきにこそあれとて、二三年は西もむかざりけり」

おきいづ 起出 （自動ニ） 起きて、ねどこより出づ。玉葉集「秋深きねざめのしぐれ聞きわびて、おきいでて見れば村雲の月」

おきうしなふ 置失 （他動ハ四） 置きて、ありかを失ふ。おきどころを失念す。類聚抄「こひこひてまれにうけひく玉づさを、おきうしなひて又なげくかな」

おきえん 置縁 （名） おきすゑにしたる縁塞。

おきおき 起起 （名、副） 朝、起き出でたるばかりなること。又、その時。起きたて。孕常聲「今朝おきおきにひよっと来て、茶一服飲んだばかりに」猿蓑「起き起きの心勁かすかきつばた」

おきがかり 沖掛 （名） 沖に碇泊すること。博多小女郎波枕「沖がかりの大船に通路を求め、波を潜り、水底を脱け、船へ近附き」

おきかき 熾掻 （名） 一おき火・灰などをかきたて、又かきよする物。鐵にて造り、柄を篠などにて巻く。すみかき（炭撥）。御産所日記「一、御おきかき、二」 二じふのう（十能）に同じ。

おきがけ 起掛 （名） おきしなに同じ。

おきかご 置籠 （名） すゑこ（据籠）に同じ。

おきがた 置形 （名） 布などに模様を染めずして、形紙にて綿の具を置きたるもの。染形の對。若風俗「唐木綿の更紗のおきがた」

おきかはる 置代 （自動ラ四） かはりて置く。新古今（夏五）逢ふことをおぼつかなくてすぐすかな、草葉の露のおきかはるまで」

おきかふ 置換 （他動ハ四） 一おきかは らす。おきかへる。續拾遺（冬二）見し秋の露をば霜におきかへて、花のあとなき庭の冬草」 二貢物など、此れと彼れとかへて預く。曾我五人兄弟「貧乏人の衣更へ、冬のを夏に置きかへて、七月ぎりに遣り水の」

おきかへし 起返 （名） 田畑の荒蕪を回復すること。

おきかへる 起返 （自動ラ四） おきあがる。おきなほる。後撰（夏五）うつつには風せどねられずおきかへり、きのふの夢をいつか忘れん」源氏（総角）松の木のおのれおきかへりて、さとこぼるる雪も」

おきかへる 置換 （他動ハ四） おきかふ（置換）の口語。

おきがほ （名） 「人の命のはかなきを、草葉の上におく露の消え易きに譬ふ」しばし世に生きながらへ居るさまをいふ語。謠（長慶）とても消ゆべき露の身を、猶おき顔に、浮草の波にさそはれ、船に漂ひて、いつまでか」

おきがらし （名） 【動】かさご（笠子）の異名。

おきかる 置枯 （他動ハ四） 霜おきて、草を枯らす、夫木「春雨は霜のあだとぞなりにける、おきからす草のもえし思へば」

おきざす 沖鱚 （名） 【動】魚類中、硬骨類の一種。體は長さ一尺餘。背部は黒灰色、腹部に至るに從ひ銀白色となる。全形稍きすに類す。本邦、太平洋沿岸の淺海に產す。肉は食用に供せらる。だぼぎす。

おきくくり 置括 （名） いとゆふむすび（遊絲結）に同じ。

おきくち 置口 （名） 一手筥・硯箱等の緣（ヘリ）を金銀などにて被ふこと。宇津保（蔵開上）「沈のみぞ箱、こがねのおきくちした る六つに」枕「女は鏡・硯こそ心のほど見ゆるなめれ。おきくちのはざまに塵ゐなど、打ち拾てたる樣こそなしかし」 二婦人の衣の袖口、袋のすそなどに、緣をとり、金銀などにて飾りたること。榮華（御裳着）日記「袖口にはおきくちをし」

おきくむし 蝨 （名） 【動】鳳蝶（アゲハ）の幼。

おきくら 置座 （名） 物を載せる臺。祝詞式（大嘗祭）「千座置座（チクラオキクラ）置足座（タルクラ）」

（しむくきお）

おきこたつ 置火燵 （名） 匣造りの内に爐を設けて、移し置くを得る火燵（ヒバチ）。鷹筑波「暮れて行く春のかたみや置ごたつ」猿蓑「すみつかぬ旅の心や置ごたつ」

おきこのしろ （名） 【動】にしん（鯡）の異名。

おきこひ 置鯉 （名） 祝言の席などにする飾り鯉。國姓爺「今日祝言の大吉日、式作法まで、敷島の大和をうつす座敷の飾り中巻置鳥・置鯉」

おきこむ 置籠 （他動ハ四） 一面におきわたす。夫木「秋の野のちくさの色も枯れあへぬに、露おきこむるよはの初霜」

おきざ 置座 （名） おきえん。涼だい。腰かけだい。

おきさく 沖放 （自動ラ四） 沖の方に遠ざかる。萬「奥放（オキサク）て漕ぎくる船、へつきて漕ぎくる船」

おきさばら 沖鯖 （名） 【動】魚類中、硬骨類の一種。鯖（サバ）の一種にして、外形頗る相類し、體の長さ六七尺に達す。本邦、東南海に產す。肉は食用に供すれども、味ひ劣れり。土鷹。

おきざより 沖鱶 （名） 【動】だつの異名。

おきざり 置去 （名） 人を後に棄て置きて立ち去ること。國姓爺「この小龍を置き去りに、親子・夫婦四人連れ、唐へ身代引く氣ぢやの」

おきし 他人の金錢を授與する時、横合より之を引つ攫ふ掏兒（リ）。

おきじ 置字 （名） 一漢文を和訓する時、訓まざる漢字。焉・矣等の類。 二書翰文にて、副詞・接續詞等の文字。書札作法抄「中狀・目安以下の書札には、置字至極の大事の物也中略如此の置字をば詞の字とも常には申す也。抑・兼・又・將又・凡中略如此の字を惡しき處におけば、其の文章亂るる也」

おきしじみ 沖蜆 （名） 【動】軟體動物、蝦蟆類の一種。文蛤（ハマグリ）科に屬す。殼はほぼ楕圓形にして高く、蝶番の齒は三箇あり。布目樣の彫刻細かに、表面は黄褐色の表皮を以て被はれ、內面白く、殼緣は細齒を刻し淡紫色なり。本邦、中部及び南部に產す。

おきしな （名） 寢たるより起きんとする時。おきがけ。

おきしほ 置潮 （名） やむるに都合よき機會。手の引き時。大鏡（狂言三人）「好いおきしほもどざったれども、又取らう取らうと大欲にかかって」

おきじほ 沖潮 （名） 沖にあるうしほ。凡董句「沖じほの早潮を戀ふや蟇の

雨」

おきじゃうるり 置淨瑠璃 （名） 一段の淨瑠璃の、前置として語る部分。演劇などにて、幕開きて、出演者の未だ登場せざる間に語るもの。

おきじゃく 置尺 （名） 布帛などの寸尺を度る時、下に置きて、これに物さしをあてがふこと。（持尺の對）

おきしるす 置記 （他動サ） 記して後に在（ア）し留む。齊明紀「今存（ナホ）注（シルス）其決焉」

おきす 沖洲 （名） 沖にある洲（スナ）。おきつす。國姓爺「沙頭に印を刻む鷗・沖洲にすだく浦千鳥」

おきすう 置据 （他動ハ下） 物をすゑおく。

おきすて 置捨 （名） 一物み捨ておくこと。 二おきざり（置去）に同じ。

おきすみ 置墨 （名） 墨をもて、頭髪のはえぎはなどの濃く見ゆる樣に化粧し、又眉を描くこと。又、其の物。きはずみ。若風俗「眉のおきずみ、自然の形にはあらず」

おきすゑ 置据 （名） おきすうること。すゑ。おきたるままにすること。おきつけ。

おきすゑる 置据 （他動ハ下） おきすう（置据）の口語。

おきせ 御被 （名） 茶碗などのふた。

おきせ 御著 （名） 主人より婢僕等に給する衣服。

おきせんどう 沖船頭 （名） 海上にありて務めに服する船頭。

おきそ-の-かぜ （名） 「そは助語（枕詞）」の風。（本居宣長）萬三「おほぬ山霧たちわたる、わがなげく於伎蘇乃可是（オキソノカゼ）に霧たちわたる」

おきそはる 置添 （自動ラ四） 次條に同じ。古今（夏）「夕されば、いとどひがたき我が袖に、秋の露さへおきそはりつつ」

おきそふ 置添 （自動ハ四） ある上に又おき加はる。新撰集（恋下）「さのみやは更けては露のおきそはん、月に涙の落つるなりけり」

おきそ-ぶ 置添 （自動ハ四） 前條に同じ。蜻蛉日記「おきそふる露によとなよなぬれこしは、思ひの中にかわく袖かは」

おきそ-ぶ 置添 （他動ハ四） おきそはす。おきそへる。後拾遺（雜秋）「八重菊に蓮の露をおきそへて、九しなまでうつろはしつる」

おきそへる 置添 （他動ハ下） 前條の口語。

おきそむ 置初 （自動ハ下） おきはじむ。夫木「おきそむる露の白玉、枝ながらみかきが原の萩の初花」

おきそむ 置初 （他動ハ下） おきはじめしむ。古今（雜三）「露ならぬ心を花におきそめて、風吹くごとに物思ひぞつく」

おきたかなす 置高爲 （他動サ四） 古語。高く積みおく。祝詞式（久安寺本・古開）「雄物（ヲ）平如（ニ）横山置高成（オキタカナス）」

おきたがふ 置違 （他動ハ四） かれこれたがへて置く。蜻蛉日記「はちすにも玉のよとこそ結びしか、露は心を置きたがへけり」

おきたがへ 置違 （名） おきたがふること。おきちがへ。

おきたがへる 置違 （他動ハ下） おきたがふの口語。

おきたつ 起立 （自動ハ四） 起きあがる。起き出づ。顯宗紀「いなむしろ川そひ柳、水ゆけば靡き於己陀智（オキタチ）その根はうせず」萬「起立（オキタチ）ば母知りぬべし、出でゆかば父知りぬべし」

おきたて 起立 （名） 起きたるばかりの時。

おきだて 置楯 （名） 据ゑ置く楯。（持楯の對）會津陣物語「直江一萬餘上泉主水が勢を先立て中略持楯・置楯・竹束・龜甲を以て附け寄せ」

おきちがふ 置違 （他動ハ四） おきたがふ（置違）に同じ。

おきちがへ 置違 （名） おきちがふること。おきたがへ。

おきちがへる 置違 （他動ハ下） おきちがふ（置違）の口語。

おきちゃくね 沖著値 （名） 【商】うんちんほけんれうこめぬだん（運賃保險料込値段）に同じ。

おきつ 掟 （他動ハ二） おきてをなす。定む。處置す。宇津保（藤原）「みづしどころ・大殿の具、いとよくしおきてたり」奥州後三年軍繪詞「その舌を切るべきよしおきつ」

おきつ-あらし 沖津嵐 （名） 沖を吹くあらし。文武五人男（四天王）「磯に友鶴、汀に鷗、沖津嵐にのし羽して、あなたの蘆邊にひらひら」

おきつ-ありそ 沖津荒磯 （名） 沖のあら磯。萬「みさごゐる奥荒磯（オキツ）による浪の、行くへも知らず、我が戀ふらくは」

おきつ-いくり （名） 海底の巖。萬「わたの底奥津伊久利（オキツイクリ）に、あはび珠さはにかづきで」

おきつ-うみ 沖津海 （名） 海の沖の方。夫木「おきつうみみなそこ深く思ひつつ、も引き馴らしし菅原の里」

おきつ-かい 奥津櫂 （名） 沖を漕ぐかい。一說、左の方の櫂。（つかいの對）萬「奥津加伊（オキツ）いたくなはねそ、へつ櫂いたくなはねそ」

おきつ-かぜ 沖津風 （名） 沖を吹く風。神代紀「起瀛風（オキツ）・邊風」萬「於伎都加是（オキツ）いたく吹きせば、わぎもこがなげきの霧にあかましものを」

おきつ-かぢ 奥津楫 （名） 沖にある船を指していふ。一說、おきつかい。奥津櫂に同じ。萬「奥津梶（オキツ）しはしはしふを見まくほり、我がする里の隱らく惜しも」

おきつ-ぎ （名） おくつき（奥津城）に同じ。神樂「於支津支（オキツ）にすめ神たちをいはひこし、心は今ぞ樂しかりける」

おきつ-ぎ 置注 （名） 手に取るを待たずして、下に置きたるままの盃に酒を注ぐこと。

おきづき 置月 （名） 質におきたる月。建武式目追加「定（德政一事中略）家具・雜具等、置月の外、十二箇月たるべき事」

おきづきん 置頭巾 （名） まるづきん（丸頭巾）に同じ。ものなるべし。（國語宇寶）宗門帖「置頭巾」向之岡「木枯しや老曾の森に置頭巾」

おきつ-くに 沖津國 （名） 海のあなたにある島國。萬「奥國（オキツ）しらす君が染めやかた、黄染めのやかた、かみのと渡る」

おきつくり-の-いた （名） まないた（俎板）の古名なるべし。（類字鏡「杜（杜乃波夫豆久）」）

おきつ-け 置附 （名） 他に移さずして、其處にすゑおくこと。おきすゑ。

おきつ-づけ 沖漬 （名） 小魚を背開（セビラ）にし、腸腑氣を洗ひ去り、鹽白・醋・醴などをまぜ煮て冷やしたる中に漬けたるもの。骨も共に食ふべし。

おきつ-つける 置附 （他動ハ下） 一すゑおきて他に移さず。 二置くこと。習慣となる。

る。おきなる。

おきつこじま 沖津小島 (名) 沖にある小さき島。おきつをじま。萬[ヨロヅ]「みなぎらふ奥津小島[オキツヲジマ]に風に、風をいたみ舟寄せかねつ、心はもへど」 續後撰[ゾクゴセン]「都人おきつこ島の濱びさし、久しくなりぬ浪路へだてて」

おきつしほ 沖津潮 (名) おきのしほ。玉葉[タマバ]冬「おきつしほさしでの磯の濱千鳥、風寒からし夜はに友よぶ」

おきつしほあひ 沖津潮會 (名) 沖にて、潮流の相會するところ。古今[コキン]上「わたつみの沖つしほあひに浮かぶ沫の、消えぬものから寄る方もなし」

おきつしほかぜ 沖津潮風 (名) 沖を吹く潮風。新古今[シンコキン]三「かぢを絶え由良の湊による舟の、たよりも知らぬ沖つしほ風」

おきつしほさゐ 沖津潮騷 (名) 古語。しほさゐ(潮騷)に同じ。萬[マン]「しほひなば又も我れこむ、いざゆかむ、於伎都志保佐爲[オキツシホサヰ]高くたちきぬ」

おきつしほせ 沖津潮瀬 (名) 沖にあるしほせ。玉葉[タマバ]上「雲はるる磯山あらし音ふけて、沖つしほせに月ぞかたぶく」

おきつしほぢ 沖津潮路 (名) 沖にある潮流の路。新後撰[シンゴセン]三「漕ぎ出づる沖つしほぢのあとの波、立ちかへるべきほどぞはるけき」

おきつしま 沖津島 (名) 沖にある島。おきつしまね。海島。萬[マン]「於伎都之麻[オキツシマ]い行き渡りてかづくちふ鮑球もが、包みてやらむ」

おきつしまね 沖津島根 (名) 前條に同じ。

おきつしまびと 沖津島人 (名) 沖にある島に住む人。新古今[シンコキン]三「あけがたき二見の浦による浪の、袖のみぬれて沖つ島人」

おきつしまもり 沖津島守 (名) しまもり(島守)に同じ。しまびと。萬[マン]「八百日ゆく濱のまさごも、わが戀に豈まさらめや奥津島守[オキツシマモリ]」 土佐日記「わが髪の雪と磯べの白波と、いづれまされる沖つしまもり」

おきつしまやま 沖津島山 (名) 島山(オキツマヤマ)おくまへて、わがもふいもがことのしげけく」

おきつしらたま 沖津白珠 (名) 沖にある白珠。海底の眞珠。萬[マン]「たまの浦の於伎都之良多麻[オキツシラタマ]ひり」「れど、又ぞおきつる、見る人をなみ」

おきつしらなみ 沖津白波 (名) 沖にたつ白波。萬[マン]「わたつみの於伎都之良奈美[オキツシラナミ]たちくらし、あま少女ども島かくる見ゆ」

おきつす 沖津洲 (名) おきのす。沖にある洲。おきす。萬[マン]「夏そ引くうなかみ湯の於伎都渚[オキツス]に船はとどめむ、さ夜ふけにけり」

おきつすたべ 奥津棄戸 (名) 古語。おくつすたべ奥津棄戸(オクツスタベ)に同じ。神代紀[シンダイキ]上「被可以爲顯見蒼生奥津棄戸[オキツスタベ]」 將臥之具[ショガグ]「中略」棄戸、此云須多抒[スタヲ]」

おきつだひ 興津鯛 (名) 【動】あまだひ(甘鯛)の異名。

おきつたまも 沖津玉藻 (名) 沖にある美しき藻。萬[マン]「今日もかも奥津玉藻[オキツタマモ]は、白波のやへをるが上に觀れてあらむ」

おきつち 置土 (名) ㊀ある上に更に土を載せ置くこと。一代女「天井もおき土して、壁一尺餘り厚くつけて、物云ふ聲もそとへ洩らさず」 ㊁地の上に、更に土を置き添ふること。又、其の土。

おきつづみ 置鼓 (名) 下にするおきて打つ鼓。手鼓の對。 傾城酒呑童子[ケイセイシユテンドウジ]「人に心を置き鼓」

おきつどり 沖津鳥 (名) 沖に居る水鳥。記[キ]上「淤岐都登理[オキツトリ]むな見るとき」 同[ヒ]「意岐都登理[オキツトリ]鷗どく島に、我がゐねしいもは忘らじ、世のことごとに」 萬[マン]「奥鳥[オキツトリ]あぢふの原に」

おきつなばのり 沖津繩海苔 (名) 沖に生ひたる繩海苔(オキツナバノリ)。萬[マン]「わたつみの於伎都奈波能里[オキツナバノリ]くる時と、いもが待つらむ、月はへにつつ」

おきつなみ 沖津波 (名) 沖にたつ波。萬[マン]「まさきくていもがいはばは、於伎都奈美[オキツナミ]つへに立つともさはりあらめやも」

おきつなみ 沖津波 (枕) 沖の波は、折り重なりて、しきり・たわみ・高く立つものなれば、しく・とをむ・たかしにかけていふ。萬[マン]「なぐさもる心はなしに、奥津浪[オキツナミ]しきてのみやも魘ひわたりなむ」 同[ヒ]「於吉都奈美[オキツナミ]とをむまよひき、大船のゆくらゆくらに」 古今[コキン]三「沖つ波たかしの濱の濱松の、名にこそ君を待ちわたりつれ」

おきつなみま 沖津波間 (名) 沖に立つ波のあひだ。續拾遺[ゾクシユウイ]「漕ぎ出づる沖つ波まのあまをぶね、うらみしほどに遠ざかりつつ」

おきつのなみ 沖津波 (名) おきつなみ(沖津波)に同じ。續門葉[ゾクモンヨウ]「はるかなるおきつの浪もこひるぎのいそがずともと何思ふらん」

おきつのり (名) 【植】紅色藻類、さいみ屬の海藻。體は扁平、細線狀。巾は一分。數回叉狀に分岐し、一平面に擴がりて扇狀をなす。全長一二寸に達し、紅紫色を帶び、質は軟骨樣にして、乾燥すれば彈性を帶び、やや强靱となる。我が國、各地の濱海、潮線附近の岩石上に叢生す。きくのり。さいみ。

おきつはるかぜ 沖津春風 (名) 沖を吹く春風。壬二集[ニシユウ]「にほの海やおきつはる風吹かぬ日は、かすみを出でぬあまのつり舟」

おきつふなびと 沖津船人 (名) 沖を漕ぎ行く船人。玉葉[タマバ]「いづくをか今日の泊りとたのむらん、風にまかする沖つふな人」

おきつふね 沖津舟 (名) 沖を行く舟。源氏[ゲンジ]「沖つふねよるべ波路にただよはば、棹さしよらん泊り教へよ」

おきつまかも 沖津眞鴨 (名) 沖に居る鴨。萬[マン]「まをこもの、ふのみちかくて逢はなへば、於吉都麻可母[オキツマカモ]のなげきぞあがする」

おきつみらら 沖津御浦 (名) 沖にある島などの浦。一說、おきは奥の義にて、海の浦の入り込みて、行きつまりたる處。萬[マン]「浦まより漕ぎこし船を風はやみ、於伎都美宇良[オキツミウラ]に宿りするかも」

おきつみかみ 沖津御神 (名) 海の荒くて、おそろしき處。萬[マン]「すすのあまの於伎都美可未[オキツミカミ]にい渡りて、かづき取るといふあはび珠」

おきつみや 沖津宮 (名) 古語。奥の方にある宮。遊津宮の對。萬[マン]「この見ゆるあまの白雲、わたつみの於枳都美夜[オキツミヤ]へにたちわたり」 淺瀬記[ゼンライキ]上

おきつむ 置積 (自動) おきかさなりて積もる。後撰[ゴセン]上「秋の野にいかなる露のおきつめば、ちぢの草葉の色かはるらん」

たる藻。おきつもは。神代紀[シンダイキ]上「憶企都茂[オキツモ]は邊には寄れども、さねとともあたはぬかもよ、濱つ千鳥よ」

おきつもの 沖津藻之 (枕) 沖の藻は隱れてあれば、かくるの古語なる、なばるにかけていふ。萬[マン]「わがせこはいづち行くらむ、己津物[オキツモノ]なばりの山を今日か越ゆらむ」 同「奥津藻之[オキツモノ]なびきしいもは」

おきつもは 沖津藻栄 (名) おきつも(沖津藻)に同じ。祝詞式[ノリトシキ]「奥津藻栄[オキツモハ]」 遊津藻栄[ユツモハ]至萬[ヒ]國

おきづり 沖釣 (名) 沖に出でて釣りすること。浮世風呂[ウキヨブロ]「錢が無くなると、せうことなしの沖釣す」

おきつをじま 沖津小島 (名) おきつこじま(沖津小島)に同じ。萬[マン]「みなぎらふ奥津小島[オキツヲ]に風をいたみ、船よせかねつ、心はもへど」

おきて 掟 (名) ㊀おきつること。定め。取りきめ。宇津保[ウツホ]俊蔭「天のおきてあらば、國母・女御ともなれ」 源氏[ゲンジ]「親のおきてに逆へりと、思ひ歎きて」 ㊁現定。法度。法制。 雄略紀「賞罰支度[オキテ]、事無亘朝」並附[ナラビニフ]皇太子二「鎌倉大草紙「太田・長尾は上杉を仰ぎ、憲實の掟の時の如く、關東を治めんとす」」 ㊂處置。計畫。經營。名疑抄[メイギシヨウ]「術[オキテ]」 宇津保[ウツホ]俊蔭「貧しくて、我が子の行先のおきてせずなりぬ」 ㊃心のおきて。心だて。心ばへ。宇津保[ウツホ]俊蔭「この人、年を數ふるに十二ばかりにこそなるらめ。大きさ・おきてこそ、かしこくとも、人の世にふるありさま限りあるものなれば」 源氏[ゲンジ]「おきてひろきうつはものには、幸ひも其れに從ひ」 ㊄しきたり・仕來(シキタリ)に同じ。

おきて 置手 (名) 質をおきたる人。建武式目追加「萬一、寄事於左右がうがうの儀に及ばば、おきてといひ、とりてといひ、共に以て罪科に處せらるべし」

おきてがみ 置手紙 (名) 用事を認めて殘しおく手紙。書置の手紙。

おきてさく 掟作 (名) こさく(小作)に同じ。地方凡例錄[ヒ]「小作のことを下作・入作・請作・掟作・卸作とも唱へ、國所の俚語にて、種種に云ひ習はすといへども、何れも小作のこと。直小作・別小作・名田小作・永小作などと、色色の定め方に逆ひあり」

おきてぬぐひ 置手拭 (名) 手拭を、頭又は肩などに載せ置くこと。長町女腹切[ヒ]「姿も下女に二世かけし男の爲めや徒歩跣足、つひに被なれぬ置手拭」

おきてのごひ 置手拭 (名) 前條に同じ。

おきてまい 掟米 (名) さだめまい(定米)に同じ。地方凡例錄[ヒ]「或ひは年貢・諸役とも、地主方にて勤むる樣に極め、年貢・諸役米・餘米とも、一反何程と、俵數を定め米と云ひ、又掟米とも云ふなり」

おきてん 置戸 (名) 【植】いぎす(海髮)の異名。

おきど 置戸 (名) 古語。物を置きすうる物。机の類。神代紀[シンダイキ]上「千座置戸[オキド]」

おきどけい 置時計 (名) 机の上などに置く時計。

おきどこ 置床 (名) 床の間のさまに作りて、移し得るやうにしたる寢處。

おきどころ 置處 (名) ㊀置くべき處。身を措くべき處。古今[コキン]「頼めしことのは今はかへしてん、我が身ふるれば置き處なし」 ㊁身の處置。爲すべきて出でて、燃ゆと見ゆるはあまのいさりか」

だて。源氏[ゲンジ]「いともかしこきは、おき所も侍らず」 同[ヒ]「おきどころなき物思ひつきて、いとなやましうさへし給ふ」

おきとり 置鳥 (名) 婚禮の席などに飾りおく鳥。國姓爺「今日祝言の大吉日、式作法まで數鳥の大和をうつす座敷の飾り」中略置鳥・置鯉」

おきな 翁 (名) ㊀年老いたる人。又、其れを敬ひていふ語。老人。萬[マン]「たふれたるしこつ於吉奈[オキナ]のことだにも、我れには告げず」 和名[ワミヤ]「聖[訓讀無用字]」 神武[ジンム]「者老[ヒ]」 老夫[ロウフ]「行者」 老婦[ロウフ]「又老人稱也」 ㊁おきなの假面を被りて行ふ曲の名。回[動]どぶがひの一種。

おきなあんどう 翁行燈 (名) 昔、芝居の顔見世の時に掛けし方形のあんどう。戲場新話「二番太鼓を打つて、醜色などつかひ居る人人を追ひ出だし中略左右の大柱へ大きなるあんどう方形を掛ける、是れをおきなあんどうと云ふ」

おきなえびす 翁戎 (名) 【植】軟體動物、腹足類の一種。おきなえびす科に屬す。殼は圓錐形をなし、螺塔高く、螺層膨れ、彫刻粗し。螺肋は成長線と相交じはりてやや顆粒狀を呈し、淡柑色の地色に鮮紅色の斜縱斑を飾りて極めて美なる上に、產出また稀なれば、價甚だ貴きを以て、一に長者貝ともいふ。

(すびえなきあ)

おきなおもて 翁面 (名) おきなの假面。七十一番歌合「さるがく。秋の霜おきなおもての白ひげの、長き夜あかずに月を見るかな」

おきなか 沖中 (名) 海洋の中。拾遺物名「わたつうみのおきなかに火の離れ

おきなかづら 翁鬘 (名) 能・芝居などにて、老人にいでたつ時附くる白髮のかづら。吉野忠信「翁鬘の白髮に、白髮の總髭添へてあり」

おきながひ 翁貝 (名) 【動】軟體動物、鮑類の一種、おきながひ科に屬する貝。殼は長さ凡そ一寸二三分、質薄くして脆く、長方形白色なり。前後兩端開き、往往雲母樣の光澤を有す。

おきなぐさ 白頭翁 (名) 【植】毛茛科、白頭翁屬の多年生草本。莖の高さ五六寸乃至一尺。根葉は二回羽狀に深裂し、總苞の葉は二箇、葉柄無く細裂す。花は四五月頃莖頂に單生して開き、外部は白毛を被れども、內部は平滑、濃紫色を呈す。花後、雌蕊の先端、銀色の羽狀物に變形して拂子狀をなす。我が國、各地の山野に自生す。又庭園に栽培して觀賞用とすることあり。うなねこ。うねこ。おきなつつ。おばがしら。かはらいちご。こまのひざ。ぢいがひげ。しやぐまざいこ。しやぐまさう。せかいさう。なかくさ。ぬすびとばな。はくとうをう。本草和名[ワミヤ]「白頭公[和名抄[ワミヤ]略久佐]、數近」根歳有[ヒ]白耳」似[ヒ]人白頭」故以名之」」 和名[ワミヤ]「白頭公[和名抄[ワミヤ]略久佐]」

(きぐなきあ)

おきなぐさ 翁草 (名) 【植】おかまつ(黑松)の異名。藏玉「翁草。松住吉や庭のあたりのおきなぐさ、長ゐもて見る人をおこちて」 ㊁きく(菊)の異名。藏玉「菊をも翁草と申す也」

おきなごと 翁言 (名) 老人の言。

老人めきたる言葉。源氏物語「いとけざやかなるおきなごとと憎く侍りとて」

おきな-さぶ おきなびる。年よる。萬葉「針袋これはたばりぬ、すり袋今は得てしか、於吉奈佐備せむ」勢語「おきなさび人な咎めそかりどろも、けふばかりとぞたづも鳴くなる」

おきな-すがた 翁姿 (名) 老人の姿。夫木「かたくなやしりへの岡に若菜つみ、かがまりありく翁すがたよ」

おきな-つつ 翁筒 (名) 【植】おきなぐさ(白頭翁)の異名。宇鏡「白頭公 ヲキナグサ」

おきな-の-めん 翁面 (名) 翁の曲に用ふる假面。おきなおもて。心中二枚綸草紙「初霜の翁の面のにこやかに」

おき-なは (名) 魚を捕らふるに用ふる縄。水索。

おきなは-がるかや (名) 【植】ひめがるかやの異名。

おきなは-けふちくどう (名) 【植】みふくらぎの異名。

おきなはけん-しゅるゐしゅっからぜい 沖縄縣酒類出港税 (名) 我が國の國税の一。沖縄縣にて製造したる清酒・濁酒・白酒・味淋又は燒酎を、帝國内の他の地方に移出するとき、旅客の携帶品たると否とを問はず、其の石數に應じて課するもの。沖縄縣酒類出港税則「沖縄縣酒類出港税」

おきなひ 補 (名) 一おぎなふこと。つくろひ。たしまへ。補缺。補充。二次條の略。

おきなひ-ぐすり 補藥 (名) 一精力の衰弱を補ひ助くる爲めの藥。二當座の間に合はせに用ふる藥。

おきなひと 翁人 (名) おきな(翁)に同じ。土佐日記「おきな人ひとり、たうめ一人、あるが中に心ちあしみして」名義抄「古老 ヲキナビト」

おきなぶ 翁 (自動上) 翁の狀したり。翁らしくあり。源氏夕顔「何とはなく、翁びにたるここちして」同夕顔「翁びたる聲に、ぬかつくぞ聞こゆる」

おぎなぶ 補 (他動四) 一不足をみたす。缺けたるを足さす。二補ひやすりを用ふ。

おきなほほ 翁頰 (名) 武具の名。面頰(おもがは)の一。能狂言の翁の面に似たるもの。

おき-なほる 起直 (自動四) 臥したるより起きて坐す。起坐す。出觀集「露しげみ朝ふむ人もなき野ぢは、おそくをがやのおきなほるかな」

おき-なます 沖膾 (名) 沖にて漁りたる魚を、直ちに酢に和したるもの。

おきなま-ひ 翁舞 (名) おきな(翁)に同じ。

おき-なみ 沖波 (名) 沖にたつ波。萬「夕なぎにあさりするたづ、しほ滿てば奥浪たかき高みおのがつま呼ぶ」

おきなむすび 翁結 (名) 結の結び方の名。

(びすむなきお)

おきなやもめ 翁鰥 (名) 老人にて妻なき者。宇津保「そちのぬし翁やもめにて、つきなくおぼゆれば」

おきな-ゆり 翁 (名) 【植】かのこゆりの異名。

おき-ならぶ 置並 (他動四) ならべておく。夫木「うきねして枕と頼む夫なばたに、おきならべたるかぢもありける」

おき-なる 起慣 (自動上) 起くることに習慣となる。新拾遺雜中「事しげき我がならはしにおきなれて、聞けば夜深き鳥の聲かな」

おきな-わたし 翁渡 (名) 芝居の開場、及び正月の興行の時に演ずる舞の名。三番叟の舞の前に演ず。老の樂「元日、翁渡し見物」

おきなわぼし 翁烏帽子 (名) 能樂に用ふる烏帽子の一。翁の著くるもの。

おき-にし 沖螺 (名) 【動】軟體動物、腹足類の一種。法螺貝科に屬す。殼は質重厚、黄白色を呈し、其の形腹背の方向に扁壓せられたるが如く、螺肋及び結節大にして後薄著しく、其の尖端少しく突出す。殼は少しく帶黄色にして、外唇の齒及び内唇の皺は白色を呈し、長さ凡そ二寸五分に達す。本邦、南海に産す。

(しぼあなきお)

おきぬ-うつし (名) きぬた(砧)をいふ、女詞。

おきぬ-ぬけ 起抜 (名) 寝所を出づると直ぐなること。「おきぬけに出かける」

おきぬぬひ-もの 補物 (名) 古語。衣など補ひ綴るもの。宇鏡集「綻 オギヌ」

おきぬぶ 補 (他動四) 古語。一おぎなふ(補)に同じ。名義抄「補 オギヌフ」宇鏡集「裨 オギヌフ」二衣など縫ひ綴る。補綴す。宇鏡「綴 ヌイ花」名義抄「縫 オギヌフ」

おき-の-けんてう (名) 【動】しのりがもの異名。

おき-の-たいふ 沖大夫 (名) 【動】あはうどり(信天翁)の異名。

おき-のり 沖乘 (名) 沖へ乘り出だすこと。

おきのり 賒 (名) おぎのること。宇鏡「賒 乃利支」

おぎのり-わざ 賒事 (名) おぎのりをすること。賒にて買ふこと。土佐日記「そらごとをして、おぎのりわざをして、錢も持てこず」

おぎのる 賒 (他動四) 價の錢を借りて、物を買ふ。賒にて買ふ。名義抄「賒 オギノル」同「貸 カシカヘル」

おき-ばしよ 置場所 (名) 物を置きたる場所。おきどころ。

おき-ばん 起番 (名) 當番にて、起きて居ること。又、其の人。

おき-び 熾火 (名) 紅く熱したる炭火。灰中の炭火。宇鏡「熾 オキビ」古今物名「おきび」和名抄「熾燼、唐韻云、熾 ヲキビ、猛火也。又盛也。四聲字苑云、熾 ヲキビ 名上熱灰蒙火也」

おき-びと 置人 (名) 置きたる人。あておきたる人。紫式部日記「宰相の君のおき人に、ゑいかうを添へたるに、夜ひと夜ののしりあかして、聲も暇れにけり」

おき-ふし 起臥 (名、副) 一起き又臥すこと。源氏葵「隔てなきさまに、おきふしなどはえしもすまじきを」二起きても臥してもの。常に。いつも。日常。古今三「手もふれで月日へにけるしらま弓、おきふしよるはいこそねられね」宇津保藤原「源侍從の君、出でいりおきふしなげき給ふ」

おき-ふす 起臥 (自動四) 起きたり又臥したりす。起臥す。後拾遺秋上「秋風におきふしぬらん」増鏡「賞うけたまはりて、笛を持ちながら、おきふし拜するさまも、つきづきしう故ありて見ゆ」

おき-ぶたい 置舞臺 (名) 芝居などにて、所作事又は義太夫もの時、足音を高からしむるため、花道の中頃まで更におきそふる舞臺。所作舞臺。

おぎ-ぶみ 置文 (名) 書置の文。遺書。東鑑「十八、建久元年四月廿日、陸奥國平泉保御藝等興隆事。故右幕下御時、任本願、基衡之例可致沙汰之旨、被殘御置文之處」諸國物語「思ひ定むる所を人に知らせて、後の證據にと、一通の置文にして、奥に狂歌有り」

おぎ-ふるし 置舊 (名) おきふるしたること。又、その物。慶筑波「年明けて今朝見る霜や置きふるし」

おぎ-ふる-す 置舊 (他動四) 置きたるままにて、時日を經ふる。使用せずに時を經ふる。萬「おしてるや難波菅笠置古之 ヲキフ」のちはたが著む笠ならなくに」

おぎ-へ 沖方 (名) 海の彼方。沖の方。記「淤岐幣 ヲキ」には船つらら、くろざきのまさづこわぎも、國へくだらす」萬「於伎幣 ヲキ」より汐滿ちくらし、からの浦にあさりするたづ鳴きて騒ぎぬ」

おきへ の かた 沖方方 おきへ(沖方)に同じ。萬「われのみや夜船は漕ぐと思へれば、於伎敵能可多 ヲキヘ カタ」にかぢの音すなり」

おぎ-べい 置幣 (名) 神前に供へ奉る幣帛。神道名目抄

おぎ-まつり (名) せきてん(釋奠)に同じ。倭訓栞 時記

おぎ-まどはす 置惑 (他動四) 一他と見分けがたきさまにおく。古今秋「心あてに折らばやをらん、初霜のおきまどはせる白菊の花」二何れへか置きて、見失ふ。源夕顔「かぎをおきまどはし侍りて、いとふびんなるわざなりや」

おぎ-まよふ 置迷 (自動四) 置きどころをまよふ。あやまりて置く。新古今秋「色かはる露をば補におきまよひ、うらがれてゆく野邊の秋かな」

おぎ-みち 置路 (名) 高く土を盛り上げて路としたるもの。鎌倉志「八幡社前より濱までの道、其の中の一段高き所を段葛と名づく。又は置路ともいふなり」

おぎ-みやげ 置土産 (名) 立ち去りたる跡に遺しおく贈物。皇白集「いかさまのおきみやげとて眉の霜、かしらの雪をくるる年かな」

おぎ-め 沖海布 (名) 沖にある海布。ワカメ。登尹千首「小ふね漕ぐうなかみ湯の朝ぼらけ、おきめかりがね波に鳴くなり」

おぎ-め 置目 (名) 一掟て。定め。法則。法規。武德安民記「一、起請文の中、一、御奉公御置目等諸事。可爲如今迄後、勿論候」那須氏文書「東八州奥羽兩國置目等、近日可申附候條、可成其意候」二しおき。處刑。丹波與作「盗みをさせて、おきめにあふ」愚八卦柱曆「急度訴へて、おきめにする奴なれど」

おぎ-めばる 沖目張 (名) 【動】あかめだひ(赤目鯛)の異名。

おぎ-もの 置物 (名) 一室又は床の間の裝飾にすゑおく器物の總名。二神佛などの前にすゑ置て供ふるもの。神武紀「以祭諸神。自此始、有嚴瓮之置 ヲキ」也」

おきもの の つくゑ 置物机 おきものを載せ置くつくゑ。源若菜「おまへにおき物のつくゑ二つ、からのぢのすそごのおほひしたり」

おきもの-だい 置物臺 (名) 客間に備へて、花瓶・石骨等を載せおく臺。

おきもの-づし 置物廚子 (名) 置物を載するづし。著聞「二、筆策一つを、置物廚子に殘したりけるを」古事談「寄藏人所置物廚子許物を探りて、笏も不被置之御廚子哉とつぶやきけり」

おぎもの-びゃうぶぶぎゃう 置物屏風奉行 (名) 室町時代の職名。將軍、諸家に臨まるるを、諸家にて、臨時に命ずるもの。屏風及び茶席の器物よりはじめて、座敷を飾り立つることを掌る。

おぎ-や 置屋 (名) 遊女・藝者等を抱へ置きて、揚屋・茶屋・呼屋等より迎ふる時、之を遣すを業とするもの。滑稽編

おぎ-やあ (名) 嬰兒の啼き聲。

おぎ-やあせ (句) 〔おきませの訛りか〕おかせられよ。やめ給へ。尾張國の方言。

お-ぎゃう 御形 (名) 【植】ははこぐさ(鼠麹草)の異名。正月七草に用ふる時の名。どぎやう。

おぎゃう-どき 御經時 (名) 經を讀誦すべき時刻。狂言鷺「いや、とかう申すまに、お經時になった。くわ・くわ・くわ、なまいだ」

おぎゃう-ながし 御經流 (名) 平家琵琶の法師が、毎年陰曆三月廿四日に、法華經を書寫して加茂川へ流すこと。安德天皇の御祭と號す。

おぎゃがり-ぼし 起上小法師 (名) おきあがりこぼし(起上小法師)の訛り。狂言六人「京に京にはやる、おきやがりこぼし好い殿見れば中略つひとろぶ」

おぎゃが-れ-こぼし (名) 前條に同じ。萬紫千紅「抱銜見舞の不倒翁、おきやがれこぼしと頭をはらるるも」

お-ぎゃく 御客 (名) 一きやく(客)の敬語。狂言鷺「さやうの者をば、たばせられて、お客へつかはされませ」二げつけい(月經)をいふ、女詞。僧言 おつしやる。

おぎゃる (他動四) 江戸時代、陸前國仙臺の方言。浮世風呂「なんと辨慶、なぞをかけべえが、解ぐ氣は無えかどさ、おぎやり申せば」

おぎゃん 御俠 (名) おてんば。

おぎょい 御御意 (名) 御意(ぎょい)といふに、更におの敬語を重ねていふ語。狂言鷺「身共はあなたに、いやとおぎょいなさるるほどに」

おぎよ-どころ 御清所 (名) 古へ、貴人の臺所の稱。かってもと。故實拾要「御清所とは御臺所也。但し、俳御の物を調ふる所を御清所と云ふなり。御臺と云ふは其の次也」傾城酒呑童子「親・祖父、代代おぎよ所へ柴入れた冥加のため、薪は嫁が續けませう」

おぎ-らんぷ 置洋燈 (名) 物の上に据ゑ置くらんぷ(釣らんぷ等の對)

おぎる 起 (自動上) おく(起)の口語。

おぎろ 隙 (名、副) 一廣大なること。深奥なること。欲明紀「善聞、造丈六佛、功德甚大」太平記「事の隙に、誠に思ひ切つたる體かなと、まづ涼しくぞ見えたりける」二甚だ。非常。太平記「「餘りに敵を侮りて、隙に大ぼやりなりし故に、毎度の軍に負けにけり」

おぎ-ろく 隱岐綠 (名) 次條の略。

おぎ-ろくしゃう 隱岐綠青 (名) 〔古へ隱岐國より産したるよりいふ〕綠青(ろくしゃう)の一種。繪の具に用ふるもの。おきろく。

おぎろ-なし 隙 (形) 廣大なり。深奥なり。萬「そぎたくも於藝呂奈伎 ヲギロ」かも、ときはくもゆたけきかも」

おぎ-わかる (自動下) 起きて別かる〔歌撰「夢ならで又や通はん、白露のおきわかれにしままのつぎ橋」紫古今「朝霧人の手枕おきわかれ、亂れてのちぞ物はかなしき」

おきわする 置忘（他動）物を置きたる處を忘る。おきどころを忘る。
おきわすれる 置忘（他動）前條の口語。
おきわた 置綿（名）わたばうし（綿帽子）に同じ。日本武尊吾妻鑑「頭に置き綿や、三平二滿の大口紅、肌の麗の四十過ぎ」
おきわたし 沖渡（名）【商】もとふねわたし（本船渡）に同じ。
おきわたす 置渡（自動）一面におく。夫木「おきわたす霜のただちやうとからし、森の落葉のふかき下草」
おきわぶ 起佗（自動）起くをいとふ。おきにくく思ふ。狭衣「まだ知らぬ曉露におきわびて、八重たつ霧にまよひぬるかな」
おきゐる 起居（自動）起きて居る。萬十「こほろぎの我がとこのべに鳴きつつ、もとな、起居（オキヰ）つつ君に戀ふるに、いねがてなくに」
おきゐ 置餌（名）鷹に飼ふ餌。爲忠百首「はし鷹の君がおき餌にはかられて、ゆゑ弓やなぐひを負ひて戸口に居り」
おきゐ 置物（名）物の末尾。最後。源明石「例よりは御文こまやかに書き給ひて、おくに」千載冬「外山吹く嵐の風の音聞けば、まだきに冬の奥ぞ知らるる」
おくい 左の方。萬「わぎもの手にまきていなましを」
おくい 貴人の妻の稱。奥方。奥樣。貞女白無垢「いひがひなの奥の心や」
おくいし 大切にかしづくこと。萬「はしけやし、あが於久（オクヰ）つま」
おくい 事の深遠にして、知り易からざること。心に祕すること。萬「あきつばの袖ふる妹を、玉くしげ奥（オク）に思ふを見給へわぎみ」勢語「しのぶ山忍びて通ふ道もがな、人の心のおくも見るべく」「蔡邕文「文藝典籍、尋道入奥」
おくいて 大切にかしづくこと。萬「はしけやし、あが於久（オクヰ）つま」
おくいなし 奥無なし。夫木「ときはなる花もやあると吉野山、おくなく入りて猶たづね見ん」
おくいりぐち 奥入口（名）奥づとめをする家老。丹波與作「お迎ひの奥家老、本田彌三左衛門」
おくいりぐち 奥口（名）家の奥へ通ふ入口。丹波與作「時に奥口さざめいて、はや御立ちと、姫君の御輿舁きあげ、行列立て」
おくぐち 奥口（名）奥づとめをする家老。丹波與作「お迎ひの奥家老、本田彌三左衛門」
おくぐらし 奥暗（形）はしの方は明かるけれど、奥の方暗し。源著「夕かげなればさやかならず、おくぐらきここちするも、いとあかず口をし」風雅冬「くれやらぬ庭の光は雪にして、おくぐらくなる埋火のもと」
おくけん 〔臆見（名）臆測より得たる確かならぬ見解。
おくげんくわん 奥玄關（名）奥の方の玄關。川中島合戦「毎日の進物中略奥玄關の取次に、所狭きまで積み重ね」
おくこ 船具。とびせみ（飛蝉）を見よ。
おくこ 奥小姓（名）武家時代、奥づとめをなす小姓。曾我虎磨「御出でなりと、奥小姓御簾を捲けば」
おくごぜん 奥御前（名）おくがた（奥方）に同じ。奥御前（名）おくがた（奥方）に同じ。賀古教信七郎廻「二男は夫人、おく。義光物語「輝宗公の御奥方より、奥にめされ上の山迄來たり」
おくがはら 奥革（名）莫臥羅革（バクヲラ）に似て、下品なる革。
おくかびの 置蚊火之（枕）蚊遣火は下より焦がれゆくものなれば、したこがれにかけていふ。萬十「あしびきの山田もるぞが置蚊火之（オキカビノ）べしたこがれのみわは戀ひをらく」
おくがらら 奥家老（名）奥づとめをする家老。丹波與作「お迎ひの奥家老、本田彌三左衛門」
おくざ 奥義（名）奥深き義。あうぎ。
おくぐち 奥口（名）家の奥へ通ふ入口。丹波與作「時に奥口さざめいて、はや御立ちと、姫君の御輿舁きあげ、行列立て」
おくくぶ 〔名・闕〕おくこぶ（億劫）の訛り。
おくぐらし 奥暗（形）はしの方は明かるけれど、奥の方暗し。源著「夕かげなればさやかならず、おくぐらきここちするも、いとあかず口をし」風雅冬「くれやらぬ庭の光は雪にして、おくぐらくなる埋火のもと」
おくけん 〔臆見（名）臆測より得たる確かならぬ見解。
おくげんくわん 奥玄關（名）奥の方の玄關。川中島合戦「毎日の進物中略奥玄關の取次に、所狭きまで積み重ね」
おくこ 船具。とびせみ（飛蝉）を見よ。
おくごぜん 奥御前（名）おくがた（奥方）に同じ。奥御前（名）おくがた（奥方）に同じ。賀古教信七郎廻「二男は夫人、おく。義光物語「輝宗公の御奥方
おくい——おくが　**おくし——おくそ**　五三九

當奥御前の一子にて、兄に劣らぬ侍ざかり」
おくごてん 奥御殿（名）貴人の家にて、奥向にある御殿。津國女夫池「夏冬知らぬ室町の御所ぞ榮華の奥御殿」
おくこぶ 〔億劫（名）佛語。時の極めて長き稱。萬萬劫。拾遺記「袞九天之正氣、生于億劫之内」容易く爲し難きこと。てがるなならぬこと。ひまどること。おくくぶ。
おくさく 奥賾（名）あうさく（奥賾）に同じ。
おくざしき 奥座敷（名）奥の方の座敷。百合若大臣野守鏡「なほ尋ねたき事ども、奥座敷に座を替へて」
おくさま 奥樣（名）他人の妻の敬稱。奥方。奥。武家名目抄「五郎殿」狂言「奥樣は、西馬音内殿息女にて御座候」狂言「お國許へ下だらせられて、美しい奥樣にお目に掛からせられたらば」
おくざま 奥方（名）奥のかた。枕「おくざまにむきて書かせ給ふ」
おくさまびろめ 奥樣廣（名）奥樣となり、又は奥樣を迎へたるを、親戚・知己にひろむること。曾我五人兄弟「二の宮の館には、奥樣廣めの一門振舞ひ」
おくさん 奥樣（名）おくさま（奥樣）の音便。
おくし 御櫛（名）とうはつ（頭髪）の敬語。女詞。日本武尊吾妻鑑「宮のおぐしを掻き撫で撫き撫で」くび（首）の敬語。狂言「手を作る者には手、おぐしを作るものにはおぐしを作らせ」
おくしあげ 御櫛上（名）みくしあげ（御髪上）に同じ。平家女護島「お腰元出でなりと、奥小姓御簾を捲けば」
おくしあげ 御櫛上（名）みくしあげ（御髪上）に同じ。平家女護島「お腰元出でなりと、奥小姓御簾を捲けば」
おくしま 奥縞 奥島（名）〔一〕赤鯥入の立縞。さんとめ（殘留）を見よ。東海道名所記「知り人に行き逢はじと、奥じまの道服を打ちかづき」京阪にて、唐棧（サンタン）の總名。
おくじゃうるり 奥淨瑠璃（名）せんだいじゃうるり（仙臺淨瑠璃）に同じ。八俳枕「奥淨瑠璃緒絶の橋や古扇」
おくじゅしゃ 奥儒者（名）江戸幕府の職名。將軍の侍講。
おくしょあん 奥書院（名）奥の方の書院。浦島年代記「あの爪音は隣屋敷、玄上延尉之介が奥書院」
おくす 臆（自動）氣後れす。怖る。おぢける。宇津保「いとわろき朝臣なりけり。かくなおくせられそ、ただ云ふに從ひてよめ」枕「などさはおくせしにかすべて面さへ赤みて思ひみだるるや」
おくす 致（他動）おこす（致）の訛り。よこす。狂言「鋸おくせえ、引き切つて、しんに立てうに」「いねならばいなうほどに、暇をおくしぞ」
おくすぢ 奥筋（名）奥州の方面。奥州すぢ。日本武尊吾妻鑑「是れは勢州五十鈴の川上に現れ給ふ天照神の乙女巫女、今年は奥筋の道者少なく、神慮に遠ざかるを不便と思し召され」
おくせい 奥勢（名）奥州の軍勢。源氏冷泉節「秀衡が催しにて、奥勢十萬餘騎を參らする」
おくせいご 〔名〕〔物〕いさき（雛魚）の異名。
おくせつ 〔臆說〕〔一〕已れが意にて推量したる說。假定したる意見。臆測の說。富弼文「但且欲證臣狂誓平臆說焉」〔二〕（英 Hypothesis）かせつ（假說）を見よ。
おくそく 〔臆測〕〔億測〕（おく（臆）は心、そく（測）・おく（億）は共にはかる）〔一〕已れが心のみにておしはかること。あてずして、都の山は色づきぬらむ」同同「鴨じものうきねをすれば、みなのわたかぐろき髪に露ぞ於伎（オキ）にける」
おきて 有て。とりて。於いて。宇津保「宰相の君におき奉りては、雅頼にくはしくいふ人侍らましかば」取替「今におきては、まほりいさめんも無益なり」
おく 起（自動）〔一〕伏したるより立ちあがる。顯宗紀「いなむしろ川そひ柳水ゆけば、なびき於己（オキ）たち其の根はうせず」〔二〕眠り覺む。寢所より出づ。萬十「朝とでの君があゆひを濯らす露原、はやく起（オキ）て出でつつ我れももすそ濡らさな」宇津保「宮御とのどもりおくるやうにて」〔三〕うつし心になる。氣がつく。神武紀「中毒士卒、悉復醒起（オキ）」〔四〕うかびいづ。浮く。厳島詞記「しほのひてゐたる船の、しほ滿ちて浮かぶをば、おくるといふにこそ」
〔誹〕起きて働く果報者 健康なるものの幸福なること。
〔誹〕起きて半畳ぬて一畳 起臥・飲食には限りあり、人生足ることを知れとの譬へ。俗諺「起きて半畳寝て一畳、天下取っても二合半」
〔誹〕起きて居て寝言いふ とりとめなき事をいふ。神靈矢口渡「はてさてお前はとんだ事。明かるけりや月夜だと思うて、起きて居ながら寝言いはっしゃる」
おく 置（他動）〔一〕据ゑう。記「とこのへに、我が染岐（オキ）しつるぎの太刀」舒明紀「取伏（オキ）仗而逃之」萬「あか駒に、しづ鞍うち置伎（オキ）」安閑紀「安置」〔二〕葬る。埋葬す。崇峻紀「作墓而葬（オキ）」〔三〕さしおく。除く。萬「あれを於伎（オキ）て、人はあらじとぼころへど」同「たばなれも、をちもかやすき此れを於伎（オキ）て、又はありがたし」〔四〕見棄つ。殘し留む。雄略紀「ながかたは於柯（オキ）むと、あきつ島やまと」齊明紀「湊のうしほのくだり、うなくだり、うしろもくれに飫岐（オキ）てか行かむ」萬「飛ぶ鳥のあすかの里を置（オキ）ていなば、君があたりは見えずかもあらむ」同「ひと世には二たび見えぬ父母を、意伎（オキ）てや永くあが別かれむ」〔五〕瘞め用意す。かねて爲す。設く。「聞いておく」神武紀「殿内施（オキ）機」萬「神のみことの、みくしげにたくはひ於伎（オキ）ていつくとふ、玉にまさりて思へりし」〔六〕居らしむ。養ふ。畜ふ。垂仁紀「常在（オキ）左右」萬「あづさ弓ゐるはよりねむ、まさかこそ人目を多み、なをはしに於家（オケ）れ」預け入る。預く。宇津保「此の節會にはき給ふ御はかしを、賀に於かん」〔八〕隔つ。「中一年おく」萬「ほとときすあひだしまし於家（オケ）、なが鳴けば、あがもふ心いたもすべなし」〔九〕時給にす。摸樣を著く。榮華物語「白銀の御衣賀、かいぶおかせて」〔十〕留む。懸く。（心にいふ）神代紀「特鍾（オキ）擒愛、以崇養焉」勢語「けしう、心おくべきこともおぼえぬを」源「おのづから、かしこまりもおかず」〔十一〕計算す。數ふ。發心集「算をいくらもいくらもおきひろげて」狂言「算をおきませう」
おきてきたり 既來 「知慧を置き忘れて生まれ來たりたる義」足らず。愚なり。しかた咄「昔、おきてきたる男あり」
〔誹〕置かぬ棚をも揃せ 物を探す時には、念に念をいれよ。
おくあみ 奥網（名）魚を捕る網の中央部。その目は、他の部分より密なるを要す。（網の袖・肩・裾等の對）
おくい 奥意（名）〔一〕深き心の底。

てずゐりやう。揣量。後漢書「天道性命、聖人難言之、況乃億測微隱、狷狂無妄之禍」㊁英 (conjecture) 事實上何等の根據なく、又論理上の推理法を用ひず、單に自己の感情に訴へて、事物の如何を推量ること。

おく-そこ 奥底 (名) ㊀奥深き處。隱れたる處。㊁心の祕密。悔草「ひいき口こそをかしけれ。むざと口きき過ぎる人といへば、いや奥底なき者といふ」博多小女郎波枕「はや千年のなじみほど、心解けたる朝霜の、おくそこもなく成りにける」

おく-そ-づきん (名) おこそづきん(御高祖頭巾)の訛り。

おく-たーぶ 奥(英 Octave) (名) 【理】或る音に對し二倍の振動數を有する音。音樂にては、長短音階の何れの音よりしても、其の第八に當たる。

おく-たかし (形) 臆病心强し。臆病なり。源少女「學生十人を召す。式部のつかさの試みの題をなずらへて、御題賜ふ中略おくだかき者どもは物も覺えず」

おく-たく 〔臆度 億度 〔たく(度)はばかる〕おくそく(臆測)に同じ。唐書「書生苦信書、世事仍臆度」蘇軾詩「不宜輕億度、使自猜危」

おく-だん 〔臆斷〕〔だん(斷)はさだむ〕臆測によりて決斷すること。晏書「胸臆斷斷之倡」抱朴子「世人信其臆斷」

おくたんと (蘭 Octant) (名) 角度を測るに用ふる器。三百六十度の圓を八分したるもの。

おくちやなし 無奥口 (句) いふかひもなし。義經記「弁慶の軍を見候に、まことにおくちもなくしなされて候もの哉。源氏を小勞なればとてあざむきて、しそんぜられ候かや」

おく-ちやうば 奥帳場 (名) 商家の奥にある帳場。主人又は支配人などの居る所。

おく-ちね 奥智慧 (名) 年長けて初めて出づる智慧。おそぢる。

おく-つ 御靴 (名) 江戸時代の遊廓の語。たいこもち(幇間)の異名。吉原雀「問うて曰はく、おくつとは如何に。答へて曰はく、たいこもちの異名なり。とりもつといふ心なるべし」

おく-つき 奥津城 奥城 (名) 古語。はか。墓所。おくつきどころ。おきつき。萬十一「大伴の遠つかむ親の於久都奇(オクツキ)には、しるくしめ立て、人の知るべく」丘墓紀哲 奥都三国

おくつき-どころ 奥津城處 (名) 古語。前條に同じ。萬二「われも見つ、人にも告げむ、かつしかのままのてこなが奥津城處(オクツキ)」

おく-つげ 奥附 (名) 書物の終はりに、著者の姓名、發行年月などを書き記しある紙。

おく-つ-すたべ 奥津棄戸 (名) 〔奥津柄津上(オクツカヅ)の義。奥は起臥などにこもる所なればいふか。柄は住處〕古語。太古起き臥しの料に、床などあげて造りたる家宅。一説、すは簀の義、家の奥の方の簀編みたる上。古への床 日本紀私記「奥津棄戸(古語拾遺)」

おく-つ-とめ 奥勤 (名) 奥むきの事を勤むること。

おく-づま 奥妻 (名) 大切にかしづく妻。萬十一「はしけやし、あが於久豆麻(オクヅマ)」拾遺集「白露のおくづまにするをみなへし、あなわづらはし人な手ふれそ」

おく-つ-みとし 奥津御年 (名) 【植】古語。いね(稻)の異名。祝詞式「神年、奥津御年(オクツミトシ)」

おく-つむぎ 奥紬 (名) 奥州より産出する紬(ツムギ)。室町殿日記「奥紬の小袖、兩面無紋黑」

おく-づめ-しゅう 奥詰衆 (名) 江戸幕府の職名。譜代・外様大名、隔日交替に上直して、營中山水の間に伺候するもの。綱吉將軍の時之を置き、尋いで廢す。

おく-つゆの 置露之 (枕) 露は消えやすきものなれば、きゆにかけていふ。萬二「朝なさな草の上白く置露乃(オクツユノ)、消えぬ共にといひし君はも」

おく-て 奥手 (名) ㊀晩く成熟する稻。おく。(わせなどの對) 古今哀傷「朝露のおくての山田かりそめに、うき世の中を思ひぬるかな」晩稻。㊁後れて花咲く草木。萬八「咲く花のうつろふはうし、奥手(オクテ)なる長き心に猶しかずけり」

おく-てーぶ (名) 【理】おくたーぶ。に同じ。

おく-ていね 奥手稻 (名) おくて(奥手)に同じ。小野宮右衛門督家歌合「おくていねの今は早苗と生ひたちて、待ちてふるゐねもあらじとぞ思ふ」

おく-てう 〔億兆 (名) ㊀限りなく多き數。戰國策「此兩策者、相去有億兆之數」㊁萬民。衆庶。其の數の多きよりいふ。教育勅語「億兆心を一にして世世其の美を濟せるは」後漢書「上爲宗廟無窮之計、下收億兆元元之命」

おく-てう 〔億兆 (數) 億の數と兆の數と。

おく-てーなる 奥手 (枕) おくては盛かりの永きものなれば、ながきにかけていふ。萬八「咲く花のうつろふはうし、奥手有(オクテナ)ながき心に猶しかずけり」

おく-ての-いね 奥手稻 (名) おくて(奥手)に同じ。曾丹集「あしげなるおくてのいねを守るまに、萩のさかりは過ぎやしぬらん」重之集「白露のおくてのいねも出でにけり、かりくる風はうべも吹きけり」

おく-ど 奥土 (名) 奥の土地。奥州。日本武尊吾妻鑑「寶祚を傾け秋津洲の主たらんと、奥土を立ちて駿河の國神津にたむろを構へたり」

おく-どこ 奥床 (名) 奥の方にある寢所。萬十一「奥床(オクトコ)に母はねたり、とつとこに父はねたり」

おく-としより 奥年寄 (名) 江戸幕府の職名。るすゐとしより(留守居年寄)に同じ。

おく-に 御國 (名) 江戸時代、大名の領地の稱。狂言「國へ歸らせられたらば、妾が事などはふつつりと忘れさせらるるであらう」槍權三「器量はお國一番」

〔誹御國の松が見える〕江戸時代、參勤交代の時、歸國のもの、郷土の松の見ゆる所まで至るといふより、前途の見込みのほど立つ譬へなどにいふ。

おく-に-かぐき 阿國歌舞伎 (名) 室町時代の末、出雲大社の巫女阿國が、神樂の舞を變へて、始めて演じたる舞曲。是れ歌舞伎の濫觴なりといふ。歌舞伎 事項

おく-に-じやうるり 御國淨瑠璃 (名) 奥州にていふ語。せんだいじやうるり(仙臺淨瑠璃)に同じ。

おく-にはー 奥庭 (名) 家の奥向にある庭。井筒業平河内通「紀の有常の奥庭に」

おく-にはばら 御國腹 (名) 大名などが、在國中に儲けし子。丹波與作「丹波の國の一城主、由留木殿のお湯殿の子、しらべの姫はお國腹」

おく-に-もの 御國者 (名) ㊀江戸時代、田舍侍の稱。㊁地方の人。田舍者。

おく-ぬの 奥布 (名) 上古ありし布の一種。奥州より出でたる物なるべし。鎌倉時代までは在りしが、其の後絶えたり。續文獻通考「今は世にあるもまれなるおくぬのの、用ひられしは昔なりけり」東鑑十七、建仁三年「奥布二百端」

おく-ねん 〔臆念 億念 心中に深く思ひ込むこと。執念。平家六、葵前「讃岐院の御靈、宇治惡左府の御憶念」法華經「憶念過去無量千萬億諸佛法藏」

おく-の-えびす 奥夷 (名) 陸奥國のえびす。夫木「ながつきの月の有明のけしきをば、おくのえびすもあはれとや見ん」

おく-の-お 奥おを (名) を・おの發音同じくして紛るるより、いろは歌の次第によりて、ををはしのを、おを奥のおくひて區別する語。麿筑波「奥とはしとの論け故あり」おの字をばどれを書かんと疑ひて」

おく-の-ざ 臆座 (名) がうおくのざ(剛臆座)を見よ。

おく-の-しよゐん 奥書院 (名) おくしよゐん(奥書院)に同じ。井筒業平河内通「あの酒宴は奥の書院」

おく-の-て 奥手 (名) ㊀左の手。(右を逸)「といふ對) 萬八「わざも兒はくしろに有らなむ、左手のわが奥手(オクテ)に纏きていなましを」㊁藝術の秘訣。謀略の秘術。枕狩劍本地「親をだしに使ふは、物取の奥の手」㊂容易に人に示さざる隱藝。小町踊「山山は奥の手を出す歟かな」

おく-のま 奥閒 (名) 家の奥の方の室。謡曲「さらば奥の閒へ御通り候へ」

おく-の-まき 奥卷 (名) ㊀書の末卷。㊁忍傳。おくのて。

おく-の-や 奥屋 (名) 武家にて、たいのや(對屋)の稱。

おく-の-ゐ 奥ゐ (名) い・ゐの發音同じくして紛るるより、いろは歌の次第によりて、いをはしのい、ゐを奥のゐと呼びて區別する語。

おく-の-ゐん 奥院 (名) 寺院にて、本堂より奥の方に、佛などを安置しある處。砂石集「奥の院へ一里は、金剛界の三十七尊の種子をかく」東鑑十七、建仁三年九月三日「進發高野山、可奉納奥院」

おく-ば 奥齒 (名) 口の奥の方にある齒。人にては上下・左右にある、小臼齒二枚、大臼齒三枚づつの稱。常磐姫物語「おくばも、きばもまだあれば、青梅・かち栗くひつべし」

〔誹奥齒に紺〕禍心を藏する譬へ。源平布引瀧「御殿でなくばと、奥齒につるぎ」

〔誹奥齒に物の挾まる〕十分に打ち解けず。隔てをおく。隔意あり。

おく-ば 奥場 (名) 劇場の棧敷番をいふ。京阪の方言。歌舞伎詞

おく-はず 奥坊主 (名) 江戸時代、幕府また諸大名の茶室を管理し、茶を進むることを職とするもの。坊主。

おく-び 衽 (名) 〔おほくびの約〕おくみ(衽)に同じ。

おくび 噯氣 (名) 瓦斯が、胃より食道を通りて口外へ逸出するもの。聞上手「無理にこらへてゐると、おくびの出るものぢや」

おくび にも いださず 少しも口に出だして云はず。鶴賞谷戰物語「武勇の道をばおくびにも立てず、見るにも片腹痛き花奢風體をのみ好みて」日本振袖始「一軍の門出、一寸でも返すとは嗟氣にも出ださぬ忌詞。忌忌しい、聞きたくない」

おく-びやう 臆病 (名) 僅かなる事に怖ぢ畏ること。又、其の人。おぢけ。氣後れ。大鏡「われをくびるとよむなりけりと思しけるおく病に、やがて絶え入り給へば」平治「右衛門の督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ」

〔誹臆病の神おろし〕臆病者が、諸神の名を唱へて加護を祈ること。聽耳世間猿「强いことといふて居る口の中には、南無住吉大海神樣・天神樣・金毘羅樣と、臆病の神おろし」

〔誹臆病の自火に責められる〕臆病なるため、自ら物事をおそろしく見なす。盛衰記「忠盛が刀を拔いて我れを斬らんとしたるが、身には負ひたる疵なけれども、臆病の自火に責められて、絶え入りたるにやと宣へば」

おくびやう-いた 臆病板 (名) 鎧の腹卷の名所。せいた(背板)に同じ。

おくびやう-かぜ 臆病風 (名) 臆病なる心。おぢけづること。「臆病風が吹く」門出八島「臆病風に寒氣立ち、大敵に押っ立てられ、本國へ一飛に逃げ行く爲めの草鞋か」

おくびやう かぜ に ふかる 臆病の心生ず。おぢけづく。

おくびやう-がね 臆病金 (名) 鎧の脇當(ワキヅ)の名所。脇の背を被ふ所。すねあて(脚當)を見よ。

おくびやう-がみ 臆病神 (名) 人を臆病にする神。鶴賞谷戰物語「臆病神に煽り立てられて、太刀・長刀を捨てて逃げければ」

おくびやう がみ が つく 臆病神が身につきて、臆病の心生ず。

おくびやう-ぐち 臆病口 (名) 能舞臺にて切戸、劇場にては本舞臺下座の方の入口の稱。劇場新語「臆病口。本舞臺下座の方をいふ。尤も上方とは違ふ。京・大阪は江戸の操座の舞臺とひとしく、多くは左右に出入りの口あり。依て之左右をいふ。江戸は下座の方を口入といふ」

おくびやう-にん 〔臆病人 (名) おくびやうもの臆病者に同じ。平治 時實「信報といふ大臆病人が」

おくびやう-むし 臆病蟲 (名) 臆病なる性質。木食楚仙獨吟「ひだかくなるや武藏野の原。別の子細なし。月に猶臆病蟲のくくめきて。腹の蟲にとりなし候事」

おくびやう-むしや 〔臆病武者 (名) 臆病なる武者。

〔誹臆病武者のしれかへり〕臆病者の、ことさらに平氣を裝ふこと。世話盡「臆病武者のしれかへり」

おくびやう-もの 臆病者 (名) 臆病なる性質の人。謡曲「きやつは、今に始めぬ臆病者」

〔誹臆病者のよんどころなし〕臆病者の、事情にせまられて、止むを得ず處置をなすこと。

おく-ふか 奥深 (副) 奥深く。奥深きさまに。榮華「いたう奥ふかなる事をば、いとわろき事におぼして、今めかしうけぢかき御ありさまなり」

おくふかーけ 奥深氣 (副) おくふかさう。おくふかきさま。源平「餘りもちもち離れ、おくふかげなるけはひも、所のさまにあはずすさまじと思へば」

おくふかーさ 奥深 (名) おくふかきさま。おくふかき座合。

おく-ふかし 奥深 (形) 一奥の方へ遠し。奥にふかくあり。源氏「女ばらのおくふかきを起こし出づる程、久しくなりて」 二心の中深くして、容易く知り難し。枕「なほおくふかき御心さまを見知りたれば」 榮華物語「奥深くわづらはしきみ心にぞおはしける」

おく-ぐま 御供米 (名) 神に供ふる米。日葡「くましね。狂言「何やら、おくまのやうな物を肩に附けて、それが何ぢや」

おく-まけて (句) 古語。奥深く。心を深めて。風土記「近江のみ沖つ島山、奥儲(オクマケ)つわがもふ妹がことのしげけく」

おく-まへて (句) 前條に同じ。萬葉「奥(オクマヘ)」 眞經「われを思へる我がせこは、千歳いほ歳ありこせぬかも」

おく-まる (自動) 一奥深くあり。深奥なり。源氏「おくまりたる山住みもせで」 二心おくゆかしくあり。源花宴「心にくくおくまりたるけはひは立ちおくれ、今めかしき事を好みたるわたりにて」

おくまん-ごふ 一億萬劫 (名) 數へ盡くせざるほどの多くの劫。日本武尊吾妻鑑「億萬劫の末掛けて、國を守りの御誓ひ」

お-くみ 衽 (名) 「おくびの轉」 一衣の前の左右の端にあり、襟より裾に至る半幅の布の稱。 二劇場の土間の割り餘りたる所。花道の兩側にあり。斜めにしきりて、衣服の衽の如くなればいふ。

お-くみ 御組 (名) くみやしき(組屋敷)に同じ。

おくみ-いた 衽板 (名) 和船の反臺の下にありて、衽の形したる板。

おくみ-さがり 衽下 (名) 衣服の、衽さきより襟先に至る間の稱。

おくみ-さき 衽前 (名) 衣服のおくみの上端。襟につきて、斜めに尖りたるところ。浮世風呂「戸張りをしたら、大首(オクミ)先を張り曲げたといふ小言さ」

おくみ-なり 衽形 (名) おくみの如く斜めなる形。

おく-みや 奥宮 (名) 本社より奥の方にある宮。おくやしろ。

お-くむき 奥向 (名) 家の奥の方。賤苧環「瀧川殿申さることは、おくむきには、何事も埒の明くことありしに」

お-くめつけ 奥目附 (名) おくよこめ(奥横目)に同じ。傾城反魂香「今日密密に祝言有りと、奥目附より聞きたれども」

お-くめん 一臆面 (名) 氣後れしたる顔色。臆したる面貌。

お-くや 奥屋 (名) たいのや(對屋)に同じ。室町時代、武家の語。芝居にて、一切の事務の街にあたる役。劇場新話「客は、太夫元・若太夫・帳元、しきり場の奥やくのものなど呼ぶなり」

お-くやしき 奥屋敷 (名) 奥の方にある屋敷。

お-くやしろ 奥社 (名) おくみや(奥宮)に同じ。

お-くやま 奥山 (名) 人里離れたる奥深き山。山の奥深き處。深山。萬「於久夜麻(オクヤマ)のしきみが花の名のごとや、しくしく君に戀ひわたりなむ」 古今「飛ぶ鳥の聲も聞こえぬおく山の、深き心を人は知らなん」

おくやま-が 奥山家 (名) 深山の中にある人家、又は家里。國姓爺後日合戰「日本とても奥山家・邊土は詞訛みたるに、都を知らぬ島夷、何が泣くやら、口說くやら」

おくやま-かど 奥山門 (名) 前條に同じ。安法集「いかなられん奥山かどの初時雨、都はただに心細きに」

おくやま-だち 奥山育 (名) 奥山にて育ちたること。又、其の人。やまがそだち。曾我虎磨「千手・八王子の奥山育ちの田夫侍二三十人、相副へ」

おくやま-でら 奥山寺 (名) 奥山にある寺。夫木「かしの葉のもみぢぬからに散りつもる、おくやまでらの道ぞかなしき」

おくやま-の 奥山之 (枕) 杉・檜等の眞木は奥山に生ふるものなれば、まきとつづけていふ。萬「於久夜麻能(オクヤマノ)まきの板戸をとどとして、わが開かむに入りきてなさね」

おく-ゆかし 奥床 (形) 一奥深くして、何となくゆかし。山家集「みちのくのおくゆかしくぞおもほゆる、つぼのいしぶみそとの濱風」 二深き寶志ありげに見ゆ。沈重にして、何となく慕はし。源花宴「ざれくつがへる今やうのよしばみよりは、こなようおくゆかしとおぼしわたるに」 大鏡「いつしかと聞かまほしく、おくゆかしきここちするに」

おくゆかし-げ 奥床氣 (副) おくゆかしさう。榮華物語「御前の方思ひやり參らせ、奥ゆかしげなり」

おくゆかし-さ 奥床 (名) おくゆかしきさま。おくゆかしき度合。

おく-ゆき 奥行 (名) 家屋・地所などの、表より奥への距離。開口の對。

おくゆき-がない 奥行無 あさはかなり。おくふかからず。

おく-ゆるし 奥許 (名) 師より奥義の傳授を免許せられたること。中許等の對。

おく-よこめ 奥横目 (名) 江戸時代、奥勤めの人を監察する役。おくめつけ。一代女「家久しき奥よこめ、七十餘歳を過ぎて」

おくら 御倉 (名) なふせんいちしゆう(納錢一衆)に同じ。

おくら (名) 〔くらはらく(樂)を逆にいへるにて、せんしうらく(千秋樂)の略〕物の終はり。千秋樂。「芝居がおくらになる」

おくら-かす 後 (他動) 後るるやうにす。後れしむ。おくらす。源氏「おくらかし給はば、いみじうつらからん」 同胡蝶「車などかたへはおくらかし、さきにたてなどしたれど」

おくらかせる 後 (他動) 前條の口語。

おくら-ことねり 御藏小舍人 (名) 官名。藏人所の小舍人。納殿の御物を出納する故にいふ。

おくらす 後 (他動) おくらかす。おくれしむ。古今「限りなき雲井のよそに別かるとも、人を心におくらさんやは」

おくら-せん 御藏錢 (名) 〔江戸幕府にて、御藏に納れ置き、時時拂ひ下げたるよりいふ〕 あさくさせん(淺草錢)の異稱。

おくら-なふせんかた 御倉納錢方 (名) なふせんいちしゆう(納錢一衆)に同じ。

おくら-もんと 御倉門徒 (名) 眞宗の一派。倉の中に入りて念佛すれば、彌陀の本體を拜し得と說くもの。明和年間禁止せらる。

おくり 送 (名) 一おくること。見おくり。竹取「つかうまつるべき人人、みな難波までおくりしけり」 古今「山崎より神なびの森まで、送りに人人まかりて」 二おくりじゃう(送狀)の略。 三俳優の供。供優の樂屋の出入に送り行く故にいふ。 四遊里の茶屋にて、酒肴の價。

おより 御庫裏 (名) 門徒宗の僧の妻の稱。おくりさま。

おくり-あし 送足 (名) 貴人の前に出づる時の足遣ひ。下文を見よ。貞丈雜記「今時、貴人の御前へ參る時、送足と云ふ足づかひをする人あり。其の足遣ひは太刀・目錄また盃其の外、何にても持ちて參る時、御前の敷居際までは常の如く歩み來て、片足を上げ、敷居を越えさうにして越えず、其の足を引きて踏みなほして、扨敷居を越ゆるなり。是れを送足と名づけて、專ら稽古する人あり。古へは無き事にて近來のはやり事なり」

おくり-おほかみ 送狼 (名) 狼が、人のあとをつけ行き、すきあらば飛びつきて喰はんとすること。寛天見聞記「ころんだら食はう食はうとついて行く、藝者の母のおくり狼」

おくり-がう 諡號 (名) かいみやう(戒名)に同じ。傾城反魂香「此の場で自害し、其の跡のおくり號を待つ計り」

おくり-がな 送假名 (名) 漢字を和讀するに便なりむるため、字の下に附けたる語尾、又は助詞。

おくり-ざゃう 送經 (名) 盂蘭盆の終はりの日に、亡者の冥途に歸るを送るとて經を誦むこと。 小町踊「花にこふ蓮の卷葉やおくり經」

おくり-さん 送金 (名) そうきん(送金)に同じ。

おくりさん-かはせてがた 送金爲替手形 (名) そうきんかはせてがた(送金爲替手形)に同じ。

おくりさん-てがた 送金手形 (名) そうきんてがた(送金手形)に同じ。供託物取拔規程「銀行の送金手形」

おくり-けん 送券 (名) 〔商〕賣手が、商品及び代價を明細に記載して、買手に與ふる勘定書。同一地方に住する商人間の小取引に行はるるもの。

おくり-こ (名) おにごと(鬼事)をいふ、津輕の方言。

おくり-こし-とりひき 送越取引 (英 Carrying over) (名) 取引所の語。受渡期日に達したる定期取引の受渡を、次期に延ばす取引方法。此れは歐羅巴の取引所にて用ふれども、我が國にては未だ行はれず。繼續取引。繰越取引。

おくり-こみ 送込 (名) 一おくりこむこと。 二能樂の語。あひの狂言が、しての腰を立てて、後より靜かに樂屋へ送り込むこと。

おくり-こむ 送込 (他動) 送りて入る。

おくり-ざい 送采 (名) 通し矢を射る時、人人射前の所に居て、矢を發する毎に、采配を擧げて摩を掛くること。式用略

おくり-さま 御庫裏樣 (名) おくり(御庫裏)に同じ。

おくり-さんぢゅう 送三重 (名) さんぢゅう(三重)を見よ。同字の疊まりたるもの。をどりじ。疊字。毛吹草「送字か同じ形の天つ雁」

おくり-じゃう 送狀 (名) 一うんそうじゃう(運送狀)に同じ。印紙稅法第四條十九號「送狀」 二おくりぶみ(送文)に同じ。常照愚草「送狀認事。合千疋者。古爲被戊下安堵御判(御禮物)於所(來)遣納之狀(如件)」

おくり-じゃう-ねだん 送狀値段 (名) 〔商〕貨物の原價に、運送費・荷造費及び其の他の諸入費を加算したる値段。

おくり-つく 送附 (他動) おくりとどく。續政集「夜もすがらさえゆく月を山のはに、おくりつくるは心なりけり」

おくり-つける 送附 (他動) 前條の口語。

おくり-てがた 送手形 (名) 物などを送るに添ふる手形。

おくり-とどく 送屆 (他動) 送りて先方へ屆かす。おくりつく。狂言「八幡」閻魔王の案内者にて、九品の淨土へ送り屆け」

おくり-とどける 送屆 (他動) 前條の口語。

おくり-な 贈名 諡 (名) 人の死後に、其の行狀などによりて追贈する名。

おくり-のないし 送内侍 (名) 古昔、天皇譲國にて、御璽を新帝へ參らする時、先帝來仕の内侍、手づから取りて近衛中將に渡さるるを例とす。其の内侍の稱。故實拾要「送りの内侍」

おくり-び 送火 (名) むかへび(迎火)を見よ。あとび。小町踊「送火をそふや冥途の影法師」

おくり-びと 送人 (名) 見送る人。蜻蛉日記「夜ふけて、おくり人あまたなどして、ものしたり」

おくり-ぶ 送夫 (名) 物を送る人夫。東鑑十一、建久二年二月廿二日「送夫廿一人」 同十六、建久十年六月廿六日「送夫二十人、國雜色二人」

おくり-ぶね 送船 (名) 客を乘せて送る船。俗曲「八幡鐘」「きぬぎぬに、別かれともない送り船」

おくり-ぶみ 送文 (名) 物品をおくる時、添へて遣る文書。蜻蛉日記「例のことと讃じて、まところのおくり文をへてあり」 東鑑十、三、建久四年、十一月廿七日「送文」

おくり-ぜ 送せ (名) 陰暦七月末の風。幾・日葡「Ocuriqe 籠呼」

おくり-むかぶ 送迎 (他動) 送り又迎ふ。送迎す。拾遺「かぜふれば我が身につもるとし月を、おくりむかふと何いそぐらん」

おくり-むかへ 送迎 (名) 送り迎ふること。そうげい(送迎)。源氏「御おくりむかへの人の、きぬの裾たゝがたら、まさなき事どもあり」

おくり-もの 贈物 (名) 一客の歸る時、贈與する物品。宇津保「おくりもの・ひきいでもの、設けたる數のごと奉り給ふ」 同埋「御乳つけ歸り給ふ。おくりものいときよらにし給ふ」 二人の許に贈る物品。つかひもの。進物。孝德紀「調物(オクリモノ)」 用明天皇職人鑑「筆・墨・料紙のたぐひまで、心をこめし贈物」 三鎌倉時代、特に同等以下の人に贈與する物品。(進物の對)

おくりもの-ぶぎゃう 贈物奉行 (名) 鎌倉時代、武家の職名。贈物(オクリモノ)の事を掌る。

おくり-れい 送禮 (名) 見送りの禮。公方樣正月御事始記「おくり禮もふかぶかと可仕候也」

おくり-をさむ 送葬 (他動) 送葬を營なす。葬儀を營む。玉葉「はらからなる人のみまかりて、おくりをさめける夜」

おくる 後 (自動) 一あとになる。遲くなる。萬「春さめにもえし柳か梅の花、ともに於久禮(オクレ)ぬ常のものかも」 枕「ただおくれじと思ひつるに、人目も知らず走られつるを」 二ともなはず。つれず。はづる。「流行におくる」「時勢におくる」 萬「於久禮(オクレ)ねてながめしもせず、み岡ふの梅の花にもなりましものを」 三あとに殘る。留まる。萬「於久禮(オクレ)ねて我れやは戀ひむ、いなみ野の秋萩見

つついなむ子故に」四生き殘る。死に後る。土佐日記「ゆくさきにたつ白波の犀よりも、おくれて泣かん我れやまさらん」源若紫「故みやす所におくれ奉りし」五劣る。次になる。枕「梨の花中納言あいぎやうおくれたる人の顔など見ては、譬ひにいふも」源帚木「おくれたるすぢの心をも、なほ口をしくは見えじと思ひはげみつつ」六衰衣「心をつくす人人、高きもおくれたるもさまざまに」六後れて生じたる毛の、他に及ばず短くあり。源螢「ひたひ髪は少し短くぞあめるを、むげにおくれたるすぢのなきや」七聽す。氣後れす。大鏡狂言文記「ああ、まづ待て、待て。なんと、おくれたか」

おくれ さきだつ 後先立 一或ひは後れ、或ひは先にたつ。夫木七「ただしばしおくれさきだつくらべ馬の、走りならぬ世にはあらずや」二或ひは生き殘り、或ひは死に行く。源帚木「限りあらん道にも、おくれさきだたじと契り給ひけるを」

おくる 送 (他動ラ) 一此處より彼處へ遣る。つかはす。神代紀上「舉(アゲテ)高天原(タカマノハラ)に送(オクル)」二行く人の後に從ひて行く。萬三「あま飛ぶや鳥に もがもや、都まで意久利(オクリ)甲して飛びかへるもの」三旅立つ人を見おくる。萬二「わぎもこが我れを送(オクル)と、しろたへの袖ひづまでに泣きしおもほゆ」同三「堀江越え遠き里まで於久利(オクリ)ける、君が心は忘らゆましも」四死體を墓地に遣る。死者の最後を見とどく。葬送をなす。萬三「あしびきの荒山中に送(オクリ)おきて、かへらふ見れば心苦しも」古今哀傷「さきのおほいまうちぎみを、白川のあたりにおくりける夜よめる」五過ごす。暮らす。經過す。元眞集「冬の夜の永きをおくるほどにしも、曉がた の鶴の一聲」月詣集「たれもみな馴れにし年のすぎ行くを、おくらぬ人はあらじとぞ思ふ」六報ゆ。かへす。報ず。「恩をおくる」七父字の下に假字を附す。「假字を送る」八活版などにて、文字を次へ移しやる。「一字送る」

(諺)**送る月日に關守なし**　歲月の過ぎ易きにいふ。

おくる 贈 (他動ラ) 一遣やる。つかはす。與ふ。くる。繼體紀「密利(ミツリ)貨賂於弊非所」萬三「雪の上に照れる つく夜に、梅の花折りて於久良(オクラ)む、はしきこもがも」儀・亂世二死後に官位を賜ふ。源桐壺「三位のくらゐおくり給ふよし、勅使來てその宣命よむなん悲しき事なりける」

おくれ 後 (名) 一おくるること。遲くなること。二負くること。失敗。狂言雙六「雙六のおくれを打つ其の心、半一つばかりの額みなりけり中略切っつ、切られつ、われはおくれになりしかば、かなはじと思ひて」三氣後れすること。臆病。卑怯。源氏冷泉節會「思愛執著に命を惜しみ、思はぬおくれも取ることあり」四おくれげ(後毛)の略。一代女「頸筋立ち延びて、おくれなしの後髪」長町女腹切七「花井行髮のおくれのはらはらほろ、共に亂るる我が心」

おくれ さんばい 後三盃 かけつけさんばい(騙附三盃)に同じ。かけつけ(駈附)の條を見よ。

おくれ の かみ 後髪 おくれげ(後毛)に同じ。おくれがみ。飄陣八島「雙の膝に抱き、後れの髪を掻き撫で掻き撫で、暫し涙に咽びつつ」

おくれを とる 取後 負く。おとる。

おくれあし 後足 おくればせ(後驅)に同じ。

おくれがけ 後驅 (名) おくればせ(後驅)に同じ。慶節用「跡(ハ)驅(オクレ)」

おくれがっせん 後合戰 (名) 後殿(オクレシンガリ)となりて戰ふこと。慶節用「殿合戰(オクレガセン)」

おくれがみ 後髪 (名) 次條に同じ。色道大鑑「はへさがりは髮きかたまさるべし。おくれ髪は一筋ありても惡しし」

おくれけ 後毛 (名) 後れて延びたる短き髪の毛の、髻に及ばずして垂れ下がるもの。おくれ。おくれがみ。おくれのかみ。

おくれ ざき 後咲 (名) 草木の花の、時候に後れて咲きたること。又、其のもの。

おくれ ばせ 後馳 (名) 一後れて馳せ著くこと。おくれがけ。おくれあし。平家七「入谷が郎等、おくればせに三騎はせ來たって」二人より後るること。「おくればせの考へ」三時機の後るること。

おくれ ばち (名) 陰曆六月中旬を過ぎて吹く南風。伊勢國の方言。物類呼稱

おくれる 後 (自動下一) おくる(後)の口語。

おくろど 御黑戸 (名) 禁中の御佛壇をいふ、女房詞。

おくわく 御畫

おくわくにち 御畫日 (名) 次條を見よ。古へ詔書の年月の下に、宸筆を以て日の字を加へ給ふこと。先づ、中務省の內記、內旨を承け詔書を起草して奉れば、年月の下に日を宸署して下だし給ふ。之を御畫日(ヲクワクニチ)といふ。中務卿それを謄寫して太政官に送れば、太政大臣以下左右大臣・大納言之に署名して宣布せんことを奏聞す。此に於いて公然たる御裁可となり、末尾に可の一字を宸署して下だし給ふ、之を可御畫(カクワクゴ)といふ。外記その謄本を作りて世に布告す。

おくわし・ぶぎゃう 御菓子奉行 (名) 武家時代の職名。將軍の諸家に臨まるる折り、諸家にて命ずる臨時の職。菓子のことを沙汰す。

おくゑし 奥繪師 (名) 江戸時代、幕府に仕へたりし狩野家の中橋・鍛冶橋・木挽町・濱町の四家の稱。

おけ (名) 【植】さはら(花柏)の異名。

おけ (感) 神樂・催馬樂歌の拍子の詞。神樂「いせ島や、あまのとねりが、たくほのけ、於介於介(オケオケ)」催馬樂「馬(ウマ)、あすかゐに、あすかゐに、やどりはすべし、おけ」

おけ・さはら (名) 【植】さはら(花柏)の異名。

おけ・さぶし (名) 越後國に行はるる小唄の節。俗曲雙六「甚九、甚九も、おけさぶし」

おけ・し 御芥子 (名) けしばうず(芥子坊主)に同じ。

おけ・そく 御華足 (名) 一けそく(華足)に同じ。古へ京・難波の方言。物類呼稱二一代男「おけそくの圓子を手にふれ、茶事せし」三華足(ケソク)にて、佛前に供へたる品。加賀國の方言。物類呼稱

おけそく・だい 御華足臺 (名) おけそくを載する臺。

おけ・ぶく 御元服 (名) 【げぶくは元服の約】げんぶく(元服)に同じ。

おけ・ら 螻蛄 (名) 【動】げら(螻蛄)の異名。

おけれ (名) 【動】前條に同じ。

おけれ 置 (他動) 【れは、唯輕く添へたる辭】古語。おく(置)の活用、おけに同じ。萬三「秋さらば我が船はてて忘貝、寄せ來て於家禮(オケレ)、沖つ白波」

枯れたること。隱語集「雙覽」二寡情なく慳貪なること。愛敬なきこと。又、其の人。膝栗毛「奥のおけんつうが、今手水に行ったよ」

おけんぶく・てんそう 御元服傳奏 (名) 昔時、天皇・東宮御元服の時、臨時に置かれたる職。御元服の事を傳奏することを掌る。

おこ 枕 (名) あふご(枕)の訛り。

おこ を をる 折枕 小寶商人、商業に失敗す。

おーこ 御蠶 (名) 【動】かひこ(蠶)の異名。

おーご (名) おごうさまに同じ。醒睡笑「これのおごは、ことし廿にこそなられ、智慧も時分があるものぞ」

おご (名) 【植】おごこのり(江蘺)の異名。

おーこう 御講 (名) はうおんこう(報恩講)に同じ。

おごうーさま (名) 一人の女の敬稱。きのふはけふの物語「おごう樣、お乳の人を召して、ならうば、聞かしめ」二人の妻の敬稱。御料人。狂言來恕「いつもおごう樣から女共方へ、古著のお小袖を下だされる」

おごーうり (名) 元祿頃の語。おごのりを賣る人。「いとなみ六方・おご賣」

おご・おご 動 (副) うごうごに同じ。

おごさ 動 (名) おごくること。うごき。保雪女集「おごきなき奈良の都のひんがしには、よろづ世の影見ゆる鏡の山さやかにすめり」

おごく 動 (自動カ) うごく(動)に同じ。重之集「ささがにのくものはたてのおごくかな、風を命に思ふなるべし」名義抄「動・震・搖(オゴク)」

お・ご (名) 【植】おごこ(御供御)の訛り。

おーご (名) おく(御供御)の訛り。

おこ・ご 動 (自動ガ) 長町女腹切上「開帳の相伴やら、おこごやら、旅籠屋で支度して直ぐ是れへ」

おこごし (形シク) 古語。つよくして大なり。いかめし。綏靖紀「志尙沈毅(オコゴシ)」持統紀「三百龍象(オコゴシ)大德等」

おこ・さま 御蠶樣 (名) 【動】かひこ(蠶)をいふ。關東の方言。

おご・さま (名) おごうさまに同じ。

おござ・やらう (名) 賤しき人を罵る詞。續膝栗毛「馬が柵にあるとぬかしよった、おござ野郎め」

おこし 起 (名) おこすこと。立たすこと。眠りをさますこと。萬葉枕「そらねをしたるを、わがもとにあるものどものおこしに寄りきては」

おーこし 御越 (名) 行くこと、また入り來ることの敬語。

おーこし 興 (名) おこしごめ(興米)の略。

おーこし (名) おぐし(御髮)の訛り。

おこし・かへる 起反 (自動四) りきみかへる。頼城反魂香上「八丁はしりゐの問屋・組頭・組町引き具し、おこしかへって屋解に」

おこし・ごめ 興米 (名) 蒸したる糯米の乾きたるを炒りたるもの。又、それに水飴をまぜたる砂糖などをまぶして固めたるもの。おこし。和名「粔籹(オコシゴメ)以蜜和米煎作也」著聞集「法性寺殿、元三に皇嘉門院へ參らせ給ひけるに、御くだものをまゐらせられたりけるに、おこしごめをとらせ給ひとしして」

おこし・ずみ 熾炭 (名) 【熾武紀「墨坂置炭(オコシスミ)」】火を熾(オコ)におこしたる炭。

おこし・たつ 起立 (他動下一) おこす(起)に同じ。枕「前我などをとり集め、おこしたてなどするを」

おこしたて 御輿立 (名) 輿をのする臺。

おこし・どころ 起所 (名) 起こすべき所。現存六帖「家の風吹き枯らしたる柴のねの、おこしどころもなくなりにけり」

おこし・び 熾火 (名) 熾んにおこしたる炭火。神武紀「炭火(オコシビ)」馬內侍集「おこしびの炭をば灰にかくし、つつ埋もれぬ名の惱をこそ思へ」活火。

おこしもの 御腰物 (名) こしがたな(腰刀)の敬稱。曾我五「郎「いそぐとてさすがかたなを忘るるは、おこし物とや人の見るらん」

おこす 起 (他動サ) 一伏したるを立たしむ。二眠りたるを覺ます。宇津保藏「女御の君めのとを召して、日暮れにけり、おこし奉りて物まゐれとのたまへば」枕「わが傍なる人をおこして、かれ見給へ、かかる見えぬものあめるをといへば」三裂へたるものを再び盛んにす。古今序「ふりにし事をもおこし給ふとて」四振ひたたしむ。思ひたつ。氣をとりなほす。萬三「ますらをの心ふり於許之(オコシ)」竹取「からうじて思ひおこして」五爲し始む。神代紀上「於奇御戶(オキ)以起(オコ)而生兒」神功紀「振(オコシ)兵甲」六新たに設く。建設す。「國を起こす」七版に彫る。出版す。印刷す。醍氣樣燒「この譯を版におこさせ」八生ぜしむ。發せしむ。「病をおこす」九火をかきたつ。火氣を熾んにす。枕「いと寒きに、火など急ぎおこして」源幻「うづみたる火おこし出でて、御火をけ參らす」十土をほりかへす。開發す。開拓す。新六帖「朝日山霞むこなたのふしみ田ゐ、うちおこすべき時はきにけり」十一舟戰の語。檣を立つ。又、碇を上ぐ。

おこす 致 (他動サ) 次條の轉訛。狂言「頼うだ人が、註文のおどされてござるほどに」同大刀「鞘に納めておこしをろ」

おこす 致 (他動サ) 此方に送り來たす。よこす。萬三「しら珠のいほつどひを手にむすび、於許世(オコ)むあまはむかしくもあるか」土佐日記「講師。もの・酒おこせたり」宇津保藏「など、政頼がもとにおこする文」

おこぜ 虎魚 (名) 【動】硬鱗類、かさご科に屬する魚。ぎぎに似て、形大きく、海に產するもの。

おご・そか 嚴 (副) 禮義正しくいかめしき狀にいふ語。嚴重。嚴格。宇鑑「敦厚」

おこそ・づきん 御高祖頭巾 (名) 【かぶりたる姿、高祖日蓮上人の像に似たるより名づく】頭巾の一種。目のみ出だして、他の顏面及び頭部をすべて藏ひ包むもの。そでづきん(袖頭巾)。だいみんづきん(大明頭巾)。

おこそで・ごはんしゅう 御小袖御番衆 (名) 職名。御小袖の間の御番衆なるべし。貞享記「御小袖御番衆」

おこたり 怠 (名) 一おこたること。なまけること。仲哀紀「今天下、未知天皇之崩、若百姓知之、有傾怠(オコタリ)乎」二怠りより起こりたる過ち。罪過。過失。蜻蛉日記上「わがすぐせのおこたりにこそあめれなど」源帚木「いひもてゆけば、ただみづからのおこたりになん侍る」三罪過をわぶること。謝罪。續世繼上「其のおこたり申さんとてなん、參りつると侍りけれ

おとし もたて ず おきてたつことをもさせず。日本武尊吾妻鑑「磯邊へかっぱと投げ給へば、起こしも立てず、國彦取ってひっ飯き」

おこす 致 (他動サ) 次條の轉訛。狂言「頼うだ人が、註文のおどされてござるほどに」同大刀「鞘に納めておこしをろ」

おこす 致 (他動サ) 此方に送り來たす。よこす。萬三「しら珠のいほつどひを手にむすび、於許世(オコ)むあまはむかしくもあるか」土佐日記「講師。もの・酒おこせたり」宇津保藏「など、政頼がもとにおこする文」

おこぜ 虎魚 (名) 【動】硬鱗類、かさご科に屬する魚。ぎぎに似て、形大きく、海に產するもの。

おご・そか 嚴 (副) 禮義正しくいかめしき狀にいふ語。嚴重。嚴格。宇鑑「敦厚」

おこそ・づきん 御高祖頭巾 (名) 【かぶりたる姿、高祖日蓮上人の像に似たるより名づく】頭巾の一種。目のみ出だして、他の顏面及び頭部をすべて藏ひ包むもの。そでづきん(袖頭巾)。だいみんづきん(大明頭巾)。

おこそで・ごはんしゅう 御小袖御番衆 (名) 職名。御小袖の間の御番衆なるべし。貞享記「御小袖御番衆」

おこたり 怠 (名) 一おこたること。なまけること。仲哀紀「今天下、未知天皇之崩、若百姓知之、有傾怠(オコタリ)乎」二怠りより起こりたる過ち。罪過。過失。蜻蛉日記上「わがすぐせのおこたりにこそあめれなど」源帚木「いひもてゆけば、ただみづからのおこたりになん侍る」三罪過をわぶること。謝罪。續世繼上「其のおこたり申さんとてなん、參りつると侍りけれ

ば」〔図〕病氣の少しく癒えること。

おこたり-さま 怠方 (名) 病の少しく癒えたるさま。源夕顔「廿よ日、いと重くわづらひ給へれど、ことなるなどり殘らず、おこたりざまに見え給ふ」

おこたり-ぶみ 怠文 (名) 我が過怠を謝する旨を記して人に送る文。あやまり證文。たいじやう(怠狀)。宇治拾遺「おやうに名簿に、おこたりぶみをそへて出だす」

おこたる 怠 惰 (自動) ㊀懈めず。はたらかず。なまける。皇極紀「親養無倦」〔ケイヤウ〕 名義抄「懶」〔ランヤウ〕 ㊁心たゆむ。油斷す。源帚木「君は思し怠たる時の間もなく、心苦しくも思し出づ」 ㊂病勢やや衰ふ。病少し癒ゆ。古今〔集〕「心ちそこなへりける頃、相知りて侍りける人のとはで、心ちおこたりて後とぶらへりければ」宇津保〔藤原〕「菜にやあらざりけん、御病おこたりぬ」

おこたれ (名) おこたり(怠)の訛り。懈怠。謝罪。用明天皇職人鑑「七座の物忌・七日のおこたれとこさまる」

おこ-づく (自動) ㊀得意になりて語る。誇りかに調子づきて語る。源帚木「鼻のあたり おこづきをこめくゝて語りなす」著聞「仲正がことを、あざけりおこづくやうにいひければ」砂石集「攝取の光明を蒙らん行人なれば、神明もいかで辭し給ふべきとて、おこづきあざむきけり」 ㊁調子づきてはねあがる。はずむ。曾我「虎藤「大石はずんで、二つ・三つどうどうどうとおこづきて、十間餘りころころころ」

おこづる 誘 (他動) 古語。をこづる(誘)に同じ。名義抄「侯」〔ウ〕 同「機」〔ウ〕

お-ごと 御事 (名) おことじる(御事汁の略。用捨抄「おことと云ふも、彼のおせちと云ふも、等しく食物のことにて」

お-ごと 御事 (代) 親しみていふ對稱の代名詞。そなた。おん身。落窪「おことよき事知り、物の心知りたらん人、推しはかりて申せかし」取替「おことを、いと忘れがたく戀ひきこゆめるを」平治「昨日までも、御事故に心を碎きつるが」發心集「空也上人とは御ことを申すにや」

おこと-じまひ 御事仕舞 (名) おことをさめ(御事納)に同じ。

おこと-じる 御事汁 (名) 昔、十二月八日と二月八日とに食する味噌汁。芋・菖蒲・小豆など雜じへて煮る。猶おことはじめ(御事始)を見よ。おことに。

おこと-に 御事煮 (名) 前條に同じ。

おこと-はじめ 御事始 (名) ㊀昔、十二月八日に、煤取などして正月の準備をなす。二月八日に年神の棚を搖するを御事納めといふ。 ㊁昔、東國にて、二月八日に農事を始むること。十二月八日に終はるを御事納めといふ。

おこと-をさめ 御事納 (名) 前條を見よ。おことじまひ。

おこなはる 行 (自動下) ㊀厚りなく成り立つ。行ふを得。源朝顔「仁王會などおこなはるべしとなん聞こえ侍りし」 ㊁人人に用ひらるるやうになる。はやる。流行す。

おこなはれる 行 (自動下) 前條の口語。

おこなひ 行 (名) ㊀行ふこと。しわざ。ふるまひ。允恭紀「わがせこが來べきよひなり、ささがねのくもの於虛奈比(オコナヒ)によひしるしも」 ㊁品行。行狀。行跡。身持。 ㊂懺などの戒行を修むること。天武紀「入道修行」〔シユギヤウ〕 宇津保「をきなくより、おこなひの道に心すすみてなん侍る」枕「さうじの日のおこなひ」

おこなひ-どゐ 行聲 (名) 戒行して、讀經する聲。夫木「苔深きとよらの寺は、山伏のおこなひどゐもさびしかりけり」

おこなひ-すます 行澄 (自動) 戒行をつとめて、心をすます。狹衣「おこなひすまし給へるけはひ、いみじうあはれなり」

おこなひと 行人 (名) ㊀次條の約。孝德紀「衆」〔シユウ〕

おこなひ-びと 行人 (名) 佛教などの戒行を修むる人。敏達紀「脩行者」〔ヒビト〕 天武紀「選淨行者」〔ヒビト〕七十人、以出家」宇津保「藤原」「山山・寺寺に、じきなく、物なきおこなひ人を供養し給へ」

おこなふ 行 (他動) ㊀爲す。取り扱ふ。處置す。孝德紀「今隨前勅、而處斷之」〔ヒビトヲ〕 宇津保「俊蔭」「大將の、すまひの事などおこなひ給ふにも」枕「もやにあたりたるみ格子おこなはんなど、かき上よせて一人ねんじて明くる、いと重し」 ㊁修め行ふ。佛道を修行す。宇津保「俊蔭」「いとかしこく行ひさらぼへる行者ぞ」源夕顔「板屋の側に堂たてておこなへる尼のすまひ、いとあはれなり」

おご-のり 江 雜 (名) 【植】紅色藻類、江雜屬の海藻。體は細き圓柱狀にて、不規則に分枝し、全長一尺にして平滑、時として枝の表面に疣狀の小突起を生ず。全體晴紅絲色なり。我が國・各地の沿海地方靜穩なる海に產す。食すべし。うご。おご。民部省式「伊勢國・於胡菜三十斤」

お-こは 御强 (名) こはめし(强飯)をいふ、女詞。津國女夫池「おこは蒸すやら、餅搗くやら」

おこば-に-かく (句) おおこはにかくに同じ。おおの條を見よ。膝栗毛「一ぺえおこはに掛きやあがったな、おっかけてぶちのめさう」

お-こびと 御小人 (名) おこもの(御小者)に同じ。

お-こぶし 御拳 (名) 【動】さざえ(栄螺)をいふ、女詞。

おこ-ぶる (自動) ㊀貴人の子のそぶりをなす。容體ぶる。 ㊁婦女、己れの容姿を誇る。

おご-めく 蠢 (自動) うごめく(蠢)に同じ。

お-こも 御薦 (名) こじき(乞食)をいふ、幼兒の語。

お-こもの 御小者 (名) 將軍家に近く仕ふる少年。名を千若・熊若・梅若など附く。

お-こもり 御籠 (名) こもること。社寺に參籠すること。

お-こら-ご 御子良子 (名) 大神宮の神供を調ふる所を子良(コラ)館といふ。そこに仕る故にいふ。こら。猿蓑「子良館の後に梅ありといへば。御子良子の一もとゆかし梅の花」國姓爺「齊宮・おこらご・淺間が嶽・拜み廻はれば」

おご-らもち (名) 【動】もぐら(鼴鼠)の異名。

おこり 起 (名) おこること。始まり。起因。源桐壺「もろこしにも、かかる事のおこりにこそ、世も亂れ惡しかりけれ」

おこり 怒 (名) おこること。いかり。はらだち。立腹。

おこり 瘧 (名) 間歇熱の一種。寒熱の、隔日又は毎日、時を定めて發こる病。ぎやく。わらはやみ。著聞「世間に人のわづらひ候おこり心ちと申し候事は」櫛三「生駒新五左が瘧も、妙藥一服でかげもささず落馬致す」

おごり 驕 (名) 驕ること。たかぶり。おほふう。おほへい。源紅葉「み心おごりいとことなくて」

おごり 奢 (名) 奢ること。奢侈。踐祚環「上もなくおごりのやうに思はれるども」

(諺)奢りは三年の費え 奢侈のための消費は、容易に恢復し難きこと。

お-ごりう (名) 「おごれう(御料)の轉訛」どれうにん(御料人)に同じ。おごうさま。狂言「身共はさう思へども、又おごりうの何と思し召すも知らぬ。先づ何うて見よ」

おごり-おとし (名) 【植】つまのあしが(毛茛)の異名。

おごり-さめ 發歇 (名) 身體の熱の、おこり又さむること。

おごり-しやうご 怒上戶 (名) 酔へば怒る癖ある酒飲み。はらたちじやうご。

おごり-っぽい (形口語) 怒り易し。やもすれば怒る傾きあり。

おごり-び 發日 (名) 瘧などの發こる日。小島日號「わらはやみ中間又の日もおこり日にて」

おごり-ぶるひ 瘧慄 (名) 瘧を病みて、身のわななきふるふこと。又、其れを病む人。

(諺)瘧ぶるひが湯治に行く 瘧病には入湯を禁ふより、みづから禍を求むるに譬ふ。

おごり-もの 奢者 (名) おごる人。奢侈なる人。贅深もの。日本振袖始「奢者・奈羅者、讓りの田畑も失うたと、耳も聞こえぬ父御樣へ、弟御を讒訴し」

お-ごりょん (名) どれうにん(御料人)に同じ。おごりう。

おこる 起 興 (自動) ㊀始まる。出で來る。新たに成立す。神代紀「由」是始起」〔オコル〕「大八洲國之號」焉」古今序「素戔嗚尊よりぞおこりにける」 ㊁發す。生ず。敏達紀「國行」〔オコル〕疫疾、民死者衆」舒明紀「病動」〔オコル〕源桐壺「道心もおこるわざなめるを」 ㊂盛んになる。振ふ。「國勢大に興る」神武紀「皇軍不能復振」〔オコル〕 ㊃火氣盛んになる。拾玉「さゆる夜の枕に消えぬ埋火のおこすにおこる世を祈るかな」

おこる 怒 忿 (自動) いかる。はらだつ。立腹す。

おごる 驕 (自動) ㊀己れの才學・權勢などを人に誇る。人を侮りて自ら尊大にす。たかぶる。宇鏡「傲然」〔ゴウ〕 名義抄「貴」〔オゴル〕 ㊁我がまなる舉動をなす。源朝顔「帝王の深き宮に養はれて、いろいろの樂しみにおごり給ひしかど」同若紫「世の中を心のままにおごりて、つかさ位をば何とも思はず」 ㊂得意になる。自慢になり。ほこらしげなり。枕「七・八つばかりなるをのこ子の、あいぎやうづきおごりたる聲にて」源夕顔「鏡を見てなどかおごらざらんと、わが御子たちがらも思ず」 ㊃馬などの、氣力張りて制御し難し。

おごる 奢 (自動) ㊀分に過ぎたる費りをなす。過度に金錢を消費す。源少女「世の中盛かりにおごりならひぬれば、學問などに身を苦しめんことは、いと遠くなんおぼゆべかめる」 ㊁自ら金錢を投じて人を饗應す。ふるまふ。閑上手「何でも蕎麥をおごるなら」

お-ごれう (名) 「お御料の轉訛か」 ㊀人の娘をいふ、越後・佛前の方言。和訓 ㊁人の妻女をいふ、越後・佛前の方言。和訓

お-ごろ (名) 御寢(ネ)なされといふこと。風流つれづれ草「おねんねや、おころおころと、御子樣方をすかすも、上つ方乳母達のむつごとぞかし。それを下つかたには、ねろねろこの子よといふなり」

お-こん (名) 「こんは狐の鳴聲」【動】きつね(狐)の異名。童謠「お山のお山のおこんさん」

お-ざ 御座 (名) ㊀させき(座席)の敬稱。 ㊁恒の說教の敬稱。

おざ がきめる 御座冷 (名) ㊀座興うすらぐ。 ㊁興味がなくなる。愛想が盡きる。

お-さい 御菜 (名) おかず(御數)に同じ。飯の菜。

お-さい 御宰 (名) さいりやう(宰領)に同じ。土佐俗謠「殿樣お江戶入り、さても見事なつづら馬、あとのお宰に問うたらば、加賀の宰相」

神の神主だ。何でもおごらぬこと。驕る平家久しからず、譬へにもいふ通りだ」

(諺)驕るもの久しからず 驕奢なれば滅亡を早む。平家物語「驕れる者は久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、偏へに風の前の塵に同じ」北條氏直時分談留「驕るもの久しからず」老子「自傲者不長、自伐者無功」

おごる 奢 (自動) ㊀分に過ぎたる費りをなす。過度に金錢を消費す。源少女「世の中盛かりにおごりならひぬれば、學問などに身を苦しめんことは、いと遠くなんおぼゆべかめる」 ㊁自ら金錢を投じて人を饗應す。ふるまふ。閑上手「何でも蕎麥をおごるなら」

お-ごれん (名) 「お御料の轉訛か」 ㊀人の娘をいふ、越後・佛前の方言。和訓 ㊁人の妻女をいふ、越後・佛前の方言。和訓

お-ごろ (名) 御寢(ネ)なされといふこと。風流つれづれ草「おねんねや、おころおころと、御子樣方をすかすも、上つ方乳母達のむつごとぞかし。それを下つかたには、ねろねろこの子よといふなり」

お-こん (名) 「こんは狐の鳴聲」【動】きつね(狐)の異名。童謠「お山のお山のおこんさん」

お-ざ 御座 (名) ㊀させき(座席)の敬稱。 ㊁恒の說教の敬稱。

おざ がきめる 御座冷 (名) ㊀座興うすらぐ。 ㊁興味がなくなる。愛想が盡きる。

お-さい 御菜 (名) おかず(御數)に同じ。飯の菜。

お-さい 御宰 (名) さいりやう(宰領)に同じ。土佐俗謠「殿樣お江戶入り、さても見事なつづら馬、あとのお宰に問うた

おさいじゃう-ぶさゃう 御西淨奉行 (名) 職名。武家時代、將軍の諸家に臨ませらるるをり、諸家にて臨時に命ずるもの。御座敷につきたる大小便所を新造し、諸具を辨備す。

おさいしんはち-ぶさゃう 御再進鉢奉行 (名) 職名。武家時代、將軍諸家に臨ませらるるをり、諸家にて臨時に命ずるもの。目錄に載せたる進物の外に、かさねて鉢を進むることなどを掌れるなるべし。

おさい-はし 御菜箸 (名) 食物のさいを椀・皿などに盛りとる箸。

お-ざう 御草 (名) 【御草履(ゾウリ)の略】武家時代の語。ざうりとり(草履取)に同じ。

おさかづきさだい-おをり-ぶさゃう 御盃臺御折奉行 (名) 職名。武家時代、將軍の諸家に臨ませらるるをり、諸家にて臨時に命ずるもの。將軍及び公卿方へまゐらすべき盃臺・折などを扱ふ。

お-さがり 御下 (名) ㊀正月三が日に降る雨の忌詞。紹巴句「おさがりとこれもやいはん初時雨」 ㊁神佛の供物をとりさげたるもの。又、客の饗應の殘物。 ㊂目上の人より頂戴したる、使ひふるしの衣服など。

お-さき 御先 (名) ㊀さき(先)の敬語。狂言「宮島」「まづおさきへどざりませ」 ㊁人の手先に使はるる者を嘲りいふ語。傾城買二筋道「あんな野郎は、こっちでおさきに使ふさへ外聞がわるいに」

おさき-まっくら 御先眞闇 (名) 更に前途の見えぬこと。一向先見の明なき內が、勝利を得ます」

おさぐり (名) 【動】くぢら・鯨をいふ、女詞。

おさけ 御下 (名) 一女の帶の結び方の名。やのじに結ばずに兩端を垂れ下げたるもの。二女のさげ髪の稱。

おさけ-ぶぎやう 御酒奉行 (名) 職名。武家時代、將軍の諸家に臨ませらるをり、諸家にて臨時に命ずるもの。その日の饗應にそなふる酒のことを掌るもの。

おさき 御差 (名) さけ(酒)をいふ、女詞。

おさし 御差 (名) 〔乳をさし上ぐる義〕武家時代の語。貴人の子に乳を上ぐる女。丹波與作「大上臈・小上臈・おさし・抱き乳母・お乳の人」

おさじ 御匙 (名) 〔匙もて藥を盛ればいふ〕將軍家又は大名等の侍醫の敬稱。おさじい。

おさじ-い 御匙醫 (名) 前條に同じ。侍醫。

おざしき 御座敷 (名) 一ざしき(座敷)の敬語。狂言「子盃」「おざしきにそっと寢さしましよ」二酒宴の席。藝妓などの語。

おざしき-しつらい-ぶぎやう 御座敷室禮奉行 (名) 次條に同じ。伊勢真忠亭御成記「御座敷室禮奉行」

おざしき-ぶぎやう 御座敷奉行 (名) 職名。武家時代、將軍、諸家に臨ませらるるをり、諸家にて臨時に命ずるもの。屋舍を新造し、座敷の裝飾などを掌る。三好義長亭御成記「御座敷奉行」

おさし-した (名) 【植】みやましがしらの異名。

おさし-ほうこう 御差奉公 (名) おさしとして奉公をすること。乳母奉公。雪女五枚羽子板「連合ひには、大名方の若君のおさし奉公と言ひ聞かせ」

おさ-すり 御摩 (名) 一かしはもち(柏餅)をいふ、女詞。二下婢を兼ねたる姿。おなで。

おさたがき 御沙汰書 (名) 江戸時代、幕府の坊主が、諸侯の留守居役の依頼によりて、營中の日日の出來事等を報じたる文書。

おさだまり 御定 (名) いつもの同じさま。きまり。定例。一代女「おさだまりの文章、そこそこに書きちらし」

おさだめ-がき 御定書 (名) 江戸幕府の法典。幕吏執務の規定及び司法・警察に關する規定を敢む。其の、刑事訴訟法に關する規定百三箇條を御定書百箇條と稱す。

おさつ 御札 (名) しへい(紙幣をいふ、女詞。

おさつ 御薩 (名) 【植】さつまいも(甘藷)をいふ、女詞。浮世風呂「お杉さん何をお持ちだね、お薩か」

おざつき 御座附 (名) 藝妓が、客の座に招かれて、最初に三味線をひきて歌ふこと。又、其の歌。

おさと 御里 (名) 氏素性。經歷。「おさとが知れる」

おさふ 抑 (他動) 一刀を入れて持ち支ふ。おしつく。萬三「つげの小櫛を抑(オサ)さす、しきたへの子は其れぞわが妻」宇津保「藤原仲忠」「帳の柱をおさへて立ち給へるを」同「俊蔭」「馬に乘せて、われも子もしりさきにつきて、おさへなどして」二おしとどむ。くひとむ。防ぐ。支ふ。捨紀「諸意靜了奈平後賢傍上奈賢宣奉注奈天奈抑(オサ)已在川流」枕「二人わらはより外は入るまじとおさへて」三こらふ。堪ふ。しのぶ。顯宗紀「相抱涕泣、不能自禁(オサ)」源「澪標」「御むねをなやみ給ふ中略たへがたきをおさへて、明かし給ひつ」四掩ふ。ふさぐ。「耳をおさふ」五捉ふ。「盜賊をおさふ」榮華「根合」「すぢなければ、心榮僧都參りて、おさへて加持まゐり給ふに」六さしおさへて自由にさせず。「財産をおさふ」七寧中のものとす。所有す。「證據をおさへてをる」八小舟にて、艪を面能にす。

おさへ 抑 押 (名) 一おさふること。二物をおさふるもの。おもし。三けふそく(脇息)に同じ。四敵を支へ防ぐこと。國境を防備・守護すること。萬三「筑紫の國は、あた守る於佐倍(オサヘ)のきぞと、きこしめす」天正記「美濃攻」「仙石權兵衛、四國の押へとして、淡路へ是れをかへす」五戰陣の時、隊後に在りて、味方の備への散亂をおさふる者。六行列の最後にあるもの。しんがり。丹波與作「お先手から乘り出しめされ中略身はおさへを乘り申す」堀河波鼓「あとにおさへの對道具」七念を推すこと。詞をつがふること。鎌倉兵衛名所歌「義朝のおさへの詞、後日如何と思ひてや、返す詞もなかりけり」八最後に出だすもの。國姓爺「後日合戰版入式「おさへの鳥臺・大盃」九さきに出たるを返して、再び飲ましむること。

おさへ を のる 馬に騎りて、行列のしんがりをなす。百日曾我「窄奥の前後嚴しく取りかこみ、御家人さきを打ちはらひ海野の太郎は押へを乘って」

おさへ-ぎ 押木 (名) 物を支へ、又押しつくる木。

おさへ-じろ 押城 (名) 敵と味方との地の堺に築きて、敵を押へ禦ぎ外衛となす城。

おさへ-ぜい 押勢 (名) おさへ(押)をする軍勢。大友興廢記「豊後寺嶽」「川の左右におさへ勢をおかせられ」

おさへ-たち 押立 (名) 物をおさへて立つこと。つかまりて立つこと。取替三「姫君の、ものしく造りたちやうにて、やうやうおさへだちなどするがうつくしきも、目のみとどまりて」

おさへつき-のみ 押突鑿 (名) 長くして平たく薄き鑿。うすのみ。

おさへ-つく 押附 (他動) おしつく(押附)に同じ。

おさへ-つける 押附 (他動) 前條の口語。

おさへ-の-ぢん 抑陣 (名) 昔、近衛の兵が、禁中警護の爲め屯せし所。承明門のわきにあり。北山抄「中隔以内、是近衛陣中也。吉上・近衛、候閑門、披謂之抑陣」

おさへ-は 押齒 (名) やへば(八重齒)の異名。

おさへ-はしら 押柱 (名) 【建築】だきばしら(抱柱)に同じ。

おさへ-ばん 押番 (名) おさへをする役に當たりたること。又、其の人。

おさへ-もの 押物 (名) 花鳥・山水の形などの作り物の臺に、酒の肴を盛りて出だすもの。「醍醐天皇」「公方樣正月御事始記」「おさへものは、末つかたに出だし候」

おさへる 抑 (他動) 一おさふ(抑)の口語。二おさへ(抑)をなす。堀河波鼓「ここは母がおさへまし、あひを致してあげませんと、又引き受けてついとほし」

おさはし (形) あさはかなり。相模集「かげ見きとのみ、おさはしく云ひもらしけることのはに」

おさゆ 抑 (他動) おさふ(抑)の訛り。

おさらば (感) さらば。さやうなら。(人に別かるる時いふ語)海門松「太夫樣おさらば」

おさらば を きめる おさらばと云ひて、別かれ去る。

おさらば-え (感) 前條に同じ。元祿頃、吉原遊里の詞。

おさらば-むすび (名) ねこじやらしに同じ。

おさる-こほろぎ 御猿蟋蟀 (名) 【動】おかまこほろぎ(蟋馬)の異名。

おさる-まち 御申待 (名) かうしんまち・庚申待に同じ。醒睡笑「能が詞におさるまちとて、人のとりを限りにお待ちある」

おさん 御蠶 (名) めしたきをんな。下婢。下女。太平記曦鎧「お清所の供御炊ぐお蠶であんすと御戲れ」

おさんこう 御散米 (名) 〔御散米(オサン)の訛り〕さんまい(散米)の敬語。うちまき(散米)を見よ。

おさんじよ-ぶぎやう 御産所奉行 (名) 鎌倉・室町時代の職名。將軍家御臺所の御産の雜事を掌るもの。

おさん-どん 御蠶殿 (名) おさん(御蠶)に同じ。

おざん-ない (句) 〔御座無いの訛り〕ござらぬ。在らず。なし。膝栗毛「わしは、子どもはおざんない」

おし 唖 (名) おふし(唖)に同じ。唖者。源「常夏」「おし・ことどもりとぞ」

(諺)唖が物言ふ 絶えてなしとの譬へにいふ。狂言「三人聟」「これはいかなこと。おしが物いうた」

(諺)唖の一聲高貴の相 唖の物言ふはめづらしければ、富貴の瑞相とするなるべし。狂言「三人」「これはいかなこと、おしが物云うた。さりながら、おしの一聲福貴の相と申す」

(諺)唖の問答 意思相通ぜざる譬へ。

(諺)唖の夢見たるが如し 心に知れども口には明かに說き明かし得ざるに譬ふ。後撰夷曲集「我が想は唖の夢見た如くにて、いふにいはれぬ思ひなりけり」「愚愚痴物語」「唖の夢にて、心に思へど言ひわけ難し」

おし 外國語を知らずして、外國に旅行するにいふ。

おし 押 (名) 一おす(押)こと。二相撲の手の名。三手に分かつ。一氣に土俵外に押し出だすを押切りといひ、相手の土俵際に堪へんとするを、力を籠めて押し出だすを押出しとし、若し之を倒せば押倒しといふ。三飽くまで我意を通さんとすること。「おしがつよい」四〔商〕船荷を量るに、運賃の割引と同樣の結果を生ぜしむる目的にて、其の實際の重量又は石數より幾分か數量を減じて測定すること。これにより、船荷の實際の石數又は量目との間に生じたる差を押石(オシ)また押目(オシ)といふ。五した おし(下押)に同じ。「二十六錢より三錢と押しがはげしい」

おし 壓 (名) 一おす(壓)こと。「著物のおしがきく」二物を壓すに用ふるもの。壓して置くに用ふるもの。おもし。「漬物のおし」狂言「奈良」「内なる武者甘崎」「おしに打たれて死したりしは」三人を制馭すべき威力。おもし。「おしがきく」四鼠などを捕る一種の裝置。おとし。神武紀「殿内施(オシ)」和名「鼠弩(ネズミ)之一云、鼠弓」拾遺「名」「はしたかのをきゐにせんと構へたる、おしあゆがすな、鼠とるべく」

おし 御師 (名) 一いのりのし(祈師)の敬語。二伊勢の神宮又其の他の大社にて、格卑き神職の稱。榛名・大山等の神人をもいふ。弘安元年公卿勅使記「無風雨之樣無爲可遂使節之由、殊可祈請之旨、可仰本宮御師並祭主・宮主」

おし (名) 古語。いそ(磯)に同じ。古へ東國の方言。萬「駿河の海於思(オシ)べに生ふる濱つづら、いましを頼み母にたがひぬ」

おし (感) 古へ警蹕の聲。侍中群要「初供御膳入、先取蓋盤入立鬼間御障子之間、稱警蹕、其詞オシ」

おし 押 (接頭) 動詞に冠らして、其の意を强むる語。景行紀「留(オシトド)之」顯宗紀「伐本截(オシキル)末(伐本截末共共)」「藤原鎌足」枕「青くちば・ふたあるなどの物ども、おし卷きつつ」

おし-あく 押開 (他動) おしてひらく。源「明石」「月いれたる横の戸口、けしきばかりおしあけたり」

おし-あぐ 押上 (他動) 一上へあぐ。二身分をして高くならしむ。枕「同じ若さなれど、おしあげられたる人は、えまじらで、うらやましげに見あげたるものを」

おし-あけ 押明 (名) 次條の略。右京太夫集「おきて行く人のなごりやおしあけの、月かげ白し道芝の露」

おし-あけ-がた 押明方 (名) あけがた(明方)に同じ。源「篝」「おしあけがたの月かげに、法師ばらの圓伽奉るとて」新古今「雜上」「天のとを押し明け方の雲間より、神代の月のかげぞ殘れる」

おし-あげ-せん 押上錢 (名) 元文四年、下總國押上村にて鑄造せし寛永銅錢。徑八分、重量八分。新寛永錢譜「押上錢」

おしあげ-ぼんぶ 押上唱筒 (名) 低所より吸ひ上げたる水を、更に高所におし上ぐるぽんぷ。

おし-あける 押開 (他動) おしあく(押開)の口語。

おし-あける 押上 (他動) おしあぐ(押上)の口語。

おし-あつ 押當 推當 (他動) 一あつ(當)を强めていふ。おしつく。源「澤標」「御袖を顔におしあて給へるほど」二推量る。推量して中つ。檜垣嫗集「おしあてて(推量)さならんと思ひて、疑はしき所にかくいひやる」

おし-あて 推當 (名) おしあつること。おしはかり。推量。源「若菜」「まめやかにきこゆるなりと、おしあてにのたまへば」

おし-あてがひ 推宛行 (名) 前條に同じ。

おし-あてる 押當 (他動) おしあつ(押當)の口語。

おしあな-かぜ (名) 東南の風。肥前國平戸地方の方言。

おしあはず 押合 (他動) あはす(合)に同じ。合併す。源「梅枝」「御方方の女房、おし合はせたる、數知らず見えたり」千載「かれこれおし合はせて、みそぢ餘り三かへりの春秋になんなりにける」

おし-あひ 押合 (名) 一おしあふこと。互ひに押すこと。二相場の語。投機にて、相場に變動なきこと。

おしあふ 押合 (自動四) 互ひに押す。國姓爺「渡れや渡れと五百餘騎、押し合ひ・詰め合ひ、我れ先にと」

おしあひへしあふ こみあふ。もみあふ。

おし-あふぎ 押扇 (名) 能樂の語。

開きたる扇を、竪に額の前に持ちたるまま押して行くもの。

おし-あゆ 押鮎 (名) 鹽押にしたる鮎。鹽漬の鮎。古へ元日の儀式に用ふ。土佐日記「ただおしあゆの口をのみ吸ふ」西宮記「押鮎一盤(切須置)」

おし-しい (名) しる(汁)をいふ。幼兒の語。

おし-いた 押板 (名) 一枚をはりたる床。古くは書院の床間(ハヤ)をいへり。(繪卷)書籍・硯等を載せ置くもの。曾我物語「この押板には、古今・萬葉を始めとして、源氏・伊勢物語に至るまで、數の雙紙を積み置きたれども」二物を壓すに用ふる板。

(こたいしお)

(諺)押板當てて重石置く 注意に注意を加へて壓伏するに譬ふ。

おし-いだし 押出 (名) 一おしいだすこと。おしだし。二古へ、女房などが、御簾の中央・左右より衣の袖を出だすこと。又、その衣。おしいだしぎぬ。中務内侍日記「もみぢがさねのおしいだし見ゆ」

おし-いだし-ぎぬ 押出衣 (名) 前條に同じ。おしいだしのきぬ。雅亮裝束抄「うちぎには、菊・紅葉のきぬはおぼろげにてはなし。おしいだしぎぬには常の事なり」同「うちいで・おしいだしぎぬ、折りにより色心にあることなり」

おし-いだす 押出 (他動四) 一おしていだす。枕「からきぬは皆、みすのそとにおしいだされたれば」二いだす(出)を強めていふ。著聞「此の錢儲かに五百なれば、あまたたびに出ださんも見苦し。ただ一度におし出だして、打ち取られなばさてこそあらめ」

おし-いづ 押出 (自動下二) 一おして出づ。二いづ(出)を強めていふ。枕「みすの内に女房・樓の唐衣(中略)など、いろいろこのもしく、數多こはじとみのみすよりおしいでたるほど」

おし-いづ 押出 (他動下二) おしいだす。源宮「ここもとへ出づるぞとて、君をおしいで奉るに」

おし-いり 押入 (名) 人家におし入りて、財物を强奪する人。おしこみ。强盜。傾城反魂香「夜盜・押入りの手引か」

おし-いる 押入 (自動四) 强ひて入りこむ。無理にはひり込む。榮華「その わたりの家どもの程度きに、おしいるさまにてこみゐたり」

おし-いる 押入 (他動下二) おしやりて入るる。おしこむ。勢語「女をば奥におしいれて」

おし-いれ 押入 (名) 一家財を入れ置く造附けの戸棚。二船の走りの、一時は早けれども、やがて遲くなること。此の時、軸(この荷を轆(ロ)へ送れば舟行早くなる。之を軸(こいきといふ。

おし-いれる 押入 (他動下二) おしいる(押入)(動詞の口語)。

おし-うつる 推移 (自動四) 時勢・境遇移り變はる。「年月過ぎ行く。榮華(見はて)の夢(ゆめ)」

おし-うり 押賣 (名) 買手の望まざるに、賣手が强ひて其の物品を賣りつくること。(おしがひの對)堀川狂歌集「押しとめん押賣押賣、とりどりの事もなくなる山崎の關」

おし-おき 御仕置 (名) 一江戸時代、刑罰の稱。しおき。處刑。二しざい(死罪)に同じ。

おしおき-は 御仕置場 (名) 罪人を處分する處。刑場。

おしおき-もの 御仕置者 (名) おしおきにあふ人。つみびと。ざいにん。冥途飛脚「是れを思へば、世の中に、おしおき者の絶えぬも道理」

おし-おくり 押送 (名) 風の加何に拘らず、總のみにて船を押しやること。又、其の舟の稱。

おし-おくり-ぶね 押送船 (名) おしおくりをなす舟。おしおくり。

おし-おし (感) おしを重ねていふ語。警蹕の聲。延ばしておおしいともいふ。枕「一日のおましの方におものまゐる足音高し。けいひつ(けはひ)など、おしおしといふ聲きこゆ」

おし-おろす 押下 (他動四) 一おろす(下)に同じ。狂言(鶴寶)「紙を三つに切り、二つを下へおしおろし」二强ひておろす。無理におとす。鎌田兵衛名所盃「暴惡のふるまひ、國王の器に非ずとて、先年御位をおしおろされ」

おし-かがむ 押屈 (他動下二) 押してかがます。著聞「足を踏みそらしければ、人人寄りて、おしかがめて舁き出だしにけり」

おし-かがめる 押屈 (他動下一) 前條の口語。

おし-かかる 推凭 (自動四) 物によりかかる。枕「うちゑみて、なげしにおしかかりゐたれば」

おし-がき 押書 (名) はりがみ(張紙)に同じ。おしがみ。大内家壁書「押書案文、赤間關わたしもりの事」

おし-かく 押角 (名) 多少圓みある角材の稱。

おし-かく 押掛 (自動下二) 一進みて襲ふ。進擊す。宇治拾遺「先方狐をおしかくれば、狐身をなげて逃ぐ」二先方の都合に關せず、强ひて行く。淀鯉出世瀧登「道まで迎ひに出やんす筈。そこをこちから先越して、によっと押しかけてはどうござんしよ」

おし-かけ 押掛 (名) 一おしかくること。浮世床「なんぞおいしい物がございますなら、押かけのお客に參ります」二馬具の名。馬の頭・胸・臀に繫くる緒。革緒あり、組緒(ヲ)あり。頭より轡に繫くるを繩(ヲ)といひ、胸より鞍橋に繫くるを綱(ヲ)といひ、尾より鞍橋に繫くるを鞦(ヲ)といふ。以上を合はせて三繫(ヲ)といふ。岡本記「おしかけと申すはわるし、おもがいと申すべし」親。

おし-かけ-ざゃく 押掛客 (名) 招かざるに、おしかけて來る客。

おし-かけ-にょうばう 押掛女房 (名) 男の家におしかけ行きて、强ひて妻となりたるもの。

おし-かける 押掛 (自動下一) おしかく(押掛)の口語。

おし-かす 壓滓 (名) 製糖の際、糖分を搾り取りたる後の滓。肥料とす。

おし-かた 押方 (名) 射術の語。おして(押手)に同じ。

おし-がた 押型 (名) 版木の上に紙をあて、鏡墨にて、下の彫刻したる模樣を刷り取りたるもの。

おし-がた-づけ 押型附 (名) 織物に版木を壓しつけて、種種の模樣を高く現はすこと。

おし-かづら 押鬢 (名) 禮冠(ライカン)の前後の緣なるべし。儀式「親王四品已上冠者(中略)以紺玉廿顆、立前後押鬢上」

おし-がひ 押買 (名) 賣手が望まざるに、買手が强ひて買ひ取ること。(おしうりの對)東鑑(四十三、建長六年十月廿一日)「押買事、同被固制禁」

おし-かへし 押返 (副) 一くりかへし。

し。蜻蛉日記「命はあらせて、わが思ふやうに、おしかへし物を思はせばやと思ひしを」二此方より却って反對に。あべこべに。源優雲「たれうきものと、おしかへし怨み給ふ」榮華(大鏡)「年頃この家をめでたき所とおぼして、まづかかる折り渡らせ給へるに、おしかへしあさましければ」

おし-かへす 押返 (他動四) 一彼方より押し來たれるを、此方より押し退く。二再び引き返す。濱松「おしかへして、人を遣はしたれば」三再び引きかへす。戻す。後拾遺(三)「楢葉のゆふしてかけしそのかみに、おしかへしても渡るころかな」回反對となる。あべこべになる。榮華(玉臺)「常の行啓にあらず、おしかへしたるなり。ありさまも哀れに悲しきに」

おし-がみ 押紙 (名) 一疑問又は注意すべき事などを書き記して、文書などに別に貼りつけたる紙。つけ紙。附箋。著聞「こまかに御覽じて、僻事ある所に押紙をして、其の誤りを御自筆にて記しつけて」二張紙。棹狩劍本地「毎日捺紙・貼札して、狂歌・狂句の惡口に、落書をたつる門柱」三すひとりがみ(吸取紙)の一名。

おし-から 押柄 (名) 物事を押して爲す風。今昔「肝太くして、押柄になんありける」續古事談「すべてかやうにおしからありて、ゆゆしかりける人なり」

おし-からんだつ 押柄立 (自動四) おしからあり。物事を押してなす。宇治拾遺「三條中納言といふ人(中略)心ばへかしこく、肝ふとく、おしからだちてなんおはしける」

おし-がり 押借 (名) 借主が貸主の意思に反して、强ひて金錢・財物などを借ること。

おし-き 御敷 (名) しきゐ(敷居)の敬語。御伽名代紙衣「ちっとおしきが高うござりませう」

おし-き 押木 (名) 彫金に用ふる木の臺。

おし-き 御辭儀 (名) 一じぎ(辭儀)の敬語。御挨拶。狂言(宮)「面白いおじぎがござりまする」二じぎ(辭儀)の敬語。御辭退。心中刃氷朔日「何しにお辭儀申しましよ、兩人ながら御茶はえたべませぬ」

おじぎ-ぐさ (名) 【植】ねむりぐさ(含羞草)の異名。

おしぎ-さう (名) 【植】前條に同じ。

おしぎの-たまかづら 押木玉蘰 (名) 古への髮飾の名。押木(オシ)は詳かならざれども、押木といふ物の肌に造りたる莖に、玉を貫ぬきて立てたるかづらなるべし。(右傳)

おし-きり 押切 (名) 一馬の髮を、二寸許りの長さに、先を揃へて切りたるもの。弓馬故實「馬の髮は野髮・やりぼふし、二品なり(中略)押切(又斑髮と)」二おしきりのいん(押切印)の略。三相撲の手の一。おし(押)を見よ。四秣・蘰のすきなどを刻む器。

おし-きり-ちゃう 押切帳 (名) 金錢を渡すとき、受方より受取の證印をとりおく帳簿。

おし-きり-の-いん 押切印 (名) わりはん(割判)に同じ。おしきり。

おし-きり-ばん 押切判 (名) 前條に同じ。

おし-きる 押切 (他動四) 一おして物を切る。二きる(切)をつよめていふ。狂言(鶴寶)「十疋の布施をとって、まん中よりおしきり」三勉めて目的を果たす。强ひて事を爲し遂ぐ。

おし-くくみ (名) おしくくむこと。又、其の物。包み。金葉(雜上)「大路に子を捨て侍りける、おしくくみに書きつけて侍りける歌」

おし-くくむ (他動四) 推し包む。源夕顏「うばむしろにおしくくみて」榮華(月宴)「うせさせ給ひねれば(中略)御ぞにおしくくみて、ゐておろし奉らせ給ふ」

おし-くさ 玄參 (名) 【植】ごまくさ(玄參)の異名。宇鏡「玄參(久佐之)、和名、玄參。本草云、玄參、一名、重臺(久佐之)」

おし-くたす 押下 (他動四) おしさげ。おしておとす。源(紅葉)「平調におしくだして調べ給ふ」

おし-くつろぐ 押寛 (他動四) くつろぐ(寛)(自動)を强めていふ。國姓爺「鋼抜き持ちて后の肌押しくつろげ、脇腹に押當て、十文字にさき破れば」

おし-くら 押競 (名) 次條に同じ。

おし-くらべ 押競 (名) 互ひに押しあひて、力をためす戲れ。おしくら。

おし-けつ 押消 (他動四) 壓倒す。源(葵)「上達部はいとことなるを、一ところの御光にはおしけたれたれり」同(竹河)「おとどおはせましかば、おしけち給はざらまし」

おし-こうぢ-やき 押小路燒 (名) 陶器の一種。明暦の頃、京都押小路邊にて燒きたるもの。

おし-こく 押石 (名) 【商】おし(押)(四)を見よ。

おし-こく 御四國 (名) 次條の略。

おしこく-まゐり 御四國參 (名) 四國にある弘法大師の靈場を順拜すること。又、その人。おしこく。

おし-ごと 押言 (名) 一おしあてに言ふ言。しひごと。臆說。强言。著聞「さては其の事正體なし。此の人はおしごとする人にこそと、沙汰ありて」二神異を信ぜずして、言ひけすこと。(信西)

おし-ごとのは 押言葉 (名) 前條に同じ。素性集「旅に出でておしことのはにいひしかど、よしより思へ心くだけぬ」

おし-こみ 押込 (名) 一押し込むこと。二おいれい。戶棚。三人家に押しこむ强盜。

おし-こむ 押込 (自動四) 一强ひて入る。故意におし入る。宇津保(嵯峨院)「君たちおしこみ入りて、御文を奉り給へば」二立ち込む。つめこむ。榮式部日記「わた殿の戶口まで、隙もなくおしこみてゐたれば」三强盜に入る。

おし-こむ 押込 (他動四) 次條に同じ。(浅草)狂言(酒)「兩人共に、藏へ押しこうで出やうと存ずる」

おし-こむ 押込 (他動四) 一强ひて、押しやりて入らす。二心の中にをさめて口に出ださず。源(花宴)「いはねをもいふにまさると知りながら、おしこめたるは苦しかりけり」三内にこめつつむ。堀河百首(雜)「何事を天原山へおしこめて、つきせず鹿の鳴きあかすらん」風雅(春上)「のどかなるけしきをよもにおしこめて、霞ぞ春の姿なりける」四おしこめの刑に當つ。禁錮す。

おし-こめ 押込 (名) 一押し込むること。出入を禁ずる刑。謹居。

おし-こめる 押込 (他動下一) おしこむ(押込)(他動)の口語。

おし-こる 押凝 (自動四) たてこむ。こみあふ。おしあふ。靖給日記「あかき人、黑き人おしこりて、數も知らぬ程にたってりけり」枕「車(中略)たてる前よりおしこりて、まどひ乘り果てて出でて」

おし-ぶろ 押風呂 (名) おし(癍)に同じ。言おふし。釋迦如來誕生會「前生で嘘つけば唖ごろに生まれる」

おし-さぐ 押下 (他動ヨ) おさへて下へやる。

おし-さける 押下 (他動ヨ) 前條の口語。

おし-さん (名) おししやうさん(御師匠)の訛。浮世風呂「お師匠様(オシ)から下がると、毎日行きます」

おし-しづまる 押靜 (自動ラ) しづまりわたる。しづまりかへる。「何れも大事の評議なれば、押し靜まる」

おし-しづむ 押沈 (他動ヨ) 一押して沈ましむ。源少「おとどの、しひて女御をおしづめ給ふもつらきに」 二おちぶれさす。沈淪せしむ。

おし-しづめる 押沈 (他動ヨ) 前條の口語。

おし-ずし 壓鮨 (名) 方形に切り貫きたる型の中に飯を詰めておしかためし、上に魚肉などを載せたるもの。にぎりずし・ちらしずしなどの對。

おし-する 押摩 押磨 (他動サ) する(摩)に同じ。枕「火をけのはたに足をさへもたげて、ものいふままにおしすりなどもすらめ」源夕霧「硯おしすりて」

おし-ずね 推推 (名) (推(オシ)と推(ネ)との重言)矢篠の略。

おし-ずねりやう 推推量 (名) すねりやう(推量)に同じ。

おし-ぜみ 痴蟬 (名) なかぬせみ。蟬の雌。

おし-た 御下 (名) いなりまち(稲荷町)に同じ。

おし-だいこ 押太鼓 (名) 一軍事に用ふる太鼓。雪女五枚羽子板「太鼓の妙を得、戰場のふけひき、御陣の押太鼓、萬里を響かす名人ゆゑ」 二戰陣にて、進擊の相圖に過ち鳴らす太鼓。甲陽軍鑑「押太鼓の事。九字を表はす。他國は如何にもあれ、信玄流は如此」信長記「敵勢、押太鼓を打って懸かり來れば」

おし-たがふ 押違 (他動ヨ) 強ひて逸はす。行宗集「雨ふれば待ちしもせじな、おしたがへこよひは行かん袖笠をきて」

おし-たけ 唖竹 (名) 唖者が、物を呼ぶために打ち叩く、二本の短き竹。狂言三人片輪「作物。唖竹二本」

おし-だし 押出 (名) 一押し出だすこと。おしいだし。 二人中に出でたる態度。「おしだしが立派だ」 三相撲の手の一。おし押(ニ)を見よ。

おし-だす 押出 (自動サ) 一下より高く出づ。 二大勢打ち揃ひて出懸く。 三人中へ出で行く。 四陪れなくあり。あらはなり。いちじるしくあり。宝町千疊敷「征夷將軍の座につき、諸大名に威を振ふは、押し出しての謀反紛れなし」風俗文選「思案「山といへば延暦寺にきはまり、寺といへば園城寺をさす。共におし出したる靈場なり」

おし-だす 押出 (他動サ) おしいだす(押出)に同じ。

おし-たち (名) したち(下地)の敬語。

おし-たつ 押立 (自動ヨ) 一たつ(立)自動を強めていふ。砂石集「不動火炎の前におし立ち」 二一概に事を高す。あながちな舉動をなす。宇津保(藤原)「それはかの君の、おしたち惡しきにもあらず。じねんに恥かしきによりて、人の心をつかへば、なびくやうなるなり」源(桐壺)「いとおしたち、かどかどしき所ものし給ふ御方にて」

おし-たつ 押立 (他動ヨ) 一押して立つ。 二たつ(立)自動を強めていふ。 三強ひていてたたす。宇津保(藤原)「まかで給ふままに、御つかさの人、待ちうけ奉りて、おしたてて遊びて殿におはす」

おし-たて-もん 押立門 (名) 粗末に押し立てたる門。今昔「檜垣して押立門の家有り」

おし-たてる 押立 (他動ヨ) おしたつ(押立(タ)自動)の口語。「旗をおしたてて行く」

おし-だひ 壓鯛 (名) 鯛の肉を酢につけて壓したるもの。いひなしずし(飯無酢)。

おし-たぶし 押倒 (名) 一おしたふすこと。 二相撲の手の名。おし(押)三を見よ。

おし-たぶし 押殴 (名) 長雨のために、甚しく物の腐れかかること。(俚言集覽)

おし-たふす 押倒 (他動サ) 押して倒す。つきたふす。枕「たちぬぬかづきたるは、おしたふしつべき心もこそすれ」

おし-だまる 押默 (自動ラ) 全く物言はず。しひてだまる。曾我虎磨「序でに一太刀恨み奉るなどとある時は何とせん」(中略)押しだまつても居られまじ」

おし-たる 押垂 (他動ヨ) たる(垂)に同じ。源(花宴)「さすがに褶おしたれてさしたる額つき」

おし-ちちや 御七夜 (名) 一しちや(七夜)の敬語。 二前條に同じ。

おし-ちり 御七里 (名) (一時間に七里をありく義)徳川の御三家にありし飛脚の稱。

おし-つく 押附 (他動ヨ) 一強し押す。押して附著せしむ。宇津保(藤原)「白き薄樣に書きておしつけ給ふ」玉葉(藤)三「夕立のもりて、いたくぬれて侍りければ、からぎぬの袖におしつけて隔はせける」 二強ひて人に寄せつく。かとつく。かづく。

おし-つ-くら (名) おしくら(押競)の訛。

おし-つけ 押附 (名) 一押しつくること。強ひて人によせつくること。 二鎧の名所。おしつけのいた(押附板)の略。(保元(官覽)「八大龍王の像を、黃金を以て、内兜の眞向・鎧の胸板・押附所所につけたり」平治(官覽)「二の矢を射たりければ、押附にちやうと中たり」 三近世の具足の背面の稱。甲陽軍鑑「敵のおしつけを見ずんば、武士弓矢を取る甲斐はなし」 四軍船の右舷。

おし-つけ 押附 (副) やがて。ほどなく。其のうちに。浮世風呂「是れやあ病氣だから、おしつけ治らあ」

おし-つけ-がまし (形) おしつけてするやうなり。無理なるやうなり。露門松「押し附けがましい事なれど、鳥渡ばかりのお盃」是れで上がつて下だされ」

おし-つけ-の-いた 押附板 (名) 鎧の背の上部にある板。綿噛(ボウ)の下、逆板(ヨロ)の上にあり。制は胸板に同じ。おしつけ。よこいた。つきかづき。望先の板。盛衰記(覺書)「己れは手塚が郎等にや、餘すまじとて、鎧の押附の板をつかまへ」

おし-つける 押附 (他動ヨ) おしつく(押附)の口語。博多小女郎波枕「船頭なじみに、おしつけての便船」

おし-つけ-わざ 押附業 (名) 強ひてなさしむる仕業。無理なる所業。枕「狩倒本地「たつて御斟酌なさるるに、いかな王様も、押附わざはなされぬはず」

おし-つつむ 押包 (他動ヨ) つつむ(包)に同じ。枕「横笛(官)人のもとより取りにおこせたるを、おしつつみてやるも、ただ文のやうに見えたり」

おし-つぶす 壓潰 (他動サ) 壓してつぶす。おしてくづす。

おし-づまり 御寢 (名) おしづまること。おやすみ。ぎよしん。日中行事「おしづまりのほどに、殿上の臺盤を校書殿の壁のもとに寄せかけて」

おし-つまる 押詰 (自動ラ) 一きはまる。つまる。 二歲の暮に近くなる。時日切迫す。「本年もおしつまる」

おし-づまる (自動ラ) いぬ(寢)の敬語。ぎよしなる。女詞。

おし-つむ 押詰 (他動ヨ) 一おして行きつまらす。落窪「車(中略)片輪を堀におしつめられて、物もいはでありし」 二つむ(詰)に同じ。

おし-つめる 押詰 (自動ヨ) おしつまる(押詰)に同じ。狂言(長者)「一日一日と暮らいて、はやおしつめて(ご)ざる」浮世風呂「暮におしつめて、人手はございませずね」

おし-つめる 押詰 (他動ヨ) おしつむ(押詰)の口語。

おし-づよし 押强 (形ク) 一押すこと強し。 二あながちなり。剛情なり。一概なり。

おし-つんぼ 唖聾 (名) 唖は聾を兼ぬるよりいふ語。

おし-て 押手 (名) 推す人。おさふる人。

おし-て 押 (副) 強ひて。無理に。萬「於志兵(オシ)いなと稻はつかねど、なみの ほのいたぶらしもよ、きそ一人ねて」源(玉鬘)「いよいよあやふがりて、おしてこの國にこえきぬ」

おし-で 押手 (名) 一古昔、朱・墨を掌に捻りて、押して印としたること。 二證據とすべき印。崇峻紀「朝廷下り符(オシデ)「勝」宇津保(藤原)「其の戸には、文殿とおしでさしたり」名義抄「印・鷲(オシ)」 三琵琶・琴などに、絃を押して音を發せしむること。源(紅葉)「琵琶は、おし手しづやかなるをよきにするものなるに」 四射術の語。左の手。ゆんで。「引手の對」夫木「あづさ弓ひきての山のほととぎす、雲を宿とやおしでいるらん」

おし-で-いれ 押手入 (名) 印形を入れおくもの。

おし-で-の-ふみ 押手文 (名) おしでぶみ(押手文)に同じ。天武紀上「符(オシデブミ)」

おし-で-の-やしろ 押手社 (名) 神社の實體を藏めたる所。(東雅)

おし-で-ぶみ 押手文 (名) おしでのふみ。崇峻紀「依符旨(オシデ)臨斬梟時」

おし-てる 押照 (自動ヨ) おしなべて照る。萬「わが宿に月押照(オシテ)てほとときす心あるこよひ來鳴きどよもせ」 二櫻花今盛かりなり、なにはのうみ於之豆流(オシテル)宮にきこしめすなへ」

おし-てる 押照 (枕) 襲ひ立てるの約なりと。津の國難波の、浪の高くおそひ立てるより、難波にかけていふ。仁德紀「於辭兵屢(オシ)なにはのさきのならび濱、ならべむとこそ其のことはありけめ」萬「ただこえの此の道にして、於之豆流(オシ)なにはの海と名づけけらしも」

おし-てる-や (枕) 前條に同じ。記「淤志豆流夜(オシテル)なにはのさきよ出でたちて」萬「於之豆流夜(オシテル)なにはの津よりふなよそひ、あれは漕ぎぬと妹につぎこそ」

おし-と-ど-し-と-ど (感) 古語。拍子の詞。續紀「蒜城寺の前なるや、豐浦の寺の西なるや、於志(正度)刀志(正度)櫻井に白玉しづくや、好き玉しづくや、於志(正度)刀志(正度)しかせば國ぞ榮ゆる、わぎへらぞ榮ゆる於志(正度)刀志(正度)」

おし-と-どむ 押止 (他動ヨ) おさへとどむ。景行紀「留(オシトドメ)劍待之」萬「おほみまの口抑駐(オシトド)」

おし-とほす 押通 (他動サ) おして通す。何處までも貫き行ふ。爲し遂ぐ。

おし-とむ 押止 (他動ヨ) おしとどむ。制止す。堀川狂歌集「押しとめん押寶押買、とりどりの事もなくなる山崎の關」

おし-どめ 押止 (名) 琵琶・琴などにて、左の手にて押手をなし、右の手にて絃を彈きて、奏樂を止むること。

おし-とり 押取 (名) 押し取ること。保元(官)「押取にしたる鞍なれども、うたてげなるにぞ乘り給ひける」

おし-とる 押取 (他動ヨ) 無理に取る。强ひて奪ふ。詞花「親の處分を、故なく人におしとられけるを」

おし-な (名) 「御信濃の略。江戸に出でたる信濃人をいやしめて稱したるより轉ず」田舍人をいやしめていふ語。

おし-なぶ 押靡 (他動ヨ) おし靡かす。萬「めひのぬのすすき於之奈倍(オシ)ふる雪に、宿かる今日しかなしくおもほゆ」同「吾が宿の をばな押靡(オシ)おく露に手ふれわぎもこ、散らまくも見む」

おし-なぶ 押並 (他動ヨ) 一おしならす。ならばしむ。 二おしならす。すべて一つにす。ひきくるむ。枕「花の木ども散りはてて、おしなべたる緣になりたるなかに」 三普通にてあり。なみにてあり。源(桐壺)「御方方の人人、世の中におしなべたらぬを、えりとどのへすぐりて」

おし-なべ-て 押並 (副) 一すべて一つにして。おしならして。ひきくるめて。一體に。あまねく。萬「そらみつ大和の國は、押奈戸手(オシ)あれこそをれ」勢語「おしなべて峯もたひらになりなん、山のはなくば月も入らじを」 二なみに。普通に。

おし-なほす 押直 (他動サ) ひきなほす。なほす。國姓爺「涙ながらに、容儀を押し直せば」

おし-なほる 押直 (自動ラ) 正しく座に著く。なほる。(義經狂言(身)「板もとにおしなほり」

おし-なみ 押靡 (他動) 押しなびかす。黑川春村は、古今集のおしなみは、おしなべの誤りならんといへり。古今「今よりはつぎてふらなん、わが宿のすすきおしなみふれる白雪」新古今「旅ねしてあかつき方の鹿の音に、いなばおしなみ秋風ぞ吹く」玉葉「小山田のいなばおしなみ吹く風に、ほず系をつたふ秋の白露」

おし-なみ (副) なみたいてい。普通。萬「やましろのいづみのこすげ凡浪(オシ)、いもが心は我が思はなくに」

おし-ならす 押均 (他動サ) ならす。均しくす。平かにす。平均にす。

おし-ならぶ 押並 (他動ヨ) 並ぶやうにす。諸(相)國「やりすごし、おしならべむずと組めば」

おし-なる 押成 (自動ラ) おしきりてなる。しひてなる。保元(門)「三年が内に、九國を皆攻め落として、自ら總追捕使に押しなって」

おし-ね (名) 「おそいねの義。一說、をしね(小稻)の訛りなりと」おくて。晩稻。新古今(雜上)「うき身には山田のおしねおしこめて、世をひたすらに恨みびぬる」夫木「おしね刈るしづのすががき白妙

に、はらひもあへず積もる雪かな。此の歌、判者清輔朝臣云、田は秋こそ刈るものにとあるを、雪ふらん時はいかがなど申す人ありしかども、其は俳事也。十月に刈る所多かり。おしねといふは、おそき稻なれば、かけあひてこそ侍れ」

おし-ねる 押寝 (他動ヲ) 古語。押し捻(ネ)るなるべし。駿神 萬三「焼太刀のたがみ押細利(オシネ)てしらま弓ゆぎとり負ひて」

おし-のく 押退 (他動ヨ) 一おしやる。おしてのかす。詞花 雜上「しのびたる男の鳴りけるきぬを、かしがましとて、おしのけければ」 二人を見下ぐ。威脅す。榮華 若菜「色許されなどしたる人は、したり顔に思ひて、おしのけたるさまなり」

おし-のける 押退 (他動ヨ) 前條の口語。

おし-のごふ 押拭 (他動ハ) のごふ(拭)に同じ。枕三「ふづくゑ清げにおしのごひて」 源夕顔「おしのごひ給へる御袖の匂ひも、いと所せきまで薫りみちたるに」

おし-しのび 御忍 (名) 一しのび(忍)の敬語。御微行。大鏡 狂言 師尹「つつと お忍びの事でござるによって、これはなりますまい」 二次條の略。

おしのび-かご 御忍駕籠 (名) 江戸時代、大名などの微行に用ふる駕籠。多くは、屋根は黑羅紗にて覆ひ、腰黑く、黑棒にて舁ぐ。おしのび。

おし-のぶ 押延 (他動ニ) おしてのばす。枕二「手のひらうちかへし、皺おしのべなどして」

おし-は (名) 古語。鳥の翼のもとの方にある柔く短き羽。字鏡「翮 知羽」

おじ-はいりやう 御字拝領 (名) いちじはいりやう(一字拝領)に同じ。武雜記「御字拝領の事。折紙に被遊て、御太刀又は御腰物にそへられ候うて、御盆頂戴之時、直に拝領す」

おし-ばうし 押帽子 (名) 古へ犬飼の著けし帽子。鎌倉殿察式「飼犬人別、押帽子一口」

おし-はおり 押羽織 (名) ぢんばおり(陣羽織)の異名。

おし-はかり 推量 (名) おしはかること。すゐりやう(推量)。臨淵。源 朝顔「あやしき御おしはかりになんと聞こえ給ふ」

おしはかり-ごと 推量事 (名) 前條に同じ。枕六「人よりは少しにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すずろなる物うらみし、我れさかしがる」

おし-はかる 推量 (他動ラ) 此の事より推して、他の事に及ぼして考ふ。推量す。臨淵。源手。垂仁紀「因て此物而推(オシ)之、必有餘手」 枕三「あまり褒せからめきたるは、心いられたらんとおしはからる」

おし-はさむ 押挾 (他動ム) 中間におしつけ挾む。はさむ。蜻蛉日記三「したすだれ、左右おしはさみたり」

おし-はだぬぐ 押肌脱 (自動ヨ) はだぬぐ(肌脱)を強めていふ。太平記 五六 俊寛「自害せんと思し召して、既におしはだぬがせ給ひたりけるが」 曾我 五人兄弟 死出の山路の旅裝束、これその證據とおし肌脱げば」

おし-はなつ 押放 (他動ヨ) おしてはなす。はなれむむ。遠ざけ隔つ。放ち遣る。俳き遣る。神代紀「離(オシテ)天磐座」 祝詞式 大祓 大津邊居大船を舳解放(オシ)艫解放 舳解 放 艫 大海原に押放(オシ)事之如久」 拂離。脫離 神代下 拂武紀

おし-はふる 押放 (他動ヨ) 古語。押し振り擧げて祭る。大鏡 宮女 又、鈴木重胤の說に、水底に放れたるを云ふ。崇神紀「出雲人祭眞種之甘美鏡、押羽振(オシハフ)之甘美御神底寶御寶主」

おし-はらふ 押拂 (他動ハ) 一拂ひ遣る。拂ふ。 二斬り放つ。切り拾つ。顯宗紀「伐本截(オシハラヒ)末 末伐本截末」 孝徳紀 大化元 薄葬令「押拂(オシハラヒ)」

おし-はる 押張 (他動ラ) 一押して張る。張る。源 空蟬「すだれ高くおしはりて」 新拾遺 雜「おしはりて弓の袋と知るや、思はぬ山のものをいるらん」 二意地をはる。おしとほす。落窪「おしは部もおはせず」

おし-はるす 押晴 (他動ヨ) 古語。はるす(晴)を強めていふ。祝詞式 鎮魂 麻蘇比乃大御鏡乃両之意志波留志(オシハルシ)天見行事能已登久」

おし-ひき 押引 (名) 一押しひくこと。押したり又引きたりすること。定頼集「梓弓おしひきしつつ夜もすがら、ややといへどもいる人もなし」 二價の高下につき、おし問答すること。潮來誌「何も此れが、値のおしひきするぢやなし」

おし-ひく 押引 (他動ヨ) 押し、又は引く。落窪「やり戸中巻 打ちたたきおしひけど、内とに詰めてければ、ゆるぎだにせず」

おし-ひしぐ 壓拉 (他動ヨ) 一おしてとはす。おしつぶす。枕三「よもぎの、車におしひしがれたるが」 二おしつく。おさへつく。抑壓す。枕三「追ひのけられたるえせ車も中巻所ある方にゆるがしもて行くなど、いとわびしげなり。きらきらしきなどは、えさしもおしひしがずかし」

おし-ひたす 押浸 (他動ヨ) ひたす(浸)を強めていふ。ぬらす。源 東屋「おそろしき夢のさめたるここちして、汗におしひたして臥し給へり」

おし-ひたすら 押一向 (副) おしなべてひたすらに。ひたすらに。(歌に多く、おしひたす意にかけていふ) 後拾遺 雜四「さまざまに思ふ心はあるものを、おしひたすらに濡るる袖かな」 夫木 雜 つらさにも落ちし涙の今はただ、おしひたすらに慰しかるらん」

おし-ひらく 押開 (他動ヨ) 押して開く。押しあく。崇神紀「うまさけ三輪の殿の朝戸にも、於酔寐難倚(オシ)ね、みわのとのとを 排 神武紀下」 驗德紀「ひの板戸を飫斯毘縷根(オシ)」

おし-ひらむ 推平 (他動ム) おしてひらたくする。徒然草「鼻をおしひらめて額をさし入れて、舞び出でたるに」

おし-ひろぐ 推廣 (他動ヲ) おし延べて廣くす。擴張す。

おし-ひろける 推廣 (他動ヲ) 前條の口語。

おし-ひろむ 推弘 (他動ム) 一廣く及ぼさしむ。廣くゆきわたらす。ひろぐ。擴張す。 二此れより彼れに推し及ぼす。敷衍す。「論旨をおしひろむ」

おし-ひろめる 推弘 (他動ヲ) 前條の口語。

おし-ふさぬ 押總 (他動ヲ) 一つに束ぬ。總括す。愚管抄「代代の遷りゆく道理をば、心に浮かぶばかりは申しつ。それを又おしふさねて、その心の詮を申しあらはさんとするには」

おし-ふす 押伏 (自動ヨ) 古語。ふす(伏)を強めていふ。仲哀紀「如天津水影、押伏(オシフ)而我所見國、何謂無國、以誇我言」

おし-ふす 押伏 (他動ヨ) しひて伏さす。萬三「あしひきの名に負ふ山背押伏(オシフ)宣後は、母は根の國なるべて、君し結ばば逢はさらめやも」 著聞三「やがておしふせて、平此の本意思ひの儘にせめふせてけり」

おし-ふせる 押伏 (他動ヨ) 前條の口語。

おし-ぶち 押緣 (名) 物のおさへに打ちつくる細長き竹又は木の稱。

おし-ぶみ 押文 (名) 張りつけたる文。續古事談「阿彌陀佛(堂)の柱に、押文あり」

おし-べ (名) いそべ(磯邊)に同じ。古へ東國の方言。萬三「瑞河の海、於思敝(オシ)に生ふる潮つづら、いましを細み母にたがひぬ」

おし-へす 押壓 (他動ヨ) おして挫く。おしつく。枕二「過がにし方「ふたあるぬ・えぞめなどのさいでの、おしへされて、さうしの中にありけるを見つけたる」

おし-へる (自動ヨ) 古語。高ぶらず。慎みぶかくあり。 持統紀「雖帝王女而好節儉(オシヘル)」

おし-ぼたん 壓釦 (名) おして電鈴を鳴らす。釦の如きもの。

おし-しば (名) むしろ(席)に同じ。(倭字通 卷)

おし-まく 押卷 (他動ヨ) おして卷く。卷く。枕「青くちばふたあるなどのものども、おし卷きつつ細櫃のふたにいれ」

おし-まぐ 押曲 (他動ヨ) おして曲ぐ。曲ぐ。崇峻紀「風(マガ)其鉤」

おし-まける 押曲 (他動ヨ) 前條の口語。

おしまづ (名) まじなひの語。下文を見よ。神宮秘傳問答「今の代に、天武の水にむせたる時、おしまづとなへてまじなふは」

おしまづき (名) 一けふそく(脇息)に同じ。齊明紀「來膝(オシ)而斷」 二つく(机)をいふ、女詞。

おし-まる 御湯 (名) 「しめは、しめしの略」しめし(濕)に同じ。むつき(襁褓)。

おしめ-かご 御湯籠 (名) 中に火を入れ、濡れたるおしめをかけて乾かす料のかご。

おしめ-がひ 押目買 (名) 取引所の語。押目を見ひて買ふこと。

おし-もの 御下 (名) 一古へ内侍の次にたつ女官の稱。命婦・女藏人などをもいふ。 二貴人の家にて、下女の稱。

おし-もぢ 御杓文字 (名) しやもじ(杓文字)をいふ、女詞。

おし-やく 御酌 (名) 一酌をすることの敬語。諸手「千手も此の由見るよりも、お酌に立ちて、重衡の御前にこそ參りけれ」 二酌をする女。酌婦。 三はんぎよく。まひこ。鰯妓。

おし-やくじ 御石神 (名) しやくじ(石神)に同じ。

おし-やこ 御蝦蛄 (名) 婦人の髪の結ひ方の一種。後ろより總體の毛を集めて、前の方に向かひて、下の方にわがれ、二つに剌りて、その割りたる左右の輪の穴に、横に簪をさしたるもの。下層社會に用ふ。

おしやこじでんだ (名) 【植】水龍骨科、瓦韋(シノブ)屬の多年生草本。莖は地下を匍匐し、諸處より葉を出だす。葉は常綠、一回羽狀に深裂し、各裂片は線形、緣邊波狀を呈す。子囊群は各裂片の兩緣に沿ひて排列し、圓形なり。我が國、各地の山地に自生す。

おし-やし (名) さいし(叙子)の轉。(嬉遊笑覽)

おしやな-し (名) 東南の風。袖中抄「たつみの風をばおしやなといふ。又伊勢こちといふ」

おし-やぶり (名) 玩具の一。形張鈴に似て小さく、木又は鹿談などにて造る。生後半年位の嬰兒が、軸を握りて、端にある球を口に入れてしやぶるもの。

おし-やべり 御饒舌 (名) よくしやべること。又、其の人。多辯。

おし-やす (名) 人を憚らざる出過ぎたる女。東京の方言。

おし-やすす (他動ヨ) 〔おっしやいますの約〕仰せらる。俗曲「猫ちや猫ちやとおしやますが、猫が絞りのゆかたで來るものか」

おし-やもじ 御杓文字 (名) しやもじ(杓文字)をいふ、女詞。

おし-やらく (名) 一好んで身なりを飾

ること。おしやれ。浮世風呂上「黒油でもなすって、もう一遍おしやらくをする氣だものを」同上「おしやらく御乳母め」㈢古へ宿驛などの賣女の異名。

おしやり 御舍利 (名) ㈠ぶっしやり(佛舍利)の尊稱。㈡病死して色白くなりたる蠶。腐りて黒くなるをたりこといふ。

おしやる 押遣 (他動四) ㈠押して進む。㈡押して遣る。おしのく。源氏「車ども立てつづけつれば、人だまひの奥におしやられて」同宿木「きぬをおしやりて寄り給へる」

おしやる (他動四) 仰せある。おっしやる。狂言「その時おしやらうには、身内に居らるるか、聟が參りて候」同武惡「はてさて、ひよんなことをおしやる」

おしやる (他動下二) 前條に同じ。狂言拔殼「ひよんなことをおしやれまする」

おじやる (自動四) ござる(御座在)に同じ。おあん物語「寄手の大將は、田中兵部殿と申すでおじやる」狂言宗論「御亭主、別の間はおじやらぬか」

おしやれ (名) おしやらくに同じ。又、其の人。

おじやん (名) 事の不結果に終はりたること。おしまひ。

おじやん (自動) おじやるの訛り。ござる。丹波與作上「馬次・舟渡し等にて、がうき・がさつを仕ったらば、曲事でおじやんべい」

おしやんす (他動變) 上方の語。おっしやりますの訛り。生玉心中中「此の頃天滿で、姉御さんのおしやんす通り」博多小女郎波枕中「先度下だる時にも、土産に、大阪の三芳下駄賴むぞやとおしやんした」

おしようじ 御承仕 (名) しようじ(承仕)の敬語。

おしようしん-ぶぎやう 御昇進奉行 (名) 室町幕府の職名。將軍宣下又は任大臣・任大將などの折り、その事を沙汰するもの。

おしよく 御職 (名) ㈠同列の中にて頭立つ人。㈡次條の略。

おしよく-ぢよらう 御職女郎 (名) 同輩中にて頭立ちたる遊女。東京遊廓の語。おしよく。

おしよす 押寄 (自動下二) 多人數にて進み掛かる。おしかく。宇治拾遺五「伏見修理大夫のもとへ、殿上人二十人ばかりおしよせたりけるに」保元新院御所各門固「高松殿に押し寄せ」

おしよす 押寄 (他動下二) 押して近づく。引きよす。源末摘花「脇息をおしよせて」

おしよせる 押寄 (自、他下一) おしよす(押寄)自動・他動の口語。

おしよぼ-からげ (名) ぢんぢんばしよりに同じ。傾城反魂香中「おしよぼからげの忙がしげに」

おしるびと 御知人 (名) しりびと(知人)の敬語。御知己。おちかづき。大藏流狂言二人大名「もし途中で、お知る人になど、お逢ひなされた時分に」同「御親類中とも、お知る人に成りませぬほどに」

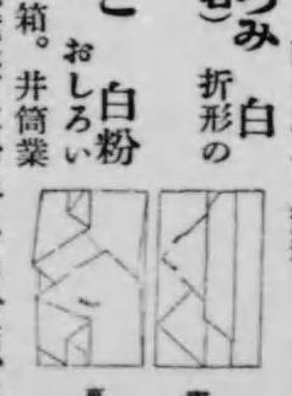
おしろい 白粉 御白 (名) 婦人・俳優等の、色を白く見する爲め、化粧に用ふる粉。製法により水白粉・煉白粉・紙白粉等の種類あり。原料には、鑛物性と植物性とあれども、鉛より製するもの最も多し。現今無鉛と稱するものあり。しろいもの。七十一番歌合「しろいもの賣り。しろいもの。百けも、なからけも、いくらも召せ。いかほどよき御しろいが候ぞ」四季物語正月「空のけしき夜べ見しにはかはりて、はなだの紙におしろい附けたるやうに、處處白う見えなされ」

おしろい-ぐさ (名) 【植】おしろいばな(紫茉莉)の異名。

おしろい-くさい 白粉臭 (形口語) あだっぽい。つやっぽい。

おしろい-した 白粉下 (名) おしろいを使用する前に用ふる顔料。

おしろい-つつみ 白粉包 (名) 折形の名目。



(おしろいつつみ)

おしろい-ばこ 白粉箱 (名) おしろいを納れおく箱。井筒業平河内通三「鏡臺・紅粉皿・お白粉箱、たしなみ道具ならべたて」

おしろい-ばな 紫茉莉 (名) 【植】紫茉莉科、紫茉莉屬の多年生草本。莖の高さ二三尺、多く分枝す。葉は對生、卵形又は心臟形、銳頭、長き葉柄を有す。花は枝頂に叢生し、白・紅、又は黄色等の美麗なる蔓を有す。果實は圓形、種子中には白色粉狀の胚乳有り。西印度の原産にして、今は廣く庭園に栽培せられ觀賞用に供せらる。おしろいぐさ。きんげんやう。臙脂花。

(おしろいばな)

おしろいばな-くわ 紫茉莉科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。草本・灌木又は喬木。葉は單葉全緣なり。花は叢生し、花冠を缺く。萼は下位、花冠樣なり。萼片は四五に分裂し、又は齒牙を有す。雄蕊は一乃至三十箇。雌蕊は一室一胚珠を有す。花は一箇・三箇、又は多數、共に三・五乃至多數の苞片より成れる總苞に依りて包擁せらる。果實には萼の下部を宿存す。本科に屬するものは、廣く世界に分布し、殊に亞米利加洲に多し。しまつりくわ。

おしろい-や 白粉屋 (名) おしろいを賣る家。雲女五枚羽子板上「紺屋のお染・白粉屋の艶」

おしろがよひ-ぶね 御城通船 (名) 昔、大阪在番の武家が、城通ひのために乘れる船の稱。しろがよひ。

おしろ-つき 後附 (名) うしろつき(後附)の訛り。かた言

おしろで (名) 【動】鰤の一種。紀伊國の沿岸に多し。

おしろ-み 後見 (名) うしろみ(後見)の訛り。かた言

おし-わく 押分 (他動下二) 前後・左右へ分け遣る。分け拔く。神代紀下「排二分(オシワケ)天八重雲一」萬廿「白くものちへを於之和氣(オシワケ)、あまそそり高きたち山」排披神武紀

おし-わける 押分 (他動下一) 前條の口語。

おし-わごむ 押縮 (他動四) 押してわがぬ。宇津保藏開下「女中略前なる硯に、手習をして中略と書きて、おしわごみておいたるを見て」

おし-わり 押割 (名) ㈠おしわること。㈡次條の略。

おしわり-むぎ 押割麥 (名) おしわりたる麥等。(挽割麥(ヒキワリムギ)などの對)

おし-わる 押割 壓割 (他動四) おして物をわる。

おし-ゑ 押繪 (名) 次條に同じ。狂言見物左衞門「御所を拜見致さう。はあ、これに八景のおしゑがある」

おしゑ-ざいく 押繪細工 (名) 厚紙を人物・花鳥などの貌に剪り、帛を貼り、これに綿を入れて、高低ある樣に作ること。又、其の物。おしゑ。衣裳繪。

おし-をけ 押桶 (名) ㈠えなをけ(胞桶)に同じ。鎌倉年中行事「典藥頭胎を申し出だし、從二政所一參り推桶に入れて」㈡安產を祈る爲めの散米(ウチマキ)を納るる桶。うちまきをけ。小笠原家傳書產屋の式「押桶十二、略儀には七つ・五つ・二つもよし」

(おしをけ)

おし-をり 押折 (名) 白張(ハクチヤウ)の尻、引き折りて馬に乘ることをいふか。飾馬考 布衣紀「鞦の事、絲組の畝、押折りの時は畝ばかり、衛府の時は總をつくるなり」

おし-をる 押折 (他動四) 押して折る。へしをる。源氏「しぢなども皆、おしをられて、すずろなる車のどうに打ちかけたれば」

おす (名) 古語。いそ(磯)に同じ。古へ東國の方言。おし。萬廿「かつしかのままのてこながありしかば、ままの於須(オス)ひに波もとどろに」

おす 押 (他動四) ㈠力を用ひて彼方へ遣る。崇神紀「於辭(オシ)ひらかね、みわのとのとを」古今春上「梓弓おしてはる雨今日ふりぬ、あすさへふらば若菜つみてん」㈡當つ。おしつく。源常夏「みないと涼しき高欄に、せなかおしつつさぶらひ給ふ」㈢櫓をつかひて舟を遣る。源玉鬘「例の舟子ども、からとまりより川じりおすほどは」と、歌ふ聲の」㈣迫り寄す。進む。「押して行く」甲陽軍鑑廿二「其の跡につき、山縣おさへ候へば、山縣につき七頭も組傳ひにおす」㈤おしなぶ(押並)二に同じ。萬三「春日山押(オシ)て照りたるこの月は、いもが庭にもさやけかりけり」㈥無理になす。强ふ。萬廿「於志(オシ)ていなと稻はつかねど、波のほのいたぶらしもよ、きそ一人ねて」新六帖五「いたづらにまだ手もふれぬそりま弓、人はおしたるはりごとなせそ」㈦堪へて爲す。忍ぶ。「病をおして勤む」㈧たしかむ。「念をおす」

おす 推 (他動四) ㈠いただく。仰ぐ。㈡薦め擧ぐ。推擧す。㈢なぞらふ。及ぼす。類推す。㈣究め考ふ。思想を及ぼしてきはむ。

おす 壓 (他動四) ㈠重みにて上よりおさふ。あっす(壓)。神武紀「天壓(オス)神饌、此云訶那一」心中刃氷朔日中「煎餅屋、おせば碎ける身代の、底を見せたるはづかしや」㈡貼りつく。宇津保藏開上「大いなる松のつくり枝につけて、かく書きつけて、おしたり」榮華根合「打ちたるはかまなど、例のことなり。るりをもんにおしなど、いみじうつくされたり」㈢朱又は墨を、印章などにぬりて、其の形を紙にうつす。捺印す。曾根崎心中上「おれに證文書かせ、おぬしがおした判がある」㈣他を凌ぐ。壓倒す。おしけつ。源澪標「彼の明石の船、此のひびきにおされて」同夕霧「若君たちは七八人になり給ひぬ。えみこの君おし給はじ」㈤しへたぐ。壓制す。艶狩劍本地三「此の道ばかりは繼づくに、おせどもおされぬ芙の枝」

おしも おされ も せ ず 互ひに壓倒し又壓倒せられず對等なり。同格なり。源氏冷泉節上「伊東殿は大名でも、押しもおされもする身でなし」

おすが (名) 楊弓・大弓にて、錢を賭物にするとき五錢をいふ隱語。一話一言二「一、かけものは中略さて錢の時は中略五錢を於洲賀とし」一時軒隨筆三「所務的に錢を賭物にする時の辭有り。此の詞、今も遣ふこと也。楊弓にてもいへり。中略五錢、梅花或ひはおすが」

おすぎ-おたま 阿杉阿玉 (名) 伊勢國山田の間山(アヒノヤマ)にて、女の、三味線・胡弓などを彈きて、神宮の參詣人につきて錢を乞ひしもの。

お-すけ (名) 自己の嗜好の爲めに、俳優の(コワイロ)をまねぶもの。

おず-さ 悍 (名) おずくあるさま。强くある度合。

おずし 悍 (形二) おぞし(悍)に同じ。おずまし。おぞまし。古語拾遺「天鈿女命古語、天乃於須女。其神强悍猛固、故以爲名。今俗强女、謂之於須志。此緣也」源浮舟「世のありさまをも知るかた少なくて、おふしたてたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを」

おすずり-ぶぎやう 御硯奉行 (名) 武家時代の職名。將軍諸家に臨まるるをり、諸家にて命ずるもの。文臺の硯・筆・墨等の器具を沙汰す。

おすひ (名) 太古、婦人の裝束の上に打ち懸くる帛。頭より被りて衣の上を掩ひ、下は裾まで垂る。面貌を隱す料。古事記傳 かくしぎぬ。記上「太刀がをも、いまだ解かずて、淤須比(オスヒ)をもいまだ解かねば」同上「ながけせる、意須比(オスヒ)のすそに月たちにけり」大神宮式「帛意須比八條、長二丈五尺、廣二幅」

おす-び (名) おしべに同じ。いそべ(磯邊)。古へ東國の方言。萬廿「かつしかのままのてこながありしかば、ままの於須比(オスヒ)に、波もとどろに」

おす-ひく (他動四) おびきだす。誘ひ出だす。かた言

おすべ-どり (名) 【動】おすめどり(護田鳥)に同じ。

お-すべり (名) ㈠ふとん(蒲團)の異名。㈡おろし(下)三に同じ。おさがり。

おずまし 悍 (形二) おぞし(悍)に同じ。おずし。おぞまし。源東屋「かのめのとこそおずましかりけれ」同夕霧「人聞きも、うたておずましかべきわざをとおぼせば」

おずまし-げ 悍氣 (副) おずましきやう。おずましさう。

おずまし-さ 悍 (名) おずましきこと。おずましくある度合。

お-すまひ 御住 (名) 江戶時代、將軍の女の、三位以下の諸侯に嫁したるものの尊稱。(御守殿の對)

おすめ-どり 護田鳥 (名) 【動】ばん(鷭)の異名なるべし。おすべどり。うすめ。うすべ。宇鏡「護田鳥於須女鳥」和名抄「護田鳥於須女止利」

お-すもじ 御酢文字 (名) ㈠すし(鮨)をいふ、女詞。㈡御推察をいふ、女詞。おんすもじ。

お-すや 御須屋 (名) すや(須屋)の敬語。すや(須屋)を見よ。

お-すわり 御坐 (名) ㈠すわる(坐)ことの敬語。㈡すわりもち(坐餅)をいふ、女詞。

お-すゑ 御末 (名) ㈠內裏又は室町時代の將軍家にて、奧むきの一室の稱。又、其處に詰め居る女の稱。一說、婦人の食を調ふる處なりと。海人藻芥「內裏に御末といふ所あり。常の人の所ならば、中居などの邊なり」長祿二年以來申次記正月「花御所にては、諸大名・國持・外樣・御供衆・申次迄は、御末の東のわき戸より被レ參候」同「上の御末と中の御末との間は、遣戶にて候。廣さ三間九間なり三間九間とは、三面四方にて九坪あるをいふなり 其の眞中に柱あり。其の柱の際より遣戶開半(ナカ)づつ兩方へ明けられ候間、中一間明きたる所へ掛筵を掛けられ候。朝夕の供御參り候時も、此の掛筵の際へ、中臈御出でありて、供御の御膳をうけとられ候うて、御前へ持參なり中略總じて此の筵の內へは、誰れ誰れも

不及參入候」 ㊁江戸幕府にて、奥女中の卑しき務めをなす女の稱。水仕の業を執り、又貴君などの乘物を舁くことを勤む。傾城酒呑童子「京の御所より女嬬か、おすゑか、一朋人呼び申さんと申し上ぐれば」

おすゑ-しゅう 御末衆 (名) 室町幕府の職名。將軍の膳部を同朋衆へ逆達することを勤むるもの。また格勤のうちにて宿直をつとむるもの。おすゑのをとこ。御はした衆。ごみなん(御末男)。

おすゑ-ほうこう 御末奉公 (名) 御末となりて勤むる奉公。膝栗毛「さるお屋敷に、お末奉公勤めし女」

おせおせ-こぼふし (名) 小兒二人して互ひに押しあふ戯れ。平假名盛衰記「こなたの子も出て這ひ廻はり、留きあうて寄りこぞり、おせおせ小ぼふしがおないい年」

おせぐく (副) 推しひらめたるさまにいふ語。宇治拾遺「すしあゆの、おせぐくにひろらかなるが、しりかしらばかりおして、三十ばかり盛りたり」

おせせ (名) 餘計な世話。おせっかひ。浮世床「いらぬおせせの樺燒やい」

おせせり (名) やうじ(楊枝)をいふ、女詞。

おせちの略 御節 (名) 〔おせちぶるまひの略〕正月及び五節句などの節日に用ふる食物の菜。御傘「おせちとばかりするは春なり」

おせちく 御節供 (名) 前條に同じ。

おせち-ぶるまひ 御節振舞 (名) おせち(御節)を見よ。

おせっかひ (名) 餘計な世話。せっかひ。おせせ。

おせ-ふぎ 音聲吹 (名) 樂家の語。絲竹の樂を奏すること。(醒睡笑名物考) おんじやう。

おせらし (形) ㊁おそろしの訛り。東海道名所記「足をさし出だしてさすらせければ、さてな猛に毛がおへて、おせらしやおせらしやと云うて笑ひけり」 ㊂おとならし。關西地方の方言。

おせる 望 (他動) 古語。望み見る。眺む。ほせる。神武紀「望(オセリ)海高言曰」 睨(オセル)城中」

おせん 御煎 (名) せんべい(煎餅)を景行紀「望(オセリ)海高言曰」

いふ。幼兒の語。

おせん 御膳 (名) ぜん(膳)の敬語。

おそ 遅 (名) おそきこと。後るること。萬葉「於曾(オソ)はやもなをこそ待ため、むかつをのしひのこやでの、あひはたげはじ」

おそ 鈍 (名) おぞき(鈍)こと。にぶきこと。痴鈍。萬葉「たはれをとわれは聞けるを、宿貸さずわれを歸せり、於曾(オソ)のたはれを」 同葉「とこよべに住むべきものを、つるぎ太刀なが心から、於曾(オソ)や此の君」

おぞーん (英 Ozone) (名) 〔化〕瓦斯の一種。燐を水中に立て、之を硝子鐘にて掩ひ、其の中に酸素を充たし、十數分時閉放置するとき發生する氣體。又、放電・雷鳴の際にも發生す。强く不快なる臭氣を有し、之を吸入すれば頭痛を起こし、且粘膜を害し、嗅嗽を發せしむること、臭素に類す。酸素に比して更に酸化力强く、純粹のものは、低溫度にて冷却すれば液化して深青色を呈す。この酸化作用ある爲め、漂白劑とし、又は澱粉を精製するに用ふ。

おそ-あし 遅足 (名) 徐徐に歩むこと。體操にては、一分時間に約七十歩を行く割合とす。早足(ハヤアシ)の對)

おそ-うし 遅牛 (名) あゆみ遲き牛。(諺)遅牛も淀、早牛も淀 遅くとも早くとも、歸著する所は一なりとの譬へ。狂言「おそ牛も淀はや牛も淀といふ、明日の今時分迫っつかうぞ」

おそ-うち 遅打 (名) 乘物にて、行路を急がず報知に行くこと。(早打(ハヤウチ)の對) 曾我會稽山「早打ちにも遅打ちにも、今朝からはこの乘物ばかり」

おそうま 遅馬 (名) のろき馬。どば(駑馬)。名義抄「駑(オソウマ)」

おそおたい (形口語) おそろし(恐)をいふ、遠江國の方言。(醒睡笑)

おそ-おひ 遅生 (名) ひつぢ(穉)に同じ。(同)

おそ-がい (形口語) おそろし(恐)をいふ、飛騨國及び尾張の近國又は上總國の方言。(俗語考)

おそかれ-はやかれ 早晩 (副) 早きか晩きか、その中に。いつか。つひには。さうばん(早晩)。

おそき (名) 古語。襲衣(オソキ)とにて、表衣(オモテ)なるべし。(雅解) 萬葉「たくぶすましらやま風のねなへども、子ろが於曾伎(オソキ)のあろこそえしも」

おそき-うま 遅馬 (名) 馬の力劣り、歩み遲きもの。駑馬。和名抄「野王案、駑(駑駘)(ヒ)馬之最下也」 躬恒集「おそき馬はあしぶちならであふれども、心のみこそ先にたちけれ」

おそぐつの-ぞ (名) 枕繪。春畫。(同) 一說、戲畫なりと。(國語) 著聞集「ふるき上手どもの書きて候おそぐつのふなどぞ御覽候へ、その物の寸法は分に過ぎて大きに書きて候事、いかでか賞にはさは候べき」 類聚名目抄「俊頼口傳抄に、人の妻にみそか事すれば、ぬぐ者重なるといへば、襲衣(オソキ)の意か。夫木抄「に、ぬぐ者のかさなる上にかさなれば、いもりのしるしかひはあらじな」

おそけ 遅氣 (副) 事のはかどらぬやうす。おそきやうす。榮華(榮)「殿はこれにつけても、秋和殿おそげなることをおぼしめすべし」

おそけ-を-ふるふ 怖氣 (名) おそる心。おぢけ。

おそけ 鈍氣 (副) おぞさう。心鈍くあるさま。雄略紀「五情無主(オソケツ)」

おそけ-だつ 怖氣立 (自動) おそれをのめきて、身の毛よだつ。ぞっとして、そうけだつ。

おそけ-づく 怖氣附 (自動) おぞけがつく。おぞけがきざす。

おそさ 遅 (名) おそくある度合。おそくあるさま。狂言(書)「おのれがおそさに、迎ひにきた」

おそ-ざき 遅咲 (名) おくれざき。早咲の對。晩花。

おそ-ざくら 遅櫻 (名) おそざきの櫻。千載卷二「したゆるひむろの山のおそ櫻、消え殘りたる雪かとぞ見る」 晩櫻。

おそ-し 御祖師 (名) そし(祖師)の尊稱。眞宗・日蓮宗などにて、宗の開祖をいふ。

おそし 遅 (形一) ㊀早からず。神代紀「何來之晚(オソクイタリシ)也」 古今(聖)「おそく出づる月にもあるかな、足曳の山のあなたも惜しむべらなり」 綜紀(後)「後れたり。明に合はず。おくる。「時既におそし」」 ㊁後れた。狂言(同)「表から出ましたならおそからうと存じ、裏道へむけて追っかけまするとて」 ㊂鈍し。のろし。

おそき-とし 遲年 時候の後れたる年。宇津保(國譲)「かくて、年いとおそき年にて、三月かみの十日ばかり花さかりなり」

おそし 悍 (形) ㊀おそろし。剛情なり。おずし。おぞまし。宇津保(上)「かの事はおどし・そらごとにあらじ。うちの后、いとおぞく心かしこくおはし給ふ」 源(東屋)「物づつみせず、はやりかにおぞき人にて」 ㊁わるがしこし。ずるし。五十年忌歌念佛「そちがこんどのおぞい仕樣、魔法でもかなふまい」

おそし 鈍 (形) 〔おそしの轉〕心にぶし。のろし。おぞまし。萬葉「やましろのいはたの森に、心鈍(オソ)たむけしたれや、いもにあひがたき」

おそ-ぞ 遅 (自動) 遲くなる。後る。延引す。宇津保(俊蔭)「あしたに見て、夕べのおそなはる程だに、紅の涙をおとすに」

おそ-なへ 御供 (名) ㊀そなへもち(供餅)の一名。 ㊁神佛への供物。

おそ-ねり 遲練 (名) 練歩の極めて遲きもの。(醒睡笑)

おそ-ば 鰌鹵 (名) やへば(八重齒)に同じ。おさへば。和名抄「鰌齒。蒼頡篇云鰌(駑鈍)(ヒ)齒重生也」

おそ-ば 御側 (名) ㊀そば(側)の敬語。主君などの側。大鏡「狂言(花子)妾はこなたのおそばを、片時も離るることはなりませぬ」 同(堀)「わどれうがおそばに居て、お取りなしを云うてくるるによって」 ㊁主君の側に近く仕ふる役の稱。近臣。侍臣。近侍。

おそ-はぐ-とり-とりつぎ 御側御用取次 (名) 江戸幕府の職名。常に將軍に近侍して、御用部屋より上申する文書の取次を掌る。政務の機密に關かるを以て、極めて權勢あり。

おそば-ごようにん 御側御用人 (名) そばようにん(側用人)に同じ。

おそば-さらず 御側不去 (名) 主君の御側を去らぬこと。君寵厚きこと。

おそば-しゅう 御側衆 (名) 武家時代の職名。將軍に近侍するもの。古くは議奏をもいへり。

おそば-づき 御側附 (名) じじん(侍人)。おそば。

おそば-つづき 御側續 (名) こなほし(小直衣)の異名。

おそば-ぶ (自動) そばふに同じ。いそばふ。落窪「おそばへて、あれおしこぼちてんと、腹立ちのしれば」

おそ-はやも 遲早 (副) 遲くとも早くとも。萬葉「於曾波夜母(オソハヤモ)なをこそ待ためむかつをの、しひのこやでのあひはたげはじ」

おそ-ゆ (自動) おそばふに同じ。今昔「おそばえたる者の、口聞ききらきらしく」

おそ-ばる 慄 (自動) 夢の中に、怖ろしき物事に侵さる。宇鏡「慄(ヒ)」 竹取「内外となる人の心ども、物におそはるるやうにて」

おそ-ひ 襲 (名) ㊀うはぎ(表著)。宇津保(俊蔭)「御おそひは、いづれをか奉らん」 枕「わらはのあこめのうはおそひは、何色につかうまつるべき」 ㊁上を覆ふもの。枕(ものはじめ)「むしろはりの車のおそひ」 ㊂屏風のふち。榮華(玄蕃)「屏風中略へりには中略おそひにはみな蒔繪したり」

おそ-ひ-ぎ 襲木 (名) 屏風のおそひとする木。類聚雜要「五尺屏風十二帖中略襲木廿四筋、長十二、横十二、墨塗中略襲等」

おそ-ひ-の-ざ 襲座 (名) 兜の名所。ふきかへし(吹返)に同じ。

おそ-ふ 壓 (他動) 〔前條の轉〕 ㊀衣を重ねて著る。 ㊁官祿・家系など承け繼ぐ。繼ぐ。 ㊂不意に敵に攻めかかる。俄かに攻めて取る。繼體紀「筑紫磐井反、掩有(オソフ)西戎之地」 同「掩(オソフ)火豐二國勿使修織」 落窪「ろなうえれいとふびんなる夜なめりかし」

おそ-ぶらふ (他動) 古語。次條の延。

おそ-ぶる (他動) 古語。おす(押)に同じ。萬葉「誰れぞ、此の屋の戸、於曾夫流(オソブル)にふなみに我がせをやりていはふ此の戸を」

おそ-べ-ご 御副子 (名) 昔、禁中にて、節分の夜、土器に牛蒡を入れ、其の上に小刀を添へて出だす、其の小刀の稱。(醒睡笑)

おそ-べる (自動) およる。おやすみになる。膝栗毛「もうおそべりなさいませ」

おそ-ぼる 襲 (名) ㊀うはぎ(表著)。宇津保(俊蔭)「御おそひは、いづれをか奉らん」 ㊁時節に後れて種を蒔くこと。天神記「いや此の方に先が有る。疾うからさうは言ひもせで、まちっと、此れは晩蒔の麥畠の轉び寢の」 ㊂呼機に後れて事を爲すこと。傾城買二筋道「手前が不慈さゆゑ、おそまきながらせいたのだ」 ㊃小兒の智慧の發達おそきこと。

おそ-まし 悍 (形) おぞし(悍)に同じ。おずまし。源(椎本)「かくおぞましくは、いみじき契り深くともたえて又見じ」 增鏡「いづくにも守護といふものの、目代よりはおぞましきをす丞たれば」

おそ-ましし 鈍 (形) おぞし(鈍)に同じ。

おそ-ましし 悍氣 (副) おぞましさう。おぞましきさま。

おそ-ましし 鈍氣 (副) おぞましさう。おぞましきさま。

おそ-ましし 悍 (名) 悍(ヒ)くある度合。おぞくあるさま。

おそ-ましさ 鈍 (名) 鈍(ヒ)ましき度合。おぞましきさま。

おそむ (自動) ㊀おそる(恐)をいふ、尾張國の方言。(俗語考) ㊁目さむ。薩摩・肥前の方言。(同)

おそめ-がだ 於染形 (名) 麻の葉の紋の異名。文政の季年大阪にて俳優嵐璃寛が妹背門松の狂言に、處女阿染に扮する時用ひし故に名づく。(守貞)

おそ-もみぢ 遲紅葉 (名) 時節に後れて色づく紅葉。定家自歌合「みぞれふる山の夕べ」 冬の夕べ。

おそ-よか (副) 古語。うるはしく。にほひやか。つややか。宇鏡「嬋娟(美麗)(ヒ)」 宇治拾遺「嬋娟不交、おそよかなる」

おそらく 恐 (副) 〔おそるの延〕次條に同じ。

おそ-ぼさき 遲蒔 (名) 時節に後れて種を蒔くこと。

れまいと思ふか、恐らく、その傘の一本や廿本は切り折ってお目にかけう」

おそらくは 恐 (副) おほかた。多分。下に推量の語を承くるを例とす。「恐らくは然らん」狂言附子「ひさびさ難行・苦行を致したによって、おそらくは、空飛ぶ鳥も祈り落とすことぢや」

おそれ 恐 (名) 恐ること。おそれ。土佐日記「此のわたり、海賊のおそりありといへば、神佛を祈る」

おそる 恐 畏 懼 (自動ヤ) 同じ。崇神紀「晨興夕惕、誥誡神祇」古今序「且は人の耳におそり、且は獸の心に恥ぢ思へど」宇治拾遺「御門いみじくおぢおそり給ひけりとなん」

おそる 恐 畏 懼 (自動ラ) 一先方の優れたるを見て、心ひるむ。おづ。ことはがる。大和物語「近江守いかにきこしめしたるにかあらんと、なげきおそれしたるに」二長「しと感ず。恐懼す。狂言鎧「鎧(恐れてござる。床几にかけて讀ましよ」

おそる-おそる 恐恐 (副) おそれおそれ(恐恐)に同じ。

おそれ 恐 (名) 一恐ること。おそれ。著聞「おそれをなして、人にもかくともいはず」二かしこまること。恐懼。大鏡「狂言「權現への恐れも御座るによって、まづ此の度は許さうと存ずる」孕常磐「知らで恨み恐れの段、眞っ平御免とばかりにて」三うれへ。心配。「暴風雨の度にあり」

おそれ-いる 恐入 (自動ヤ) 一いたくおそる。著聞「にらみて立てり。此の法師いよいよ恐れ入りたり」二過ちを悟りてわびいる。謝罪す。服罪す。砂石集「此れまでも申し入れ候事、恐れ入りたる由御披露候へとて、われと問注に負けて」三おそれ多し。憚り多し。恐縮の至りなり。「君を勞するはおそれいる」

おそれ-おそれ 恐恐 (副) おそれつつ。おそるおそる。著聞「あれは何者ぞと問ひければ、おそれおそれ申しけるは」

おそれ-おほし 恐多 (形ク) いともかしこし。甚だもったいなし。誡安室「恐れ多き申し事にて候へども」

おそれ-がましい (形ク) おそれ多きやうなり。誡川柳姫「それは恐れがましく候」唐船噺今國姓爺「恐れがましや、兄ながら天が下しる御身より、先に逃みて」

おそれながら 乍恐 (副) 畏「と思へど。憚りあれど。もったいなけれど。宇治拾遺「おそれながら、此れを承りに又參りて候なり」東鑑十一建久三「乍恐所言上候」也」

おそれる 恐 (自動ラ) 一おそる(恐)の口語。二おそれいる。いたみいる。恐縮の至りなり。「あまり優遇されるのはおそれる」

お-そろ 恐 (名) さうめん(素麺)をいふ、女詞。

おそろし 恐 (形シク) 一おそるべし。こはくあり。竹取「さすがにおそろしく病つきて」二甚し。大層なり。えらし。大鏡「狂言「久しう見ぬ中に、恐しい山伏におなりやったなら」おとろし(梁塵秘抄)「えずい(西國語)おかれい(伊勢)おそおたい(狂言)おっかない(膝栗毛)」(近世語)おそがい(近世語)上方語(膝栗毛)(武藤)

(俗)おそろしい時の念佛 苦しい時の神頼みに同じ。くるし(苦)の條をも見よ。

おそろしがる 恐 (自動ラ) おそろしと思ふ。

おそろしげ 恐氣 (副) おそろしさう。おそろしきさま。枕「荒海のかた、生きたるものどものおそろしげなる、手なが・足ながをぞ書かれたる」

おそろしさ 恐 (名) おそろしきこと。おそろしき度合。

お-だい 御臺 (名) 一飯・菜等を載する臺。食膳。二めし(飯)をいふ、女詞。大鏡「狂言「白はんとは、白いおだいの事」

おだい-がひ 御臺匙 (名) いひがひ(飯匙)の異名。

お-だい-くわん 御代官 (名) 一鎌倉・室町時代、將軍に代はりて事を執るもの。執權・管領の類。又臨時任命の追討使をもいへり。二江戸時代、幕府の直轄地を支配するもの。

お-たいこ 御太鼓 (名) 一たいこもち(幇間)に同じ。二次條の略。

おたいこ-むすび 御太鼓結 (名) 婦人の帶の結び方の名。かけを結び目の中に入れて、太鼓の胴の如く丸く結びたるもの。おたいこ。

お-だいし 御大師 (名) こうぼうだいし(弘法大師)の尊稱。

お-だい-づけ 内裏縫風の附屑。狂言「鳥追「類に おだいづけと申すものを附けまする」

お-だいはう 御大方 (名) 貴族の母堂をさしていふ語。

お-だい-びつ 御臺櫃 (名) 一めしびつ(飯櫃)の異名。二ちぎばこをいふ、京阪の方言。

お-だいみやう 御大名 (名) 癩病の血脈ある者の家。家筋で人がよけるといふ譬へ。

おたが-じゃくし 御多賀杓子 (名) (近江國犬上郡多賀神社より出だすより稱すといふ)一曲がりたる木にて製せし杓子。尤册子(ぢばこなど)の「鋼のつる、おだがじやくしに、つむのほ」二おたまじやくし(御玉杓子)の一名。

お-たがひ 御互 (名) たがひ(互)の敬語。あひたがひ。

お-たから 御寶 (名) 一きんせん(金錢)の異稱。二たからぶね(寶船)に同じ。

おたぐら (名) 芝居にて用ふる鬘の名。男の鬘の一種にかたどる。

お-たさん (名) おたふく(阿多福)に同じ。「飴の中から、おたさんがとんで出た」

お-たし 穩 (形シク) 安らかにおちつきてあり。おだやかなり。源氏「かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ」同蜻蛉「おだしう思ひなりにて侍りしこと」

お-たち 御立 (名) 人の出立また歸ることの敬語。

おだつ (他動ラ) 惡意にて誘ひ勵ます。ややそのかす。煽動す。教唆す。

お-たづね 御尋 (名) たづぬることの敬語。狂言「居長「申し申し、お尋ねの居枕は是れに居りまする」

おたづね-もの 御尋者 (名) 官にて、探偵中の人。陸摩歌「「かけ落人のお尋ね者」

おだて (名) おだつること。煽動。教唆。

おだてる (他動ヤ) おだつの口語。

お-たのみ 御賴 (名) 一たのみ(賴)の敬語。御依賴。二室町時代、八朔に、物を公方樣へ進上すること。(貞享)鎌倉年中行事「在國之方方にも、皆皆御賴み進上」

おたのみ-いらひつ 御憑右筆 (名) 次條に同じ。

おたのみ-ぶぎやう 御憑奉行 (名) 室町時代の職名。幕府へ諸家より進物ある時、返し物を賜はることを沙汰する奉行。おたのみいうひつ。

お-たばこぼん 御烟草盆 (名) 少女の髪の結ひ方の名。左右の髪を、横に變方より合はせて、その上にきれをかけたるもの。昔の烟草盆のつるに似たるよりいふ。

(おたばこぼん)

おたーばぶ (自動ヤ) (おたは音ばぶは呼ばぶの義)(雅語)古語。音なふ。萬葉「伊香保ろに天雲いつぎ、庭沼づく人と於多波布(おたばぶ)、いざ寢しめとら」

お-たび 御旅 (名) 一祭禮の時、神輿の御旅所に鎮座の間。耕縮紬卯月紅葉「座摩のおたびに廿二社、拜み納むる袖神樂」二昔、江戸本所御船蔵前町にありし娼家。寛天見聞記「本所御船蔵前町を、土俗あたけといふ中軒並の水茶屋あり。此の茶店の後に、お旅とて五六軒の娼家あり」

おたび 穩 (副) 古語。おだやかなること。續紀「心毛安久於多比(おたび)て在止」

おだか (副) 古語。おだやかに同じ。名義抄「雅(おだか)」

おだひし 穩 (形シク) 古語。おだやかなり。おだし。續紀「獄(美明)奏、窟太比之(おだひし)多能母志美保之大坐坐閉(雅)」續後紀「賢明夙彰、仁孝毛(雅)厚久之(おだひし)、太能毛之久於太比之久(おだひし)在」

おたびしょ 御旅所 (名) 祭禮の時、神輿渡御ありて、假りに鎮坐する所。おたびのみや。おたびどころ。桂川地藏記「於西七條松尾御旅所、北野伏拜之邊一面」壽門松「我れ等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のお旅しょといひさうなすまひ」

お-たびーどころ 御旅所 (名) 前條に同じ。誡花「神の御幸なるお旅どころを伏し拜み」

おたびーのーみや 御旅宮 (名) 前條に同じ。

おたびら-かく (句) あぐらをかく。あぐむ。南都の方言。物類稱呼 あぐむ(足組)を見よ。

お-たふく 阿多福 (名) 一おたふくめん(阿多福面)の略。二おたふく面の如き顔の女。又女を嘲りていふ語。おかめ。三平二滿。

おたふく-あめ 阿多福飴 (名) 細長くしたる飴の中に、おたふく面の形をあらはしたるもの。何處を切りても此の模樣あらはる。

おたふく-ぐるま 阿多福車 (名) [阿多福の如く横幅廣ければいふ] 二人乘の人力車の稱。

おたふく-ぐるみ 阿多福胡桃 (名) [植]ひめぐるみ(陳倉胡桃)の異名。

おたふく-ぐるめ 阿多福鰯 (名) 肉を横に引き伸ばして、四形に製したる鰯。

おたふく-そらまめ 阿多福蠶豆 (名) おたふくまめ(阿多福豆)に同じ。

おたふく-たいこ 阿多福大根 (名) [植]菜蔬(ナタネ)の一種。

おたふく-づら 阿多福面 (名) おたふくの面相。又、婦人を罵りていふ語。

おたふく-まめ 阿多福豆 (名) そらまめの實の、よく太りたるもの。おたふくそらまめ。

おたふく-めん 阿多福面 (名) [乙前(ヲゼン)の面を多福の義にとりていふ]逸話笑 四顔にて、鼻低く頬高き女の假面(ノウ)。おかめ。おふく。おとごぜ。おとごぜのめん。

お-たぶつ 御陀佛 (名) [阿彌陀佛を唱へて往生する義] 一死ぬること。往生。二物事の終局となりたること。浮世風呂「ははあ、惜しい成金を取られたかい、是れにて將棊はおだ佛かい」

おたま 御玉 (名) 一次條の略。二けいらん(雞卵)をいふ、女詞。三ぶち(扶持)の異名。昔、或る地方にて武士の語。

おたま-じゃくし 御玉杓子 (名) 一しやもじの小さきもの。おたがじやくし。二(動)蛙(ハ)類の幼蟲。形、おたまじやくしに似たるより名づく。かへるこ。蝌斗。

(諺)お玉杓子が蛙になる 見ばえなく變化するに譬ふ。

おたまや 御靈屋 (名) 貴人の靈を祭れる殿。廟。

おため 御爲 (名) 一ため(爲)の敬語。誡「「衆士の焚く火はおためなり。よく寄りてあたり給へや」(御移)をいふ、西京の方言。二おうつり。公だてをすること。三主人に奉

おため-がほ 御爲顔 (名) 主人の利益をはかる如き顔つき。淀鯉出世瀧徳「「お爲顔で且那をひづめ、家久しい我れ等を押し退け」

おため-こかし (名) 人の爲めに圖る如く見せかくること。傾城買二筋道「「二才野郎を見るやうに、おためごかしの意見もいはれず」

おため-もの 御爲者 (名) 主人の爲めになるやうに見せて、實は益らざるもの。不住同心物語「なかんづく當世は、いづれの御家、いづれの御屋形にも、出頭衆の、やれ御爲者の、やれなどて、くちばしきいたる人を、古來よりの家老をも推しのけ」

おだ-やか 穩 (副) 一たひらかに事なきこと。やすらか。のどか。しづか。平穩。「天下おだやかなり」推古紀「季秋薄冷、尋何如「想清金(ヤウヤウ)」」二心のおちつきてあること。おだしく。おだひ。穩當。「おだやかな人」

おたらひ 御盥 (名) 女の髪の結ひ方の名。髪の毛を輪にして笄を通し、殘りの毛を笄に卷きつけたるもの。

(ひらたぶ)

おたん 御團 (名) 聖天の供物の稱。延命袋の形したる餡餅を油あげにしたるもの。

おたんちん (名) 人を嘲る語。のろま。まぬけ。東京の方言。

おち 落 (名) 一落つること。狂言「雷も頻りに鳴るは、おちはせまいか」二脱けたること。漏れたること。ぬけ。もれ。脱漏。遺漏。「髪の毛のおち」「おちなく行き渡る」三遺失物。四逃ること。脱走。平家「一門都落」五貶くなること。劣ること。六おちぶれ。零落。七結局の勝利。當たり。「おちをとる」八落語などの終局。九楊弓の賭弓などにて、二人づつ組合せを定むるに、人數奇數なる時、殘りたる一人の稱。二人分の役に當たらしむ。

お-ち 御乳 (名) うば。乳母。おちの人。丹波與作「お乳の育ての雛になれば、女でこそあれ、乳母が腹を切らねばならぬ」壽門松(御乳)「子供設けて二人が連れて、お乳がかたぐま、おてって が日傘」

おち-ち 祖父 (名) おほぢ(祖父)の略。

おち-あがる 落事 (自動ヤ) おちたり、又あがりたりす。著聞「はくの石飛び出でて、おちあがること鞠の如し」

おち-あざむ (他動ヤ) おそれて、驚く。宇治拾遺「その國の人人見て、おちあざ

むこと限りなし」

おちあし　落足（名）一落ち行く足どり。平家二落足」吉野都女楯三臆病神に眼もくらみ、二人を千騎・萬騎と見て、逃足・落足」二落ち行く時。吉野忠信「四國八島の落足に、海底に捨てられしを」三水の、引ぎはになること。平家九「河内路へや廻はるべき、水の落足をや待つべき」

おちあな　穽に同じ。

おちあひ　落合（名）一おちあふこと。一つ處にて出會ふこと。新六帖二狩りくらす山のを鹿のおちあひに、とも矢たばさみ駒はやむなり」二川と川との、一つに出會ふ處。新六帖三み山川かなたこなたの落合の、みなわ隠れにめぐる流れ木」

おちあひ-めをと。**落合夫婦**（名）できあひのめをと。野合の夫婦。河内名所鑑「星や水におちあひめをと天の川」

おちあひ-やき　落合焼（名）伯耆國會見郡落合村などより製出する粗製の陶器。寛政頃、同村の人松浦助六の創めたるもの。

おちあふ　落合（自動四）一一處にて出會ふ。平家八足「侍一人附け奉りたりけれども、是れも最後の時は落ち合はず」二川など、一つの地點に流れ落つ。三一時に込みあふ。傾城貫二筋道「あいにく、客人がおちあひまして、勝手が取りこみ」四命のままに承引す。うべなふ。同意す。東鑑文治元年四月十八日「口の落ち合はぬさま、猶奇怪也」

おちあふる（自動下二）おちぶる。零落す。源經馬「行く末、遠き人は、おちあふれてさすらへんこと、これのみこそ、げに世を離れんきはのほだしなりけれ」

おちあゆ　落鮎（名）八九月頃、川瀬の砂礫の間に卵を產みて後、流れに隨ひて下だり死する鮎。魯語記

おちい（名）〔おちの延〕うば（乳母）をいふ。言

おちいたじき　落板敷（名）一段低き板の間。石清水放生會記「大外記師豐、起ち座降二西落板敷一往二南大床一跪」

おちいり　落入（名）演劇にて、手負・病者などが、絶息するさまをなすこと。

おちいる　落入　陷（自動四）一落ちて入る。はひりこむ。はまる。景行紀「自投二于谷一而死之」枕「えんだう敷きたれば、皆おちいりて騷ぎつるは」二おちこむ。深く凹む。陥沒す。源髭二見かへりたるまみ、いたう見のべたれど、まかははいたく黒みおちいりて」三攻め落とさる。沒落す。「城おちいる」四計略にかかる。はまる。

おちうす　落失（自動四）逃れ隠る。逃亡す。平家九足「其の勢皆落ち失せ、討たれ」

おちうせる　落失（自動下一）前條の口語。

おちうど　落人（名）〔おちひとの音便〕人目を忍びて逃げ行く人。脱走人。逃亡者。保元「落人となりぬれば、何事も思ふに叶はぬものなれば、降參せんと宣ひて」東鑑文治元年六月「於今度落人等者、至二郎等一皆可二召し進一之」

（誹）**落人は草木にも心おく**　次條に同じ。晉書「秦苻堅傳」秦苻堅、淝水兵伐二東晉一中略已而秦兵大潰中略堅與二苻融一登二城而望二王師一中略又北望八公之草木皆類二人形一顧謂融曰、此亦勁敵也、何謂少乎」

（誹）**落人は薄の穂にもおそる**　人目を忍びて落ち行く人は、心おちつかされば、物に驚き易し。國姓爺後日合戰「げに、落人は薄の穂にも恐るるとは、甘輝が身に知られて候」

おちうなぎ　落鰻（名）秋、川の流れにしたがひて下だる鰻。

おちうを　落魚（名）死にたる魚。

おちえん　落縁（名）他の部より、一段低き縁側。幸若舞曲高館「それへそれへと仰せければ、承ると申して、おちえんにつつと上がり」

おぢおそる　怖恐（自動四）次條に同じ。宇治拾遺「御門いみじくおぢおそり給ひけりとなん」

おぢおそる　怖恐（自動下二）甚しく恐る。宇治拾遺「大宮司の威勢國司にもまさりて、國の者どもおぢおそれたりけり」

おぢ-おち　落落（副）おちつきて。安心して。「下に反語をおく」「おちおち話も出きぬ」

おぢ-おち　怖怖（副）恐れ恐れて。おづおづ。

おぢ-おち　おどおど。おそるおそる。

おぢ-かかる　落掛（自動四）落ちんとす。竹取「神はおちかかるやうに、ひらめきかかるに」

おぢ-かさなる　落重（自動四）落ちたる物の上へ又落ちて重なる。諸葛孟「馬の上にてひっ組んで、波うちぎはに落ちかさなって」

おぢ-かしこまる（自動四）おそれつつしむ。おぢかしこむ。仲哀紀「見二御船不一進惶懼之狀」宇津保藤原忠「おとどおぢかしこまりて、うけたまはりぬ」蹴鞠「武むぢ-かしこむ（自動四）おそれつつしむ。おぢかしこまる。神武紀「慄然改容」

おぢ-かた（ヨリカタ）**方**（名）落ちんとする頃。落ちかかるとき。枕「お前の梅は、西は白く、東は紅梅にて、少しおちかたになりたれど」

おちかひ　落買（名）落髪を買ひあるくもの。

おちがみ　落髪（名）抜けて、おちたる頭髪。ぬけげ。拾遺「朝な朝なけづれば積もるおち髪の、亂れてものを思ふころかな」

お-ちぎ　御直（名）ぢき（直）の敬語。直接。曾我會稽山「此の度の御狩りにも、假屋奉行・夜廻はり、おぢきの御用承り」

おちぎ-しゅう　御直衆（名）ぢきさん（直參）に同じ。曾我扇八覺「御直衆」ヂキサンか、陪臣か、晴くて面は見えねども」

おちーくさ　落草（名）鷹の、鳥を追ひ落としたる草原。風雅冬「御狩りするかた山かげのおち草に、かくれもあへずたつきぞすかな」新六帖三野を寒み鷹もま白にふる雪の、おち草とめてあさる狩人」

おちーぐち　落口（名）落ち始め。拾遺雜冬「足引の山の木の葉のおちぐちは、色のをしきぞあはれなりける」

おちーくび　落首（名）一首を下に傾くること。うちくび。斬首。二首を斬ること。教訓抄七「あふむきたるをば正念なく見ゆと云ひ、おちくびなるをば物を求むる歟と笑ふ」

おちくぼ　落窪（名）床などの低く下がりたる處。落ち窪みたる處。落窪「寢殿のはなちいでの、又一まなるおちくぼなる所の二間なるに、なん住ませ給うける」

おちーぐり　落栗（名）一落ちたる栗。夫木「風まちてひろふとすれど袖の上に、かかる木蔭の露の落栗」二次條の略。源行幸「おちぐりとかや、何とかや、昔の人のめでたうしける、あはせのはかま

一具」

おちぐり-いろ　落栗色（名）一染色の名。濃紅の黒みたる色。源氏男女裝束抄「おちぐり色とは、濃き紅の黒み入りたる程に染めたるをいふ」二襲の色目の名。表は蘇芳の黒みたるに、裏は香色なるもの。又表は濃紅に、裏は香色。

おちーけ　落毛（名）おちがみ（落髪）に同じ。ぬけげ。宇津保藤原「御ぐしを掻きなでて見給へば、おちげもなくめでたし」

おちーけ　怖氣（名）おづる心。おそれ。ひるみ。臆病氣。恐怖心。

おちーけ-たつ　怖氣立（自動四）おぢかくる。あいといふのも、おぢ氣立ち」

おちける　怖（自動下一）怖れ縮む。おづ（怖）。臆す。長縮す。

おち-こ。**御兒**（名）一僧に侍る童。美少年。狂言惡「此のあたりの若い衆が、おちごの事を聞き及んで、盃を致したいと云うて參られた」大鏡狂言若「今日參るお寺の御ちごが、花好きでござるによって」二祭禮などに、美服をつけて列に加はる童。三おちごわげ（御兒髪）の略。ちごわ。

おちご-なり　御兒成（名）祭禮などに、おちごの行列をなして練り行くこと。狂言酔「清水寺には、おちごなりとやら、かしましなりとやら有ると云ふが、そなたは望みはおじやらぬか」

おち-こぼれ　落零（名）一零落ち散りたるもの。二あまりもの。殘物。遺利。

（誹）**落ちこぼれは沙彌のもの**　和尚の收益の殘餘は沙彌の有。和歌民のかまど「落ちこぼれは沙彌のもの」詩經小雅「彼有二遺秉一、此有二滯穗一、伊寡婦之利」

おち-とみ　落込（名）一海船の舵の小名。船の落込床（ヒキト）に欲まる所。おちつまり。はまる。二深くくぼむ。陥沒す。「まぶたがおちこむ」三落ち來たる。「懷へ金がおちこむ」

おち-とろび　落轉（名）一落ちて轉ぶこと。落つることと轉ぶこと。二不運に會ふこと。落つることと。衰へ。おちめ。

おちご-わけ　御兒髪（名）ちごわ（兒輪）に同じ。おちご。

おち-ざま　落方（名）落つる時。おちしな。芭蕉句「落ざまに水こぼしけり花椿」

おち-しな（名）おつる際。おちんとする時。おちざま。

おち-しひ　落椎（名）落ちたる椎の實。諸國「拾ふ木の實は何何ぞ。古へ見馴れし車に似たるは、嵐にもろき落椎」

おち-しほ　落潮（名）引潮。干潮。（上潮（アガシホ））の對）諸國「引きつるる湊の舟の落潮に、浮きたち鳥や騒ぐらん」

おち-せい　落勢（名）逃げおつる軍勢。三河物語「森山を落ち而陣る。森山も落勢なれ共、心も替はらずして」

おち-そ-ぶ　落添（自動四）落ち加はる。落窪「涙川我が涙さへおちそひて、君が袂ぞ淵と見えける」

おち-たぎつ（自動四）水、高き所より落ちてたぎる。祝詞式大祓「佐久那太理落多支津（ヤタギツ）速川と、於知多藝津（ヤタギツ）浙きふかちに」

おち-たぎる（自動四）前條に同じ。續後拾遺「みよしのの瀧の白泡落ちたぎり、吹けども風の扉もきこえず」

おち-ちる　落散（自動四）落ちてちらばる。散逸す。源少女「書きかはし給へる文どもの、心をさなくて、おのづからおちちるをりもあるべ」

おち-つき　落著（名）一おちつくこと。二旅宿などに到著して、先づ飲食する物。新六帖三あづま路のうまやうまやのおちつきに、人もすすめぬ君がわりなさ」傾城酒呑童子「嫁入り中略三種の肴が入ります。落つきはお雛煮」三すわり。「おちつきのよい茶碗」四取引所の語。相場の劇變後、人氣のしづまること。

おち-つき-どころ　落著所（名）おちつく所。居つくべき所。うたたねの記「おちつき所のさまを見れば」

おち-つき-はらふ　落著拂（自動四）極めて落ちつく。沈著にしてあわてず。

おち-つく　落著（自動四）一住居定まりて居著く。居處を得て留まる。安堵。濱松三若君具し奉りて、里にぞいそぎおちつきにける」更科日記「からうじてのぼりて、西山なる所におちつきたれば」二一定の所に永く勤め居る。三しづまる。鎮定す。物事の結局がつく。落著す。一蜉蝣おちつく」四歸著す。歸す。「おちつく處は一つ」五心安まる。安心す。狂言鶯「やれやれ、そなたの話を聞いておちついた」六物事を爲すに輕率ならず。言語・動作、沈著なり。大鏡狂言居長「そこな人。何事ぢや。何事とはおちついた程に合ふ。浮華ならず。穏かなり。八相場が變動なきに至る。

おち-つく　落著（他動四）落ちつかしむ。鎮む。安む。定む。「氣をおちつけて行く一代女「分別をおちつけて行くほどに」

おち-つける　落著（他動下一）前條の口語。

おち-つ-ぎり（名）おちこみ（落込）に同じ。

おち-つ-まる　落詰（自動四）落ちて物の間にはさまる。宇治拾遺「あかるくひの中におちつまりて、え傷かぬ男あり」

おち-つ-もる　落積（自動四）落ちてつもり重なる。古今序「筑波根の峯のもみぢばおちつもり、知るも知らぬもなべてかなしも」

おち-ど　落度（名）をちど（越度）の訛り。あやまち。百合若大臣野守鏡「君も討死ましまし、國も別府に乘っ取られ、皆これ我れが落どなり」

おち-と-どまる　落止（自動四）散りて後へ殘り留まる。源孝謙「女中略おちとどまりて、人の御ためもいとをしからん」

おち-と-どまる　落留（自動四）一殘り留まる。殘りて居る。後撰雜四「かひもなき草の枕におく露の、何に消えなでおちとまるらん」源紅葉「内侍はあさましく覺えければ、おちとまれる御指貫・帶など、つとめて奉れり」二殘りて永く傳はる。源須磨「うまやのをさに、くしとらする人もありけるを、ましておちとまりぬべくなんおぼえける」

おち-なげし　落長押（名）床板の一段低く落ちたる所なるべし。禁旅疑抄「御倚子の通りに、おちなげし二間あり」

おぢ-なし　怯（形）おづること甚し。いたく臆病なり。甚だ怯懦なり。雄略紀「舍人性懦弱（オヂナシ）、竹取「おぢなきことする舟人にもあるかな」名義抄「怯（オヂナシ）」

おち-の-ひと　御乳人（名）一貴人の乳母。おち。今鏡「きのことて、おちの人と聞こえしがをとこにて」二專ら貴族の兒女の保育に當たる者の稱。（おさしと區別していふ）丹波與作「おさし・抱き

うば・お乳の人」

（諺）お乳の人の乳のあがりたる如し　全く用を爲さぬやうなりたるに譬ふ。毛吹草「お乳の人の乳のあがりたる如し」

おち-のびる　落延（自動上）　次條の口語。

おち-のぶ　落延（自動上）　おちて行く。諸国物語「紙縒を討つほどならば、何とて落ち延びざりけるぞ」

おちば　落葉（名）　一地に散り落ちたる葉。ちくえふ。源氏若菜「もろかづら落葉を何に拾ひけん、名はむつかしきかざしなれども」寶治百首「この里はしばしとる山の遠ければ、竹のおちばをからぬ日ぞなき」二落鳳（ヤキ）を、木の葉の落ちたるにたとへていふ語。源氏賢木「朝臣や、さやうのおち葉をだにひろへ」三次條の略。

おちば-いろ　落葉色（名）　枯れたる落葉の色。褐（ヒ）色に、黄赤を帶びたる色。おちば。

おちば-ごろも　落葉衣（名）　一落葉の點在する如く、衣上に映ずる月影などの模樣。一說、落葉を集め綴りたる仙人の衣。後撰「又、後撰の」は誤りにて、菅家萬葉によるべしともいへり。紀神「後撰秋中」秋の夜の月の影こそ木の間より、おちば衣と身にうつりけれ（おつればきぬと見えわたりけれ菅家萬葉）」二落葉の、衣の上に散りかかるをいふなるべし。謠曲砧「おとづれは、松にこと問ふ浦風の、落葉衣の袖そへて」

おち-つ　落果（自動上）　全く落つ。すっかりよわる。いたくおちぶる。

おち-はてる　落果（自動下）　前條の口語。日本武尊吾妻鑑「こちや、手も力も落ちはてた」

おちば-の-ごろも　落葉衣（名）　おちばごろも（落葉衣）に同じ。落書鑑題「落葉の衣はかさぬるといへども、寒風なほふせぎがたく」

おちば-ぶね　落葉船（名）　水に落ちたる葉を、船に見たてていふ語。日本振袖始「酒折の山は霞の海深く、嵐漕ぎ行く落葉船」

おち-ひさい-の　（名）　他人の小兒をいふ敬語。おこさま。

おち-ひす　（自動四）　古語。恐れひそむ。皇極紀「盜賊恐懼（ヒスル）、路不拾遺」

おち-びと　落人（名）　おちうど（落人）に同じ。

おち-ふし　落伏（名）　鷹狩に、鳥飛びのがれて、草中に落ちて伏し居ること。和訓栞

おち-ふだ　落札（名）　入札に當籤したること。

おち-ぶる　零落（自動上）　一貧かりしもの賤しくなる。富めりしもの貧しくなる。零落す。落魂す。宇津保祭使「おちぶれたる人もこれを聞けば、みな忘れて、おもしろくたのもしく、よはひさかゆることうらから、世におちぶれて、受領の北の方のはなり給へるありけり」名義抄「落魂（オチブレ）」二品格下がる。ねうち少なくなる。いやし。砂石集「酒飲むなんど思はば、無下におちぶれたり。貴げに思はれて、布施のかさも取らばやと思ひて、斷酒にて候と答ふ」

おち-ぶれ　零落（名）　おちぶること。零落。落魂。失意。博多小女郎波枕「今おちぶれの身と知らば、さっと淺黄に染めうもの」

おち-ぶれ-はつ　零落果（自動下）　いたくおちぶる。全く零落す。謠曲「さしも覩ひて、月の春の花若とかしづくかひもなく、おちぶれはててあさましや」

おち-ぶれる　零落（自動下）　おちぶる（零落）の口語。

おち-ぼ　落穂（名）　刈りたる五穀の穂の、地に落ち散りたるもの。勢語「うちわびておちぼ拾ふと聞かませば、われも田づらにゆかましものを」

おち-ま　落閒（名）　一他の室よりも、床（ユカ）の一段低き所。東山殿御座敷飾次第「小川御所は對面所、御五間東のおち閒」女殺油地獄「落閒にがばと突き落とせば」二きりおとし（切落）に同じ。見た京物語「おちまとて、江戸のきりおとしの如く、見物所あり」

おち-まさる　落增（自動四）　一層多く落つ。拾遺雜五「閒なれば河風いたく吹く時ぞ、浪の花さへおちまさりける」

おち-まどふ　怖惑（自動四）　恐れて爲すべきわざを知らず。恐れ迷ふ。宇津保俊蔭「下「み氣色のいとおそろしかりつるにおちまどひて、物も聞こえてさぶらひ給へ」

おち-まふ　落舞（自動四）　水、高きより落ちて、うづまきあがる。重之集「最上川おちまふ瀧の白絲は、山のまゆよりるにぞありける」散木集題「上川の瀨のおちまふ水のゆくゑも、思ふ心を人にいはばや」

おち-むしゃ　落武者（名）　軍敗れて逃げ落つる武者。天正記「湯書上の「おちむしゃに於いては、一人ものがさず是れを討ち」

（諺）落武者は薄の穂におづ　落武者は心臆せる故、疑心時鬼を生ず。狂言「落武者は芒の穂におづと申しまする。手柄を致した胸のだくめきも直らぬ所へ、餓鬼めと仰せられて御坐るに依って、よい肝をつぶいてござる」堀川狂歌集「落武者のおづるも道理薄の穂、入目をまねぐ鉾に似たれば」

おち-め　落目（名）　一おちぶれかかること。傾かんとする運命。五十年忌歌念佛「人は落目の志」二（商）貨物の量目が、其の詮狀に記載の量目より減じたること。通常買主の損失に歸するものとす。

（諺）落目に祟目　よわり目に祟り目に同じ。よわりめ（腐目）の條を見よ。

おち-もの　落物（名）　路などにおちたるもの。遺失物。皇極紀「路不拾遺（オチモノ）」

おち-や　御茶（名）　ちや（茶）の敬稱。狂言「右石「お茶の給仕を致したるをりに」

おちゃを-にこす　渴御茶　其の場をごまかしつくろふ。

おちゃを-ひく　引御茶　藝娼妓などの、客なくしてひまなるをいふ。貴、遊女の許にて、茶をたてしことあるよりいふと。雜語解

おち-や　（自動）　おぢやるの活用、おぢやれの略。狂言伯母「今年は中年「我が身には盛らぬほどに、かさねておぢや」

おち-やう　御孃（名）　一身分よき家の處女の敬稱。おぢやうさま。二他人の妻をいふ。上總國の方言。物類稱呼

おち-やうさま　御孃樣（名）　おぢやう（御孃）に同じ。

おち-やうぐち　御錠口（名）　（杉戸）を立て、錠を下ろす故にいふ。貴人の邸宅にて、表と奥との界に設けたる出入口。

おち-やうさま　御孃樣（名）　おぢやう（御孃）に同じ。

おち-やうさん　御孃樣（名）　前條に同じ。

おち-や-かた　御茶方（名）　茶道の事を掌るもの。狂言「「おお茶方の、あはれはかなき湯の中に」

おち-や-こ　御茶子（名）　芝居茶屋の女中をいふ、大阪の方言。

おち-や-こしやう　御茶小姓（名）　御茶の給仕をなす小姓。川中島合戰「お茶小姓がくつくつくつ、手を震はして茶碗の臺、溢れたゆたふ計りなり」

おち-や-しょ　御茶所（名）　おちやどころ（御茶所）に同じ。心中二枚繪草紙「「誘中お茶所の冥加錢、殘らずここに持ち集まり」

お-ちゃちゃら　（名）　口さきばかり調子よくいふこと。おべんちやら。

おち-やっぴい　（名）　多辯の小娘。嘲りていふ語。浮世風呂「うっちやっておきやあがれ、おちやっぴいめ」

おち-や-どころ　御茶所（名）　神社又は寺院に附屬し、參詣人に代はりて茶を神佛に供へ、又參詣人を休憩せしむる所。

おち-や-ない　（名）　「落ちは無いの訛り」若、京都にて、頭に袋をいただき、髮の毛の落ちを買ひあるき、かもじに製して賣買せし女。かづら捻り。鷹筑波「たけのかつらを持てるおちやない」

お-ちゃのこ　御茶子（名）　一ちやのこ（茶子）の敬稱。茶菓子。ちやうけ。二廓は諸國の立ち合ひ、常住切ってのはての、これ程の喧嘩はお茶の子、お茶の子、茶の子ぞや」

おちゃのこ-さいさい　おちやのこ（御茶子）に同じ。

おちゃのゆ-ぶぎやう　御茶湯奉行（名）　武家時代の職名。將軍の諸家に臨まるるを、諸家にて臨時に命ずるもの。將軍家へまゐらすべき茶の事を沙汰す。

おち-ひさ　御茶挽（名）　おちやをひきたる藝娼妓。

お-ちゃびん　御茶瓶（名）　少女の髮の一束。ちやびん（茶瓶）に同じ。

おちゃびん-つき　御茶瓶附（名）　遊廓の男。妻女をつれて游廓をひやかしあるく男。

おちゃ-まめ　御茶豆（名）　豆茶にする大豆。

お-ちゃや　御茶屋（名）　一茶の湯の室。二ふけ茶屋、又は料理店。

おぢやる　（自動四）　「お出でであるの約轉」おいでなさる。ござる。來らる。狂言文山「目出たうおじやる。おぢやらせませ」同浮世「夜が明けたらば、さうさう取りにおぢやれ」同風呂「はてさて、遠路の處をばおぢやってたもり」

お-おやれ　（名）　昔、宿驛などの、賤しき賣女。又、飯盛女。丹波與作「君・傾城と云ふ者は、此の類での王樣。それから段段ある内に、おぢやれの身には何がなる」

おち-ゆく　落行（自動四）　一逃げ行く。逃走す。保元「隱義「とくとくいづ方へも落ち行くべしと宣ひて」二結局其處に歸著す。成り行く。歸す。三おちぶるるやうになる。おちめになりゆく。源氏行幸「何事につけても、末になればおちゆくけぢめこそ、やすく侍るめれ」

お-ちょくろ　御直廬（名）　次條の略。走衆故實「永祿三年二月六日手午刻御參内有之「中興次御直廬、同朋「阿彌馬上、すあう・白袴」

おちょくろ-の-やく　御直廬役（名）　おものぶぎやう（御行奉行）に同じ。年中恆例記「正月十一日御參内次第事。一、御ちよくろの役と號して、同朋一人、長橋殿に伺候仕りて、御裝束以下取り扱ひ申すも也」

おちょよ　御千代舟（名）　ふなまんぢゆう（紛餓鬼）に同じ。俚言集覽「千代舟沖まで漕ぐはなじみなり」柳樽「お京都の方言。

おち-よぼ　（名）　十五六歳頃までの下婢。

おち-よぼ-からげ　（名）　ちんぢんばしょりに同じ。おしよぼからげ。京阪の方言。

おちる　（自動四）　おちいる（陷）に同じ。景行紀「自投（オチヲ）洞谷而死之」

おちる　落（自動上）　一おつ（落）の口語。二簿記にて、半期決算の際、本店と支店との間の勘定、正確に符合す。此の場合には、報告表より引き落とすを例とするよりいふ。三柔道の語。襟絞めなどにて、一時假死す。

おぢる　怖（自動上）　おづ（怖）の口語。

おちゐる　落居（自動上）　心しづまる。おちつく。竹取「ここらの日頃、思ひわび侍りつる心は、けふなんおちゐぬる」後撰雜三「宮仕へし侍りける女の、男につきて人の國におちゐたりける」

おち-ん　御賃（名）　小兒にくるる錢、又は菓子の類。京阪の方言。

おち-んこ　（名）　魚の子。貞丈雜記

おち-んこ　（名）　いんきやう（陰莖）をいふ、小兒の語。浮世風呂「兄さんのには似指（ヂ）があるが、親さんはねえの」

おつ　（名、副）　普通に異なりたること。妙なること。おつりき。おつう。「其れはおつだ」浮世風呂「此の女の詞、おつに訛るなり」膝栗毛「おつな手つきをして、おめえ何をする」

おつ　一乙（名）　一十干の一。きのと。二船序を數ふるに、第二位の稱。考課令「令通寫」甲、通「八以上爲乙」二樂器にて、下げて低くする音調。（甲（コウ）の對）

おつ　落（自動上）　一念に、高きより低きに移り行く。下だる。さがる。降下す。碎落す。記「宮人のあゆひの小鈴淤知（オチ）にきと、宮人とよむ里人もゆめ」萬「筑波根の岩もとどろに於都流（オツル）水、よにもたゆらに我が思はなくに」千載秋王「いかにして屈用も見えぬ夕霧に、とせの筏おちてきつらん」二ふる。降る。萬「時まちて落（オチ）しぐれの雨やめて、あさかの山のもみぢしぬらむ」三散る。枕「梅の花のみな散りたる枝を、これはいかにと云ひたるに、ただ早くおちにけりといらへたれば」拾遺雜春「やな見れば川風いたく吹く時ぞ、波の花さへ落ちまさりける」四とれて無くなる。離る。失す。「首落つ」五去る。除かる。癒ゆ。「癰がおつ」六脫けて無くなる。失す。消ゆ。「光澤落つ」「力おつ」源澤生「わが御くしのおちたりけるを取り集めて、かづらにし給へるが」狹衣「顏にあてて泣かるるさま、紛もみなおちぬべし」七沈む。入る。沒す。類政集「落ちかかる山のは近き月影は、いつまで思ふ我が身なりけん」八光さしこむ。照らす。新古今冬「冬枯れの森のくれ葉の霜の上に、おちたる月の影の寒けき」玉葉雜二「しきたへの枕におつる月見れば、荒れたる宿もうれしかりけり」九死ぬ。斃る。心中宵庚申「おちた魚を吟味の役人」十止む。衰ふ。「風落つ」「評判おつ」十一低くなる。劣る。降だる。「品おつ」十二おちぶる。零落す。源澤生「やんごとなきすじながらも、かうまでおつぺきすくせ有りければにや」十三死る。洩る。記「うち見る島のさきざき、かき見る磯のさき淤知（オチ）乎、若草の妻持たせらめ」古語拾遺「鷄かに逃げ、砂石集「ともだち二人おちて、其の邊に忍びてありけるが」十四城陷る。敵に攻め取らる。陷落す。十五おちいる。はまる。「敵の術中におつ」

罪に伏す。白狀す。今昔「強ちに問ひければ、遂に落ちて云はく」 ㊀ 當たる。きまる。「入札がおつ」 ㊁ 手に入る。落手す。 ㊂ 身をくづす。墮落す。古今秋上「名にめでて折れるばかりぞ女郎花、われおちにきと人に語るな」 千載雜「おそろしや木曾のかけぢの丸木橋、ふみ見るたびにおちぬべきかな」 ㊃ 精進をやむ。土佐日記「舟君せちみず。さうじものなければ、午の時より後に、かぢとりの昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、よれを取りかけておちられぬ」 ㊄ わかる。納得す。了解す。「腑になつ」 國姓爺後日合戰「曾て以て心腹に落ち難し」 ㊅ 一つに定まる。歸著す。歸す。「結局此の理におつ」 傾城反魂香「人をはぐの狀すのと、おつる所は廓の難」

（諺）落ちた後で高みを恐る　自ら經驗して後、初めて戒心すべきを知るに譬ふ。

（諺）落つれば同じ谷川の水　發する所を離へ。一休水鑑「雨霰雪や氷と隔つちん、落つれば同じ谷川の水」

おっ（感）㊀ 急なる場合、又驚きたる時に發する聲。わっ。「おっとをめく」 ㊁ 速かに心附きたる時發する聲。「おっ、さうだ」

おっ（接頭）〔おしの音便〕動詞に冠して意を强むる語。「おっかぶさる」「おっべす」

おづ怖（自動ナ）おそる。ひるむ。こはがる。皇極紀「慓然振怖（ハヤブリ）」 佛足石歌「いかづちの光の如きこれの身は、死にの大王常にたぐへり、於豆（オヅ）べからず」 宇鏡「愕然（オヅ）豆」 屈記（ヒキ）

おつう（副）おつに同じ。

おづ・おづ怖怖（副）おそるおそる。おぢおぢ。こはごは。宇津保埋「ゆく末の人も、今さぞ聞こえんといひし、かたみにむつまじう見奉らんかしとて、おづおづの給へば」 蜻蛉日記「參りこまほしけれど、つつましうてなん。たしかにことあらば、おづおづもとあり」

おっかあ（名）中流以下の小兒の、母をよぶ稱。關東の方言。浮世風呂「憎いおっかあめだのうなうなをしてやらう」

おっかかる（自動ラ）㊀ 物によりかかる。 ㊁ 殆んど近づく。なんなんとす。天網島「三十に押っ掛かり、勘太郎・おすゑと云ふ、六つと四つの子の親」

おっかき（名）〔おきかき（懷掻）の訛り〕じふのう（十能）に同じ。

おっかく　追掛（他動カ）おひかく（追掛）の訛り。謠教訓「うしろより熊谷の次郎直實、のがさじとおっかけたり」

おっかけ　追掛（名）㊀ おっかくること。 ㊁ 引きつづけて事をすること。 ㊂ 人力車夫の語。辻待をして客をひくこと。

おっかけ・おっかけ　追掛追掛（副）㊀ 追ひかけ追ひかけして。 ㊁ あとからあとからと引きつづけて。おっかけひっかけ。

おっかけ・つぎ　追掛繼（名）〔建築〕桁などに用ふる繼手（ツギ）。横面より栓を打ち込みて外づれぬやうにする故に、胴栓ともいふ。

（ぎつけかっお）

おっかけ・ひっかけ　追掛引掛（副）おっかけおっかけ（追掛追掛）に同じ。

おっ・かける　追掛（他動カ）おっかく（追掛）の口語。

おっかーさん（名）はは（母）に同じ。

おっかじめる（他動カ）いぢめる。虐待す。浮世風呂「いんにやあ、おめえまでが、おっかじめることあねえはな」

おつかどのーさ（名）〔植〕ふしのき（鹽唐木）の異名。

おっかない（形口語）おそろし。こはし。用明天皇職人鑑「女御にあげい、后に立てようなどと申して、おやおっかない僞り」

おっかなーびっくり（副）おづおづ（怖怖）に同じ。おそるおそる。こはごは。

おーつかひ　御使（名）㊀ つかひ（使）の敬語。狂言「愚僧にも參るやうにと、お使でござったほどに」 ㊁ 大名諸家にて、使者をいふ稱。

おっ・かぶさる（自動ラ）かぶさるを强めていふ。浮世風呂「むりの上へ、髷がおっかぶさって居りましたが」

おっ・かぶせ（名）㊀ おっかぶせること。 ㊁ 賣物を巧みに賣りつくること。萬紫千紅「財の源、福の港と題せしは、學而第一のおっかぶせなり」

おっ・かぶせる（他動ナ）かぶす（被）を强めていふ。おっかぶさるやうにす。

おっ・かへす　追返（他動サ）おひかへす（追返）の訛り。謠教訓「父は空しくなりたる由を申して、おっ返して候ほどに」

おっ・かへす　押返（他動サ）かへす（返）を强めていふ。

おーつき　御附（名）侍り居る人。さぶらひびと。

おーつぎ　御次（名）貴人の御座近き夾の間。早雲寺殿廿一箇條「出仕の時、御前へ參るべからず。御つぎに祇候して、諸傍輩の體見つくろひ」

おつきーあぶぎ　御月扇（名）昔、給所より、毎月禁裏へ獻りたる扇。

おっぎい（形口語）おほきい（大）の訛り。

おっぎな（句）おほきな。大いなる。膝栗毛「とても事に、おっきなもんで、お積もりにしましょぢや無いかいな」

おっく（名）おくすり（御藥）の略語。小兒の語。

おっくう（名）〔おくこふの訛り〕おくこふ（億劫）に同じ。

おっくだす　追下（他動サ）おひくだす（追下）の訛り。謠教訓「驕れる平家を西海に追っくだし」

おーつくり　御作（名）容色をととのふること。おけしやう。

おっくりやる（他動カ）くりやるを强めいふ。くれる。文武五人男「何も知らな粗忽なげに通らんとす」

おーつけ（名）㊀ 麵類のつけ汁。和訓 ㊁ すべて、汁の稱。 ㊂ 頼城酒呑童子「おつけには何なりと、尾鰭のついた燒物」 ㊃ 今は專ら、味噌汁の稱。

おーつけ　御告（名）㊀ つぐる（告）ことの敬語。 ㊁ 神佛の託宣。示現。狂言「惠比須三郎殿「中略」やい、くわじや、はやおつげがあった」同六人「是れはただ事ではあるまい。後世を願へとあるお告げであらうぞ」

おっこ（名）〔植〕いちゐ（一位）の異名。

おっこち（名）男女相戀愛すること。情人。天保以來の江戸語。

おっこち・しぼり（名）天保頃流行せししぼりそめ。藍・鼠等の淡色地の所所に、花形などを紅・紺にて絞り染めたるもの。

おっこちる（自動カ）おつ（落）をいふ、東京の方言。

おっことす（他動サ）おとす（落）をいふ、東京の方言。

おっこふ（名）〔おくこふの音便〕おく

こふ（億劫）に同じ。

おっ・とむ　押込（自動ラ）打ち入る。打ちこむ。用明天皇職人鑑「二弓手へおっとみ、右手へ切りこみ、さんさんに打ち亂れ」

おっ・きぐ　押下（他動ラ）さぐ（下）を强めていふ。おし下ろす。謠教訓「結句主をおっさげて、下人に使ふべき謂はればしあるか」

おっ・さま　追樣（名）おひさま（追樣）の訛り。平家十三「心少し落とし居ゑて、追っ樣にこそ參り候はめ」

おっしゃる（自動ラ）おほせあるの訛り。のたまふ。狂言「賈茂「なうとっさま、さうおっしゃるはがてんでござる」

おっしゃる（自動ラ）前條に同じ。狂言「同「なぜに、いやとおっしゃるぞ」

おっしゃる（自動ラ）㊀ 評などを追ひ捕らふるため、出で向かふ人。うって（討手）。吉野都女楠「尊氏方のおっ手の軍兵千騎ばかり」 ㊁ 逃げ行く人の跡を追ふ人。おひて。生玉心中「鯖の口より恐ろしき、おっ手の聲のあれあれあれ」

おっ・て　追而（副）〔おひての音便〕㊀ 遠からず後（ノチ）より。狂言「まづお禮申します。禮は追っての事、何を論ずるぞ」 ㊁ つけ加へて書くこと。又、其の文。なほなほがき。筆法才葉集「さて書狀にて追って書はせぬ、禮紙には追って書する事あり」

おっ・て・がき　追書（名）書簡文の末尾につけ加へて書くこと。又、其の文。なほなほがき。筆法才葉集「さて書狀にて追って書はせぬ、禮紙には追って書する事あり」

おっ・と（名）〔おと（音）の訛り〕おと（音）に同じ。狂言「柿「やいやそこな者、柿をくって恥かしくば、御免なれと云うて、おっとせで、いね」

おっ・つく　追附（他動カ）ひっつく（追附）の訛り。謠教訓「さあらば追っ附き、此の御膳の物を參らせ候べし」

おっ・つくねる（他動ナ）どうにかきまりをつける。强ひて落著せしむ。浮世風呂「思ふさま手っ甲（ガケ）摩って、漸漸おっつくねたはな」

おっ・つけ　追附（副）㊀ 程なく。間もなく。おしつけ。やがて。狂言「國本「中略」へ、おっつけ下だるであらう」同「誠に祇園會もおっ附てござる」 ㊁ すぐ。遠かに。ぢき。狂言「いたらば、唯今の通りぢや、追っ附お出でなされというて、呼うて參れ」

おっ・つける　追附　追著（自動ナ）おっつく（追附）の口語。狂言「今日は追っ附けて、且那衆を呼ぶはずぢや」

おっ・つける　押附（他動ナ）おしつく（押付）の訛り。

おっ・つめる　追詰（他動ナ）おひつめる（追詰）の訛り。平治「追っ詰め追っ詰め、捕らへて首を刎ね、獄門に懸けて」同「八町が内にて追っ詰めて、首を取りたりければ」

おっ・て　追手（名）〔おひての訛り〕

おっ・て　追手（名）〔おひての音便〕

おっ・て・がき　追書（名）書簡文の末尾につけ加へて書くこと。又、其の文。なほなほがき。筆法才葉集「さて書狀にて追って書はせぬ、禮紙には追って書する事あり」

おっ・と（名）〔おと（音）の訛り〕おと（音）に同じ。狂言「柿「やいやそこな者、柿をくって恥かしくば、御免なれと云うて、おっとせで、いね」

おっ・とせいゆ　膃肭臍油（名）膃肭臍の肋骨脂を桶に入れ、自然に滲解流出する液油を採集したるもの。一種不快の臭氣あるを以て、燈用の外賞用せられず。にゅーふぁうんどらんど地方に於ける主要産物たり。

おっ・とほし　押通（名）おっとほすこと。おしとほすこと。「晝夜おっとほしにする」

おっ・とほす　押通（他動サ）おしとほす（押通）の訛り。

おっと（名）さけ（酒）をいふ、幼兒の語。

おっと（名）〔動〕おっとせい（膃肭臍）の略。

おっと（感）急に心附きたる時などに發する聲。博多小女郎浪枕「大夫方もここへは無用。おっと、こなた（越度）の訛り。辨内侍日記「今九重と詠みたる正しかるべからず。ともにおっとなりと仰せらるると聞きし面目なき」

おっとせい　膃肭臍（名）〔動〕鰭脚類、あざらし科に屬する海獸。體の長さ牡は六尺餘に達し、體重は四十五貫餘なるものあり。牝は體重・體長共に牡の半に過ぎず。頭部小さく圓くして、軀幹は長し。四肢は海中生活のために、鰭狀に變ず。毛は球毛にして色は紫褐色。水中の働作は頗る活潑なれども、陸上の運動は遲緩なり。北海に產し、十月末に潮流と共に本邦近海に回游す。肉は食用及び藥用に供せらる。毛皮は頗る高價なり。おっと。かいくじん。

（いそとっお）

おっとせいゆ　膃肭臍油（名）膃肭臍の肋骨脂を桶に入れ、自然に滲解流出する液油を採集したるもの。一種不快の臭氣あるを以て、燈用の外賞用せられず。にゅーふぁうんどらんど地方に於ける主要産物たり。

おっとほし　押通（名）おっとほすこと。おしとほすこと。「晝夜おっとほしにする」

おっとほす　押通（他動サ）おしとほす（押通）の訛り。

おっとーまかせ 押取巻（他動ヨ）とりまく（取巻）を強めていふ。日本武尊吾妻鑑「兵士數多引き具し、輿を中におっとりまき」

おっとりまくまき 押取廻（他動ヨ）おっとりこむ（押取込）に同じ。傾城酒呑童子「十人ばかりむらむらと、手ん手に割木提げ提げ、追っ取り廻ほす」

おっーとる 押取（他動ヨ）とる（取）を強めていふ。諸曽我「飛びかかり、胄をおっとり、えいやと引くほどに」同文覚「金剛杖をおっ取って、散散に打撒す」

おつーのーふし 乙節（名）旗竿の節の名。かぶのふし（甲節）を見よ。

おっぱ （名）ばばする（馬場末）に同じ。

おっーぱい （名）「一杯の訛り」ちち（乳）をいふ。幼児の語。

おっーぱしる 押走（自動ヨ）はしる（走）を強めていふ。うっぱしる。

おっーぱなす 押離（他動ヨ）はなす（離）を強めていふ。放ちやる。追ひやる。淀鯉出世鑑德三「荒けなき辭辭にて、さあこことより追っ放す」

おっーぱなつ 押放（他動ヨ）前條に同じ。釋迦如來誕生會「心任せに跳ね廻はれと、打ち立て打ち立て、追っ放つ」

おっーぱめる 押塡（他動下）はめる（嵌）を強めていふ。突き入る。陷る。釋迦如來誕生會「あの柳伐り倒し、川中へ押っぱめよ」

おっーぱらぶ 追拂（他動ヨ）おひはらふ（追拂）を強めていふ。追ひ遣る。諸船唄「猪怨靈は惡ひ來るを、追っぱらひ祈りのけ」

おっーぴらく 押開（他動ヨ）ひらく（開）自動を強めていふ。雪女五枚羽子板「一夜押っぴらけて、四方の春、空のかんばせにこやかふくやか」

おっーぴらく 押開（他動ヨ）ひらく（開）他動を強めていふ。あく。

おっーぴらける 押開（自動ヨ）おっぴらく（押開）自動の口語。

おっーぴろける 押擴（他動下）おしひろげる（押廣）を強めていふ。

おっーぷ （名）とうふ（豆腐）をいふ。幼兒の語。

おっーぷせる 押伏（他動下）おしふせる（押伏）を強めていふ。

おっぺしーあんどん 押壓行燈（名）ちやうちん（提灯）をいふ。常陸國の方言。

おっーぺしょる 押壓折（他動ヨ）押しつけてへし折る。

おっーぺす 押壓（他動ヨ）おしへす（押壓）の音便。おしつく。奴俳諧「おっぺしてとらん相撲は、はれがまし」

おっーぺーだて （名）「つぺは尻。尻を立て拜むよりいふ」十一月廿八日頃、本願寺の門徒、組師に禮拜する會式の稱。

おっーぽ 御壺（名）一つぼ（壺）の敬語。又、それに盛りたる食物の稱。二禁中の局（つぼね）の敬稱。

おっーぽね 御局（名）宮中の女官の敬稱。

おつぼーのーめしつぎ 御壺召次（名）院の御所の御庭の雜仕をつとめ、歌の御會の時などの御硯の水を供ふるもの。ほうる（投）を強めていふ。

おっーぽる 投（他動ヨ）投げだす。

おっぽろーがみ （名）垂れ亂したる髪。井筒業平河内通「廣國が一子幸若丸、あけて入つのおっぽろ髪」

おっーつむ （名）「つむはつむりの略」かしら（頭）をいふ。幼兒の語。

おつむ てんてん 赤子が、手にて我があたまを經くうつこと。

おつめーしゅ 御詰衆（名）一室町時代、將軍幼稚なる時、殿中に宿衛せしむる武士。二江戸時代、將軍に近侍する者。雁間詰の譜代大名より任ず。藩翰譜「その後、おつめしゅの列に加へらる」

おーつめた 御冷（名）みづ（水）をいふ女詞。おひや。

おーつもり 御積（名）つもり（積）の敬語。酒宴のをはりの酒。

おつーや 乙夜（名）いつや（乙夜）に同じ。漢書「地節元年正月戊午、乙夜月食」

おつーやのちん 乙夜覽 いつやのちん（乙夜覽）に同じ。いつや（乙夜）の條を見よ。

おーつゆ （名）しる（汁）の敬語。女詞。

おつーりさ （名）剛 おつに同じ。浮世風呂「丁度こんなかたちさ、おつりきだなう」同「年の頃廿七八、おつりきなる女」

おーて 御手（感）相撲の時のかけ聲。おてっ。狂「やあやあ、お手、勝ったぞ勝ったぞ」同「やあやあ、お手、勝ったぞ勝ったぞ」などにて、上流の家族の語。

おーでいーさま （名）ちち（父）の稱。京都

おーでいーり 御出入（名）でいり（出入）の敬語。常に恩顧を受けて、その家にではいりすること。又、その人。狂「見物「愛に誰れ殿と申して、おでいり致すお方がござる」

おーてうじ （名）おてうど（御調度）の訛り。

おーてうし-たて 御銚子立（名）臺所にて、銚子・ひさげをのせおく臺。足四本あり。畠山式部少輔亭御成之記「御盤たて・御てうしたて」

おーてうし-ひさげ-ぶぎゃう 御銚子提奉行（名）武家時代の職名。將軍諸家に臨まるる時、諸家にて臨時に命ずる役。銚子などの事を沙汰す。

おーてうしもの 御調子者（名）よい加減に調子を合はする人。

おーてうち 御手打（名）一てうち（手打）の敬語。「おてうちの薺麦」二主君の手づから臣下を斬ること。狂「唯今お手うちになると申しても、え渡ります まい」

おーてうど （名）おてうど（御調度）の訛り。

おてうづーの-ま 御手水間（名）背、天皇の毎朝御手水を召す所。清涼殿の西廂にあり。廉壺上御局の西に隣り、南は朝餉間（ひるのおまし）と、北は御湯殿間に接す。禁秘抄「御手水間方障子畫猫」

おてうづ-ぶぎゃう 御手水奉行（名）武家時代の職名。將軍諸家に臨まるる折り、諸家にて臨時に命ずるもの。御休息所におかるる樣（ざま）・盥、その外、御手水の具を沙汰す。

おーてうづーやく 御手水役（名）主君に手水をまゐらする事を勤むる職。

おーてうど 御調度（名）大將の箭の稱。今川大雙紙「主人の、矢とあらば、御てうと持ちて參り候と申し附くべし」

おーてき 御敵（名）じやうじん（情人）をいふ。京阪の方言。博多小女郎波枕「それやこそおてきと色めいて、毛剃がつれども現を抜かし」梅狩劍本地「これ躾樣方、おてき樣の痴話文、お二人ながら躍っつ跳ねつお悅びあらうと、きほひかかって戻った」

おーてき 御出來（名）しゅもつ（腫物）をいふ幼兒の語。

おてぐみーのーいぬおぶもの 御手組犬追物（名）將軍家の催す犬追物。

おーてこ （名）額の甚しく出てたる人を嘲りていふ語。

おーてだま 御手玉（名）少女の玩具。赤小豆などを小さき布帛の袋に入れて縫ひとち、幾箇か持ちて投げ受けする戲れ。

おーて- （感）「御手（おて）」を強めていへるなるべし。諸曽我「おて（御手）に同じ。狂「行司をめされ。心得た、お手っ」

おーて-つく （名）おてんば（御轉婆）に同じ。

おーて-つけ 御手附（名）歌がるたを取る時などに、過ちて、あらぬ牌（ふだ）に手を附くること。又、その罰として我が方へ引き取るべき牌（ふだ）。

おてっ-つ （感）おてっを強めていふ語。狂「文覚「太郎冠者、行司をせえ。畏まってござる、おてっつ」

おーて-て （名）乳母の夫。壽門松「乳母夫兵衛・孝者・行」「小供設けて二人が連れて、お乳がかたぐま、おててが日傘」

おーでこ 御木偶（名）一享保・元文頃ありし見世物の人形。笊など伏せて、明くる度毎に、樣樣に變はらせなどしたるもの。婚遊笑覽二欠餘の略。

おーでこーしばゐ 御木偶芝居（名）江戸時代、江戸三座以外の小芝居。もと、おでこを用ひたる人形芝居なりしよりいふ。緞帳芝居。

おーてなが 御手長（名）禁中の女官。御膳を御次の間まで持ち行きて、御宮仕の人に渡すことを掌る。

おーてのうち 御手中（名）手の中に入りたる物。掌中に歸すること。

おーてのもの 御手物（名）手に入りたるもの。得意のもの。えてもの。

おーでまし 御出座（名）一出て行くことの敬語。二行幸。

おーてまへ 御手前（代）室町以來の語。そなた。きみ。足下。（多く同輩にいふ）狂「言「いや、お手前の手形でおじやる」

おーてまり 御手鞠（名）てまりあそび（手鞠遊）に同じ。

おーてもと 御手許（名）一てもと（手許）の敬語。狂「言「その下ださるるお手もとは、その儘でござりまする」二はし（箸）をいふ。豐前・豐後の方言。

おーてら 御寺（名）一てら（寺）の敬語。狂「言「お寺の花ではござらぬ」二おてらさま（御寺樣）の略。冥途飛脚「鎌田村のお道場へ、京のお寺のお下だり、毎日のお參談」三物を貫ひても返禮せぬこと。もらひぱなし。（寺にては檀家より物を貰ふも返禮せざるものなればいふ）

（諺）**お寺すりこぎ** 寺院の擂木は頑繁に使用せられて角なき程すりへらさるるより、轉じて圭角なき譬へ。世話盡「お寺すりこぎ」

（諺）**お寺の屋根で袈裟喰ったばかり** 今朝食ったばかりを酒落れていふ諺。

おてら-さま 御寺樣（名）寺の住職、又は僧侶の敬稱。狂「言「昆布布施「お寺樣へ無心云はうか」

おてら-しゅう 御寺衆（名）前條に同じ。

おーてん 御田（名）一きめてんが（木芽田樂）の略。二芋・蒟蒻・はんぺん等を煮込みにしたるもの。

おてん-かんざけ 御田燗酒（名）御田（おて）と燗したる酒と。又、それを賣る人。

おてんかんざけ-や 御田燗酒屋（名）御田燗酒を商ふもの。又、其の店。

おてんしゅ-ばん 御天守番（名）江戸幕府の職名。江戸城の天守を守衛するもの。

おてんしゅばん-がしら 御天守番頭（名）江戸幕府の職名。御天守番の長。

おーてんす 御殿司（名）社僧。社殿の事を掌る。

おーてんとさま 御天道樣（名）てんたうさま（天道樣）の敬稱。

（諺）**お天道樣に石** 天に向かひて石を投ぐれば、天には當たらずして我が身に當たること。自ら禍を招く譬へ。天に唾す。

おーてんば 御轉婆（名）出過ぎたる女。おてんなしからぬ女。

おでん-や 御田屋（名）おでんを賣る人。又、その店。

おと 音（名）一總官の認識する感覺。ひびき。こゑ。ね。萬「行く水の於等（ゑ）もさやけく」同「つむがぬに鈴が於等（ゑ）きこゆ、かむしだの殿のなかちし、と狩りすらしも」同「鶯の於登（ゑ）聞くなべに梅の花、わぎへの園に咲きて散る見ゆ」古今「秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の、目には見えずて音のさやけき」二たより。おとづれ。おとさた。風聞。萬「於登（ゑ）に聞き目にはいまだ見ず、さよ姫がひれ振りしとふ君まつら山」竹取「よるひる待ち給ふに、年越ゆるまでおともせず」古今「三山しなの音羽の山のおとにだに、人の知るべく我が戀ひめかも」

おと する つ 音 音鳴杖 しゃくぢやう（錫杖）に同じ。新續古今「錫杖の歌と人人詠みけるに。長き夜の夢はいかでかさまさまし、音する杖にかからざりせば」

おと 弟（名）一おとうと（弟）に同じ。仁德紀「昆上而委（ゑ）下」神代紀「兄弟（ゑ）

二人」㊁いもうと(妹)に同じ。

おと まつ ゆき 弟待雪 ともまつゆき(友待雪)に同じ。[俚言集覽]とも(友)の條を見よ。

おと 乙 (名) おとと(乙子)の略。

(諺)**おとは血の緒** 末子は最も可愛きこと。源氏十二段長生島臺「乙は血の緒といとほしく、あくがれ尋ね出で給ひ」

おと 一於菟 (名) とら(虎)及びねこ(猫)の異名。楚人謂乳穀曰於菟、謂虎於菟[左傳宣公四年]

おと 乙 (接頭) ㊀次・幼くある方・末などの意をあらはす語。神武紀「小女(オトメ)」仲哀紀「叔父(オトヲ)」㊁美しき又めでうつくしむ意を表はす語。(末子は特に愛せらるものなるより、轉じていふ)[古事記]「おと姫」記「ミ登(オト)たなばた」古語。大なる出入口。萬三「ともしびの明石の大門(オト)に入らむ日や、漕ぎわかれなむ、家のあたり見ず」

おと あはせ 音合 (名) 雷・地震などの時、畑の喘くこと。[俚言集覽]

おと いもうと 弟妹 (名) 幼き妹。次の妹。名義抄「小妹(オトイモウト)」

おと とう (名) かはや(厠)の稱。禁中にて、女房の詞。

おと うさま (名) 父親。父上。おとうさん。とうさま。

おと うづき 弟月 (名) おとづき(弟月)の延。おとづきと定めて、正月の月をば太郎月と祝うた」

おと うと 弟 (名) (おとひと(弟人)の音便)㊀同じ父母に生まれたる年したの男子。おと。おとと。いろと。(兄の對)和名「弟。爾雅云、男子後生爲弟[定正]字津保[種上]らうたうの中將、その御おとうと四位の少將」㊁いもうと。おとと。

おと うと ぶん 弟分 (名) かりに定めたる弟。義弟。(あにぶんの對)

おと うと よめ 弟嫁 (名) 弟の妻。おとよめ。(兄嫁の對)嫁歌加留多「弟の命・我が子の命・弟嫁・惣領嫁、四人の命賜はりし御恩は何と報ぜん」鄰。

おと おど (副) 怖れてうろうろとして。おづおづ。おどおど。

おと か (名) 【動】きつね(狐)の異名。子守唄「せどの柿の木のその下で、おとかにちよいとつままれて」

おどかし (名) おどかすこと。驚かし。おどし。

おどかす (他動) おどす(威)に同じ。

おと がね 音金 (名) 弓のうら筈の方の弦の中に包みたる銅、又は鈴。射て誓きの出づるためにする。

おとがひ 頤 (名) ㊀下の顎(アゴ)。あご。あぎ。鑑異記「頤(オトガヒ)」和名「頷。方言云、頤謂之頷[字亦作顎]」㊁頤を叩くこと。惡口。壽門松「踏まれてさへあの頤、人を蹈んだらどうあろ」

おとがひ おつ 頤裕 ㊀寒くわななきたるさまにいふ。枕十「夜深くかへる。寒き事いとわりなく、おとがひなどもみな落ちぬべきを」㊁食物の味ひ、甚だ佳き譬へにいふ。おとがひはなる。

おとがひ はなる 頤離 おとがひおつ(頤落)に同じ。狂言[樽賣]「おとがひのはなれるほど甘うござる」

おとがひ やしなふ 養頤 糊口を繼しと、鬼が島でも龍宮でも、道る所へなぜ行かぬ」

おとがひ を きく 灸餘に同じ。懇八卦柱曆「まだおとがひをききをるかと、頬げた三つ・四つくらはせて」

おとがひ を たたく 叩頤 口をきく。しやべる。膝栗毛「こなさん、えらいおとがひたたかんすな」

おとがひ を とく 解頤 頤のはづるるほど、いたく笑ふ。あごをはづす。おとがひをはなつ。續古事談「主上よりはじめて見る人、おとがひを解かずといふとなし」

おとがひ を はなつ 前條に同じ。宇治拾遺「諸人、おとがひをはなちて笑ひたるに」

(諺)**頭て蠅を追ふ** 膠て蠅を追ふに同じ。あご(顎)の條を見よ。狂言[牛馬]供御を進上申して、その上にこそ、駒くらべもやぶさめもいりませうずれ。何も參らずば、おとがひて蠅を追うでござらう」

(諺)**頭て人を使ふ** 横柄に人を使役する。

おとがひ-づきん 頤頭巾 (名) あごにかくるやうに作りたる頭巾。藥師通夜物語「高麗ざしの木綿足袋、おとがひ頭巾で頭かくし」紅梅千句「槍のさきよりとがる秋風の旬冬近しおとがひ頭巾こしらへて」

おと-き 音木 (名) 欅(モミ)き放ちたる弓の、鳴る音好きもの。[物語記]

おと-ぎ 御伽 (名) ㊀とぎ(伽)の敬稱。㊁めかけ(妾)をいふ。

おと-ぎき 音聞 (名) ㊀おとの聞こゆること。躬恒集「いづらなる山にあるらんかりがねの、おとときき高く聞こゆなるかな」㊁世のきこえ。風評。風聞。源竹川「世の雷ききも、あはつけきわざなれば」同竹川「世にたぐひなきみ有樣の雷ぎきに、卿許しきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず」

おと-ぎ-こしやう 御伽小姓 (名) 幼主の遊び相手となる小姓。丹波與作「お伽小姓の玩是なし、十二三なが手を揃へ」

おと-ぎ-しゅう 御伽衆 (名) 豐臣氏の職名。君側に侍衆するもの。

おと-ぎ-なし 御伽無 (形) 古語。いとけなし(幼)に同じ。仁德紀「幼而[ヲサナクシテ]聰明叡智」

おと-ぎ-ばうず 御伽坊主 (名) 雜式の前夜などにときをし讀經などする僧。

おと-ぎ-ばなし 御齋話 (名) 僧の食物の話をすること。齋[ヒ]に關する談話。大鏡狂言綺語「いちぬお齋ばなしをせうより、法文を說かしめ」

おと-ぎ-ばなし 御伽話 (名) ㊀人のつれづれを慰むるはなし。㊁切見に聞かしむる傳說・口碑等より出でたる娛樂的の話。桃太郎・かちかち山の類。

おと-ぎ-ばぷこ 伽這子 御伽婢子日本紀寛宴和歌「ねのがおとうと名はおと姫」宇津保[祭使]「北の對におはするは妹なり。右おとど、おほいおとどのあなたの一つ御腹のおとうと、はらからなれど、こと腹にて疎かりけるを」

おと うと-ご 弟御 (名) 前條の敬稱。(兄御の對)持統天皇歌軍法「兄御なら、弟御なら、女子の惚れる眞っ最中」

おと うと-でし 弟弟子 (名) 同じ師の許に、後に來たりたる弟子。後進の弟子。(あにでしの對)

おと うと-ぶん 弟分 (名) かりに定めたる弟。義弟。(あにぶんの對)

おと うと-よめ 弟嫁 (名) 弟の妻。おとよめ。(兄嫁の對)嫁歌加留多「弟の命・我が子の命・弟嫁・惣領嫁、四人の命賜はりし御恩は何と報ぜん」鄰。

おど-おど (副) 怖れてうろうろとして。おづおづ。おどおど。

お-とか (名) 【動】きつね(狐)の異名。子守唄「せどの柿の木のその下で、おとかにちよいとつままれて」

おどかし (名) おどかすこと。驚かし。おどし。

おどかす (他動) おどす(威)に同じ。

おと-がね 音金 (名) 弓のうら筈の方の弦の中に包みたる銅、又は鈴。射て誓きの出づるためにする。

おとがひ 頤 (名) ㊀下の顎(アゴ)。あご。あぎ。鑑異記「頤(オトガヒ)」和名「頷。方言云、頤謂之頷[字亦作顎]」㊁頤を叩くこと。惡口。壽門松「踏まれてさへあの頤、人を蹈んだらどうあろ」

おとがひ おつ 頤裕 ㊀寒くわななきたるさまにいふ。枕十「夜深くかへる。寒き事いとわりなく、おとがひなどもみな落ちぬべきを」㊁食物の味ひ、甚だ佳き譬へにいふ。おとがひはなる。

おとがひ はなる 頤離 おとがひおつ(頤落)に同じ。狂言[樽賣]「おとがひのはなれるほど甘うござる」

おとがひ やしなふ 養頤 糊口を繼しと、鬼が島でも龍宮でも、道る所へなぜ行かぬ」

おとがひ を きく 灸餘に同じ。懇八卦柱曆「まだおとがひをききをるかと、頬げた三つ・四つくらはせて」

おとがひ を たたく 叩頤 口をきく。しやべる。膝栗毛「こなさん、えらいおとがひたたかんすな」

おとがひ を とく 解頤 頤のはづるるほど、いたく笑ふ。あごをはづす。おとがひをはなつ。續古事談「主上よりはじめて見る人、おとがひを解かずといふとなし」

おとがひ を はなつ 前條に同じ。宇治拾遺「諸人、おとがひをはなちて笑ひたるに」

(諺)**頭て蠅を追ふ** 膠て蠅を追ふに同じ。あご(顎)の條を見よ。狂言[牛馬]供御を進上申して、その上にこそ、駒くらべもやぶさめもいりませうずれ。何も參らずば、おとがひて蠅を追うでござらう」

おとがひ-づきん 頤頭巾 (名) あごにかくるやうに作りたる頭巾。藥師通夜物語「高麗ざしの木綿足袋、おとがひ頭巾で頭かくし」紅梅千句「槍のさきよりとがる秋風の旬冬近しおとがひ頭巾こしらへて」

おと-き 音木 (名) 欅(モミ)き放ちたる弓の、鳴る音好きもの。[物語記]

お-とぎ 御伽 (名) ㊀とぎ(伽)の敬稱。㊁めかけ(妾)をいふ。

おと-ぎき 音聞 (名) ㊀おとの聞こゆること。躬恒集「いづらなる山にあるらんかりがねの、おとときき高く聞こゆなるかな」㊁世のきこえ。風評。風聞。源竹川「世の雷ききも、あはつけきわざなれば」同竹川「世にたぐひなきみ有樣の雷ぎきに、卿許しきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず」

おと-ぎ-こしやう 御伽小姓 (名) 幼主の遊び相手となる小姓。丹波與作「お伽小姓の玩是なし、十二三なが手を揃へ」

おと-ぎ-しゅう 御伽衆 (名) 豐臣氏の職名。君側に侍衆するもの。

おと-ぎ-なし 御伽無 (形) 古語。いとけなし(幼)に同じ。仁德紀「幼而[ヲサナクシテ]聰明叡智」

おと-ぎ-ばうず 御伽坊主 (名) 雜式の前夜などにときをし讀經などする僧。

おと-ぎ-ばなし 御齋話 (名) 僧の食物の話をすること。齋[ヒ]に關する談話。大鏡狂言綺語「いちぬお齋ばなしをせうより、法文を說かしめ」

おと-ぎ-ばなし 御伽話 (名) ㊀人のつれづれを慰むるはなし。㊁切見に聞かしむる傳說・口碑等より出でたる娛樂的の話。桃太郎・かちかち山の類。

おと-ぎ-ばぷこ 伽這子 御伽婢子

(名) 天兒(ヒヤウ)の一種。長さ一尺餘り、白き帛にて頭身を包み、黑き絲を髮とし、前方の左右に分けて垂下す。

(こふばきとお)

おとぎり-さう 小連翹 (名) 【植】金絲桃(ヒペリカム)科、金絲桃屬の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は長卵形鈍頭、葉柄なく、對生し、葉脚相接して莖を抱き、黑色の小點を散布す。夏秋の際、黃色五瓣の花を莖頂及び葉腋に開く。我が國、各地の山野に自生す。藥用に供すべし。おとぎりす。あぜむらさき。

おとぎりす (名) 【植】前條の異名。

おとぎり-やなぎ (名) 【植】こりやなぎの異名。

おとく (自動) おほとくに同じ。源[椎本]「何事にもあるに從ひて心を立つる方もなく、おとけたる人こそ、ただ世のもてなしにしたがひて」

おとけ 戲 (名) おとけること。たはむれ。しやれ。娛節用「おとけはおどけだが、足下太鼓持をさらけやめねえ、いい金儲けの筋があるぜ」

おとけ-うた 戲歌 (名) おとけたる歌。ざれうた。俚謠歌。

おとけ-がほ 戲顏 (名) おどけたる顏つき。滑稽なる顏つき。

おとけ-ぐち 戲口 (名) おどけたる口のききやう。ざれごと。冗談口。諧謔。

おとけ-ごと 戲言 (名) 前條に同じ。

おとけ-ごと 戲事 (名) おどけたるしわざ。滑稽なる所作。

おとけ-しばゐ 戲芝居 (名) おどけたる所作をなす芝居。

おとけ-ばうず 戲坊主 (名) おどけたる坊主。滑稽たる坊主。昔昔物語「りふ立といふ遊民のおどけ坊主ありしが、歌を作りてうたふ」

おとけ-ばなし 戲話 (名) おどけたる話。滑稽なる物語。

おとけ-もの 戲者 (名) おどけ戲るる人。滑稽家。蜉丸「清貫もおどけ者」放氣者[物川集]

おとけもの-はらひ 戲者拂 (名) 輕薄にして用に立たざる者などを放逐すること。あはうばらひ。甲陽軍鑑「輕薄にして役に立たざる者を、戲け者拂になされ」

おとける 戲 (自動) ざれ戲る。ふざける。たはむる。諧謔をなす。ほたえる[關西]でゃうける・そばえる[關東]あだける[陸奥](物類呼稱)

おとけ-ゑ 戲繪 (名) ざれ繪(戲繪)に同じ。

おと-こ 乙子 (名) 弟子。末子の子。すゑこ。ばっし(末子)。落窪「おとど、おとこにてかなしうし給へば、おどりありかんと思ふにこそあらめ、早く明けさせ給へとのたまへど」

おと-こ-せ 乙御前 (名) おたふく(阿多福)に同じ。おかめ。雅趣醉狂集「乙御前の繪。花山に住む人とても口とぢて、この乙文字はとどめざらなん」狂言[翌]「やあ、これはおとごぜぢや、なうなう、おとましやおとましや」

おとごぜ-のめん 乙御前面 (名) おたふくめん(阿多福面)に同じ。

おとご-づき 乙子月 (名) 陰曆十二月の異名。おとづき。

おとご-のいはひ 乙子祝 (名) おとごのついたちの祝。毛紈句「節季候も嚙す乙子の祝ひかな」

おとご-の-ついたち 乙子朔日 (名) おとご月の朔日。陰曆十二月の一日。風俗文選[野坡]「今朝からは師走とかや。乙子の朔日とて、節季候の來初むる日也」

おとご-の-もち 乙子餅 (名) おとごのいはひに搗く餅。川渡り餅。

おとさた 音沙汰 (名) おとづれ。たより。音信。博多小女郎波枕「音沙汰なしの俄宿替」

おとし 落 (名) ㊀おとすこと。落下。墜落。㊁鳥獸などをおとし入れて捕らふる裝置。「鼠をおとしにかく」㊂おとしあな(陷穽)の略。盛衰記[都合戰]「ここかしこに落としを掘り」四戶の開かぬやうに、棧に作りつけて、閉づるとき、敷居に設けたる穴に差しこむ裝置。㊄木製の火鉢を、金屬の薄き板にて、其の內部へ落としこむやうに造りたるもの。おとしがけ。「あかのおとし」㊅おとしぎんちゃく(落巾著)の略。㊆話のおち。話の結局。一代女「おてきさまへの申分は、こちは存じませぬなど云ふが、閻女郎の必ずおとしなり」聞上手「よいおとしぢやけれども、もう話すまいとすれねば」㊇謠曲にて、節を一段下げてうたふこと。

おとし 威 (名) ㊀おどすこと。おどかし。十訓「此の事おどしにこそせさせたりけれ。國司のこれほどたけくて戰ひすべしとまで思はざりければ」㊁をどし(絨)を見よ。㊂かかし(案山子)に同じ。

おとし-あな 陷穽 落穴 陷穴 (名) ㊀穴を地に堀り、心附かぬやうに裝置しおきて、人又は獸などを欺き誘ひて落とし入るる所。おとし。平家九「城の內には、おとし穴をも掘り、菱をも植ゑて待ち參らせ候らん」㊁人を欺き陷るる策略。

おとし-あみ 落網 (名) 魚類を陷穽せしめてすくひ捕らふる網。卽ち・鱈落網・柔魚落網・地獄網の類。漁業法施行規則[第二條]「落網上網及垣網」

おとしあみ-るゐ-ぎょけふ 落網類漁業 (名) 定置漁業の一。落網・上網及び垣網を、土俵若しくは碇等を以て、一定の水面に敷設するもの。漁業法施行規則[第二條]「落網類漁業」

おとし-いも 落芋 (名) 料理の語。吸物の汁に、擂りたるいもをおとしいれたるもの。

おとし-いる 陷 落入 (他動) ㊀落として入る。おちいらしむ。なげこむ。鑑異記「郷人陷於之海中」源手習「人に見せて、よる此の川におとしいれ給ひてよと、いきのしたにいふ」㊁欺き落とす。誘ひて落とす。㊂謀りて引き入る。四攻め取る。「城をおとしいる」

おとしいれ-の-おほくち 落入大口 (名) おぼくちばかま(大口袴)の異名。

おとしいれる 陷 落入 (他動) おといる(陷)の口語。

おとし-おび 落帶 (名) 琵琶の名所。びは(琵琶)を見よ。八番抄「琵琶中島遠山の方は高し。落帶のしたの程は今一分ばかりも劣りたるなり」

おとしがけ 落懸 (名) ㊀車などにて、坂など、下りかかる處。源[東屋]おとしがけの高き所に見つけて、ひきいれ給ふ」㊁佛龕などの、欄間の下などに添ふる彫物。又は書院窓の上の横木。㊂元祿頃行はれたる元結の掛け方。普通よりは髮に低く懸く。若風俗「耕紗綾のふたの、蹴返しにほのめき、おとしがけのはね元結、す

かし形のさし櫛」四おとし(落)に同じ。

おとし-がみ 落紙 (名) 厠に用ふる紙の稱。

おとし-さんちゃく 落巾著 (名) 紐をつけて、著物の襟などにかけ、落ちざるやうにつくりたる巾著。賤亭環「其の先におとしぎんちやくを附けて、内ぶところへ入れて持ちたり」

おとし-ぐさ 威種 (名) 人を威圧すたね。源紅葉「たださるべき折りの、おどしぐさにせんとぞ思ひける」

おとし-げ 威毛 (名) をどし毛(絨毛)を見よ。

おとし-ご 落子 (名) おとしだね(落胤)に同じ。雪女五枚羽子板「源の義經の一の谷の鵯越、まっさかさまにおとし子の」源平布引瀧「母は平家の何がしが娘と、九郎助の物語、一家・一門廣い平家、もし清盛がおとし子も知れず」

おとしこみ-どと 落込床 (名) 船の艙の溝。舵の落込(ラッパ)の嵌まる所。

おとし-ざし 落差 (名) 刀を横たへず、たてに下がるやうにさすこと。賤亭環「腰の物は落しざしにさし、懐手にて駒下駄をはき」持統天皇歌軍法「既に日影も山の端に、おとし指の大小、浪人めきたるをのこ」

おとし-たて 落立 (名) 戸などの、左右に開閉せず、上より落としてたつるやうにしたるもの。新六帖「あひ見ての後のつらさの中妻戸、おせどもあかぬおとしたてかな」

(なだしとお)

おとし-だな 落棚 (名) 四十八棚の一。床の間・書院などの脇に設くる棚の一種。おとしちがひだな。

おとし-たね 落種 (名) 一鳥などの啄み來たりて、おとしたる種子。守武句「撫子や夏野の原のおとしだね」二世に多く知られざる、貴人の私生兒。らくいん(落胤)。らくいんぼう(落胤腹)。おとしご。蜻蛉日記「孫王のひがみたりしみこの、おとしだねなり」落胤。

おとし-たまご 落雞卵 (名) 料理の語。吸物の汁の中に、なま卵をわりて落としいれたるもの。

おとし-ちがひだな 落違棚 (名) おとしだな(落棚)の異名。

おとし-つく 落附 (他動ニ) おちつかす。しづむ。

おとし-つく 威附 (他動四) はげしくおどす。いたく驚かす。

おとし-つける 落附 (他動下) おとしつく(落附)の口語。冥途飛脚「とっくと心を落としつけ」

おとし-つける 威附 (他動下) おとしつく(威附)の口語。

おとし-てっぽう 威鐵砲 (名) 江戸時代の語。鳥獣を威して追ひ拂ふに用ふる鐵砲。

おとし-てんじゃう 落天井 (名) 他よりも一段低く作りたる天井。

おとし-の-はなし 落噺 (名) おとしばなし(落噺)に同じ。

おとし-は 落羽 (名) 鷹狩の語。鷹の、峯・谷を飛びわたりゆくこと。蜻蛉記「他の事を引きて、はなし」落噺 (名) 其の事におとして面白くいひなす話。落語。賤亭環「其の頃雲州の相撲に釋迦が獄夢しき沙汰にて、おとし話にさへしたるほどのことあり」

おとし-ばら 落髪 (名) 女の髪のびんたぼの作方の一。髪差(ヘアピン)を入れずして、髪を小さくふくらめて結ふこと。おとしばらげ。茶筌。

おとし-ばらげ 落髪 (名) 前條に同じ。

おとし-ぶた 落蓋 (名) 匣の蓋の一種。上縁にかからずして、中に陷ち込むやうに作りたるもの。插蓋。

おとし-ぶみ 落文 (名) 一公然と言ひ難き事を匿名の文書に認めて、路などに遺しおくもの。らくし上(落書)。匿名書。報政集「おとし文や見し。それは我がしたりしなりとありしかば」愚管抄「伊通公がかかる歌をよみて、落とし文に書きて」二陰暦五月頃、山城國比叡山中などにて、古人の結文に似たる、枯葉の落ち散りたるものの稱。

おとし-ほり 落堀 (名) 用水の餘りを落とす爲めに設けたる堀。

おとし-みづ 落水 (名) 稲を刈り終はりて後、田などより流し去る水。心中宵庚申「五月雨ほど戀ひ慕はれて、今は秋田の落とし水」

おとしむ 貶 落 (他動ニ) 劣りたるものと見る。みさげる。きげすむ。みくだす。源初音「おとしめ、きげすをもとめ給ふ人は多く」同蜻蛉「もてかしづける娘などの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし」

おとしめ-ごと 貶言 (名) おとしめていふ言。源若菜下「あいなき御おとしめごとになんと、ははてはは腹だつを」

おとしめ-ざま 貶方 (名) おとしむるやうなること。源葵「人の上をなん告げ、おとしめざまのことを云ふ人をば、いとをしきものにし給へば」

おとしめる 貶 (他動ニ) おとしむ(貶)の口語。

おとし-もの 落物 (名) 心附かず落としたる物。遺失物。

おとし-もの 落者 (名) 罪ある者を、他國又は寺院など、遁がしやること。

おとし-や 落矢 (名) 一うはざしのや(上矢)に同じ。二うはざし。三おろしや(下矢)に同じ。

おとしれ (名) しるこもち(汁粉餅)をいふ。薩摩國の方言。蜻蛉

おとし-ゐ 落餌 (名) 鷹などに、上より投げ落として與ふる餌。百合若大臣野守鏡「鷹は中略雛の時より親鷹を獺み食はんと狙ふ故、父母巣には寄りつかず、枝の上より落とし餌の不孝の鳥」

おとす 落 (他動四) 一おちさす。萬八「わが宿の花橘を、ほとときす來鳴かずつちに令落(オトス)とか」勢語「瀧おとし、水走らせなどして」二散らす。玉葉「もみぢばをおとす時雨のふるなべに、夜さへぞ寒きひとりしぬれば」三洩らす。殘す。枕「一言なおとしそと侍れば、いかがはせん」四紛失す。遺失す。玉葉「扇をおとして侍りけるを、程へて返しつかはすとて」五矢ふ。脫かす。無くす。「力をおとす」六取り除く。取り放す。「おこりをおとす」大鏡「狂言(ニ)人、兩人共に、首をおとしてやらう」七へらす。劣るやうにす。低くす。除だす。減ず。允恭紀「貶(オトシ)其姓(ニ)謂稻置」源初音「ひとときの春宮の御元服、南殿にてありし儀式の、よそほしかりし御樽をおとさせ給はず」八見過ぐす。おとしむ。あなどる。枕「そぞろなるそらごとを聞きて、いみじういひおとし」九攻め取る。おとしいる。天智紀「不復(ニ)給(ニ)其西壘」十我が物とす。手に入る。「くじをおとす」十一欺きておちいらす。おとしいむる。はむ。「はかりごとにおとす」十二はむる。服せしむる。「罪におとす」十三甲陽軍鑑「狀にて顯るるとも、問ひ落と

されて顯はるるも、道理は一つ所へ參り候」十四おもむかしむ。歸落せしむ。十五訓子を低くす。狭衣「琵琶を引き寄せて、衣がへを一わたりおとして、萩が花ずりと歌ひすさびて」十六相場をさぐ。「九十錢おとす」十七わるくす。墮落せしむ。「品行をおとす」十八遠ち去らす。にがす。謠仲「何と仰せ候とも、一まづおとし申さばやと存じ候」

おどす 威 (他動四) 一恐れしむ。こはがらす。おどろかす。枕「猫中略うちねぶりてゐたるを、おどすとて」源夕顔「さやうのものにはおどされじとて」宇鏡「黒鷲(ワシ)」二をどす(絨)を見よ。

おとた-ばた 乙機 (名) うるはしき織ばたつめ。愛らしき機織女。記「あめなるや、淤登多那婆多(オトタナバタ)のうながせる玉のみすまる、みすまるに」

おとたより 音便 (名) おとづれ(訪)に同じ。たより。

おとづき 弟月 (名) 陰暦十二月の異名。おとこづき。

おとっさん (名) ちち(父)をいふ。小兒の語。父上。ととさま。おとうさま。

おとつつみ 弟鼓 (名) こつづみ(小鼓)に同じ。(えつづみの對)

おとづる 訪 (自動四) 次條に同じ。宇治拾遺「此の守の許にも來てなん、おとづりける」

おとづる 訪 (自動ニ) 一人の許を訪(トフ)ふ。たづぬ。とぶらふ。みまふ。訪問す。古今序「あまびこのおとづれしと、今は思ふ、われか人かと身をたどる世に」勢語「年ごろ、おとづれざりける人の、櫻の盛かりに見にきたりければ」二音信にて安否をとふ。

おとづれ 訪 (名) 一おとづるること。たづね。訪問。古今序「わがまたぬ年はぬれど冬草の、かれにし人はおとづれもせず」勢語「荒れにけり、あはれいく世の宿なれや、住みけん人の音づれもせぬ」二たより。消息。風雅序「たよりきくる風のつてにだに、情をかくるおとづれぞなき」

おとづれ-すつ 訪捨 (他動ニ) おとづれたるままにて、語ひもせず。新拾遺冬「まきの屋に冬こそきぬれ、とばかりをおとづれすてて行く時雨かな」

おとづれる 訪 (自動下) おとづる(訪)の口語。

おと-と 弟 (名) 一おとうと(弟)の略。崇神紀「長(オヒ)幼(ヲトト)之次第」宇津保俊蔭「むすめ中略三人侍りし中略姉・おとと、年頃住み侍りしを」少紀「中略二年劣りたること。又、その人。宇津保藤原「女一人、十よばかりにて、男二人、一つ・二つがおとととにてなん」

おとど 大殿 (名) 「おほとのの略轉」一貴人の邸宅の尊稱。宇津保俊蔭「大曲一つを弾くに、おとどの上の瓦碎けて、花の如く散る」二大臣又は公卿などの尊稱。竹取「おとど答へていはく」宇津保藤原「左大臣のおとど、世の中をまつりごち、みかどもまつりごとをあづけ給へるやうにて」同俊蔭「右大將のおとど、御馬をひきまはして、この琴のしらべを聞きつけ給ひて」同梅花「あぢ君は何の御位にかおはしますらん。おとど、只今は納言になん侍るめる」三婦人の尊稱。宇津保俊蔭「かの殿の御めのと、長門のおとどといふ知り給へり」源玉鬘「住みつくべきやうもなきを、母おとどあけくれなげきいとほしがれば」

おとと-い (名) 次條に同じ。平家一「そのころ京中に聞こえたる白拍子の上手、妓王妓女とておとといあり」十訓「おとといにて、家綱・行綱といふ陪從あり」

おとと-え 弟兄 (名) はらから。兄弟。姉妹。おととい。

おとど-がね 大臣兼 (名) やがておとどとなるべき人。大臣の候補者。榮華本紀「今日・明日のおとどがねにておはするが」

おとと-くさ 弟草 (名) 【植】きく(菊)の異名。諸の花の後に咲くよりいふ。

おとと-けし 偉 (形) 古語。たけくいかめし。たくましし。名義抄「偉(オホトトケシ)」宇鏡集「偉(オホトトケシ)」

おとと-でし 弟弟子 (名) おとうとでし(弟弟子)に同じ。傾城反魂香「弟弟子にお土佐を名乘らせ、兄弟子はうかうかといつまで浮世又平で」

おとど-まち 大殿町 (名) 貴族の邸宅の建ち連なりたる町。宇津保藤原「それはおとどまちなれば、板屋なく、ある限りひはだなり」

おとと-ぢすめ 弟娘 (名) その妹に當たるむすめ。いもうと。(姉娘の對)續詞花雜「内に侍る娘のもとへ、扇調じて遣しけるを美ましくやや思ひけん、おととむすめの十一二ばかりなるが」

おとどや (名) 古へ五月の騎射の時、中將・少將の著座する所。馬場の左右にあり。今昔「右近の馬場に、五月六日、弓行ひけるに、在原業平と云ふ人、中將にて有りければ、大臣屋に著きたりけるに」花鳥餘情「おとどは中略おとどやと云ふもの也。乙殿屋(オトヤ)とて、左・右の馬場に有り。五月の騎射の時、中少將の著座する所也」

おとと-よめ 弟嫁 (名) おとよめ(弟嫁)に同じ。持統天皇歌軍法「布引兄弟二人の嫁・嫂の淺衣、弟嫁に卷筆とて」

おとど-ろ (名) 古語。おとづれ。古義一說、杼倡(ヲド)は陀倡の誤りにて、音づれだにの義。蜻蛉解「萬「伊勢の海ゆ鳴きくるたづの音杼倡(ヲド)も、君が聞とえば我れ戀ひめやも」

おとな 大人 (名) 一十分に生長したる人の稱。一人まへになりたる人。勢語「子ども中略おとなになりにければ」枕「たちつぎて生まれたるちごの、おとなになるほど」二元服したる後の人の稱。宇津保藤原「あて宮は御年十二と申しけるときぶきに、御も奉る。程なくおとなになり出で給ふ」源初音「おとなになり給ひてのちは、ありしやうに、みすの内にも入れ給はず」

おとな (名) 一一族の長。二をさ(長)。かしら(頭)。枕「所のおとなどになりぬれば」三譜代の老人。薩摩歌「おとな殿へ申して、取りか(渡し、吉日なれば、今日中に請け判きはめ」四江戸時代、諸大名に仕ふる下臈の女官。

おとな-おとなし (形) 「おとなしの重言」大人らし。おとなびて落ちつきてあり。老成のさまなり。宇津保藤原「やすくさうぞきてのぼり給へり。かたちもいとおとなおとなしうはづかしげなるにつつまれて、とみにもえうち出で給はず」

おとな-くさい 大人臭 (形口語) 少年にて、大人らしき擧動あり。

おとな-くれる (自動ニ) 大人らしくなる。「おとなじみてあり。ませる。槍權三「ちとお休みと指し出だす薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振りを見て」

おとな-くろし (形) 大人らし。ねびたり。最明寺殿百人上臈「佐佐木興の入道の息女お百の姫中略大人くろしき懸け鳥帽子」

おとな-け 大人氣 (名) 大人らしきさま。老成の風。

おとなけ-なし 大人氣無 (形二) ㊀おとなおとなしからず。いはけたり。砂石集六「おとなげなく彼れを打たんとして、倒れて侍るねたさにこそ申し候ひつれ」㊁おほぎやうなり。いくぢなし。國姓爺千里竹「刃で向かふは大人氣なし」

おとな-ごころ 大人心 (名) 大人らしき心。おちつきたる心。狹衣三「かかる御おとな心を、うつくしう思ひきこえ給へば」

おとな-し 大人 (形二) ㊀おとならし。おとなびたり。宇津保藤原君「さやうにおとなしきすまひし給ふべきなん、おはしまさぬ」源須磨「十一になり給へど、程より大きに、おとなしう淸らにて」㊁宿老らし。頭だちたり。大鏡上「さるべくおとなしき人人、何がしかがしといふ源氏の武者たち」宇治拾遺二「おとなしき郎等進み來て」㊂おちつきて穩かなり。すなほなり。穩當なり。温順なり。老成なり。大鏡狂言比丘貞「名を附けて貰うては、今迄のやうにしてはならぬほどに、隨分おとなしっさしめ」

おとなし-げ 大人氣 (副) おとなしさう。おとなしきさま。

おとなし-さ 大人 (名) おとなしくある度合。おとなしきこと。へ

おとなし-さま 大人樣 (名) おとなしき樣子。夕霧阿波鳴渡中「氣高い好いお子や、聞き及びしよりおとなしさま」

おとな-じみる 大人染 (自動上二) 次條の口語。

おとな-じむ 大人染 (自動四) 大人らしくなる。大人くさくなる。

おとなし-やか (副) おとならしきさまに。落ちつきたるさまに。いかにもおとなしく。いかにもすなほに。保元義朝幼少弟悉失「長(オトナ)しやかに宣へば」平治光頼卿參內「蒔繪の細太刀を、おとなしやかに佩き給ひ」

おとな-だつ 大人立 (自動四) ㊀おとならしくなる。おとなぶ。年長ず。㊁おとなめく。かしらだつ。宿老らし。老成めく。枕六「おとなだちたる人の、いやしからず、しのびやかなる御けはひにて」同三「受領など、おとなだちたる人は、太きいとよし」

おとな-づく 大人附 (自動四) 大人らしくなる。名義抄「長(オトナヅク)」

おと-なひ (名) ㊀おとなふこと。(音)。ひびき。源夕顏「なる神よりもおどろおどろしく踏みとどろかすから臼の音も中略いとあやしう、めざましきおとなひとのみ聞き給ふ」㊁おとづるること。訪問。源末摘花「ふりにたるあたりとて、おとなひ聞こゆる人もなかりけるを」

おとなひ-びと (名) おとなふ人。訪問する人。貫之集「おとなひ人(稲從)の馬よりおりて、しばし松のもとに休むに」

おとな-びる (自動上二) おとなぶの口語。

おと-なふ (自動四) ㊀音、發(タ)つ。音きこゆ。音す。ひびく。神代紀下「夜者若熛火而喧響(オトナヒ)之、晝者如五月蠅而沸騰之。喧響、此云淤等娜比」㊁おとづる。訪問す。訪ふ。源宿木「さしはへては、おとなはず侍るめり」

おとな-ぶ (自動上二) おとなだつ(大人立)に同じ。おとならしくなる。枕三「上達部中略すこしおとなび給へるは」源少女「子のおとなぶるに、親のたちかはりしれ行くことは」

おとな-ぶる 大人振 (自動四) ㊀大人らしきそぶりをなす。㊁大人なることを誇る。

おとな-やく 大人役 (名) 一人前の大人と見なされてなすべき役目。緋縮緬卯月紅葉中「年はいかねど、男を持てば大人役」

おとな-をむな 大人女 (名) 家の事など取り賄ふ老女。頭だつ老女。住吉「侍從はおとな女にて、よろづに大事の人にて」

おと-ね 乙子 (名) 月の最後の子(ネ)の日。宇津保藏開下「大將殿には廿七日出できたるおとねになん、嵯峨の院に御賀まゐらんとし給ひける」

おとの-あぶら 大殿油 (名) おほとのあぶら(大殿油)に同じ。大上﨟御名之事「女房詞。一、あぶら。おとのあぶらといふ」

おとは-やき 音羽燒 (名) 次條に同じ。生玉心中上「錦手・乾山・音羽燒の、皿の、鉢の、茶碗のと」

おとはやま-やき 音羽山燒 (名) きよみづやき(清水燒)を見よ。

おと-ひと 弟人 (名) 古語。おとうと(弟)。おと。雄略紀「心懷悖惡、行闕友于(コノカミオトヒト)」

おと-ひめ 乙姬 (名) ㊀次の姬。妹の姬。(えひめの對) 皇極紀「長女中略少女」㊁龍宮に居るといふ仙女の稱。

おとひめ-ぎみ 弟姬君 (名) 前條㊀に同じ。榮華様々悦「源帥ときこえしが、御おと姬君をとりて養ひ奉り給ひしなり」

おとひめ-の-かんざし 弟姬簪 (名) 【植】あまも(大葉藻)の異名なるべし。

お-とほし 御通 (名) ざる(笊)をいふ、女詞。

お-とぼし 御點 (名) らふそく(蠟燭)をいふ、女詞。

おと-ぼね (名) こゑ。音聲。艶狩劒本地三「やいやかましい、音ぼね立てな」膝栗毛五「助けてくれろと、悲しいおとぼねを出しをった」

お-とほり 御通 (名) ㊀通ることの敬語。通り給ふこと。諸艶大鑑「此のあたりには御宿もなし。今少し先へお通りあれ」㊁貴人の前に召し出ださるること。召し出だし。早雲寺殿廿一箇條「出仕の時、御前へ參る可からず。御次に祗候して、諸傍輩の體見つくろひ、さて御とほりへ罷り出づべし」㊂おとほりのさかづき(御通盃)の略。後水尾院年中行事「御通」狂言暦かがね「殊の外御機嫌ぢや。いつは下だされねども、此の度はお通りを下ださるるほどに、三盃づつたべて」

おとほり の さかづき 御通盃 貴人の前に召し出だされて、手づから御酒を賜はること。

おと-まさり 弟優 (名) 兄又は姉よりも、弟又は妹のまされること。宇津保藏開下「藏人の少將の、おとまさりになりわかれぬべかめるかな。ただ今の上人はこれ一人なめりかし」

おと-まし (形二) 〔うとましの訛り〕うとむべくあり。好ましからず。おあん物語「なく犀がよなよなしておぢやった、おとましやおとましや」狂言宗論「はれさて、おとましい者と連れだったことぢや」

おとみ-づはり (名) 小兒の病の名。乳のみごある母の、懷姙してつはりとなりたるため、乳兒の乳離れして起こるもの。和訓栞 魃病。

おと-みや 弟宮 (名) 妹の姬宮。大鏡下「おと宮のうぶやしなひを、姉宮のしなふ見るぞうれしかりける」

おと-むすこ 弟息子 (名) 長男に對

して、以下の子。曾我五人兄弟二「某は故河津が乙息子、祐成が弟、箱王丸と申して」

おと-むすめ 弟娘 (名) 次女、又末の女。神武紀「小女(オトムスメ)」催馬樂我門「あやめの郡の大領のまな娘といへ、於止牟須女(オトムスメ)とこそいはめ」

おと-め 乙女 (名) をとめ(少女)の誤り。

お-とめば 御留場 (名) 江戸時代、將軍の鷹狩の場。

おとも-ぐら 御供鞍 (名) 馬具。供奉の人の乘る鞍にや。〔集馬考〕吉續記乾元二年正月十四日、八幡御幸「別當檢非違使右兵衛督御共鞍」

おと-もじ 乙文字 (名) おとごぜ(乙御前)に同じ。雅筵醉狂集雜「乙御前の繪。花山に住む人とても口とぢて、この乙文字はとどめざらなん」

おとも-しゅう 御伴衆 (名) 室町幕府の制。將軍に近侍し、御成の時供をする役。年中定例記「管領、大帷子。其外、御相伴衆・御供衆・申次・小笠原以下、裏打」

おと-や 乙矢 (名) (甲矢)を見よ。宇津保初秋「大鳥のはねやかたはになりぬらん、今はおとやに霜のふるらん」著聞十三「源三左衞門尉翔け來たり中略おとやにて、又後の串を射てけり」

おとや ごめん 乙矢御免 射藝の語。老功の者、貴人の前にて射るに、最後の乙矢を射るを免ぜらるること。例へば十の矢、九つまで中たりたる時、十目の矢を射ずして猶中りとせらるること。

おと-よめ 弟嫁 (名) 弟の妻。おとうとよめ。(嫂(アニヨメ)の對) 和名二「娣婦。爾雅云、長婦謂幼婦爲娣婦(於止與女)」

おとらしゃ (名) 癩病の人をいふ、大和國の方言。松屋筆記

おとり 劣 (名) おとること。又、其のもの。(まさりの對) 竹取「人の心ざしひとしかなり。いかでか中に、おとりまさりは知らん」源浮舟「さまでたづねんものとも、おとりの下司は思はず」

おとりか-がた 御取箇方 (名) 昔の收稅吏の稱。

おとり-げ 劣氣 (名) 劣りたる樣子。榮華音樂「これに又、殿の上の御方、劣りげなし」

お-とりこし 御取越 (名) 陰暦十月、諸人の家にて修する親鸞上人忌のこと。正忌は十一月にて、本願寺にて修するが故にいふ。

お-とり-さま 御酉樣 (名) とりのまち(酉町)に同じ。

おとり-ざま 劣方 (名) 劣りたるかた。源紅梅「よろづのこと、昔にはおとりざまに淺くなりゆく世の末なれど」

お-とり-すゑ 御取据 (名) 土器の大なるに、さかなを盛りて出だすこと。鉢の物。かはらけもの。

おとり-ばら 劣腹 (名) 母方の身分、他に比して劣れること。又、其の子。源蜻蛉「中のおとりばらに女出でき給ふべしとありしこと」同手習「かのひじりのみこの御娘は、ふたりと聞きしを、兵部卿の宮の北の方はいづれぞとの給へば、此の大將殿の御のちのは、おとりばらなるべし」

おとる 劣 (自動四) ㊀他に比べて及ばず。まさらず。古今春下「散る花のなくしとまるものならば、われ鶯におとらましやは」㊁等位降だる。さがる。枕七「碁を、やんごとなき人の打つとて中略おとりたる人の、ゐずまゐもかしこまりたるけしきに」㊂へる(減)。費ゆ。損失す。皇極紀「棄捐珍財、都無所益、損費(オトリツヒユル)極甚」宇鏡「費(減小也。於止留)」

おとら じ まけ じ 互ひに負けじときそふ。榮華音樂「われもわれもと、おとらじまけじと思ひたるけしきどももをかし」

おどれ 己 (代) おのれ(己)の訛り。うぬ。汝。狂言花子「やい、おどれさへ、花子樣とぬかすか」

おどろ 棘 (名) ㊀荊棘などの亂れ繁りたること。又、其の處。枕二「卯の花中略あやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ」宇鏡「藪(於止呂)」名義抄「榛」㊁髮などの亂れたるに譬へていふ語。後拾遺俳諧「道芝やおどろの髮にならされて、移れる香こそくさ枕なれ」堀河百首夏「今日くればしどろに見ゆる山がつの、おどろの髮も葵かけたり」

おどろ が のき 棘軒 荊棘などの生ひしげりたる軒端。夫木廿「ふかき夜をとふ人もがな、岡のべのおどろがのきに匂ふ橘」

おどろ の かむり 棘冠 〔基督の故事より出づ〕小人に憎まれて惡名を被ること。

おどろ の みち 棘路 ㊀荊棘などの亂れ生ひたる路。新古今神祇「春日野のおどろの道のうもれ水、末だに神のしるしあらはせ」㊁大臣又は公卿の稱。きよくろ(棘路)を見よ。新拾遺雜上「位山おどろの道も程遠し、花の外なる峯の椎柴」

おどろ-おどろ-し (形二) おどろくべきさまなり。仰山なり。竹取「あなないに、おどろおどろしく、二十人の人のぼりて侍れば、あれて、寄りまうでこずなり」

おどろかし 驚 (名) ㊀鳥おどし。かかし。㊁おどろかすこと。おどかし。後撰雜六「小山田のおどろかしにもこざりしを、いとひたぶるに逃げし君かな」

おどろかし 驚 (形二) 驚くべきさまなり。おどろおどろし。宇津保俊蔭「御門、琴どもをこころみ給ふに、おどろかしき聲出でて、おどろき給ひて」

おどろかし-げ 驚氣 (副) おどろかしきさま。枕六「うつぎ垣根といふものの、いとあらあらしうおどろかしげにさし出でたる枝ども」

おどろかし-さ 驚 (名) おどろかしきこと。おどろかしき度合。

おどろかす 驚 (他動四) ㊀驚くやうにす。おどす。おどかす。枕二「とねりの、馬どもをとりて、おどろかして笑ふを」源桐壺「み心ばへありて、おどろかさせ給ふ」㊁眠りをさます。源若紫「まだおどろかい給はじな、いで御目さましきこえん」

おどろき 驚 (名) おどろくこと。相模集「衣手は山田のそほづと思ふとも、おどろきもなき世にのみぞへん」

おどろき-あし 驚足 (名) 大またにありくこと。物に驚きたるやうなる足つきなればいふ。武雜記下「おどろき足とて、いにしへより笑ひ候事」

おどろき-いる 驚入 (自動四) いたく驚く。眞に驚く。狂言抓抓「抓も抓も奇特千萬、おどろき入りましてござる」

おどろき-うま 驚馬 (名) はねうま。あがりうま。落窪二「おどろきうまのやうに、手なふれ給ひそ」

おどろき-がほ 驚顏 (名) 驚きたる顏つき。驚きたる樣子。俊忠百首上「さよの浦に波のしらむを明けぬとや、おどろきがほに千鳥たつなり」

おどろき-ばん 驚盤 (名) 甍きたる物が、運動するやうに見する一種の裝置。一定の距離を保ちて、物の、順次に變化